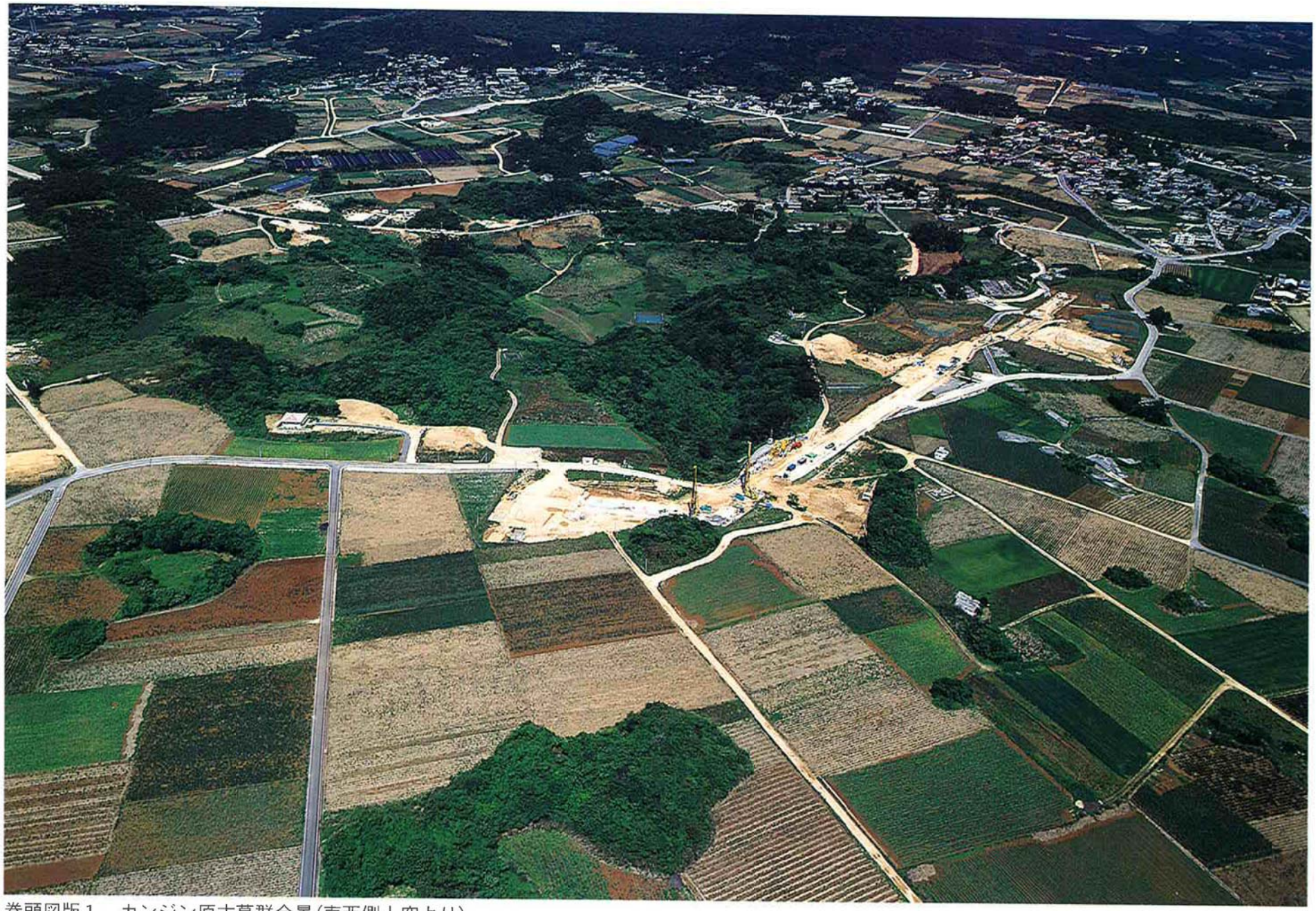
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第６集

ヤッチのガマ
カンジン原古墓群

－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

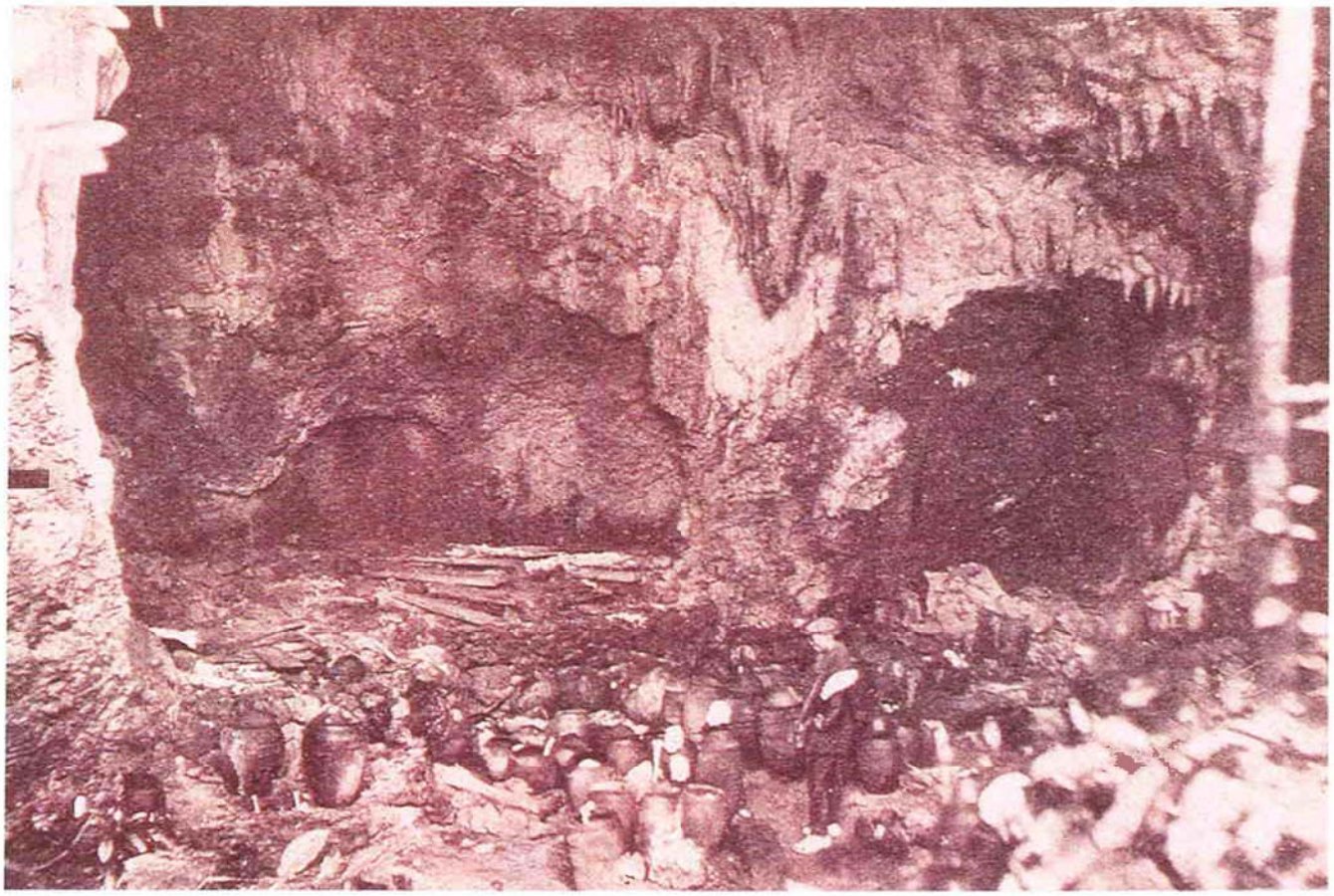
２００１年（平成１３年）１２月

沖縄県立埋蔵文化財センター

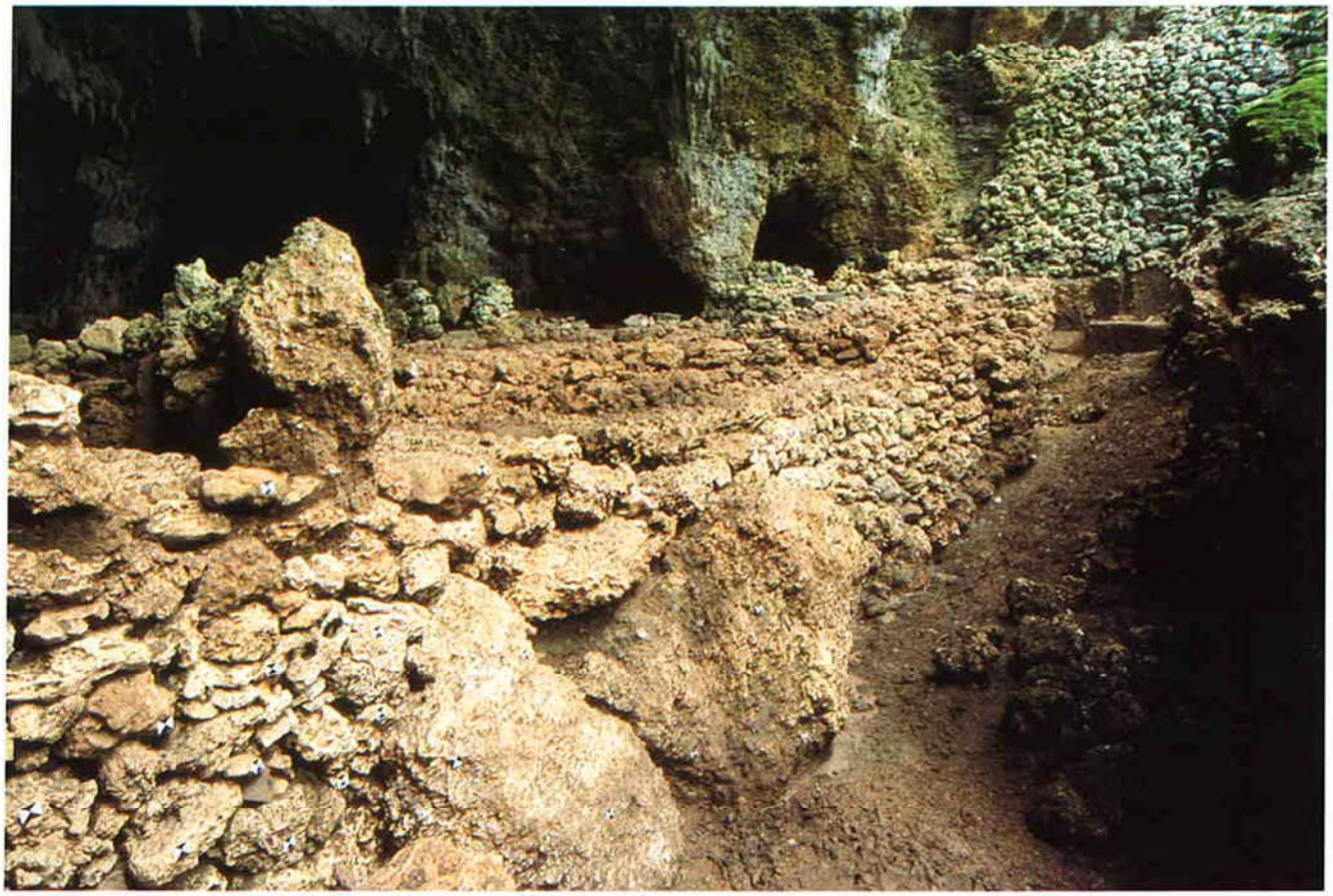


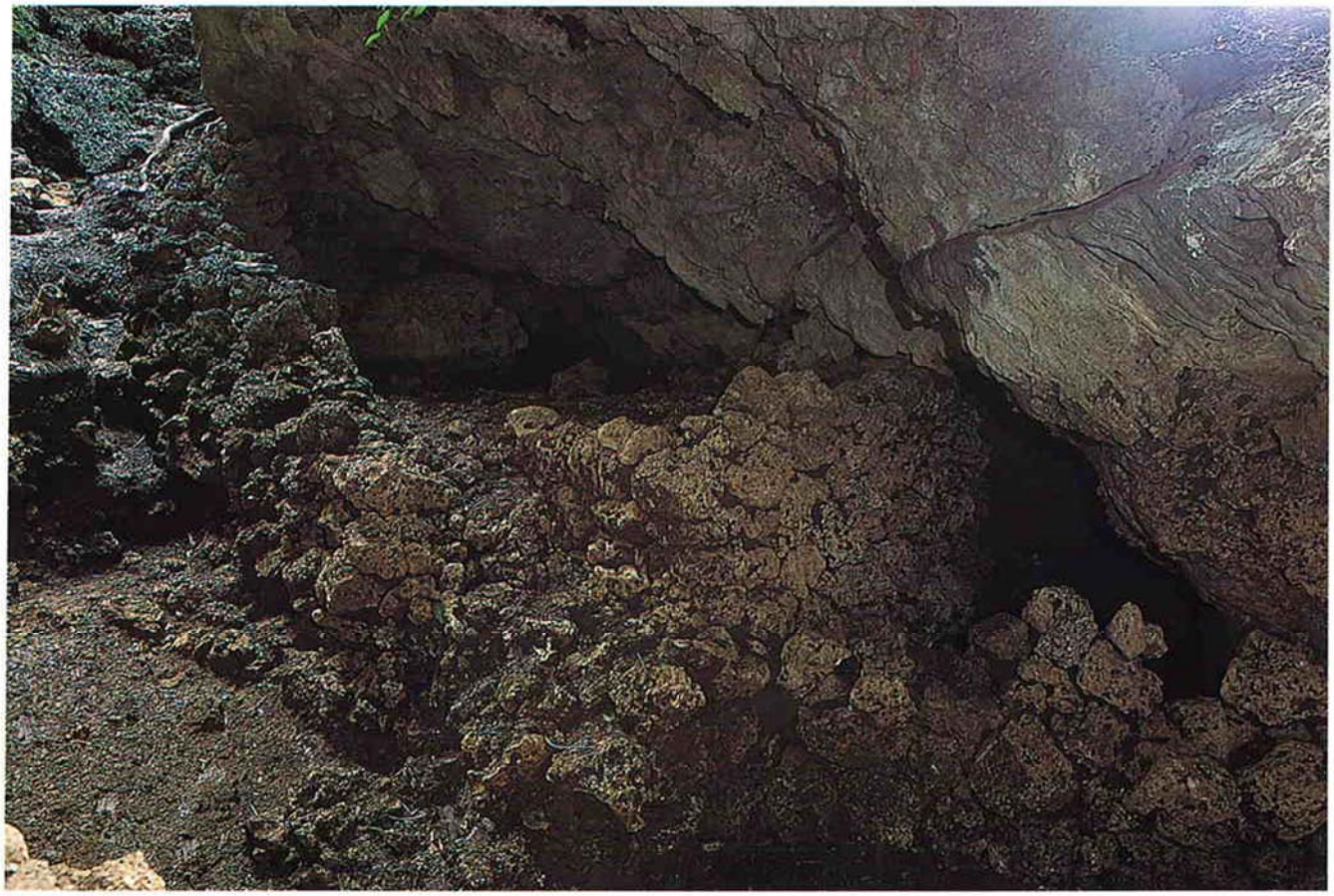
巻頭図版１　カンジン原古墓群全景（南西側上空より）

巻頭図版２　ヤッチのガマ遺構検出状況（北側より）

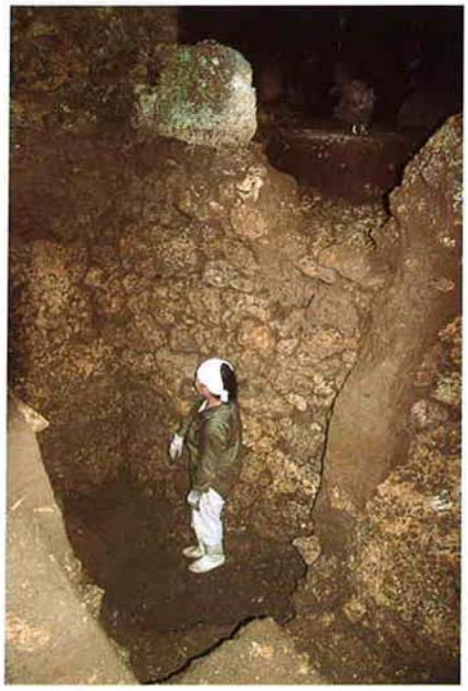


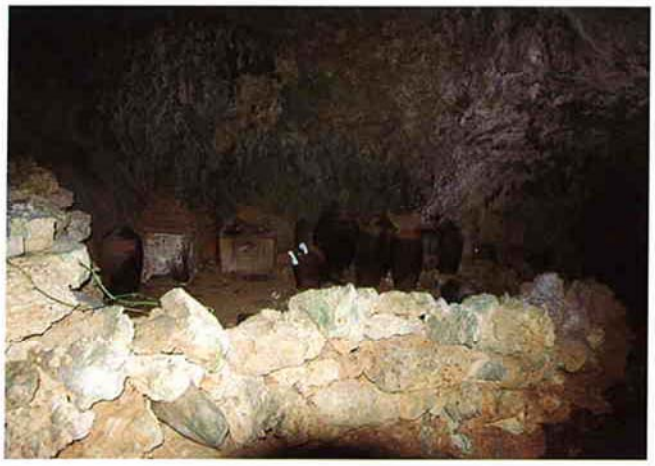
巻頭図版３　ヤッチのガマ(入口より)　上：1999年撮影　下：1920年代撮影

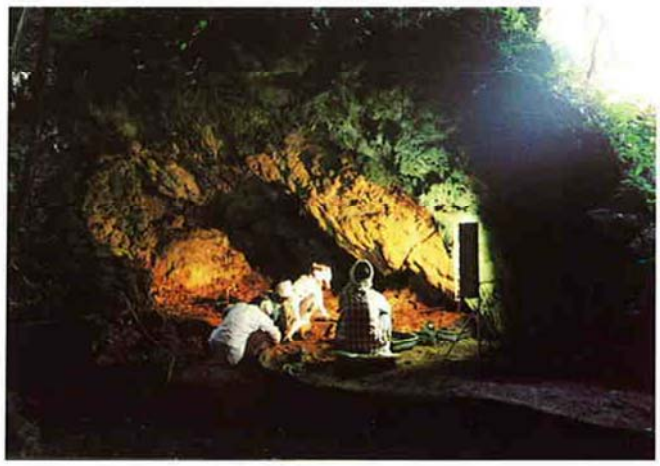




巻頭図版４　遺構検出状況　上：石積み１・３　下：12号区画







巻頭図版５　上左：１・２号区画　上右：２～９号区画　中左：11号区画上段　中右：石積み１
下左：チャラのクブ　下右：作業光景

巻頭図版６　出土遺物１　上：肥前系碗　中左：本土産陶磁器　中右：青花　下：肥前系瓶

巻頭図版７　出土遺物２　上左：青磁　上右･中左：沖縄産陶器　中右：輪銭　下：褐釉陶器

巻頭図版８　出土遺物３　上左：ヤコウガイ製匙　上右：木製品　中左：毛髪　下：ボージャー厨子

巻頭図版９　出土遺物４　上：椀(外)　下：椀(内)

序

本報告書は、平成10年度から平成13年度にかけて実施した県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものであります。

かんがい排水事業の計画されているカンジン地区内には、県下でも最大級の風葬墓であるヤッチのガマをはじめとして、約150ヶ所の風葬墓が点在しております。今回の調査はヤッチのガマを中心に、周辺の風葬墓の調査も併せて実施しました。

ヤッチのガマの調査では、石積みをはじめとする種々の遺構を確認しております。中でも洞穴の前面に構築された石積みは、最も高い部分で2.5m、長さが15mもある大規模なものです。

今回の調査により、様々な種類の遺物が得られております。特に厨子は800余基を数え、そのバリエーションも豊富であることから、厨子研究の重要な資料であると考えます。

陶磁器類は、中国産、タイ、本土産、沖縄産などが得られており、完品もしくは完形に近い遺物が多いという点も特徴的と言えます。とりわけ本土産陶磁器では肥前系の染付が多く出土しています。これらは、地域性や時代的背景などを考える上で重要資料であると考えます。また、ヤコウガイ製匙や木製品といった特異な遺物も出土しています。

また、今回は風葬墓と言うこともありましして、考古学だけではなく、形質人類学や民俗学の観点からも調査を行っております。とりわけ人骨は保存状況も良好な一千体を超える資料は、形質人類学上の大変重要な得がたいものです。民俗調査では、聞き取りにより上江洲集落や西銘集落における人生儀礼などの生活誌の調査を行い報告することができました。

本報告書が久米島にとどまらず、本県の考古学、形質人類学、民俗学研究等の研究の資料として多くの方々に活用されれば幸いです。

末尾となりましたが、事業実施の際し、沖縄県農林水産部のご理解を得、円滑に調査をすすることができましたことに感謝申し上げます。また、現地においては、沖縄県南部農林土木事務所、カンジン地区ＪＶのご協力により安全の内に調査を行うことができましたことに厚くお礼申し上げます。

長期の発掘調査基間中、ご援助を頂きました具志川村教育委員会、仲里村教育委員会をはじめ、聞き取り調査では多くの情報を提供して頂いた地元の方々や発掘調査および資料整理に際し、有益なご指導を頂きました諸先生方に対し心より感謝申し上げます。

平成13年12月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　　知　念　　勇

例　　言

1　本報告書は、沖縄県農林水産部より依頼を受け、平成10年度～平成13年度にかけて実施した県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2　調査は、平成10年度～平成11年度は沖縄県教育庁文化課、平成12年度～平成13年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　本報告書で使用した地図は、沖縄県南部農林土木事務所から提供していただいた。

4　調査指導・出土遺物鑑定は下記の諸先生方によるものであります（職名等は当時）。記して深謝いたします。

発掘調査指導　・・・・坂井　秀弥（文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官）
陶磁器鑑定　・・・・大橋　康二（佐賀県教育庁文化財課副課長）
〃　・・・・鈴田由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課普及係長）
〃　・・・・渡辺　芳郎（鹿児島大学法文学部助教授）
鏡鑑定　・・・・・・・久保　智康（京都国立博物館工芸室長）
動物遺体鑑定　・・・・金子　浩昌（東京国立博物館研究員）
貝類遺体鑑定　・・・・名和　　純（潟の生態史研究会員）
石質鑑定　・・・・・・神谷　厚昭（沖縄県立博物館指導主事）
銘書判読　・・・・・・島尻　克美（那覇市市民文化部史料編集室主査）

5　本報告書は、西銘・城間・藤崎を中心として編集し、又吉純子ほかの協力を得た。各節の執筆は以下のとおりである。

西銘　　章　　第１・２部、第３部第１・20～23・25・29・30節、第４部第１・２章・第３章第１・17・22・23節、第５部第１・２章・第３章第１・９・10節、第９部
城間　　肇　　第３部第２章第２節・第３章第２～17節、第４部第３章第２～14節、第５部第３章第２～７節、第９部
藤崎　　京　　第３部第３章第18・19節、第４部第３章第15・16節、第５部第３章第14・15節・第７部・第９部
前田　一舟　　第８部
島袋　春美　　第３部第31節・第４部第24節
宮平真由美　　第３部第24・26・27節、第４部第18～20節
伊集ゆきの　　第３部第28節、第４部第21節、第５部第16節

6　木材の材質鑑定は青山奈緒氏（奈良大学大学院）より協力を頂いた。記して感謝いたします。

7　遺物の写真撮影は長田剛・宮崎典子が行った。

8　動物遺体の同定は瑞慶覧尚美が、貝類遺体の同定は比嘉登美子が県立埋蔵文化財センター保管のサンプル合し、金子浩昌先生、名和純氏に鑑定を頂いた。

9　出土した遺物、調査の記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。また、人骨は具志川村納骨堂に安置している。

10　調査当初、「ヤッチノガマ」という表記を用いていたが、語源等の考察の上から適切ではないとの指摘を得たため、「ヤッチのガマ」という表記に統一する。「チャラのクブ」も同様である。

11　今回の報告にあたっては、一部を転用品の節ではなく各々の節であつかったものがある。また、土中からの出土品も転用品の可能性も充分考えられる。これらは全形を伺うことのできるもので、今後の編年研究等においても良好な資料になるものと考え、転用品ではなく各節で扱ったものである。これに関しては各観察表に明記している。

12　引用文献は末尾に一括して記した。一部の観察表、集計表は紙幅の都合により附編のCD-ROMとした。

報告書抄録

ふりがな	やっちのがま・かんじんばるこぼぐん
書名	ヤッチのガマ・カンジン原古墓群
副書名	県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第６集
シリーズ名	
編著者名	西銘章、藤崎京、城間肇、伊集ゆきの、宮平真由美、島袋春美、前田一舟、譜久嶺忠彦 土肥直美、石田肇、瑞慶覧朝盛、泉水泰、佐宗亜依子、比嘉貴子、青山奈緒
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県西原町字上原193番地の７
発行年月日	2001年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
やっちのがま ヤッチのガマ かんじんばるこぼぐん カンジン原古墓群	おきなわけん　ぐしかわそん 沖縄県　具志川村 あざうえず 字上江洲	47352 具志川村		26° 21′ 19″	126° 44′ 19″	1999.10.21 ～ 2001.2.2	ヤッチのガマ 400m² カンジン原 古墓群 2.2km²	県営かんがい排水事業（カンジン地区）

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ヤッチのガマ	その他の墓	古代？ 近世～近代	石積 石列 区画石積み 建物礎石 井戸様遺構 焼土	厨子（木・石・陶製）、青磁、白磁、青花、瑠璃釉、中国産・タイ産褐釉陶器、タイ産炻器、鉄釉染付、中国産無釉陶器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、石製品、釘、銭貨、簪、煙管、金属製品、貝製品、貝類、獣骨、人骨	大規模な石積とそれに伴う石列遺構などを複数確認した。 完形、もしくはそれに近い陶磁器が多く、編年上においても良好な資料となる。 人骨が1000体以上得られており、近世久米島における生活環境等を検討することが可能となった。
カンジン原古墓群	その他の墓	近世～近代	墓	厨子（石・陶製）青磁、白磁、青花、瑠璃釉、中国産・タイ産褐釉陶器、タイ産炻器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、銭貨、簪、煙管、金属製品、貝製品、貝類、獣骨、人骨	
チャラのクブ遺跡	包蔵地	古代 近世～近代	墓	土器、貝製品、中国産・本土産陶磁器、沖縄産陶器	
カンジン原遺跡	包蔵地	古代～中世		土器、石器、類須恵器	

目　次

巻頭図版

序
例言
報告書抄録

第１部　調査にいたる経緯……1
　第１章　調査にいたる経緯……1
　第２章　調査体制……1
　第３章　調査経過……4

第２部　位置と環境……6
　第１章　自然環境……6
　第２章　周辺の遺跡……7

第３部　ヤッチのガマ……8
　第１章　調査の概要……8
　第２章　層序と遺構……8
　　第１節　層序……8
　　第２節　遺構……9
　第３章　出土遺物……57
　　第１節　厨子……57
　　1　専用器……57
　　2　転用品……58
　　3　土器……58
　　第２節　青磁……84
　　第３節　白磁……91
　　第４節　中国産色絵……99
　　第５節　瑠璃釉……99
　　第６節　鉄釉染付……99
　　第７節　中国産施釉陶器……99
　　第８節　青花……100
　　第９節　中国産褐釉陶器……117
　　第10節　タイ産褐釉陶器……123
　　第11節　タイ産炻器……123
　　第12節　本土産青磁……127
　　第13節　本土産白磁……127
　　第14節　本土産色絵……127
　　第15節　本土産染付……129
　　第16節　本土産印判手……147
　　第17節　本土産陶器……150
　　第18節　沖縄産施釉陶器……160
　　第19節　沖縄産無釉陶器……165
　　第20節　瓦……174
　　第21節　煙管……174
　　第22節　後期土器……174
　　第23節　玉……176
　　第24節　釘……176
　　第25節　銭貨……176
　　第26節　簪……178
　　第27節　その他の金属製品……180
　　第28節　石器……182
　　第29節　香炉……185
　　第30節　木製品……185
　　第31節　貝製品……193

第４部　カンジン原古墓群ーヤッチのガマ周辺の墓ー……264
　第１章　調査の概要……264
　第２章　遺構……264
　第３章　遺物……269
　　第１節　厨子……269
　　第２節　青磁……275

第３節　白磁 ……275
第４節　中国産色絵 ……276
第５節　瑠璃釉 ……276
第６節　青花 ……276
第７節　中国産褐釉陶器 ……279
第８節　タイ産褐釉陶器 ……279
第９節　タイ産炻器 ……279
第10節　本土産青磁 ……282
第11節　本土産色絵 ……282
第12節　本土産染付 ……282
第13節　本土産印判手 ……282
第14節　本土産陶器 ……282
第15節　沖縄産施釉陶器 ……284
第16節　沖縄産無釉陶器 ……285
第17節　煙管 ……286
第18節　その他の金属製品 ……286
第19節　簪 ……286
第20節　釘 ……286
第21節　石器 ……288
第22節　香炉 ……289
第23節　木製品 ……289
第24節　貝製品 ……289

第５部　カンジン原古墓群ー地区内その他の墓ー・チャラのクブ遺跡・カンジン原遺跡 ……305
第１章　調査の概要 ……305
第２章　遺構 ……305
第３章　遺物 ……307
第１節　厨子 ……307
第２節　青花 ……320
第３節　中国産色絵 ……320
第４節　鉄釉磁器 ……320
第５節　本土産染付 ……320
第６節　本土産印判手 ……320
第７節　本土産陶器 ……320
第８節　後期土器 ……320
第９節　類須恵器 ……320
第10節　その他の金属製品 ……320
第11節　中国産褐釉陶器 ……322
第12節　タイ産褐釉陶器 ……322
第13節　沖縄産施釉陶器 ……322
第14節　沖縄産無釉陶器 ……324
第15節　石器 ……328

第６部　ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨 ……345

第７部　自然遺物 ……386
第１章　動物遺存体 ……386
第２章　貝類遺存体 ……391

第８部　上江洲・西銘における葬制と祖先祭祀 ……408
第１章　はじめに ……408
第２章　調査地の位置と環境 ……408
第１節　カンジン地区の自然的特質 ……408
第２節　ミシマの村と大原・北原の関係 ……410
第３節　ヤッチのガマを訪れた人びと ……411
第３章　上江洲・西銘の葬制と祖先祭祀 ……413
第１節　葬制について ……413
第２節　祖先祭祀について ……418
第４章　ヤッチのガマと村びとの生活 ……422
第１節　ヤッチのガマに関する口碑 ……422
第２節　生業の領域 ……423
第３節　沖縄大戦とヤッチのガマ ……423
第５章　おわりに ……423

第９部　総括 ……429

補記　樹種同定 ……435

挿図目次

ーヤッチのガマー
第１図　久米島の位置 ……5
第２図　島内の遺跡・古墓分布状況 ……5
第３図　久米島の地質図 ……6
第４図　ヤッチのガマ周辺 ……7
第５～８図　土層図１～４ ……14～19
第９図　断面図・立面図凡例 ……20
第10～17図　洞穴断面状況１～８ ……21～28
第18図　石積み１立面図・断面図 ……29
第19～23図　区画石積み立面図１～５ ……31～39
第24図　石積み２立面図・土層図５ ……41
第25図　石積み３立面図 ……42
第26図　石列立面図 ……43
第27図　厨子配置状況（全体図） ……44
第28～32図　厨子配置状況（１～13号区画） ……45～49
第33図　建物礎石配置状況 ……50
第34図　焼土検出状況 ……51
第35図　井戸様遺構内人骨検出状況 ……52
第36図　11号区画平面図・断面図 ……53
第37図　10号区画上段検出状況 ……55
第38～58図　厨子１～21 ……63～83
第59～61図　青磁１～３ ……88～90
第62～64図　白磁１～３ ……96～98
第65図　中国産色絵・瑠璃釉・鉄釉染付・中国産施釉陶器 ……102
第66～73図　青花１～８ ……109～116
第74～76図　中国産褐釉陶器１～３ ……120～122
第77図　タイ産褐釉陶器１ ……125
第78図　タイ産褐釉陶器２・タイ産炻器 ……126
第79図　本土産青磁・本土産白磁・本土産色絵 ……128
第80～87図　本土産染付１～８ ……139～146
第88図　本土産印判手 ……149
第89～92図　本土産陶器１～４ ……156～159
第93～94図　沖縄産施釉陶器１～２ ……163～164
第95～99図　沖縄産無釉陶器１～５ ……169～173
第100図　煙管 ……175
第101図　後期土器・玉・釘・銭貨 ……177
第102図　簪 ……179
第103図　その他の金属製品 ……181
第104～105図　石器１～２ ……183～184
第106図　香炉 ……186
第107～112図　木製品１～６ ……187～192
第113～114図　貝製品１～２ ……195～196

ーカンジン原古墓群-ヤッチのガマ周辺の墓ー
第115図　厨子配置状況(全体図) ……265
第116～117図　厨子配置状況(１～９号墓) ……267～268
第118～123図　厨子１～６ ……269～275
第124図　青磁・白磁・中国産色絵・瑠璃釉 ……277
第125図　青花 ……278
第126図　中国産褐釉陶器１ ……280
第127図　中国産褐釉陶器２・タイ産褐釉陶器 ……281
第128図　本土産色絵・本土産染付・本土産印判手・本土産陶器 ……283
第129図　沖縄産無釉陶器 ……285
第130図　煙管・その他の金属製品 ……287
第131図　石器 ……288
第132図　香炉・木製品・貝製品 ……290

ーカンジン原古墓群-地区内その他の墓ー
第133図　カンジン地区内の古墓分布状況 ……306
第134図　チャラのクブ（平面図） ……307
第135～144図　厨子１～10 ……310～319
第145図　中国産色絵・鉄釉磁器・本土産染付・本土産印判手・本土産陶器・後期土器・類須恵器・その他の金属製品 ……321
第146図　本土産陶器・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器 ……323
第147図　沖縄産施釉陶器 ……322
第148～149図　沖縄産無釉陶器１～２ ……326～327
第150図　石器 ……328

ー人骨ー
第151図　厨子ごとの人骨構成 ……345
第152～153図　納骨状況１～２ ……347～348
第154図　脳頭蓋最大幅/脳頭蓋最大長（男性） …349
第155図　脳頭蓋最大幅/脳頭蓋最大長（女性） …349
第156図　バジオン・ブレグマ高/脳頭蓋最大長（男性） ……349
第157図　バジオン・ブレグマ高/脳頭蓋最大長（女性） ……349
第158図　バジオン・ブレグマ高/頭最大幅（男性） ……350
第159図　バジオン・ブレグマ高/頭最大幅（女性） ……350
第160図　脳頭蓋偏差折線（関東現代人基準） ……350
第161図　頭蓋最大幅/頭蓋最大長（男性） ……351
第162図　頭蓋最大幅/頭蓋最大長（女性） ……351

第163図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大長（男性）……351
第164図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大長（女性）……351
第165図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大幅（男性）……352
第166図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大幅（女性）……352
第167図　正中前頭孤長/正中矢状孤長（男性）…352
第168図　正中前頭孤長/正中矢状孤長（女性）…352
第169図　正中後頭孤長/正中矢状孤長（男性）…353
第170図　正中前頭孤長/正中矢状孤長（女性）…353
第171図　正中頭頂孤長/正中矢状孤長（女性）…353
第172図　正中後頭孤長/正中矢状孤長（女性）…353
第173図　頬骨弓幅/上顔高（男性）……354
第174図　頬骨弓幅/上顔高（女性）……354
第175図　眼窩高/眼窩幅（男性）……354
第176図　眼窩高/眼窩幅（女性）……354
第177図　鼻幅/鼻高（男性）……354
第178図　鼻幅/鼻高（女性）……354
第179図　顔面頭蓋偏差折線（関東現代人基準）……355
第180図　上顔高/頬骨弓幅（男性）……355
第181図　上顔高/頬骨弓幅（女性）……355
第182図　眼窩幅/眼窩高（男性）……356
第183図　眼窩幅/眼窩高（女性）……356
第184図　鼻幅/鼻高（男性）……356
第185図　鼻幅/鼻高（女性）……356
第186図　顔面平坦度偏差折線（関東現代人基準）……357
第187図　前頭骨平坦度示数/鼻骨平坦度示数（男性）……358
第188図　鼻骨平坦度示数/頬骨平坦度示数（男性）……358
第189図　前頭骨平坦度示数/鼻骨平坦度示数（女性）……358
第190図　鼻骨平坦度示数/頬骨平坦度示数（女性）……358
第191図　上肢骨偏差グラフ（畿内現代人基準）……359
第192図　下肢骨偏差グラフ（畿内現代人基準）……362
第193図　大腿骨最大長による推定身長の比較（男性）……363
第194図　大腿骨最大長による推定身長の比較（女性）……363

－自然遺物－
第195図　骨　トリ(ヤッチのガマ周辺の墓・ヤッチのガマ)フクロウ・ブタ(ヤッチのガマ)……389
第196図　骨　ヤギ(不時発見)……390

付 図
1　遺構全体付図
2　10号区画検出状況
3　11号区画上段木製厨子等取上前・後平面

図版目次

巻頭図版１　カンジン原古墓群全景(上空より)
巻頭図版２　ヤッチのガマ遺構検出状況（１号墓より）
巻頭図版３　ヤッチのガマ(入口より)
上：1999年撮影　下：1920年代撮影
巻頭図版４　遺構検出状況
上：石積み１　下：12号区画
巻頭図版５　上左：1･2号区画　上右：2～9号区画
中左：11号区画上段　中右：石積み１
下左：チャラのクブ　下右：作業光景
巻頭図版６　出土遺物１
上：肥前系碗
中左：本土産陶磁器　中右：青花
下：肥前系瓶
巻頭図版７　出土遺物２
上左：青磁　上右･中左：沖縄産陶器
中右：輪銭　下：褐釉陶器
巻頭図版８　出土遺物３
上左：ヤコウガイ製匙　上右：木製品
中左：毛髪　下：ボージャー厨子
巻頭図版９　出土遺物４
上：椀(外)　下：椀(内)

－ヤッチのガマ－
図版１～２　区画内の状況１～２……199～200
図版３　層序……201
図版４　遺構確認状況……202
図版５～６　10号区画検出状況１～２……203～204
図版７　11号区画上段検出状況……205
図版８　遺物検出・厨子内状況……206
図版９　調査光景……207
図版10～29厨子１～21……208～227
図版30～31(上)　青磁１～３……228～229
図版31(下)～32　白磁１～３……229～230

図版33　上左：中国産色絵　上右：瑠璃釉
中：鉄釉染付　下：中国産施釉陶器 ……231
図版34～37　青花１～８ ……232～235
図版38～40　中国産褐釉陶器１～３ ……236～238
図版41　上：タイ産褐釉陶器１　中：タイ産褐釉
陶器２　下右：タイ産炻器 ……239
図版42　左：本土産青磁　上右：本土産白磁
下右：本土産色絵 ……240
図版43～46　本土産染付１～８ ……241～244
図版47　本土産印判手 ……245
図版48～49　本土産陶器１～４ ……246～247
図版50　沖縄産施釉陶器１～２ ……248
図版51～54　沖縄産無釉陶器１～５ ……249～252
図版55　煙管 ……253
図版56　上左：後期土器　上右：玉　中：釘
下：銭貨 ……254
図版57　簪 ……255
図版58　その他の金属製品 ……256
図版59～60　石器１～２ ……257～258
図版61　香炉 ……259
図版62～63　木製品１～６ ……260～261
図版64～65　貝製品１～２ ……262～263

ーカンジン原古墓群-ヤッチのガマ周辺の墓ー
図版66～68　調査状況１～３ ……293～295
図版69～72　厨子１～６ ……296～299
図版73　上：青磁・白磁・中国産色絵・瑠璃釉
下：青花 ……300
図版74　上：中国産褐釉陶器１　下：中国産褐釉
陶器２・タイ産褐釉陶器 ……301
図版75　上：本土産色絵・本土産染付・
本土産印判手・本土産陶器
下：煙管・その他の金属製品 ……302
図版76　沖縄産無釉陶器 ……303
図版77　上：石器　下：香炉・木製品・貝製品 ……304

ーカンジン原古墓群-地区内その他の墓ー
図版78～79　その他の墓１～２ ……331～332
図版80～87　厨子１～10 ……333～340
図版88　上：中国産色絵・鉄釉磁器・本土産染付・
本土産印判手・本土産陶器・後期土器・
類須恵器その他の金属製品
下：石器 ……341
図版89　本土産陶器・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉
陶器 ……342
図版90　上左：沖縄産施釉陶器　下：沖縄産無釉
陶器１ ……343
図版91　沖縄産無釉陶器２ ……344

ー人骨ー
図版92～106　人骨１～15 ……371～385

ー自然遺物ー
図版107　上：ブタ　下：ウシ(ヤッチのガマ)……397
図版108　トリA・トリB・フクロウ？・カラス
(ヤッチのガマ)……398
図版109　ヤギ(ヤッチのガマ)……399
図版110　ヤギ(不時発見)……400
図版111　ヤギ(不時発見)……401
図版112　巻貝１(ヤッチのガマ)……402
図版113　巻貝２(ヤッチのガマ)……403
図版114　二枚貝(ヤッチのガマ)……404
図版115　上：巻貝　下：巻貝(ヤッチのガマ周辺の墓)
……405
図版116　上：二枚貝　下：トリ・ネズミ(ヤッチのガ
マ周辺の墓)
……406
図版117　上：巻貝　下：二枚貝(その他の墓)
……407
図版118　樹種同定資料……436

表目次

ーヤッチのガマー
第１表　厨子観察一覧……59
第２表　各区画の厨子の構成……62
第３表　青磁出土状況……86
第４表　青磁観察一覧……86
第５表　白磁出土状況……93
第６表　白磁計測表……94
第７表　白磁観察一覧……94
第８表　青花出土状況 ……103
第９表　青花計測表 ……104
第10表　青花観察一覧 ……104
第11表　中国産褐釉陶器出土状況 ……118
第12表　中国産褐釉陶器観察一覧 ……119
第13表　タイ産褐釉陶器出土状況 ……124
第14表　タイ産褐釉陶器・タイ産炻器観察一覧……124
第15表　本土産染付出土状況 ……133
第16表　本土産染付計測表 ……132
第17表　本土産染付観察一覧 ……132
第18表　本土産印判手出土状況 ……148
第19表　本土産印判手観察一覧 ……148
第20表　本土産陶器出土状況 ……151
第21表　本土産陶器計測表 ……152

第22表　本土産陶器観察一覧 ……152
第23表　沖縄産施釉陶器観察一覧 ……161
第24表　沖縄産無釉陶器観察一覧 ……167
第25表　煙管計測表 ……174
第26表　釘観察一覧 ……176
第27表　簪観察一覧 ……178
第28表　その他の金属製品観察一覧 ……180
第29表　石器観察一覧 ……182
第30表　木製品観察一覧 ……185
第31表　貝製品観察一覧 ……194

ーカンジン原古墓群-ヤッチのガマ周辺の墓ー
第32表　厨子観察一覧 ……270
第33表　各墓の厨子の構成 ……275
第34表　沖縄産無釉陶器観察一覧 ……284
第35表　その他の金属製品観察一覧 ……286

ーカンジン原古墓群-地区内その他の墓ー
第36表　厨子観察一覧 ……308
第37表　沖縄産無釉陶器観察一覧 ……325

ー人骨ー
第38表　出土人骨の構成 ……345
第39表　比較集団 ……346
第40表　脳頭蓋計測値の比較（男性） ……349
第41表　脳頭蓋計測値の比較（女性） ……349
第42表　顔面頭蓋計測値の比較（男性） ……353
第43表　顔面頭蓋計測値の比較（女性） ……353
第44表　顔面平坦度の比較（男性） ……357
第45表　顔面平坦度の比較（女性） ……357
第46表　上肢骨の比較（男性） ……359
第47表　上肢骨の比較（女性） ……359
第48表　下肢骨の比較（男性） ……361
第49表　下肢骨の比較（女性） ……361
第50表　推定身長 ……363
第51表　脳頭蓋計測値 ……365
第52表　顔面頭蓋計測値 ……365
第53表　顔面平坦度計測値 ……366
第54表　上腕骨計測値 ……366
第55表　尺骨計測値 ……366
第56表　橈骨計測値 ……367
第57表　大腿骨計測値 ……367
第58表　脛骨計測値 ……368
第59表　腓骨計測値 ……368

ー自然遺物ー
第60表　魚骨出土状況 ……386
第61表　カエル出土状況 ……386
第62表　ヘビ出土状況 ……386
第63表　カラス出土状況 ……386
第64表　ニワトリ出土状況 ……386
第65表　フクロウ？出土状況 ……386
第66表　鳥類出土状況 ……386
第67表　ネズミ出土状況（一個体） ……387
第68表　ネズミ出土状況 ……387
第69表　ジュゴン出土状況 ……387
第70表　ウシ出土状況 ……387
第71表　ヤギ出土状況 ……387
第72表　ブタ出土状況 ……387
第73表　種不明出土状況 ……387
第74表　ネズミ出土状況 ……388
第75表　トリ出土状況 ……388
第76表　ウシ出土状況 ……388
第77表　ヤギ出土状況（一個体） ……388
第78表　貝類出土状況（巻貝） ……391
第79表　貝類出土状況（二枚貝） ……391
第80表　貝類出土状況（巻貝） ……393
第81表　貝類出土状況（二枚貝） ……394
第82表　貝類出土状況（巻貝） ……394
第83表　貝類出土状況（二枚貝） ……394

ＣＤ－ＲＯＭ目次

ーヤッチのガマー
厨子計測表
沖縄産施釉陶器出土状況
沖縄産無釉陶器出土状況
ーカンジン原古墓群-ヤッチのガマ周辺の墓ー
厨子計測表
沖縄産無釉陶器出土状況
ーカンジン原古墓群-地区内その他の墓ー
厨子計測表
沖縄産無釉陶器出土状況
ー人骨ー
出土人骨の構成

第１部　調査にいたる経緯

第１章　調査にいたる経緯

平成10年度～平成12年度にかけて実施したカンジン地区発掘調査は、沖縄県農林水産部により実施されている県営かんがい排水事業（カンジン地区）に伴うものである。

同事業は、保水力が弱い石灰岩地帯である大原・北原一帯の具志川村西部が恒常的な水不足に悩んでいることから、同地域の農地に対する農業用水を確保することを目的としている。カンジン地区は周辺よりも５～10m近く落ち窪んだ地形で、同地区の海岸側に地下の庸壁を構築することで地下水を堰き止め、完成時には158万㎥の貯水量を擁する地上湛水型地下ダムが設置されることになる。

同事業を実施するカンジン地区内には、周知の遺跡である「ヤッチのガマ」および「ヤッチのガマ遺跡」が所在する。そのため、沖縄県農林水産部農地水利課と沖縄県教育庁文化課の間で埋蔵文化財の取扱に関する協議を行った。

まず、平成９年度に洞穴前庭部において重機による試掘調査と周辺での確認調査を実施、翌10年度に県農林水産部が文化財保護法第57条の３にもとづく発掘通知を提出し、これを受けて県教育委員会より事前の発掘調査が必要な旨回答、県農林水産部長・県教育長の間で協定書を交わし発掘調査を実施することとなった。

調査は平成10年10月から地区内最大の墓域であるヤッチのガマ前庭部において発掘調査を開始し、併せて周辺墓の確認、発掘調査を実施した。また、今回の調査では多数の人骨を検出したことから、人骨の整理・調査を委託した。

当初、現地での調査は平成11年度に終了する予定であったが、出土遺物が多量であったこと、検出遺構が大規模かつ複雑であったことなどから、農地水利課と文化課による協議の結果、翌12年度も引き続き実施することとなった。調査は平成13年２月に終了、翌３月に現場引き渡しの旨を通知した。

現地調査の延長を受けて、報告書刊行が年度内に間に合わないこととなったため、再度の協議を行った結果、平成13年度まで事業を延長することとなった。そして、同年度に報告書を刊行して全事業を完了した。

第２章　調査体制

発掘調査および資料整理に係る業務は平成10年度～平成13年度にかけて実施した。調査および資料整理は10・11年度は沖縄県教育庁文化課、12・13年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。調査体制は次のとおりである。

調査主体者
　沖縄県教育委員会　（平成10年度～平成13年度）
　　教育長　　安室　　肇（平成10年度）
　　〃　　翁長　良盛（平成11～12年度）
　　〃　　津嘉山朝祥（平成13年度）
調査所管
　沖縄県教育庁文化課（平成10年度～平成11年度）
　　文化課長　　大城　将保（平成10年度）
　　〃　　當眞　嗣一（平成11年度）
　　文化課副参事兼課長補佐　稲嶺　靖子（平成10年度）
　　文化課課長補佐　　當眞　嗣一（平成10年度）
　　〃　　千木良芳範（平成11年度）
　沖縄県立埋蔵文化財センター　（平成12年度～平成13年度）
　　埋蔵文化財センター所長　知念　　勇（平成12年度～平成13年度）
　　〃　　副所長　知念　廣義（平成12年度～平成13年度）

調査事務

沖縄県教育庁文化課

管理係主幹兼係長	大浜　　節	(平成10年度～平成11年度)
〃　主査	砂川　邦子	(平成10年度～平成11年度)
〃　主事	横山さゆり	(平成11年度)

沖縄県立埋蔵文化財センター

庶務課長	知念　廣義	(平成12年度～平成13年度)
〃　主事	城間　千賀	(平成12年度～平成13年度)
〃　〃	上原　　浩	(平成12年度～平成13年度)

調査総括

沖縄県教育庁文化課

埋蔵文化財係長	島袋　　洋	(平成10年度～平成11年度)

沖縄県立埋蔵文化財センター

調査課長	島袋　　洋	(平成12年度～平成13年度)

調査担当

沖縄県教育庁文化課及び沖縄県立埋蔵文化財センター

指導主事	西銘　　章	(平成10年度～平成13年度)
〃	鶴元　寿充	(平成10年度)
〃	田場　健章	(平成10年度)
〃	松永　久夫	(平成10年度)
〃	桃原　茂夫	(平成10年度)
〃	嘉手苅　徹	(平成12年度)
主任専門員	岸本　義彦	(平成10年度)
専門員	城間　　肇	(平成11年度)
〃	藤崎　　京	(平成11年度)
〃	片桐千亜紀	(平成12年度)
調査補助員　嘱託員	城間　　肇	(平成10・12年度)
〃　〃	藤崎　　京	(平成10・12・13年度)
〃　〃	大島　　誠	(平成11年度～平成12年度)
〃　〃	前田　一舟	(平成11年度)
〃　〃	宮城　利香	(平成11年度)
〃　〃	田里　一寿	(平成12年度)
〃　〃	宮平真由美	(平成12年度)
〃　〃	與那国充子	(平成12年度)
〃　〃	矢沢　秀雄	(平成12年度)
〃　〃	又吉　純子	(平成12年度)

事業調整

沖縄県農林水産部　農地水利課

主任技師	大村　　学	(平成10年度～平成11年度)
〃	植田　　修	(平成12年度～平成13年度)

〃　南部農林土木事務所　水利開発課

主幹	神谷　嘉明	(平成12年度)
主任技師	松元　　茂	(平成10年度～平成12年度)
主任	長本　　正	(平成10年度～平成12年度)

人骨調査

琉球大学医学部解剖学第１講座

教授　　石田　　肇（平成10年度～平成13年度）
助教授　　土肥　直美（平成10年度～平成13年度）
助手　　瑞慶覧朝盛（平成10年度）
〃　　泉水　　奏（平成10年度）
技官　　佐宗亜衣子（平成10年度）
大学院生　譜久嶺忠彦（平成10年度～平成13年度）

調査作業員

調査作業員（平成10年度～平成12年度）

新垣勝、新垣喜久子、新垣ハツ、石川七七子、張春暁、當銘初恵、比嘉富子、比嘉文、又吉鶴子、山城初子、山城美智子、上間瞭、知念隆博、内間真吾、比嘉尚輝、比嘉史子、宮城奈緒池原直美、島袋春美、瑞慶覧尚美、玉城恵美利、玉寄智恵子、譜久嶺忠彦

資料整理作業員（平成10年度～平成12年度）

石橋朝子、伊集ゆきの、上原悦子、上原美穂子、上良早美、請盛智秋、栄野元左季、大村由美子、荻堂美香、折田衣代、嘉数禮子、勝連美佐恵、勝連竜子、我那覇悠子、川上益子、金城薫、金城恵子、金城さとみ、國吉晴美、慶留間愛子、源河秀子、幸地真弓、国場のりえ、崎原美智子、佐和田美和子、島袋和、島袋春美、志良堂恵、新城恵、高良三千代、田場直樹、玉城美土里、玉城照美、知念百合子、徳川和也、長崎智子、中田邦子、仲村妙子、比嘉登美子、備瀬枝美子、譜久嶺忠彦、前田一舟、宮城さとみ、山内すず子、与儀美鈴、渡邊尚子

調査・資料整理協力

新垣利津代、大城勝江、大田トヨ、瑞慶覧尚美、玉城照美、比嘉孝子、古屋聡洋、山城初美川元哲哉、島袋貴

聞き取り調査依頼者

大田トヨ、太田教広、喜久永米正、久手堅稔、仲地弘、盛吉秀雄

調査指導者（職名等は当時、並びは五十音）

新垣　義夫（普天間神宮宮司）
石田　　肇（琉球大学教授）
稲福みき子（沖縄国際大学助教授）
上江洲　均（名桜大学教授）
江上　幹幸（沖縄国際大学助教授）
小熊　　誠（沖縄国際大学教授）
嘉手苅千鶴子（沖縄国際大学教授）
喜久永米昌（前具志川村文化財保護審議委員長）
木下　尚子（熊本大学教授）
金武　正紀（那覇市教育委員会文化財課課長）
久手堅　稔（具志川村文化財保護審議委員長）
國吉　康隆（石川市教育委員会）
近藤　　修（東京大学講師）
澤村　　仁（宇江城城跡整備委員会委員）
土肥　直美（琉球大学助教授）
等々力英美（琉球大学助教授）
仲宗根　禎（名護市教育委員会）
Mark Hudson（筑波大学外国人講師）
福島　駿介（琉球大学教授）
福島　輝一（沖縄タイムス社編集局学芸部）
平敷　令治（沖縄国際大学教授）
松元　　徹（久米島の自然と文化に親しむ会会長）
盛吉　秀雄（具志川村文化財保護審議委員）
横山　俊雄（京都大学教授）

仲里村教育委員会　佐久田勇、具志川村教育委員会　中島徹也の両氏からは、調査、現地説明会等において多大な尽力を得た。沖縄県南部農林土木事務所および西松建設株式会社をはじめとするカンジンダムＪＶからは用水の手配、安全通路の確保などのご配慮を得た。そして、地区内その他の墓の厨子回収では桃原土建有限会社からのご協力を得た。記して感謝申し上げます。

第３章　調査経過

調査の経過は、平成10年度～平成12年度に現地での発掘調査、平成10年度～平成13年度に文化課資料室および埋蔵文化財センターでの資料整理を行った。ここでは、各年度ごとに経過を略記し、詳細な調査内容は各部において述べることとする。

－平成10年度－

平成10年度は10月21日から現地での調査を行った。調査は現況の記録と厨子取上のために洞穴前庭部の平板測量を調査員により行った。その後、11月16日から人力による前庭部の掘り下げを開始した。並行して人骨の取り上げを行った。

まず、前庭部に基準杭を任意に１点、北側の上段に同じく任意の基準杭を１点設定し、前者を№１、後者を№２とした。発掘調査は№１を基準に区画の石積みに沿ってトレンチを設定し、これを１トレンチとした。基準点の移動は業者へ委託し行った。

平成９年度の試掘調査では、地表下約１ｍから岩盤と思われる石灰岩を確認しており、掘り下げ開始後すぐにこれに到達したが、やや不自然な観を受けたために順次１トレンチを拡大していった。

その結果、石積みと礫敷きを確認した。遺物は出土量が多く、かつ同一のレベルからまとまって出土しており、近い時期に廃棄（？）したと考えられたことから、平面図を作成しての点上げを行った。

人骨調査は沖縄人類学研究会へ委託して行った。調査は、現況を写真により記録し、収められている人骨の状況、副葬品の確認などを行った。保存状態の良好な資料については、上面図および正面図を作成した。また、随時資料整理を行った。

－平成11年度－

平成11年度は６月１日により開始した。調査は昨年度に引き続き洞穴の前庭部を調査した。調査方法は昨年度と同様に１トレンチを順次拡大して調査をすすめた。また、遺構平面図および立面図の地上写真測量を業者委託により実施した。人骨調査は琉球大学医学部第一解剖教室へ委託して実施した。

今年度は平成12年２月１日～２月28日の間に地区内に所在する墓の位置確認と保存状況を確認するために踏査による分布調査を実施した。地区内は農水部により水没物件調査を実施しており、その際に作成された地図をもとにして墓を１基ずつ確認していった。また、地区内に所在するチャラのクブではヤッチのガマと同様に平面図を作成し、併せて試掘坑を任意に２ヶ所設けて試掘調査を実施した。

７月31日には現地説明会を実施し、地元をはじめとして多く方々に参加いただいた。11月21日には久米島の自然と文化に親しむ会の依頼により仲里村文化祭で出土品の一部を展示した。また、随時資料整理を行った。

－平成12年度－

現地での調査の最終年度である。調査は平成12年６月１日～平成13年２月２日の間にヤッチのガマを主体として、併せて周辺墓の調査を行った。また、遺構立面図の地上写真測量を業者委託により実施した。そして、チャラのクブでも発掘調査を実施し、地区内のその他の墓を一部調査した。

地区内のその他の墓に関しては、農地水利課、南部農林、文化課、埋文センターの４者協議の結果、これまでの経緯から考えてヤッチのガマと周辺墓および地区内の墓の一部は文化財側で調査を実施し、地区内の墓の大部分に関しては農水側で行うことを確認した。その他の墓に関しても一部は専門職員が立ち会いを行った。

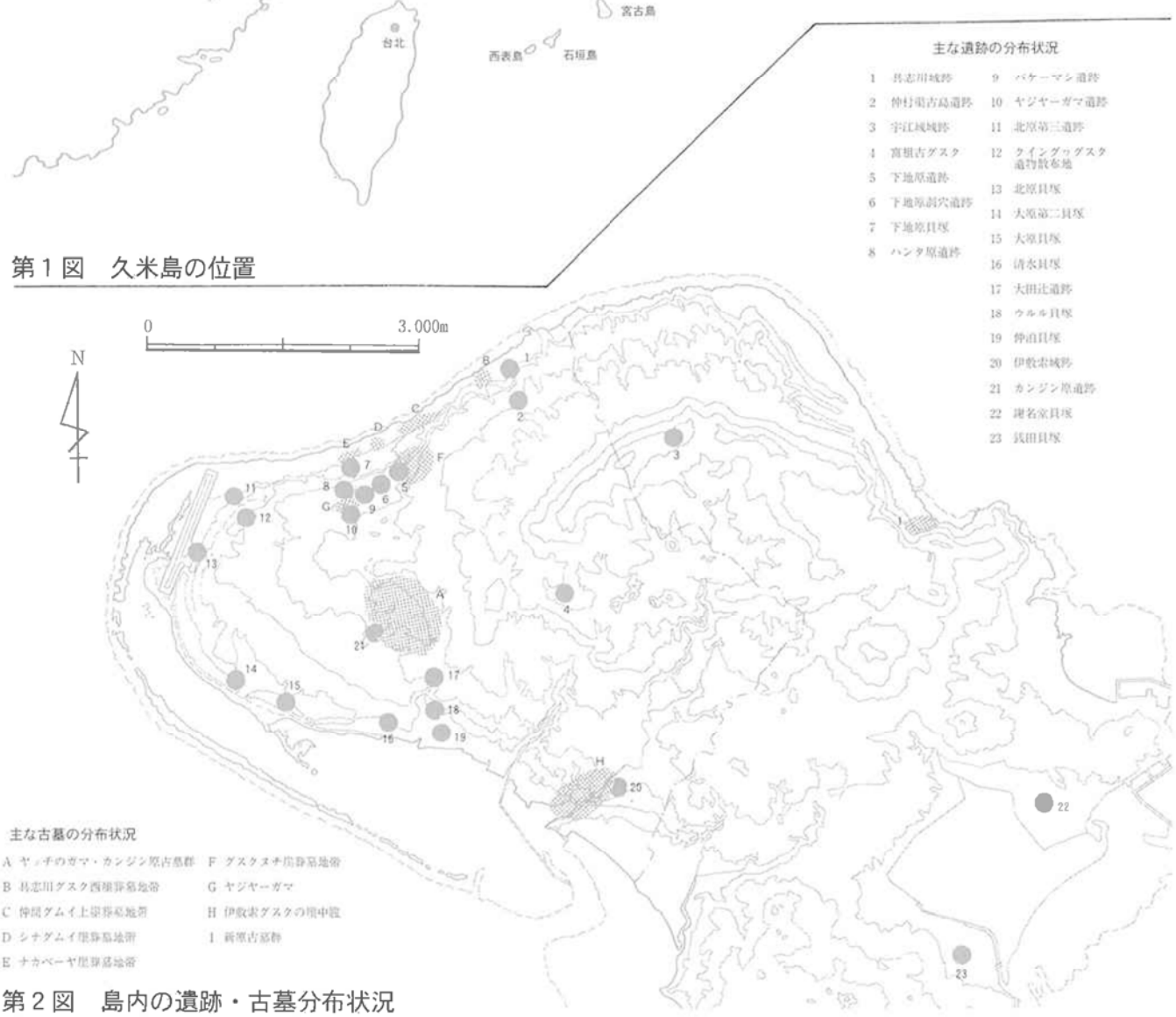
現地調査の最終年度であることから、久米島自然文化センターのご厚意により文化センター主催の見学会を１月13日に実施した。また、随時資料整理を行った。

遺物・調査用具の搬出、調査現場の撤収後、３年にわたる現地調査を完了した。

－平成13年度－

平成13年度は報告書を編集・刊行し、カンジン地区発掘調査に係る業務をすべて完了した。

第１図　久米島の位置



第２図　島内の遺跡・古墓分布状況

第２部　位置と環境

第１章　自然環境

カンジン地区および久米島の環境については第８部にて詳述するため、ここでは概要を述べる。

カンジン原古墓群は久米島の西、具志川村のほぼ中央部に位置する。一帯は標高が約20～30mの石灰岩台地で、地質学的には石灰岩に分類される。

カンジン原古墓群一帯は石灰岩が侵蝕によって窪地となったウバーレ地形をなし、周囲よりも５～10mほど低くなっている。最も深い部分は周囲より20mあまり低くなっている。そのため、大雨後には冠水することが度々であり、農業には不適な土地であると聞く。しかし、水が引くのも早く、もっとも低い部分でも冠水後３、４日後には水が引いていたという。また、岩陰利用の墓は浸蝕崖沿いにみられる。

農水部によって行われた自然環境調査では、崖の縁辺部にハマイヌビワやヤブニッケイを主体とした植物群落が残っている。地区内では、国指定天然記念物の「オカヤドカリ」や県指定天然記念物の「クロイワトカゲモドキ」が棲息しており、調査中にも時折みかけることがあった。その他にもレッドデータ記載の生物が確認されている。また、地区の北側には国指定天然記念物の「久米の五枝松」や県指定天然記念物の「クメジマボダル」の棲息地がある。

以前、県教委により行われた洞穴調査ではカンジン地区内で３ヶ所の洞穴を確認している（沖縄県教委1979）。今回、地区内墓の分布調査を実施した際にこれらの洞穴の位置確認を行い、オファーブアブ第１、第２洞は確認できたものの、クマヂ洞は確認できなかった。また、オファーブアブ第１洞は泥の流入により大半が埋没していたことから、クマヂ洞も既に埋没したと考えられる。

第３図　久米島の地質図（加藤1985）

第２章　周辺の遺跡

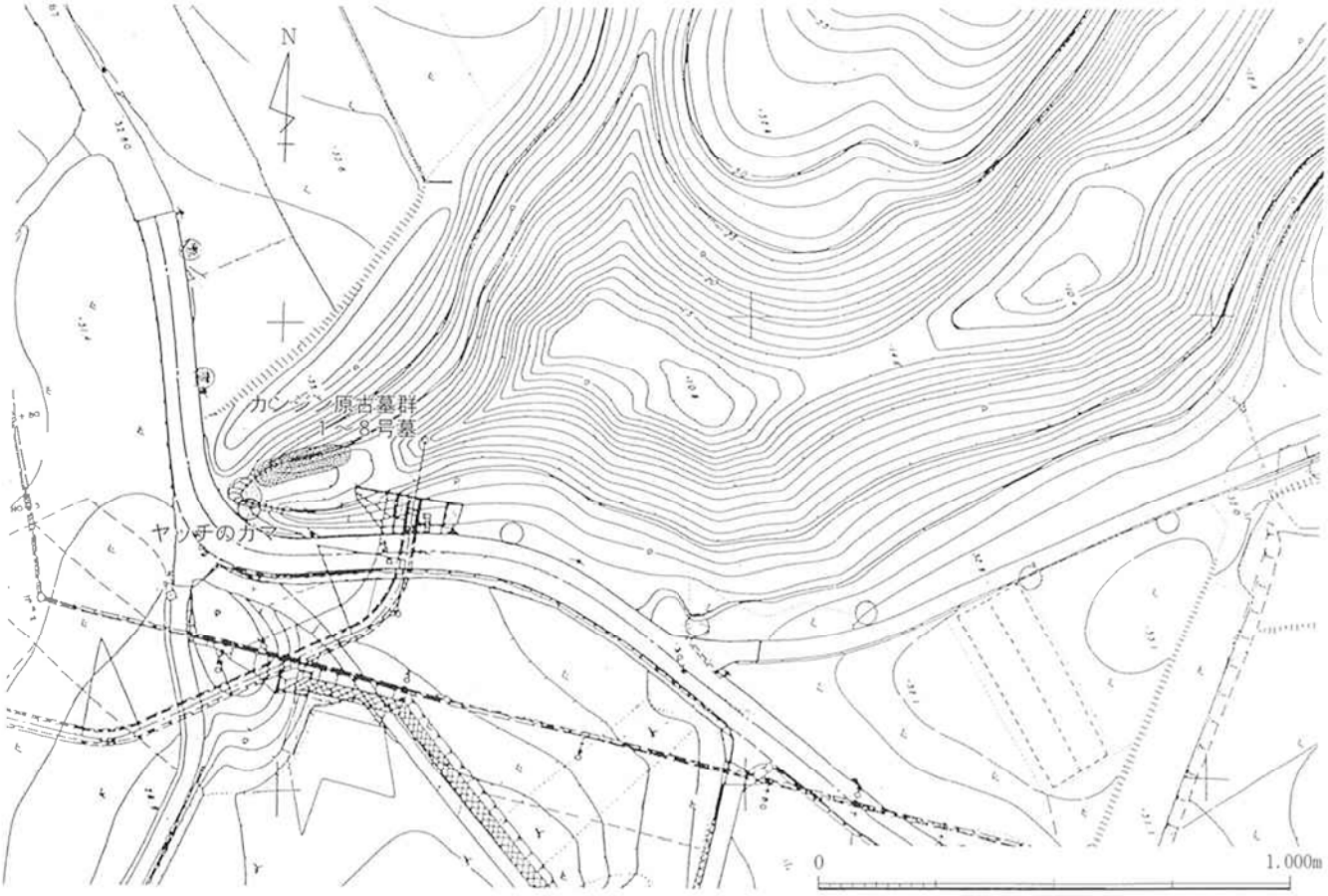
久米島における先史時代遺跡の多くは具志川村の南海岸と北西海岸に立地し、前者では通称「大原砂丘」上に、後者では石灰岩の崖上もしくは崖下に形成されている（久手堅1982）。また、北西海岸一帯には崖葬墓が点在している（第２図）。

これまでの調査で、ヤッチのガマ北方約２kmに所在するヤジヤーガマ遺跡（安里1975）が確認されているが、これまでカンジン地区一帯で遺跡は確認されておらず、遺跡の空白地帯であった。今回、ヤッチのガマ上方台地で新たに遺跡を確認した。小字名から「カンジン原遺跡」とした。遺物は土器、類須恵器の細片と石器片などを採集することができる。ただ、当該地はかなり削平されており、遺跡の大半は隠滅した可能性が高いものの、崖の縁辺部に残存する可能性がある。

以前の調査でヤッチのガマ内に後期、もしくはグスク時代の遺跡（ヤッチヌガマ遺跡）が想定され、入口側トレンチとした部分から後期土器が出土した。しかし、この部分は上方台地からの流れ込み土が堆積したものであることから、後期遺跡の主体部は台地上と思われ、カンジン原遺跡がこれにあたるものであろう。また、隣接するチャラのクブとよばれる凹地内の洞穴で、沖縄後期の包含層を確認したが、包含層はプライマリーな層とみるよりも上方台地からの流れ込みと見受けられ、同様に遺跡の主体は台地上と考えられる。仮に「チャラのクブ遺跡」とした。これらは、カンジン原遺跡に由来するものと考えられる。

久米島における古墓の分布は集落から離れており、かつ崖葬墓が目立つ（第２図）[1]。これらの古墓の調査はほとんど手が付けられていない状況であるが、ナカベーヤ崖葬墓群が土肥（1994）によって調査されている（土肥1994）。また、久米島の古墓は上江洲（1996）が指摘するようにボージャー厨子が多く納められており、カンジン原古墓群にもあてはまる。

1）名称は沖縄県立博物館『久米島総合調査報告書』（1994）に依った。新原古墓群は仲村昌尚『久米島の地名と民俗』記載の地名にもとづいて命名した。



第４図　ヤッチのガマ周辺

第３部　ヤッチのガマ

第１章　調査の概要

先にも述べたように、ヤッチのガマはカンジン地区内最大の墓域で今回の調査の中心となった区域である。洞穴は開口部に約400㎡の平坦な前庭部を持ち、ここに石灰岩を積み上げた区画が形成されている。洞穴の平面観はヒョウタン形にくびれ、洞穴入口は狭くなっている。洞穴奥は落盤により行き止まりになっている。また、洞内には曲がりくねった支穴がある。

調査ではまず、前庭部の区画を洞穴開口部から時計回りに任意に１～13まで番号をあてた。ただし、13号区画は区画の石積みを持たないが、厨子を一ヶ所に集めていることから区画の名称を与えた。そして、前庭部に№１、上位の平場（カンジン原古墓群４号墓前）に№２の杭をそれぞれ任意に設定した。旧１トレンチは前回に行った試掘坑をさける形で11号区画石積み南側に沿って設定した。まずトレンチは１ｍ×２ｍとして掘り下げを開始し、遺物の集中部については取り上げ番号を付して平面図を作成した後にレベルを記録して取り上げた。そして、石積み１の確認後、順次発掘区を拡大していき、最終的には前庭部全体を掘り下げ、最大で表土下約３ｍまで掘り下げた。

遺構は石積み、石列、焼土などを確認した。石積み１は洞穴前庭部を南北に横断する形で構築され、これに伴う遺構として礫敷き、石列、一部の区画石積みなどがある。遺物は同一のレベルに集中して出土する傾向があり、特に旧１トレンチⅢｆ層の11号区画付近から多く出土している。また、旧11号区画外側トレンチでも同様な出土傾向がみられた。遺物は完品もしくは関係の資料が多いという点も特徴的である。

洞穴内では試掘坑を任意に設定して調査を行った。洞穴は、約20ｍの地点で落盤しており、多量の土砂が流れ込んで行き止まりとなっている。洞穴上位の畑地に落盤の痕があることから、ここから土砂が流れ込んだものと思われる。また、洞穴は「カー」と呼ばれ祭祀の対象となっており、大雨後はくるぶし付近まで水が溜まる。表面の遺物はキセル、貝などがわずかに得られたのみである。

洞穴内の試掘坑は、２ヶ所を洞穴壁面に、２ヶ所を石積み２に沿う形で掘り下げた。うち、壁面側の試掘坑は土砂の粘性が極めて強いことから洞穴床面に達することができなかった。石積み側の試掘坑は、石積みの根石を確認する目的で掘り下げた。ここも粘性が強いことから床面の確認はできなかったが、根石が土層上にあることを確認した。また、前庭部と同様に、遺物が同じレベルから集中して出土する傾向があると分かった。支洞は約10ｍ程で行き止まりになっており、わずかに骨片（獣骨？）がみられるのみで人工遺物は確認できなかった。

第２章　層序と遺構

第１節　層序

掘り下げは前庭部を中心に行い、最大で表土下約３ｍにいたった。基本層序は、上層は近現代遺物を含むことから近現代の層と思われ、その下位は本土産・中国産陶磁器など近世の遺物を含む層である。この層は洞穴上位の平場や崖上から流れ込んできた土が堆積したもので、基本的には自然堆積層である。特に洞穴入り口付近では堆積の仕方が複雑であり、層位ごとの遺物取り上げが充分でなかった。

１）基本層序

先に述べたように、基本的な層序は上位２層は近現代、下位が近世に属する層である。後者の層を一括してⅢ層として扱い、さらにa、b、c…と細分、最終的にはⅢｑ層まで確認した。

第Ⅲ層は基本的には遺物を多量に包含する暗褐色土層と、遺物が少ない明褐色土層が互層をなしている。暗褐色土層は塊状に近い土質で、堅く締まっている。明褐色土層は比較的粒子状の土質であった。前庭部の奥側では整然とした堆積であったが、入口側付近ではかなり層序が乱れ、特に崖直下付近はジャリを多量に含む。

地山は赤色土層で、旧11号区画外トレンチで確認した。次第に南側に傾斜するように堆積し、全面に広がると考えられるが、最も深い部分を掘り下げることは危険と判断したため、最深部の確認にはいたらなかった。

2）旧１トレンチ・旧11号区画外トレンチ

もっとも深い部分で地表下約３ｍまで掘り下げた。上位の第Ⅰ・Ⅱ層は現代遺物が多くみられることから現代の堆積層と思われる。近代以前は第Ⅲ層である。第Ⅲ層は前述のとおり、基本的には暗褐色土層と明褐色土層が互層をなして堆積している。最下層は粗いジャリが混ざった褐色土で、地山は赤土である。地山は旧11号区画外トレンチで確認した。旧１トレンチ北側～旧11号区画外トレンチの最下層直上には人頭大～俵大の石灰岩（石灰岩崩落部とした）があり、遺物・炭を多量に含んでいる。

第５図は旧１トレンチの東壁（入口付近）の層序である。先に述べたように、上層における堆積状況は上位からの水の流れ込みの影響で、暗褐色土と明褐色土が乱雑に入り乱れ（特に19層南側）、下位は比較的水平に堆積している。うち、１～４・６層はⅢa～d層、16・18・21・22・23層はe～j層、19層下位はk層、27・30はl・m層、36・39～41層はn～q層に対応する。

第６図１・２は11号区画の南・西壁である。同図２西壁の下位の堆積は複雑である。北側斜面からの流れ込みの影響であろう。同図１南壁の中央部および同図３・４は礫敷上の堆積である。前庭部の中央部でほぼ水平堆積の状況をみせる。同図３は５層以下がⅢ層で、５・６・７…層がⅢa・b・c…層に各々相当する。第８図１は２～９号区画間に設けたトレンチの層序で、前庭部よりもさらに薄い堆積状況が確認できる。また、同図２は旧11号区画外トレンチの東壁で、17層においてジャリ層を確認した。比較的浅い部分からの確認である。

3）旧12号区画南側トレンチ

第７図３は旧12号区画南側トレンチの東奥、後述の井戸様遺構内およびその上位に堆積した層である。上位はきめが細かく粘性の高い土からなり、分層が難しい。下位はさらに細かな土からなりマーブル上をなすため、分層は行えなかった。最下層は１トレンチと同様に粗いジャリ層で、人骨を検出した。

4）入口側トレンチ

崖上からの土やジャリが多く混ざっており、極めて堅く締まっている。基本的な層序は旧１トレンチに準ずるが、粗いジャリを含む点で異なっている。崖上からの流れ込みの層である。第７図１は西壁、同図２は東壁である。お互いに対応する層序であるが、層の堆積が複雑であるため、同一層に比定できる層においても対応が難しい。同図１の７層以下はジャリが混ざるようになり、同図１の18層、同図２の７層以下においては拳大の大きな礫を含むようになる。

第２節　遺構

遺構は地下と地表の遺構の大きく２つに分けられる。ただ、石積み遺構１と同２はお互いに対応するものと思われるが、前者は地下に埋没、後者は地表に露出している。また、12号区画は最下層から石積みが立ち上がり、地表にも区画石積みを有する。以下、各遺構について述べる。

1）各区画および区画石積み

各区画は、拳大～人頭大の石灰岩を石積みとして巡らせている（第19～23図）。区画は地下の遺構に伴うものとそうでないものがあり、一括して取り上げることは適切ではないが、区画ごとに成果を述べる。なお、巻頭図版３であげた昭和初期の写真から推察すれば、その頃には現状のような区画が形成されていたと分かる。また、聞き取りの結果、沖縄戦時には前庭部を防空壕として利用し、その際に石積みを積み直したり、厨子を並べ直した部分（前出の写真では確認不能）があった、とのことである。

区画の特徴として、１号区画のように区画内を石列で区画して１段高い部分を有するもの、２号区画のように平坦なままのものがみられる。10・11号区画は見方によっては段を持つとしてもよいが、各段が広いことから１号区画と分けて扱う。また、12号区画は1.5ｍ程の石積みが立ち上がり平坦な部分を形成するが、２号区画とは若干性格が異なる。次のように分けられよう。

Ⅰ：石列で１段高い部分を有するもの

Ⅱ：平坦な部分のみ

Ⅲ：平坦な部分を２～３ヶ所有するもの

また、区画に入口を持つものと持たないものがある。各区画の厨子配置状況を第28～32図に示した。

A：入口を持つ
B：明確な入口はなく、前面は区画によって閉じられていない

①1号区画（図版1－1）
1号区画は前庭部南側（入口側）に形成された区画で、約3m×3m程の正方形に近い形状である。入口を持つ。区画は奥が石列により1段高くなっている。また、区画のほぼ中央に1m×0.5m程の板石が立てられている（南北に軸を持つ）。
掘り下げによる調査は、区画石積みの内側に、北側と西側にトレンチを設けて行った。掘り下げの結果、区画石積みはⅢc層上に乗り、もっとも新しくつられた区画であることが分かった。また、トレンチ最下層からは2～5号区画石積みから伸びる石列（第26図エ・オ）と、礫敷きの延長を確認した。

②2号区画（同－2）
2号区画は平坦な区画で、明確な入口を持たないがそれを思わせる部分がある。厨子は、区画の左右に配され、間は通路状になっている。1～3号区画上段への通路と思われる。
区画表土には30cm大の平坦な火成岩をおよそ半間間隔で並んべており、建物礎石と考えられる。区画内にトレンチを設けて掘り下げたところ、最下層から白色の石粉を敷き詰めた部分を確認した。自然堆積層ではなく造成層と思われる（第24図2・3）。

③3号区画（同－3）
3号区画は、1号区画と同じく石列により1段高い部分を有し、厨子はその段上に配置している。入口を有する。石列内側は拳大の石灰岩を敷き詰め、厨子を安定させるためにくぼませた部分や石灰岩を組んだ部分がみられる。

④4号区画（同－4）
段を有する区画で、入口は2ヶ所ある。段上は石粉を敷いており、掘り下げると下位は石灰岩礫であった。また、段下も土層の下位は石灰岩礫で、前庭部の礫敷き遺構の延長である。

⑤5号区画（同－5）
厨子を配置しない唯一の区画で、区画内も大きな石灰岩を敷き詰め雑然としている。青花が1点得られたのみである。大型の石灰岩で前面を衝立状に閉じている。

⑥6号区画（同－6）
段を有するが、区画する石列は雑然としている。入口も明確ではない。拳大程度の石灰岩が敷き詰められ、段上には細かなコーラルを敷いている。

⑦7号区画（同－7）
平坦な区画で、入口を有する。6号区画と同じく拳大程度の石灰岩上に細かなコーラルを敷いている。洞穴壁際に多量の焼骨が集中する部分がある（図版2－7）。厨子番号7～9・12・13である。

⑧8号区画（同－8）
7号区画と同じく平坦でコーラルを撒いている。コーラルは区画全体に敷いており、南北にトレンチを設けたところ前者同様に下位は石灰岩であった。2ヶ所の入口を有する。

⑨9号区画（図版2－1）
他の区画は入口を基準とすると、正方形もしくは奥行きが短いのに対して、9号区画は入口に対して奥行きが長い瓜実形の区画である。区画石積みは他よりも高く構築されている。同じくコーラルが一面に敷き詰められており、下位は石灰岩であった。一部で石灰岩を取り除き深さの確認を行ったが、最下部までの確認にはいたらな

かった。

⑩10号区画（図版２－２・図版５・６）

10号区画は平坦な面の３段からなる区画構成となっている。最も奥の段から上段・中段・下段とし、いずれにもサンゴジャリを敷き詰めている。厨子は上段に集中的に配置されており、下部には蓋の破片や厨子として転用された陶器類の破片、棺桶等の木材片が多量に散乱している状況であった。上段の奥には多量の人骨を集骨した人骨集中部が確認されている。

下段は当初、石積み１～３や礫敷き等と同様、土中に埋没していたが、旧１トレンチ掘り下げ中に石列Ａが確認されたため、中段石列と石列Ａ間を掘り下げたところ、１～８層まで茶褐色土層と暗褐色土層が互層をなしており、９層にはサンゴジャリが面で検出された。また、下層の10～12層は造成層として確認されたため、石列Ａ及びそれに伴なう造成を10号区画下段として扱った。

上段奥の人骨集中部堆積状況は、大型人骨・人骨小片・人骨細片・人骨小片（風化含）・人骨細片・風化（大型人骨含）の５層であった。平面的な割合として、ａ（焼骨５割程度含）、ｂ（火葬骨５割程度含）、ｃ（火葬骨が大部分）という傾向がみられたが、５層ではｂ・ｃともに火葬骨５割程度含という状況であった。また、ａには大腿骨等の長骨を南北に軸を持つ集骨も確認された。

上段～中段の造成状況としては、１ａ層～６ｄ層の全10層が確認された。１ａ、ｂ層及び２層（サンゴジャリ及び石粉）が造成層で、３層（火葬骨・焼骨を含む焼石）及び４層（人骨細片・小礫）が堆積層となっている。その下層には５層大型人骨片（人骨集中部堆積状況Ｖ層に対応）があり、６層はａ（茶褐色混礫土層）、ｂ（茶褐色土層）、ｃ（コーラル層）、ｄ（大型礫層）という造成がなされていた。Ⅲ層、Ⅳ層及びⅥａ層がＶ層の上下部に形成されるという堆積・造成状況から、１ａ・ｂ層及び２層の時期の造成とに明確な時期差が存在することが明らかとなった。

中段においては２層除去後に６a層が検出され、南東隅において炭化物及び骨片集中部が検出されている（第37図、付図２）。

⑪11号区画（図版２－３・図版７）

11号区画も10号区画同様、平坦な部分を組み合わせ、２段及び小洞穴からなる。小洞穴をとして、厨子を配置していた部分を中段、その東側を下段とした。ただし、中・下段を区画する石積みは板状の火成岩のを並べた程度であり、明確に区画されていなかった。また、上段とした小洞穴には多量の人骨を集骨した人骨集中部が確認されており、10号区画上段奥の人骨集中部と同様の性格を有するものと考えられる。

厨子のほとんどは中段で、上段に転用品と思われる褐釉陶器や土器があった。10号区画では、厨子は整然と配置されていたのに対して、11号区画ではやや雑然としていた。中・下段で掘り下げを行ったところ、いずれも土層下は拳大～人頭大の石灰岩を込めていた。当初は裏込め的なものと思われたが、下段下層から石積み１の延長、石列Ｂの延長が確認されたことから、下段で確認した石灰岩は石積み３から崩落したものと思われる。

上段とした小洞穴には、多量の人骨片の上部に土器片や木棺等の一部であると考えられる木材片等が散乱しているほか、大腿骨等の長骨を一箇所に集骨している部分も確認できた。

人骨集中部の堆積及び造成状況は、１ａ層（大型人骨片）、１ｂ層（人骨小片）、２層（人骨風化）、３ａ層（茶褐色混礫土層）、３ｂ層（コーラル層）、３ｃ層（コーラル層-黄褐色-）、４層（茶褐色土層）の全７層からなっており、３ａ・ｂ・ｃ層及び４層は造成層となっており、中段との境である石列を配した後に、３～４層を造成している。また、４層においては、１ｍピンポールが全て差し込める程の厚さを有していたことから、50㎝程度掘り下げた時点で終了した。

⑫12号区画（図版２－４）

12号区画は倒れた巨大な石灰岩の隙間に形成されたもので、北側を石積みで閉じている。厨子は区画の最も奥に配置されるが、並べ方は雑である。

掘り下げは前庭部と並行して行った。掘り下げにより、土層の下位は礫敷きであった。ただし、前庭部の礫敷き遺構よりも粒が小さく、立ち割りを行ったが５㎝ほどで微細なジャリ混じりの褐色土層が現れた。区画自体、石積み１より高く立ち上がり、方形をなす。また、入口を思われる部分がみられる。遺構南側には井戸様遺構が

取り付いている。

⑬13号区画（図版２－５）

13号区画は洞穴入口部分にあり、区画は持たない。厨子の配列は雑然としており、どのような経緯で厨子が置かれたのか不明。区画は斜面からの土砂の流れ込みで埋もれた部分がある。また、近現代遺物の多くが13号区画付近から出土・採集されているが、上位にゴミ捨てがあることからここからの流れ込みと考えられる。

区画の東側には薄く黒色土が堆積しており、粘性はなく締まりがない。青磁などの遺物を含むことから、崖上からの流れ込みとも考えられる。

２）石積み１

石積みは洞穴開口部と洞穴入口側にあり、前者を石積み１、後者を同２とした。また、前庭部北側の石積みを石積み３とした。

同遺構は洞穴開口部を南北に横断し、長さは15m、高さは最も高い部分で2.5m、低い部分で１mである（第18図１）。石材は人頭大から俵大の石灰岩を用い、若干ながら火成岩を用いている。ほとんどは自然石を用い、面取りをしたと思われる石材もわずかにみられる。隙間なく石が積まれ、しっかりとしたつくりである。また、遺構中央部の表面は火を受けたため赤くなっており、表面が脆くなっている。

３）石積み２

同１と同じく南北に軸を持つ。同遺構は洞穴入口の最もくびれた部分に構築されている。幅は４m、高さは２mである（第24図１）。石積み１が傾斜するように構築されているのに対して、石積み２はほぼ直に立ち上がっている。また、石材は石積み１とは異なり人頭大以下の小さめのものを用いている。石の積み方は石積み１と比べて空隙があるものの、石灰岩同士の噛み合わせはしっかりとしている。

４）石積み３

石積み３は洞穴北側斜面に取り付く形で築かれている（第25図）。上位にカンジン原古墓群１号墓がある。石積みは表土のほぼ直上に乗っていることや、石積み１が同３下に潜り込んでいることから、新しい時期の遺構と思われる。また、いくつか面を持っていることから構築の時間差が考えられる。

５）１～３区上段

１～３号区画の南側は約50cm程の石積みによって１段高くなっている（第28図８）。石積みは拳大の石灰岩を直に立ち上げている。平坦部表面には遺物がほとんどなく、古写真では棺材と思われる板がみられるのみである。平坦部奥にも石列状に石灰岩を並べている。平場内に南北のトレンチ２ヶ所を設け掘り下げた結果、石積み付近で人骨が集中して得られ、白釉陶器片などが出土した。

６）礫敷き

石積み１と次の石列の間にみられる。５～10cm大の小さい石灰岩礫を平坦に敷き詰めたものである。一部、立ち割りを行い掘り下げたところ石灰岩礫の厚さは10～20cmで、下位は細かな石灰片を含む明褐色土層であった（第18図２）。立ち割り面積が狭いこともあり限られた調査になったが、明褐色土は造成土的なものと考えられる。同遺構は２～９号区画間の通路部分に続き、奥へ向けて緩やかに上がっている。

７）石列

石列は３基確認した。それぞれＡ・Ｂ・Ｃとする。

石列Ａは10号区画の前面に形成されたものである（第26図ア）。10号区画の方向軸と合うことから同区画に伴うと思われる。また、内側には軸が異なる石列があり、時期が異なると思われる（同図ウ）。

同Ｂは10・11号区画にかけて、Ｌ字状に形成されたものである（同図イ）。石積１と方向軸が同一で、11号区画下段石積みの下にもぐっている。

同Ｃは、１号区画内にみられるもので、２～５号区画石積みに伴うものである（同図エ・オ）。クランク状を

なし、２～５号区画石積みから石積み遺構１にいたる。人頭大の平坦な石材を用い、礫敷き遺構に直接乗る。石列Bと同一の方向軸で、同じ時期に造られたと考えられる。

８）建物礎石

２号区画にみられる（第33図）。板状の火成岩を約90㎝間隔で配置しており、南北軸の礎石は残存するが、東西軸は配置されていない。区画奥に火成岩が集中することから、厨子を配置する際にまとめたものと思われる。

９）焼土

焼土はⅢｍ層下部で確認した（第34図）。一面が焼けており、土が５㎜ほどの粗い粒状をなしている。焼土は赤みが強い部分があり、かつ堅く締まっている。同じレベルに炭が多くみられ、木材が焼けたと思われる部分が数カ所みられる。焼土は石灰岩崩落部上にもみられたが、前者とは異なり堅く締まった範囲は狭い。焼骨を含んでいる。焼土のほかに、石積み１も表面が火を受け、所々石灰岩が赤みを帯び、表面は脆くなっている。このことから考えると、ある時期に広い範囲で火が焚かれたと推察できるが、その理由などは不明である。

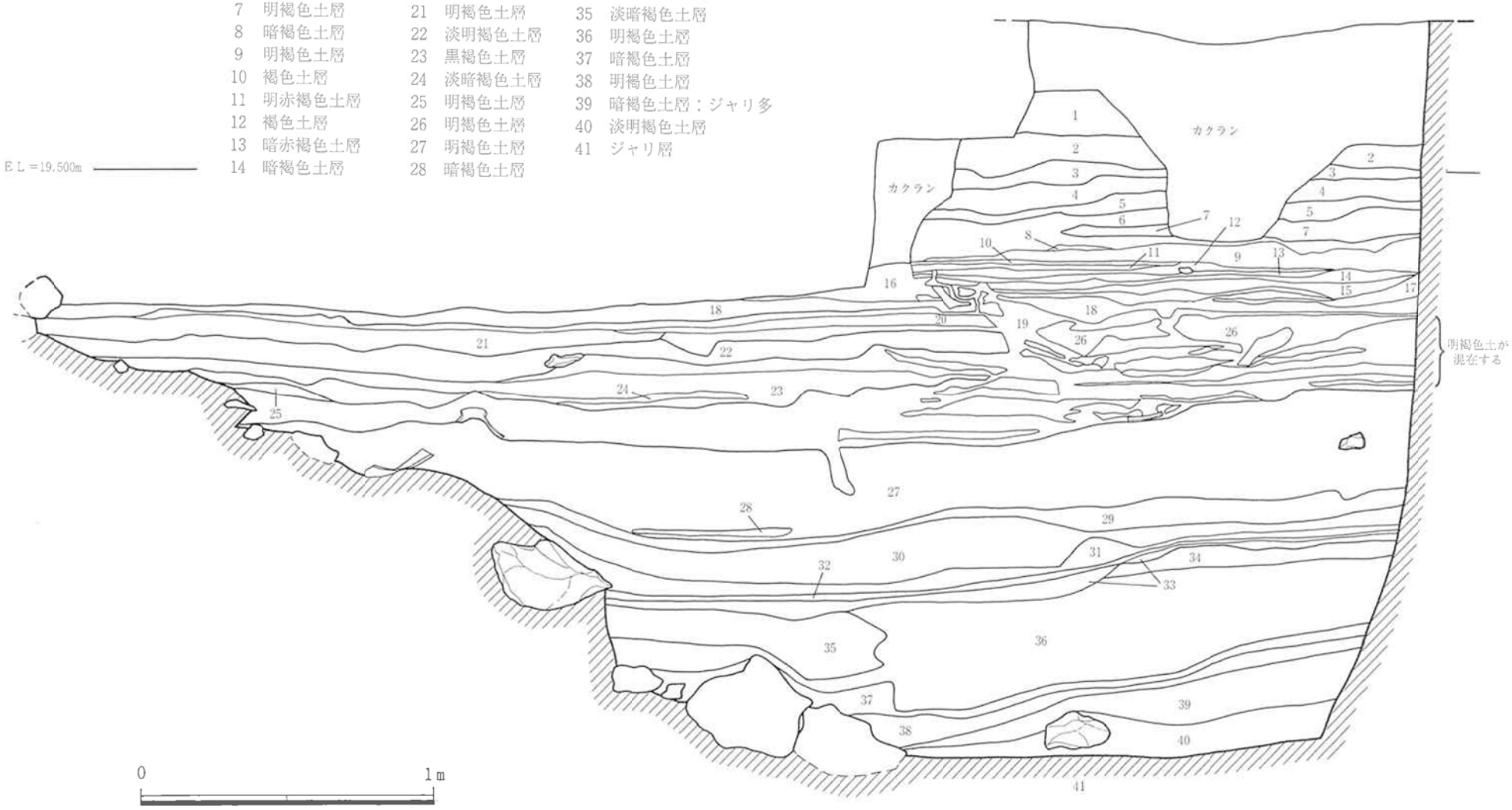
Ⅲｎ層下からは厚さ約３～５㎝の炭が堆積した層を確認した（図版４－８）。旧１トレンチ全面（石積み１と12号区画間）に広がっているが、性格は不明。

10）井戸様遺構

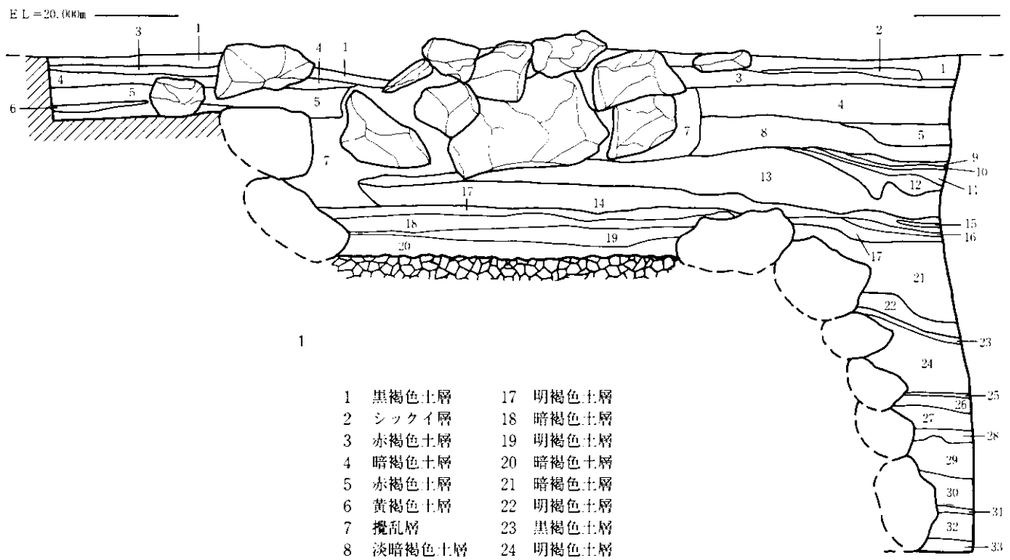
12号区画の南側で確認した。12号区画は南側から倒れてきた巨大な石灰岩下に構築されたもので、同遺構はその空隙部分に枡形に形成されている（第23図45）。

同遺構の最下層（ジャリ層）上で人骨１体分を確認した（第35図）。人骨は頭骨などいくつかの部位が欠落していたが、骨端は関節した状態で整然と並んでいることから、１次葬と考えられる。共伴遺物はみられない。

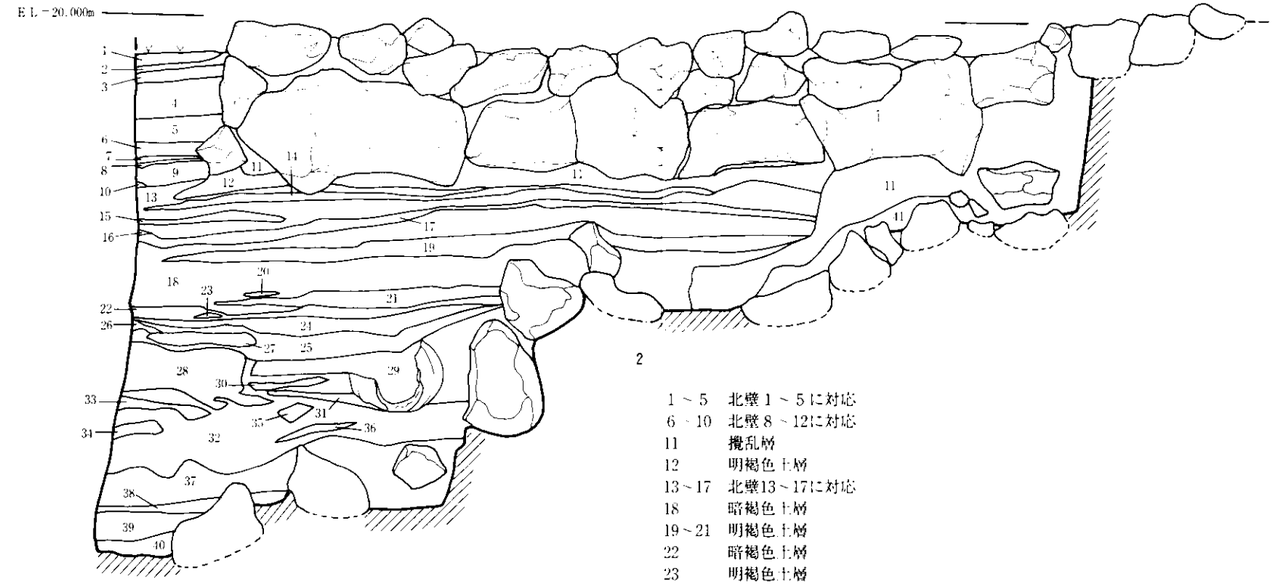
1　暗褐色土層
2　明褐色土層
3　暗褐色土層
4　明褐色土層
5　明褐色混砂土層
6　暗褐色土層
7　明褐色土層
8　暗褐色土層
9　明褐色土層
10　褐色土層
11　明赤褐色土層
12　褐色土層
13　暗赤褐色土層
14　暗褐色土層
15　明赤褐色土層
16　暗褐色土層
17　暗褐色土層
18　明褐色土層
19　暗褐色土層
20　明褐色土層
21　明褐色土層
22　淡明褐色土層
23　黒褐色土層
24　淡暗褐色土層
25　明褐色土層
26　明褐色土層
27　明褐色土層
28　暗褐色土層
29　暗褐色土層
30　明褐色土層
31　暗褐色土層：ジャリ多
32　炭層
33　暗褐色土層：ジャリ多
34　淡暗褐色土層
35　淡暗褐色土層
36　明褐色土層
37　暗褐色土層
38　明褐色土層
39　暗褐色土層：ジャリ多
40　淡明褐色土層
41　ジャリ層



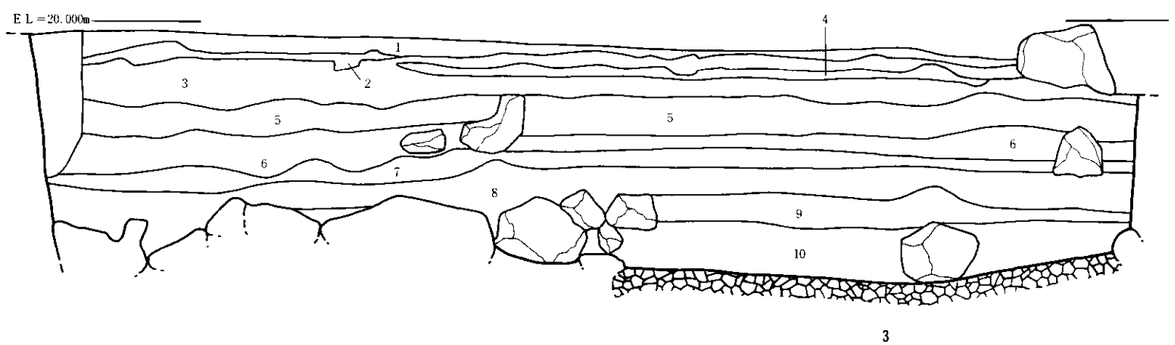
第5図　土層図1

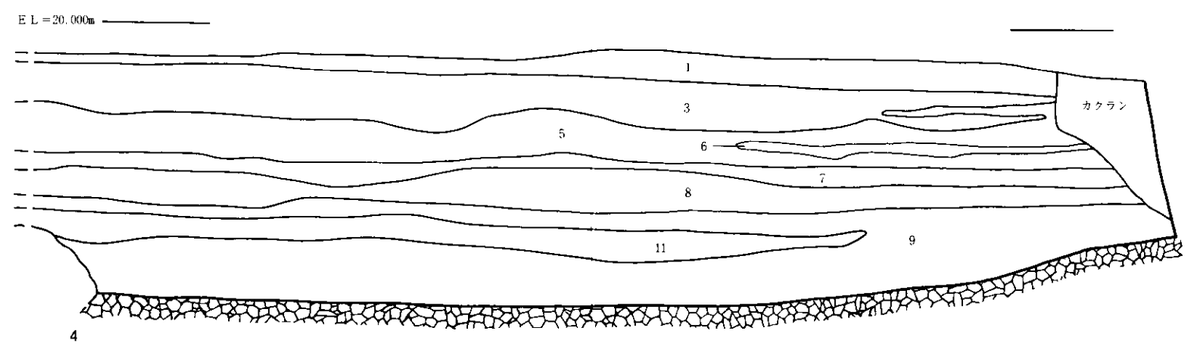


1　黒褐色土層
2　シックイ層
3　赤褐色土層
4　暗褐色土層
5　赤褐色土層
6　黄褐色土層
7　攪乱層
8　淡暗褐色土層
9　赤褐色土層
10　暗褐色土層
11　淡暗褐色土層
12　赤褐色土層
13　明褐色土層
14　暗褐色土層
15　赤褐色土層
16　淡暗褐色土層
17　明褐色土層
18　暗褐色土層
19　明褐色土層
20　暗褐色土層
21　暗褐色土層
22　明褐色土層
23　黒褐色土層
24　明褐色土層
25　暗褐色土層
26　明褐色土層
27　暗褐色土層
28　暗褐色土層
29　暗黄褐色土層
30　明褐色土層
31　暗褐色土層
32　明褐色土層
33　暗褐色土層



1～5　北壁1～5に対応
6～10　北壁8～12に対応
11　攪乱層
12　明褐色土層
13～17　北壁13～17に対応
18　暗褐色土層
19～21　明褐色土層
22　暗褐色土層
23　明褐色土層
24　明褐色土層
25～28　北壁22～24に対応
29～31・35・36　明褐色土層
32～34　北壁25～29に対応
37～40　北壁30～33に対応
41　ジャリ層



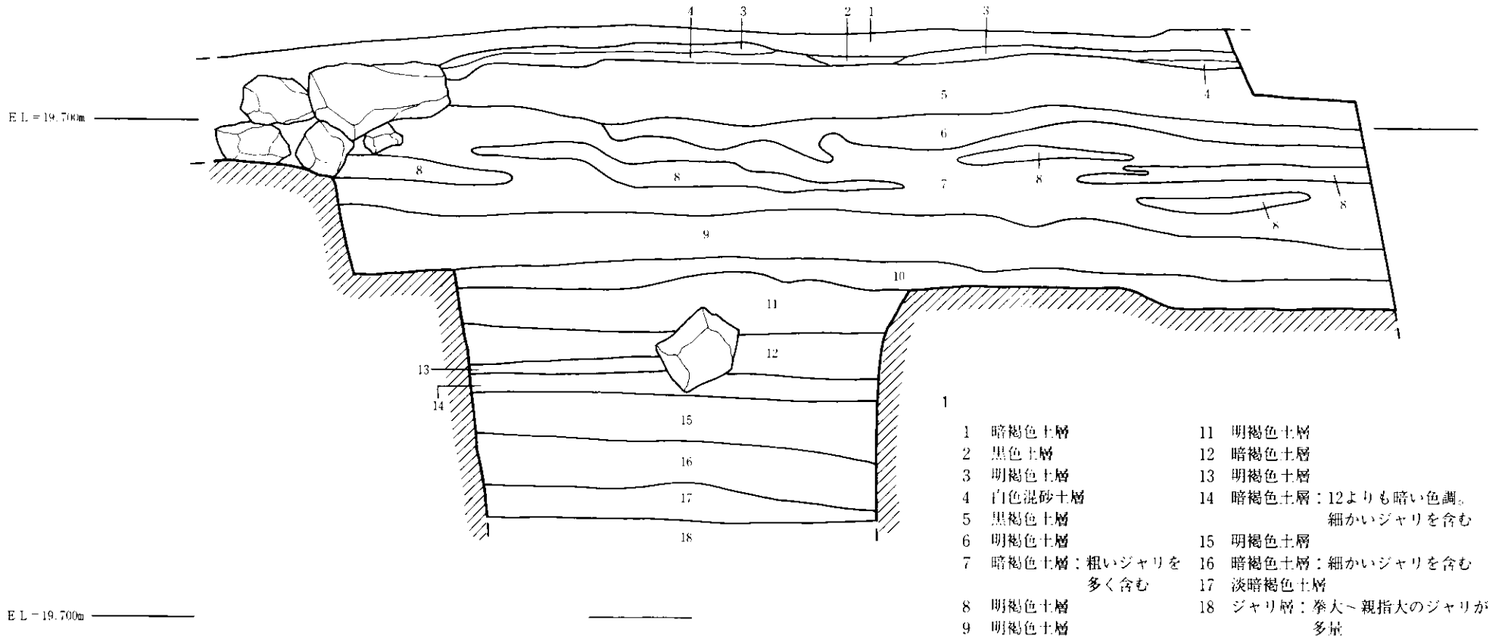


〈凡例〉
土
礫

1　明褐色土層　2　暗褐色土層　3　黒褐色土層　4　赤褐色土層
5　明褐色土層　6　暗褐色土層　7　明褐色土層　8　暗褐色土層
9　明褐色土層　10　暗褐色土層　11　明褐色土層

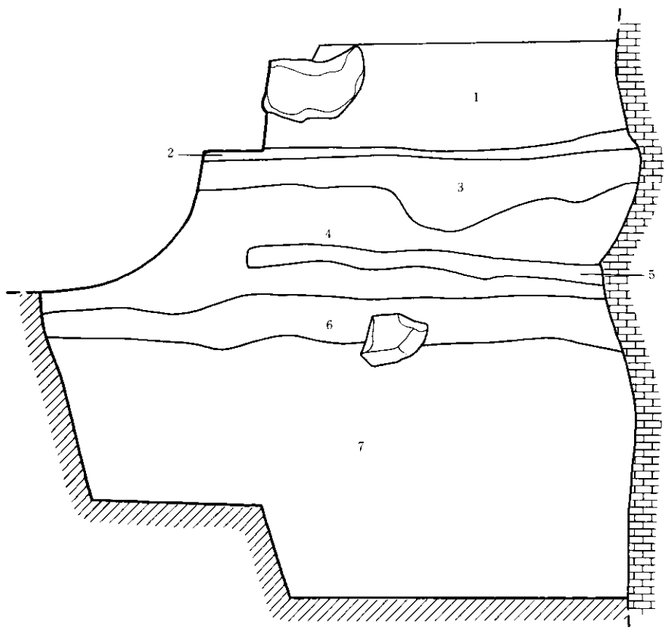
0　1m

第6図　土層図2



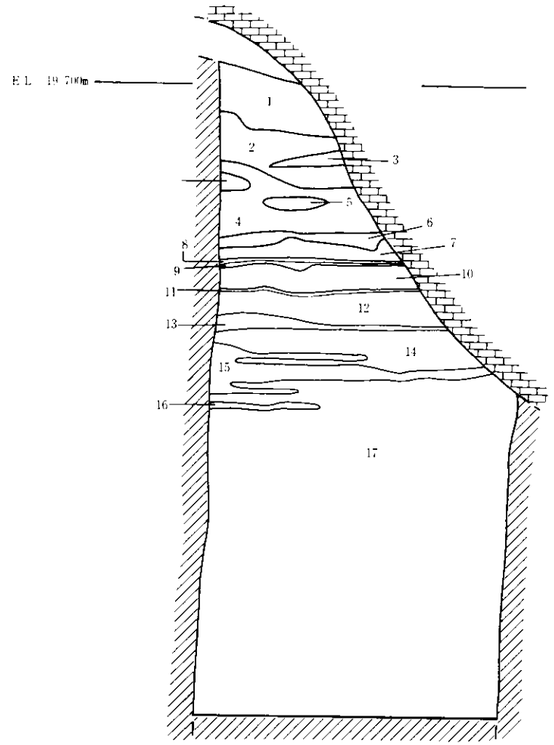
1

1　暗褐色土層
2　黒色土層
3　明褐色土層
4　白色混砂土層
5　黒褐色土層
6　明褐色土層
7　暗褐色土層：粗いジャリを多く含む
8　明褐色土層
9　明褐色土層
10　暗褐色土層：粗いジャリを含む
11　明褐色土層
12　暗褐色土層
13　明褐色土層
14　暗褐色土層：12よりも暗い色調。細かいジャリを含む
15　明褐色土層
16　暗褐色土層：細かいジャリを含む
17　淡暗褐色土層
18　ジャリ層：拳大～親指大のジャリが多量



2

1　明褐色土層（9～11に対応）
2　暗褐色土層
3　褐色土層（12に対応）
4　暗褐色土層：粗いジャリを含む（15･16に対応）
5　褐色土層
6　褐色土層：粗いジャリを含む（17に対応）
7　ジャリ層（18に対応）

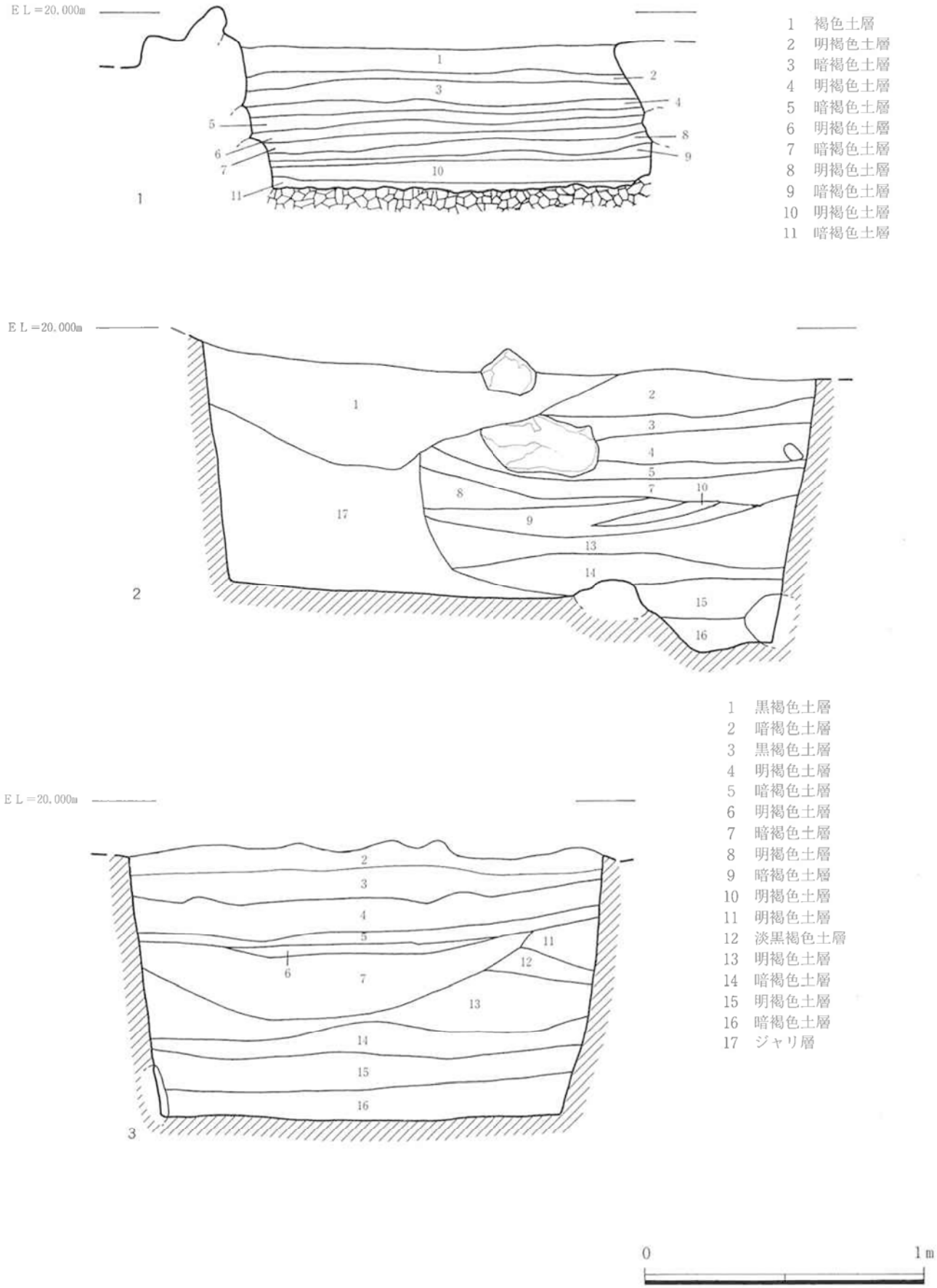


3

1　淡暗褐色土層
2　明褐色土層
3　暗褐色土層
4　暗褐色土層
5　明褐色土層
6　明褐色土層
7　暗褐色土層
8　明褐色土層
9　暗褐色土層
10　暗褐色土層
11　暗褐色土層
12　明褐色土層
13　暗褐色土層
14　明褐色土層
15　暗褐色土層
16　暗褐色土層
17　明褐色土層：マーブル状をなし分層不可

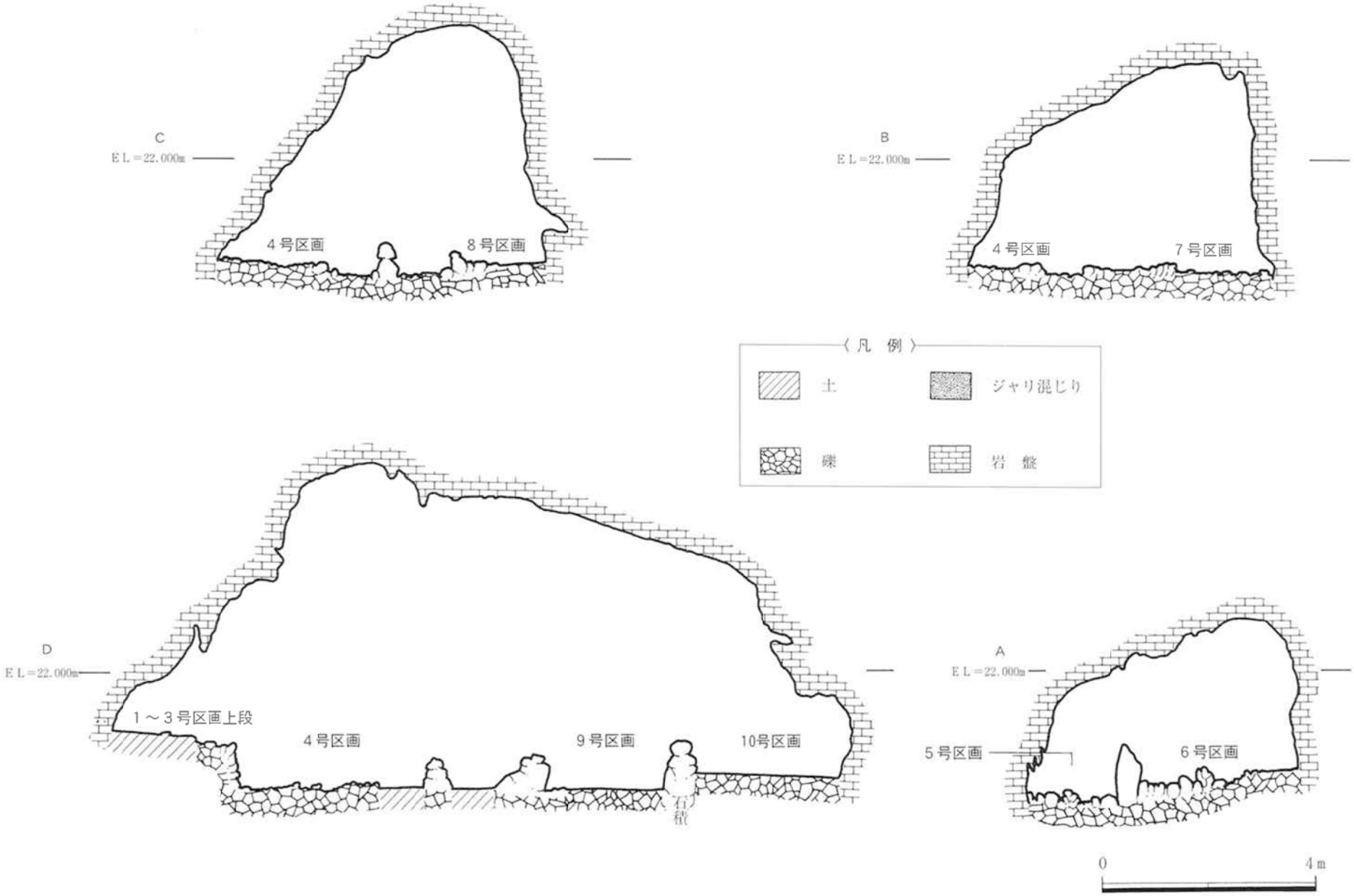
0　1　2m

第7図　土層図3


EL＝20.000m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
1　褐色土層
2　明褐色土層
3　暗褐色土層
4　明褐色土層
5　暗褐色土層
6　明褐色土層
7　暗褐色土層
8　明褐色土層
9　暗褐色土層
10　明褐色土層
11　暗褐色土層
EL＝20.000m
2
1　黒褐色土層
2　暗褐色土層
3　黒褐色土層
4　明褐色土層
5　暗褐色土層
6　明褐色土層
7　暗褐色土層
8　明褐色土層
9　暗褐色土層
10　明褐色土層
11　明褐色土層
12　淡黒褐色土層
13　明褐色土層
14　暗褐色土層
15　明褐色土層
16　暗褐色土層
17　ジャリ層
EL＝20.000m
3
0
1m

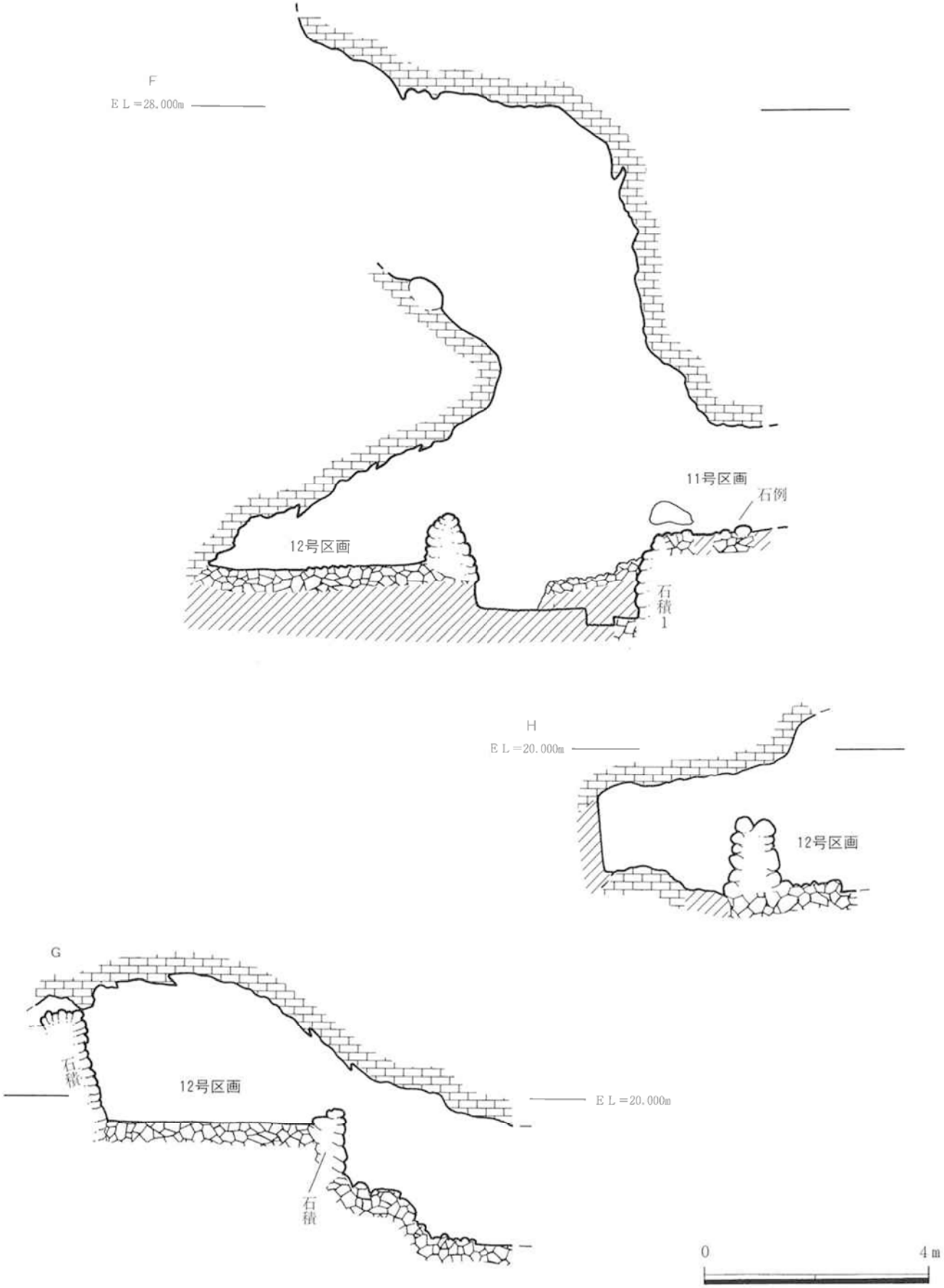
第８図　土層図４

第９図　断面図・立面図凡例

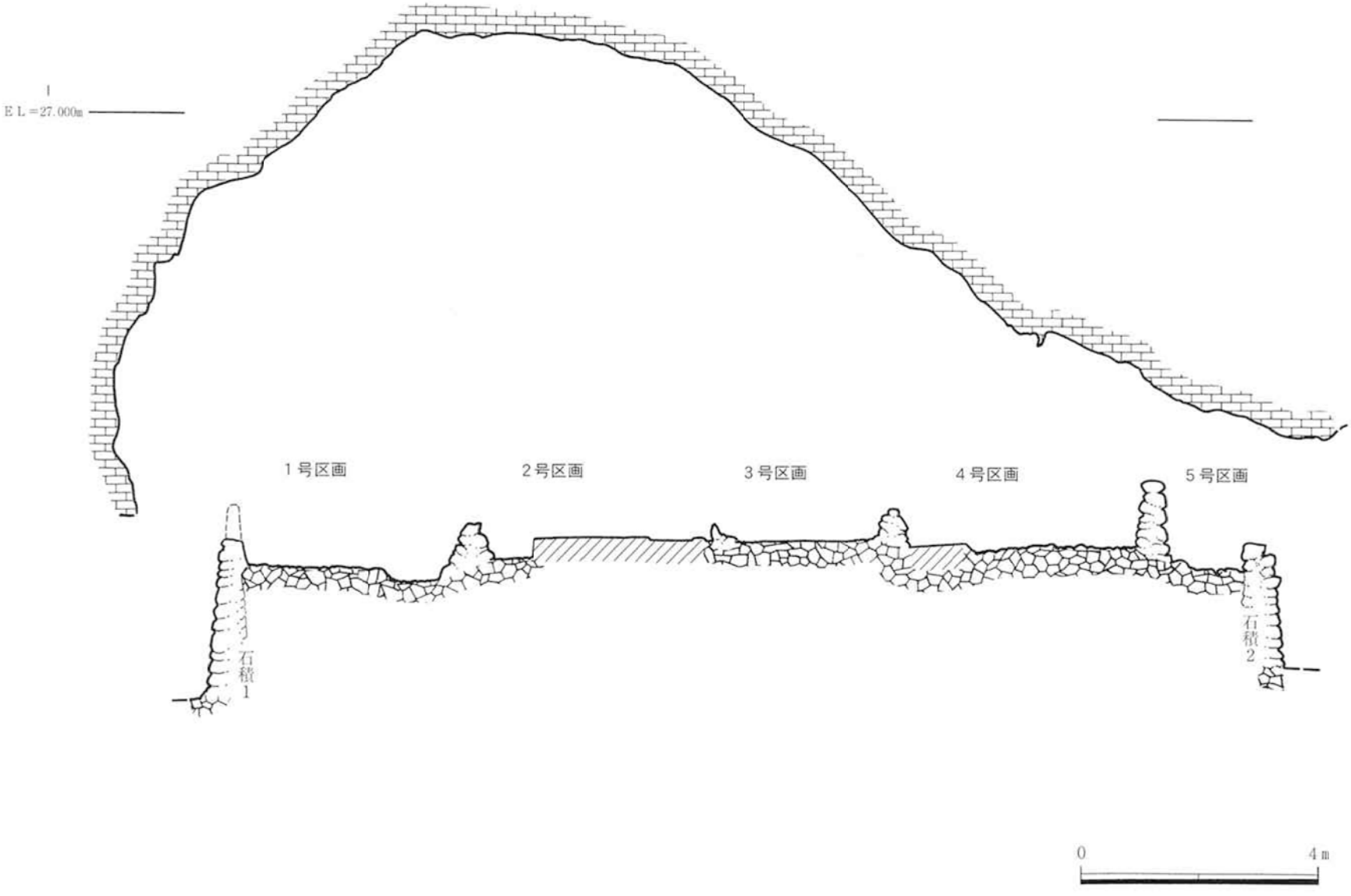


第10図　洞穴断面状況1

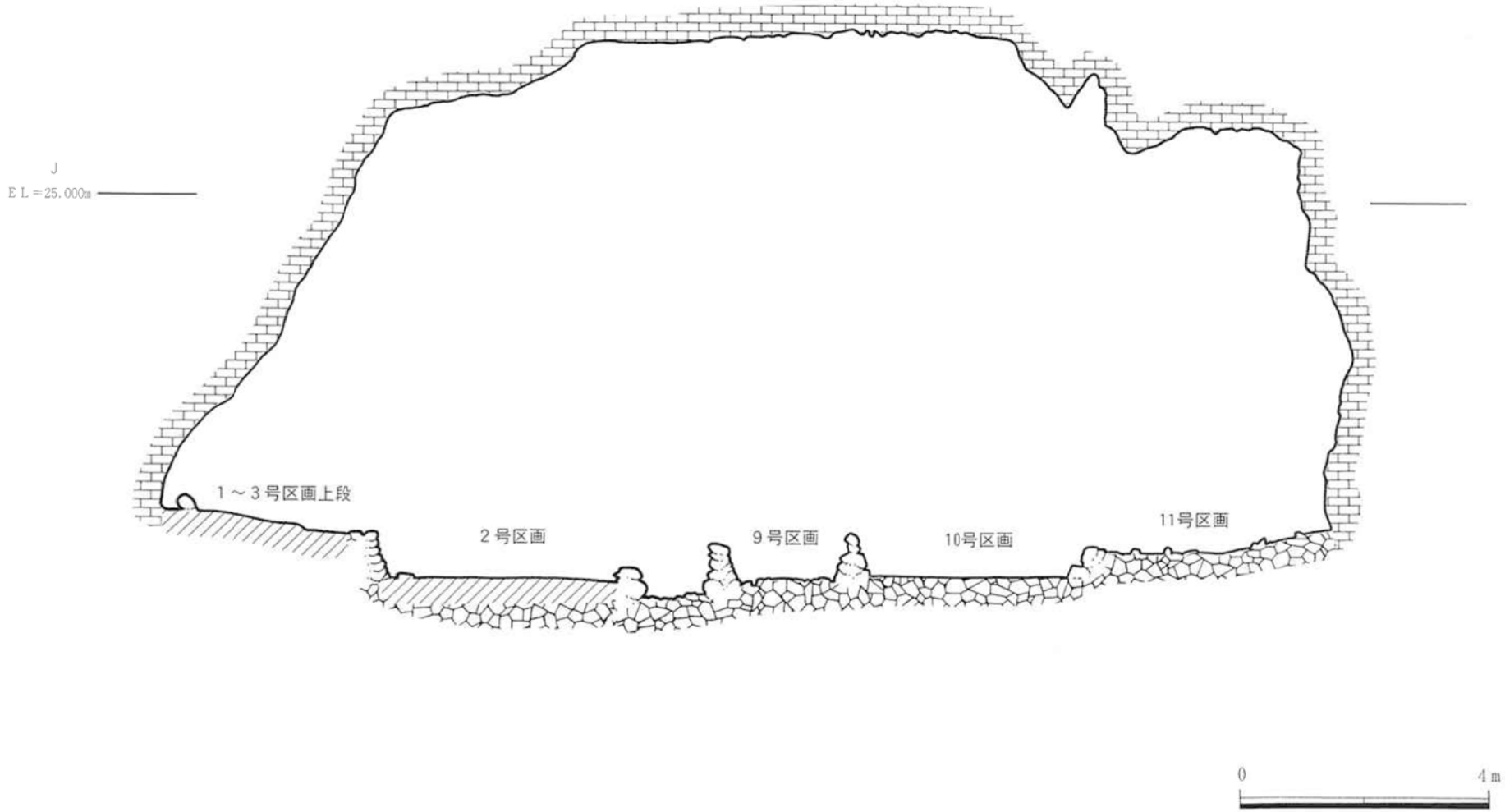
第11図　洞穴断面状況２



第12図　洞穴断面状況３

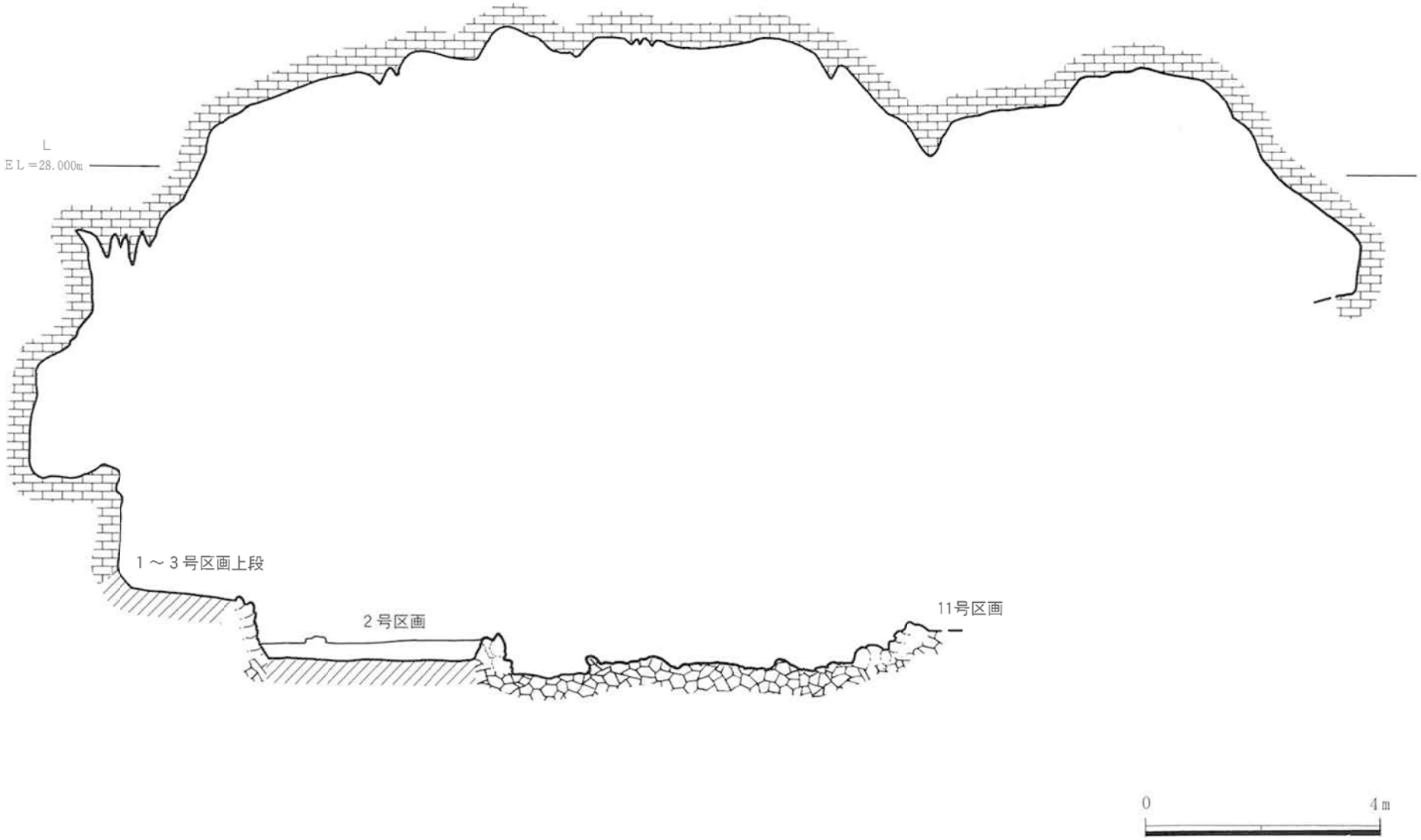


第13図　洞穴断面状況４



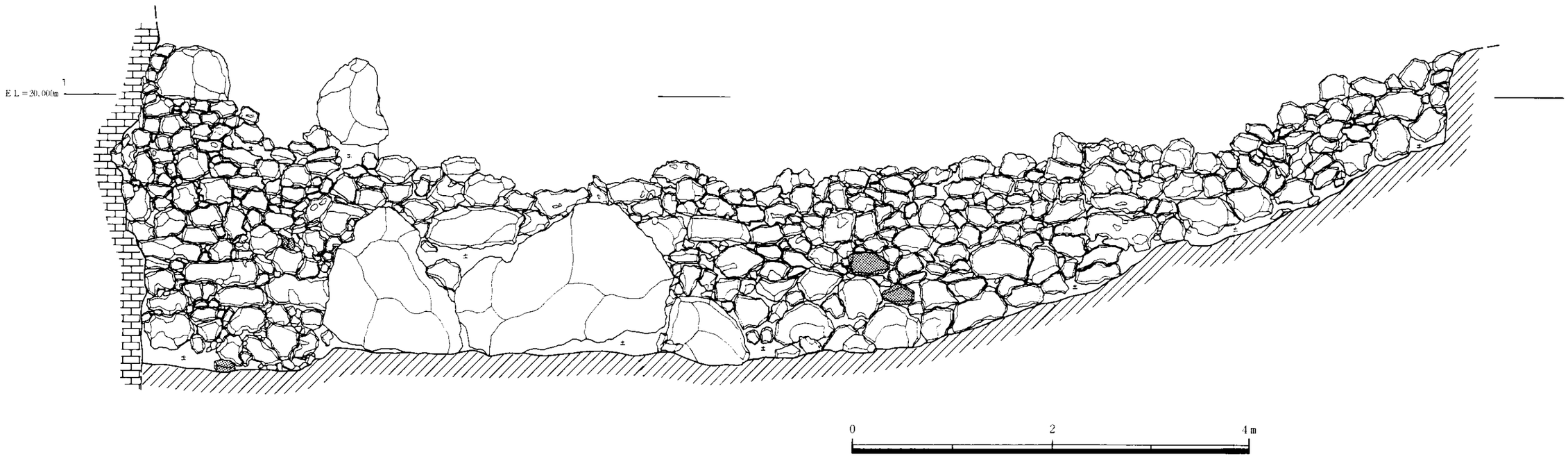
第14図　洞穴断面状況５

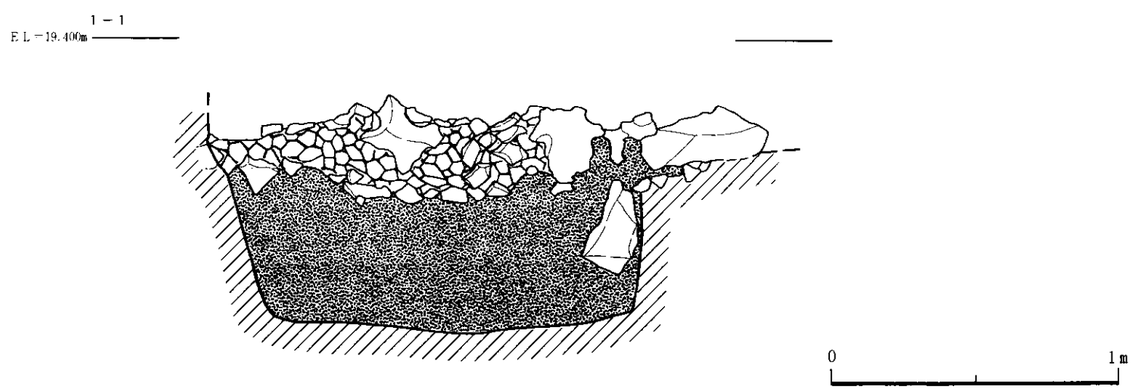
第15図　洞穴断面状況６



第16図　洞穴断面状況７

第17図　洞穴断面状況８

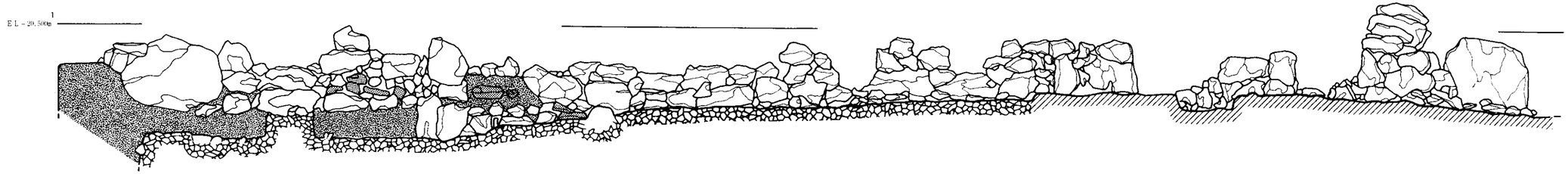


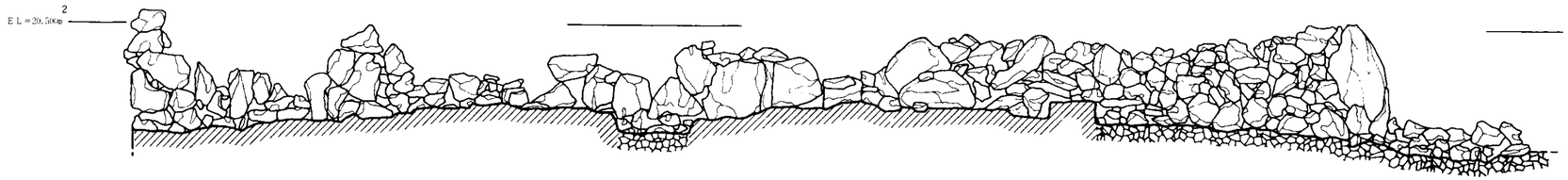


〈凡　例〉

- 岩盤
- 土
- ジャリ混じり
- 火成岩

第18図　石積み１立面図・断面図





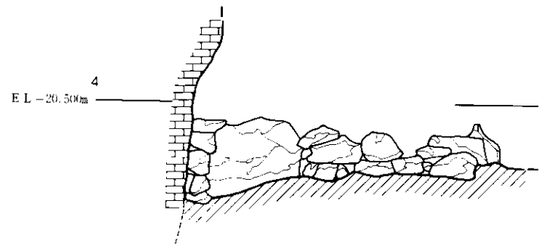
〈凡 例〉

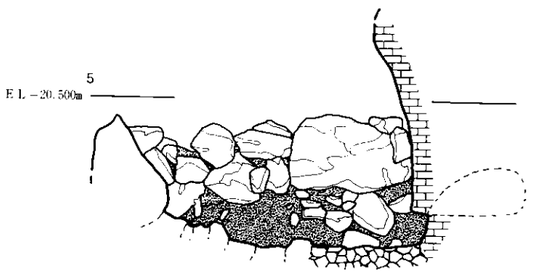
土　ジャリ混じり

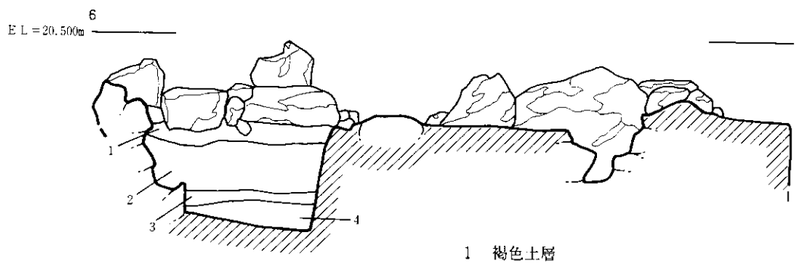
礫　火成岩

0　2　4m

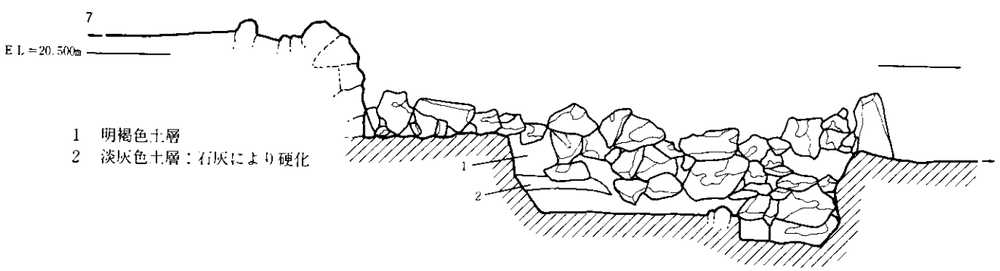
第19図　区画石積み立面図１



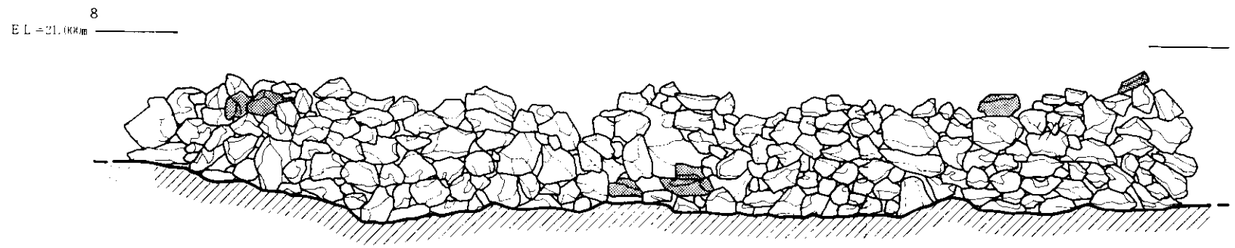


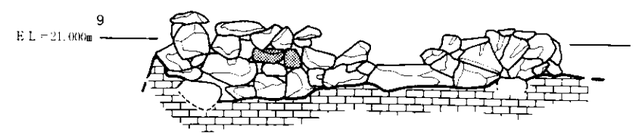


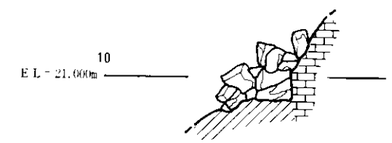
1　褐色土層
2　明褐色土層
3　暗褐色土層
4　明褐色土層

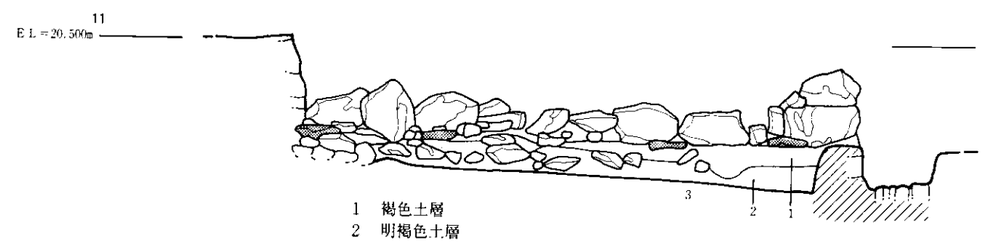


1　明褐色土層
2　淡灰色土層：石灰により硬化

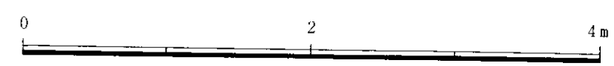




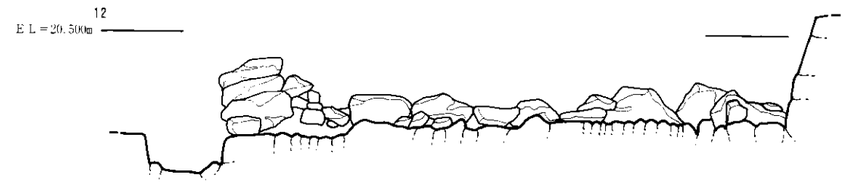


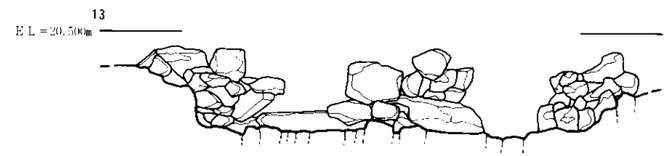


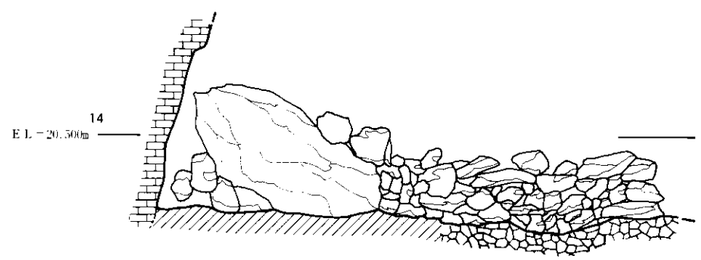
1　褐色土層
2　明褐色土層
3　コーラル層：石粉状の石灰層

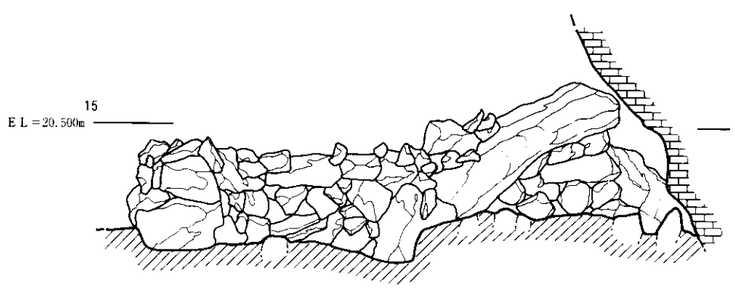


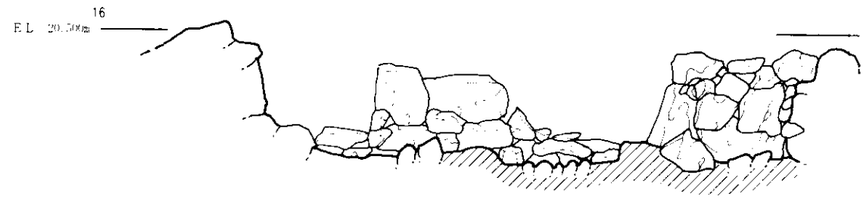
第20図　区画石積み立面図２

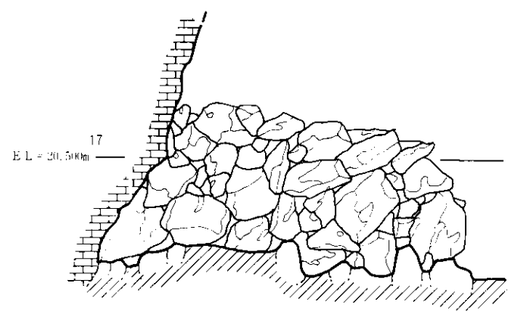


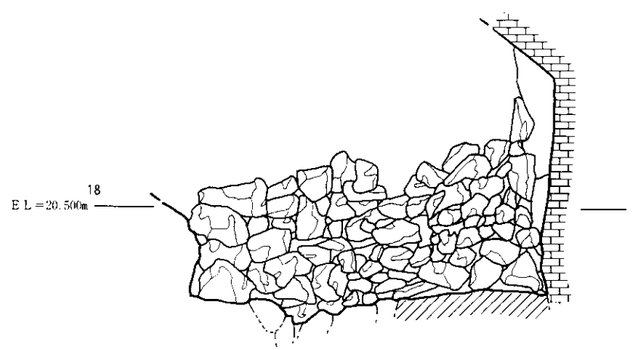


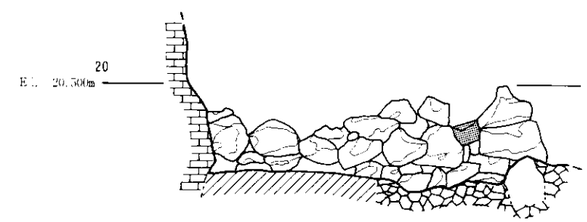


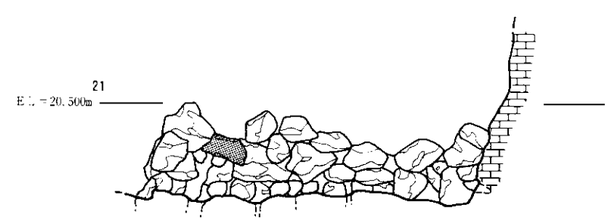




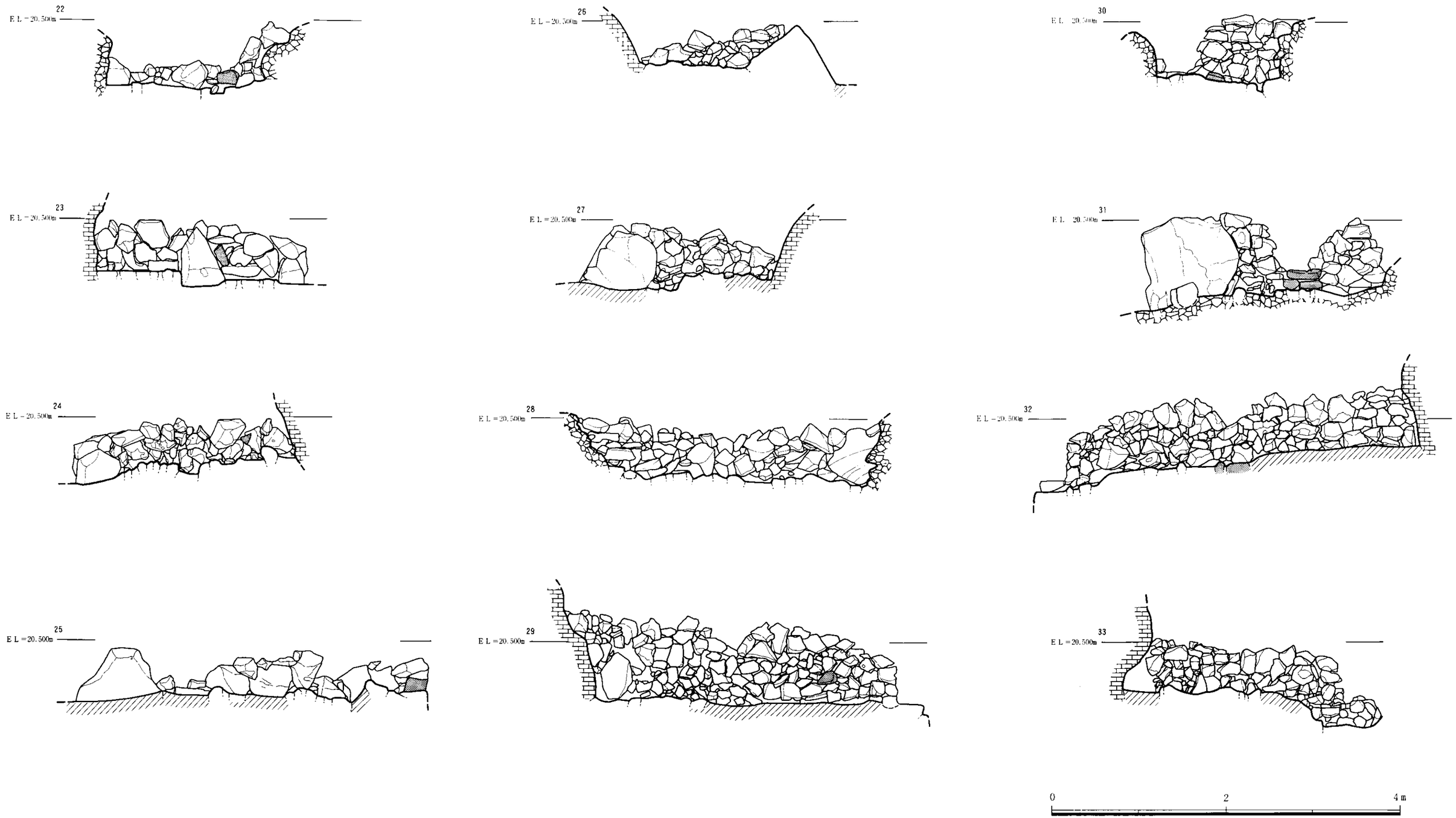




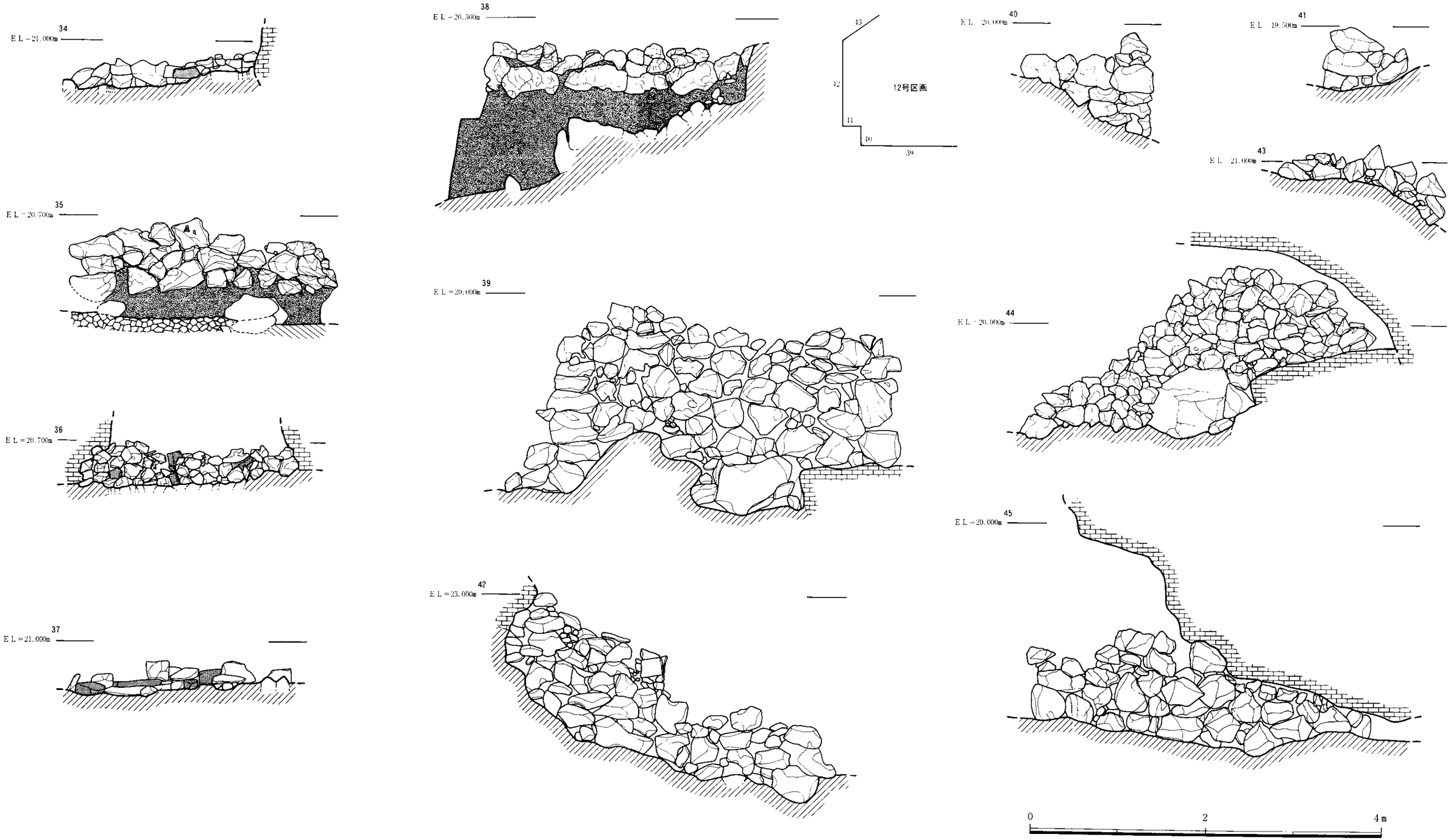




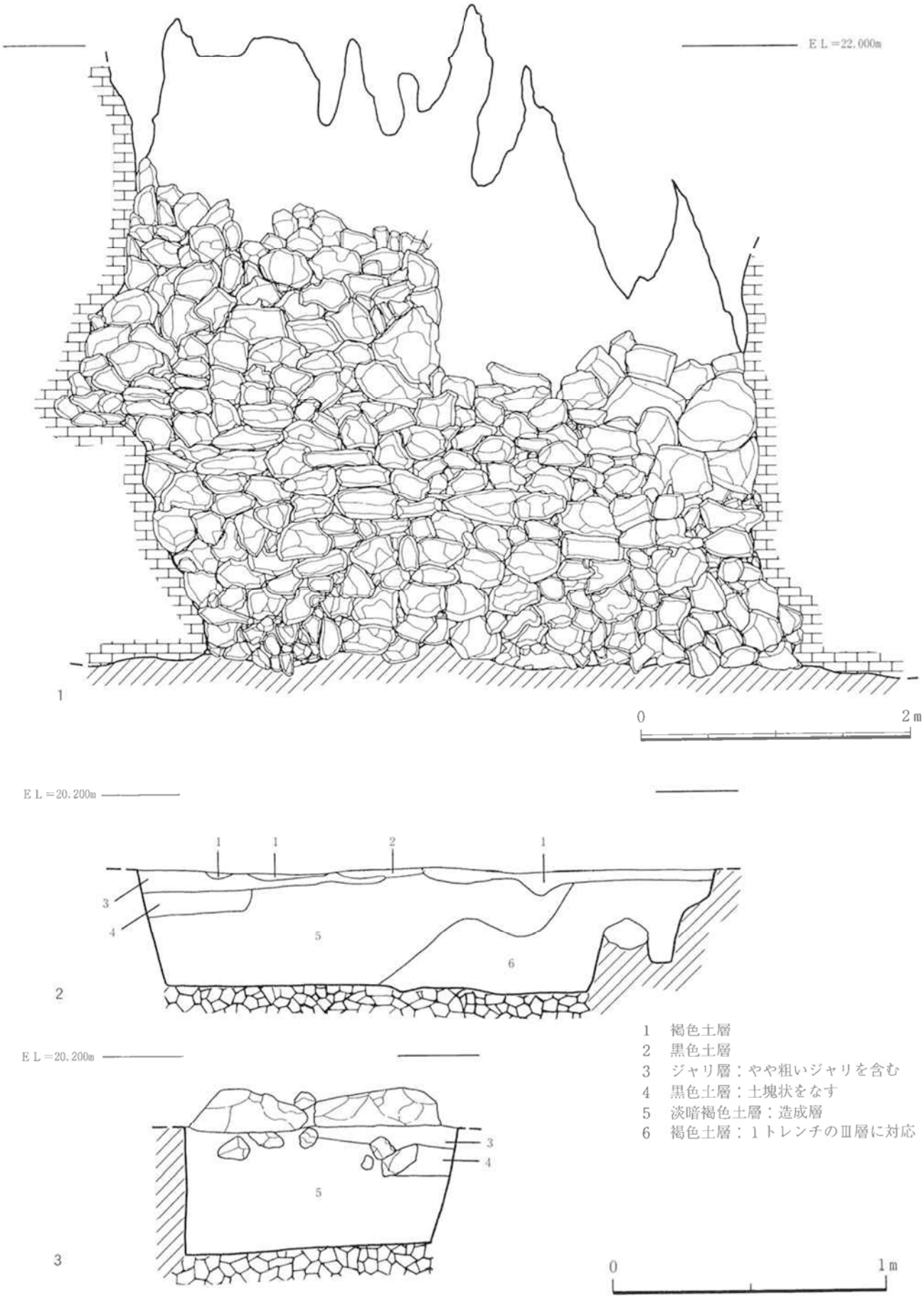
第21図　区画石積み立面図３



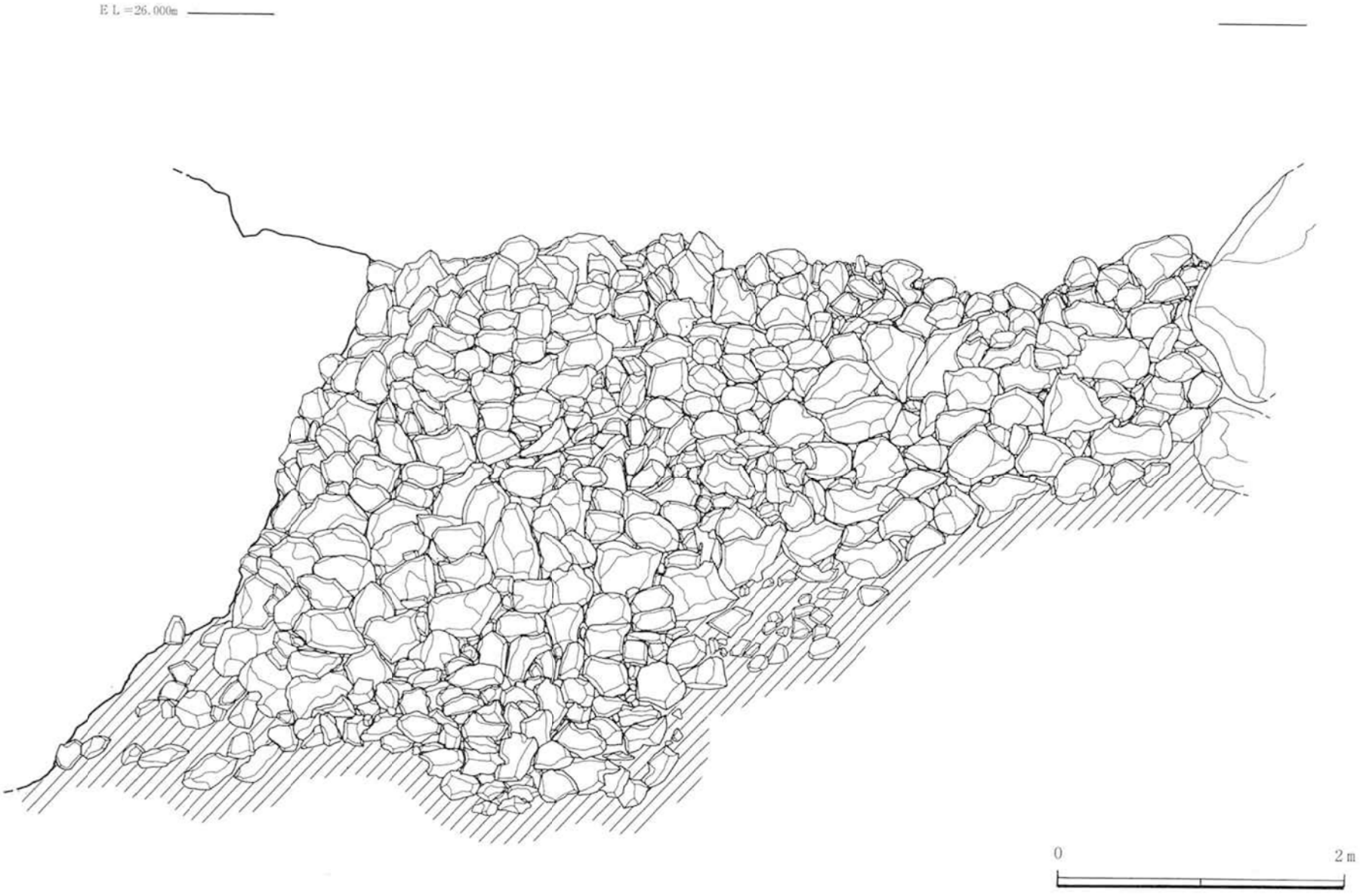
第22図　区画石積み立面図４



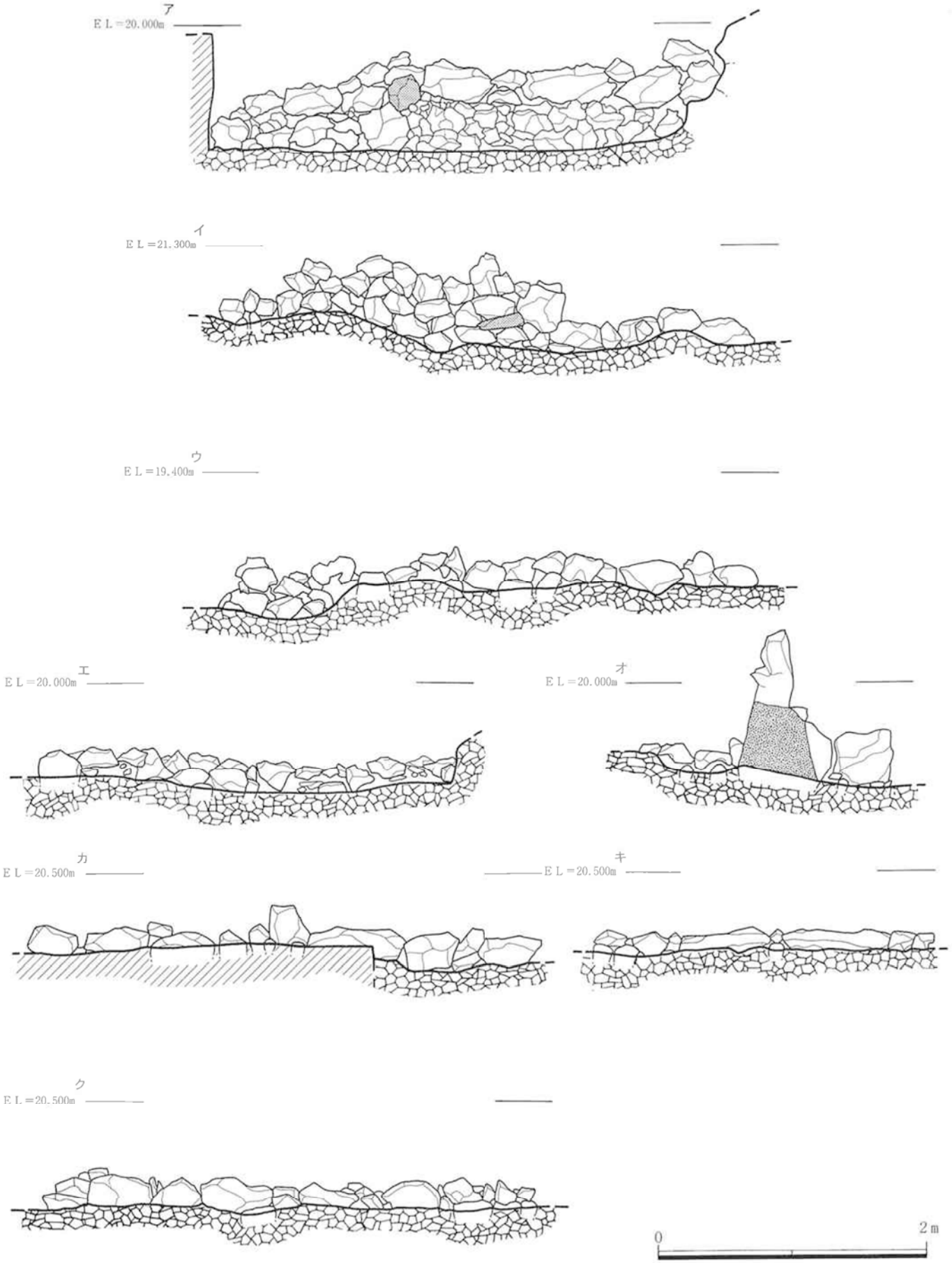
第23図　区画石積み立面図５



第24図　石積み2立面図・土層図5

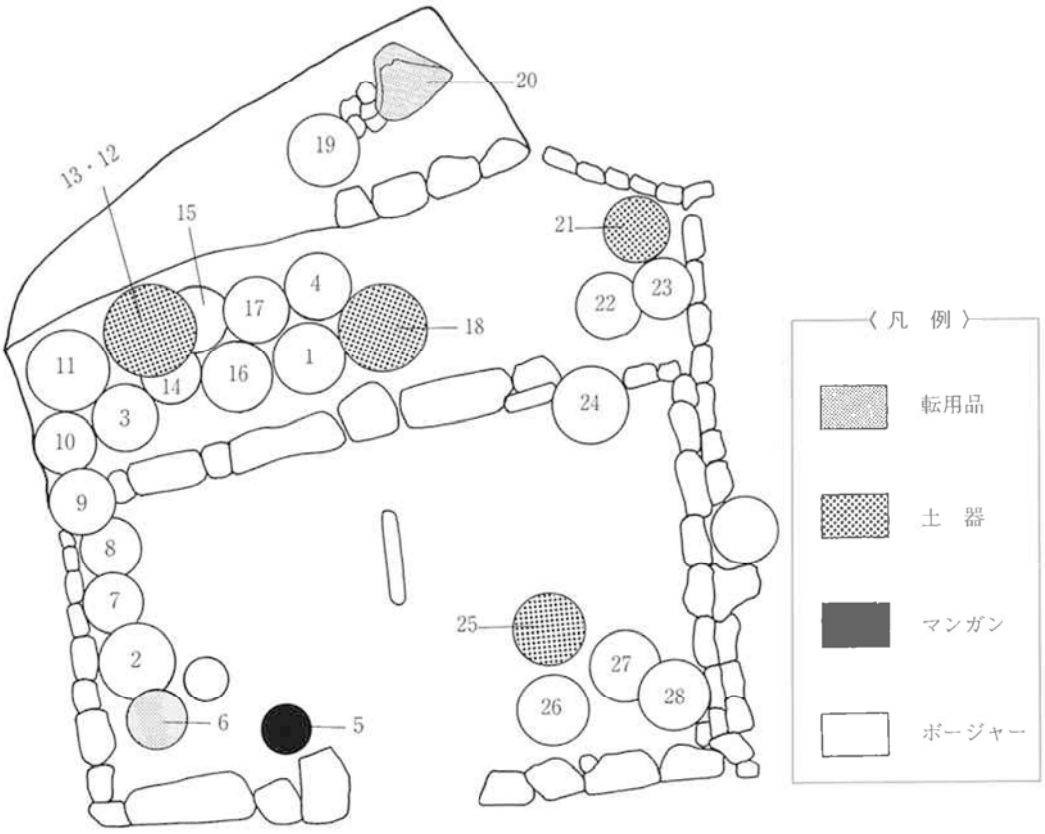


第25図　石積み３立面図

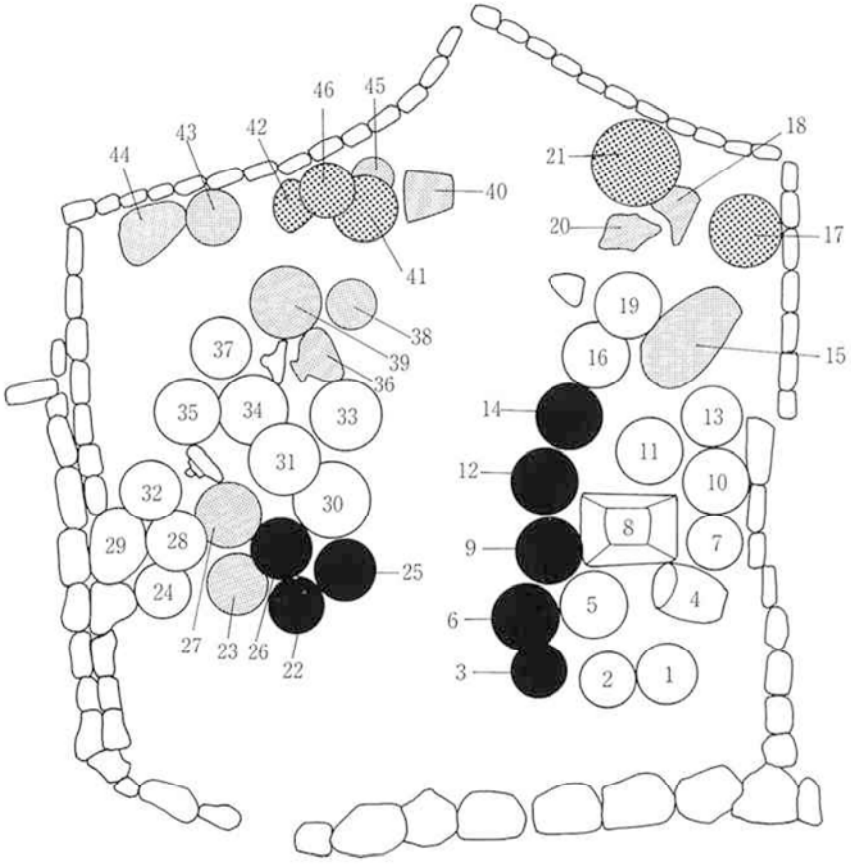

ア
EL=20.000m
イ
EL=21.300m
ウ
EL=19.400m
エ
EL=20.000m
オ
EL=20.000m
カ
EL=20.500m
キ
EL=20.500m
ク
EL=20.500m
0
2m

第26図　石列立面図

第27図　厨子配置状況（全体図）

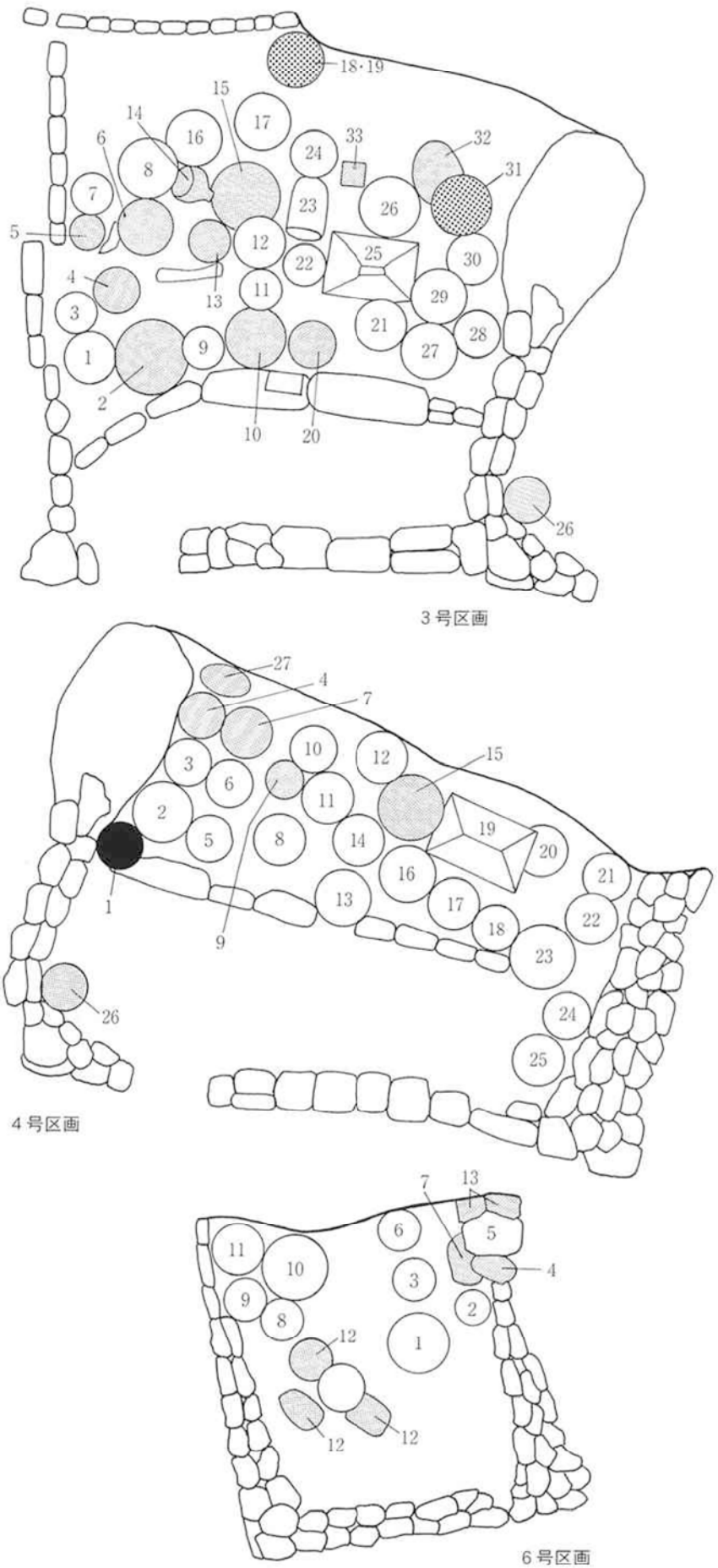


1号区画

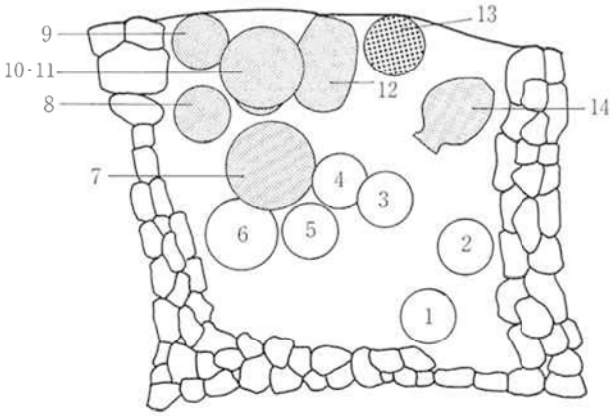


2号区画

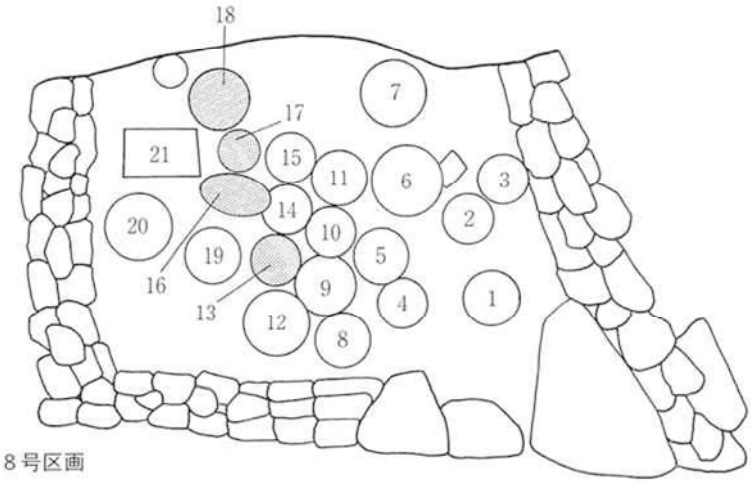
第28図　厨子配置状況（1・2号区画）



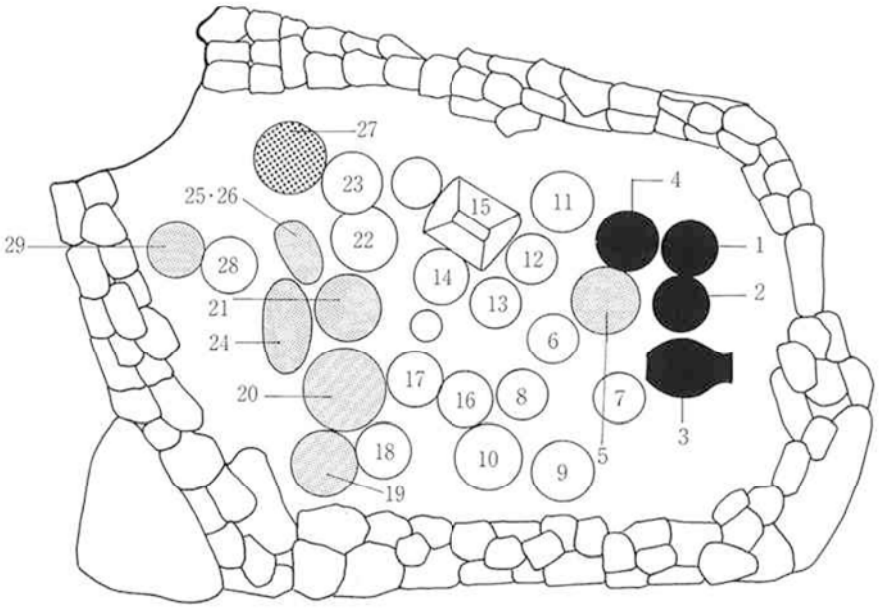
第29図　厨子配置状況（3・4・6号区画）



7号区画

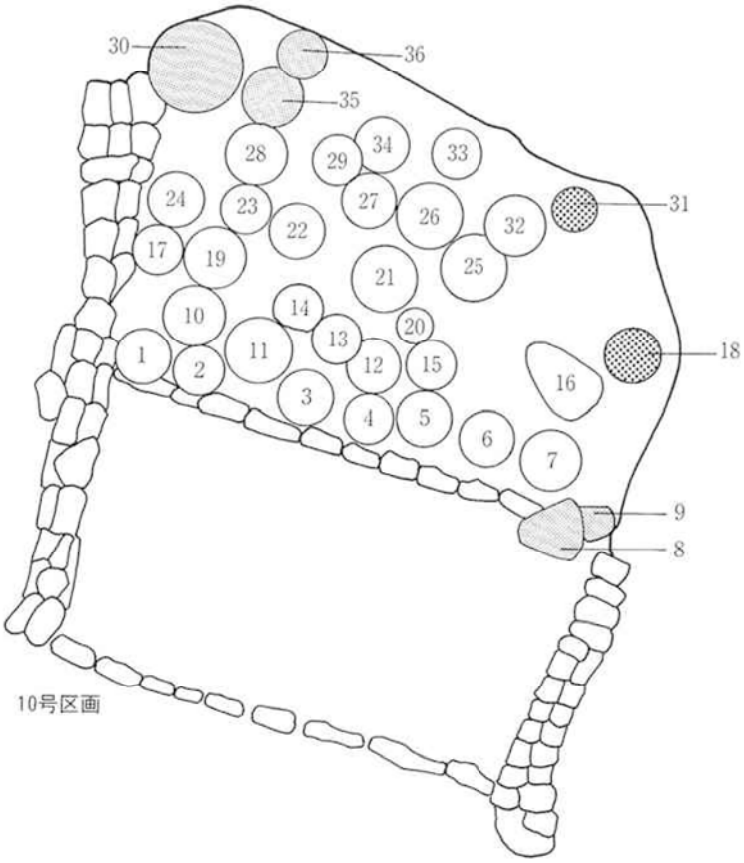


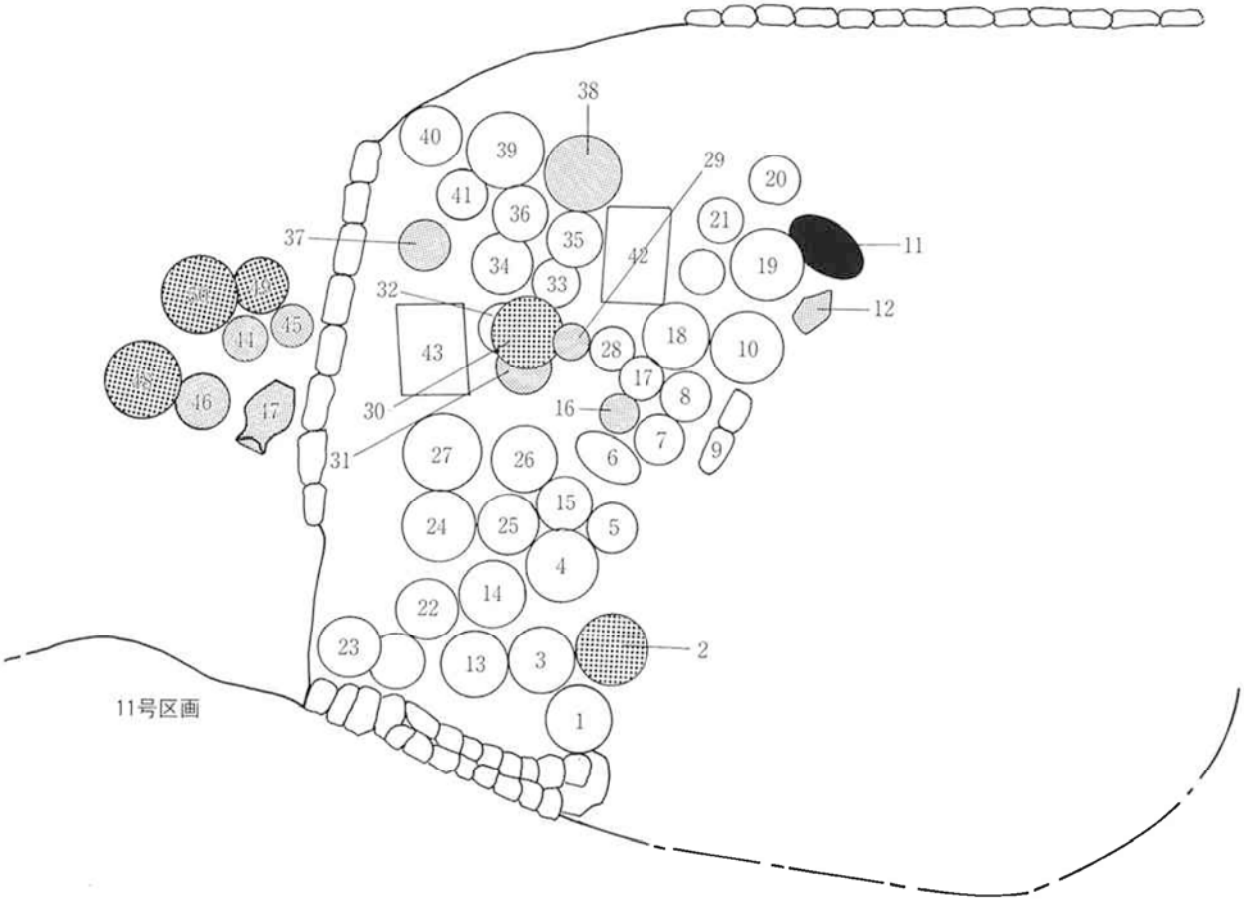
8号区画



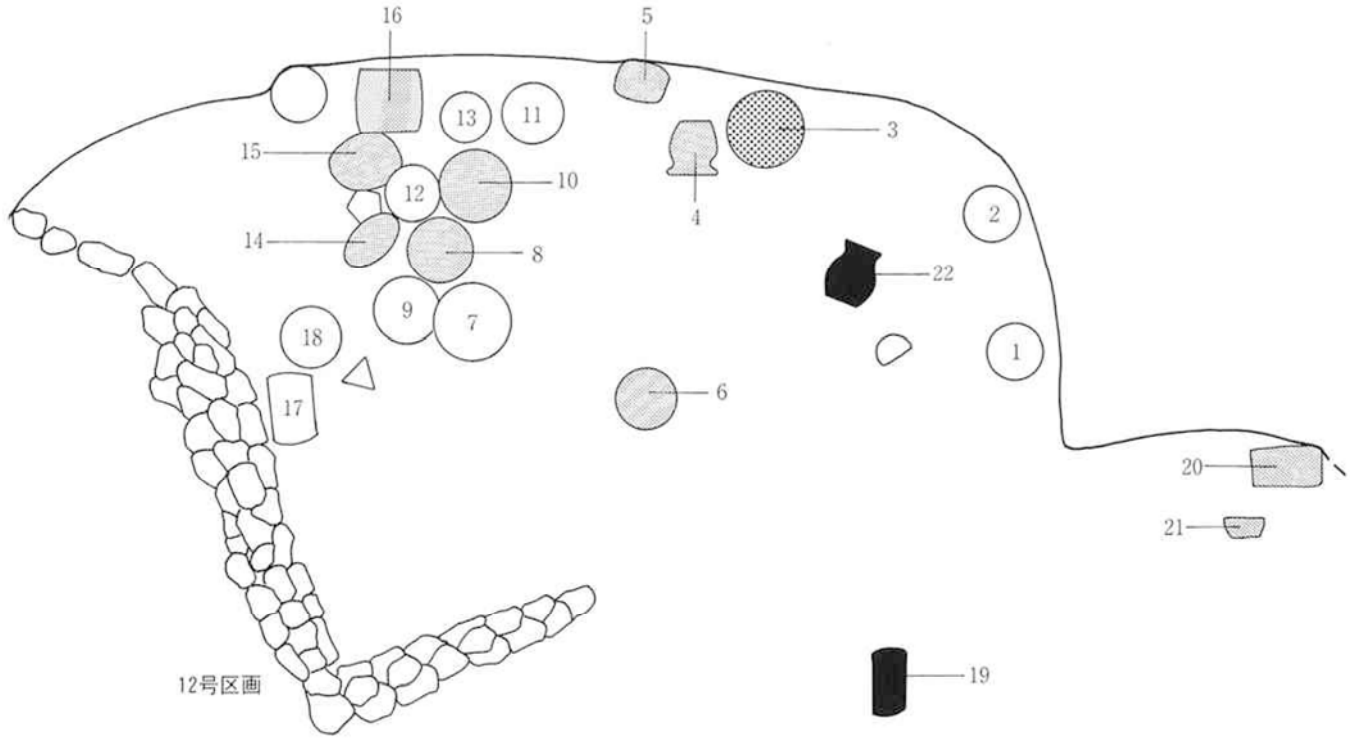
9号区画

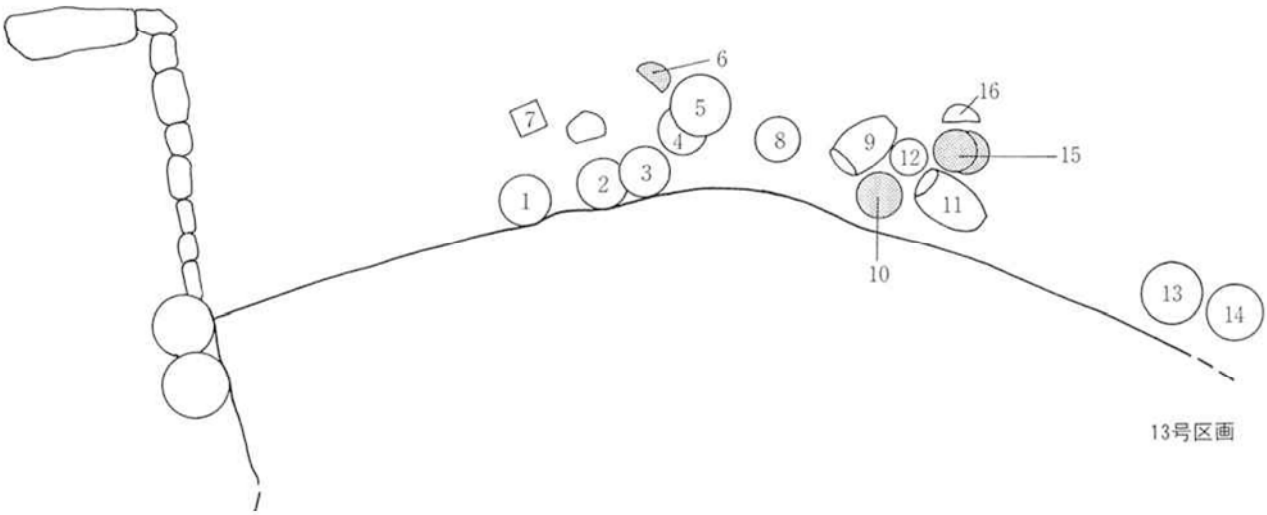
第30図　厨子配置状況（7・8・9号区画）



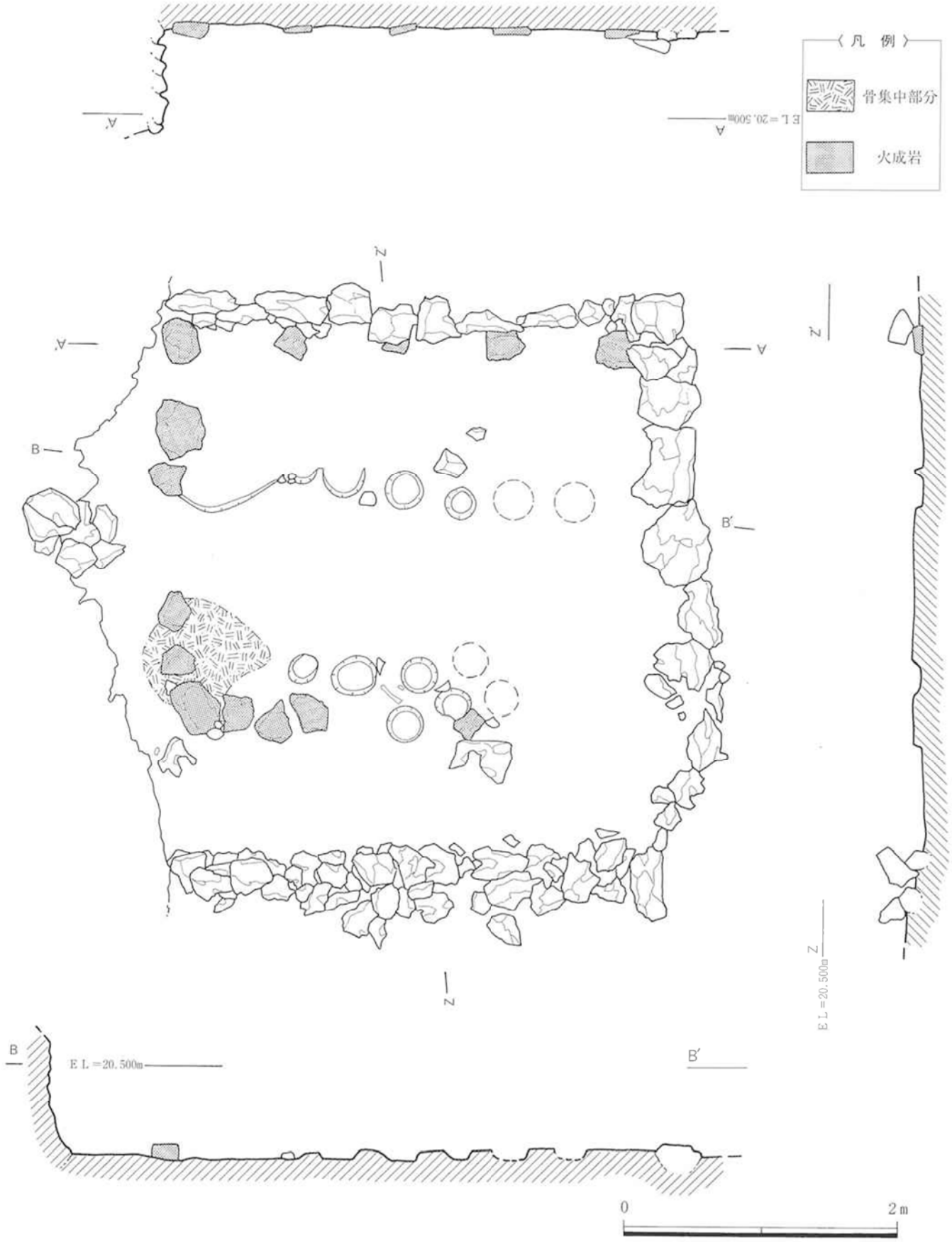


第31図　厨子配置状況（10・11号区画）

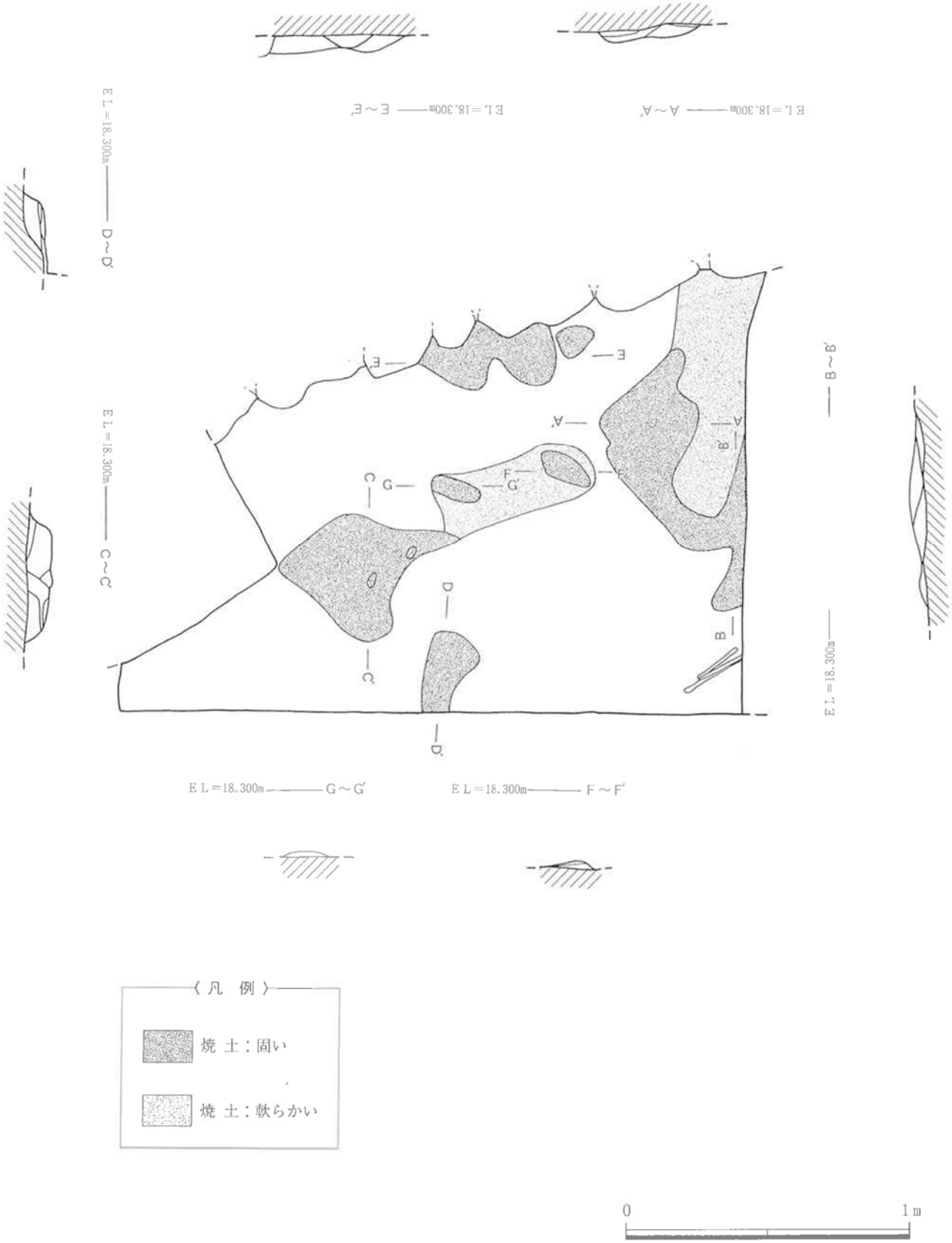




第32図　厨子配置状況（12・13号区画）

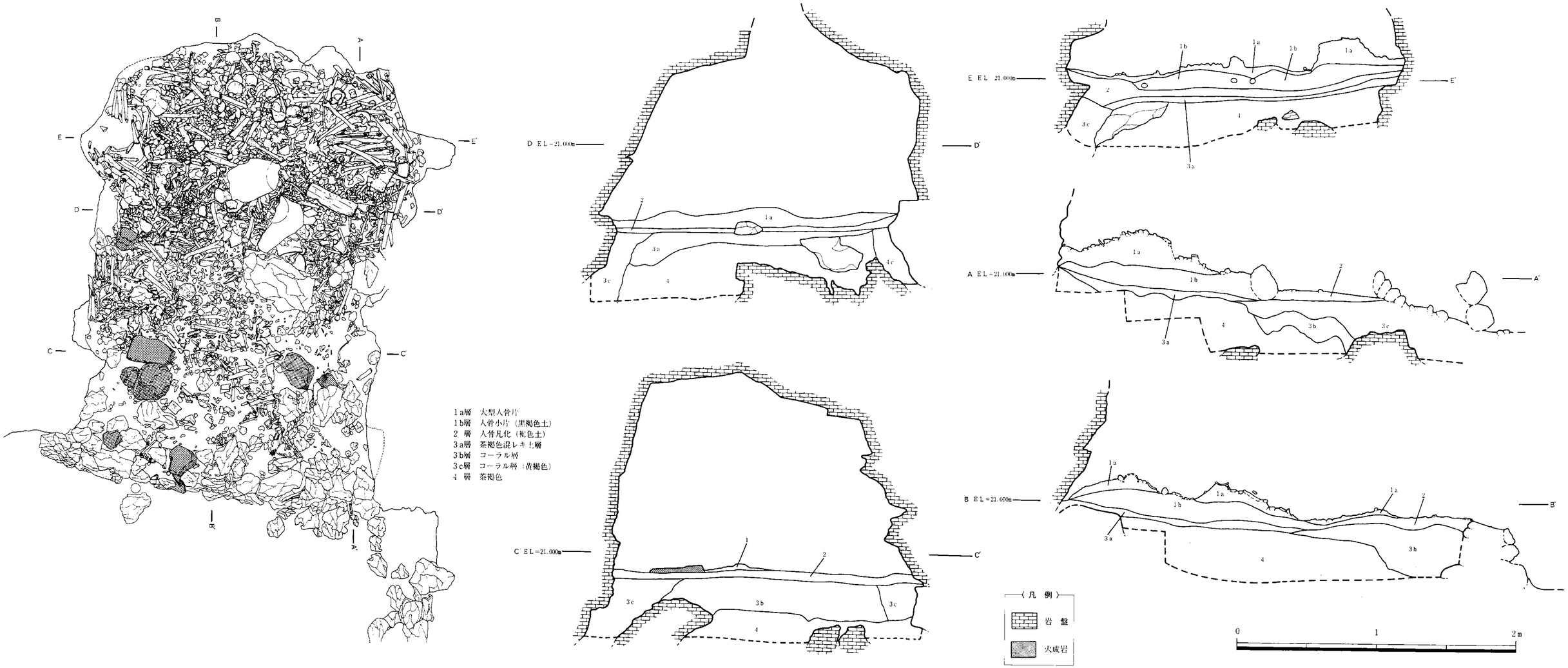


第33図　建物礎石配置状況

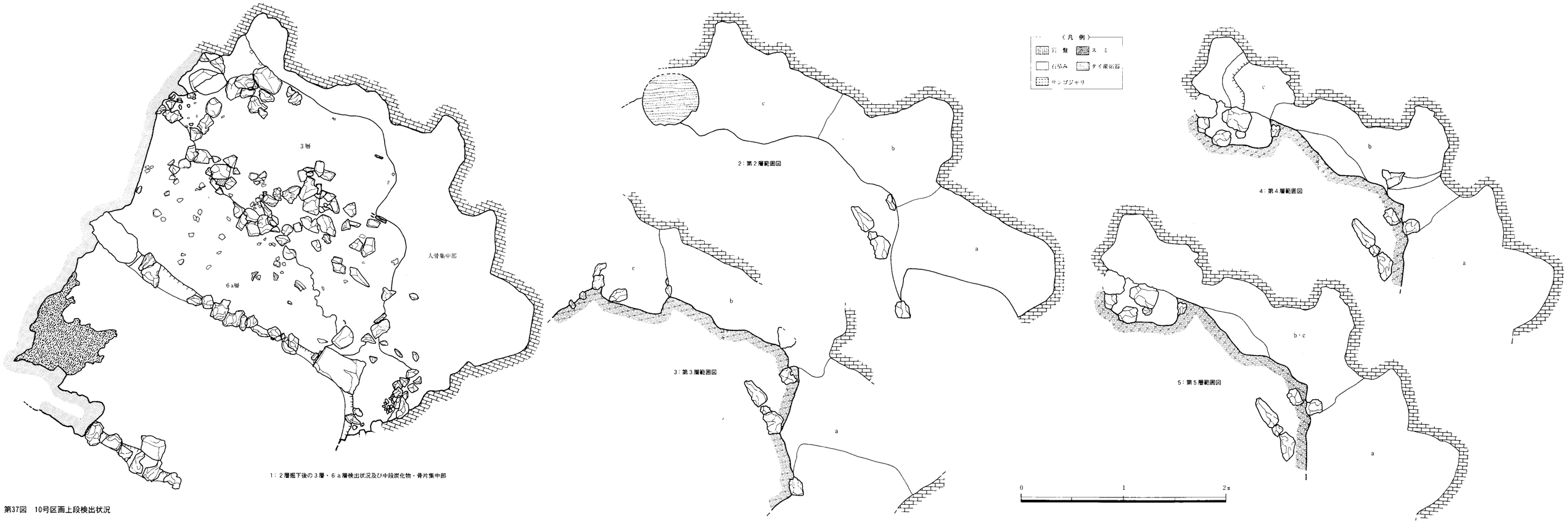

EL=18.300m A～A′
EL=18.300m E～E′
EL=18.300m D～D′
EL=18.300m C～C′
EL=18.300m B～B′
EL=18.300m G～G′
EL=18.300m F～F′
〈凡 例〉
焼 土：固い
焼 土：軟らかい
0
1m

第34図　焼土検出状況

第35図　井戸様遺構内人骨検出状況



第36図　11号区画平面図・断面図



第37図　10号区画上段検出状況

第３章　出土遺物

今回出土した遺物は、多量の厨子を中心として沖縄産陶器のほか、本土産・中国産陶磁器が多く得られた。これら陶磁器は完品もしくは完形品の遺物が多数みられるという点は特筆すべき点であり、かつ、一括に近い形で出土している。また、後期土器や石器などの先史時代遺物や、貝製品、木製品といった遺物が得られている。

今回得られた遺物の中で最も多い遺物は厨子で、特に「ボージャー厨子」と称するものが最も多い。厨子には沖縄産陶器や褐釉陶器を利用した転用品もみられる。沖縄産陶器や褐釉陶器で扱ったものの多くは転用品だが、全形を伺うことのできる資料が多く、編年上でも良好な資料と考え、各節で取り上げた。

遺物の接合状況は複雑で、厨子内と土中からのもので接合可能な資料のほか、ヤッチのガマと洞穴北側斜面やカンジン原古墓群の１～４号墓前面平場の散乱遺物と接合可能なものがみられる。土中出土でも、層の上下での接合が著しいものがあり、遺跡の成立、土層の堆積状況を考える上で検討を要する。

第１節　厨子

厨子は専用器と転用品がある。土器を納骨用に用いたものも専用器と考えられるが、今回の調査では納骨を行った土器がわずかであることや、転用した可能性も考えられることから独立して取り上げた。銘書を記した例は少なく、量にして１割にも満たない。２・４・９号区画に記銘厨子が集中するといえる。年号を記した例として、第53図４「乾隆五拾六年子（亥ヵ）ノ七月十一日西銘大掟仲□□（村渠）仁屋」がある。第42図１は「山城掟山里にや」の釘彫りを記す。また、炭で「L」（第44図３）、「ψ」（第53図４）字状などの記号（家判？）を記したものがある。

１　専用器

専用器はボージャー厨子がほとんどを占め、全体の約６割にあたる。その他、マンガン掛け厨子や家形がある。ここでは分類を次のように行う。

- 厨子
  - 専用器
    - A：家形
      - Ⅰ：切り妻
      - Ⅱ：寄せ棟
      - Ⅲ：入母屋
    - B：甕形
      - Ⅰ：ボージャー
        - １：肩が張る
        - ２：腹が出る
        - ３：スマート
        - ４：その他
      - Ⅱ：マンガン掛け
        - １：頸部が明瞭
        - ２：頸部が弱い
  - 転用品

今回得られた厨子は甕形がほとんどで、家形は極めて少ない。

家形は木製、石製、陶製がみられ、陶製が若干多い。ヤッチのガマで得られた陶製家形は赤焼のみで、施釉のものはみられない。屋根の形状は上記の３類がみられ、赤焼は寄棟（第40図１・２）・入母屋（同図３・４）で、石製も寄棟（第39図１・２など）・入母屋（同図５・６）の両方がある。木製（第38図）は屋根は残っていないが、残欠や宜野座村古墓の事例（宜野座村教委1982）から考えて切妻になろう。文様は、第39図５・６は朱彩による区画と朱・墨による花瓶を描いている。第40図３・４は墨による区画や蓮華文がみられ、本来は朱などの色も用いられていたようである。

甕形で主体をなすⅠ類は「ボージャー厨子」と称されるもので、卵形の器形をなし口唇部が紡錘形あるいは隅丸方形に肥厚するタイプである。分類は『銘苅原古墓群』Ⅰに従う。まず、表に示したように胴部の張りによって３つに分類が可能であり、さらにサイズで、ア：大きさが50cm前後の中型、イ：大きさが60cm前後の大型、ウ：大きさが40cm前後、あるいはそれ以下の小型に３分でき、中型が多い。また、口縁部肥厚の形や屈曲の具合、眉の形態、文様といった要素での分類が可能であるが、出土が多量であるため細分類には至らなかった。

把握できた分をあげると、口縁部肥厚は丸みを帯たものと角ばったもので、さらに厚くつくるものと薄いものに分かれる。屈曲は肥厚が立ち上るものと、内傾するものに分かれ、後者の肥厚は薄手のものが多く、つくりも全体的に雑である。眉は家の形を忠実に模したものと簡略化したものに大別できる。後者はさらに眉の突出が強

いものと弱いものがみられる。また、眉の孔は、方形と円形があり、これらが組み合わさる。眉のつくりが雑なほど孔の形成も雑であるといえる。

文様は蓮華文を中心とした沈線文で、法師の貼り付け文が若干みられる。第47図７は文様が繁多に描かれ、稚拙な人物文などを描く。口縁部には「中城□□／□□」、「正月／二月／…」などの文字がみられる。

ボージャー厨子の分類中、その他としたものは、形態的にはボージャー厨子に含まれるものの若干異なるものである。第51図５はボージャー厨子の雰囲気からは若干異なり、同図１・２は甕をボージャー厨子に作り直した観がある。また、同図３は口縁肥厚部を方形につくり次のマンガン掛け厨子に似る。

蓋は笠状の形態に宝殊がつくものとつかないものに分かれ、宝珠は頂部が尖るものと丸みを帯るものに分けられる。宝珠形をA、饅頭形をB、無しをCとした。前者は内部が中空、後者はそうでないという違いもある。さらに、宝珠の下に台が付くものがあり、有りをa、無しをbとした。

Ⅱ類としたものは「マンガン掛け厨子」と称されるもので、器表面にマンガン釉を施しボージャー厨子と異なり頸部を形成する（金武1998）。今回は頸部の形成の度合いによって分類した。まず、頸部が折れるもので、さらに頸部が直立するもの（第53図）、外に開くもの（第54図）に分けられる。頸部が弱いものは、頸の折れがルーズなもので、第55図９のようにさらに頸部の弱いものに分けられる。その他に脚が付くもの（第55図６）ヤッチのガマでは庇付きのタイプはみられない。

サイズによる分類はボージャー厨子と同様に、ア：大きさが50cm前後の中型、イ：大きさが60cm前後の大型、ウ：大きさが40cm前後、あるいはそれ以下の小型に３分でき、大型のタイプが多い。また、口縁肥厚部は中村愿氏による分類（中村1989）に従いa：方形、b：三角形、c：バチ形と加えてd：丸形に分けられる。

マンガン掛け厨子の文様は、沈線と貼付文があり、ヤッチのガマでは沈線による文様が多い。文様構成は蓮華文を中心に、幾可学文などがある。正面の屋門はいくつかのバリエーションがあり、第53図５のようなしっかりとしたつくりのものと、同図３のようにくずれたものに大別できる。第55図９は屋門が省略されている。

2　転用品

転用品は日用雑器の壺や甕などを二次利用したものである。納骨用に用いるため、口縁部や底部などを打ち欠いたり、横倒しにするなどしている。銘書は第56図３にみられるが、本来は別個体のものであろう。第57図３は釘彫りの蓮華文がみられる。転用する際に施したものであろう。

使用方法は、現状のまま用いる（打割しない）もの、打割するものがある。ほとんどは後者であるが、第57図１のように手を加えていないものがある。また、本来のとおり立てて使用する、倒置する（横倒しにする、天地逆にする）というパターンがみられる。同図３・４は横倒し、第56図６・７は天地逆である。

打割した場合は、隙間から骨がこぼれ落ちないように蓋をするものがある。第56図７は沖縄産陶器を胴部から上下に分離させ、口縁部を下にして白磁碗で蓋をしたもの、同図８は同じく褐釉陶器を口縁部を下にし、底部で蓋をしたものである。同図５は胴下半部を打割し、別個体の胴部片で穴を塞いだものである。

専用器と同じく蓋を伴う例があり、第56図２は摺鉢を、同図４はボージャー厨子の蓋を用いている。

3　土器

いわゆる「宮古式土器」や「パナリ焼」に類するもので、壺形と鍋形が得られた。

第58図１～８は宮古式土器で、壺と甕が得られた。壺はサイズや器形により分類が可能である。壺形は肩部が張るものと、胴部が張るものに大別でき、さらに口縁部が外反するものと直立するものに分けられる。大きさは40cm台と、30cm台のものがみられる。鍋形としたものはグスク土器にみられる鍋形に近く、口径と器高が等しいかそれに近い器形のものである。今回得られたものは口径24.3cmと小型である。前庭部石灰岩崩落より出土。

同図８はパナリ焼で、宮古式に比して数が少ない。口径が壺形としては大きく、頸部が長い。器壁は1.5cmと厚ぼったいつくりで、混和材として石灰粒を多く含んでいる。

同図９はその他の土器で、宮古式土器、パナリ焼とも胎土・混和材が異なる。

第１表ａ　厨子観察一覧

挿図図版	番号	出土地点	厨子番号	分類 大分類	分類 小分類	部位	計測値（ｃｍ） a	b	c	d	e	観察事項(器形・文様など)	銘書・判	孔
第38図 図版10	1	11号区画	43	家形(木製)	－	身	76.0	68.2	－	51.9	－	屋根は欠落しているが切妻形をなすと思われる。ほぞで接いでいる。		無
第39図 図版10	1	4号区画	19	家形(石製)	A	蓋	20.1	16.1	58.6	37.5	－	屋根は寄棟。		
	2				A	身	57.6	46.7	45.5	28.5	33.5	内外ともノミ痕が明瞭。		無
	3	9号区画	15	家形(石製)	A	蓋	16.5	13.5	55.1	36.5	－	屋根は寄棟。		
	4				A	身	50.1	34.6	40.1	26.0	33.6	やや平低な器形。内はノミ痕が明瞭		無
	5	3号区画	25	家形(石製)	A	蓋	25.6	21.2	54.4	39.2	－	屋根は入母屋。		
	6				A	身	48.7	43.5	45.0	33.5	33.2	外面の形成は丁寧で、内面はノミ痕が残る。朱・墨による区画と仏花瓶を描く。４脚をなす。		無
第40図 図版11	1	11号区画	42	家形(赤焼)	A	蓋	37.5	24.7	61.3	44.2	－	屋根は入母屋。		
	2				A	身	55.7	38.9	53.0	34.5	39.7	４脚をなす。胎土に籾を含む。正面に２対１組、側面に１体ずつ法師像を貼り付け。		14
	3	2号区画	8	家形(赤焼)	A	蓋	32.0	21.8	52.0	36.0	－	屋根は入母屋。		
	4				A	身	50.4	41.5	47.4	29.2	38.0	４脚をなす。一部に漆喰が付着する。胎土に籾を含む。正面には左右に１体ずつ、側面に１体の法師を貼り付ける。墨による蓮華文を描く。		15
第41図 図版12	1	10号区画	33	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	29.9	54.5	20.5	42.0	40.5	喜名焼。口唇部にサンゴ痕、自然釉の発色が著しい。蓮華文１対。		無
	2	11号区画	27	ボージャー	B-Ⅰ-2	身	24.4	55.6	22.0	33.8	42.1	喜名焼。泥ぐすりを施す。眉の突出が大きい。蓮華文が巡る。眉内に仏花瓶。	線彫りで「七月八日」。	無
	3	9号区画	22	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	27.3	56.7	22.8	39.5	48.1	喜名焼。泥ぐすりを施す。蓮華文。眉内に仏花瓶。		8
第42図 図版13	1	2号区画	11	ボージャー	B-Ⅰ-2	身	26.4	53.1	22.0	37.1	42.0	やや薄手。口縁部の圏線が深い。突帯内に法師。	線彫りで「山城掟山里にや」。	10
	2	8号区画	2	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	8.9	16.3	29.1	5.8	4.6	波状文と不明の文様		
	3				B-Ⅰ-1	身	23.0	45.1	21.0	30.0	36.4	泥ぐすりを施す。頸部に牡丹唐草文、胴部に蓮華文、眉内に仏花瓶。		12
	4	2号区画	33	ボージャー	Ⅰ-B-b	蓋	－	12.3	31.6	4.3	2.3			
	5				B-Ⅰ-1	身	25.0	54.3	24.0	36.9	42.0	濃い泥ぐすりを施す。口唇部にサンゴ痕。頸部に蔓唐草文、胴部に蓮華・オモダカ文、眉内にオモダカ文。		無
	6	2号区画	33	ボージャー	不明	蓋	8.8	9.8	33.0	－	－	蔓唐草文。		
第43図 図版14	1	6号区画	6	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	8.8	15.7	30.3	5.6	4.8			
	2				B-Ⅰ-1	身	24.5	54.3	22.2	38.0	38.1	肩部の圏線なし。		10
	3	9号区画	17	ボージャー	Ⅰ-A-b	蓋	－	12.4	28.9	5.6	3.5	波状文。		
	4				B-Ⅰ-3	身	23.5	49.9	19.5	19.5	34.7	赤みがかっている。		5
	5	12号区画	7	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	6.5	11.4	31.3	3.4	2.0	波状文。		
	6				B-Ⅰ-1	身	30.0	56.2	21.8	38.1	47.0		「弐八」の判。	6
	7	8号区画	7	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	31.0	61.2	21.9	47.0	45.0	泥ぐすりを施す。		4
第44図 図版15	1	4号区画	2	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	11.2	10.5	35.0	4.6	1.3		「うし平良」の銘書。	
	2				B-Ⅰ-1	身	34.2	61.0	25.0	42.5	46.7		「φ」の判。	4
	3	10号区画	23	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	7.2	12.1	27.9	4.8	3.0	自然釉の発色が著しい。	「Ｌ」字状の家判が２つ。	
	4				B-Ⅰ-1	身	23.4	47.5	22.5	31.2	37.0	自然釉の発色が著しい。底面に不明の沈線。		1
	5	6号区画	11	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	27.6	47.1	18.4	35.0	37.5	薄手。全体に積み痕が残りいびつな形状。		4
	6	7号区画	2	ボージャー	Ⅰ-B-b	蓋	－	9.0	29.1	3.5	1.6			
	7				B-Ⅰ-2	身	25.2	44.4	21.0	29.6	36.4	赤みがかっており、やや焼きが弱い。		1

第１表ｂ　厨子観察一覧

挿図 図版	番号	出土地点	厨子番号	分類		部位	計測値（ｃｍ）					観察事項(器形・文様など)	銘書・判	孔
				大分類	小分類		a	b	c	d	e			
第45図 図版16	1	9号区画	16	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	22.0	48.3	21.0	31.5	33.5	喜名焼。泥ぐすりを施し、口唇部にサンゴ痕。蓮華文１対。		5
	2	4号区画	20	ボージャー	B-Ⅰ-1	蓋	9.4	17.0	31.6	6.3	5.5	蓮華文。	「きとかの／男子たる／女子まか戸」の銘書。	
	3				B-Ⅰ-1	身	26.0	51.4	21.0	37.5	36.2	蓮華文１対。		5
	4	10号区画	34	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	24.3	57.1	22.2	40.0	38.7	泥ぐすりを施す。蓮華文および不明の文様。		18
第46図 図版17	1	11号区画	35	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	23.4	52.4	18.5	39.8	35.7	薄い泥ぐすりを施す。蓮華文１対。眉に幾何学文。		5
	2	10号区画	32	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	26.8	60.3	21.2	44.8	41.4	蓮華文１対。		4
	3	2号区画	19	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	24.0	59.5	21.0	41.0	40.1	蓮華文１対。		4
	4	10号区画	17	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	22.3	48.5	19.5	34.7	33.1	蓮華文を１つ。本来は法師を貼る予定？	「六七」の判。	17
	5	11号区画	21	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	23.4	46.8	20.3	36.8	34.2	蓮華文、オモダカ文。		5
第47図 図版18	1	1号区画	1	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	9.6	11.0	33.0	4.2	1.4	撮みは平低。		
	2				B-Ⅰ-1	身	30.5	56.1	22.8	40.0	44.5		「○」の判。	6
	3	1号区画	7	ボージャー	Ⅰ-B-b	蓋	—	31.7	26.1	4.7	2.2			
	4				B-Ⅰ-1	身	26.1	43.4	20.5	29.7	36.5	薄手。肩部に格子文。		3
	5	13号区画	3	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	20.3	37.9	17.1	26.1	23.8	肩部に格子文と蓮華文？		4
	6	3号区画	8	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	29.8	53.5	20.5	41.7	39.0	器高に対する口径が大きい。法師１対。		6
	7	11号区画	17	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	39.4	46.7	24.5	31.0	34.8	蓮華文、人物文などの雑多な文様。	線彫りで「中城間切／本部」、「大里」、「正月／二月／三月／四月／五月／六月／七月／八月／九月」、「[　]／[　]筑登之」	4
第48図 図版19	1	4号区画	11	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	8.7	13.9	31.4	6.1	4.9	波状文。	「父親／伯叔／両人／あしち之喜久山」の銘書。	
	2				B-Ⅰ-3	身	25.1	47.0	21.3	35.0	34.9		波状の判	5
	3	1号区画	27	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	26.5	48.4	23.0	41.5	36.5		「五」の判。	1
	4	10号区画	10	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	8.5	10.2	30.9	4.1	2.5	波状文。		
	5				B-Ⅰ-3	身	27.2	47.9	22.3	37.5	37.9		「二」の判。	7
	6	12号区画	18	ボージャー	Ⅰ-B-b	蓋	—	9.2	29.7	4.2	1.6		内外に「△」の判。	
	7				B-Ⅰ-3	身	23.4	46.0	19.2	35.8	32.1			5
	8	1号区画	22	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	27.8	52.6	22.0	41.8	36.7		「十一」の判	7
	9	1号区画	12	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	27.7	40.2	22.9	28.0	37.9	眉上に沈線で屋根を模す。		3
	10	13号区画	4	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	21.4	36.0	18.0	26.0	27.2		「七」の判。	8
第49図 図版20	1	10号区画	4	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	24.1	54.6	21.3	35.9	33.6	肩部に草文。	「十」の判。	6
	2	6号区画	1	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	30.7	52.9	25.0	37.5	38.9		「七」の判。	6
	3	8号区画	10	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	—	11.2	30.8	4.2	2.2			
	4				B-Ⅰ-3	身	23.0	53.2	19.1	33.5	35.2	蓮華文１対。		12
	5	1号区画	16	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	8.2	13.8	28.8	6.1	4.5	赤みがかっており、やや焼きが弱い。		
	6				B-Ⅰ-3	身	28.2	53.0	24.8	40.3	36.2		「二」の判。	4
第50図 図版21	1	13号区画	13	ボージャー	Ⅰ-C-b	蓋	—	9.8	30.0	—	—			
	2				B-Ⅰ-3	身	26.6	50.1	23.2	34.3	34.2		「十」の判。	5
	3	1号区画	3	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	8.5	12.2	32.0	4.8	2.9			
	4				Ⅰ-B-a	身	27.4	51.2	22.5	38.5	35.4		「十」の判。	5
	5	10号区画	5	ボージャー	Ⅰ-C-a	蓋	10.8	9.0	29.8	—	—			
	6				B-Ⅰ-1	身	27.5	48.1	34.8	34.8	35.9		「五」の判。	4
	7	3号区画	29	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	29.0	62.5	24.8	43.0	40.1		「十」の判。	5
	8	10号区画	5内	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	—	12.6	29.2	4.8	3.0			
	9	12号区画	12		B-Ⅰ-3	身	25.2	50.2	21.7	41.7	33.4		「三」の判。	4

第１表ｃ　厨子観察一覧

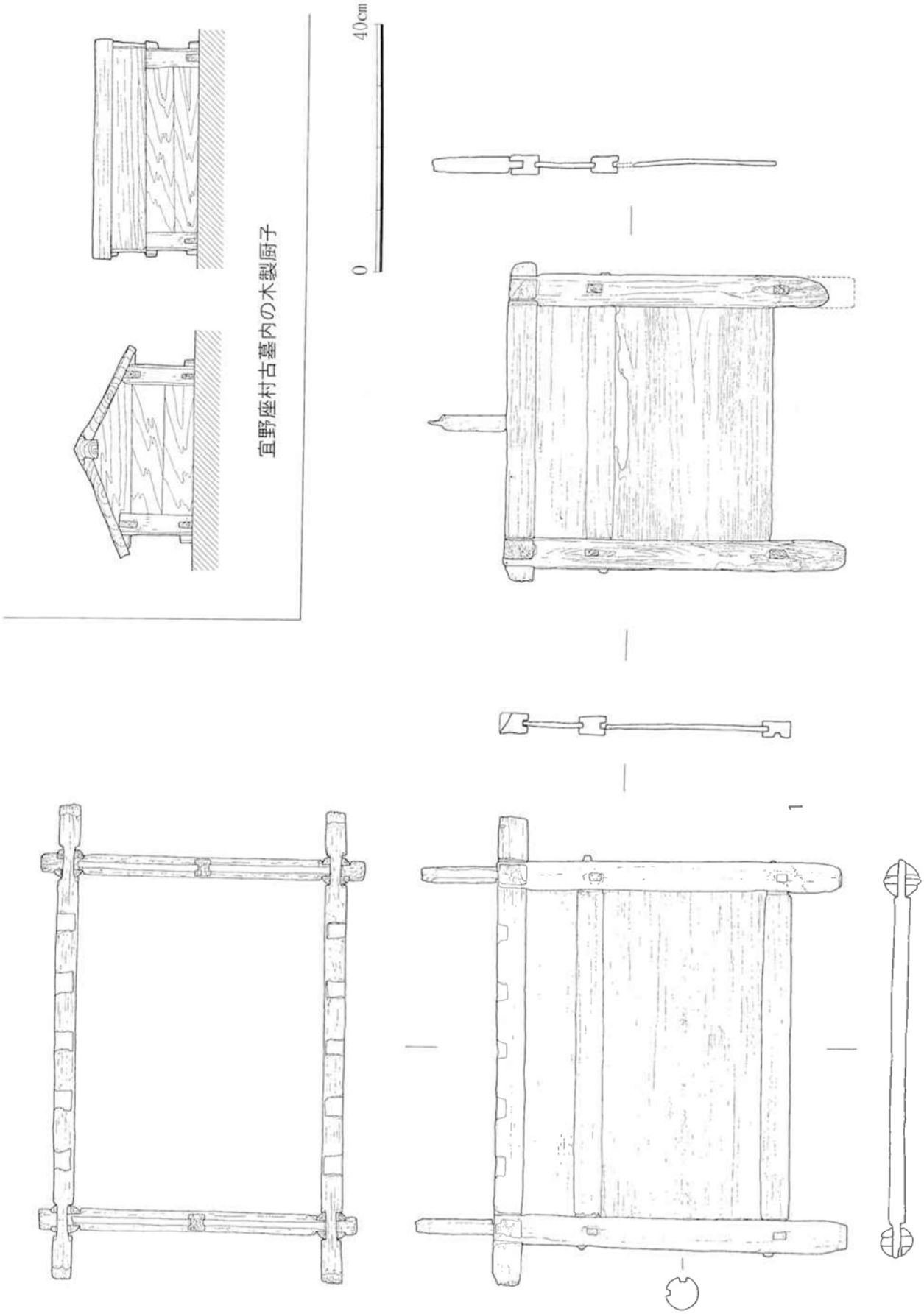
挿図図版	番号	出土地点	厨子番号	分類 大分類	分類 小分類	部位	計測値（ｃｍ） a	b	c	d	e	観察事項(器形・文様など)	銘書・判	孔
第51図図版22	1	3号区画	17	ボージャー	B-Ⅰ-4	身	29.5	52.5	24.2	36.7	44.7	甕形の器形に類する。薄手のつくり。貼付の蓮華文１対。		無
	2	4号区画	12	ボージャー	B-Ⅰ-4	身	26.7	54.3	24.1	36.0	43.3	広口の壺形に類する器形。濃い泥ぐすりを施す。薄手のつくり。渦巻状のスタンプ文が頸部を巡る。		無
	3	13号区画	14	ボージャー	B-Ⅰ-4	身	20.4	37.6	16.6	29.0	26.6	口縁肥厚部を方形に形成。	「五」の判。	5
	4	4号区画	16	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	8.8	19.8	30.5	5.9	7.7	蓮華文、羽状文。	「前村掟／喜久山／同人女子／同人男子□」の銘書。	
	5				B-Ⅰ-4	身	26.8	52.5	23.8	30.0	42.3	胴部に蓮華文、眉内に仏花瓶。		無
第52図図版23	1	11号区画	26の前散乱	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	9.6	16.7	36.9	5.8	6.7	蓮華文、オモダカ文を描く。		
	2	11号区画	散乱6	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	6.4	15.7	30.8	5.4	5.5			
	3	3号区画	16	ボージャー	Ⅰ-A-b-①	蓋	－	15.1	32.7	5.1	4.7	「き」がつく。		
	4	9号区画	26	ボージャー	Ⅰ-A-b	蓋	－	10.1	23.0	3.0	3.4	形状が異なる。		
	5	1号区画	11	ボージャー	Ⅰ-B-b	蓋	－	14.1	32.3	3.7	2.9	形状が異なる。		
	6	7号区画	1	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	8.4	15.8	31.3	5.2	5.2		内側に不明の線彫。	
	7	10号区画	散乱フタ2	ボージャー	Ⅰ-B-a	蓋	8.2	11.7	30.4	4.1	3.2	不明の沈文。		
	8	8号区画	6	ボージャー	Ⅰ-C-b	蓋	－	10.0	34.7	－	－	傘状の沈文。		
第53図図版24	1	2号区画	26	マンガン	B-Ⅱ	身	26.2	54.9	21.3	41.1	32.4	唐破風形の屋門が３つ連なる。口縁肥厚部は方形。貼付の蓮華文、沈線の旗頭文。		5
	2	2号区画	14	マンガン	Ⅱ	蓋	11.5	17.0	23.7	8.3	6.1			
	3				B-Ⅱ	身	32.8	62.5	25.4	39.7	41.2	屋門はアーチ形。口縁肥厚部は方形。仏花瓶（蓮華文）１対。		7
	4	9号区画	4	マンガン	Ⅱ	蓋	15.0	16.0	29.2	7.7	6.2		「乾隆五拾六年子（亥ヵ）ノ七月十一日西銘大掟仲□□（村渠）仁屋」の銘書。	
	5				B-Ⅱ	身	27.0	51.1	24.0	31.0	35.5	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は方形。貼付の蓮華文、沈線の軍配文。		9
第54図図版25	1	2号区画	9	マンガン	B-Ⅱ	身	31.2	62.1	21.7	43.0	40.3	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は三角形。沈線の蓮華文。		9
	2	2号区画	12	マンガン	Ⅱ	蓋	13.1	－	32.0	×	×		「大清十九年亥（道光ヵ）生／七十三」、「西銘筑登之親雲上／同人妻／牛」の銘書。	
	3				B-Ⅱ	身	32.6	64.8	23.2	39.8	41.2	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は三角形。沈線の蓮華文。		11
	4	11号区画	散乱4	マンガン	Ⅱ	蓋	13.7	14.5	30.6	8.4	4.0		「死亡及洗骨年月日不群／明治二拾五年旧八月／四日之夜中下やミニ仕立／替／中村渠加那／妻ナベ」の銘書。	
第55図図版26	1	9号区画	3	マンガン	B-Ⅱ	身	32.7	66.6	24.3	43.0	41.3	屋門は位牌形。口縁肥厚部は三角形。沈線の蓮華文。		16
	2	9号区画	2	マンガン	Ⅱ	蓋	10.5	12.6	24.7	6.3	2.9			
	3				B-Ⅱ	身	25.6	49.7	20.9	33.5	33.3	屋門はアーチ形。口縁肥厚部はバチ形。沈線の蓮華文。		18
	4	9号区画	1	マンガン	Ⅱ	蓋	11.8	12.6	29.5	6.3	4.2			
	5				B-Ⅱ	身	29.2	58.2	20.4	44.0	35.4	屋門はアーチ形。口縁肥厚部は弱いバチ形。沈線の蓮華文。		18
	6	12号区画	19(22と同一) 22(19と同一)	マンガン	B-Ⅱ	身	28.5	55.2	20.5	38.0	32.2	屋門はアーチ形。口縁肥厚部はバチ形。３脚をなす。沈線の蓮華文。 屋門はアーチ形。口縁は「L」字状。波状文のみ。		19

第１表ｄ　厨子観察一覧

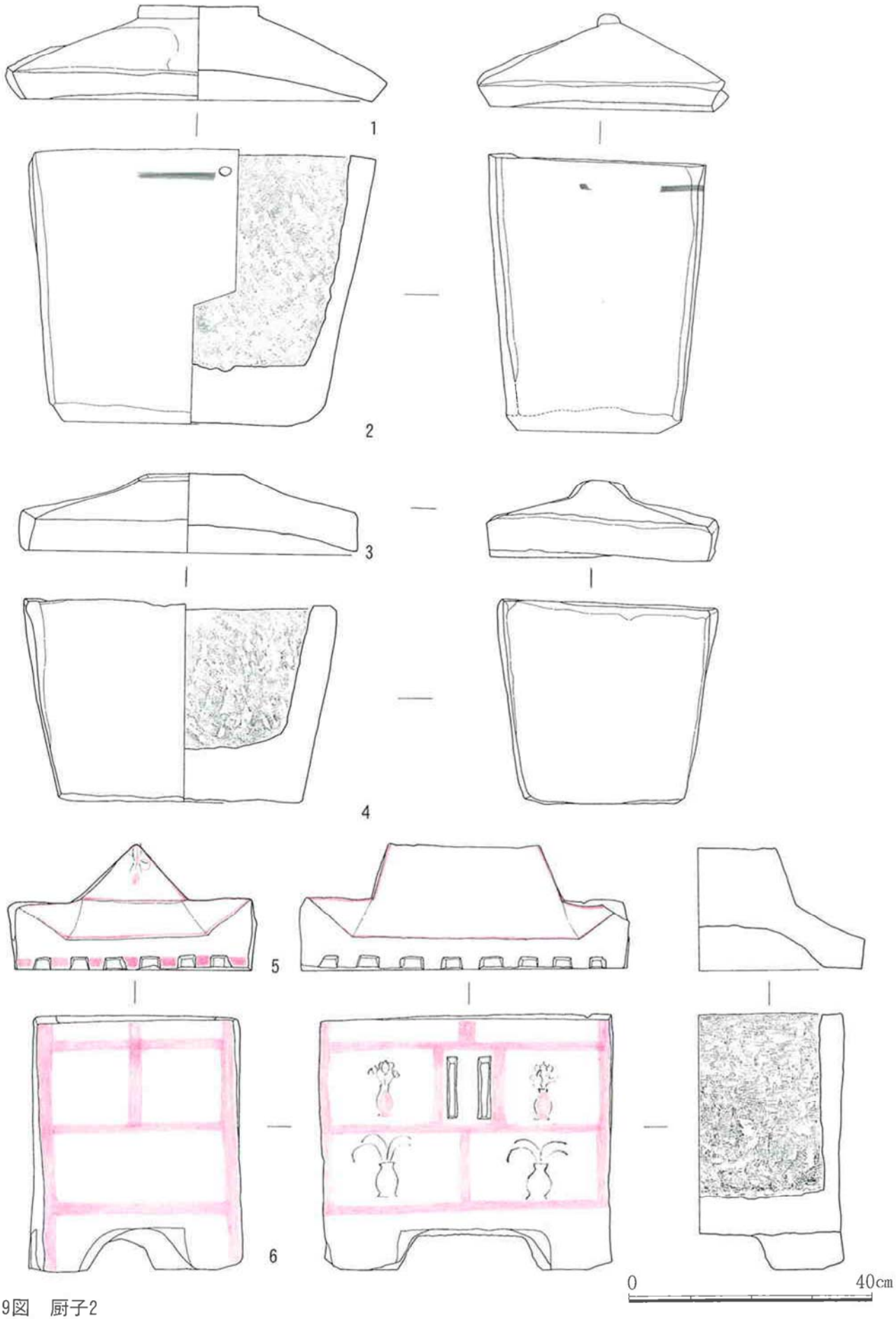
挿図図版	番号	出土地点	厨子番号	分類 大分類	分類 小分類	部位	計測値（ｃｍ） a	b	c	d	e	観察事項(器形・文様など)	銘書・判	孔
第55図図版26	7	1～3区上	散乱	マンガン	B-Ⅱ	身	27.8	－	－	－	29.9			×
	8	1号区画	5	マンガン	Ⅱ	蓋	5.5	6.5	21.0	－	－		「上江洲親雲位妻ノ母」の銘書（マジック書き）。（「位」は「上」の遠いか）。	
	9				B-Ⅱ	身	21.3	38.9	13.9	23.0	23.3	屋門、口縁肥厚部を形成しない。波状文のみ。		4
第56図図版27	1	3号区画	2	転用	すり鉢	蓋	9.6	13.4	32.2	－	－	壺にすり鉢を蓋にしている。		
	2			転用	褐釉	身	×	52.4	26.5	－	46.8			無
	3	4号区画	7	ボージャー	Ⅰ-A-b	蓋	－	20.0	32.0	7.2	8.0	甕にボージャー厨子の蓋を組み合わせている。	「中（仲）地村玉那ニ／宮平むた」の銘書。	
	4			転用	無釉	身	24.3	50.5	21.0	33.0	38.2			1
	5	6号区画	4	転用	無釉	身	20.7	29.0	16.8	19.5	27.6	甕の側面にある割れを大型破片で塞いでいる。		無
	6	9号区画	20	転用	無釉	身	20.3	×	×	－	－	壺の胴下半部を取り除き天地逆にして、碗で口縁部を塞いでいる。		無
	7	10号区画	36	転用	褐釉	身	25.5	58.6	26.6	－	45.8	壺を天地逆にして、底部片で口縁部を塞いでいる。		無
第57図図版28	1	1号区画	6	転用	無釉	身	21.8	42.5	19.5	－	35.2	甕をそのまま用いている。		無
	2	9号区画	5	転用	無釉	身	44.3	26.0	17.8	－	－	鉢の底部を打ち欠いて使用している。		無
	3	12号区画	4	転用	無釉	身	13.9	31.0	13.4	18.2	22.5	壺の底部を打ち欠いて横倒しにする。側面に蓮華文を描く。転用時に書いたものである。		無
	4	2号区画	15	転用	褐釉	身	21.2	63.9	17.6	－	48.4	大型壺の胴部を打ち欠き横倒しにしている。		無
第58図図版29	1	2号区画	21	土器	A-a	身	24.4	42.2	18.6	25.5	45.4	大型。胴の張りが強く、口縁はきつく外反。		無
	2	11号区画	30	土器	A-a	身	23.3	40.3	18.6	22.0	48.5	大型。胴の張りが強い。		無
	3	1号区画	25	土器	A-b	身	18.4	35.8	15.1	22.3	38.5	小型。口縁は若干直立。		無
	4	12号区画	3	土器	A-c	身	19.3	32.8	18.8	18.2	37.6	小型。口唇部が弱く膨らむ。		無
	5	11号区画		土器	A-c	身	－	－	15.0	16.0	33.8	小型。口縁部はほとんど目立たない。		無
	6	9号区画	27	土器	B-a	身	22.5	46.2	19.0	29.5	42.0	大型。円形に近い器形。弱く外反。		無
	7	11号区画	2	土器	B-b	身	23.2	47.7	17.4	29.5	44.5	大型。やや背が高い器形。		無
	8	前庭部		土器	鍋形	身	24.3	×	×	－	30.0	小型の鍋形。外面は黒色を呈する。		無
	9	10号区画	18	土器	パナリ	身	25.0	46.6	11.6	19.5	42.6	パナリ焼。やや下膨れの器形。		無
	10	2号区画	46	土器	不明	身	17.4	30.4	15.6	17.0	42.0	泥質の胎土で、やや角張った器形。		無

第２表　各区画の厨子の構成

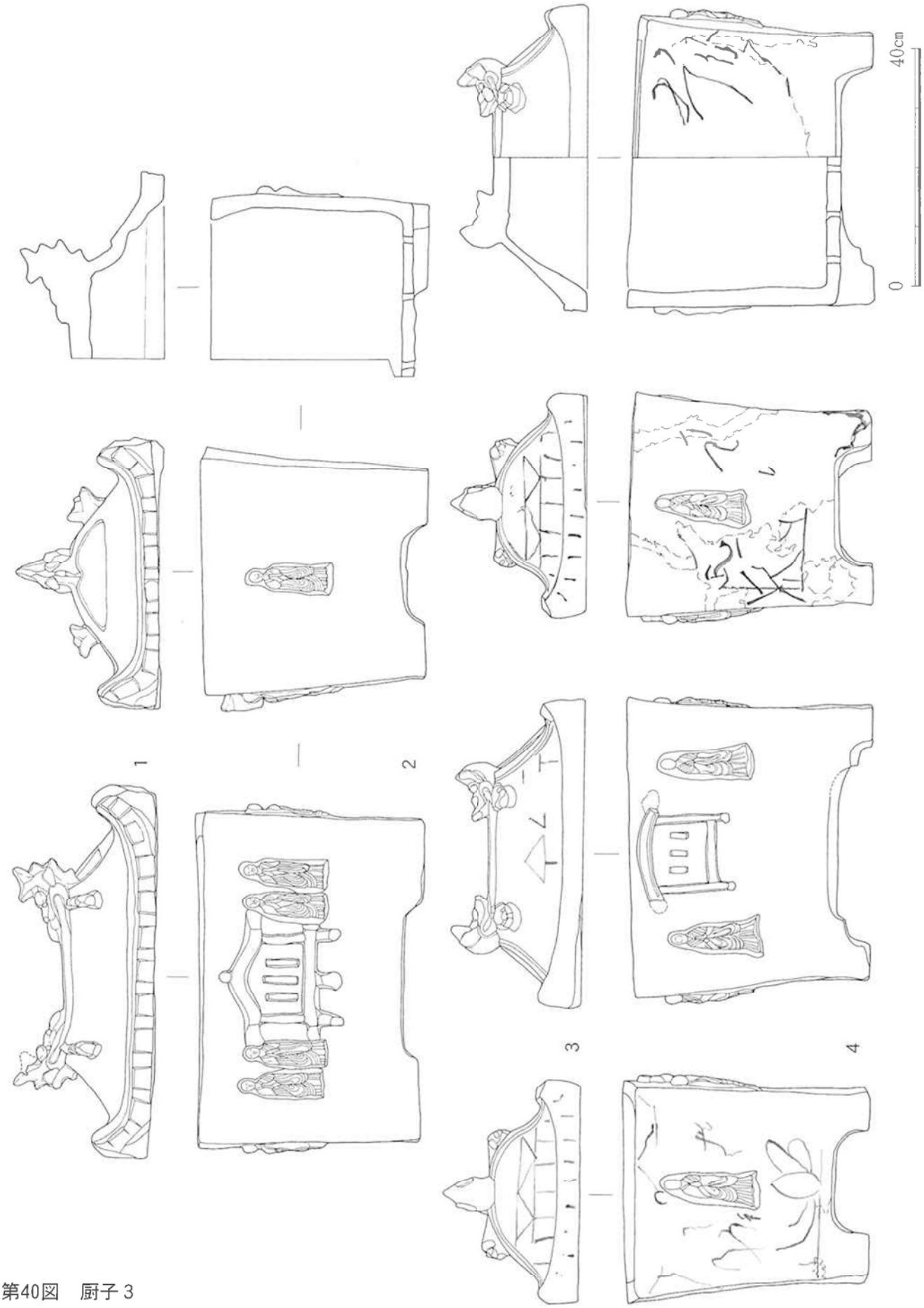
	ボージャー	マンガン	家形 赤焼	家形 石製	家形 木製	転用品	土器 宮古式	土器 パナリ	合計
1号区画	21	1	0	0	0	2	2	0	26
2号区画	21	8	1	0	0	11	5	0	46
3号区画	18	0	0	1	0	11	3	0	33
4号区画	18	2	0	1	0	6	0	0	27
5号区画	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6号区画	9	0	0	0	0	4	0	0	13
7号区画	6	0	0	0	0	7	1	0	14
8号区画	16	0	1	0	0	4	0	0	21
9号区画	15	4	0	1	0	8	1	0	29
10号区画	29	0	0	0	0	5	1	1	36
11号区画	32	1	1	0	1	10	5	0	50
12号区画	9	2	0	0	0	10	1	0	22
13号区画	12	0	0	0	0	3	0	0	15
合　計	206	18	3	3	1	81	19	1	332



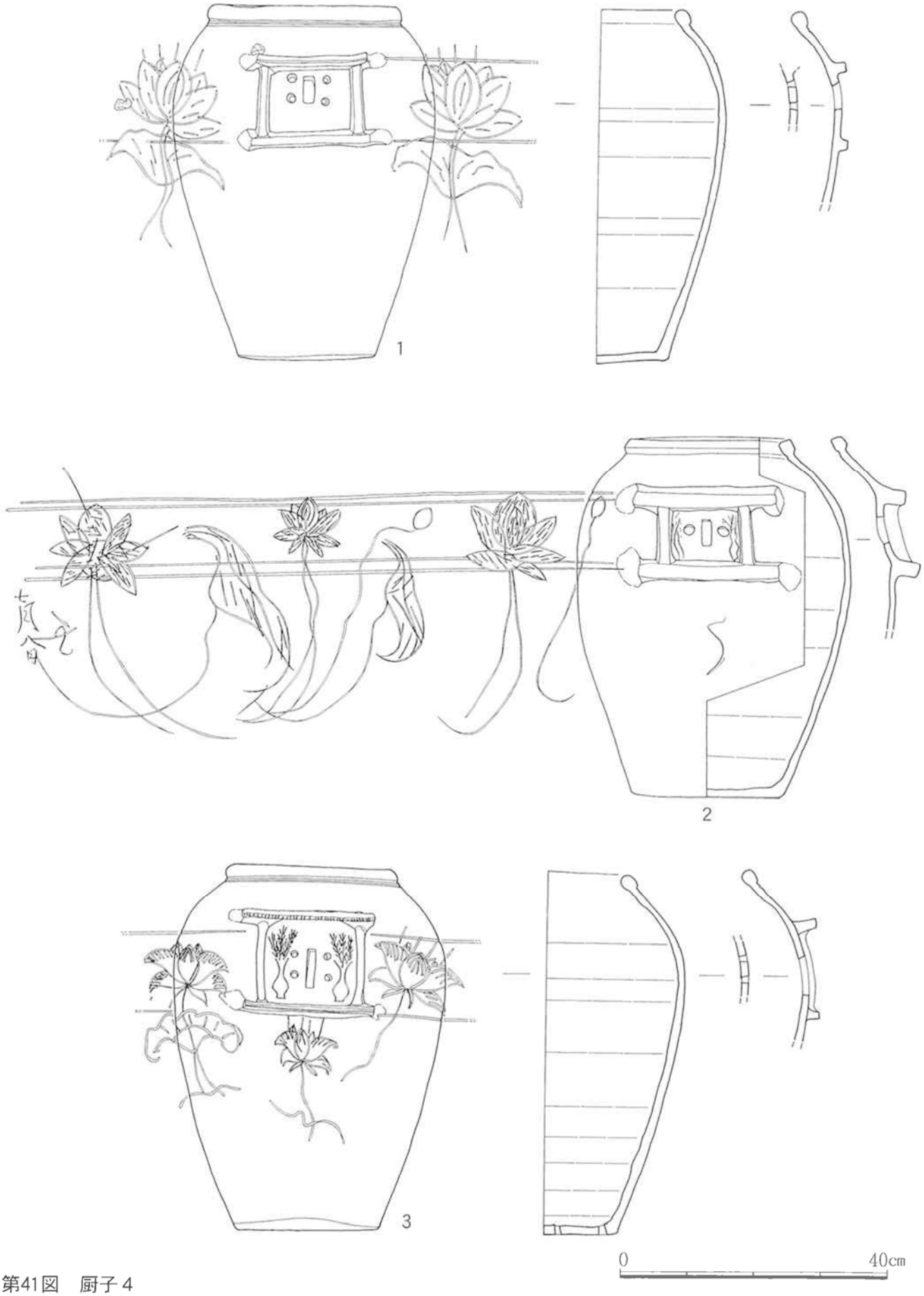
第38図　厨子１



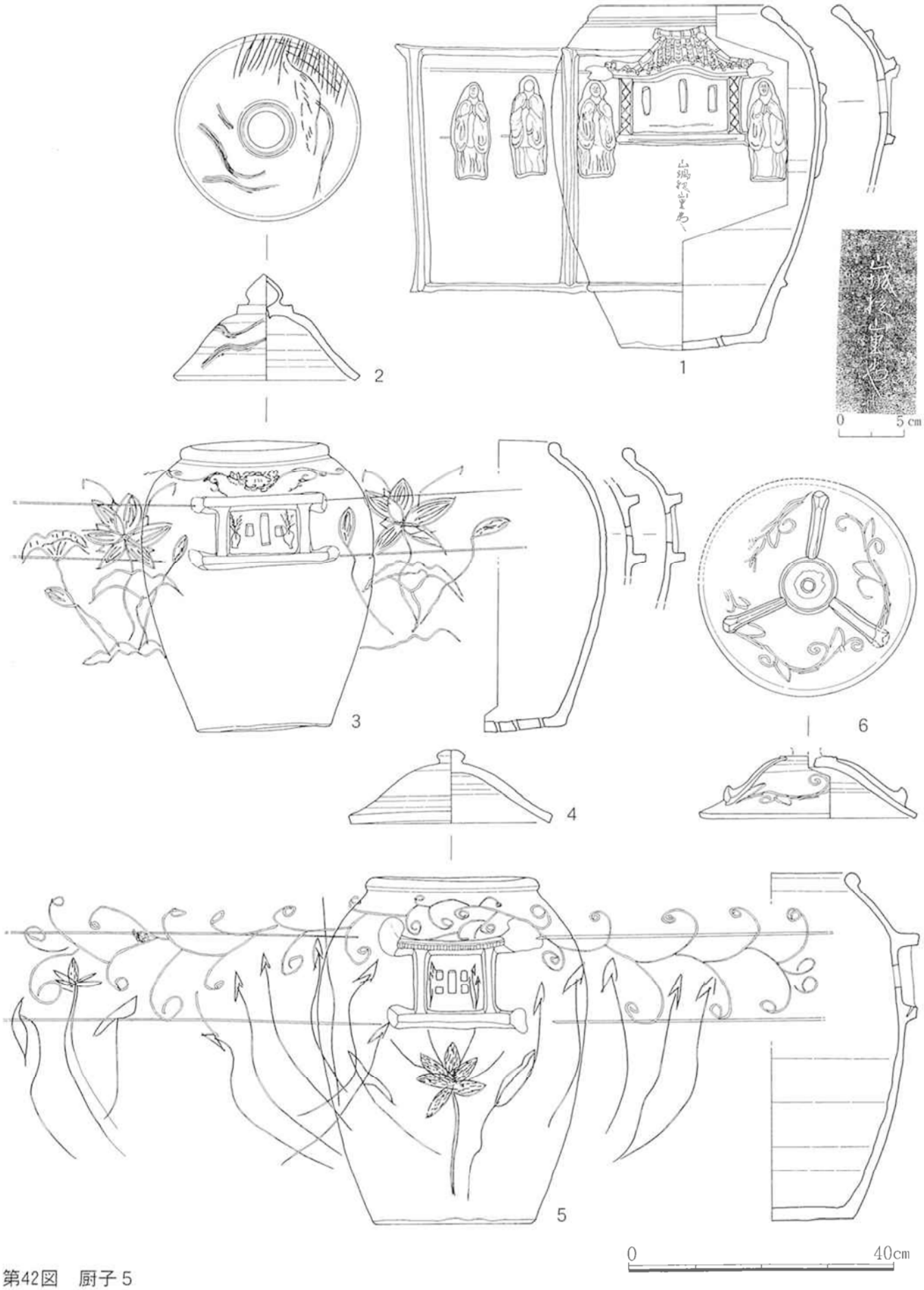
第39図　厨子2



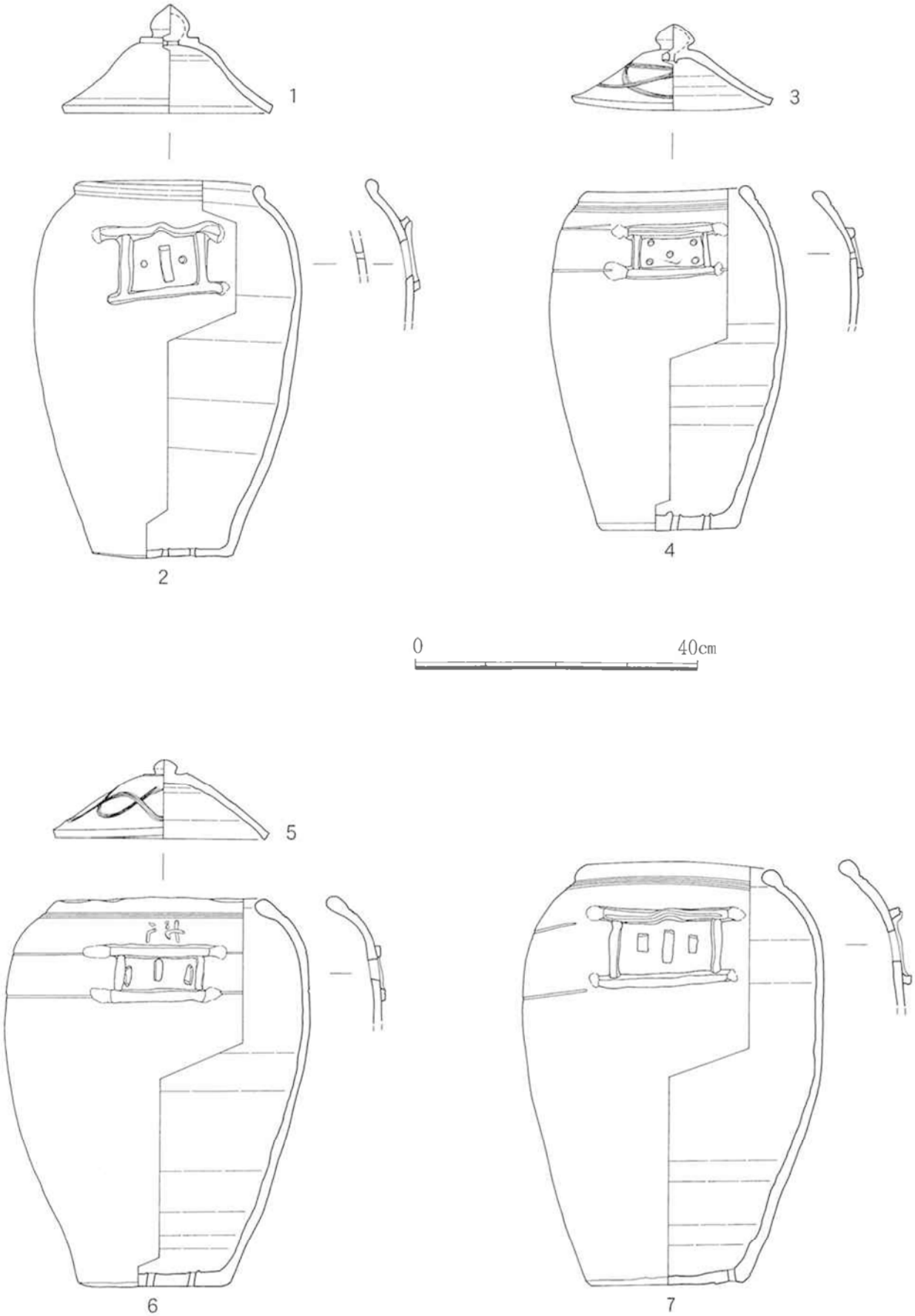
第40図　厨子３



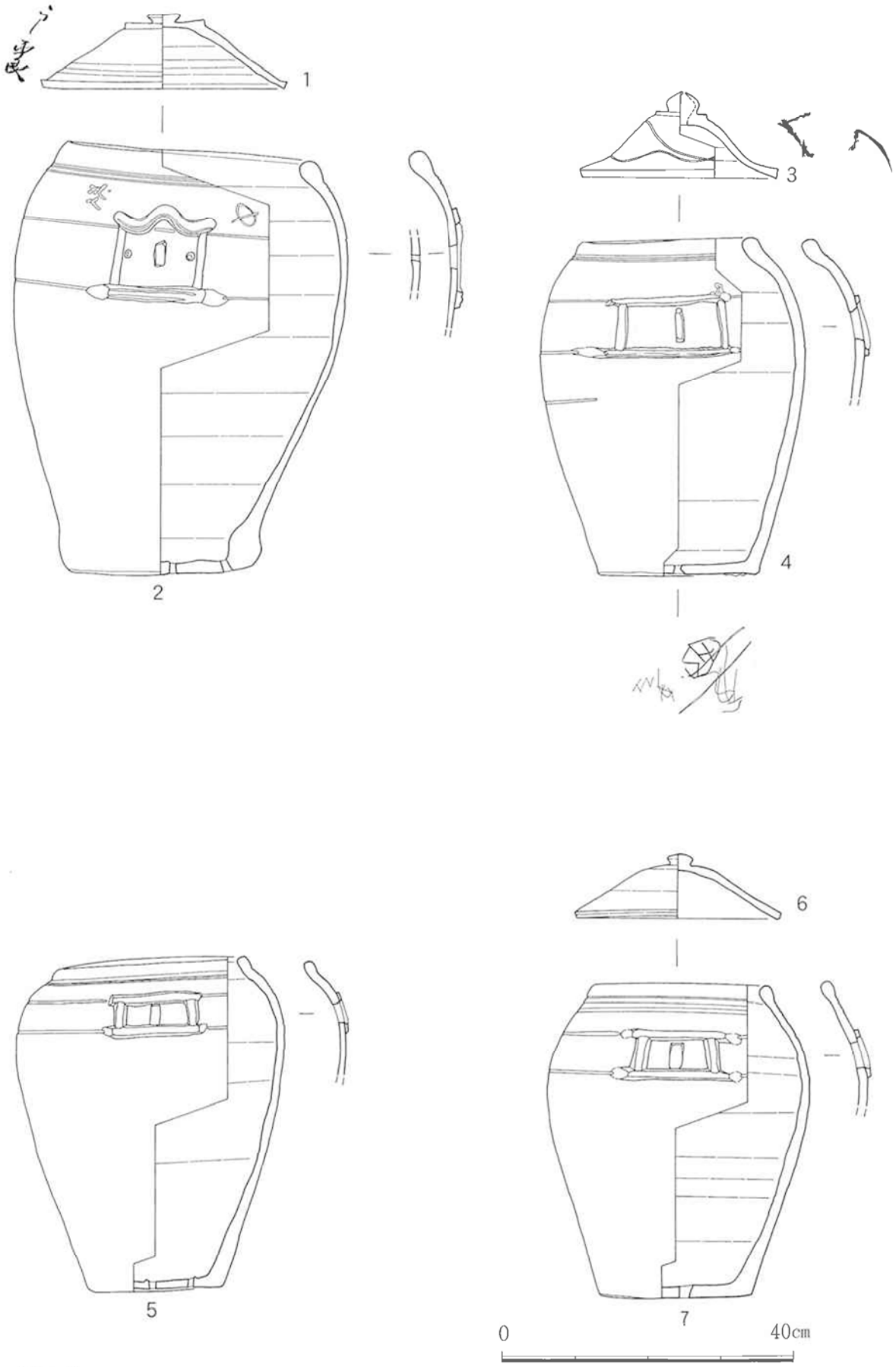
第41図　厨子４



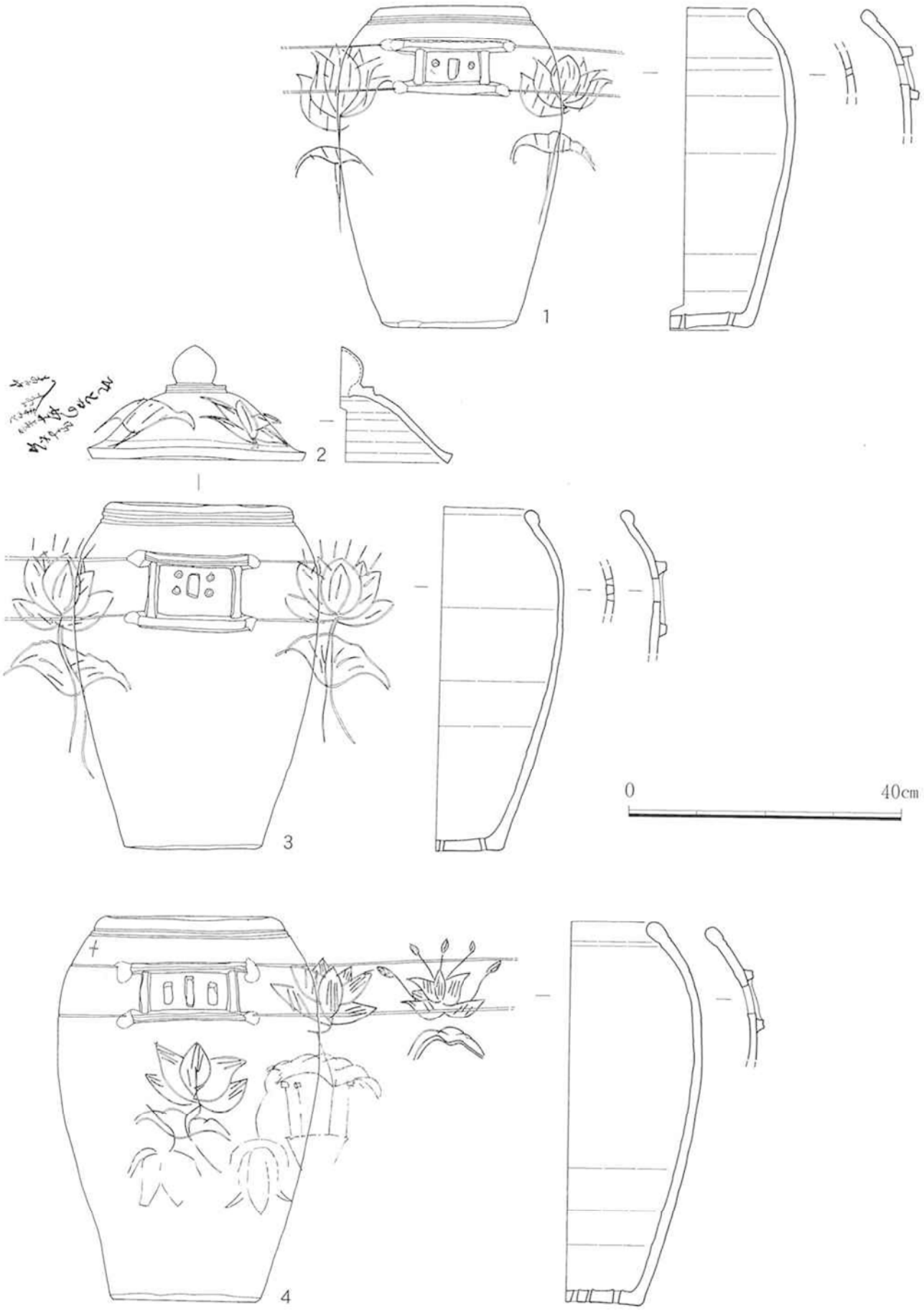
第42図　厨子５



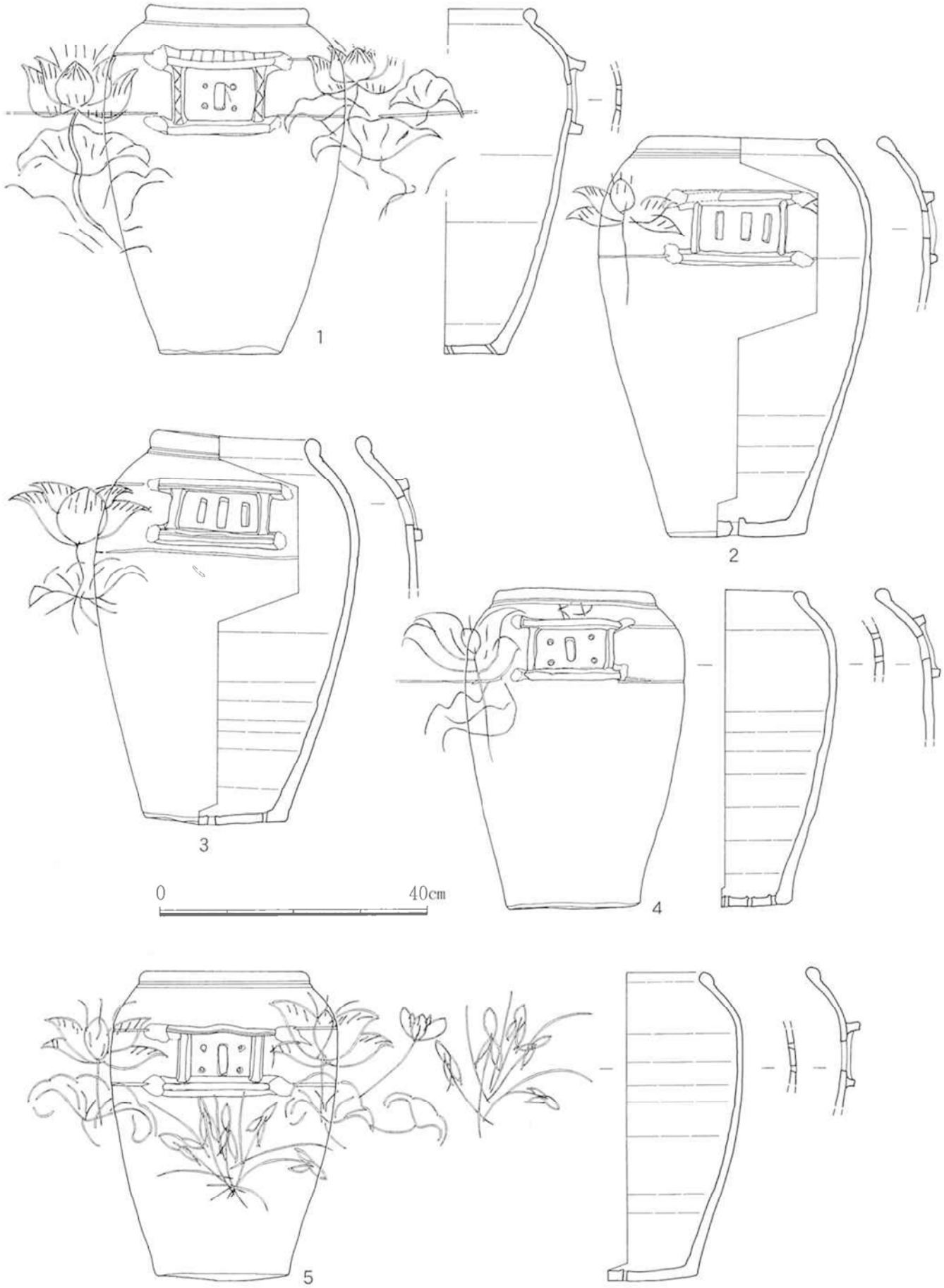
第43図　厨子６



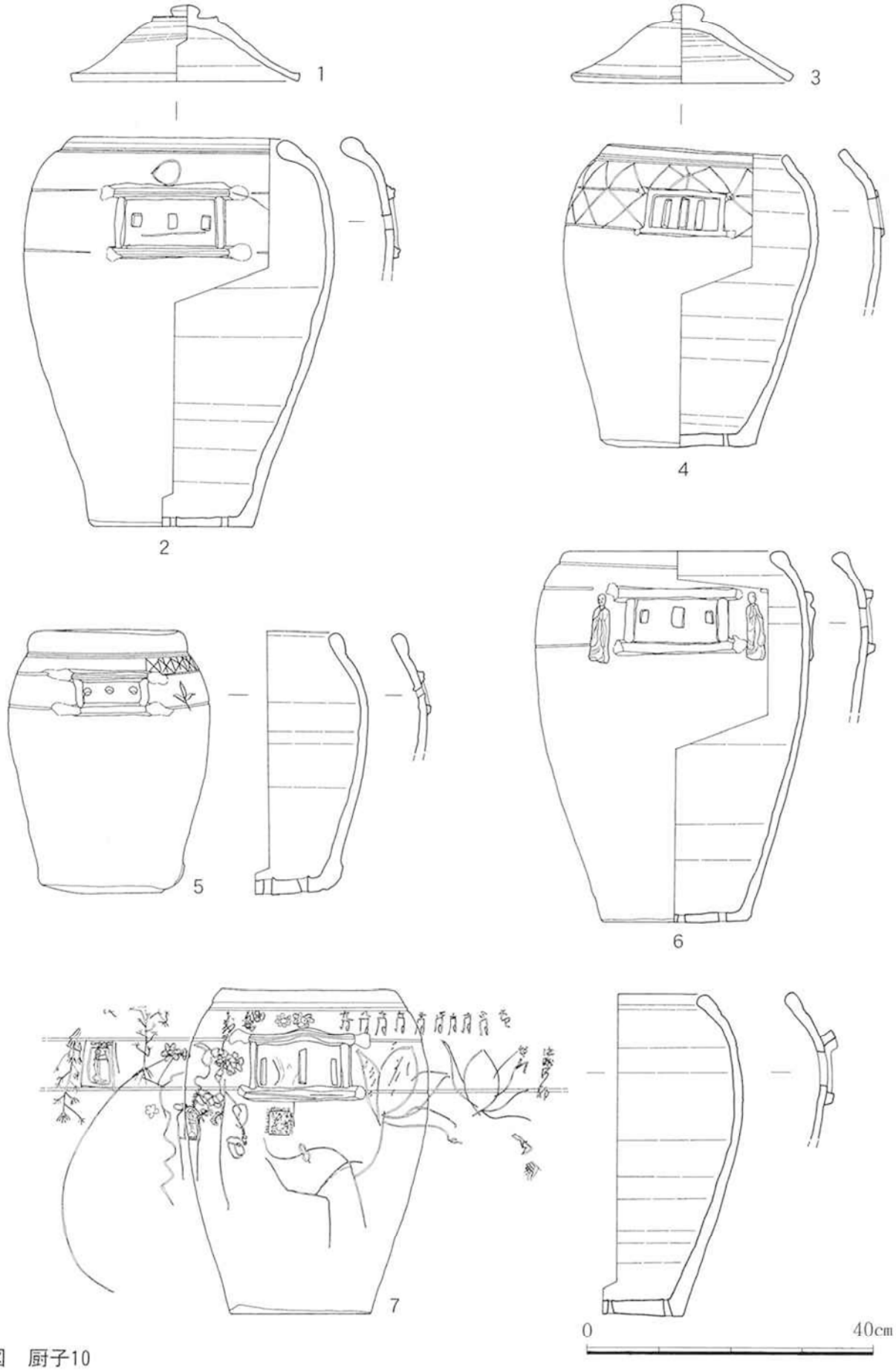
第44図　厨子７



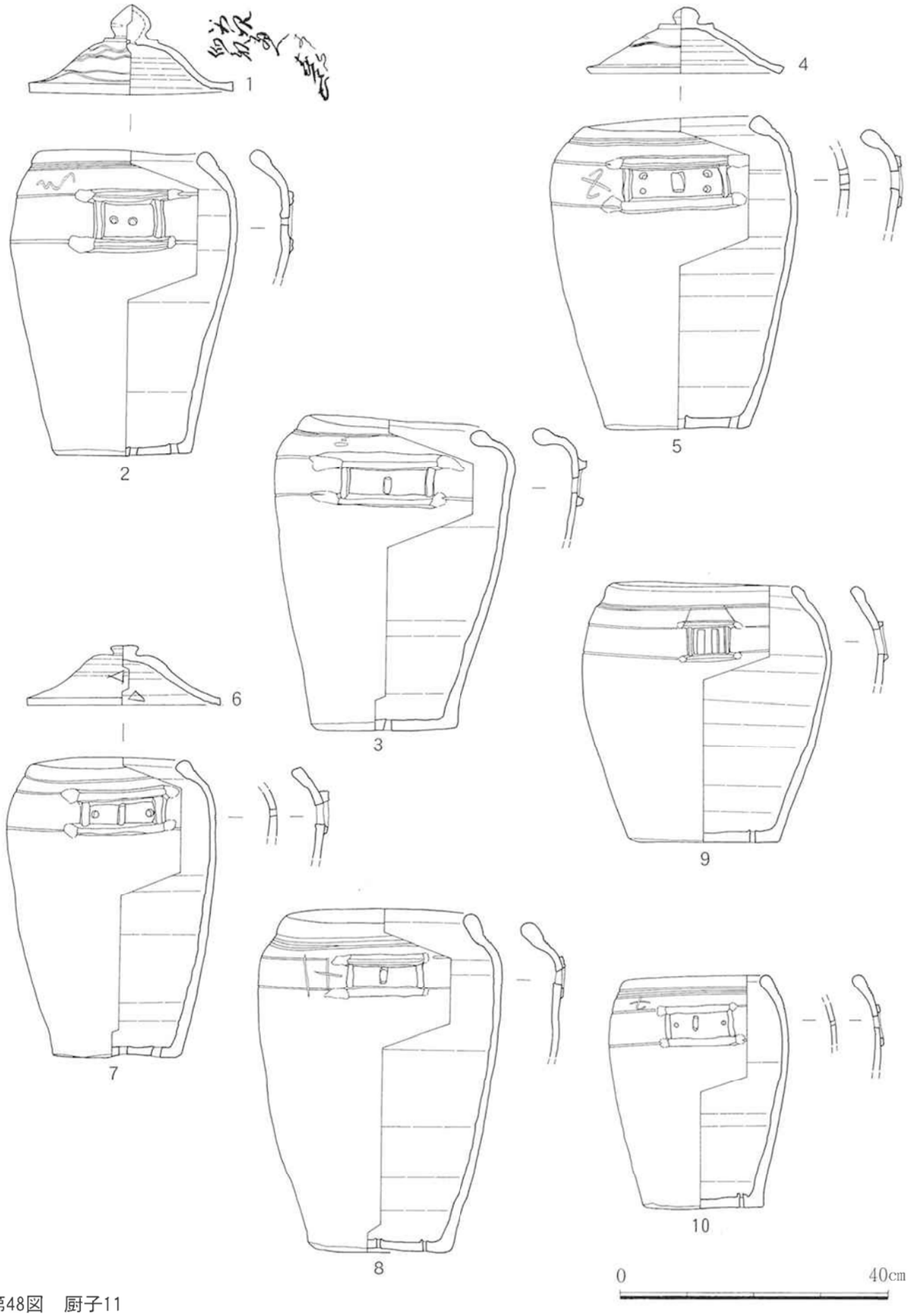
第45図　厨子８



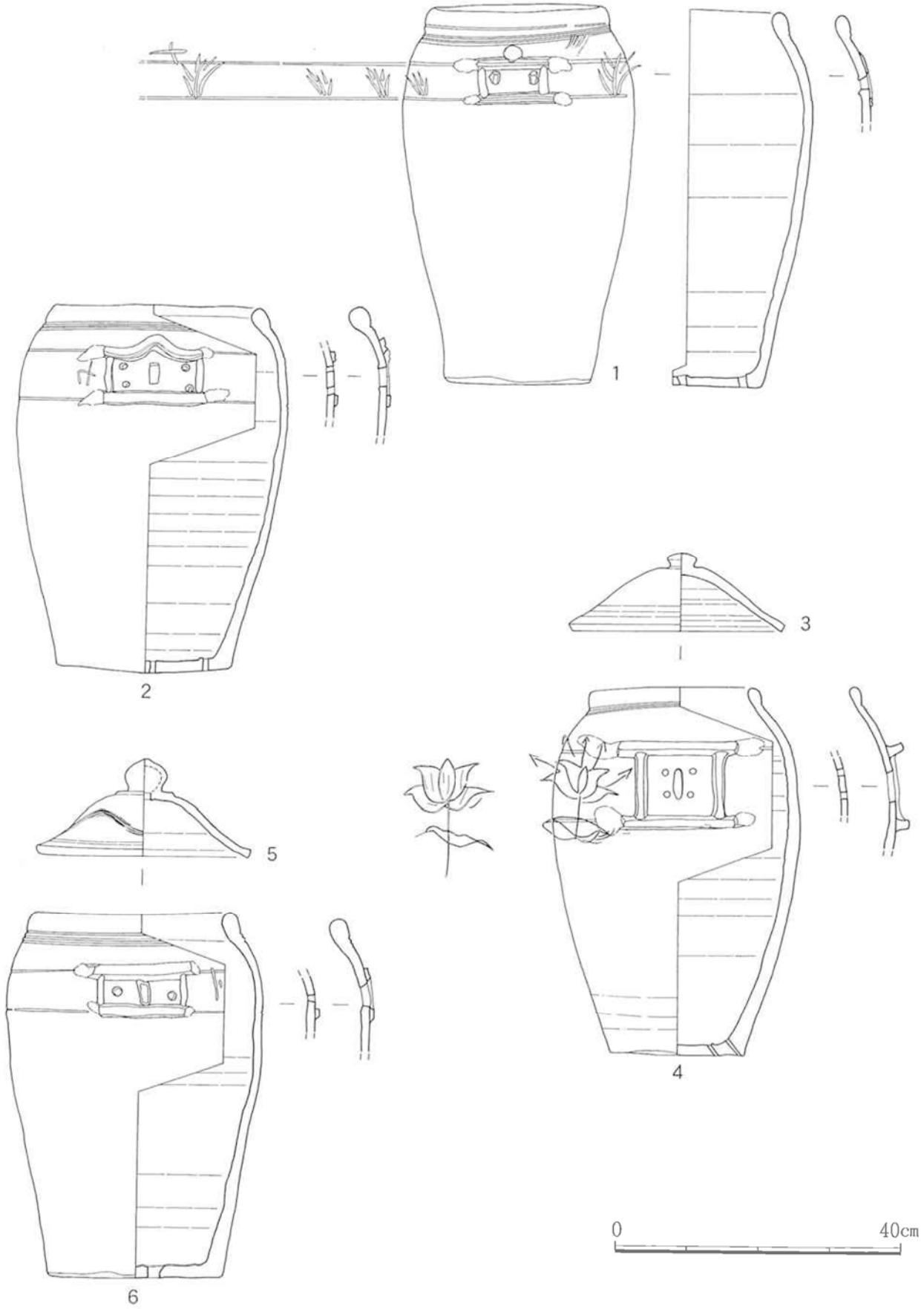
第46図　厨子９



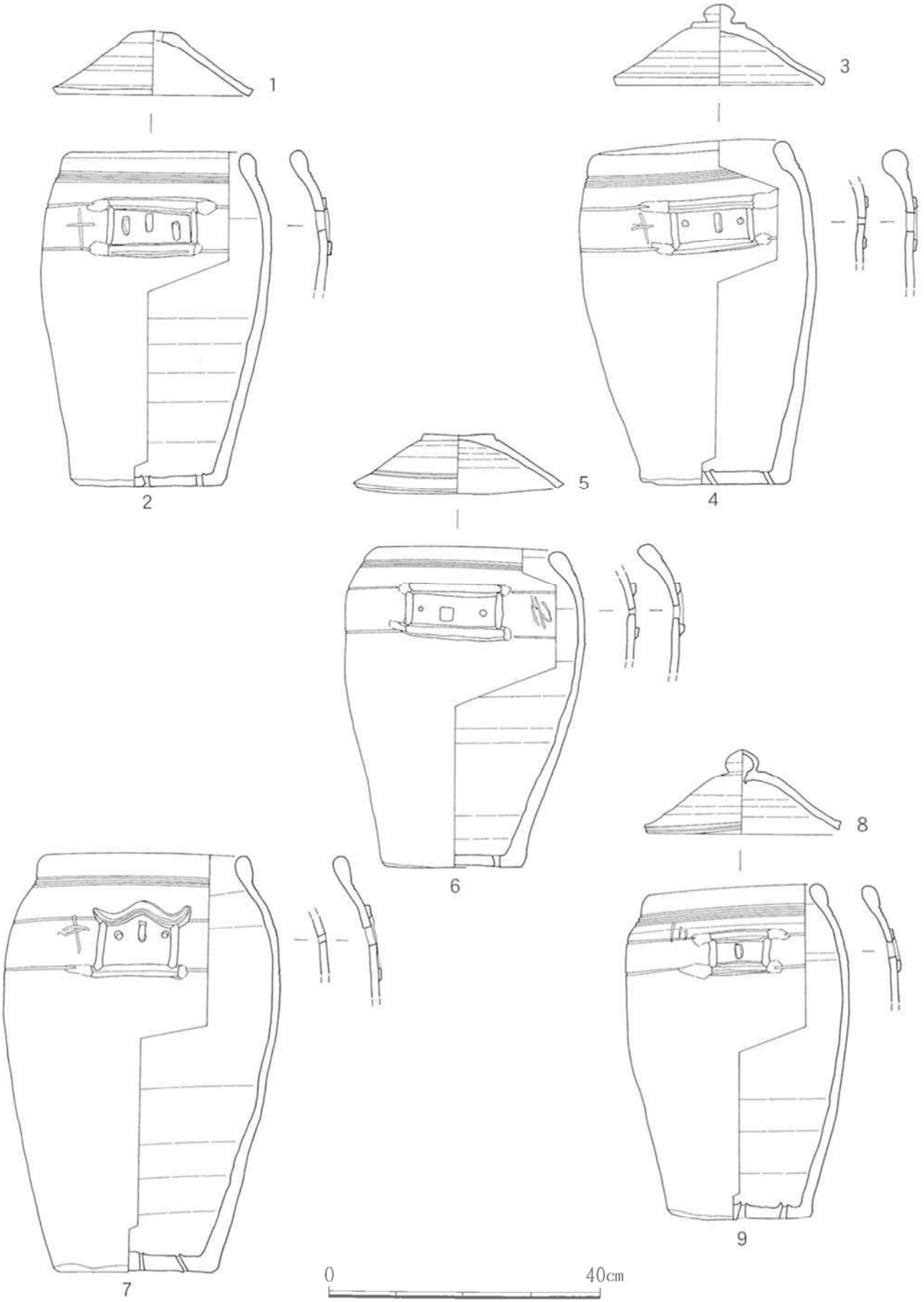
第47図　厨子10



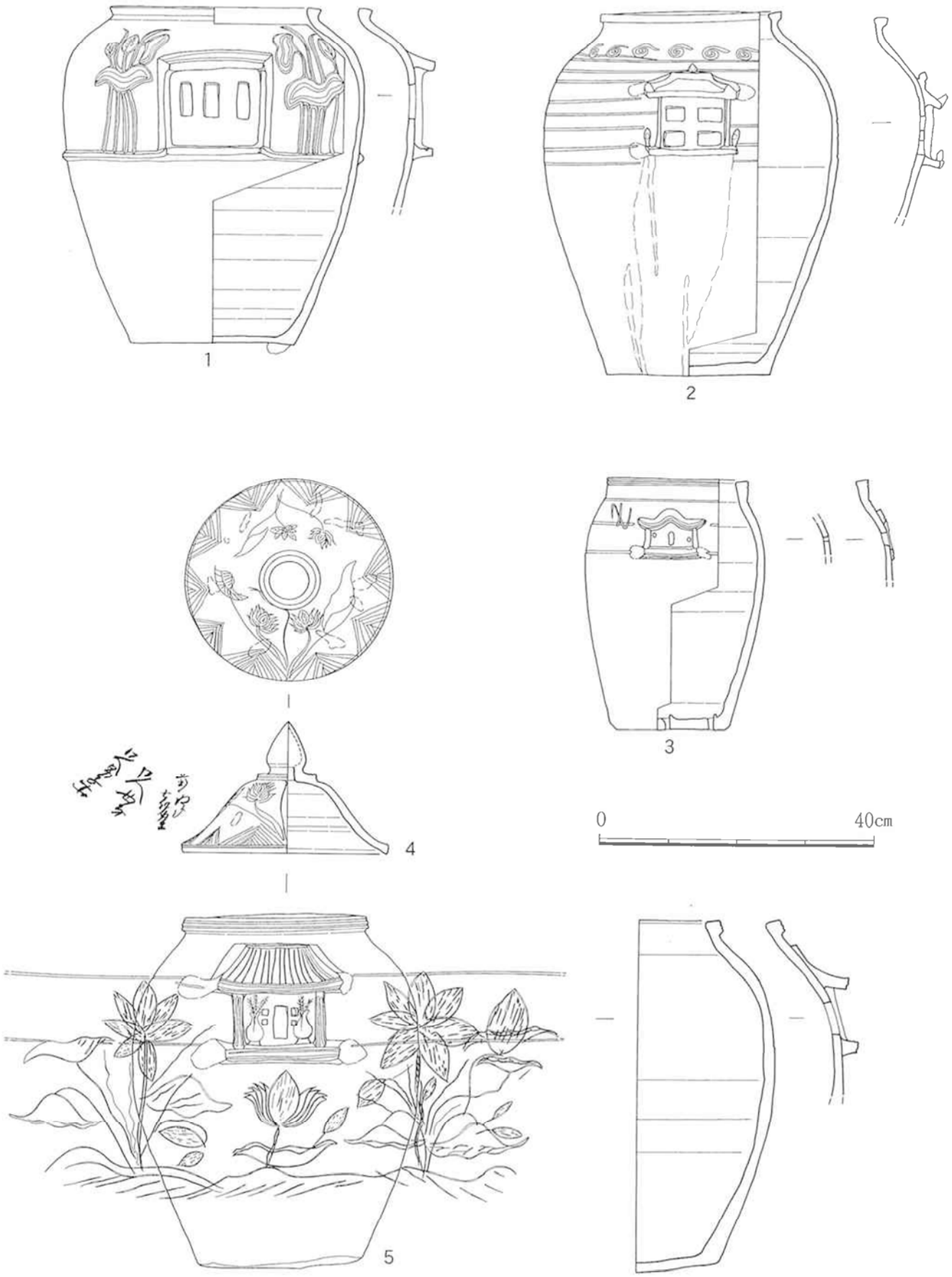
第48図　厨子11



第49図　厨子12



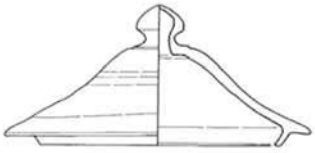
第50図　厨子13



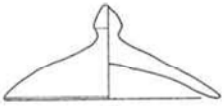
第51図　厨子14

1

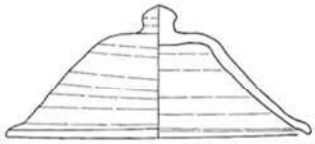
2



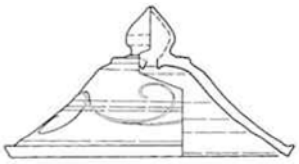
3



4

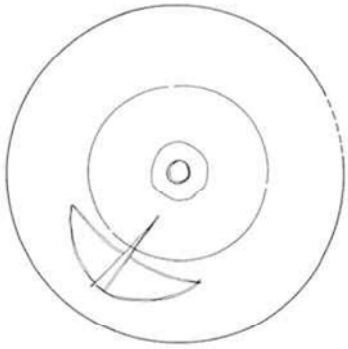


5



6

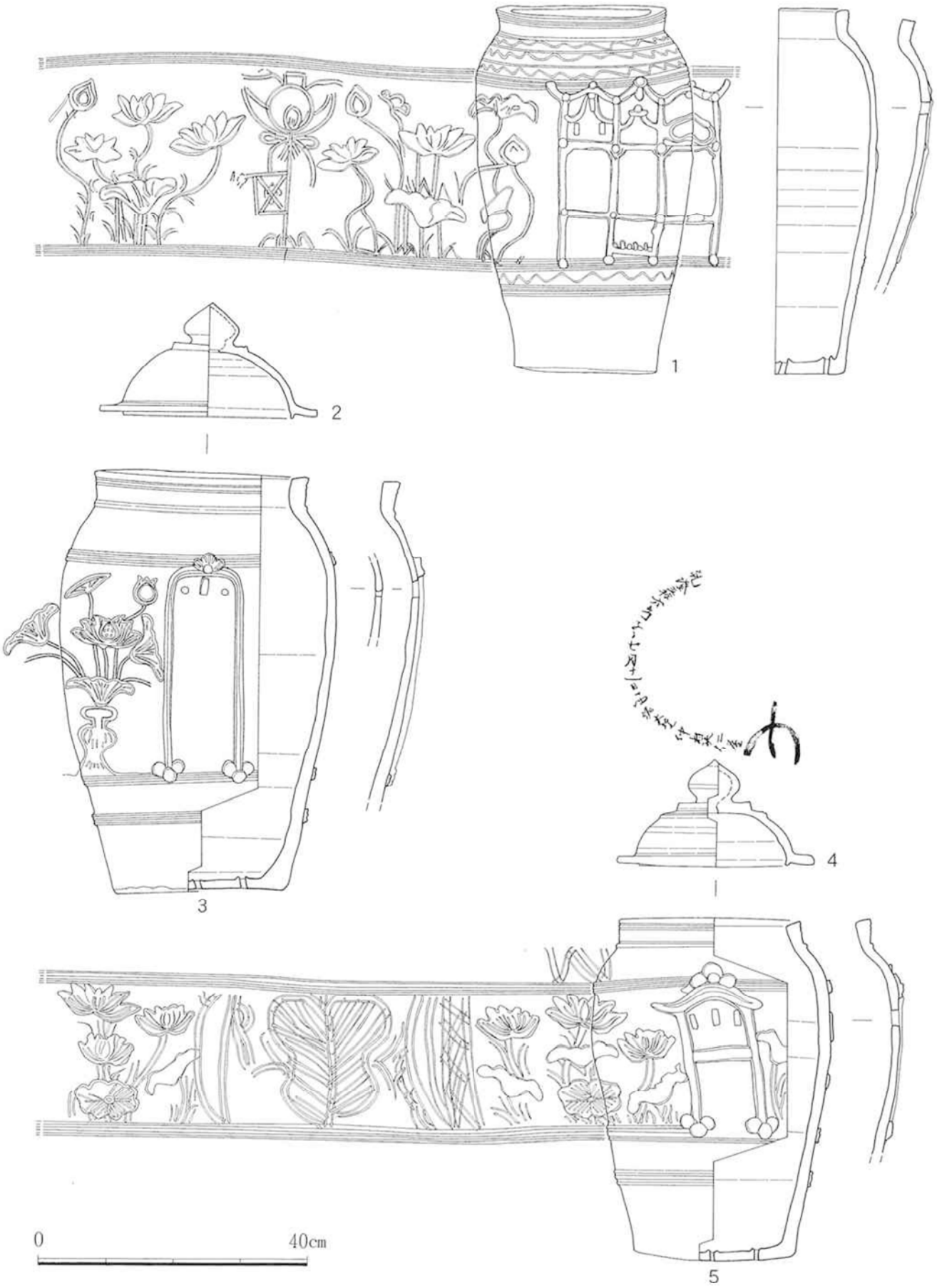
7



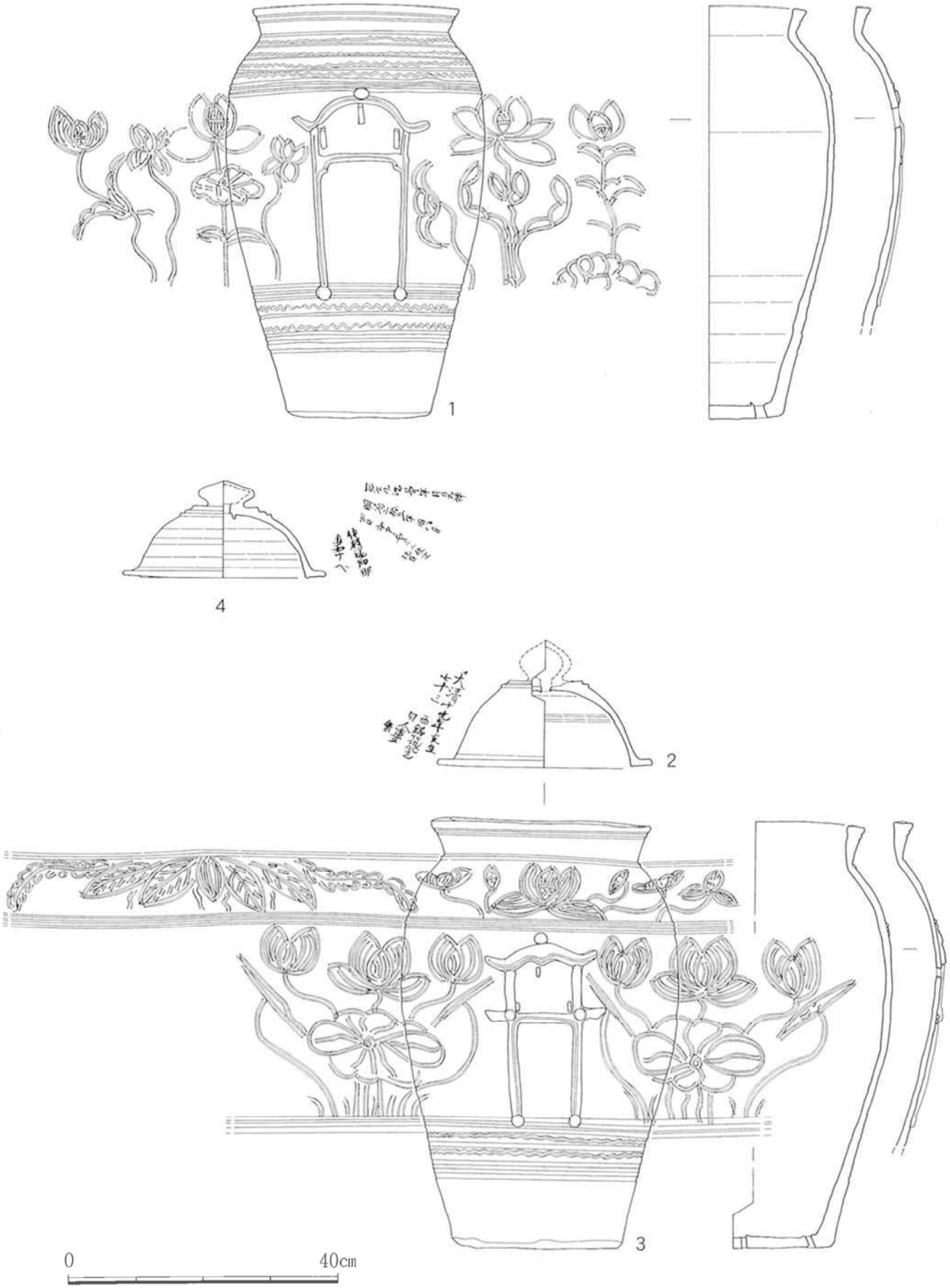
8

0　40cm

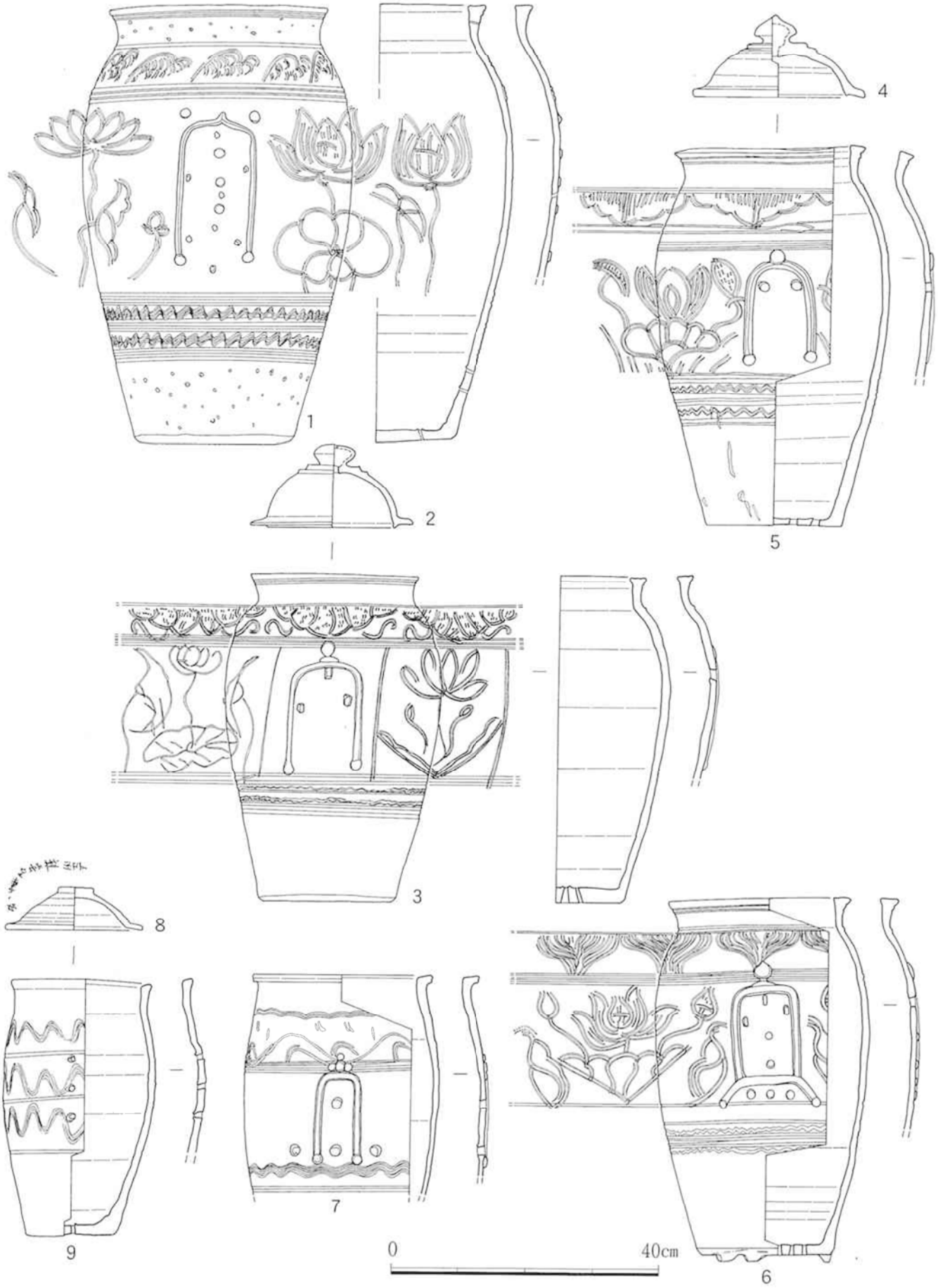
第52図　厨子15



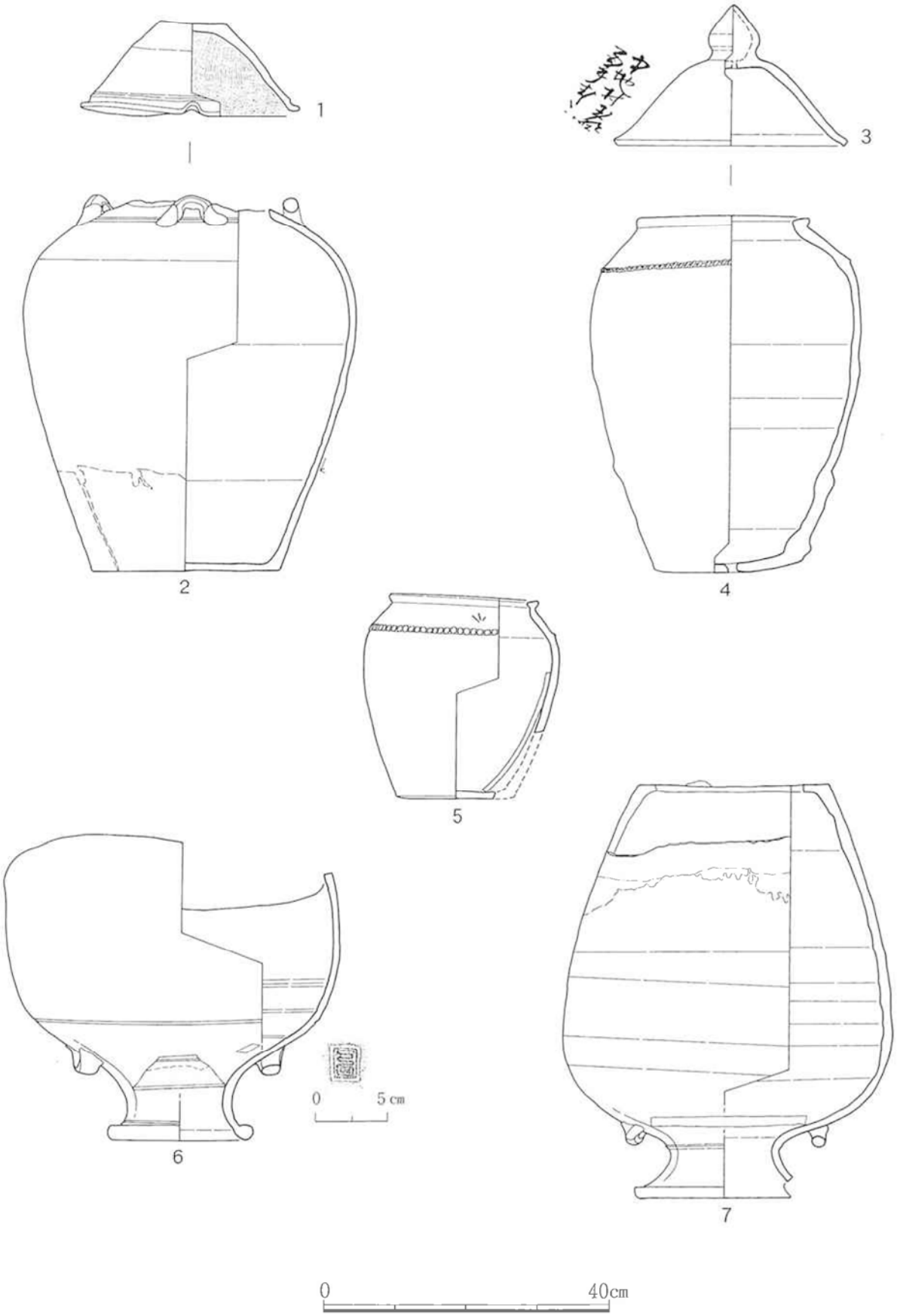
第53図　厨子16



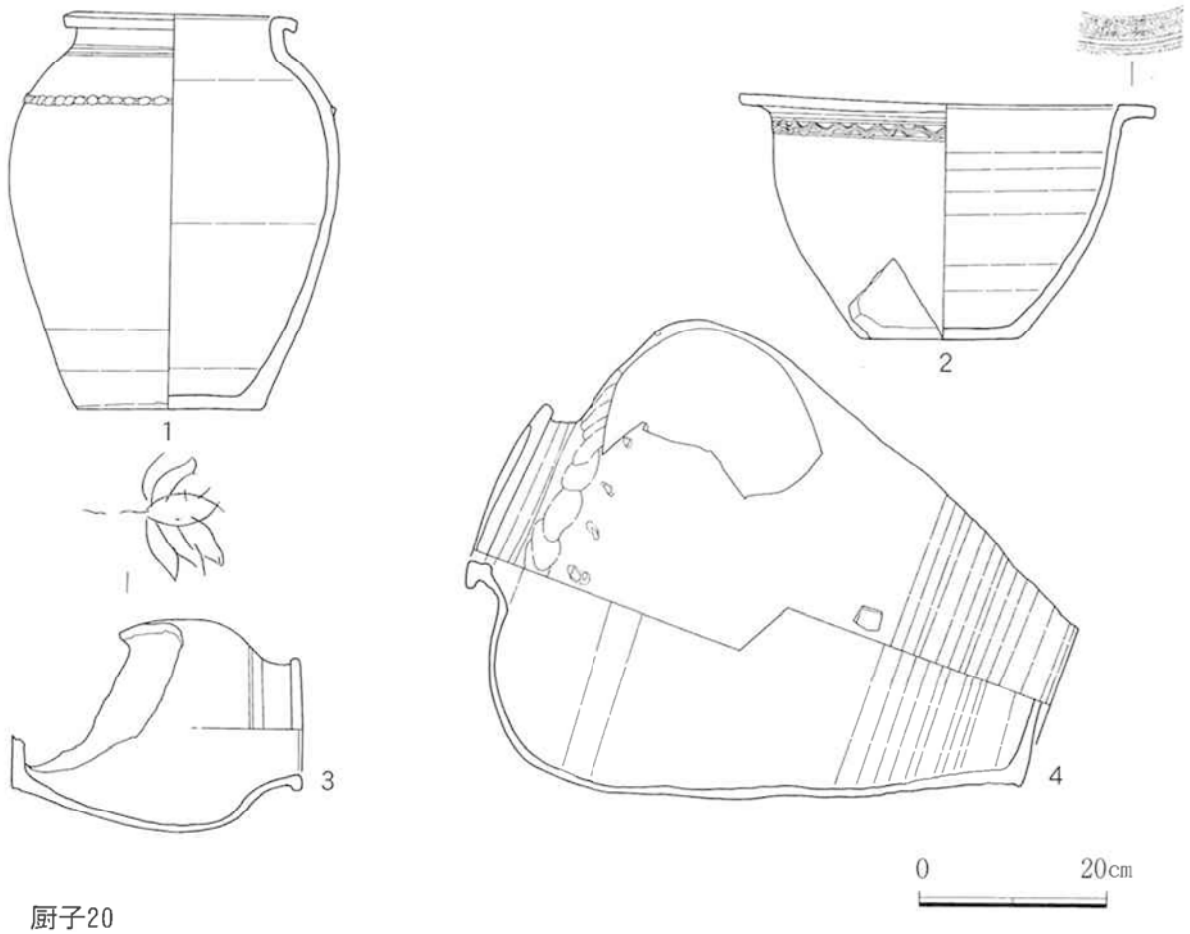
第54図　厨子17



第55図　厨子18

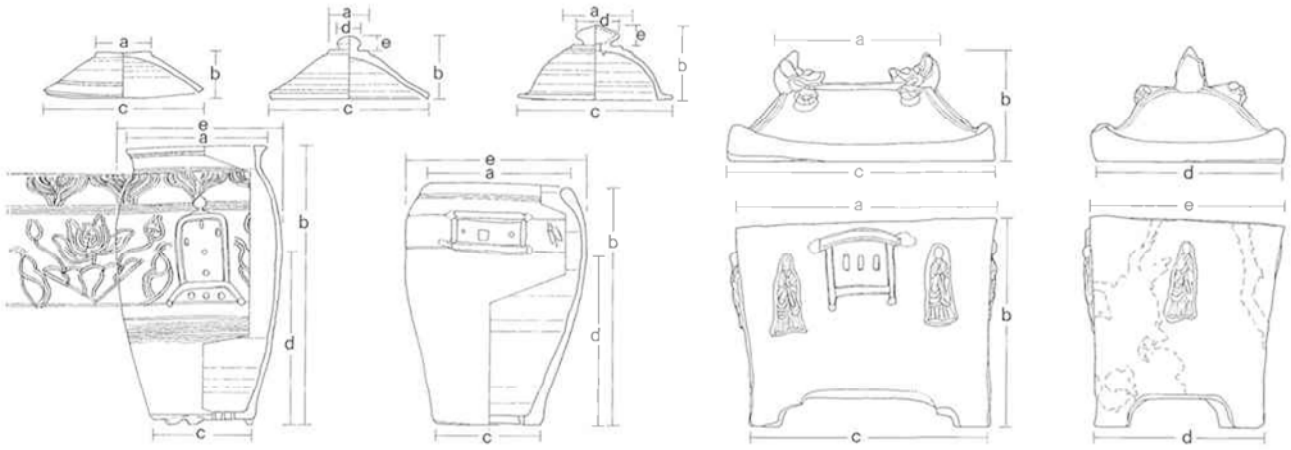


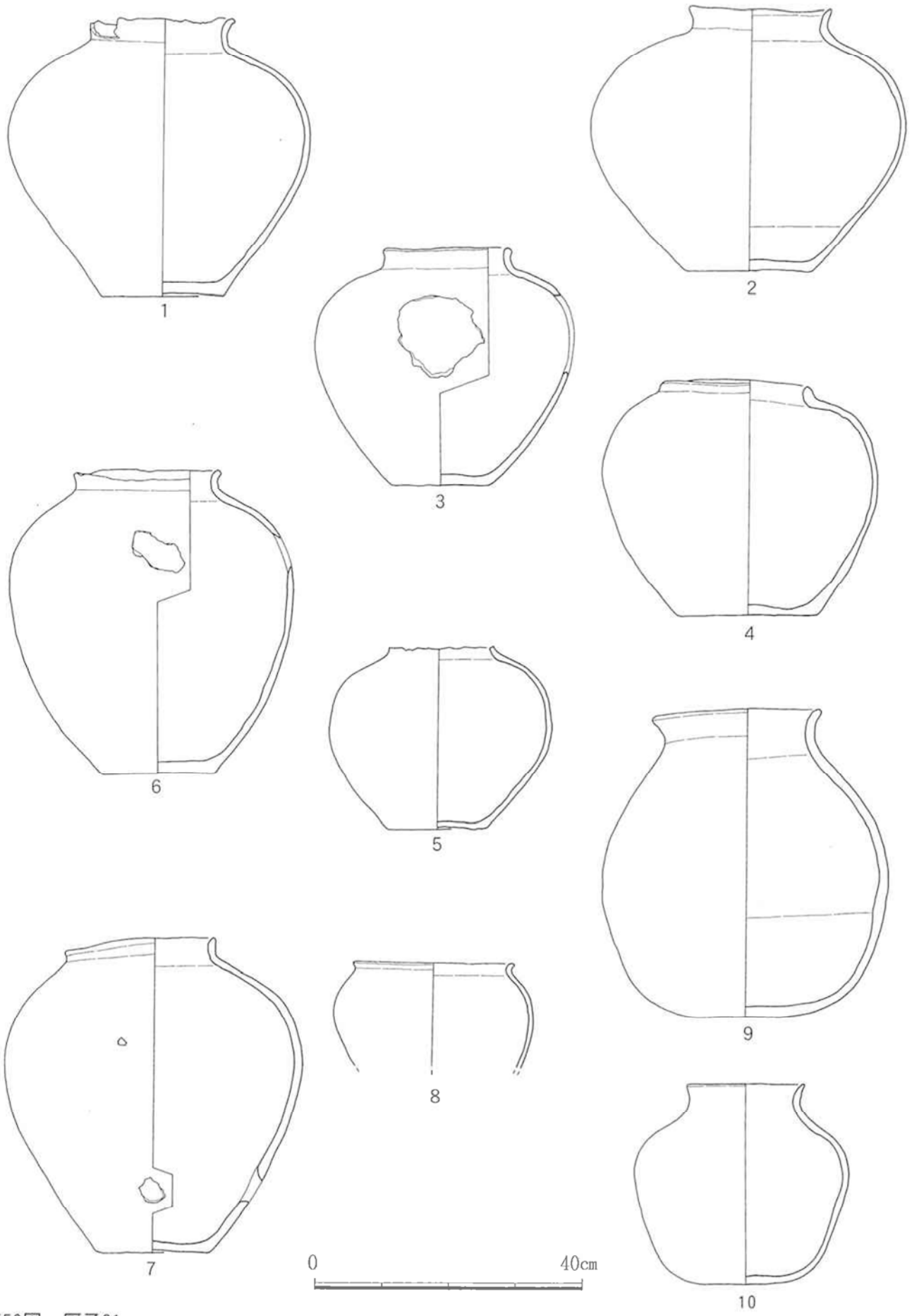
第56図　厨子19



第57図　厨子20

厨子の計測部位





第58図　厨子21

第２節　青磁

青磁の器種としては、碗・皿・小杯・馬上杯・瓶・小壷・茶壷・蓋・香炉・水滴の10器種が確認されており、古墓からの出土としてはバリエーション的にも非常に豊富であり特徴的であるといえる。

ヤッチのガマでの青磁の出土総数は35点で、白磁や青花等の他の中国陶磁器に比して少ない傾向にあるといえる。また、碗・皿の出土点数が多いことも白磁や青花等とは異なる傾向であり特徴的である。

出土地点及び層位別で見てみると、大半が旧１トレンチや旧11号区画外トレンチ、入口側トレンチ等の前庭部の自然堆積土中からの検出であるが、中には各区画内の表面に散乱した状況での表採や10区上段の人骨集中部、また、厨子内検出も少なからず見られた（第３表）。

ヤッチのガマにおいて検出された青磁の中には、12世紀後半に位置付けられる劃花文碗が含まれており注目されるところであるが、全体的には15世紀～16世紀頃のものが主体をなすといえる。しかしながら、先にも述べたように、厨子内と土中出土の資料が接合可能な場合や、土中出土の資料でも層の上下での接合が著しいものが多数あることから、出土遺物から得られる情報等と遺構及び土層堆積状況との関係の詳細については後段の第９部の総括において述べたいと考える。

以下、ヤッチのガマより検出された青磁の分類概念を記述し、特徴的な資料について示すこととする（第59図～第61図）。なお、個々の特徴等の詳細については観察表に記した（第４表）。

１．碗

ヤッチのガマにて検出された青磁碗は、口縁形態から直口口縁と外反口縁の２つに分類して、必要に応じてａ・bなどに細分した。

Ⅰ類　直口口縁

直口口縁タイプの碗には劃花文碗と無鎬蓮弁文碗がある。前者をa、後者をbとした。

ａ劃花文碗　内面に片切り彫りによる沈線等を描いている。高台は低く成形され、内削りは浅めに施されている。

ｂ蓮弁文碗　外面に片切り彫りによる蓮弁文を比較的丁寧に描いている。高台はやや低く成形され、「ハ」の字状に開く。内削りはａに比してやや深めに施されている。畳付外端を斜位に削り取って面取りする。

Ⅱ類　外反口縁

外反口縁タイプには蓮弁文碗・ラマ式蓮弁文碗・無文碗があり、それぞれａ～ｃに細分した。

ａ蓮弁文碗　外面に片切り彫りによる蓮弁文を描いている。高台はやや低めに成形され、「ハ」の字状に開く。内削りはやや深めである。畳付外端を斜位に削り取って面取りする。

ｂラマ式蓮弁碗　比較的大振りな碗である。両面にラマ式蓮弁文を箆削りにより描いている。

ｃ無 文 碗　口縁部が微弱に外反するタイプである。内面に印刻の花文を施している。

２．皿

皿については、口縁形態から直口口縁、外反口縁、口折の３つに大別をした。それぞれ必要に応じａ・ｂなどに細分した。

Ⅰ類　直口口縁

無文皿が確認されている。口唇部は尖り気味で、全体に雑に成形されており、轆轤等の調整痕が顕著である。高台は低く、内削りは浅い。見込みを蛇の目状に釉禿ぎする。

Ⅱ類　外反口縁

外反口縁の皿には、外面の胴部に蓮弁文を描くタイプと無文タイプの２つが確認されており、前者をａ、後者をｂとして細分した。

ａ蓮弁文皿　外面に片切り彫りによる蓮弁文を比較的雑に描いている。高台はやや低く成形され、畳付内端を斜位に削り取る。見込みを蛇の目状に釉禿ぎする。

ｂ無文皿　外反の度合いに若干の差異はあるものの、腰折気味に成形されていることや高台内のみを釉禿ぎしていることなどから同一タイプとして扱った。

Ⅲ類　口折皿

口縁部を逆「L」字状に折り、口折れとする。外面に片切り彫りによる蓮弁文を比較的雑に描いている。高台はかなり低く成形され、畳付外端を斜位に削り取って面取りする。見込みには双魚の印文を施す。

3．小杯

小杯が得られている。いずれも直口口縁タイプで、有文と無文とが確認されている。前者をａ、後者をｂとして細分した。

ａ有文タイプ　外面に線刻細蓮弁文を描くが破片資料であるため全形は判然としない。

ｂ無文タイプ　全体的に雑で高台の内削りなどはかなり雑な成形がなされている。

4．馬上杯

大振りと小振りなタイプが得られている。それぞれⅠ類、Ⅱ類とした。

Ⅰ類　口縁が微弱に外反するタイプであるが、脚を欠損しており、全形は判然としない。外面には調整痕が観察できる。

Ⅱ類　口縁が微弱に外反するタイプで、脚の外面を三角状に成形する。外面には、口縁直下及び胴下部に圏線と胴中央部に線刻の蓮弁文を施している。また脚中央にも圏線を施すものもある。

5．瓶

直口口縁と外反口縁とがあり、口縁直下と頚下部に圏線を施すタイプも確認されている。高台内削りはいずれも「ハ」の字状に成形し、畳付外端を斜位に削り取る。

6．小壷

酒会壷様の小壷が得られている。これに伴う蓋は確認されていない。外面には口縁直下と肩部に圏線を各１本ずつ施している。胴部には縦位の篦描きによる鎬文を描いている。高台内削りはかなり浅く、畳付外端を斜位に削り取り面取りしている。

7．茶壷

茶壷様の小壷が得られているが用途は不明であるため今回は茶壷として扱った。口縁は微弱に外反し、胴中央のやや上部に最大胴径を有する。外底はほぼ水平に成形されており、外端部を斜位に削り取り面取りしている。全体的に雑な成形である。

8．蓋

酒会壷の蓋の外端部と思われる破片資料が得られている。外端部の成形は丸みを帯びており、蓋甲面から外端部の内側まで施釉している。

9．香炉

口縁形態は直口口縁を成しており、口寄口縁の形態を成さないタイプである。胴下部は腰折状に成形されており、腰部下方に三角形状の足を３つ付していたものと思われるが、３足とも欠損していることから、香炉の外底が突出していて足が短く浮き上がっている、いわゆる「千鳥足」タイプもしくは、突出部より足が長くなり地に付く「蝶足」タイプを成していたかは現段階では判然としない。全体の造りとしては、内外面ともに比較的丁寧な造りを成している。

10．水滴

水滴が１点検出されている。胴中央部で下部と上部を張り合わせて成形されており、内外面及び断面に積痕が確認できる。口縁部は窄むように内傾させ、注口と把手を貼り付けている。高台はほぼ水平に成形されており、外端を斜位に削り取り面取りしている。外面胴上部には蓮華様の文様を、下部には蓮弁文がいずれも陽刻により施されている。

※附記：第61図５の瓶については、文章校正中に大橋康二氏により、高台形や高台内の施釉方法、焼成状況等から肥前産の青磁との所見を頂いた。記して感謝申し上げます。

第３表　青磁出土状況

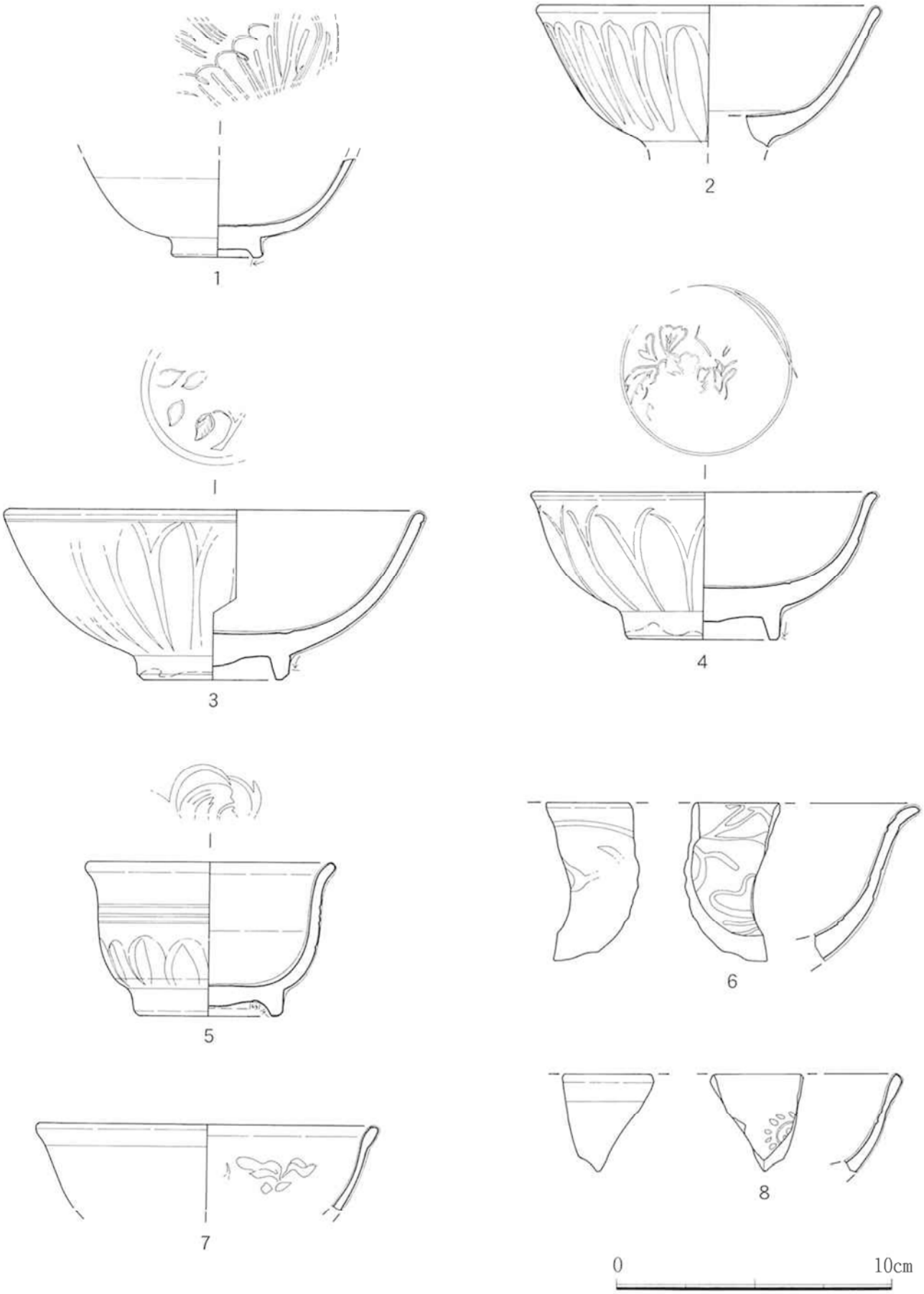
出土地 ＼ 器種・分類			碗									皿						小杯		馬上杯		小杯 or 馬上杯		瓶		小壺	茶壺	蓋	香炉	水滴	合計
			Ⅰ			Ⅱ					不明	Ⅰ	Ⅱ			Ⅲ	不明	a	b												
			a	b		a	b	c					a	b																	
			底	完形	口	完形	口	口	口	胴	胴	完形	完形	完品	完形	完形	口	底	口	完品	完形	口	口	胴	完形	底	完形	完形	湯部	完形	完形	
1～3区	上段					1			2																						3
2区																		1													1
7区																			1												1
10区	集骨ａⅡ						1																								1
	上	Ⅱ				1																									1
		Ⅲ													1																1
12区	Ⅲａ							1																							1
	石積み外										1																				1
13区	黒土																					1	2								3
			1																												1
前庭部	Ⅰ								1																						1
	Ⅲ	d											2																		2
		f																							1		1				2
		i		1																											1
		k																							1						1
		m																			1										1
		o					1													1											2
																												1			1
1～3区上段、10区上Ⅲ・Ⅳ																									1		1				2
2区Ⅰ、2区、前庭部Ⅲａ																1														1	1
10区-22内、11区中Ⅲ、11区下石積み・礫内、前庭部石灰岩崩落				1																											1
10区集骨ａⅠ・Ⅱ・Ⅲ、10区上Ⅲ・Ⅳ												1																			1
10区上Ⅲ・Ⅳ																													1		1
10区下、11区5内、前庭部Ⅰ・Ⅱ																					1										1
11区中Ⅰ、11区下Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲａ'																1															1
11区下石積み、前庭部Ⅲａ'											1																				1
前庭部Ⅲｆ礫敷き・Ⅲｆ																				1											1
合　計			1	1	1	2	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	36

第４表ａ　青磁観察一覧

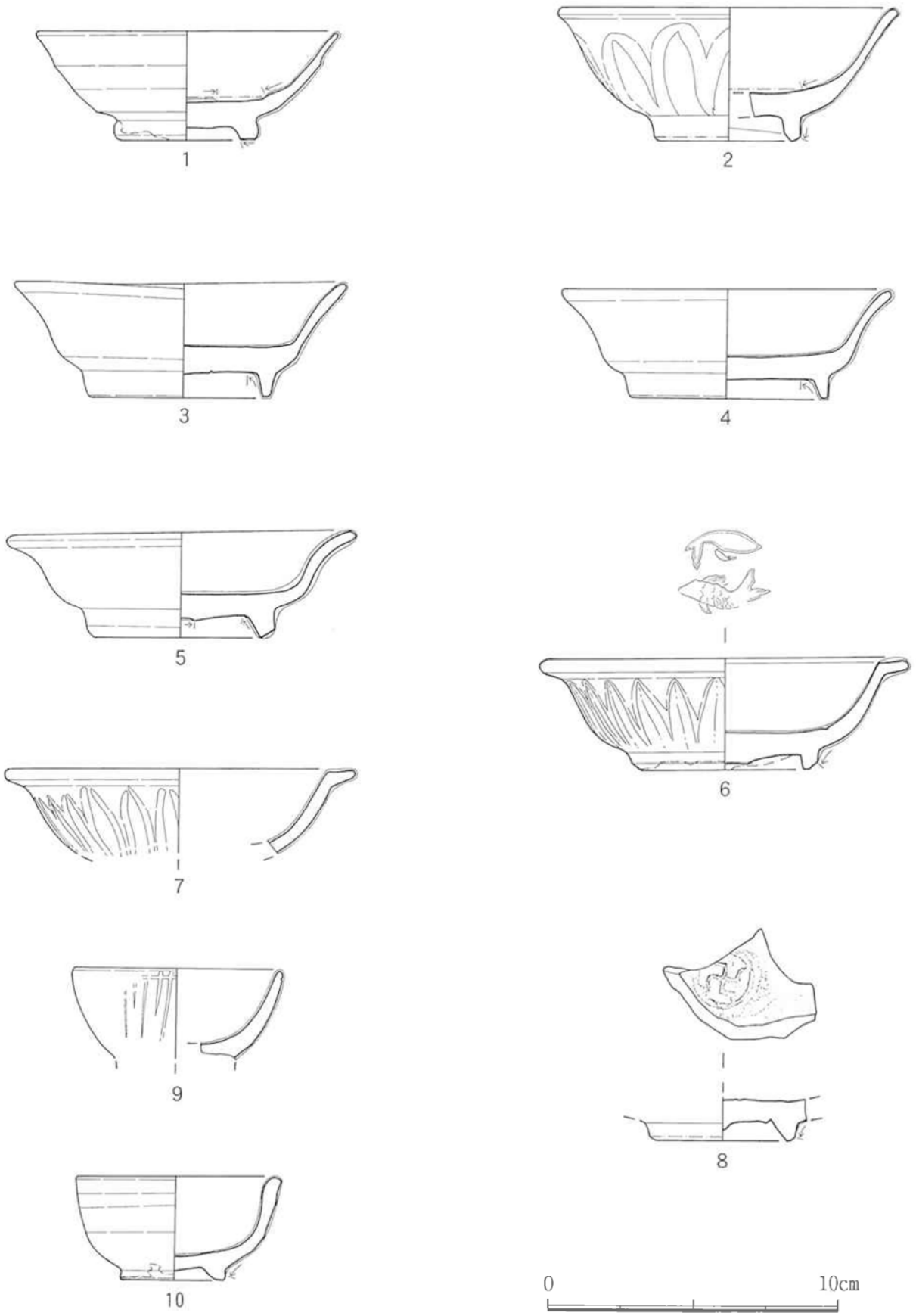
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出　土　地
第59図 図版30	1	碗	Ⅰａ	底部	－ － 3.1	高台は低く、かなり小さい。高台内削りは浅めで畳付外端を斜位に削り取り面取りしている。外面には轆轤痕が観られる。内面には片切り彫りによる文様を描いている。素地は淡灰白色の細粒子で淡灰緑色の釉を外底面以外に施している。	13区
	2		Ⅰｂ	口縁部	12.8 － －	口唇は丸く成形されている。外面に片切り彫りによる蓮弁文をやや雑に描いている。見込みには１本の圏線。淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が観られる。緑灰色の釉を両面に施す。	10区-22内、11区中Ⅲ、11区下石積み・礫内、前庭部石灰岩崩落
	3			完形	15.6 6.3 5.0	口唇は丸く成形されている。高台はやや低く、内削りは深めで畳付外端を斜位に面取りする。外面に片切り彫りによる蓮弁文を比較的丁寧に描き、見込みには１本の圏線と印花文。淡灰白色の細粒子で気泡痕。緑灰色の釉を畳付及び外底面以外に施す。	前庭部Ⅲｉ
	4		Ⅱａ	完形	12.8 5.5 5.4	口唇は丸く成形されている。高台はやや低く、内削りは深めで畳付外端を斜位に面取りする。淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が観られる。緑灰色の釉を畳付及び外底面以外に施している。	10区上Ⅱ
	5			完形	9.2 5.7 5.0	小振りな碗である。口唇は丸い。高台は低く、内削りは浅めである。口縁直下に３本の圏線と胴部に片切り彫りによる雑な蓮弁文を描く。見込みに印花文を施す。淡灰白色の細粒子で白色の鉱物を含む。緑灰色の釉を外底面以外に施す。	1～3区上段
	6		Ⅱｂ	口縁部	－ － －	比較的大振りな碗。口唇は丸い。両面にラマ式蓮弁文を描いている。素地は淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕で黒色の鉱物を僅かに含む。緑灰色の釉を両面に施している。	12区Ⅲａ
	7		Ⅱｃ	口縁部	12.6 － －	口縁部が微弱に外反するタイプである。口縁外面が若干肥厚する。内面に陽刻の花文を施している。素地は灰白色の微粒子である。両面に濃緑灰色の釉を施している。両面に荒い貫入が観られる。	1～3区上段
	8			口縁部	－ － －	口縁部が微弱に外反するタイプである。口縁外面が若干肥厚する。内面に陽刻の花文を施している。素地は灰白色の微粒子である。両面に濃緑灰色の釉を施している。両面に荒い貫入が観られる。	1～3区上段
第60図 図版30	1	Ⅲ	Ⅰ	完形	10.7 3.9 4.9	口唇部は尖り気味に成形され、外面は雑な成形で轆轤痕が顕著である。高台は低く、内削りは浅めで、畳付外端を斜位に削り取る。淡灰白色の細粒子で、外底面以外に淡灰緑色の釉を施すが見込みを蛇の目状に釉剥ぎする。全体に細かい貫入が入る。	11区下石積み、前庭部Ⅲａ'
	2		Ⅱａ	完形	12.0 4.7 4.8	高台はやや低く成形され、内削りは深めである。畳付両端を斜位に面取りしている。胴部外面に比較的雑に蓮弁文を描いている。淡灰白色の微粒子で、外底面以外の両面に緑灰色の釉を施しているが、見込みを輪状に掻き取っている。	10区集骨ａⅠ・Ⅱ・Ⅲ、10区上Ⅲ・Ⅳ

第４表ｂ　青磁観察一覧

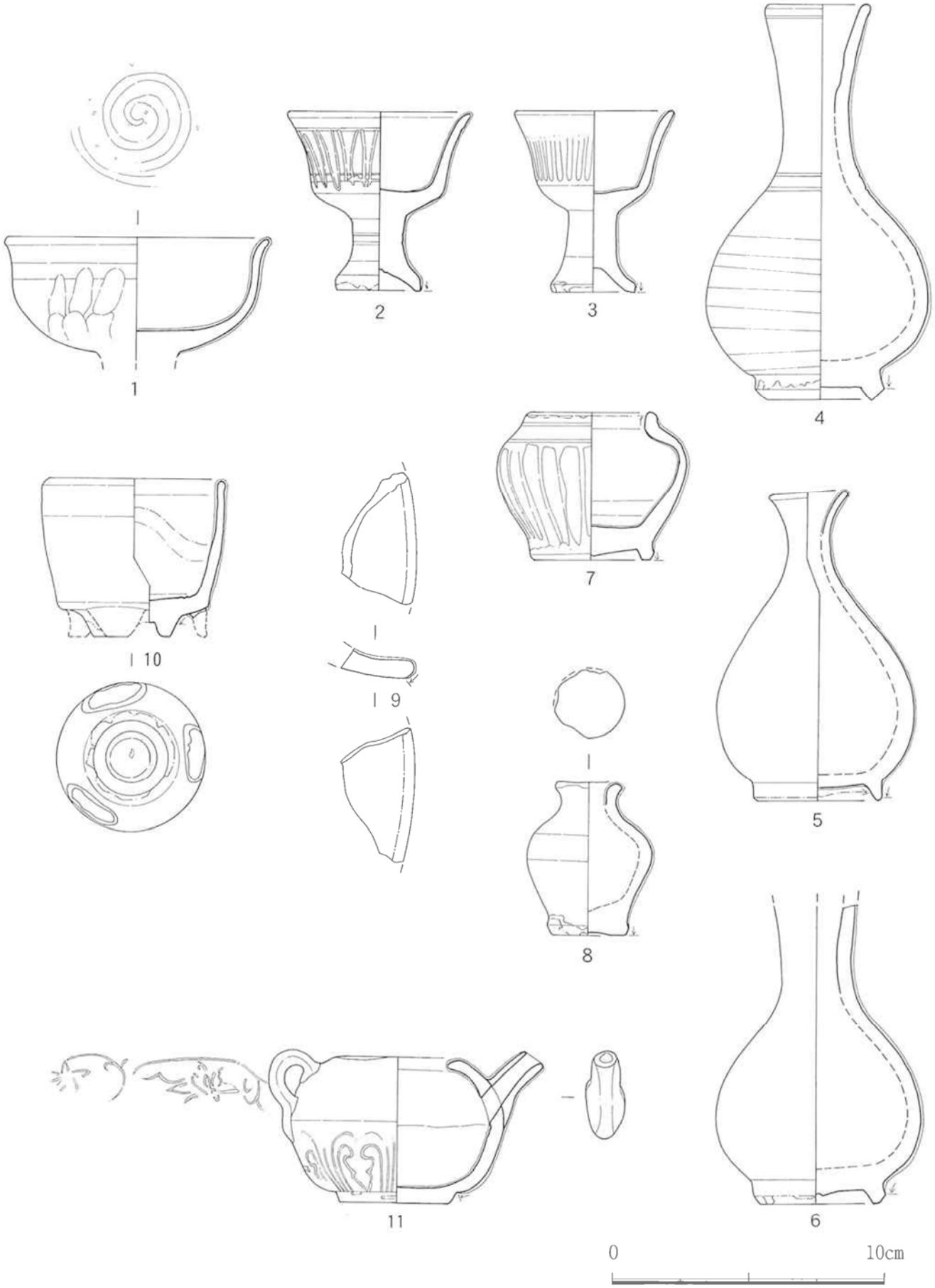
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出　土　地
第60図 図版30	3	皿	Ⅱｂ	完品	11.7 4.1 6.3	高台を逆三角形状に成形し、腰折気味に立ち上がらせており、全体に丁寧な成形である。両面に緑灰色の釉を施しており、外底面の釉を輪状に掻き取っている。全体に荒い貫入が観られる。	前庭部Ⅲｄ
	4			完品	11.6 3.9 6.8	高台を逆三角形状に成形し、腰折気味に立ち上がらせており、全体に丁寧な成形である。両面に緑灰色の釉を施しており、外底面の釉を輪状に掻き取っている。全体に荒い貫入が観られる。	前庭部Ⅲｄ
	5			完形	12.2 3.8 6.1	高台を逆三角形状に成形し、腰折気味に立ち上がらせており、全体に丁寧な成形である。素地は淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が観られる。両面に濃緑灰色の釉を施すが、外底面を蛇の目状に掻き取っている。	10区上Ⅲ
	6		Ⅲ	完形	12.9 3.9 5.8	口縁部を逆「Ｌ」字状に折る。高台は低い。内削りは浅く雑に成され、畳付外端を斜位に面取りする。外面に片切り彫りによる蓮弁文を雑に描く。見込みには双魚の印文。淡灰白色の微粒子で淡緑灰色の釉を外底面以外に施す。全体に荒い貫入が入る。	11区中Ⅰ、11区下Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲａ'
	7			口縁部	12.3 － －	口縁部を逆「Ｌ」字状に折る。高台は低い。外面に片切り彫りによる蓮弁文を比較的丁寧に描いている。淡灰白色の細粒子で淡緑灰色の釉を両面に施す。	2区Ⅰ、2区、前庭部Ⅲａ
	8		不明	底部	－ － 4.7	底部資料である。高台はかなり低く、内削りも浅めに成形されており、畳付外端を斜位に削り取り面取りする。見込みには「卍」の印文が施されている。素地は淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕が観られる。	2区
	9	小杯	a	口縁部	7.4 － －	口唇は尖り気味に成形されており、全体的に丸みを持って成形されている。外面には口縁直下に１本の圏線と線刻細蓮弁文を描いている。素地は淡赤褐色の粗粒子で焼成不良気味である。両面に濃緑黄色の釉を施している。両面には荒い貫入が観られる。	7区
	10		b	完品	7.2 3.7 3.5	口唇は丸く成形されており、高台内削りはかなり雑に削り取られている。外面には調整痕が顕著である。淡緑灰色の釉を両面に厚く施している。	前庭部Ⅲｏ
第61図 図版31	1	馬上杯	Ⅰ	口縁部	10.0 － －	口縁部が微弱に外反するタイプである。脚部を欠損する。胴部外面及び見込みには調整痕が観察できる。素地は白色の細粒子で気泡痕が観られる。全体に淡青灰色の釉を厚く施している。両面に貫入が入る。	10区下、11区-5内、前庭部Ⅰ・Ⅱ
	2		Ⅱ	完形	7.0 6.7 3.2	口縁部が微弱に外反するタイプである。脚の断面形が三角形状を呈する。外面には口縁直下及び胴下部に圏線を廻らせ、胴中央に細線刻の蓮弁文。脚中央部にも２本の圏線を廻らす。淡灰白色の細粒子で淡緑灰色の釉を脚内面以外に施している。全体に細かい貫入が入る。	前庭部Ⅲｆ礫敷き・Ⅲｆ
	3			完形	6.0 6.8 3.1	口縁部が微弱に外反するタイプである。脚の断面形が三角形状を呈する。素地は灰色の粗粒子である。濁った緑黄色の釉を脚内面以外に施している。全体的に細かい貫入が観られる。	前庭部Ⅲｍ
	4	瓶	－	完形	4.0 14.8 3.9	直口口縁の瓶。高台内削りは浅く、「ハ」の字状に削り出され、畳付外端を斜位に面取りする。外面には口縁直下に１本、頚部に２本の圏線。淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕が観られ、外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。	前庭部Ⅲｋ
	5			完形	3.0 11.6 4.5	外反口縁タイプの瓶である。高台内削りは浅く、「ハ」の字状に削り出され、畳付外端を斜位に面取りする。文様等は観察できない。畳付以外に淡灰緑色の釉を施しているが、全体的に細かい貫入が観られる。	前庭部 (肥前産)
	6			底部	－ － 4.2	直口口縁タイプの瓶である。高台内削りは浅く、「ハ」の字状に削り出され、畳付外端を斜位に面取りする。素地は淡灰白色の細粒子で、外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。全体的に細かい貫入が観察できる。	前庭部Ⅲｆ
	7	小壷	－	完形	4.9 5.5 4.3	酒会壷様の小壷。轆轤成形後、内削りは浅く、畳付外端を斜位に面取りする。外面には口縁直下と肩部に１本の圏線を施し、胴部には縦位の篦掻き鎬文を描く。淡灰白色の細粒子で口唇部と外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。両面に細かい貫入。	前庭部
	8	茶壷	－	完形	2.6 5.7 2.8	口縁部は微弱に外反し、胴中央のやや上部に最大胴径を有する。外底面は水平に成形され、外端部には斜位の面取り。全体的に雑な成形である。淡灰白色の細粒子で底部際まで濁った淡緑灰色の釉を厚く施している。全体に荒い貫入。	前庭部Ⅲｆ
	9	蓋	－	端部	－ － －	酒会壷の蓋の外端部であると思われる。先端部は丸みを持って成形されている。素地は端灰白色の細粒子である。蓋甲面から外端部の下方まで淡緑灰色の釉を施している。	前庭部Ⅲ
	10	香炉	－	完形	6.9 6.0 2.8	直口口縁で、胴下部は腰折状に成形。腰下方に三角状の足を３つ付すものと思われるが３足とも欠損。「千鳥足タイプ」もしくは「蝶足タイプ」のいずれかは判然としない。淡灰白色の微粒子だが露胎部は燈褐色を呈す。淡緑黄色の釉で細かい貫入。	10区上Ⅲ・Ⅳ
	11	水滴	－	完形	4.6 5.4 4.1	胴中央部で下部と上部を張り合わせた後に注口と把手を貼り付ける。高台は水平に成形され、外端を斜位に面取り。外面の胴上部には蓮華文、下部には蓮弁文を陽刻で施す。淡灰白色の微粒子で外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。全体に荒い貫入。	1～3区上段、10区上Ⅲ・Ⅳ



第59図　青磁１　碗



第60図　青磁２　皿（１～８）、小杯（９～10）



第61図　青磁３　馬上杯（１～３）、瓶（４～６）、小壺（７）、茶壺（８）、蓋（９）、香炉(10)、水滴(11)

第３節　白磁

白磁の器種としては、碗・小碗・皿・杯・小杯・瓶の僅かに６器種が確認されているのみである。ヤッチのガマにおいての白磁の出土総数は158点であり、中でも小杯は89点と６器種中で最も多く検出しており、これに次いで碗が45点と続き、これに以下、皿、小碗、杯、瓶と続いている状況である。

県内の近世古墓等の古墓調査において小杯の検出頻度が高い事例は比較的多いと言えるが、今回のように小杯が白磁出土総点数の約56％を占めるというような例はなく、非常に特徴的な傾向であるといえ、これについては次節の青花も同様の傾向であり特筆されるところである。

ヤッチのガマにおける白磁の出土地点及び層位別の出土傾向としては、前節の青磁と同様に大半が旧１トレンチや旧11号区画外トレンチ、入口側トレンチ等のいわゆる前庭部に自然堆積した土中からの検出であるが、11号区画中段及び下段造成層からの検出も多くみられた。しかしながら、逆に他の区画内の表採や造成層及び堆積層からの検出は少ない傾向にあるといえる（第５表）。

今回検出された白磁は、17世紀後半～18世紀前半・中頃に位置付けられる福建・広東系の諸窯や徳化窯、漳州窯等を生産地とするものが主体を成しているといえるが、これらの詳細や遺構との関係等については後段にて述べる事としたい。

以下、ヤッチのガマより検出された白磁の分類概念について述べ、特徴的な資料について図示することとする（第62図～第64図）。なお、個々の詳細については観察表に記した（第７表）。

１．碗

ヤッチのガマにて検出された白磁碗は、口縁形態から直口口縁・外反口縁・口折口縁の３つに大別して、必要に応じてａ・ｂ等に細分した。

Ⅰ類　直口口縁

直口口縁タイプの碗には、高台脇から逆「ハ」の字状に開くタイプと丸みを持って立ち上がるタイプがあり、前者をａ、後者をｂとして細分した。

ａ高台脇から逆「ハ」の字状に開き、外底面及び見込み部分を露胎とする。大振りと小振りとがあり、高台や畳付の成形に特徴が観られる。

ｂ高台脇から丸みを持って立ち上がり、見込みを蛇の目状に釉禿ぎする。

Ⅱ類　外反口縁

高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁をきつく外反させるタイプである。見込みにはハリ支えと思われる積痕が観られる。

Ⅲ類　口折口縁

高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁を逆「Ｌ」字状に折り、口折れ状に成形する。

２．小碗

ヤッチのガマにて検出した白磁の小碗については、口縁形態から直口口縁と外反口縁の２つに大きく分類して、必要に応じて１・２に細分を試みた。

Ⅰ類　直口口縁

直口口縁タイプの小碗には轆轤成形と型成形とがあり、前者を１、後者を２として細分した。

１轆轤成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。

２型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がるが、１に比して若干開き気味である。

Ⅱ類　外反口縁

高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁を微弱に外反させるタイプである。

３．皿

皿については、口縁形態や全体の形状から直口口縁、外反口縁、碁笥底、角皿の４つに分類を試みた。

Ⅰ類　直口口縁

高台脇から若干の丸みを持って立ち上がるタイプである。

Ⅱ類　外反口縁

高台脇から若干の丸みを持って立ち上がり、口縁部をきつく外反させるタイプである。

Ⅲ類　碁笥底

逆「ハ」の字状にかなり開き、外底面を碁笥底状に削り出して成形するタイプである。

Ⅳ類　角皿

型成形による角皿である。上面観は正方形を呈し、外面の四隅には縦位の凹部が入る。

4．杯

杯は直口口縁タイプのみが得られている。型成形によるものである。外底の見込みには陽刻の印花文もしくは銘が入る。

5．小杯

小杯には口縁形態や全体の形状から直口口縁、外反口縁、稜花、八角の４つに分類し、必要に応じて１・２などに細分を試みた。

Ⅰ類　直口口縁

直口口縁タイプには、肥厚帯を有しないものと有するものとがあり、前者を１、後者を２として細分した。また胴下部を腰折気味に成形したものも直口口縁の３として今回は取り扱った。１～３のいずれも型成形によるものである。

１高台脇から丸みを持って立ち上がる。口径に比して器高の高い、やや低い、低いタイプとがある。

２外面の口縁直下に篦削りによる肥厚帯を成形するタイプである。

３高台脇から角度を変えて腰折気味に立ち上げて成形するタイプである。

Ⅱ類　外反口縁

高台脇から丸みを持たせて立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。口径に比して器高が高い、やや低い、低いタイプ、また高台の内削りが浅いのと深いタイプとが観られるが、これらのいずれも型成形によるものであると考えられる。

Ⅲ類　稜花

口縁部及び胴部外面全体を稜花状に成形しており、大振りと小振りのタイプがある。これらのいずれも型成形によるものであると考えられる。

Ⅳ類　八角

口縁部及び胴部外面全体を八角状に成形しており、型成形によるものであると考えられる。

6．瓶

瓶が検出されている。轆轤成形によるもので、口縁部はきつく外反するタイプである。全体の形状からすると、いずれもラッキョウ型といえるが、最大胴径が胴中央にあるものと下部にあるものとが確認されている。

※附記：第63図４の小碗及び第64図５・13の小杯、24の瓶については、文章校正中に大橋康二氏により肥前産白磁との所見を頂いた。記して感謝申し上げます。

第５表　白磁出土状況

出土地＼器種・分類			碗													小碗					皿								杯		小杯																	瓶			器種不明		合計
			I							II				III	小計	I			II	小計	I		II		III		IV	小計		小計	I								II			III			IV	不明	小計			小計		小計	
			a				b									1	2														1				2	3																	
			完形	口	胴	底	完形	口	胴	完形	口	胴	底	完形		完形	完品	完形	完形		完形	底	完形	口	完形	口	完形		完形		完品	完形	口	底	完形	完品	完形	口	完品	完形	口	完品	完形	口	完形	胴		完形	底		胴		
1区	I																													1															1						1
1区	III	f礫上																																				1								1						1
1区	III																														1														1						1
2区	II																													1	1									1						3						3
2区																																								1						1						1
3区	1内			1											1																																						1
3区	I																																														1	1				2	2	3
4区	散乱7																																					1								1						1
8区	散乱7																																														1	1						1
10区	上III			4		1									5																										1	1						2						7
10区	中II			2	2										4							1						1																									5
10区	下					1									1																																						1
11区	中														1	1																1															1						2
11区	下	I											1		1																			1	1						1					2	5						6
11区	下	石積み			1		1			1						3																																						3
11区	下	礫内																													1																1						1
12区	I～II																															2	2							1	1						6						6
12区	III	a																											1	1		3							3	2							8						9
12区	III	b																1			1																				1							1						2
12区	石積み外																																					1											1						1
12区																																		1														1						1
13区	黒土																																																				1	1	1
13区																																	1							1							2						2
前庭部	I			1											1																	1								1	1						3						4
前庭部	III	a																			1	1									1	1	1		2													2	5						7
前庭部	III	a'	1		1	1		1		1	2				7			1		1						1		1			2	1															3						12
前庭部	III	b																														1	3							2	2							8						8
前庭部	III	c					1								1																																						1
前庭部	III	e																																						1								1						1
前庭部	III	f礫敷き			1		1									2																																						2
前庭部	III	f礫上					1									1																																						1
前庭部	III	f			1											1																1	3								2							6						7
前庭部	III	g																																											1					1						1
前庭部	III	i																														1															1						1
前庭部	III	n																														1									2						3				1	1	4
前庭部	III	o																									1			1																									1
前庭部	III																1				1			1	1				2												1	1					1	3						6
前庭部	根石下																														1	1																							1
前庭部	石積み			1											1																																				1	1	2
前庭部	礫上					1									1																	1															1						2
前庭部	石灰岩崩落				1										1																										1						1						2
前庭部	攪乱																	1			1											2																2		1	1			4
北側斜面																																							1											1						1
洞内	T.P			2											2																																						2
1区-23内、12区-2内、12区I～II																			1	1																																	1
1区III、前庭部III i・III																																			1														1						1
2区II、10区、11区下石積み・礫内、前庭部I・III a'・石積み			1												1																																						1
2区II、2区、前庭部																					1							1																									1
10区上II、11区中、13区黒土、前庭部III a'																									1			1																									1
10区上III、10区中II																																								1							1						1
10区上III、10区中石列、前庭部I・III a・III f							1								1																																						1
10区上III、10区下				1											1																																						1
10区、前庭部I				1											1																																						1
11区中、前庭部I・III a'・III f			1												1																																						1
11区中下、11区下I・礫内、11区散乱、12区III a、前庭部I・III a・石積み・石灰岩崩落			1												1																																						1
11区下I、前庭部III a'											1				1																																						1
11区下石積み、13区黒土、前庭部II・III a'			1												1																																						1
11区下石積み、前庭部III a'・礫上・石灰岩崩落							1								1																																						1
11区下石積み、前庭部III b・III i																																								1							1						1
11区、前庭部I、北側斜面																																								1							1						1
12区I～II・III a・III f、前庭部I			1												1																																						1
12区I～II・III a、前庭部III b																											1	1																									1
12区I～II、前庭部II・III a																																																	1		1			1
12区I～II、前庭部III b						1									1																																						1
12区III a、前庭部III b、北側斜面			1												1																																						1
12区石積み外、前庭部I、北側斜面							1								1																									1							1						2
13区黒土、13区																																											1				1						1
前庭部I・II・III a'																																1															1						1
前庭部I・III a'・III h																																													1		1						1
前庭部II・III b																																1															1						1
前庭部III b・III f・III l																																												1			1						1
前庭部III f礫敷き・礫上												1			1																																						1
不明								1							1																			1					1					1				3						4
合計			7	16	4	8	4	2	1	1	3	1	1	1	49	1	2	1	2	6	1	1	1	1	2	1	1	8	3	3	9	21	9	1	1	1	1	1	9	15	10	1	2	1	1	7	90	1	1	2	5	5	163

第６表　白磁計測表

器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
碗	Ⅰa	福建・広東	12.0	4.1	4.5	11区中下、11区下Ⅰ・礫内、11区散乱、12区Ⅲa、前庭部Ⅰ・Ⅲa・石積み・石灰岩崩落
			13.2	4.8	5.2	11区中、前庭部Ⅰ・Ⅲa'・Ⅲf
			14.0	5.1	5.2	12区Ⅲa、前庭部Ⅲb、北側斜面
	Ⅰb		10.6	4.9	5.0	前庭部Ⅲc
			11.0	5.4	5.4	12区石積み外、前庭部Ⅰ、北側斜面
小碗	Ⅰ2	徳化	7.4	4.9	3.7	前庭部Ⅲa*
			8.8	4.1	3.8	前庭部撹乱
	Ⅱ		8.7	5.0	3.6	1区-23内、12区-2内、12区Ⅰ～Ⅱ
Ⅲ	Ⅲ	福建・広東	4.8	2.7	3.8	前庭部Ⅲo
杯	―	徳化	7.9	3.5	3.3	前庭部根石下
			8.2	3.5	3.6	前庭部Ⅲa
小杯	Ⅰ1	徳化	3.5	2.2	1.7	12区Ⅲa
			3.9	2.0	1.9	前庭部Ⅲa
			4.0	1.8	1.7	前庭部Ⅲj
			4.0	2.0	1.9	2区Ⅱ
			4.0	3.1	2.2	1区Ⅰ
			4.1	2.1	1.8	前庭部Ⅲa*
			4.1	2.7	2.0	11区下礫内
			4.2	2.2	1.9	前庭部Ⅲn
			4.2	2.5	2.1	前庭部Ⅲb
			4.2	2.6	2.1	前庭部Ⅲa
			4.2	2.6	2.2	前庭部Ⅲb
			4.3	2.0	1.8	12区Ⅰ～Ⅱ

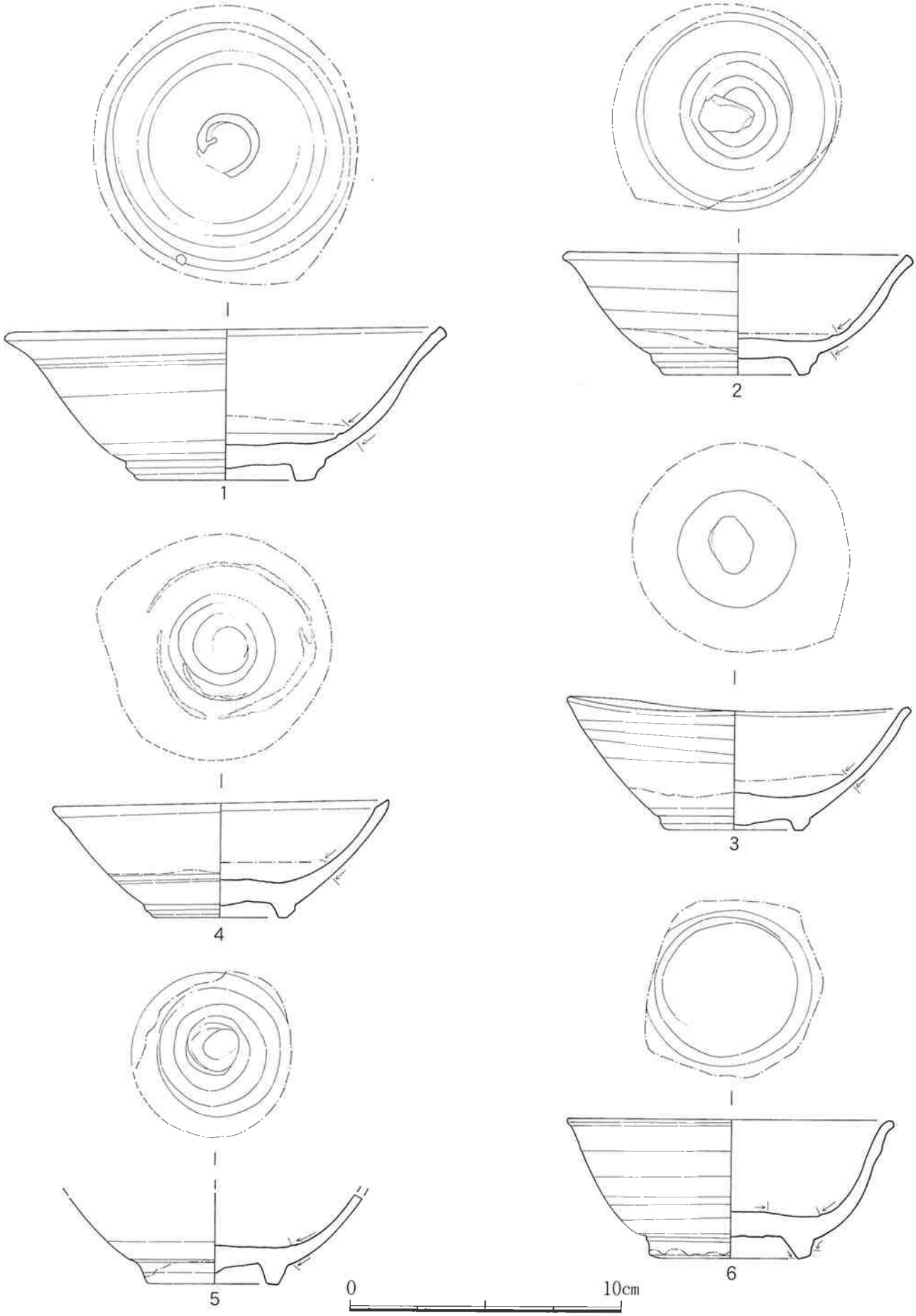
器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
小杯	Ⅰ1	徳化	4.3	2.7	2.2	2区Ⅱ
			4.3	3.0	2.0	前庭部礫上
			4.3	3.5	2.2	12区Ⅲa
			4.4	2.7	2.1	前庭部Ⅲb
			4.4	2.9	2.0	前庭部撹乱
			4.4	3.0	2.0	12区Ⅲa
			4.6	3.3	2.0	前庭部Ⅲf
			4.7	3.3	2.2	前庭部Ⅲb
			5.0	2.3	1.9	前庭部Ⅱ・Ⅲb
			5.0	3.8	2.6	前庭部Ⅲf
			5.1	3.5	2.4	前庭部Ⅲf
			5.1	3.6	2.4	前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa*
	Ⅱ		3.5	2.4	1.7	13区
			3.7	2.2	1.6	4区散乱7
			3.7	2.2	1.6	前庭部Ⅲe
			4.1	2.9	2.0	12区Ⅲa
			4.2	3.1	2.3	前庭部Ⅰ
			4.2	3.2	2.1	12区石積み外、前庭部Ⅰ、北側斜面
			4.5	3.2	2.1	12区Ⅰ～Ⅱ
			4.6	2.8	2.1	10区上Ⅲ、10区中Ⅱ
			4.6	3.1	1.9	前庭部Ⅲ
			4.6	3.1	2.2	10区上Ⅲ
			4.6	3.3	2.2	12区Ⅲa
			4.8	3.3	2.5	前庭部Ⅲb
			5.3	3.7	2.3	前庭部Ⅲb

第７表ａ　白磁観察一覧

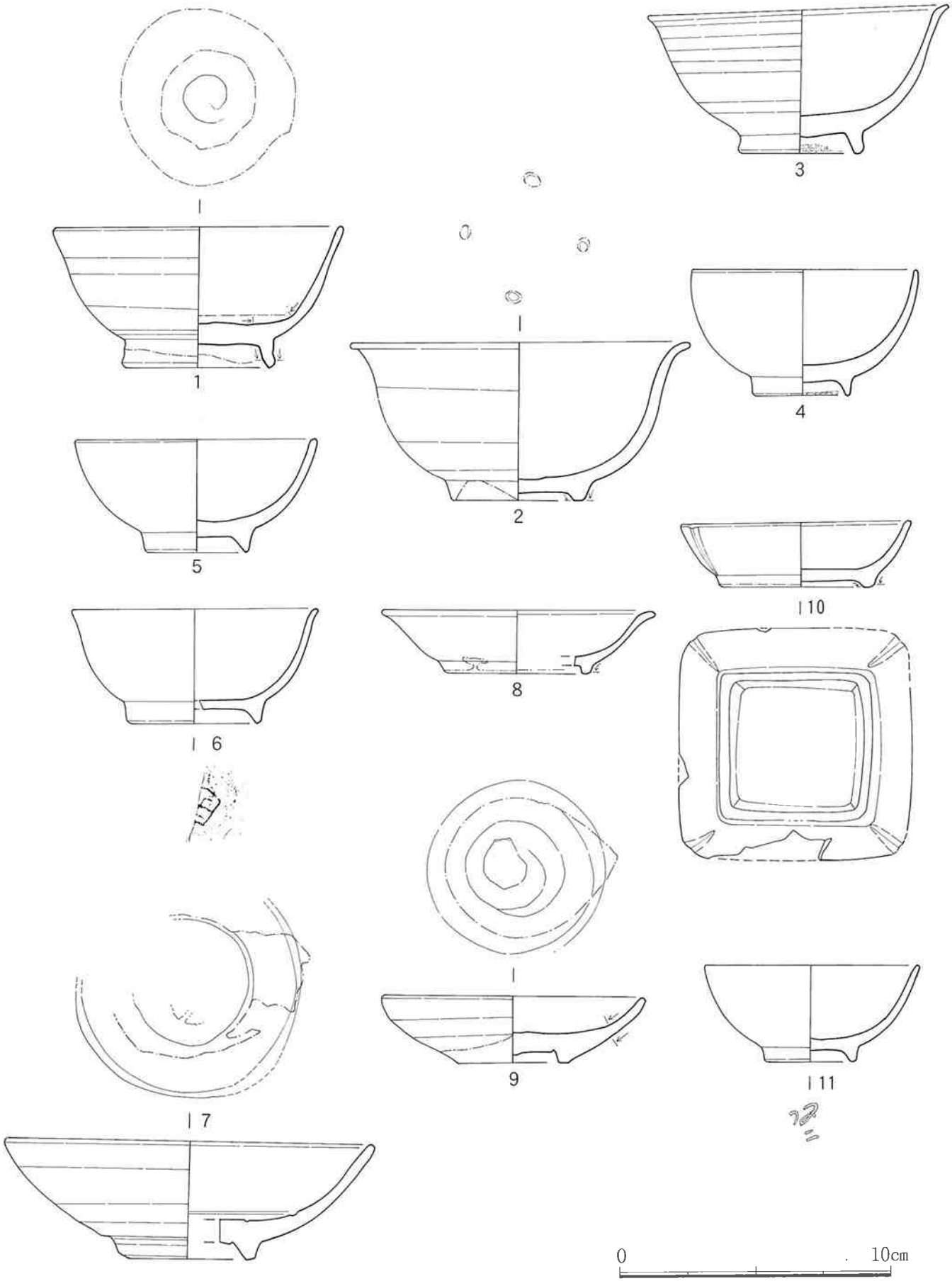
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	産地	出土地
第62図 図版31	1	碗	Ⅰa	完形	16.4 5.8 6.6	高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開く。高台は低く、高台内削りは浅い。畳付外端を抉るように斜位に削り取る。外面には轆轤痕が明瞭で雑な成形である。白色の細粒子で、淡黄白色の釉を施すが、外底面及び見込み露胎とする。	福建・広東	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅰ・Ⅲf
	2			完形	13.1 4.5 5.4	高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開く。高台は低く、高台内削りは浅い。畳付外端を抉るように斜位に削り取る。外面には轆轤痕が明瞭で雑な成形である。素地は淡灰白色の細粒子で濁った淡灰白色の釉を施すが、外底面及び見込みを露胎とする。		11区下石積み、13区黒土、前庭部Ⅱ・Ⅲa'
	3			完形	12.8 4.9 5.1	高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開く。高台は低く、高台内削りは浅い。畳付外端を斜位に削り取る。外面には轆轤痕が明瞭で雑な成形である。素地は白色の細粒子で淡黄白色の釉を施すが、外底面及び見込みを露胎とする。		前庭部Ⅲa*
	4			完形	12.5 4.4 5.0	高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開く。高台は低く、高台内削りは浅い。畳付外端を斜位に削り取る。外面には轆轤痕が明瞭で雑な成形である。素地は淡灰白色の細粒子で淡灰白色の釉を施すが、外底面及び見込みを露胎とする。		2区Ⅱ、10区内、11区下石積み・礫内、前庭部Ⅰ・Ⅲa'・石積み
	5			底部	― ― 4.9	高台は低く、高台内削りは浅い。畳付外端を斜位に削り取る。外面には轆轤痕が明瞭で雑な成形である。素地は白色の細粒子で濁った淡灰白色の釉を施すが、外底面及び見込みを露胎とする。		12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅲb
	6		Ⅰb	完形	12.0 5.2 5.1	高台脇から丸みを持って立ち上がり、高台はａに比して高めで、高台内削りは深め。畳付外端を斜位に面取り。外面には轆轤痕が明瞭で雑である。白色の細粒子で乳白濁釉の釉を畳付以外に総釉後、見込みを蛇の目状に掻き取る。		10区上Ⅲ、10区中石列、前庭部Ⅰ・Ⅲa・Ⅲf
第63図 図版32	1			完形	10.8 5.3 5.3	高台脇から丸みを持って立ち上がり、高台はａに比して高めで、高台内削りは深め。畳付外端を斜位に面取り。外面には轆轤痕が明瞭で雑である。白色の細粒子で淡乳白色の釉を畳付以外に総釉後、見込みを蛇の目状に釉禿ぎする。		11区下石積み、前庭部Ⅲa'・礫上・石灰岩崩落
	2		Ⅱ	完形	12.7 5.9 4.9	型成形である。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部をきつく外反させる。素地は白色の細粒子で淡黄白色の釉を畳付以外に総釉する。全体に細かい貫入が入る。見込みには４つのハリ支え痕が観られる。	徳化	前庭部Ⅲa*
	3		Ⅲ	完形	11.3 5.6 4.5	高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を逆「L」字状に折り、口折れとする。高台は低く、小さい。素地は淡灰白色の細粒子で乳白濁色の釉を畳付以外に厚く総釉する。全体に細かい貫入が入る。畳付には籾殻？が付着する。	漳州系	11区中
	4	小碗	Ⅰ1	完形	8.5 4.7 3.5	轆轤成形によるもので、高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。高台は低く、小さい。畳付以外に白濁色の釉を総釉する。口唇部には褐色の釉を施し、口錆とする。畳付には籾殻？が付着する。	肥前	前庭部Ⅲ
	5		Ⅰ2	完品	9.0 4.2 3.7	型成形である。高台脇から丸みを持って立ち上る。白色の釉を口唇以外に比較的厚く総釉して口禿げとする。	徳化	12区Ⅲb
	6		Ⅱ	完形	9.2 4.3 4.7	型成形である。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。高台は低い。白色の細粒子で白色の釉を口唇以外に厚く総釉して口禿げとする。高台内面には銘？が入る。		前庭部Ⅲa
	7	Ⅲ	Ⅰ	完形	13.8 4.4 4.4	高台脇から若干の丸みを持って立ち上がる。高台は低く、高台内削りは「ハ」の字状に削り取っている。外面には轆轤痕が明瞭である。灰色の細粒子で灰色の透明釉を外底面以外に総釉後、見込みを掻き取っている。細かい貫入が入る。	福建・広東	2区Ⅱ、2区、前庭部
	8		Ⅱ	完形	10.2 2.3 5.3	高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部をきつく外反させる。高台は低い。素地は淡灰白色の細粒子で灰白濁色の釉を畳付以外に厚く総釉する。	漳州or福建・広東	前庭部Ⅲ
	9		Ⅲ	完形	9.8 2.6 4.0	高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開く。外底面を碁笥底状に削り取る。外面には轆轤痕が明瞭で雑な成形である。淡灰白色の細粒子で、淡灰白色の釉を施すが、外底面及び見込み露胎とする。	福建・広東	10区上Ⅱ、11区中、13区黒土、前庭部Ⅲa'

第７表ａ　白磁観察一覧

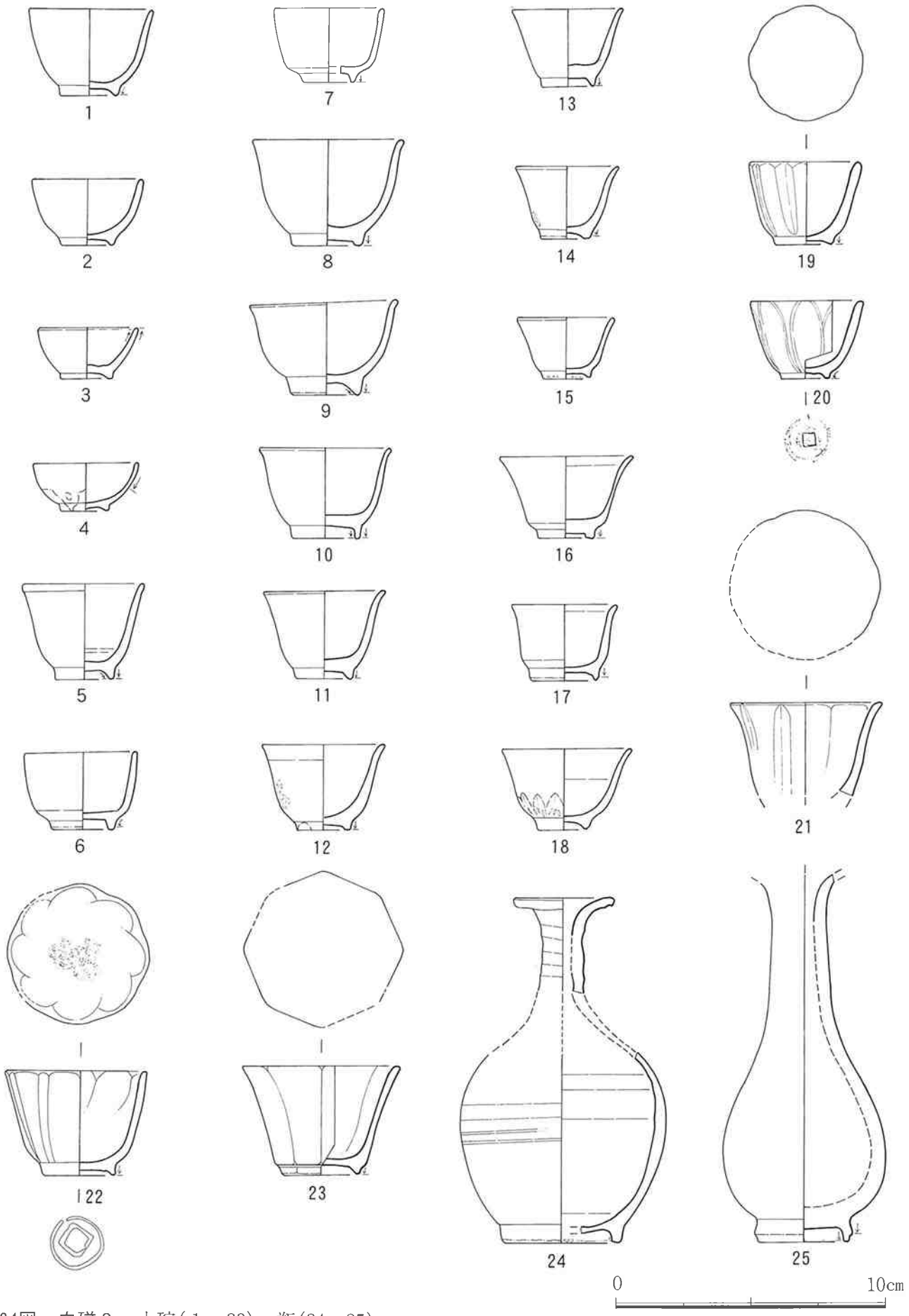
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第63図 図版32	10	Ⅲ	Ⅳ	完形	8.6 2.5 5.6	型成形による角Ⅲある。上面観は正方形を呈し、外面の四隅は縦位の凹部が観られる。素地は淡黄白色の粗粒子で外底面及び畳付以外に淡黄白濁色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。	徳化	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅲｂ
	11	杯	－	完形	8.0 3.6 3.2	型成形によるものである。高台は小さく低い。口唇部以外に白濁色の釉を施し、口禿げとする。高台内面には陽刻の銘？が入る。		12区Ⅲａ
第64図 図版32	1	小杯	Ⅰ１	完品	4.7 3.3 2.1	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。白色の釉を畳付以外に総釉する。畳付には籾殻？痕が付着する。		前庭部Ⅲａ'
	2			完品	4.2 2.5 2.0	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。白色の釉を畳付以外に総釉する。畳付には籾殻？痕が付着する。		前庭部撹乱
	3			完形	3.8 1.9 1.9	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。白色の釉を口唇部以外に総釉して口禿げとする。		前庭部Ⅰ
	4			完形	4.0 1.8 1.8	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。白色の釉を外面の胴中央あたりまで施す。口唇部は口禿げ成形としている。		前庭部Ⅲｆ
	5		Ⅰ２	完形	4.6 3.6 2.2	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、外面の口縁直下に肥厚帯を持つ。白色の釉を畳付以外に総釉する。全体的に細かい貫入が入る。	肥前	11区下Ⅰ
	6		Ⅰ３	完品	4.2 2.9 2.2	型成形によるもので、高台脇から角度を変えて腰折れ気味に立ち上がる。高台内削りを深く施している。外底面以外に淡灰白濁色の釉を施す。	景徳鎮	12区石積み外
	7			完形	4.2 2.8 2.0	型成形によるもので、高台脇から角度を変えて腰折れ気味に立ち上がる。高台内削りを深く施している。外底面以外に淡灰白濁色の釉を施す。		北側斜面
	8		Ⅱ	完形	5.7 4.0 2.5	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、淡黄白色の釉を畳付以外に総釉する。全体的に細かい貫入が入る。	肥前	前庭部Ⅲｂ
	9			完品	5.6 3.6 2.4	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、淡黄白色の釉を畳付以外に総釉する。全体的に細かい貫入が入る。	景徳鎮	1区Ⅲｆ礫上
	10		Ⅱ	完品	5.0 3.4 2.5	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、白色の釉を畳付以外に総釉する。	肥前	12区Ⅲａ
	11			完形	4.6 3.3 2.1	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、白色の釉を畳付以外に総釉する。	景徳鎮	11区、前庭部Ⅰ、北側斜面
	12			完形	4.7 3.2 2.0	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を外底面以外に総釉する。全体に細かい貫入が入る。外面胴部の一部に籾殻？が付着する。	徳化	12区Ⅲａ
	13			完形	4.2 2.9 2.0	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、白色の釉を畳付以外に総釉する。	肥前	前庭部Ⅲｆ
	14			完品	3.9 2.7 1.8	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。白色の釉を畳付以外に総釉する。畳付のみならず所々に籾殻？が付着しているのが確認できる。	徳化	12区Ⅲｂ
	15			完品	3.7 2.3 1.8	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。白色の釉を畳付以外に総釉する。畳付に籾殻？が付着する。		12区Ⅲａ
	16			完形	5.0 3.1 2.0	型成形によるもので、高台脇から角度を変えて腰折れ気味に立ち上がる。高台内削りを深く施している。外底面以外に淡灰白濁色の釉を施す。	景徳鎮	前庭部Ⅲｆ
	17			完形	4.0 2.9 2.5	型成形によるもので、高台脇から角度を変えて腰折れ気味に立ち上がる。高台内削りを深く施している。外底面以外に淡灰白濁色の釉を施す。		11区下石積み、前庭部Ⅲｂ・Ⅲｉ
	18			完品	4.9 3.1 1.8	型成形によるものである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。外面胴下部には陽刻の芭蕉文？が観られる。白色の釉を畳付以外に総釉する。畳付に籾殻？が付着する。	徳化	前庭部Ⅲｂ
	19		Ⅲ	完品	4.3 3.1 2.1	型成形によるものである。口縁部及び外面胴部全体を稜花状に成形し蓮弁文様を呈する。淡黄白濁色の釉を畳付以外に総釉する。全体に細かい貫入が入る。畳付に籾殻？が付着する。		前庭部Ⅲｇ
	20			完形	4.3 3.0 1.8	型成形によるものである。口縁部及び外面胴部全体を稜花状に成形し蓮弁文様を呈する。高台内削りは浅い。素地は白色の細粒子で淡白濁色の釉を外底面以外に施す。		13区黒土、13区
	21			口縁部	5.7 － －	型成形によるものである。口縁部及び外面胴部全体を稜花状に成形し蓮弁文様を呈する。。素地は白色の細粒子で淡黄白濁色の釉を両面に施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｂ・Ⅲｆ・Ⅲｌ
	22			完形	5.3 3.9 2.7	型成形によるものである。口縁部及び外面胴部全体を稜花状に成形し蓮弁文様を呈する。淡黄白濁色の釉を畳付以外に総釉する。全体に細かい貫入が入る。畳付に籾殻？が付着する。外底見込みには陽刻の銘？が入る。		不明
	23		Ⅳ	完形	6.0 4.1 2.7	型成形によるものである。口縁部及び外面胴部全体を八角状に成形している。淡黄白濁色の釉を畳付以外に総釉する。全体に細かい貫入が入る。畳付に籾殻？が付着する。		前庭部Ⅰ・Ⅲａ'・Ⅲｈ
	24	瓶	－	完形	3.7 (13.0) 4.2	口縁部はきつく外反しており、全体の形状はラッキョウ型を呈するが最大胴径は胴中央にある。比較的薄造りである。淡灰白色の細粒子で畳付以外に淡黄白色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。畳付に砂もしくは籾殻が付着する。	肥前	12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅱ・Ⅲａ
	25			底部	－ － 3.4	全体の形状はラッキョウ型を呈するが最大胴径は胴下部にある。畳付外端を抉るように削り取る。淡灰白色の細粒子で畳付以外に淡灰白濁色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。	景徳鎮	前庭部撹乱



第62図　白磁１　碗



第63図　白磁２　碗（１～３）、小碗（４～６）、皿（７～10）、杯(11)



第64図　白磁３　小碗（１～23）、瓶（24～25）

第４節　中国産色絵

中国産色絵が僅かであるが検出されている。確認された器種としては碗・小杯の２器種があるものの、細片化しており全形が窺えるような資料は少ない。これらは16世紀末から18世紀に位置付けられ、漳州窯や徳化窯を生産地とする資料である（第65図１～２）。

１は口縁部が微弱に外反する厚手の碗の口縁部片である。両面に灰白色の透明釉を施した後に、外面の口縁直下に2本の圏線を廻らせ、胴部には丸窓内に何らかの文様を描く。灰色の細粒子で微細な黒色の鉱物を含む（前庭部Ⅱ）。

２は型成形による小杯で、口径4.3cm、器高2.7cm、底径1.9cmである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。白濁色の釉を口唇部以外に厚く施し、口禿げとしている。外面胴部には文様構成が判然としない上絵付けが施されている（前庭部Ⅲｄ）。

第５節　瑠璃釉

瑠璃釉の小杯が検出されている。３，４はいずれも18世紀代の徳化窯を生産地とする資料で、５は17世紀末～18世紀初の景徳鎮を生産地とする資料である。（第65図３～５）。

３は型成形による小杯で、口径4cm、器高２cm、底径1.8cmである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。藍濁色の釉を口唇部以外に厚く施し、口禿げとしている。内面には淡灰白色の釉を施す。素地は淡灰白色の細粒子である（11区中）。

４も型成形による小杯で、口径４.2cm、器高２.1cm、底径２cmである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。濃藍濁色の釉を口唇部以外に厚く施し、口禿げとしている。内面には淡灰白色の釉を施す。畳付には金属粉？が多量に付着している。素地は淡灰白色の細粒子である（前庭部Ⅲａ'）。

５も型成形による小杯で、口径3.6cm、器高2.6cm、底径1.3cmである。高台脇から丸みを持って立ち上がる。藍濁色の釉を外底面以外に厚く施している。内面には淡灰白色の釉を施す。素地は白色の細粒子（12区Ⅰ～Ⅱ）。

第６節　鉄釉染付

鉄釉染付の杯が検出されている。いずれも17世紀末～18世紀前頃に位置付けられ、景徳鎮を生産地とするものと思われる（第65図６～９）。

６～９は、いずれも高台から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させている。高台は低く、高台内削りは深い。畳付外端を斜位に削り取り面取りする。内面には呉須により口縁直下に2本、見込みには2本の圏線と山水文を描いている。外底面には2本の圏線と文字もしくは銘のようなものを表している。素地は白色の微粒子で内面には白色の透明釉を、外面には茶褐色や暗茶褐色の鉄釉を施している。畳付は釉を掻き取っている。法量は６が口径7.3cm、器高4.1cm、底径3.6cm（前庭部Ⅲ）。７が口径7.6cm、器高4.3cm、底径3.6cm（前庭部Ⅲｂ）。８が口径7.4cm、器高3.9cm、底径3.3cm（11区―23内、11区下Ⅰ、前庭部Ⅱ）。９が口径7.2cm、器高4.1cm、底径3.7cm（前庭部Ⅲ）である。

第７節　中国産施釉陶器

両面に鉄釉を施す中国産の粗製の急須で、湯鑵と思われる資料が得られている。17世紀～18世紀代の中国南部（福建・広東系の諸窯）を生産地とする（第65図11～12）。また中国南部を生産地とすると思われる粗製陶器水差しもここで扱った（第65図10）。

11は外底面を上底状で、胴上部が突出するように成形した後に、短い注口と把手を貼り付けている。口縁部は微弱に外反し、口縁内面には見受けの突起状のものが観られる。素地は灰褐色の粗粒子で黒色の鉱物等を含む。口縁内面から外面胴部にかけて茶褐色の釉を施している。全体に雑な成形である。口径6.6cm、器高5.7cm、底径6.3cmである（前庭部Ⅲａ'）。沖縄産の可能性も考慮される資料である。

12は外底面をほぼ水平に、胴中央が突出するように成形し、短い注口と把手を貼り付ける。口縁部は立ち上が

る。素地は燈褐色の粗粒子。口縁内面から外面胴部にかけて茶褐色の釉を施す。口径5.9cm、器高8.4cm、底径6.8cmである（10区下、11区下Ⅰ、前庭部Ⅲｆ・Ⅲｈ・Ⅲｉ・Ⅲｌ～ｎ・Ⅲｏ・石灰岩崩落）。

10は粗製な陶器製の水差しである。中国南部を生産地とする可能性が高い。底部はほぼ水平で、開き気味に立ち上がり、胴中央で内傾し角度を変えて頚部を立ち上がらせる。胴から頚部には把手が雑に貼り付けられている。素地は淡赤灰色で白色の鉱物を多量に含む。底径が5.9cm（前庭部Ⅲａ）。

第８節　青花

青花で確認された器種としては、碗・小碗・皿・杯・小杯・馬上杯・瓶・壷（大瓶）の８器種であった。ヤッチのガマにおいての青花の出土総数は175点で、前述の白磁と同様に小杯は80点と８器種中最も多く検出しており、次いで碗が50点、小碗が20点となり、以下、杯、皿と続いている状況である。今回ヤッチのガマより検出された青花のうち小杯が占める割合は全体の約46％にも及んでいる。

出土地点及び層位別での出土傾向としては、旧１トレンチや旧11号区画外トレンチ、入口側トレンチ等のいわゆる前庭部に自然堆積した土中からの検出が全体の約90％近くを占めており、前節までの青磁や白磁等の中国陶磁器類とは異なった様相を呈しているといえ、表採資料や表層での検出が極めて少ないという傾向がみられた（第８表）。

今回検出された青花は、多くは18世紀代の景徳鎮、福建・広東系、徳化窯、漳州窯を生産地とする資料が主体を成している状況であるが、碗や小杯においては景徳鎮系の頻度が高くなっており、これについても青磁や白磁とは異なった様相を呈しているといえる。このような出土傾向が本遺跡を理解する上で重要な要素であることは言うまでもないが、詳細は後段の総括にて述べることとする。

以下、ヤッチのガマより検出された青花の分類概念について述べ、特徴的な資料については図示することとする（第66図～第73図）。なお、個々の諸特徴等については観察表にまとめた（第10表）。

１．碗

ヤッチのガマにて検出された青花碗は、全体の形状に若干の差異はみられるものの口縁形態は全て直口口縁タイプとして納まるが、施釉方法や底部の形状等から必要に応じて、ａ～ｃ、あるいは１～４等に細分した。

ａ高台脇から丸みを持って立ち上がり、畳付以外を総釉にするタイプである。底部の形状や成形方法から１～４に細分を試みた。

１饅頭心型を呈するタイプである。

２連子型を呈するタイプである。

３内底面が平坦になるタイプである。

４型成形されたタイプである。

ｂ高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開き、見込み部分と外底面を露胎にするタイプである。

ｃ高台脇から逆「ハ」の字状に大きく開き、見込み部分を蛇の目状に釉禿ぎし、畳付のみまたは高台内面をも露胎としているタイプである。

２．小碗

青花の小碗については、口縁形態から直口口縁と外反口縁の２つに大別し、Ⅰ・Ⅱとした。またⅠは成形方法から必要に応じて１・２として細分した。

Ⅰ類　直口口縁

直口口縁タイプの小碗には、轆轤成形と型成形とがあり、前者を１、後者を２とした。

１轆轤成形によるものである。比較的に薄造りである。

２型成形によるものである。やや厚みがある。

Ⅱ類　外反口縁

高台は低く、小さい。腰折状に角度を変えて立ち上がらせて、口縁をきつく外反させている。薄造りとやや厚みがあるものとが確認できている。

３．皿

皿については、口縁形態や全体の形状から直口口縁、碁笥底、角皿の３つに分類を試みた。

Ⅰ類　直口口縁

高台脇から若干の丸みを持って立ち上がるタイプである。

Ⅱ類　碁笥底

逆「ハ」の字状にかなり開き、外底面を碁笥底状に削り出して成形するタイプである。

Ⅲ類　角皿

型成形による角皿である。上面観は正方形を呈し、外面の四隅には縦位の凹部が入る。

4．杯

杯は口縁形態から直口口縁と外反口縁の２つに分類し、それぞれ施釉方法からａ・ｂに細分した。

Ⅰ類　直口口縁

高台脇から若干の丸みを持って立ち上がるタイプで、施釉方法からａ・ｂに細分した。

ａ外底面のみを露胎とするタイプである。

ｂ見込み及び外底面を露胎とするタイプである。

Ⅱ類　外反口縁

高台脇から若干の丸みを持って立ち上がるタイプで、口縁部はきつく外反。施釉方法からａ・ｂに細分した。

ａ外底面のみを露胎とするタイプである。

ｂ見込み及び外底面を露胎とするタイプである。

5．小杯

小杯は口縁形態から直口口縁、外反口縁の２つに大別し、それぞれ施釉方法でａ・ｂに細分した後に、全体の形状等から必要に応じて１～３に細分化を試みた。

Ⅰ類　直口口縁

ａ畳付以外は総釉するタイプ。

１高台脇から逆「ハ」の字状に開くように成形する。

２高台脇から丸みを持って立ちあがるように成形する。

３外底を碁笥底状に成形する。

ｂ外底面を露胎として成形する。

１高台脇から丸みを持って立ちあがるように成形する。

２高台脇から角度を変えて腰折状に成形する。

Ⅱ類　外反口縁

ａ畳付以外は総釉するタイプ。

１高台脇から逆「ハ」の字状に開くように成形する。

２高台脇から丸みを持って立ちあがるように成形する。

３高台脇から角度を変えて腰折状に成形する。

ｂ外底面を露胎として成形する。

１高台脇から丸みを持って立ちあがるように成形する。

２高台脇から角度を変えて腰折状に成形する。

３外底を碁笥底状に成形する。

6．馬上杯

口縁が微弱に外反するタイプで、脚の外面を三角状に成形する。口径に比して器高がかなり低くなっており、全体的に雑な成形が成されている。

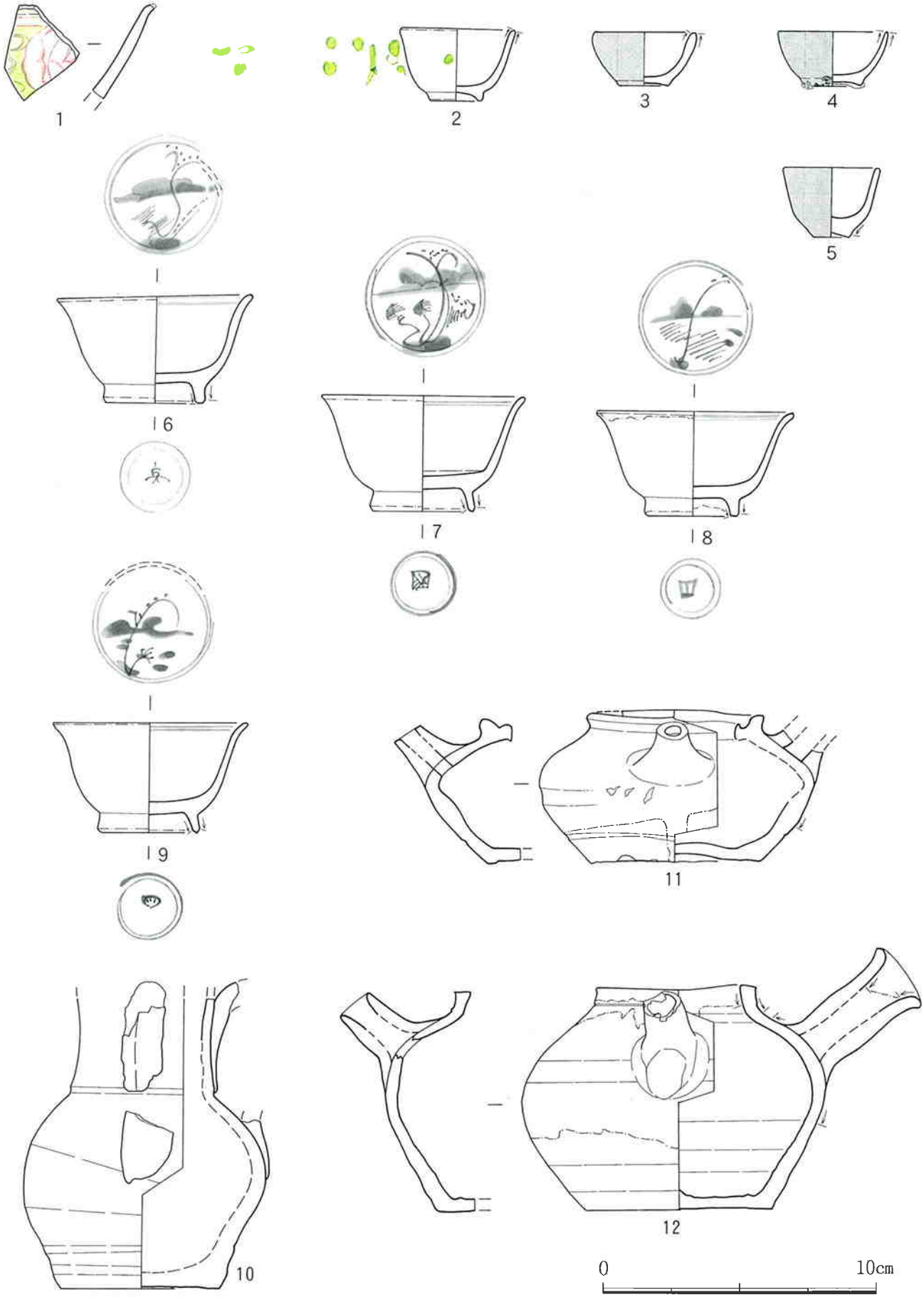
7．瓶

球形状の小振りの瓶である。外底面は碁笥底状に成形されており、胴部中央に最大胴径を有する。口縁はきつく外反させている。比較的に丁寧な成形であるといえる。

8．壷（大瓶）

壷もしくは大瓶の胴部片であると思われる破片資料が得られている。胴部内面及び断面には積痕が確認できるが、小破片であるため判然としない。

※附記：第70図12の小破及び第72図１・４・11・17の小杯については、文章校正中に大橋康二氏により肥前産染付との所見を頂いた。記して感謝申し上げます。



第65図　中国産色絵　碗(1)、小杯(2)、瑠璃釉　小杯(3～5)、鉄釉染付　小杯(6～9)
中国産施釉陶器　水差し(10)、急須(11～12)

第８表　青花出土状況

器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
碗	a4	徳化	10.1	5.2	2.4	2区Ⅱ、北側斜面
			10.5	6.2	4.6	前庭部Ⅱ、北側斜面
	b	福建・広東	10.8	3.6	6.6	3区、前庭部Ⅰ・Ⅲ
			12.0	4.6	5.8	5区散乱2
			12.4	4.5	6.0	11区下石積み
			12.5	5.0	5.5	2区、10区上Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、10区散乱22、前庭部Ⅲb
			14.5	5.3	6.9	12区Ⅲ、13区黒土、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa、北側斜面
	c		13.0	5.2	7.1	1区Ⅰ
			12.5	5.4	7.0	前庭部Ⅲa'・Ⅲb・Ⅲd
			12.8	5.8	6.7	11区下石積み、前庭部Ⅲa'
小碗	Ⅰ2	徳化	8.2	4.9	3.4	前庭部Ⅰ・Ⅲa'
皿	Ⅲ	景徳鎮	7.5	1.9	5.7	前庭部Ⅲb、北側斜面
			7.7	2.0	5.8	9区
杯	Ⅰb	福建・広東	8.8	3.8	4.3	11区Ⅲd
	Ⅱa		8.5	4.6	3.6	10区上Ⅱ・Ⅲ
小杯	Ⅰa1	景徳鎮	3.6	2.8	1.9	11区下石積み
			3.9	3.2	1.8	10区上Ⅲ・Ⅳ
	Ⅰa2	徳化	4.6	2.9	2.0	12区Ⅲa
		福建・広東	5.0	3.6	2.2	7区
	Ⅱa2	景徳鎮	4.8	2.7	2.1	1区、前庭部Ⅲd
			5.0	2.8	2.2	10区中Ⅱ
			5.0	3.3	2.4	2区Ⅱ

器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
小杯	Ⅱa2	景徳鎮	5.1	2.8	2.2	前庭部Ⅲf・Ⅲi
			5.1	3.1	2.2	前庭部Ⅲn
			5.2	2.9	2.3	12区Ⅲa
			5.2	3.1	2.1	12区Ⅰ~Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲ
			5.2	3.1	2.2	1区Ⅲf礫上
			5.2	3.1	2.2	前庭部Ⅲm
			5.3	3.1	2.5	12区Ⅲa
			5.3	3.2	2.3	前庭部Ⅲd
			5.3	3.3	2.2	前庭部Ⅲd
			5.3	3.3	2.3	12区Ⅲa
			5.4	3.3	2.2	前庭部Ⅲi
			5.4	3.3	2.3	前庭部Ⅲa'
			7.0	2.7	2.3	前庭部Ⅰ
	Ⅱb1		4.6	2.7	2.1	前庭部Ⅰ
			4.7	2.9	1.9	10区上Ⅱ
			4.8	2.7	2.0	前庭部Ⅲd
			4.8	2.9	2.0	前庭部Ⅲa'
			4.9	2.9	2.0	前庭部Ⅱ
			5.3	3.2	2.3	前庭部Ⅲb
			5.3	3.4	2.2	12区Ⅲa
	Ⅱb2	福建・広東	4.5	3.3	2.0	11区下石積み
			4.8	2.9	2.0	11区中Ⅰ、11区中下、11区下Ⅰ
			4.8	3.4	2.3	11区上集骨
			4.9	3.1	2.1	12区Ⅲb

第10表a　青花観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出　土　地
第66図 図版34	1	碗	a1	完形	12.2 5.8 5.0	外面口縁直下と高台脇に圏線と胴部に不明文様。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と「卍」様の文様。高台内面に圏線と「大明年製」の銘。呉須が一部浮遊し黒ずむ。淡灰白色の細粒子で、淡青白濁色の釉。	景徳鎮	前庭部Ⅰ・Ⅲf・Ⅲh
	2			完形	12.4 5.9 4.6	外面口縁直下と高台脇に圏線と胴部に人物と山水文。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と「卍」が簡略化したような文様。高台内面に圏線と「天下泰平」の銘。淡灰白色の細粒子で淡青灰白色の釉。		11区中、前庭部Ⅰ・Ⅲa・Ⅲi・Ⅲn、石積み3
	3			完形	11.6 4.5 4.7	外面口縁直下と高台脇に圏線と胴部に丸文と雲文等。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と花卉文。高台内面に圏線と「萬福攸同」の銘。淡灰白色の細粒子で淡青白色の釉。	漳州	前庭部Ⅲe・Ⅲf
	4			完形	12.1 6.2 5.1	外面口縁直下と高台脇に圏線と胴部に不明文様。内面口縁直下に圏線、胴部及び見込みに宝文。見込みの外周には蓮弁文。淡灰白色の細粒子で、淡青灰白色の釉。畳付及び見込みの一部に籾殻？が付着する。	景徳鎮	11区下石積み、前庭部Ⅲa'
第67図 図版34	1			底部	– – 3.9	外面の高台脇に圏線。見込みに鷹と波涛文、見込み外周には蓮弁文。高台内面には圏線と「萬福攸同」の銘。白色の微粒子で淡灰白色の釉。		12区Ⅲa
	2		a2	完形	11.6 6.1 4.9	外面口縁直下と高台脇に圏線と胴部に家屋と山水文。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と家屋と山水文。淡灰白色の微粒子で淡青灰白色の釉。		洞内T．P
	3			底部	– – 4.9	外面胴部には何らかの文様が観られる。見込みにjは法螺貝様の巻貝を描いている。淡灰白色の細粒子で淡青灰濁色の釉を厚く施すが、焼成不良気味である。		前庭部Ⅲd・Ⅲf
	4		a3	完品	11.4 7.0 4.9	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部に馬・三星。内面口縁直下と見込みに圏線、見込み中央には飛魚？の簡略化した文様が施される。高台内面には圏線と銘。白色の微粒子で淡青灰白色の釉。		前庭部Ⅲa
	5			完形	12.2 6.2 5.0	外面口縁直下と高台脇・外面に圏線。胴部有文。内面口縁直下と見込みに圏線、見込み中央に十字花文。高台内面には圏線と銘。白色の微粒子で淡青灰白色の釉。	福建・広東	前庭部Ⅲb・Ⅲd

第10表ｂ　青花観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出　土　地
第68図 図版35	1	碗	a 4	完品	10.4 5.7 4.8	外面口縁直下に襷文、胴下部に芭蕉文、高台外面圏線。内面口縁直下と胴部に圏線、見込み有文。乳白色の釉。口禿げ。畳付に籾殻？が付着する。	徳化	前庭部Ⅲｂ
	2			完形	10.1 5.6 4.5	外面口縁直下に襷文、胴下部に芭蕉文、高台外面圏線。内面口縁直下と胴部に圏線、見込み有文。乳白色の釉。口禿げ。畳付に籾殻？が付着する。		1区Ⅲ、2区Ⅱ、3区Ⅰ、前庭部Ⅲｆ
	3			完品	10.6 5.1 4.4	外面口縁直下と高台外面に圏線、胴部には寿字文と花卉文。内面口縁直下と胴部には圏線。見込み有文。白色の細粒子で白濁色の釉を施す。口禿げ。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｂ
	4		a 不明	口縁部	11.6 － －	外面口縁直下波涛文。胴部に花卉紋。内面口縁直下には圏線。淡灰白色の細粒子で淡青灰白濁色の釉を施す。石灰化が顕著である。全体に荒い貫入が入る。	景徳鎮	前庭部Ⅲａ
	5			口縁部	－ － －	外面口縁直下波涛文。胴部に花卉紋。内面口縁直下には圏線。淡灰白色の細粒子で淡青灰白濁色の釉を施す。全体に荒い貫入が入る。		前庭部Ⅲａ
	6		b	完形	12.2 5.1 4.7	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に花卉文。内面口縁直下と見込みに圏線。灰色の細粒子で外面高台脇まで灰色の釉を施した後、見込みを輪状に掻き取っている。	福建・広東	9区-26内
	7			完形	14.6 5.7 6.3	外面口縁直下に一対の波状文を描いている。高台脇には明瞭な鉋目が確認できる。素地は灰色の細粒子で灰色の釉を施すが外底面及び見込み部分を露胎としている。		前庭部Ⅱ・Ⅲａ'、北側斜面
	8			完形	13.2 5.6 6.2	外面には簡略化された感のある連続文を描いている。内面は口縁直下と見込みに圏線。素地は淡灰白色の細粒子で淡灰白濁色の釉を施すが、外底面及び見込み部分は露胎としている。		前庭部Ⅲｅ
	9			完形	13.4 5.6 6.2	外面には簡略化された感のある連続文を描いている。内面は口縁直下と見込みに圏線。素地は淡灰白色の細粒子で淡灰白濁色の釉を施すが、外底面及び見込み部分は露胎としている。		前庭部撹乱
第69図 図版35	1		c	完形	11.6 5.8 6.0	簡略化された一対の文様を描いている。素地は淡灰白色の細粒子で淡灰色の透明釉を施すが、畳付は露胎とし、見込み部分も蛇の目状に施釉している。		12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲｃ、前庭部Ⅰ
	2			完形	12.1 4.2 4.7	外面口縁直下と高台外面に圏線、胴部有文。内面口縁直下と見込みには圏線。灰色の細粒子で灰色の釉を施すが外底面を露胎とし、見込みは蛇の目状に施している。		前庭部Ⅲｎ
	3			完形	13.8 4.4 6.0	外面口縁直下と高台外面に圏線。内面口縁直下と見込みには圏線。淡黄白色の細粒子で黄灰色の釉を施すが畳付は露胎とする。見込みは蛇の目状に施している。全体に細かい貫入が観察できる。		前庭部Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｈ
	4			完形	13.0 5.7 6.4	外面胴部にコンニャク印。淡黄白色の細粒子で黄白色の釉を施すが外底面は露胎とする。見込みは蛇の目状に施している。全体に細かい貫入が観察できる。		前庭部Ⅲｆ・Ⅲｉ・Ⅲｊ
	5			口縁部	12.0 － －	外面胴部にコンニャク印。淡黄白色の細粒子で淡黄灰白色の釉を施す。全体に細かい貫入が観察できる。		12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅱ・Ⅲ
	6			完形	11.8 5.1 7.0	外面胴部にコンニャク印。淡灰白色の細粒子で黄灰白色の釉を施すが畳付は露胎とする。見込みは蛇の目状に施している。全体に細かい貫入が観察できる。		前庭部Ⅲａ'
	7	小碗	Ⅰ1	完形	8.5 5.9 4.0	外面には菊唐草文と蓮弁文を描いている。高台外面に圏線。内面口縁直下に圏線、見込みには菊花文。高台内面に圏線と銘が入る。白色の微粒子で淡青白色の釉を畳付以外に総釉。	景徳鎮	前庭部Ⅲｂ・Ⅲｆ・Ⅲｄ
	8			完形	9.2 5.3 4.0	外面口縁直下と高台外面に圏線。内面口縁直下に圏線と見込みに菊花文。高台内面に1本の圏線。白色の微粒子で淡灰白濁色の釉を畳付以外に総釉する。	不明	前庭部Ⅱｂ・Ⅲｄ
	9			口縁部	6.6 － －	外面口縁直下と胴下部に圏線。胴部中央に蝶。内面口縁直下と見込みに圏線。外面高台脇に鉋目。白色の細粒子で淡青灰濁色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。		11区下石積み、13区黒土、前庭部Ⅱ・Ⅲａ'・Ⅲｂ・Ⅲｆ
第70図 図版36	1		Ⅰ2	完品	8.2 5.1 3.3	外面口縁直下に襷文、胴下部に芭蕉文、高台外面圏線。内面口縁直下と胴部に圏線、見込み有文。乳灰白色の釉。口禿げ。畳付に籾殻？が付着する。	徳化	前庭部Ⅲｂ
	2			完形	7.8 4.5 3.3	外面口縁直下に襷文、胴下部に芭蕉文、高台外面圏線。内面口縁直下と胴部に圏線、見込み有文。灰白色の釉。口禿げ。畳付に籾殻？が付着する。		11区-43内、11区中、11区下Ⅰ、前庭部Ⅰ・石灰岩崩落

第10表ｃ　青花観察一覧

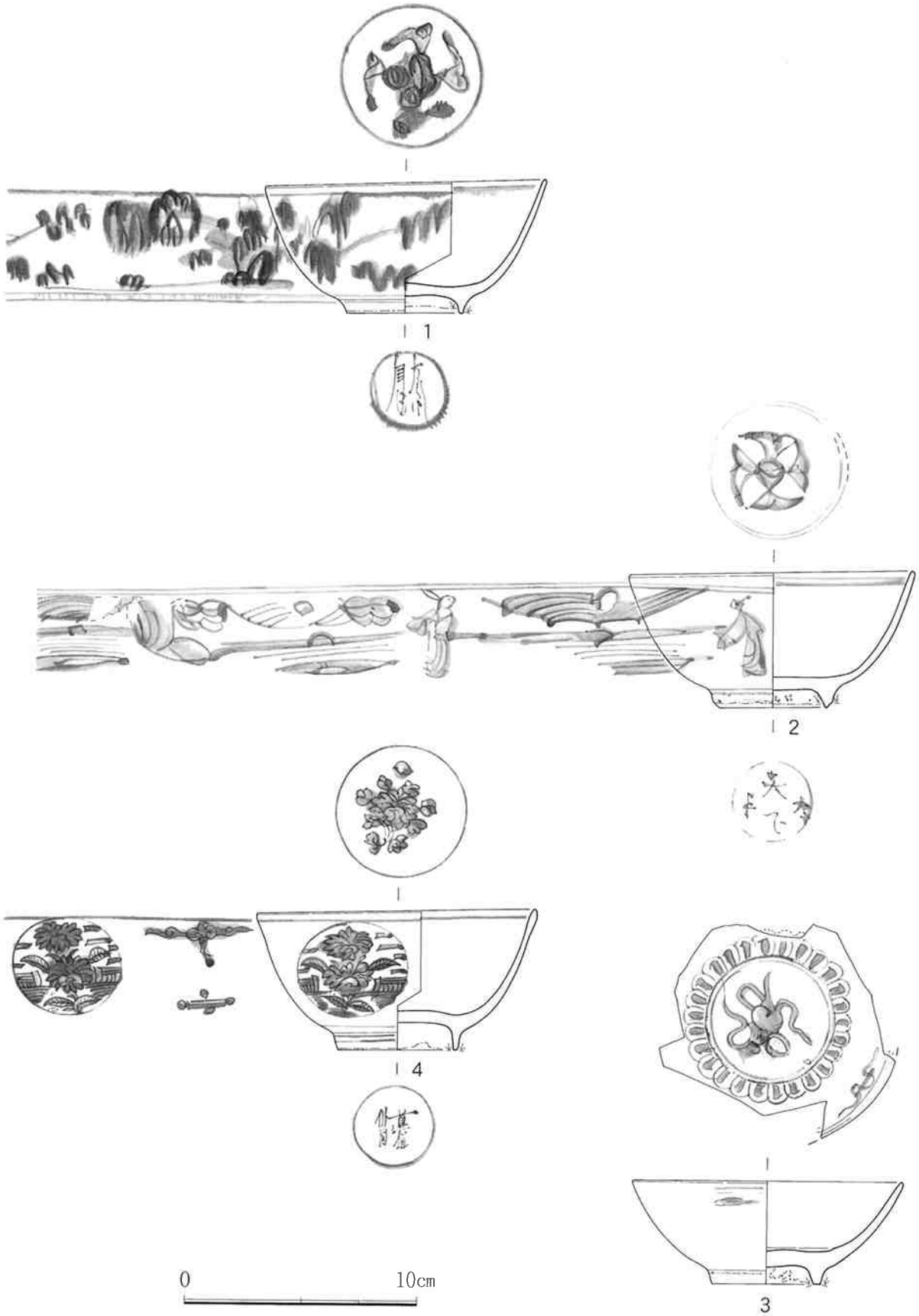
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出　土　地
第70図 図版36	3	小碗	Ⅰ2	完形	8.8 4.7 3.8	外面口縁直下に丸文の連続。胴部にはアラベスク？の簡略化された文様。高台外面に圏線。両面に淡青白濁色の釉を施すが、口禿げとする。畳付には籾殻？が多量に付着する。	徳化	前庭部Ⅲｂ・Ⅲｄ・Ⅲｅ
	4			完形	8.1 4.0 3.4	外面口縁直下に丸文の連続。高台脇に芭蕉文。高台外面に圏線。内面口縁直下と胴部に圏線、見込み有文。白色の細粒子で淡黄灰白色の釉。口禿げ。全体に細かい貫入が入る。畳付に籾殻？が付着する。		前庭部Ⅲｂ・Ⅲｄ
	5			完品	8.0 3.7 3.3	外面口縁直下と胴下部に圏線。胴部寿字文と花卉文。白色の微粒子で淡青灰濁色の釉を施す。口禿げ。畳付に籾殻？が付着する。		前庭部Ⅲａ・Ⅲｂ
	6			完品	8.0 4.8 3.3	外面口縁直下と胴下部に圏線。胴部寿字文と花卉文。内面口縁直下と胴部に圏線、見込み有文。淡灰白色の釉。口禿げ。		12区Ⅲａ
	7			完品	8.6 4.3 3.8	外面に山水文？と松文。高台脇に圏線。一部に溶着痕が観察できる。白濁色の釉を両面に施すが、口禿げとしている。畳付には多量の籾殻？が付着している。		前庭部Ⅲｂ
	8			完形	7.0 3.2 3.2	外面胴部に花卉紋？を描いている。白色の微粒子で、白色の釉を施すが、口禿げとしている。畳付には籾殻？が多量に付着している。		2区Ⅱ
	9			口縁部	6.8 － －	外面に寿字文の連続文を描いている。白色の微粒子で白濁色の釉を両面に施しているが、口禿げとしている。		13区
	10		Ⅱ	完形	10.0 5.2 4.5	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部に花卉文。内面口縁、胴下部に圏線、見込みに花卉紋。白色の微粒子で淡青灰濁色の釉を施す。	景徳鎮	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅰ・Ⅲａ'・Ⅲｂ・Ⅲｆ礫敷き、表採
	11			完形	10.3 5.1 4.6	外面口縁直下と胴下部、高台外面に圏線。胴部に折れ枝文。内面口縁、胴下部に圏線、見込み有文。白色の微粒子で淡灰白濁色の釉を施す。		12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ
	12			完形	9.4 6.2 4.2	外面胴下部、高台外面に圏線。胴部に山水文。内面見込みは圏線と有文。白色の微粒子で淡灰白濁色の釉を施す。畳付に籾殻？が付着する。	肥前	前庭部撹乱
第71図 図版36	1	Ⅲ	Ⅰ	完形	12.0 2.9 6.7	内面の胴部と見込みに魑龍文を描く。高台内面には「福」の銘が入る。白色の微粒子で白色の釉を畳付以外に総釉している。	福建・広東	前庭部Ⅲｈ焼土
	2			口縁部	10.8 － －	外面の口縁直下と胴下部に圏線。内面の口縁直下と見込みにも圏線。素地は燈褐色を呈しており、焼成不良気味である。淡黄灰白色の釉を両面に厚く施す。全体に細かい貫入が入る。		12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ
	3		Ⅱ	底部	－ － 3.2	外面胴部に芭蕉文を描き、見込みには圏線と花卉文を描いている。素地は淡灰白色の微粒子で、淡青灰色の釉を全体に施した後に、胴下部から畳付まで釉を掻き取っている。	不明	前庭部Ⅰ
	4		Ⅲ	完形	8.3 1.7 5.6	内面にのみ文様を描いている。口縁直下に圏線。胴部には花卉文？。見込みには正方形状の二重線と内部に山水文？を描いている。	景徳鎮	11区Ⅲ、12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲｅ
	5	杯	Ⅰａ	完形	7.9 4.5 3.7	外面に丸文を３つ描いている。素地は白色の微粒子で外底面以外に淡灰白色の透明釉を施している。高台には多量の籾殻？が付着している。	福建・広東	1区-4内、1区散乱、1～3区上段、3区Ⅰ、8区散乱12、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲｏ
	6		Ⅰｂ	完形	8.2 4.3 3.7	外面に花卉文を一対で描いている。素地は白色の細粒子で淡灰白色の釉を外底面以外に総釉している。高台には多量の籾殻？が付着している。		11区下礫内、13区黒土、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ'
	7			完形	8.7 4.4 4.0	外面胴部にコンニャク印。淡黄白色の細粒子で淡黄灰白色の釉を施すが外底面は露胎とする。見込みは露胎である。全体に非常に細かい貫入が観察できる。		前庭部Ⅲｇ・Ⅲｈ
	8		Ⅱａ	完形	8.2 4.9 2.9	外面口縁直下に圏線、胴部に山水文。内面口縁直下と見込みに圏線。淡灰白色の細粒子で淡青灰白色の釉を外底面以外に施している。		前庭部Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｂ
	9			完形	8.6 4.6 3.5	外面に花卉文を一対で描いている。素地は淡燈褐色の細粒子で淡黄灰白色の釉を外底面以外に総釉している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｄ・Ⅲｆ
	10			完形	7.3 4.5 3.1	外面口縁直下と胴下部に圏線。胴部には花卉文を描いている。内面口縁直下と見込みに圏線。見込み中央に花卉文を描く。淡灰白色の細粒子で外底面以外に淡青灰白色の釉を施す。全体に粗い貫入が入る。		前庭部Ⅲ

第10表ｄ　青花観察一覧

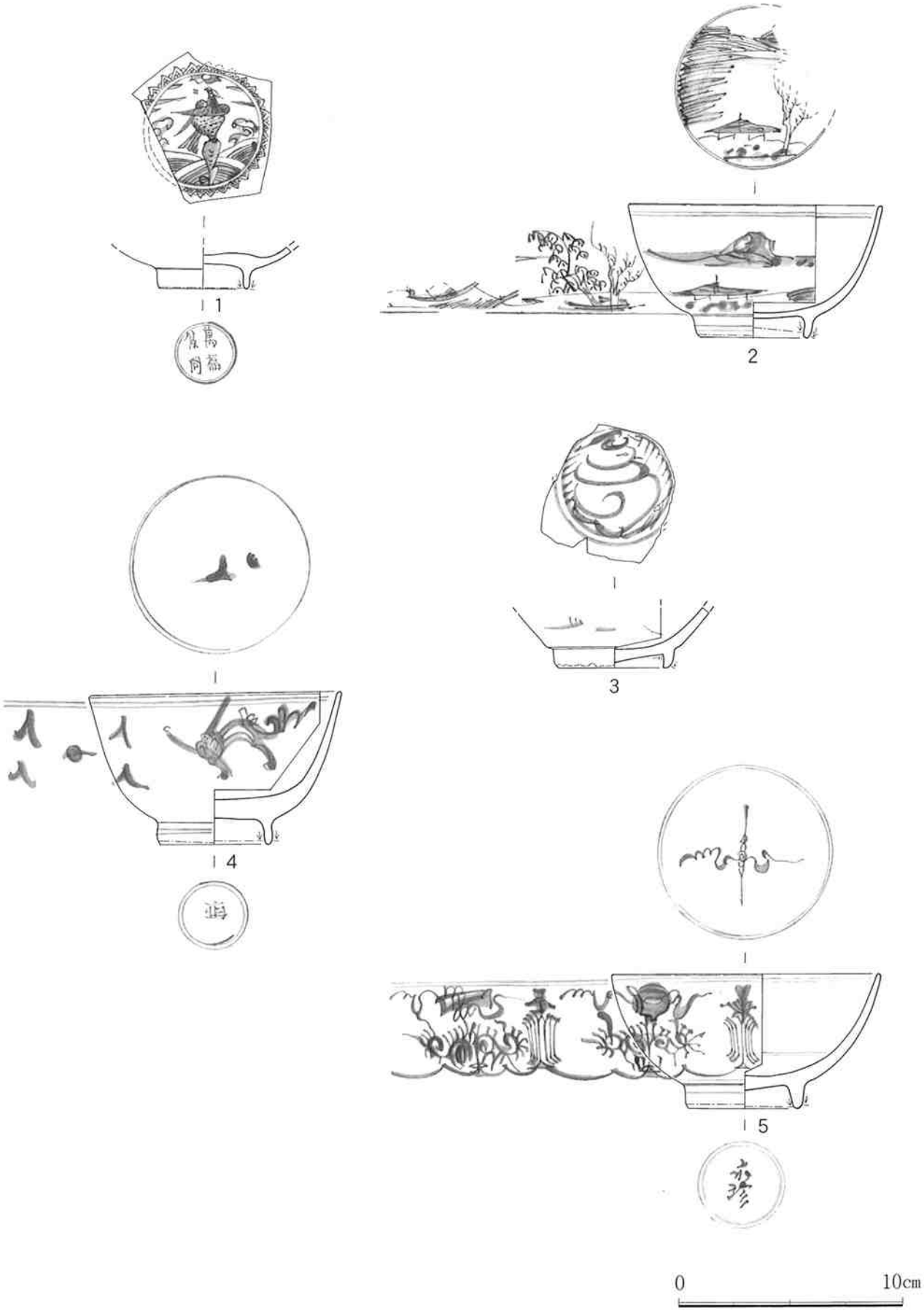
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出　土　地
第71図 図版36	11	杯	Ⅱｂ	完形	8.2 4.8 3.8	外面に花卉文を一対で描いている。淡灰白濁色の釉を総釉しているが外底面と見込みは露胎となっている。	福建・広東	前庭部Ⅲａ'
	12			口縁部	8.4 － －	外面にコンニャク版と唐草？を描いている。素地は淡灰白色の細粒子で、淡灰白色の釉を総釉しているが見込みは露胎となっている。		前庭部Ⅲ
第72図 図版37	1	小杯	Ⅰａ1	完品	3.8 3.1 1.8	外面胴部に芭蕉文を描いている。高台脇には渦文を廻らせている。淡灰白色の釉を畳付以外に施している。畳付には籾殻？が付着している。	肥前	北側斜面
	2		Ⅰａ2	完品	5.1 3.0 2.1	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部には建物・岩・木等を表現している。淡灰白色の釉を畳付以外の両面に施している。口唇部は鉄釉により口錆を成している。畳付には籾殻？が付着する。	景徳鎮	11区上
	3			完品	4.6 3.1 2.4	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部に花卉文を一対で描いている。内面口縁直下に圏線。見込みに圏線と花卉文？。淡灰白色の釉を総釉しているが畳付は露胎となっている。		前庭部Ⅲａ'
	4			完形	4.6 3.1 2.0	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部に花卉文？を描いている。白色の微粒子で白色の釉を総釉しているが畳付は露胎となっている。	肥前	8区
	5			完形	4.5 3.1 2.0	外面口縁直下に襷文。高台外面に圏線。白色の釉を総釉しているが畳付は露胎となっている。畳付には多量の籾殻？が付着している。		12区Ⅲａ
	6			口縁部	4.6 － －	外面口縁直下に襷文。胴部有文。高台外面に圏線。白色の微粒子で白色の釉を総釉している。		前庭部Ⅰ
	7			完品	4.9 2.5 2.1	外面胴部に花卉文を一対で描いている。白濁色の釉を全体に厚く施している。畳付は一部露胎である。口唇部は口禿げとなっている。	徳化	13区
	8			完品	4.4 3.1 1.8	外面口縁直下に襷文。高台外面に圏線。胴部有文。淡青白色の釉を総釉しているが畳付は露胎となっている。口唇部は口禿げとなっている。畳付には多量の籾殻？が付着している。		前庭部Ⅲｂ
	9			完形	3.8 2.5 2.0	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部に花卉文を描いている。淡灰白濁色の釉を全体に厚く施している。畳付は一部露胎である。	肥前	前庭部Ⅲａ'
	10			完形	4.7 3.3 2.2	外面胴部に算木文と丸文を描いている。見込みには丸文を描いている。白濁色の釉を畳付以外に施している。	景徳鎮	前庭部Ⅲｆ
	11			完形	3.7 3.0 1.9	外面口縁直下と高台外面に圏線。淡灰白濁色の釉を全体に厚く施している。畳付は露胎である。	肥前	前庭部
	12		Ⅰａ3	完品	5.9 3.6 2.4	外面口縁直下と胴下部には圏線。胴部には馬等を丁寧に描いている。白色の微粒子で淡青白色の釉を畳付以外に施している。	景徳鎮	11区上Ⅰ直上
	13		Ⅰｂ1	完品	4.3 3.0 2.2	外面口縁直下と高台外面に圏線。胴部には松文等を描いている。内面口縁直下に圏線。見込みに圏線と簡略化された文様。淡灰白濁色の釉を全体に厚く施しているが外底面は露胎となっている。		不明
	14			完形	4.3 2.7 2.1	外面口縁直下に圏線。胴部に簡略化された馬・三星？を描いている。淡灰白色の細粒子で淡黄灰色の釉を外底面以外に厚く施している。内底面には籾殻？が多量に付着する。		12区Ⅲａ
	15		Ⅰｂ2	完品	4.4 2.7 1.8	外面口縁直下に圏線。胴部には簡略化された草花文を描いている。淡黄灰濁色の釉を外底面以外に施している。見込みには僅かに籾殻？が付着している。		11区Ⅲ
	16			完形	5.0 3.3 2.1	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部有文。内面口縁直下と胴下部に圏線。見込みに簡略化された文様。淡灰白色の細粒子で、淡青灰白色の釉を外底面以外に施している。		12区石積み外、前庭部Ⅰ・Ⅲｏ
	17		Ⅱａ1	完形	4.1 3.0 2.0	外面に線描きの蓮弁文。高台脇に圏線。高台内面に銘が観察できる。素地は白色の細粒子で白色の釉を畳付以外に施している。畳付には多量の籾殻？が付着している。	肥前	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ
	18		Ⅱａ2	完品	5.1 3.4 2.2	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡灰白色の釉を畳付以外に施している。口唇は鉄釉により口錆を呈している。	景徳鎮	前庭部Ⅲｊ

第10表ｅ　青花観察一覧

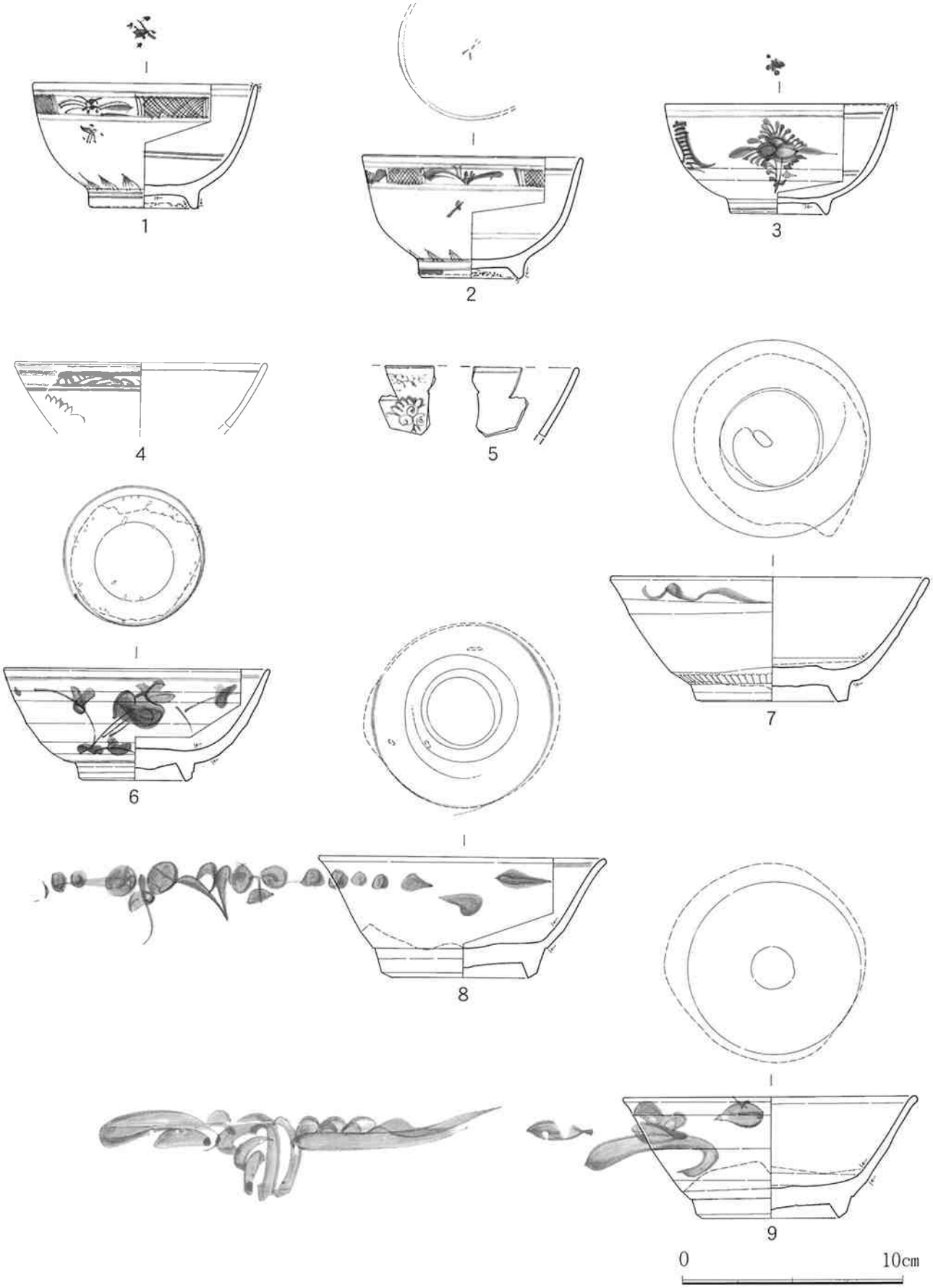
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出　土　地
第72図 図版37	19	小杯	Ⅱａ2	完品	4.3 3.5 2.0	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に薄か？。白色の釉を畳付以外に施している。畳付には籾殻？が付着している。	景徳鎮	11区-37内
	20			完品	4.4 3.2 1.8	外面口縁直下と高台脇に圏線。口縁直下に瓔珞文？。淡灰白色の釉を畳付以外に施している。畳付には籾殻？が付着している。		前庭部Ⅲｏ
	21			完形	5.2 3.0 2.1	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に文様を描いているが判然としない。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化した飛魚？。淡青白色の釉を畳付以外に施している。畳付には籾殻？が付着している。	景徳鎮	前庭部Ⅲｊ
第73図 図版37	1			完形	6.5 4.0 2.8	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に馬・三星。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡青灰白色の釉を畳付以外に施している。口唇は鉄釉により口錆を呈している。		前庭部Ⅲａ'・Ⅲｂ、カンジン1号墓散乱
	2			完形	5.3 2.9 2.3	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に簡略化した馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡青白色の釉を畳付以外に施している。		前庭部Ⅲｃ
	3		Ⅱａ3	完形	6.6 4.2 2.6	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に魑龍文。内面口縁直下に圏線。見込みに圏線と簡略化された文様。淡青灰白色の釉を畳付以外に施す。		前庭部石灰岩崩落
	4		Ⅱｂ1	完品	4.7 2.9 2.0	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に簡略化した馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡青白色の釉を外底以外に施している。		11区-37内
	5			完品	4.4 2.9 2.0	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に簡略化した馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡黄灰白色の釉を外底以外に施している。		前庭部Ⅲｂ
	6			完品	5.9 3.4 2.4	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に簡略化した馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡灰白色の釉を外底以外に施している。		前庭部Ⅲｆ
	7			完形	5.3 3.9 2.2	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に魑龍文。内面口縁直下に圏線。見込みに圏線と簡略化された文様。白色の微粒子で淡灰白色の釉を外底以外に施す。		12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部石灰岩崩落
	8			完形	4.9 3.0 2.2	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に簡略化した馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。淡黄灰白色の釉を外底以外に施している。		12区Ⅰ～Ⅱ
	9			完形	4.5 2.7 1.8	外面口縁直下と高台脇に圏線。胴部に簡略化した馬・三星？。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と簡略化された飛魚？。素地は白色の微粒子で淡青灰白色の釉を外底以外に施している。		12区Ⅰ～Ⅱ
	10		Ⅱｂ2	完形	4.8 2.9 2.1	内面の見込みに圏線と簡略化された文様を描いている。素地は白色の細粒子で淡青灰白色の釉を外底面以外に施している。	福建・広東	12区Ⅲａ
	11			完形	5.1 3.0 2.1	内面の見込みに圏線と簡略化された文様を描いている。素地は白色の細粒子で淡青灰白色の釉を外底面以外に施している。		前庭部Ⅲｊ
	12			完形	4.6 3.6 2.3	内面の見込みに圏線と簡略化された文様を描いている。素地は白色の細粒子で淡青灰白色の釉を外底面以外に施している。		前庭部Ⅲｆ
	13		Ⅱｂ3	完形	5.1 2.9 2.5	外面口縁直下と胴下部に圏線。胴部に山水文を描いている。白色の細粒子で淡灰白色の釉を外底面以外に施している。	景徳鎮	前庭部Ⅲａ'・Ⅲｈ
	14	馬上杯	—	完形	6.1 6.2 3.3	外面口縁直下と胴下部、脚中央と脚下部に圏線。胴部に花卉文を描いている。内面口縁直下に圏線、見込みに圏線と花卉文。脚の外面には丸文を施す。灰白色の釉を畳付以外に施す。全体に粗い貫入。	漳州	前庭部Ⅲｊ
	15			胴部	－ － －	外面胴下部に圏線。胴部に花卉文？を描いている。内面見込みに圏線と花卉文。淡白色の細粒子で淡黄灰白色の釉を施す。全体に粗い貫入。		4区
	16	瓶	—	完形	4.1 8.2 3.6	頚下部と胴下部に圏線。胴部外面に花文。口唇部は鉄釉による口錆を施している。淡灰白色の釉を畳付以外に施している。	景徳鎮	12区Ⅲｂ
	17	壷or 大瓶	—	胴部	－ － －	外面には呉須による文様が観られるが判然としない。白色の細粒子で淡青白濁色の釉を両面に施す。		13区



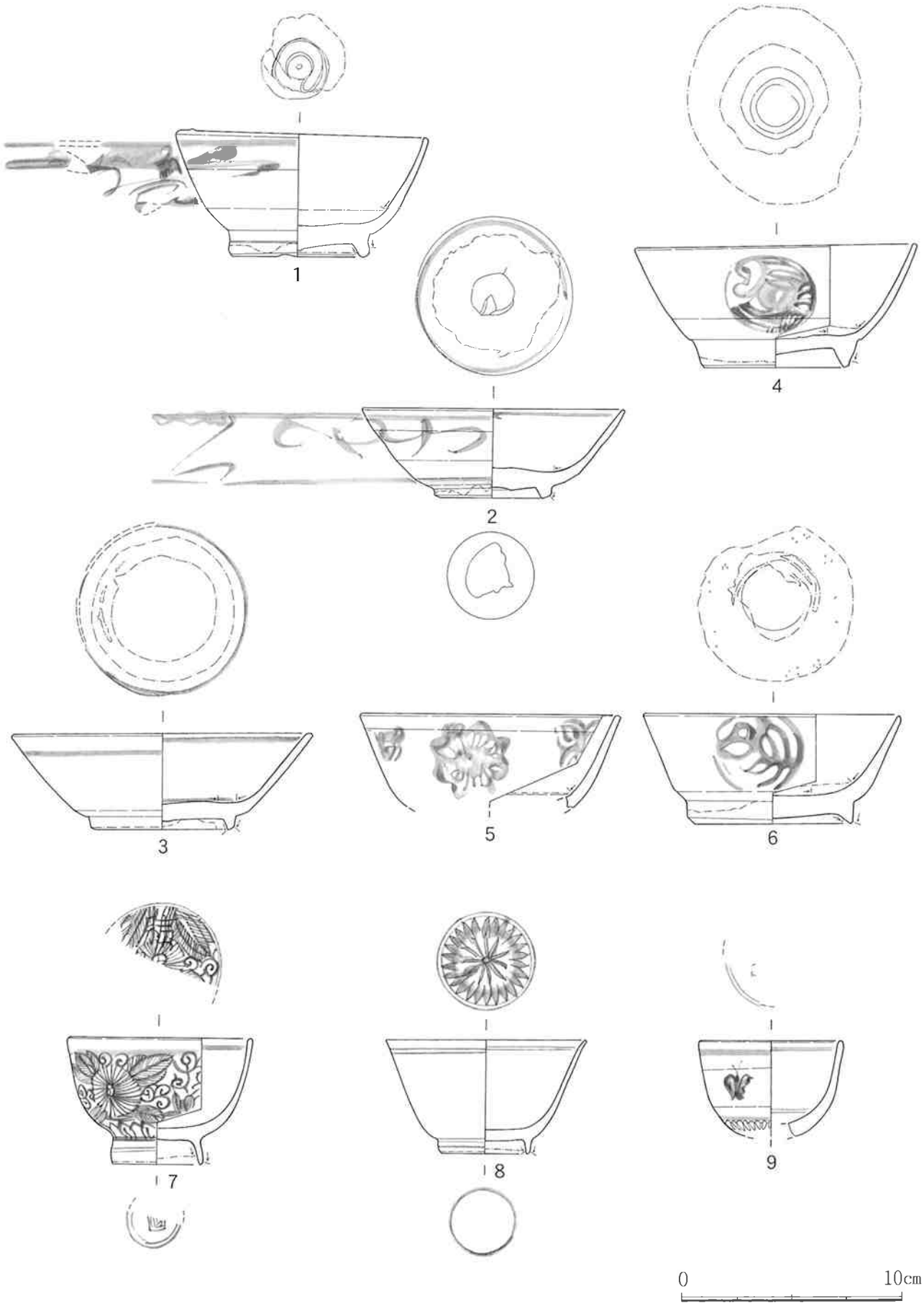
第66図　青花１　碗



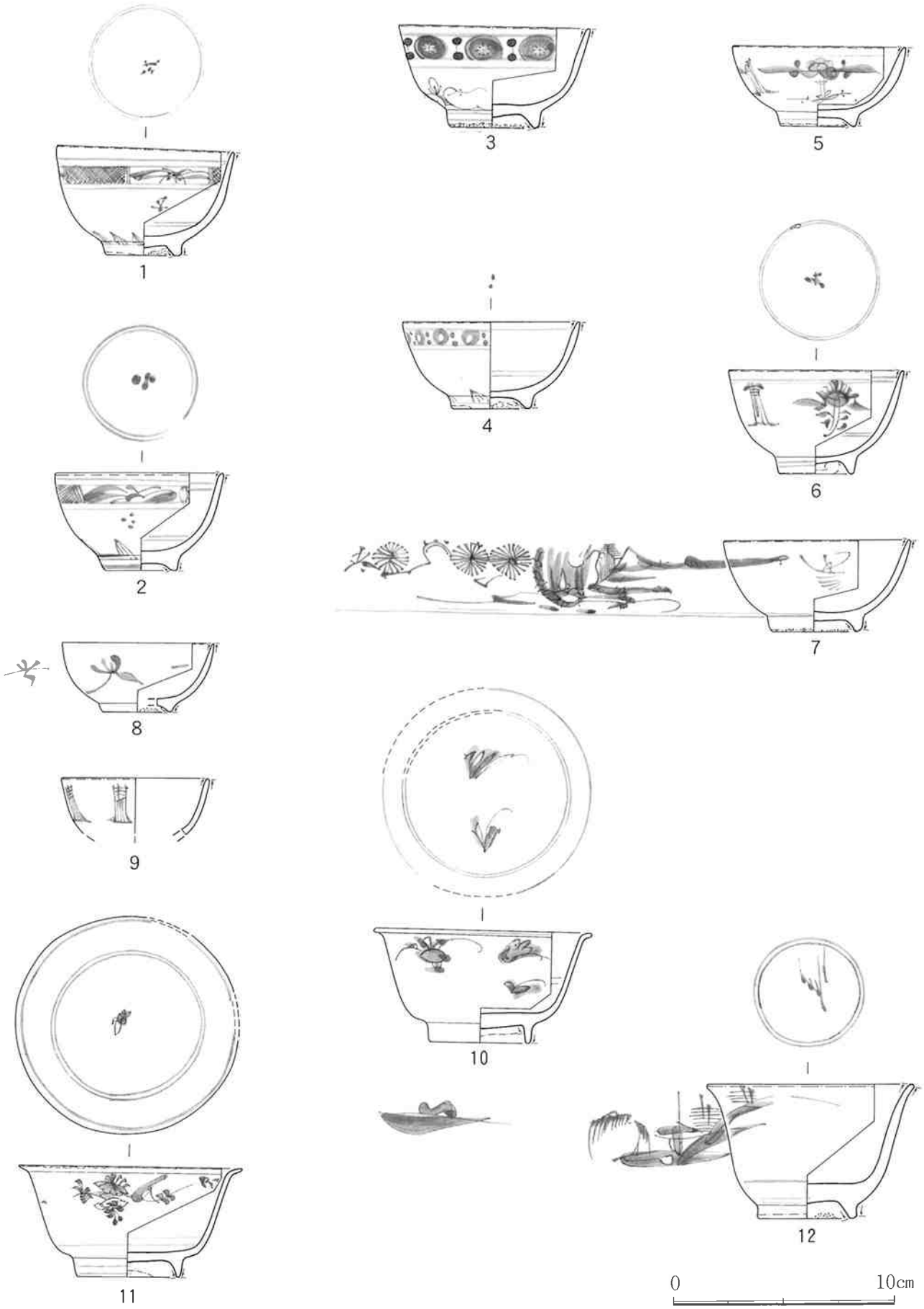
第67図　青花２　碗



第68図　青花３　碗



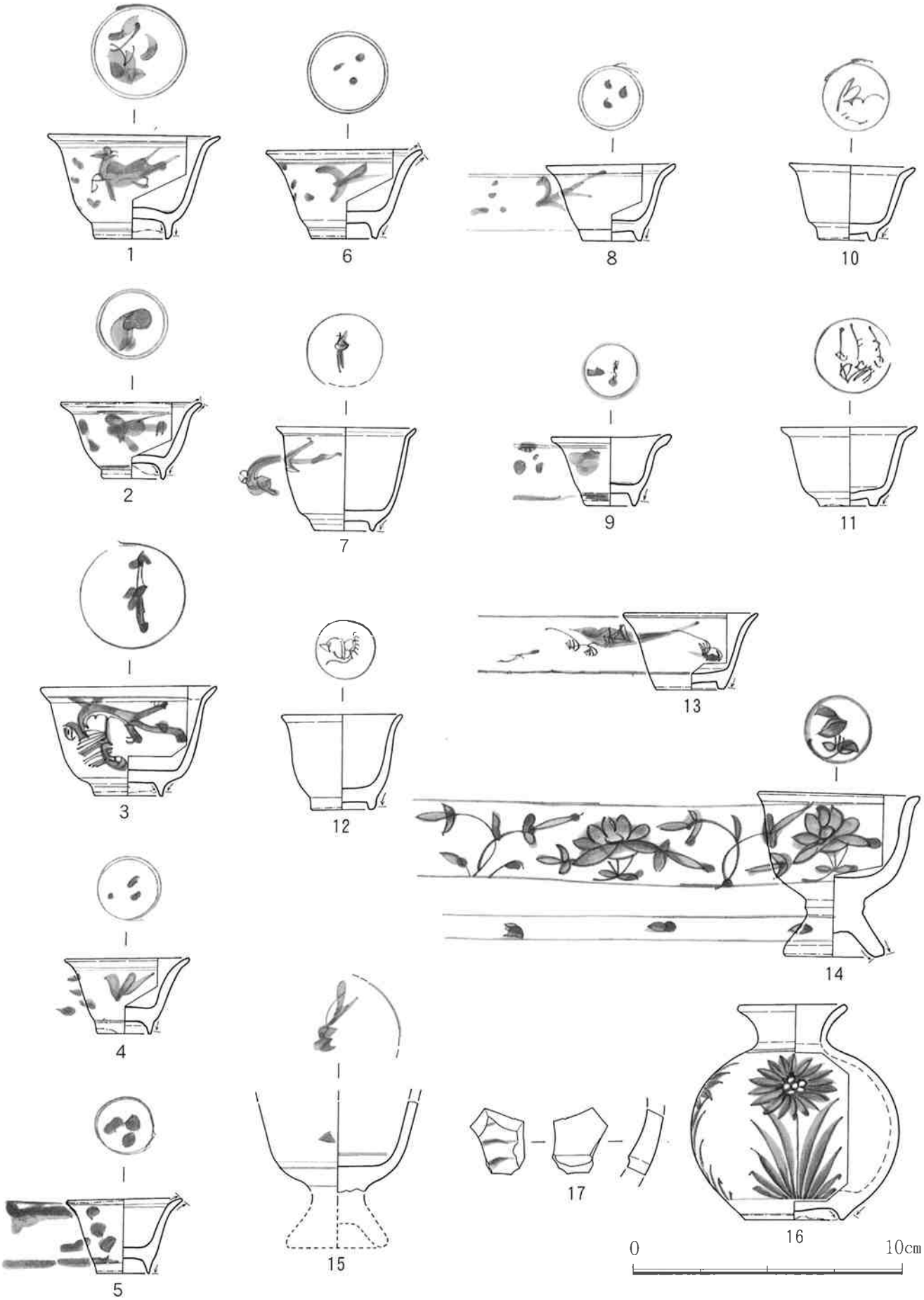
第69図　青花４　碗（１～６）、小碗（７～９）



第70図　青花５　小碗

第71図　青花６　皿（１～４）、杯（５～12）

第72図　青花７　小杯



第73図　青花８　小杯(１～13)、馬上杯(14～15)、瓶(16)、壺or大瓶(17)

第９節　中国産褐釉陶器

中国産褐釉陶器の器種として確認されたのは壷のみであった。ヤッチのガマにおける中国産褐釉陶器の出土総点数は181点となっているが、これらの中には完形もしくは完品も含まれているほか、破片資料にしてもその多くが接合可能なかなり良好な資料であった。また今回は、従来より中国産褐釉陶器とされてきた資料のほかにも、小振りで陶器質な資料や薄手で外面に白濁色の釉を施釉する資料を仮に白釉陶器として本節で扱った。

出土地点及び層位別に見てみると、１～13号区画内全てからの検出が確認されている。また、これまでの資料と同様に、旧１トレンチや旧11号区画外トレンチ、入口側トレンチ等のいわゆる前庭部に自然堆積した土中からの検出例も多くみられたが、土中からの検出が、中国産褐釉陶器全体の約43％を占めるという他とは異なる特徴的な結果が得られており、注目される（第11表）。

今回ヤッチのガマにおいて検出された中国産褐釉陶器は、中国南部をその生産地とするであろうと推測され、おおむね14世紀代から15世紀代を軸とした時期に位置付けられるのではないだろうか。これら中国産褐釉陶器が、後述のタイ産褐釉陶器、沖縄産陶器等と同様にその大部分が厨子への二次的な転用品としてヤッチのガマへと持ち込まれたものであるということが推測されるのであるが、遺構や他の出土遺物との関係、あるいは資料そのものについての性格等については後段の総括にて述べたいと考える。

以下、ヤッチのガマより検出された中国産褐釉陶器の分類概念について記述し、特徴的な資料については図示することとしたい（第74図～第76図）。なお、個々の諸特徴等については観察表に記した（第12表）。

１．壷

ヤッチのガマにて確認された器種は、文頭で述べた通り壷のみであり、完形もしくは完品や接合可能な全形が窺える資料が豊富に検出されている状況である。口縁形態や全体の形状等から、大きく分けてⅠ類～Ⅲ類、Ⅴ類、Ⅵ類の５つに分類をした。なお、Ⅰ類についてはａ～ｃ、さらにａを大・中・小に細分化を試みた。

Ⅰ類　底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へと移行する。口縁部の断面形態は逆「Ｌ」字状・方形・三角形をなすタイプが観られる。必要に応じてａ～ｃ、さらにａを大・中・小に細分化した。

ａ口径に比して底径が小さいタイプをまとめた。さらに、器高が60cm台・50cm台・40cm台でそれぞれ大・中・小として細分化をした。

ｂ口径に比して底径が大きいタイプである。

ｃ全体の形状はａ・ｂと同様であるが、素地や釉調の異なる褐釉を施釉するタイプをｃとした。

Ⅱ類　やや硬質な焼成で、薄く成形されており、横耳を有する小振りのタイプである。

Ⅲ類　やや軟質な焼成で、薄手で、小振りのタイプである。横耳を有するのとそうでないタイプとがあり、前者をａ、後者をｂとして細分した。

Ⅴ類　薄手で外面に白濁色の釉を施釉するタイプで、白釉陶器として扱った。

Ⅵ類　かなり薄手のタイプで、硬質の陶器である。成形は、底部から開き気味立ち上がり、肩部から緩やかに内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へと移行するものと思われ、口縁形態は破損しているため不明である。全体的に暗褐色を呈しており、一部には器面調整によるものと考えられる叩き痕が内面の胴部や外底面に僅かに観察できる。肩上部には縦耳を有する。底部には焼成の際の貝目が観察できる。

※附記

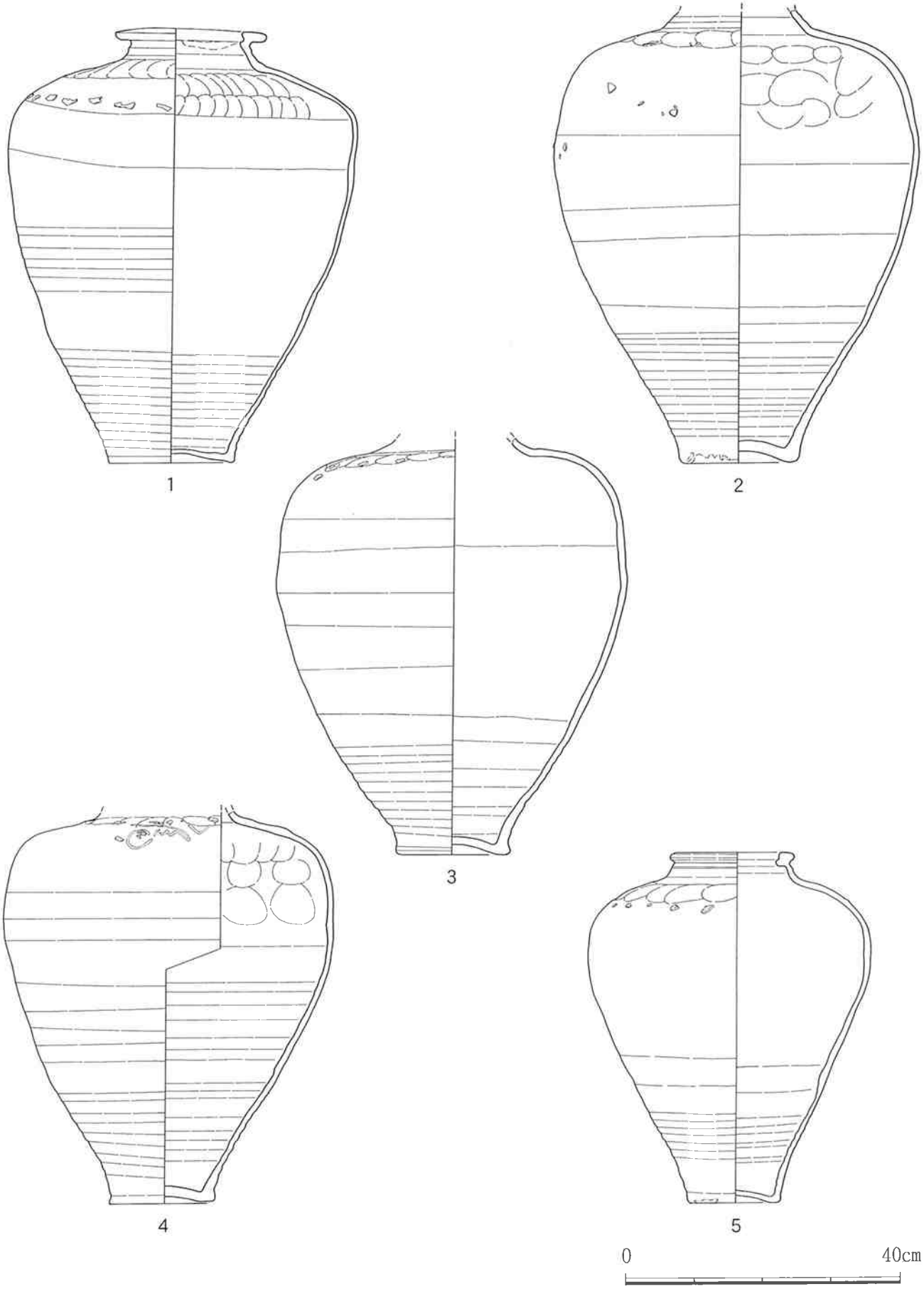
中国産褐釉陶器はヤッチのガマ及びカンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺の墓や地区内その他の墓）全体を通して分類がなされ、Ⅰ類～Ⅵ類の大きく６つに分類できたが、Ⅳ類についてはカンジン原古墓群（地区内その他の墓）のみにおいて確認されていることから今回は触れていない。また、Ⅵ類については文章校正中に、渡辺芳郎氏により、全体の形状や成形の際の調整痕、焼成状況、素地等から国内産（薩摩焼）であるとの所見を頂いた。記して感謝申し上げます。

第11表　中国産褐釉陶器出土状況

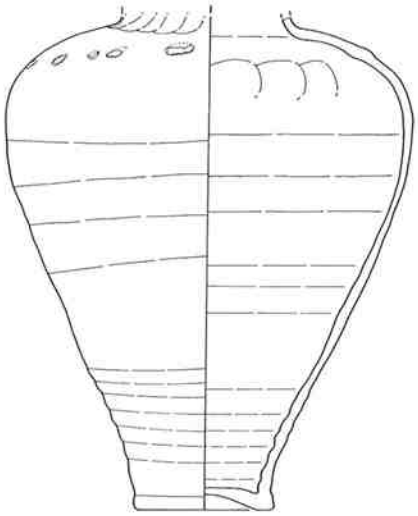
出土地		器種・分類	壷																						合計
			Ⅰ												Ⅱ	Ⅲ				Ⅴ		Ⅵ		不明		
			a								b			c		a	b		c							
			大			中			小	不明																
			完形	口	底	完形	口	底	完形	底	完形	口	底	完形	底	完形	口	底	底	胴	底	胴	底	胴	底	
1区	Ⅲ	礫上																						8		8
1区	Ⅲ																							4		4
1区				1																				8		9
2区	23														1											1
2区	23内																							1		1
2区	Ⅰ																							7		7
2区	Ⅱ																							3		3
2区																								3		3
3区	15				1																					1
3区	15内																							2		2
3区																								1		1
4区	27内																							1		1
4区	Ⅲ																							1		1
4区																								2		2
5区	散乱																							1		1
7区	散乱	2								1														6		7
7区	散乱	5																						1		1
8区	17内																							5		5
8区																								1		1
9区	散乱21																							1		1
9区																								1		1
10区	8							1																		1
10区	Ⅰ																							1		1
10区	上	Ⅱ																						1		1
10区	上	Ⅳ																						2		2
10区	中	Ⅱ																						1		1
10区	中																							1		1
11区	29										1															1
11区	下	石積み																						1		1
11区	下																							1		1
11区																								1		1
12区	8												1													1
12区	10												1													1
12区	Ⅰ																							1		1
12区	石積み外																							4		4
13区	黒土																							2		2
前庭部	Ⅲ	a					1																			1
前庭部	Ⅲ	a'																						2		2
前庭部	Ⅲ	b														1										1
前庭部	Ⅲ	d																						1		1
前庭部	Ⅲ	f 礫敷き																						13		13
前庭部	Ⅲ	f 礫上															1							4		5
前庭部	Ⅲ	g																						1		1
前庭部	Ⅲ	j																						1		1
前庭部	Ⅲ	k																						2		2
前庭部	Ⅲ	l																						5		5
前庭部	Ⅲ	n（一括）																						1		1
前庭部	Ⅲ	n																						1		1
前庭部	Ⅲ	o																						1		1
前庭部	Ⅲ																							3	1	4
前庭部	礫上																1									1
前庭部																								3		3
北側斜面																								3		3
洞内	T．P			1																				2		3
洞内	?																						1			1
1区Ⅲｆ礫上、前庭部Ⅲｏ												1														1
1区Ⅲｆ礫上、前庭部Ⅲ																								1		1
1区、2区Ⅰ																								1		1
1～3区上段トレ、1～3区上段骨集中部、前庭部Ⅰ																				1						1
1～3区上段トレ、1～3区上段骨集中部、1～3区上段、2区Ⅰ																				1						1
1～3区上段トレ、2区散乱20																					1					1
1～3区上段散乱7、2区散乱12、2区、前庭部礫上、洞内T．P						1																				1
1～3区上段、11区-29内、12区Ⅲａ、前庭部Ⅲｂ・Ⅲｄ																					1					1
2区-18、2区-20、2区Ⅱ、2区、10区散乱25			1																							1
2区Ⅱ、前庭部Ⅲ																								1		1
3区散乱2、前庭部Ⅲｆ・Ⅲｎ（一括）																								1		1
6区-12-3、前庭部Ⅲｄ・Ⅲｊ・Ⅲｊ・Ⅲｋ・Ⅲｌ～ｎ									1																	1
6区-13、7区-11、7区散乱2、7区					1																					1
9区、10区-35内、10区上Ⅲ、10区中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、10区中上Ⅲ、10区下、10区集骨ａⅢ・Ⅳ、10区集骨ｂⅡ、10区集骨ｃⅠ、10区散乱4、11区中Ⅰ、11区下、前庭部Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｆ・Ⅲｌ・Ⅲｏ					1																					1
10区-16内、10区上Ⅱ																								1		1
10区上Ⅲ、10区中Ⅱ、前庭部Ⅱ・Ⅲｆ礫敷き・ＳＷ・礫上																						1				1
10区中、11区中Ⅲ、11区下Ⅰ、11区下石積み焼土、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｇ・石積み・石灰岩崩落、前庭部、石積み3																			1							1
11区下Ⅰ・石積み焼土・石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｑ・石積み・石灰岩崩落、石積み3																			1							1
12-15内、前庭部Ⅲｊ・Ⅲｋ										1																1
12区石積み外、13区黒土、前庭部Ⅰ・Ⅲａ'、北側斜面														1												1
13区黒土、13区、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ'、北側斜面											1															1
前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ'																							1			1
前庭部Ⅰ・Ⅲａ'																								1		1
前庭部Ⅰ・石灰岩崩落																									1	1
前庭部Ⅲｆ礫敷き・Ⅲｆ礫上																								1		1
前庭部Ⅲｆ礫敷き・Ⅲｆ礫上・Ⅲｎ・Ⅲ・ＳＷ・礫上																						1				1
前庭部Ⅲｆ礫敷き・Ⅲｆ礫上										1																1
前庭部Ⅲｆ礫敷き・Ⅲｊ				1																						1
前庭部Ⅲｆ礫敷き・礫上																								1		1
前庭部Ⅲｆ・Ⅲｇ'・Ⅲｋ																		1								1
前庭部Ⅲｌ・Ⅲｎ・Ⅲｏ											1															1
前庭部Ⅲｎ（一括）・Ⅲｎ				1																						1
不明										1														17		18
合計			1	4	3	1	1	1	1	4	3	1	2	1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	141	2	181

第12表　中国産褐釉陶器観察一覧

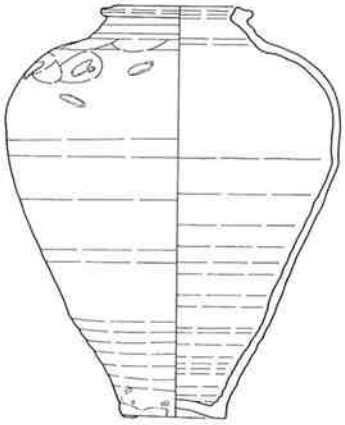
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出　土　地
第74図 図版38	1	壺	Ⅰa大	完形	22.5 64.5 18.8	口縁形態逆「L」字状。頚部に2本の稜線。肩部両面に叩き痕。外面に焼成時の積痕。全体に轆轤痕。灰褐色粗粒子。白色鉱物。両面暗茶褐色釉。	2区-18、2区-20、2区Ⅱ、2区、10区散乱25
	2			頚部 ～ 底部	－ － 17.5	頚部に2本の稜線。肩部両面に叩き痕。外面に焼成時の積痕。全体に轆轤痕。燈褐色粗粒子。白色鉱物。両面黄茶褐色釉。	6区-13、7区-11、7区散乱2、7区
	3			頚部 ～ 底部	－ － 16.7	肩部外面に叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕。暗茶紫色粗粒子。白色鉱物を含む。両面暗茶褐色釉を施す。	3区-15
	4			頚部 ～ 底部	－ － 15.7	頚部に2本の稜線を廻らせる。肩部両面に叩き痕。外面に焼成時の積痕が観察できる。全体に明瞭な轆轤痕。素地は暗灰褐色粗粒子。白色鉱物を含む。両面に黄茶褐色釉を施す。肩部には施釉後に釉を掻き取るように棒状工具による文様らしきものが観られる。	9区、10区-35内、10区上Ⅲ、10区中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、10区中上Ⅲ、10区下、10区集骨aⅢ・Ⅳ、10区集骨bⅡ、10区集骨cⅠ、10区散乱4、11区中Ⅰ、11区下、前庭部Ⅲa・Ⅲb・Ⅲf・Ⅲl・Ⅲo
	5		Ⅰa中	完形	18.4 52.2 13.3	口縁形態は方形状をなす。頚部に1本の稜線。外面肩部には叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕。灰褐色の粗粒子。白色鉱物。両面に黄茶褐色釉。	1～3区上段散乱7、2区散乱12、2区、前庭部礫上、洞内T．P
第75図 図版39	1			頚部 ～ 底部	－ － 14.8	肩部両面には叩き痕と外面に焼成時の積痕。全体に轆轤痕。茶紫色粗粒子。白色鉱物を含む。両面に濃黄茶褐色釉を施す。	10区-8
	2		Ⅰa小	完形	16.0 42.0 11.5	口縁形態は方形状をなす。頚部に2本の稜線。外面肩部には叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕。暗茶褐色の粗粒子。白色鉱物。両面に黄茶褐色釉。	6区-12-3、前庭部Ⅲd・Ⅲj・・Ⅲk・Ⅲl～n
	3		Ⅰb	完形	18.0 43.1 17.2	口縁形態は方形状をなす。頚部に2本の稜線。外面肩部には叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕が観察できる。灰褐色の粗粒子。白色鉱物を含む。両面に茶褐色釉を施す。	13区黒土、13区、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'、北側斜面
	4			完形	16.8 42.0 17.6	口縁形態は三角形状。頚部に2本の稜線。外面肩部には叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕。燈褐色の粗粒子。両面に暗褐色釉。	11区-29
	5			頚部 ～ 底部	－ － 17.4	外面肩部には叩き痕と焼成時の積痕が観察できる。全体に轆轤痕。燈褐色の粗粒子。両面に黄褐色釉を施す。	12区-10
	6			完形	17.1 46.3 18.5	口縁形態は三角形状。頚部に2本の稜線。外面肩部には同心円の叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕。燈褐色の粗粒子。両面に暗茶褐色釉。	前庭部Ⅲ1・Ⅲn・Ⅲo
第76図 図版40	1		Ⅰc	完形	17.0 55.6 16.2	口縁方形状。頚部に2本の稜線。肩部に叩き痕と焼成時の積痕。全体に轆轤痕。薄手である。淡灰紫色の粗粒子。白色鉱物。両面に失透気味の暗褐色釉。	12区石積み外、13区黒土、前庭部Ⅰ・Ⅲa'、北側斜面
	2		Ⅱ	頚部 ～ 底部	－ － 16.1	薄手のタイプ。小振りで全体的に丸みを持つ。肩部に横耳を4つ有する。淡赤褐色の粗粒子。濃緑黄褐色の釉を両面に施す。	2区-23
	3		Ⅲa	完形	10.5 31.9 11.5	肩部からやや直気味に立ち上がる。横耳を有する。淡燈褐色の粗粒子。両面に暗褐色釉を施した後、耳下部の釉を描き取り2本の圏線。	前庭部Ⅲb
	4		Ⅲb	頚部 ～ 底部	－ － 12.2	肩部から大きく外反し口縁部とする。全体に轆轤痕。灰褐色の粗粒子。白色の鉱物を含む。両面に暗褐色釉を施している。	前庭部Ⅲf・Ⅲg'・Ⅲk
	5		Ⅴ	頚部 ～ 底部	－ － 15.9	薄手のタイプ。全体に轆轤痕。肩部に縦耳を4つ有する。赤燈色の粗粒子。外面に淡黄白濁色、内面に暗褐色の釉を施している。	1～3区上段、11区-29内、12区Ⅲa、前庭部Ⅲb・Ⅲd
	6		Ⅵ	頚部 ～ 底部	－ － 18.7	※薩摩焼。内面には調整の際の叩き痕が観察できる。底部には焼成時の貝目が観察できる。素地は暗灰紫色の細粒子。両面に暗褐色の釉。	洞内？
	7			頚部 ～ 底部	－ － 21.4	※薩摩焼。6に比して厚手。内面には調整の際の叩き痕が観察できる。底部には焼成時の貝目。素地は暗灰燈色の細粒子。両面に暗褐色の釉を施すが失透気味。	前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'



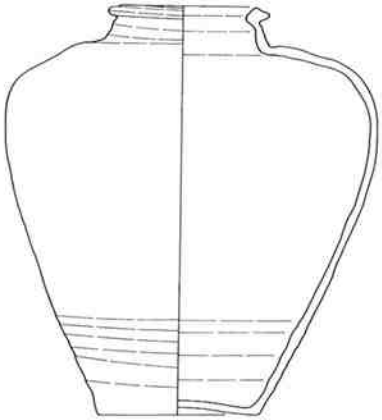
第74図　中国産褐釉陶器１　壷



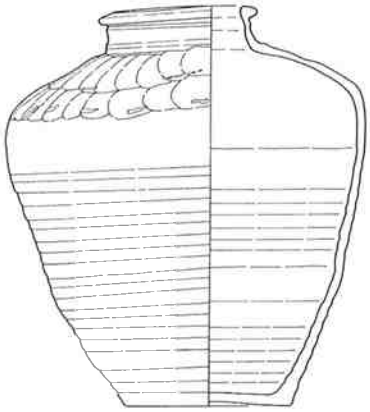
1



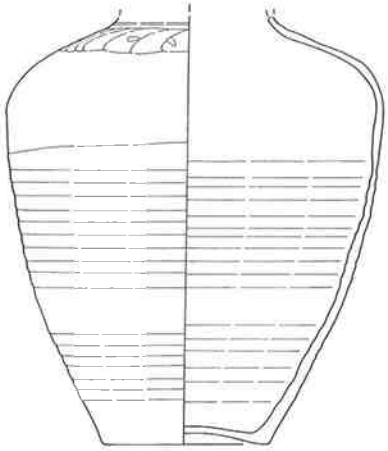
2



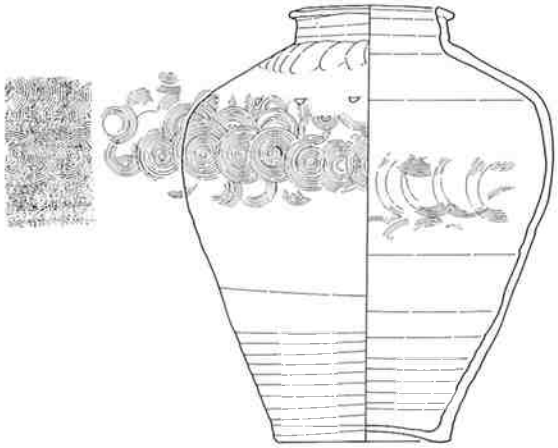
3



4



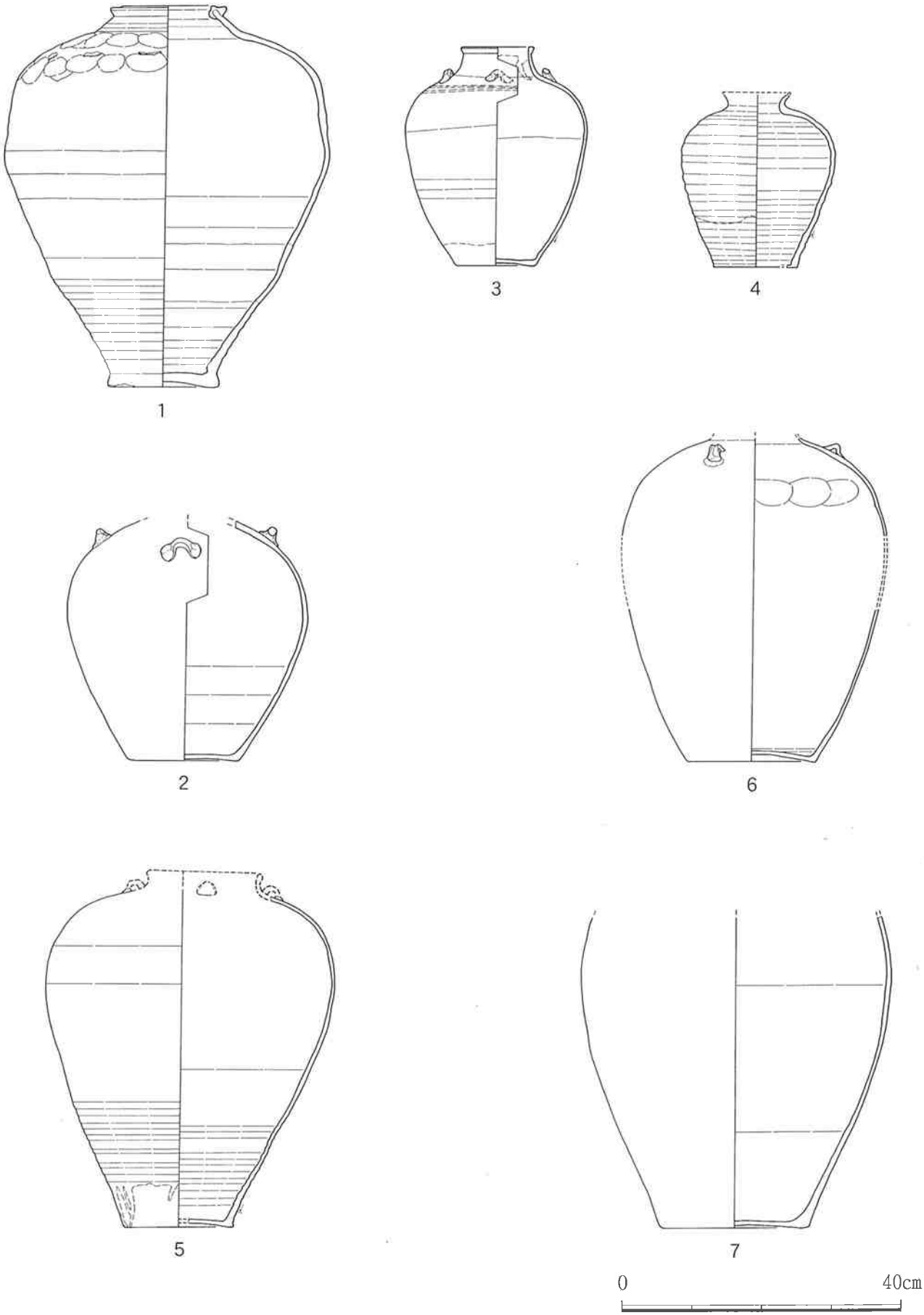
5



6

0　　40cm

第75図　中国産褐釉陶器２　壷



第76図　中国産褐釉陶器３　壺

第10節　タイ産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器としては、その大部分が壷として確認されている。ヤッチのガマにおいてのタイ産褐釉陶器の出土総点数は68点となっており、そのうち壷は65点と最も多く検出されており、全体の約92％を占めている。これらは、中国産褐釉陶器と同様に完形もしくは完品が含まれているほか、多量の破片資料にしてもその多くが接合可能な状況で全形が窺える資料であった。また、その他の器種としては小壷も検出されているほか、瓶も扱った。この瓶については、その生産地の特定において、在地の資料もしくは国内・外いずれの要素をも有することから非常に困難を極めたため、素地・口縁形態等から今回はタイ産としてまとめたが、類例の検出をもって最終的な判断を必要とする資料であるということを断っておく。

出土地点及び層位別に見てみると、前節の中国産褐釉陶器と同様に、前庭部に自然堆積した土中からの検出が確認されている。タイ産褐釉陶器についても土中からの検出が全体の約51％を占めている状況であった（第13表）。

今回、ヤッチのガマにて検出されたタイ産褐釉陶器は、最近の研究によりタイ部の窯やシーサッチャナライ窯等において生産された可能性が高いとされている。前節の中国産褐釉陶器においても述べたように、おそらくその大部分が厨子への二次的な転用品としてヤッチのガマへと持ち込まれたものと考えられるが、遺構や他の出土遺物との関係については後段の総括にて述べることとする。

以下、ヤッチのガマより検出されたタイ産褐釉陶器の分類概念を記述し、特徴的な資料について示すこととする（第77図～第78図）。なお、個々の特徴等の詳細については観察表に記した（第14表）。

1．瓶

口縁形態に特徴のある瓶が得られているが、先述のとおり、その生産地の特定については類例の検出をもって最終的な判断を必要とする資料である。全体的な形状を観てみると、高台は低く、高台内削りはかなり浅めである。高台脇から丸みを持って立ち上がり、胴部中央あたりから内傾していき頚部へと移行し、そこから外に開いて立ち上がり再度外反して口縁部とする。

2．小壷

縦耳を有する小壷の破片資料が検出されている。

3．壷

大型の壷で、口縁形態からⅠ類～Ⅱ類に分類して、必要に応じてａ、ｂに細分化した。

Ⅰ類　底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり頚部へと移行する。頚部からきつく外反させて、丸みのある肥厚帯を成形するタイプである。頚部から肩部に沈線を3本もしくは2本施すものとがあり、前者をａ、後者をｂとして細分化した。

Ⅱ類　Ⅰ類と同様に、底部から開き気味に立ち上がり、肩部あたりから強く内傾して角度を変えて立ち上がり頚部へと移行するタイプである。頚部から外側に大きく外反させた後、口唇部の上方を微弱に突出させるように成形したタイプである。全体的な形状から、寸胴なタイプと縦に短く胴上部が張り出すようなタイプがあり、前者をａ、後者をｂとして細分した。

※タイ産褐釉陶器の壷は、ヤッチのガマ及びカンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺の墓や地区内その他の墓）全体を通して分類がなされ、Ⅰ類～Ⅲ類の３つに分類できたが、Ⅲ類についてはカンジン原古墓群（地区内その他の墓）のみにおいて確認されていることから今回は触れていない。

第11節　タイ産炻器

全体的な形状は、前節のタイ産褐釉陶器やこれまでに確認されているタイ産炻器資料に酷似しており、焼成の度合いからやや軟質な陶器に属するものと考えられることから、本資料をタイ産炻器として扱った。この種の資料は県内において初めての検出であるといえる。本資料についても、厨子への二次的な転用品としてヤッチのガマへと持ち込まれた可能性が高いといえる。なお、ヤッチのガマ及びカンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺の墓）においても破片資料が確認されているが本節でのみ扱うこととした。

第78図５は、底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり頚部へと移行する。頚部から大きく外反させて口縁部へと移行させている。口縁形態は「Ｌ」字状を呈するタイプである。口唇部・頚部・肩部には沈線を施している。また、肩部には下方に突出する逆三角形状の連続文をスタンプにより廻らせている。なお、素地等の詳細については、第14表の観察表にて述べることとする。

第13表　タイ産褐釉陶器出土状況

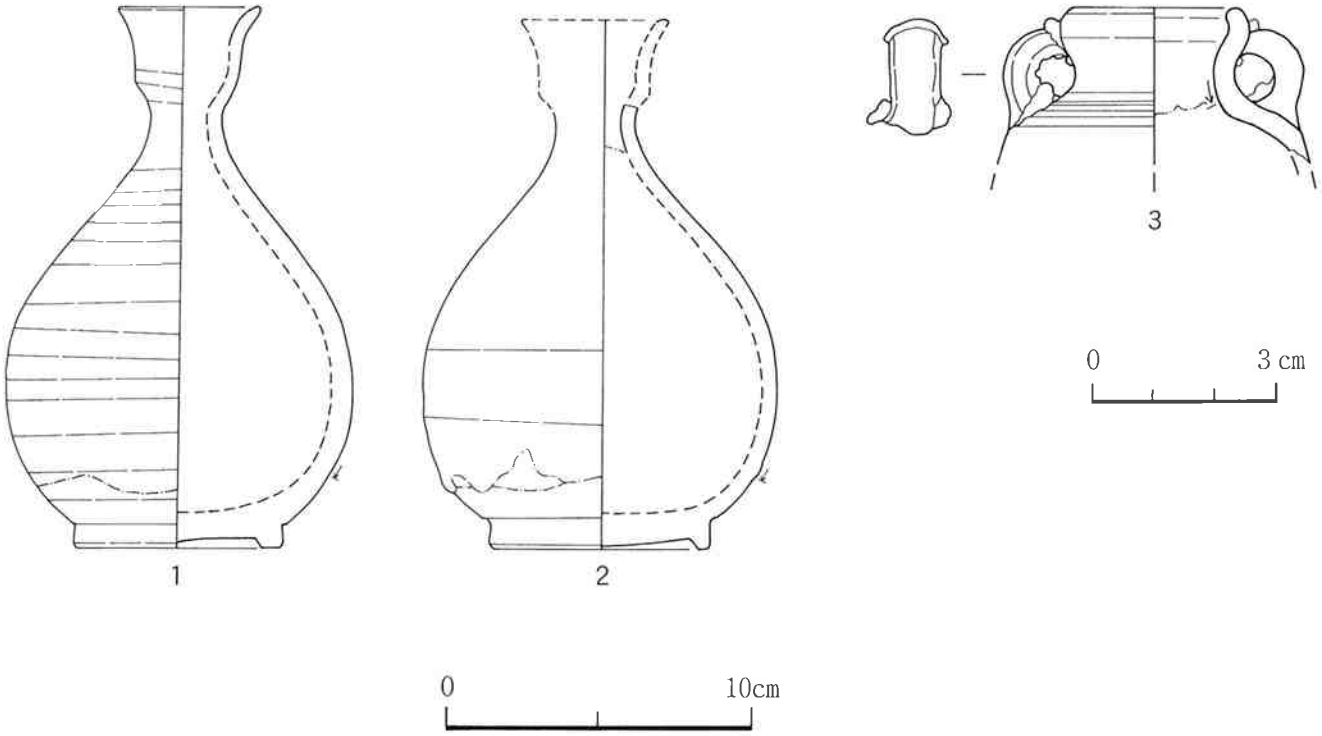
出土地 ＼ 器種・分類			瓶			小壺		壺										合計
								Ⅰ				Ⅱ			不明		小計	
								a	b			a	b	不明				
			完形	底	小計	口	小計	底	完形	口	底	完形	完形	口	胴	底		
1区	散乱														1		1	1
															1		1	1
2区	Ⅱ														1		1	1
						1	1											1
3区	20											1					1	1
4区	14内														1		1	1
															3		3	3
7区	7							1									1	1
	10									1							1	1
	散乱	2													1		1	1
		3														1	1	1
		5													2		2	2
															1		1	1
8区	11内														1		1	1
	17内														4		4	4
															3		3	3
11区	23内															1	1	1
	37								1								1	1
	44												1				1	1
12区	15									1							1	1
	Ⅰ～Ⅱ														1		1	1
13区	黒土														1		1	1
前庭部	Ⅰ														1		1	1
	Ⅲ	f礫敷き													4		4	4
		k													1		1	1
		n（一括）													2		2	2
		n													1		1	1
		o														1	1	1
															1		1	1
	礫上														1		1	1
				1	1										1	1	2	3
北側斜面															1		1	1
洞内	T．P														4		4	4
															1		1	1
1区Ⅰ、2区、前庭部Ⅲf・Ⅲn（一括）																1	1	1
7区-2内、7区散乱1										1							1	1
7区散乱5、前庭部Ⅲf礫敷き・Ⅲf礫上															1		1	1
11区-47、12区、前庭部Ⅲf											1						1	1
前庭部Ⅲa'・Ⅲf			1		1													1
前庭部Ⅲf・Ⅲo															1		1	1
前庭部Ⅲn（一括）・Ⅲo（一括）・SW														1			1	1
不明															8	2	10	10
合　計			1	1	2	1	1	1	1	3	1	1	1	1	49	7	65	68

第14表ａ　タイ産褐釉陶器・タイ産炻器観察一覧

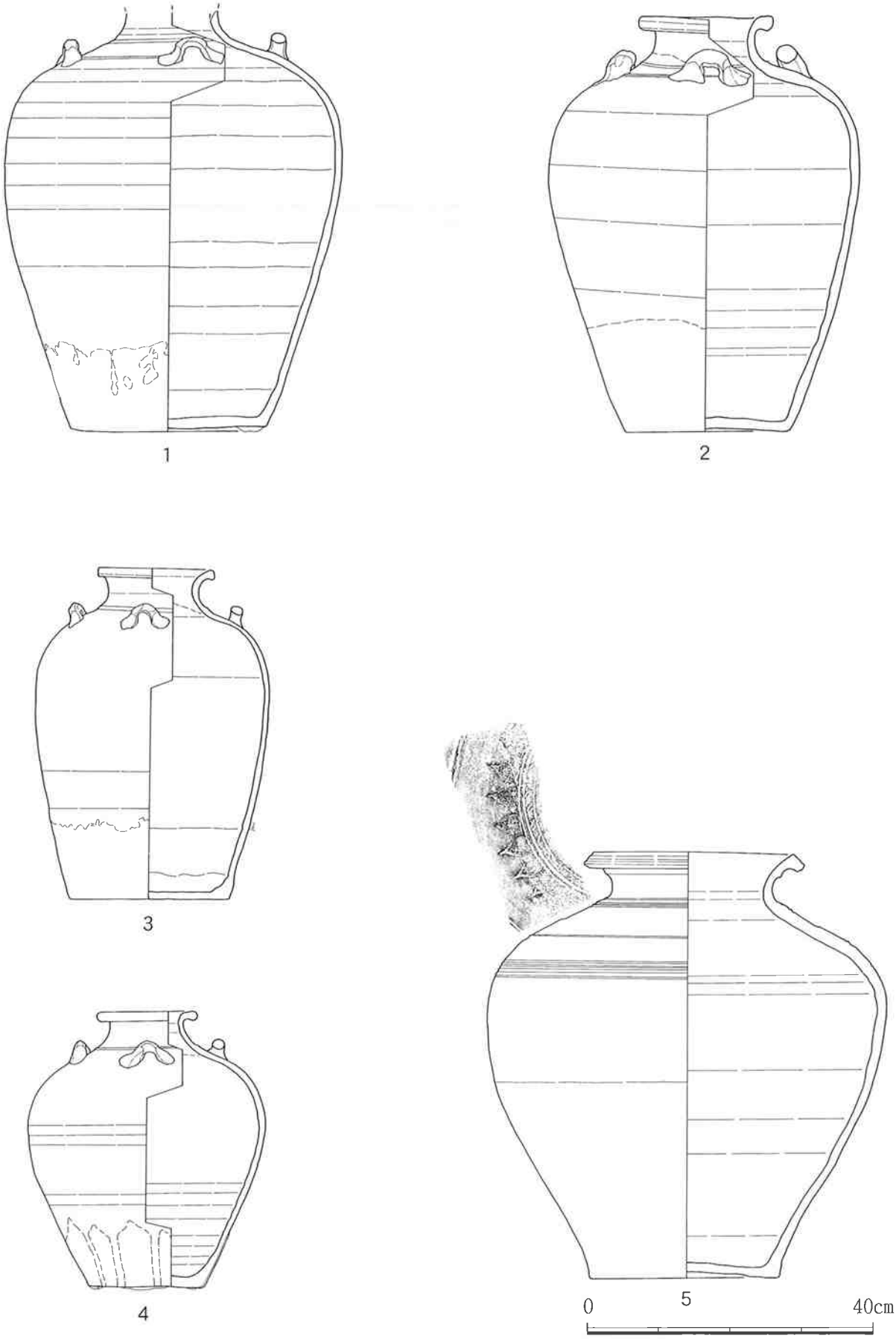
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出　土　地
第77図 図版41	1	瓶	－	完形	4.8 17.9 6.7	高台は低く、高台内削りはかなり浅め。高台脇から丸みを持って立ち上がり、胴部中央で内傾し頸部で外に開いて立ち上がり再度外反して口縁部とする。素地は淡灰褐色の粗粒子。黒色鉱物。黄茶褐色釉を施す。	前庭部Ⅲa'・Ⅲf
	2			底部	－ － 7.1	高台は低く、高台内削りはかなり浅め。高台脇から丸みを持って立ち上がり、胴部中央で内傾し頸部へ移行する。素地は淡灰褐色の粗粒子で黒色の鉱物を含む。黄茶褐色釉を施す。	前庭部
	3	小壺	－	口縁部	2.7 － －	胴部から次第に窄まり、頸部で外反して口縁下部で立ち上がって内傾し、口縁部となす。外側に縦耳が２つ付されるものと思われる。灰褐色の粗粒子で微細な黒色鉱物。釉は茶黒色を呈すが二次的被熱を受ける。	２区

第14表ｂ　タイ産褐釉陶器・タイ産炻器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出　土　地
第78図 図版41	1	壺	Ⅰａ	底部	－ － 28.0	頚部に1本の稜線が観察できる。横耳を４つ有するものと思われ、耳の位置には3本の沈線が入る。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は灰褐色の細粒子で白色及び黒色の鉱物を含む。濃緑黄褐色の釉を胴下部まで施す。	7区-7
	2		Ⅰｂ	完形	19.2 58.9 23.0	頚部に1本の稜線が観察できる。横耳を４つ有するものと思われ、耳の位置には２本の沈線が入る。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は灰褐色の細粒子で白色及び黒色の鉱物を含む。濃緑黄褐色の釉を胴下部まで施す。	11区-37
	3		Ⅱａ	完形	15.6 47.0 22.5	頚部に1本の稜線が観察できる。横耳を４つ有するものと思われる。素地は暗紫褐色の細粒子で白色及び黒色の鉱物を含む。釉色は口縁から頚部は茶紫色で胴部は黒褐色を呈する。	3区-20
	4		Ⅱｂ	完形	13.2 39.6 15.8	頚下部に1本の稜線が観察できる。横耳を４つ有する。素地は灰褐色の細粒子で白色及び黒色の鉱物を含む。濃緑黄褐色の釉を胴下部まで施している。	11区-44
	5		－	完形	29.3 60.5 26.6	口唇部・頚下部・肩部には幾重もの沈線もしくは稜線を廻らせている。全体に風化が著しく、剥落している。口縁内部や胴上部は一部煤？が付着している。素地は淡灰褐色を呈するが一部は焼成不良気味である。	10区-30、10区-36内、10区散乱4、10区上Ⅱ・Ⅲ、前庭部Ⅲｄ・Ⅲｆ



第77図　タイ産褐釉陶器１　瓶（１～２）、小壺（３）



第78図　タイ産褐釉陶器２　壷（１～４）、タイ産炻器　壷（５）

第12節　本土産青磁

九州を生産地とすると思われる青磁を本土産青磁として扱った。器種としては瓶が５点検出されており、いずれも完形もしくは完品であった。全体の形状としては、全てラッキョウ型を呈しており、器面等の調整は中国産の青磁に比してかなり雑に成されている（第79図１～３）。なお、ヤッチのガマ及びカンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺の墓）においても確認されているが本節でのみ扱った。

１は高台が低く、高台内削りが浅い。高台外面には箆削りによる面取り。外面には轆轤痕や鉋目等の調整痕が明瞭である。口縁は微弱に外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、淡灰緑色の透明釉を畳付以外に施す。畳付には砂が付着する。口径３cm、器高14cm、底径4.8cm（前底部Ⅲｆ）。

２は、全体の形状は１と同様であるが、丁寧な成形である。口縁部はややきつく外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、淡緑灰色の釉を畳付以外に施す。全体にやや粗い貫入が入る。畳付に砂が付着する。口径4.2cm、器高12.5cm、底径4.7cm（前底部Ⅲｃ）。

３も全体の形状は同様で、外面には轆轤痕が明瞭である。口縁は微弱に外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、淡灰緑色の透明釉を畳付以外に施す。畳付に砂が付着。口径３cm、器高15cm、底径4.7cm（前底部Ⅲａ'・Ⅲｈ）。

第13節　本土産白磁

肥前を生産地とするものと思われる白磁が得られている。確認された器種は、碗・皿・壷の３器種であった。これらは完形もしくは完品で、壷のみが破片資料で全形が窺えない（第79図４～７）。

４は直口口縁の碗で、口径10.4cm、器高6.3cm、底径4.4cmである。高台はやや高く、高台内削りは深め。外面には轆轤痕が顕著である。素地は白色の微粒子で白色の透明釉を畳付以外に施す。畳付に砂が付着する(前底部Ⅲｂ)。

５も直口口縁の碗で、口径11.4cm、器高5.8cm、底径4.2cmである。高台は低く小さい。１に比して薄造りである。素地は白色の微粒子で白濁色の釉を畳付以外に施す（前底部Ⅲｄ）。

６は直口口縁の皿で、口径10.6cm、器高2.8cm、底径5.8cmである。高台は低く、内削りはかなり浅い。素地は白色の細粒子で白濁色の釉を畳付以外に施す。全体に細かい貫入が入る（前底部Ⅲｅ、前底部Ⅲｆ）。

７は油壷の胴部片であると思われる資料で、両面ともに轆轤痕が明瞭である。素地は白色の細粒子で淡灰白濁色の釉を外面に施している（前底部Ⅲ）。

第14節　本土産色絵

有田及び肥前を生産地とする色絵が５点得られている。確認された器種は壷と瓶の２器種であった。壷は完形もしくは完品で、瓶のみが破片資料で全形が窺えない（第79図８～12）。

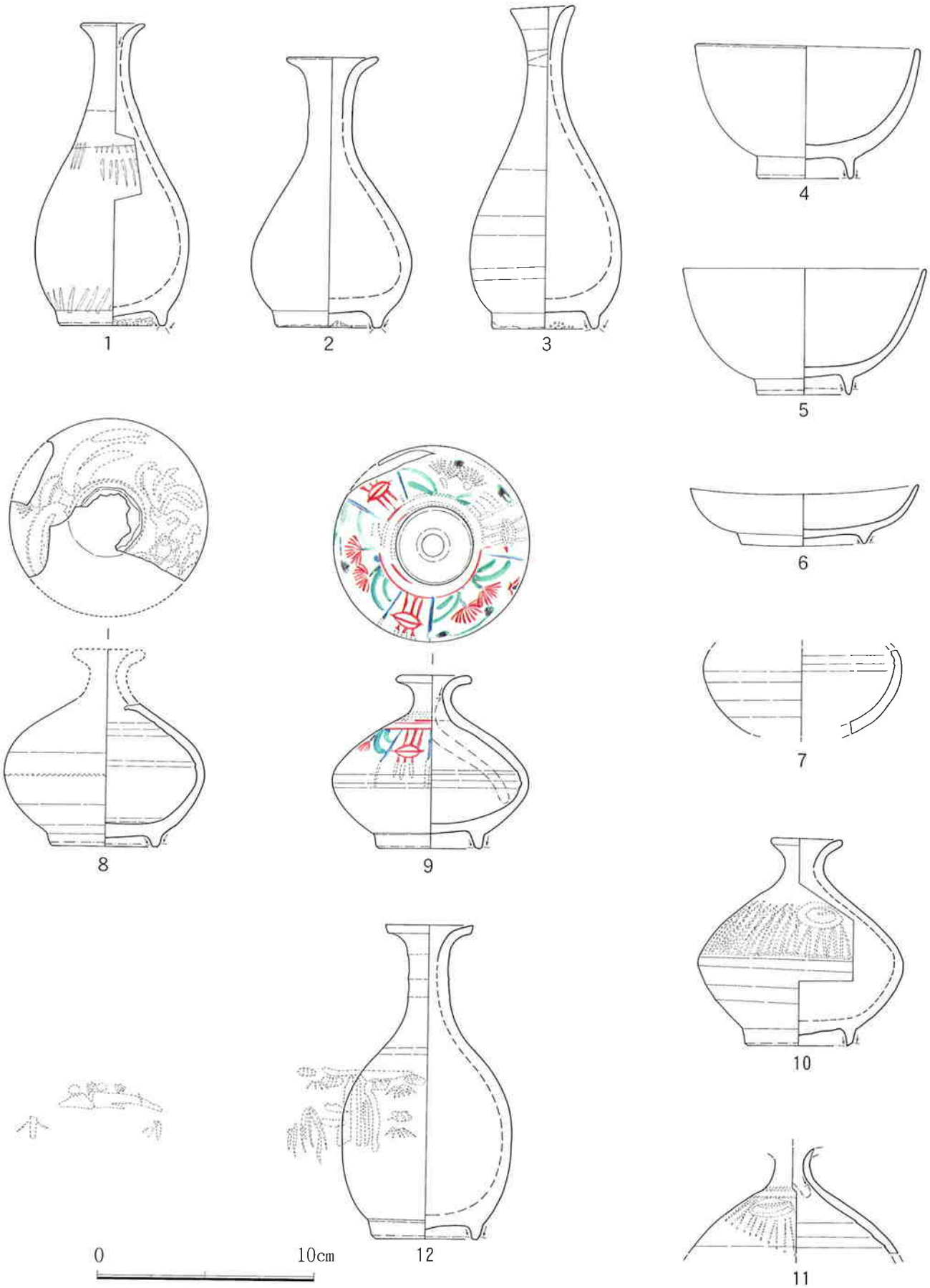
８は油壷で、底径が4.9cmである。高台は低く、内削りは浅い。高台脇から大きく開いて立ち上がり、「く」の字状に内傾し頚部へと移行する。両面ともに轆轤痕が明瞭である。素地は白色の細粒子で白濁色の釉を外面に施した後に胴上部に構成の不明な上絵を加えている。畳付は露胎である（４区、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ'）。

９も油壷で、口径3.6cm、器高８cm、底径4.7cmである。高台は低く、内削りはやや深い。高台脇から大きく開いて立ち上がり、「く」の字状に内傾し頚部へと移行して口縁部を大きく外反させている。両面ともに轆轤痕が明瞭である。素地は白色の細粒子で白濁色の釉を外面に施した後に胴上部に圏線や花卉文等の上絵を加えている。畳付は露胎である（２区－４内、２区Ⅱ、前庭部Ⅲａ・ｂ）。

10も油壷で、口径3.3cm、器高9.6cm、底径4.5cmである。高台は低く、内削りはやや深い。高台脇から大きく開いて立ち上がり、「く」の字状に内傾し頚部へと移行して口縁部を大きく外反させている。両面ともに轆轤痕が明瞭である。素地は白色の細粒子で白濁色の釉を外面に施した後に胴上部に半網目文と丸文？を上絵で表現している。畳付は露胎である（前庭部Ⅲｂ）。

11も油壷である。両面ともに轆轤痕が明瞭である。素地は白色の細粒子で淡灰白濁色の釉を外面に施した後に10と同様な半網目文と丸文を上絵により表現している（前底部Ⅱ・Ⅲａ'）。

12は瓶の完形品で、口径4.1cm、器高14.6cm、底径4.7cmである。高台は低く、内削りは浅く雑である。全体の形状はラッキョウ型を呈しており、外面には轆轤痕が明瞭である。口縁部は外側に大きく開き、断面が方形を成している。素地は白色の微粒子で白濁色の釉を施しているが、畳付は露胎である。胴上部には笹等を上絵付けにより表現している（11区下石積、前庭部Ⅲａ'・ｆ）。



第79図　本土産青磁　瓶(1～3)、本土産白磁・碗(4～5)、皿(6)、壷(7)
本土産色絵・油壷(8～11)、瓶(12)

第15節　本土産染付

本土産染付の器種として確認されたのは、碗・小碗・杯・小杯・瓶の５器種であった。ヤッチのガマにおける本土産染付の出土総点数は216点であり、厨子以外で確認された陶磁器類では最も多く検出されている。中でも瓶は134点を数え、器種別にみても出土陶磁器においては他を圧倒する結果が得られており、これについで碗が57点、小碗15点と続き、以下、小杯、杯と続いている状況であった（第15表）。

出土地点及び層位別に概観してみると、旧１トレンチや旧11号区画外トレンチ、入口側トレンチ等のいわゆる前庭部に自然堆積した土中からの検出が全体の約78％を占めており、第８節の青花と同様な傾向がみられた。

今回ヤッチのガマにて検出された本土産染付は、産地別にみた場合、有田や波佐見焼等の肥前磁器のみであった。時期的にみると、最も古い資料で17世紀中葉に位置付けられる資料が確認されているものの、主体となるのは18世紀前半頃の資料であった。また、検出された碗の資料中、波佐見焼が若干多い傾向にあるのは特徴的であるといえる。また、瓶の占める割合は本土産染付全体の約64％となっていることから、これによりヤッチのガマにおける本土産染付の意味付けがなされるものと考えられるが、これらの詳細や遺構との関係等については後段にて述べる事としたい。

以下、ヤッチのガマより検出された本土産染付の分類概念について述べ、特徴的な資料については図示することとする（第80図～第87図）。なお、個々の諸特徴等については観察表にまとめた（第17表）。

１．碗

ヤッチのガマより検出された本土産染付碗は、一般に丸碗とされる直口口縁タイプの碗のみであった。施柚方法や圏線等の施文方法から必要に応じて、ａ・ｂ、あるいは１～４等に細分化した。なお、ａ・ｂまたは１～４として分類できないが、特徴的な破片資料を不明として扱った。

ａ高台脇から丸みを持って立ち上がり、畳付以外を総釉にする。外面の圏線の組み合わせで１～４に細分化を試みた。

〈圏線の組み合わせ〉

１）口縁１・腰１・高台１・　－
２）口縁１・腰１・　－　・　－
３）　－　・腰１・高台２・高台内１
４）　－　・腰１・高台２・　－

ｂ高台脇から丸みを持って立ち上がり、畳付以外を総釉した後に、見込みを蛇の目釉禿ぎするタイプである。ａと同様に外面の圏線の組み合わせから１～３に細分化を試みた。

〈圏線の組み合わせ〉

１）　－　・腰１・高台２・高台内１
２）　－　・腰１・高台２・　－
３）圏線なし

２．小碗

本土産染付の小碗については、口縁形態から直口口縁と外反口縁の２つに大別し、Ⅰ類・Ⅱ類とした。また、Ⅱ類については、圏線の組み合わせから１～３に細分した。

Ⅰ類　直口口縁

高台脇から丸みを持って立ち上がり、直口口縁とする。畳付以外を総釉にするタイプである。

Ⅱ類　外反口縁

高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁部を微弱に外反させるタイプで、畳付以外を総釉にするタイプである。外面の圏線の組み合わせから１～３に細分化を試みた。

〈圏線の組み合わせ〉

１）　－　・腰１・高台２・高台内１
２）　－　・腰１・高台２・　－
３）　－　・腰１・高台１・　－

3．杯

型成形の杯が1点得られている。直口口縁タイプである。

4．小杯

小杯は全て外反口縁タイプである。畳付以外を総釉にするタイプである。外面の圏線の組み合わせから１～３に細分化を試みた。

〈圏線の組み合わせ〉

１）口縁１・腰１・高台１・　－

２）　－　・腰１・高台１・　－

5．瓶

本土産染付の瓶については、全体の形状からＡ群ラッキョウタイプ、Ｂ群瓢箪タイプ、Ｃ群方形タイプ、Ｄ群肩衝タイプの４つに大別した。また、Ａ群は口縁形態からⅠ、Ⅱ類とした。さらに、ａ～ｈ、１～８等に細分化した。

Ａ群　ラッキョウタイプ

口縁形態からⅠ類直口口縁（鶴首形）、Ⅱ類外反口縁に分類した。さらに、胴部に描かれている主文様からａ～ｈに細分し、圏線の組み合わせから１～11に細分化した。

Ⅰ類　直口口縁（鶴首形）

口縁形態は直口口縁で、いわゆる鶴首形を呈する瓶である。

Ⅱ類　外反口縁

全体の形状及び外反口縁の形態に若干の差異は認められるが、同一グループとしてまとめた。胴部に描かれている主文様からａ～ｈに細分し、圏線の組み合わせからさらに１～8等に細分化した。

ａ外面の胴部に網目文を描いて主文様とする。

〈圏線の組み合わせ〉

１）胴上部３・胴下部１・高台２

２）胴上部３・胴下部１・高台１

３）胴上部２・胴下部１・高台２

ｂ外面の胴部に草花文を描いて主文様とする。

〈圏線の組み合わせ〉

１）胴上部３・胴下部１・高台２

２）胴上部３・胴下部１・高台１

３）胴上部３・胴下部１・　－

４）胴上部３・　－　　・高台２

５）胴上部２・胴下部１・　－

６）　－　　・胴下部１・高台２

７）　－　　・胴下部１・高台１

８）圏線なし

ｃ外面の胴部に折枝文を描いて主文様とする。

〈圏線の組み合わせ〉

－　　・胴下部１・高台１

ｄ外面の胴部に丸文＋網目文を組み合わせて描いて主文様とする。

〈圏線の組み合わせ〉

胴上部３・胴下部１・高台２

ｅ外面の胴部に丸文を組み合わせて描いて主文様とする。
〈圏線の組み合わせ〉
　　－　　・胴下部１・高台１

ｆ外面の胴部に銘（太神宮）を描いて主文様とする。
〈圏線の組み合わせ〉
　　－　　・胴下部１・　－

ｇ外面の胴部にコンニャク印判による松文？を描いて主文様としている。
〈圏線の組み合わせ〉
　　圏線なし

ｈ胴上部に芭蕉文を描くが、胴部には主文様を描いていない。
〈圏線の組み合わせ〉
　　－　　・胴下部１・高台１

Ｂ群　瓢箪タイプ
　底部からやや開き気味に立ち上がり、一度内傾してくびれさせた後に、再度「く」の字状に膨らませながら頚部へと移行する。口縁部は欠損しているが鶴首形の口縁部を成形するものと思われる。

Ｃ群　方形タイプ
　胴上部及び胴下部がきつく張り出すタイプで、底部から腰折状に成形し、窄ませるように立ち上がらせる。肩部できつく内傾し角度を変えて頚部へと移行させて口縁部を外反させている。

Ｄ群　肩衝タイプ
　胴上部がゆるやかに張り出すタイプで、底部からやや開き気味に成形し、肩部でゆるやかに内傾し角度を変えて頚部へと移行させた後に口縁部を外反させている。胴中央より下方には鉄釉を施す、いわゆる掛分けを行っている。

※附記：第83図12の杯については、文章校正中に大橋康二氏により徳化窯産の青花との所見を頂いた。記して感謝申し上げます。

第16表　本土産染付計測表

番号	器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
1	碗	a 1	肥前	12.5	6.2	4.5	12区石積み外、前庭部Ⅰ・Ⅲa'、北側斜面
2		a 2	波佐見	10.2	6.6	4.7	8区散乱12、前庭部Ⅲ
3		a 3	有田	10.2	6.1	4.5	13区-4内、前庭部Ⅰ・Ⅱ
4				10.3	6.2	4.2	3区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲ
5				10.5	6.2	4.6	2区Ⅱ、前庭部Ⅰ
6				11.2	6.0	4.6	前庭部Ⅲf
7				11.2	6.3	4.4	11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'
8			波佐見	10.7	7.0	4.2	前庭部Ⅱ・Ⅲc・Ⅲd
9				10.9	6.2	4.1	洞内T．P
10				10.9	6.2	4.2	洞内T．P
11			肥前	11.2	6.4	4.2	前庭部Ⅲh
12		a 4	波佐見	10.8	6.6	4.5	11区49・50内、12区SW、前庭部Ⅲc
13		b 1		11.7	5.8	4.5	12区Ⅲa
14				11.8	5.9	4.5	前庭部Ⅲd
15		b 2		11.2	5.1	4.3	12区Ⅲa
16	小碗	Ⅱ2	肥前	10.1	6.2	4.2	2区、12区Ⅰ、前庭部Ⅲa'・Ⅲo・石積み
17		Ⅱ3		10.2	5.9	4.2	11区中下、前庭部Ⅰ・Ⅲa'・Ⅲi
18				10.6	6.1	3.9	11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'
19				10.8	6.3	4.2	9区散乱27、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'・石灰岩崩落
20	小杯	Ⅰ	肥前	3.5	2.6	1.7	3区-13内
21	瓶	AⅡa1	肥前か	3.2	12.8	4.0	12区Ⅲa
22				3.6	13.4	4.8	11区下石積み
23		AⅡa2		4.0	13.9	4.8	前庭部Ⅲa'・Ⅲf・Ⅲi、北側斜面
24				3.0	13.2	4.8	前庭部Ⅲf上
25				3.1	11.7	4.4	前庭部Ⅲb
26				3.1	12.4	4.6	前庭部Ⅲd
27				3.2	13.1	5.1	前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'・Ⅲd
28				3.2	13.4	4.4	前庭部Ⅲd
29				3.3	13.5	4.8	12区Ⅲa、前庭部Ⅲa
30				3.3	13.8	4.4	1区Ⅲf礫上
31				3.4	13.0	4.2	前庭部Ⅲb
32				3.4	13.1	4.2	前庭部Ⅲf
33	瓶	AⅡa2	肥前か	3.4	14.2	4.8	前庭部Ⅲd
34				3.5	12.9	4.0	前庭部Ⅲb
35				3.5	13.5	4.6	前庭部Ⅲb
36				3.5	14.2	4.8	11区-48内、前庭部Ⅲa・Ⅲb
37				3.6	13.5	4.7	前庭部Ⅲa
38				3.6	13.9	4.5	前庭部Ⅲd
39				3.7	14.1	4.6	前庭部Ⅲb
40				3.8	13.6	4.3	前庭部Ⅲb
41				3.9	12.8	4.9	前庭部Ⅲa'・Ⅲf
42				3.9	13.7	4.3	前庭部Ⅲf・Ⅲg・Ⅲi・Ⅲm・Ⅲn
43				3.9	14.4	4.7	前庭部Ⅲa'
44				4.1	14.2	4.6	前庭部Ⅲd
45				4.2	13.6	4.6	前庭部Ⅲb
46				4.4	15.3	4.9	10区上Ⅱ・Ⅲ、10区中Ⅱ、前庭部Ⅲa・Ⅲb・Ⅲf
47		AⅡb1		3.5	15.1	5.1	10区下、10区石積み内、前庭部Ⅲb・Ⅲf
48				4.0	14.6	4.6	前庭部Ⅲl
49				4.6	14.5	5.2	前庭部撹乱
50		AⅡb2		3.4	15.8	4.7	不明
51		AⅡb3		2.7	14.2	4.9	13区黒土、前庭部Ⅲn
52				3.4	14.1	5.2	前庭部Ⅲd
53		AⅡb6		3.2	14.2	4.7	前庭部Ⅲf
54		AⅡb7		3.3	13.3	5.0	11区下石積み、前庭部Ⅲf
55				3.6	12.2	4.2	12区Ⅲa
56				4.0	14.7	5.0	前庭部Ⅲe・Ⅲf
57		AⅡd		3.6	13.6	4.4	前庭部Ⅲb
58				3.9	13.7	4.8	前庭部Ⅲc
59		AⅡh		3.4	14.4	5.2	前庭部Ⅲa'・Ⅲf
60				3.4	14.6	4.7	2区Ⅱ、前庭部Ⅲb・Ⅲf上・Ⅲi
61				3.5	14.5	5.0	9区-24内、9区散乱30、前庭部Ⅲb
62				3.7	15.2	5.2	前庭部Ⅲi
63				3.8	15.3	4.9	前庭部Ⅲf礫敷き・Ⅲf・Ⅲo・石灰岩崩落

第17表a　本土産染付観察一覧

挿図図版	番号	器種	分類	部位	口径器高底径(cm)	観察事項	産地	出土地
第80図図版43	1	碗	a 1	完形	9.8 6.7 3.8	高台はやや高めで内削りは深い。高台脇には鉋目が観察できる。外面に圏線と寿字文を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白色の釉を施している。胴部外面に粗い貫入。畳付に砂が付着する。	有田	10区中内、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'
	2			完形	11.5 6.7 4.1	高台はやや高めで内削りは深い。厚手のタイプである。外面に圏線と山水文を描いている。素地は淡灰白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。畳付には砂が付着している。	肥前	10区散乱18、前庭部Ⅲf
	3			完形	11.5 6.4 4.0	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と山水文を描いている。素地は淡灰白色の微粒子で、畳付以外に灰白濁色の釉を施している。畳付には砂が付着している。	波佐見	前庭部Ⅲf
	4			完形	11.2 6.1 4.2	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と山水文を描いている。素地は淡灰白色の微粒子で畳付以外に灰白色の釉を施している。全体に粗い貫入が入る。畳付には砂が多量に付着している。		洞内T．P
	5		a 2	完形	11.4 6.0 4.2	高台は低めで内削りは浅い。比較的丁寧な造りである。外面に圏線と山水文を描く。素地は淡灰白色の微粒子である。畳付以外に灰白濁色の釉を施していると思われるが全体的に変色する。畳付には砂が多量に付着している。		12区Ⅲa
	6		a 3	完形	11.3 5.9 4.5	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と松文・遠山、高台内に圏線を描いている。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。畳付には砂が付着している。	有田	前庭部Ⅲf
	7			完形	10.8 5.6 4.5	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と花卉文・雪輪文・遠山、高台内に圏線を描いている。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。畳付には砂が付着している。		2区、11区下石積み、前庭部Ⅲa'・Ⅲf・Ⅲi・Ⅲj・Ⅲn

第15表　本土産染付出土状況

出土地	碗 a 1 完形	碗 a 2 完形	碗 a 3 完品	碗 a 3 完形	碗 a 3 口	碗 a 4 完形	碗 a 不明 口	碗 a 不明 底	碗 b 1 完品	碗 b 1 完形	碗 b 2 完形	碗 b 3 完形	碗 b 不明 口	碗 不明 口	碗 不明 胴	碗 小計	小碗 Ⅰ 完形	小碗 Ⅰ 底	小碗 Ⅱ 1 完品	小碗 Ⅱ 2 完形	小碗 Ⅱ 3 完形	小碗 Ⅱ 不明 口	小碗 Ⅱ 不明 胴	小碗 小計	杯 完形	杯 小計	小杯 1 完品	小杯 2 完形	小杯 不明 底	小杯 小計
1区 Ⅲf礫上																						1		1						
2区 Ⅱ																														
2区																														
3区 13内																											1			1
4区 14内																														
4区 Ⅲ																														
9区 23内													1			1														
10区 中Ⅱ																														
11区 Ⅲ																														
11区 下 礫内															1	1						1	1	2						
11区 下 石積み																														
11区 石積み内					1											1														
12区 Ⅰ																														
12区 Ⅰ～Ⅱ																														
12区 Ⅲa		1								1	1	1				4											1	1		2
13区																														
前庭部 Ⅰ																									1	1				
前庭部 Ⅱ							1									1														
前庭部 Ⅲ a														2		2														
前庭部 Ⅲ a'														1	1	2						1		1						
前庭部 Ⅲ b									1			1				2														
前庭部 Ⅲ c																														
前庭部 Ⅲ d									1							1														
前庭部 Ⅲ f上																														
前庭部 Ⅲ f礫敷き								1								1														
前庭部 Ⅲ f礫上															1	1														
前庭部 Ⅲ f	1		1	4										1	2	9		1	1					2						
前庭部 Ⅲ h				1												1														
前庭部 Ⅲ i				1												1														
前庭部 Ⅲ j																												1		1
前庭部 Ⅲ k							1									1														
前庭部 Ⅲ l																														
前庭部 Ⅲ n																														
前庭部 Ⅲ				1			1							1		3														
前庭部 撹乱											1					1													1	1
北側斜面														1		1														
洞内 T.P	1			2			1	1								5														
2区Ⅰ、2区、前庭部Ⅱ・Ⅲb・礫内																														
2区Ⅱ、前庭部Ⅰ				1												1														
2区Ⅱ、前庭部Ⅲb・Ⅲf																														
2区Ⅱ、前庭部Ⅲb・Ⅲf上・Ⅲi																														
2区、11区下石積み、前庭部Ⅲa'・Ⅲf・Ⅲi・Ⅲn				1												1														
2区、12区Ⅰ、前庭部Ⅲa'・Ⅲo・石積み																				1				1						
3区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲ				1												1														
8区散乱1、前庭部撹乱																														
8区散乱12、前庭部Ⅲ		1														1														
9区-18内、前庭部Ⅰ																														
9区-24内、9区散乱30、前庭部Ⅲb																														
9区散乱27、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'・石灰岩崩落																					1			1						
10区上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、前庭部Ⅲf														1		1														
10区上Ⅰ・Ⅳ																														
10区上Ⅱ-Ⅲ、10区中Ⅱ、前庭部Ⅲa・Ⅲb・Ⅲf																														
10区中内、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'	1															1														
10区下、10区石積み内、前庭部Ⅲb・Ⅲf																														
10区下、前庭部Ⅱ・Ⅲf・礫上、北側斜面																														
10区散乱18、前庭部Ⅲf	1															1														
11区-48内、前庭部Ⅲa・Ⅲb																														
11区49・50内、12区SW、前庭部Ⅲc						1										1														
11区中Ⅰ、11区下石積み、前庭部Ⅲa'																				1				1						
11区中下、前庭部ⅢfⅠ・Ⅲa'・Ⅲi																					1			1						
11区中石積み内、前庭部Ⅲa'																					1			1						
11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'				1												1					1			1						
11区下石積み、前庭部Ⅲa'																														
11区下石積み、前庭部Ⅲa'・Ⅲe・Ⅲf・石灰岩崩落				1												1														
11区下石積み、前庭部Ⅲf				1												1														
11区、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ礫内																														
12区Ⅰ、前庭部Ⅰ																														
12区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲa'・Ⅲb																					1			1						
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ																														
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲa'・Ⅲh																														
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲf																	1							1						
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲj																				1				1						
12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅲj																												1		1
12区Ⅰ～Ⅱ、13区黒土、前庭部Ⅲf礫敷き、北側斜面						1										1														
12区Ⅲa、前庭部Ⅲa																														
12区Ⅲe、前庭部礫上																														
12区石積み外、前庭部Ⅰ・Ⅲa'、北側斜面	1															1														
12区、前庭部Ⅰ・Ⅲa'、北側斜面																														
13区-4内、前庭部Ⅰ・Ⅱ				1												1														
13区黒土、前庭部Ⅲn																														
13区、前庭部Ⅱ・Ⅲf礫敷き、北側斜面																														
前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'・Ⅲd																														
前庭部Ⅰ・Ⅲf礫敷き						1										1														
前庭部Ⅰ・Ⅲ																														
前庭部Ⅰ、北側斜面																														
前庭部Ⅱ・Ⅲc・Ⅲd				1												1														
前庭部Ⅱ・Ⅲi																														
前庭部Ⅱ・Ⅲ・SW																														
前庭部Ⅱ、北側斜面										1						1														
前庭部Ⅲa・Ⅲa'・Ⅲc・礫内																														
前庭部Ⅲa・Ⅲd																														
前庭部Ⅲa'・Ⅲf・Ⅲi、北側斜面																														
前庭部Ⅲa'・Ⅲf																														
前庭部Ⅲb・Ⅲf														1		1														
前庭部Ⅲe・Ⅲf																														
前庭部Ⅲf礫敷き・Ⅲf・Ⅲo・石灰岩崩落																														
前庭部Ⅲf・Ⅲg・Ⅲi・Ⅲm・Ⅲn																														
不明																														
合計	5	2	1	17	1	3	4	2	2	2	2	2	1	8	5	57	1	1	1	3	5	3	1	15	1	1	2	3	1	6

出土地	瓶 A Ⅰ 完形	瓶 A Ⅱ a 1 完形	瓶 A Ⅱ a 1 底	瓶 A Ⅱ a 2 完品	瓶 A Ⅱ a 2 完形	瓶 A Ⅱ a 2 底	瓶 A Ⅱ a 3 完形	瓶 A Ⅱ a 不明 口	瓶 A Ⅱ a 不明 胴	瓶 A Ⅱ a 不明 底	瓶 A Ⅱ b 1 完品	瓶 A Ⅱ b 1 完形	瓶 A Ⅱ b 2 完品	瓶 A Ⅱ b 2 完形	瓶 A Ⅱ b 2 底	瓶 A Ⅱ b 3 完形	瓶 A Ⅱ b 3 底	瓶 A Ⅱ b 4 完形	瓶 A Ⅱ b 5 底	瓶 A Ⅱ b 6 完形	瓶 A Ⅱ b 6 底	瓶 A Ⅱ b 7 完形	瓶 A Ⅱ b 8 完形	瓶 A Ⅱ b 8 底	瓶 A Ⅱ b 不明 胴	瓶 A Ⅱ b 不明 底	瓶 A b 完形	瓶 A b 底	瓶 A c 完形	瓶 A d 完形	瓶 A d 底	瓶 A e 完形	瓶 A e 胴	瓶 A f 完品	瓶 A g 完形	瓶 A h 完形	瓶 A 不明 口	瓶 A 不明 底	瓶 B 完形	瓶 C 完形	瓶 D 完形	瓶 不明 口	瓶 不明 頚	瓶 不明 胴	瓶 不明 底	瓶 小計	器種不明 胴	器種不明 小計	合計
1区 Ⅲf礫上				1																																										1			2
2区 Ⅱ																									1																			1		2			2
2区																																															1	1	1
3区 13内																																																	1
4区 14内																																										1				1			1
4区 Ⅲ										1																																				1			1
9区 23内																																																	1
10区 中Ⅱ									3																																			1		4			4
11区 Ⅲ		1																																												1			1
11区 下 礫内																																																	3
11区 下 石積み		1																														1	1									1				4			4
11区 石積み内																																																	1
12区 Ⅰ																																				1										1			1
12区 Ⅰ～Ⅱ																																										1				1			1
12区 Ⅲa		1									1			1		1						1												1												6			12
13区																									1																					1			1
前庭部 Ⅰ									1																																	1				2			3
前庭部 Ⅱ																																										1				1			2
前庭部 Ⅲ a			1		1					1																											1									4			6
前庭部 Ⅲ a'					1												1																						1							3			6
前庭部 Ⅲ b		1		1	8	2	1	1																						1											1					16			18
前庭部 Ⅲ c																														1																1			1
前庭部 Ⅲ d					6							1				1											1			1												1				11			12
前庭部 Ⅲ f上					1																																									1			1
前庭部 Ⅲ f礫敷き																																																	1
前庭部 Ⅲ f礫上																																										1		2	1	4	1	1	6
前庭部 Ⅲ f		1			2	3						1	1	1				1		2		3																								15			26
前庭部 Ⅲ h																																																	1
前庭部 Ⅲ i															1																					1										2			3
前庭部 Ⅲ j																													1																	1			2
前庭部 Ⅲ k																																																	1
前庭部 Ⅲ l											1																																			1			1
前庭部 Ⅲ n																																															1	1	1
前庭部 Ⅲ									1																																			2		3			6
前庭部 撹乱												1									1		1					1															1			5			7
北側斜面																																																	1
洞内 T.P									2	1																																			1	4			9
2区Ⅰ、2区、前庭部Ⅱ・Ⅲb・礫内																																			1											1			1
2区Ⅱ、前庭部Ⅰ																																																	1
2区Ⅱ、前庭部Ⅲb・Ⅲf																			1																											1			1
2区Ⅱ、前庭部Ⅲb・Ⅲf上・Ⅲi																																				1										1			1
2区、11区下石積み、前庭部Ⅲa'・Ⅲf・Ⅲi・Ⅲn																																																	1
2区、12区Ⅰ、前庭部Ⅲa'・Ⅲo・石積み																																																	1
3区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲ																																																	1
8区散乱1、前庭部撹乱						1																																								1			1
8区散乱12、前庭部Ⅲ																																																	1
9区-18内、前庭部Ⅰ																																						1								1			1
9区-24内、9区散乱30、前庭部Ⅲb																																				1										1			1
9区散乱27、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'・石灰岩崩落																																																	1
10区上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、前庭部Ⅲf																																																	1
10区上Ⅰ・Ⅳ																																										1				1			1
10区上Ⅱ-Ⅲ、10区中Ⅱ、前庭部Ⅲa・Ⅲb・Ⅲf					1																																									1			1
10区中内、11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'																																																	1
10区下、10区石積み内、前庭部Ⅲb・Ⅲf												1																																		1			1
10区下、前庭部Ⅱ・Ⅲf・礫上、北側斜面																																								1						1			1
10区散乱18、前庭部Ⅲf																																																	1
11区-48内、前庭部Ⅲa・Ⅲb					1																																									1			1
11区49・50内、12区SW、前庭部Ⅲc																																																	1
11区中Ⅰ、11区下石積み、前庭部Ⅲa'																																																	1
11区中下、前庭部ⅢfⅠ・Ⅲa'・Ⅲi																																																	1
11区中石積み内、前庭部Ⅲa'																																																	1
11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲa'																																																	2
11区下石積み、前庭部Ⅲa'																										1																				1			1
11区下石積み、前庭部Ⅲa'・Ⅲe・Ⅲf・石灰岩崩落																																																	1
11区下石積み、前庭部Ⅲf																						1																								1			2
11区、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ礫内																									1																					1			1
12区Ⅰ、前庭部Ⅰ			1																																											1			1
12区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲa'・Ⅲb																																																	1
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	1																																													1			1
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲa'・Ⅲh														1																																1			1
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲf																																																	1
12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲa、前庭部Ⅲj																																																	1
12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅲj																																																	1
12区Ⅰ～Ⅱ、13区黒土、前庭部Ⅲf礫敷き、北側斜面																																																	1
12区Ⅲa、前庭部Ⅲa					1																																									1			1
12区Ⅲe、前庭部礫上																												1																		1			1
12区石積み外、前庭部Ⅰ・Ⅲa'、北側斜面																																																	1
12区、前庭部Ⅰ・Ⅲa'、北側斜面															1																															1			1
13区-4内、前庭部Ⅰ・Ⅱ																																																	1
13区黒土、前庭部Ⅲn																1																														1			1
13区、前庭部Ⅱ・Ⅲf礫敷き、北側斜面																															1															1			1
前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa'・Ⅲd					1																																									1			1
前庭部Ⅰ・Ⅲf礫敷き																																																	1
前庭部Ⅰ・Ⅲ										1																																				1			1
前庭部Ⅰ、北側斜面																																										1				1			1
前庭部Ⅱ・Ⅲc・Ⅲd																																																	1
前庭部Ⅱ・Ⅲi																								1																						1			1
前庭部Ⅱ・Ⅲ・SW																									1																					1			1
前庭部Ⅱ、北側斜面																																																	1
前庭部Ⅲa・Ⅲa'・Ⅲc・礫内																														1																1			1
前庭部Ⅲa・Ⅲd														1																																1			1
前庭部Ⅲa'・Ⅲf・Ⅲi、北側斜面		1																																												1			1
前庭部Ⅲa'・Ⅲf					1																															1										2			2
前庭部Ⅲb・Ⅲf																																																	1
前庭部Ⅲe・Ⅲf																						1																								1			1
前庭部Ⅲf礫敷き・Ⅲf・Ⅲo・石灰岩崩落																																				1										1			1
前庭部Ⅲf・Ⅲg・Ⅲi・Ⅲm・Ⅲn					1																																									1			1
不明														1											1																					2			2
合計	1	6	2	2	25	6	1	1	7	4	2	4	1	5	2	3	1	1	1	2	1	6	1	1	5	1	1	2	1	4	1	1	1	1	1	6	1	1	1	1	1	9	1	6	2	134	3	3	216

第17表ｂ　本土産染付観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第80図 図版43	8	碗	a 3	完形	10.5 6.4 4.2	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と花卉文・遠山、高台内に圏線を描いている。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。畳付には砂が付着している。	有田	前庭部Ⅲｉ
	9			完形	11.3 6.0 4.5	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と松文・遠山、高台内に圏線を描いている。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施須。畳付に砂が僅かに付着する。粗い貫入が入る。		11区下石積み、前庭部Ⅲｆ
第81図 図版43	1			完形	10.7 6.4 4.0	高台はやや高めで内削りは深い。外面に圏線と草花文・雪輪文・笹文、高台内に圏線を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白色の釉を施す。一部に粗い貫入。畳付に砂が僅かに付着する。	肥前	11区下石積み、前庭部Ⅲａ'・Ⅲｅ・Ⅲｆ・石灰岩崩落
	2			完品	10.8 5.8 4.5	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と竹文・草花文・コンニャク印、高台内に圏線・銘「太□□□」を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。	波佐見	前庭部Ⅲｆ
	3			口縁部	10.8 － －	外面に圏線と花卉文・輪文と内部に雁を描いている。また、高台内に圏線・銘を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。		11区石積み内
	4			完形	9.4 5.7 3.9	高台は低めで内削りはやや深い。外面に圏線と竹文・草花文・コンニャク印、高台内に圏線・銘「太□□□」を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。		前庭部Ⅲ
	5			完形	11.0 6.2 4.4	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と草花文・梅花文？、高台内に圏線・銘を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。		前庭部Ⅲｆ
	6			完形	11.0 6.5 4.3	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と草花文、高台内に圏線・銘を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。畳付に砂が僅かに付着する。		前庭部Ⅲｆ
第82図 図版44	1		a 4	完形	11.2 6.7 4.4	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と松文・遠山を描いている。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。畳付に砂が僅かに付着する。	波佐見	前庭部Ⅰ・Ⅲｆ礫敷き
	2			完形	10.8 5.8 4.6	高台は低めで内削りは浅い。外面に圏線と亀甲繋文を描いている。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白濁色の釉を施している。全体的に細かい貫入が観察できる。	肥前	12区Ⅰ～Ⅱ、13区黒土、前庭部Ⅲｆ礫敷き、北側斜面
	3		a 不明	口縁部	11.8 － －	口縁部に圏線を有することからａとした。内外面の口縁直下に圏線を廻らせ、外面の胴部に構成不明の文様を描く。淡灰白色の微粒子で淡青白色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	有田	前庭部Ⅲｋ
	4			底部	－ － 5.0	内底面の施釉方法からａとした。高台外面に圏線、見込みに圏線と折枝文を描いている。高台内に「大明」の銘。素地は白色の微粒子で、畳付以外に淡青白濁色の釉を施す。全体に細かい貫入。畳付に砂が付着。	肥前	前庭部Ⅲｆ礫敷き
	5			底部	－ － 4.0	内底面の施釉方法からａとした。高台外面に圏線と構成不明の文様を描いている。素地は淡灰色の細粒子で、畳付以外に淡青白濁色の釉を施す。		洞内Ｔ．Ｐ
	6		b 1	完形	11.3 6.1 3.7	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線と折枝梅文、高台内に圏線を描いている。淡灰白色の微粒子で、畳付以外に淡灰色の釉を施し、見込みを蛇の目釉禿ぎしている。畳付に僅かに砂が付着する。	波佐見	前庭部Ⅱ、北側斜面
	7			完品	10.5 5.3 4.0	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線と折枝梅文、高台内に圏線を描いている。白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白色の釉を施し、見込みを蛇の目釉禿ぎしている。		前庭部Ⅲｂ
	8		b 2	完形	10.5 5.6 3.9	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線と折枝文を描いている。白色の微粒子で、畳付以外に淡灰色の釉を施し、見込みを蛇の目釉禿ぎしている。畳付に僅かに砂が付着する。	波佐見	前庭部撹乱

第17表ｃ　本土産染付観察一覧

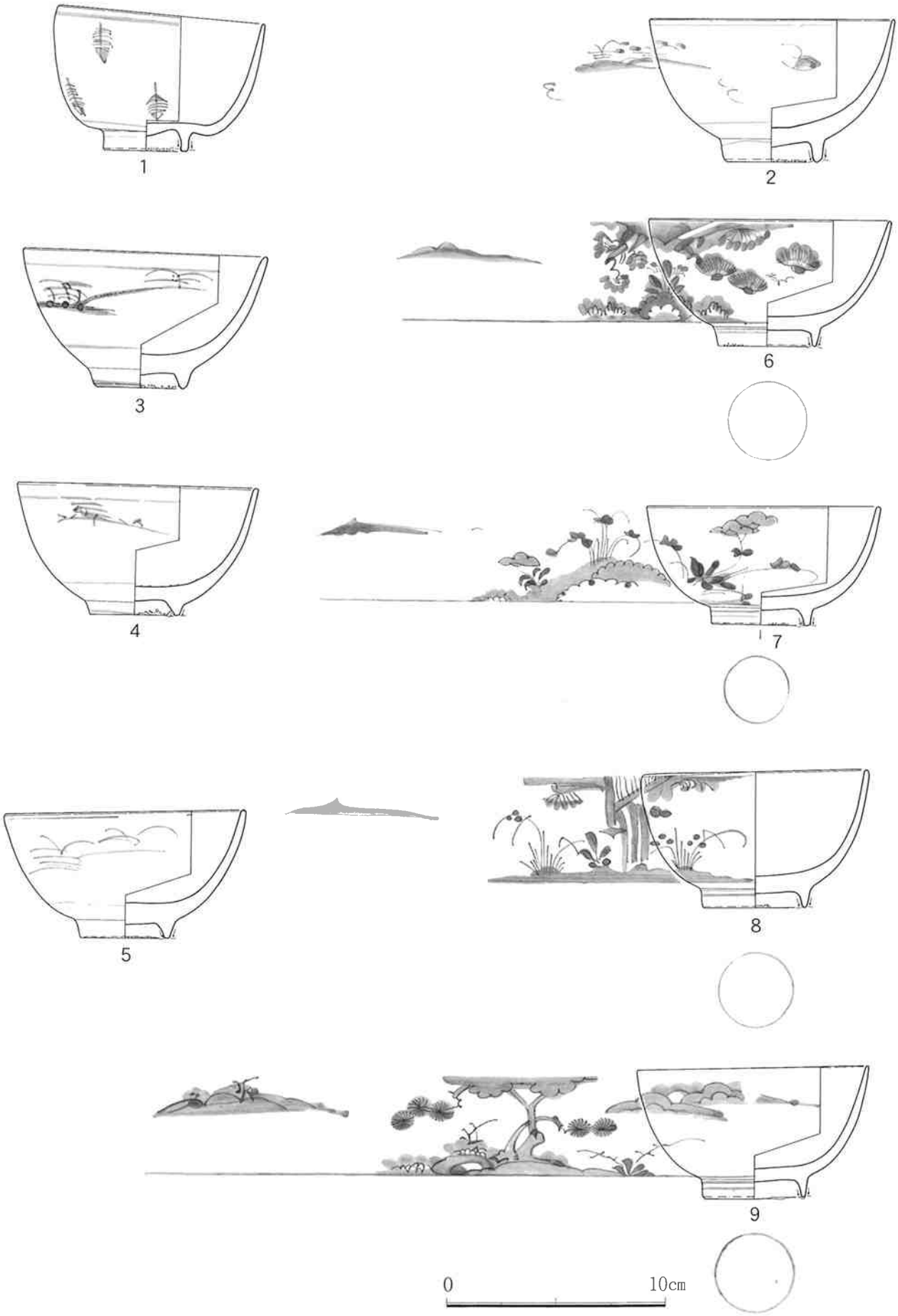
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第83図 図版44	1	碗	b 3	完形	10.7 4.6 3.8	高台はかなり低く、内削りは浅い。外面胴部有文。淡灰白色の微粒子で、畳付以外に淡灰色の釉を施し、見込みを蛇の目釉禿ぎしている。畳付と内底面に砂が付着する。	波佐見	12区Ⅲａ
	2			完形	11.5 4.7 4.2	高台は低く、内削りは浅い。外面に折枝梅花文を描いている。白色の微粒子で、畳付以外に淡灰白色の釉を施し、見込みを蛇の目釉禿ぎしている。畳付と内底面には砂が付着する。		前庭部Ⅲｂ
	3		b不明	口縁部	11.2 － －	高台は低く、内削りは浅い。外面に折枝梅花文を描いている。白色の微粒子で、両面に淡灰白色の釉を施し、見込みを釉禿ぎしている。	肥前	9区-23内
	4		不明	口縁部	10.0 － －	外面に草花文と手摘コンニャク印を表している。素地は白色の微粒子で、両面に白濁色の釉を施している。口唇部には鉄釉による口錆を施す。		10区上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、前庭部Ⅲｆ
	5	小碗	Ⅰ	完形	8.9 5.1 3.5	高台は低く、内削りは浅い。外面に葡萄文を描いている。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。畳付に僅かに砂が付着する。	有田	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅲｆ
	6			底部	－ － 3.1	高台は低く、内削りは浅い。外面に山水文か？。高台内面に銘。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。畳付に僅かに砂が付着する。	肥前	前庭部Ⅲｆ
	7		Ⅱ1	完品	9.0 5.8 4.5	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線・花卉文と蝶、高台内に圏線を描いている。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。畳付に僅かに砂が付着する。	有田	前庭部Ⅲｆ
	8		Ⅱ2	完形	9.0 5.9 4.1	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線・松文を描いている。見込みには圏線と不明文様が入る。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。全体に粗い貫入が観察できる。		11区中Ⅰ、11区下石積み、前庭部Ⅲａ'
	9			完形	9.9 5.8 4.1	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線・山水文を描いている。淡灰色の微粒子で、畳付以外に淡黄灰色の釉を施している。	肥前	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅲｊ
	10		Ⅱ3	完形	10.5 6.3 3.8	高台は低いが、内削りはかなり深い。外面に山水文を描いている。淡灰色の微粒子で、畳付以外に淡黄灰色の釉を施している。畳付に僅かに砂が付着する。		12区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅲａ'・Ⅲｂ
	11			完形	9.9 5.6 3.9	高台は低く、内削りは浅い。外面に圏線・山水文？を描いている。淡灰白色の微粒子で、畳付以外に灰色の釉を施している。		11区中石積み内、前庭部Ⅲａ'
	12	杯	－	完形	8.0 3.6 3.6	高台は低く造られており、外面に花卉紋や圏線を表している。白色の微粒子で畳付以外に淡青白濁色の釉を施している。畳付には粕が付着する。	徳化	前庭部Ⅰ
	13	小杯	1	完品	3.5 2.9 1.6	外面口縁直下に1本、腰に1本、高台外面に1本の圏線を廻らせている。白色の微粒子で、畳付以外に淡青白色の釉を施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅲａ
	14		2	完形	4.3 2.9 1.8	外面に芭蕉文と渦文の組み合わせを描き、胴下部と高台外面に圏線を廻らせる。高台内面には銘？が入る。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅲｊ
	15			完形	3.9 2.7 1.6	外面に芭蕉文と渦文の組み合わせを描き、胴下部と高台外面に圏線を廻らせる。高台内には「大明」が判読できる。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅲａ
	16			完形	3.6 2.7 1.6	外面に芭蕉文と渦文の組み合わせを描き、胴下部と高台外面に圏線を廻らせる。高台内には「大明」が判読できる。白色の微粒子で、畳付以外に白色の釉を施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｊ
第84図 図版45	1	瓶	A Ⅰ	完形	2.0 14.7 4.9	高台は低い。胴部に折枝梅花文？・雪持笹？を描いている。素地は淡灰白色の微粒子で、畳付以外に淡灰色の釉を頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。	肥前か	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
	2		A Ⅱa1	完形	3.6 15.4 4.5	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。淡黄白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｂ

第17表ｄ　本土産染付観察一覧

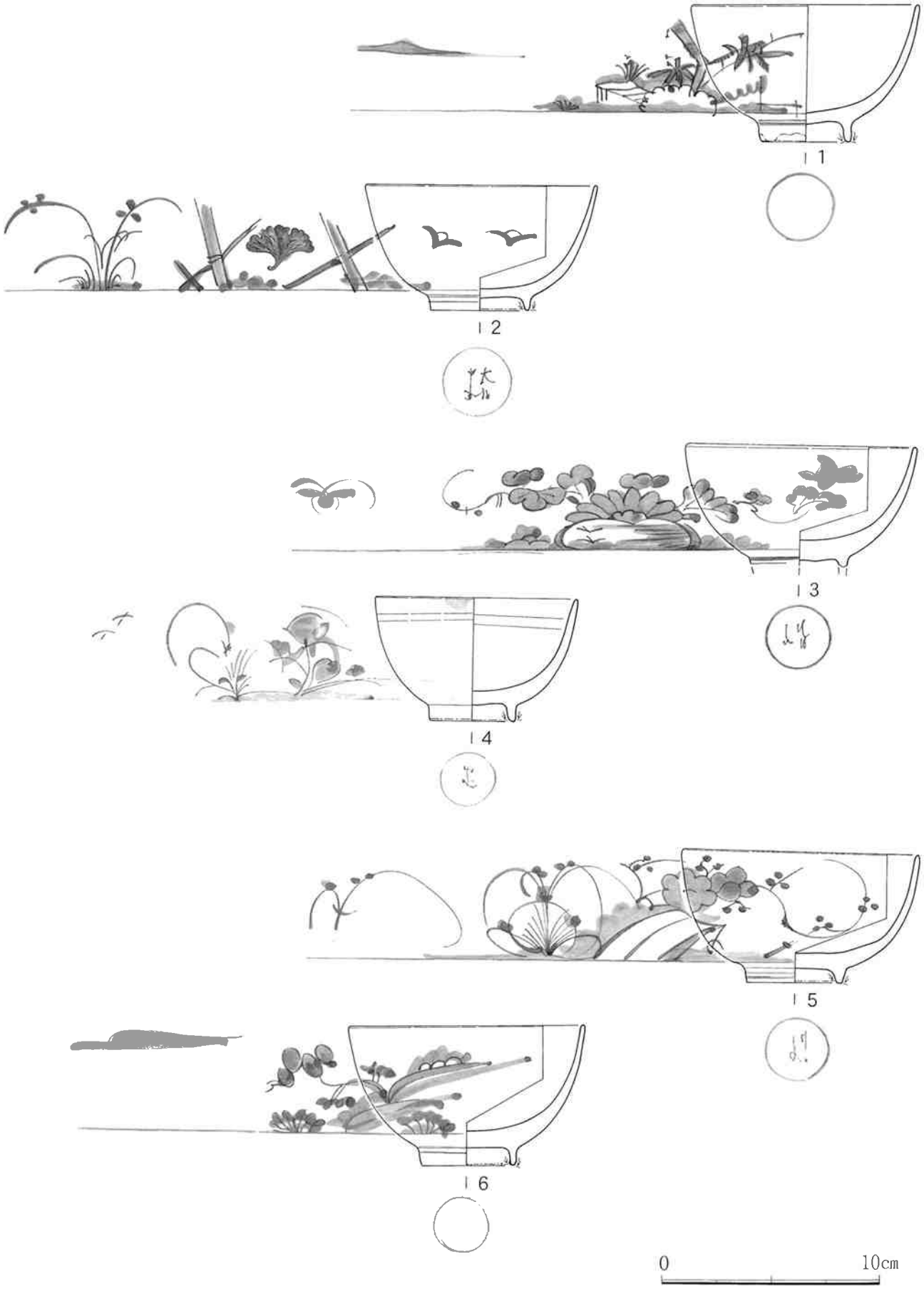
挿図 図版	番号	器種	分類		部位	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	産地	出土地
第84図 図版45	3	瓶	A	Ⅱa1	完形	3.2 13.0 3.9	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。	肥前か	前庭部Ⅲｆ
	4				完形	4.0 13.9 4.5	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。		11区Ⅲ
	5			Ⅱa2	完形	4.0 14.4 4.0	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。		前庭部Ⅲｄ
	6				完形	3.4 14.1 4.4	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	7				完形	3.7 13.3 4.3	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。		前庭部Ⅲｂ
	8				完形	3.5 13.3 4.3	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付に砂が付着する。		前庭部Ⅲｂ
	9			Ⅱa3	完形	3.8 15.4 4.7	高台は低い。頚下部に芭蕉文、胴部に網目文を描いている。素地は白色の微粒子。淡黄白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。		前庭部Ⅲｂ
	10			Ⅱb1	完形	4.0 17.3 4.6	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に竹文？を描いている。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	11				完品	4.2 14.5 4.4	高台は高い。頚下部に鋸歯文、胴部に花卉文を描いている。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅲａ
	12				完形	4.0 13.0 4.5	高台は高い。頚下部に鋸歯文、胴部に花卉文を描いている。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｄ
第85図 図版45	1			Ⅱb2	完形	3.0 13.7 4.3	高台は低い。頚下部に芭蕉文、胴部に笹文？を描いている。素地は淡灰白色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅲａ'・Ⅲｈ
	2				完品	3.2 15.5 4.1	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に折竹文を描いている。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	3				完形	3.0 13.8 4.1	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に花卉文と輪状文を描いている。素地は白色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	4				完形	3.8 16.5 5.4	高台は低い。胴部有文。素地は淡灰色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅲａ
	5				完形	3.8 15.7 4.7	高台は高い。胴部に花卉文を描く。素地は淡灰色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲａ・Ⅲｄ
	6			Ⅱb3	完形	3.5 15.2 4.5	高台は高い。胴部有文。素地は淡灰色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。		12区Ⅲａ
	7				底部	－ － 5.4	高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は淡灰色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。		前庭部Ⅲａ'
	8			Ⅱb4	完形	3.3 15.1 5.2	高台は高い。胴部に葡萄文を描く。素地は白色の微粒子。淡灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ

第17表ｅ　本土産染付観察一覧

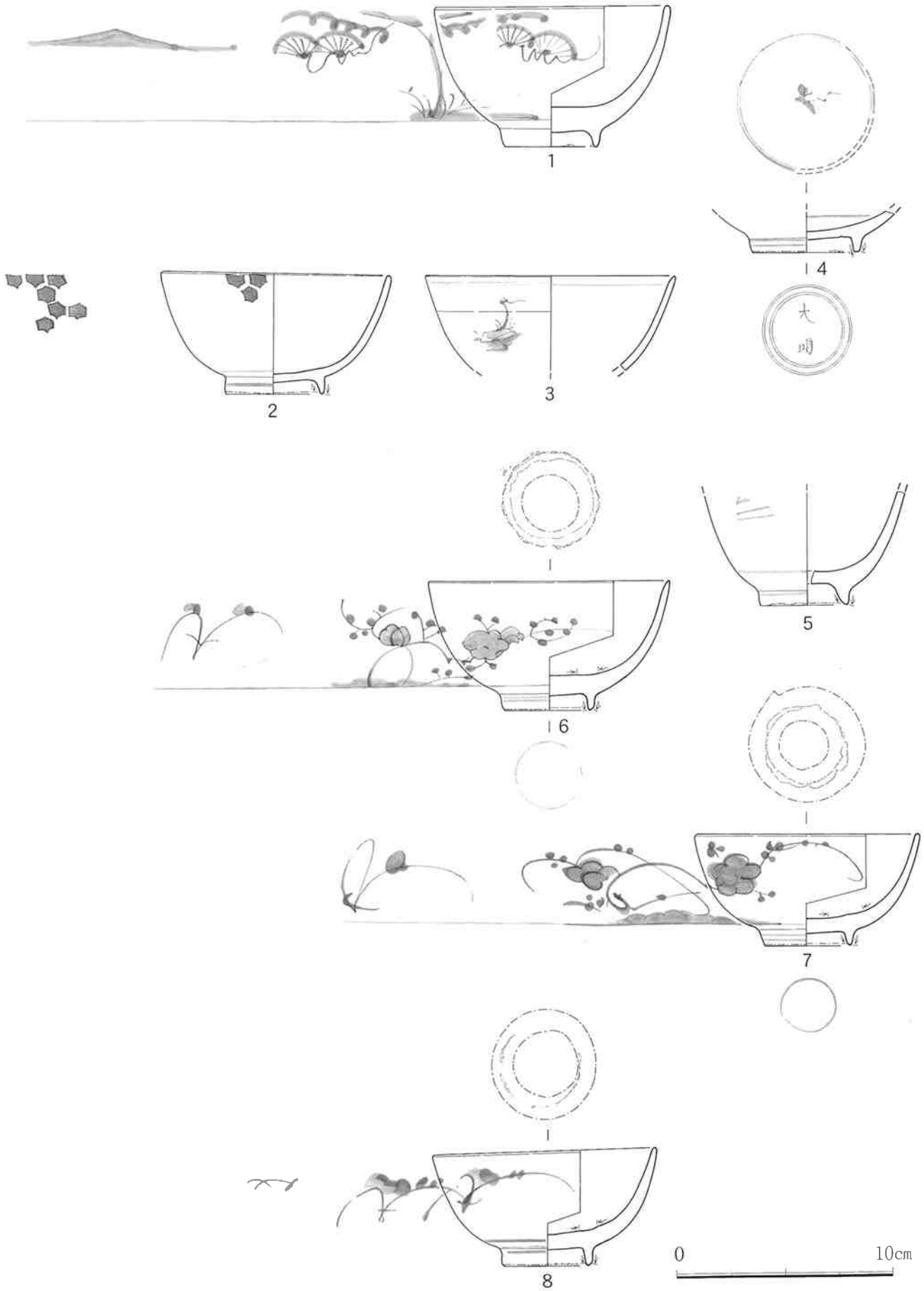
挿図 図版	番号	器種	分類		部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第86図 図版46	1	瓶	A	Ⅱb5	底部	－ － 5.7	高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は白色の微粒子。淡青白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。	肥前か	2区Ⅱ、前庭部Ⅲｂ・Ⅲｆ
	2			Ⅱb6	完形	3.6 15.8 5.2	高台は低い。胴部に竹文・梅花文・蝶を描いている。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。		前庭部Ⅲｆ
	3			Ⅱb7	完形	3.1 14.6 4.8	高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	4				完形	2.9 13.1 4.6	高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は灰色の微粒子。灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	5				完形	3.7 11.8 4.3	高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は灰色の微粒子。灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｆ
	6			Ⅱb8	完形	2.6 11.8 4.0	高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は灰色の微粒子。灰色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部撹乱
	7			Ⅱb	完形	3.3 13.0 4.6	鉄釉の掛分けタイプである。高台は低い。胴部に花卉文を描く。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を頚内部から胴中央まで施している。畳付は露胎である。		前庭部Ⅲｄ
	8			Ⅱc	完形	3.5 15.3 5.2	高台は低い。胴部に松葉様の折枝文を描く。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｊ
第87図 図版46	1			Ⅱd	完形	4.4 14.7 4.8	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文・丸文を描いている。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｃ・礫内
	2				完形	3.4 13.7 4.4	高台は低い。頚下部に鋸歯文、胴部に網目文・丸文を描いている。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		前庭部Ⅲｄ
	3			Ⅱe	完形	3.4 14.6 4.6	高台は低い。胴部に丸文を描いている。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		11区下石積み
	4			Ⅱf	完品	3.7 12.8 4.0	高台は低い。胴部に銘「太神宮」を表している。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。		12区Ⅲａ
	5			Ⅱg	完形	3.8 13.9 5.0	高台は低い。胴部にコンニャク印を施している。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		2区Ⅰ、2区、前庭部Ⅱ・Ⅲｂ・礫内
	6			Ⅱh	完形	3.5 14.5 4.5	高台は低い。胴上部に芭蕉文（蓮弁文？）。胴部に主文様は描かれていない。素地は白色の微粒子。淡灰白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。畳付には砂が付着する。		12区Ⅰ
	7		B		完形	1.5 12.5 4.4	外底は上底状に成形されている。頚下部には芭蕉文、胴部には山水楼閣文・遠山等が描かれている。白色の微粒子で淡灰色の釉を施した後に、外底面の釉を掻き取っている。全体に細かい貫入。		前庭部Ⅲａ'
	8		C		完形	2.5 13.5 4.6	高台は低い。胴部に花卉文？を描く。素地は白色の微粒子。淡青白色の釉を畳付以外に頚内部から外面全体に施している。		10区下、前庭部Ⅱ・Ⅲｆ・礫上、北側斜面
	9		D		完形	4.3 10.8 4.8	鉄釉の掛分けタイプである。高台は低い。胴部に花文？を描く。素地は白色の微粒子。淡青白色の釉を頚内部から胴中央まで施している。畳付は露胎である。		前庭部Ⅲｂ



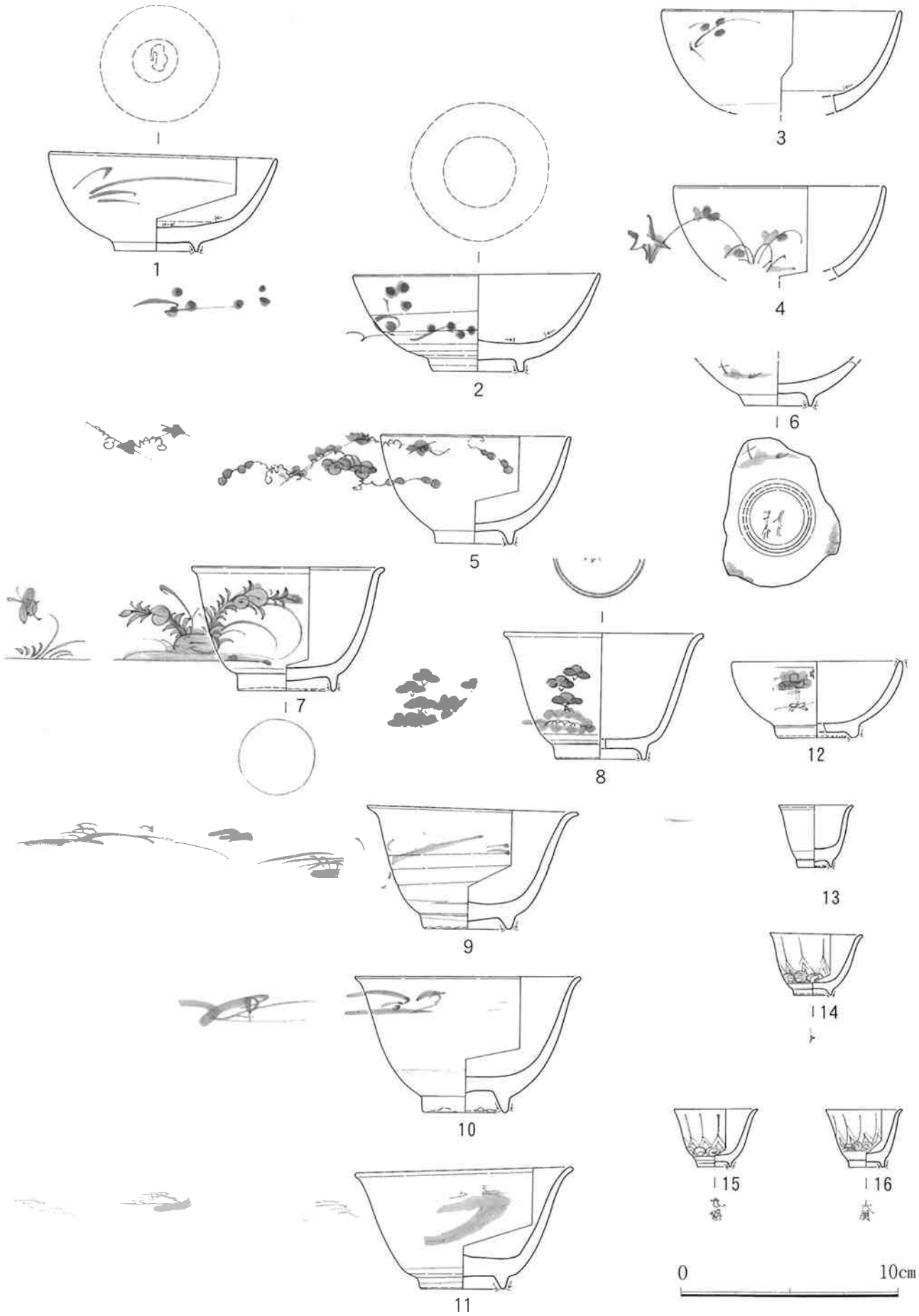
第80図　本土産染付１　碗



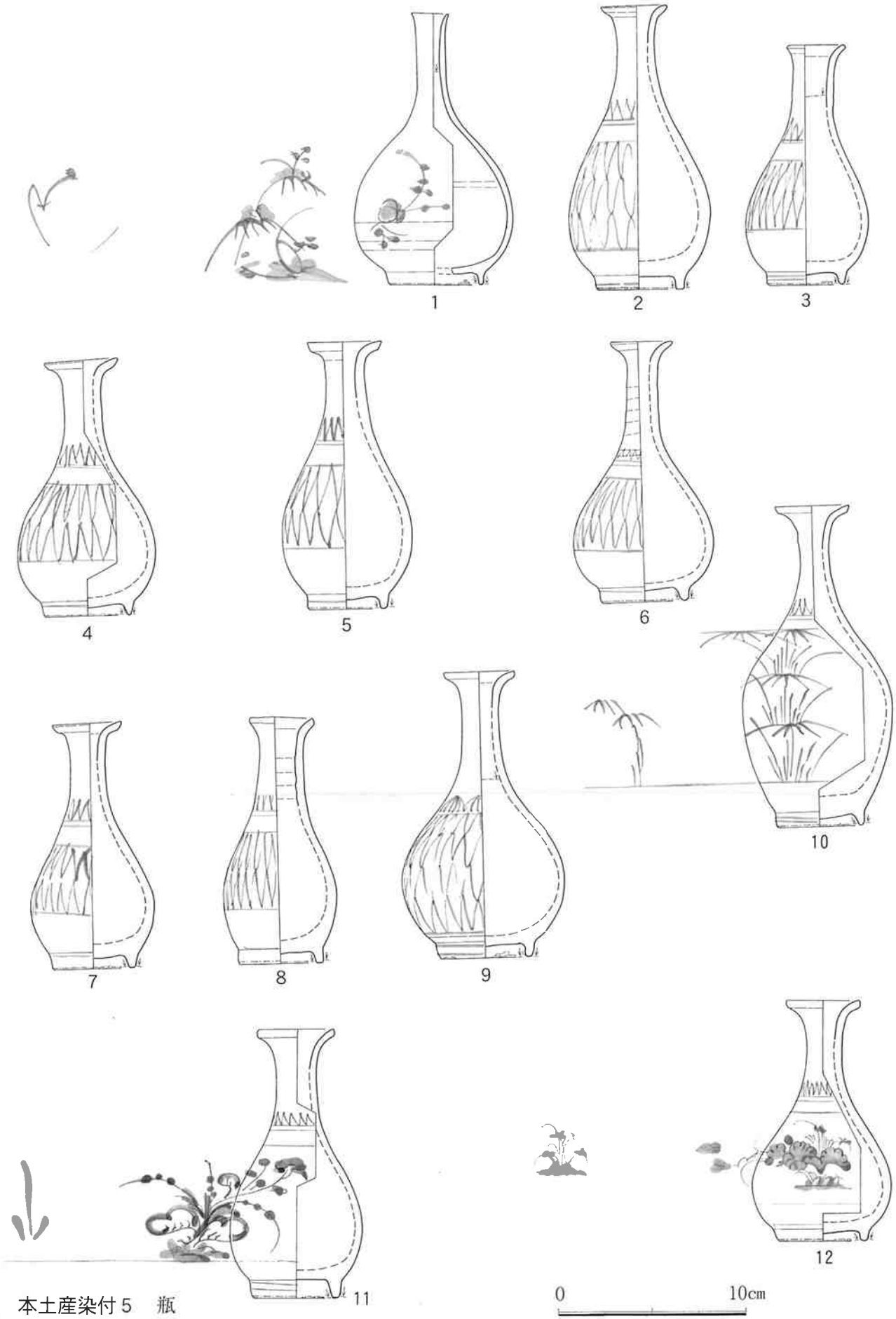
第81図　本土産染付２　碗



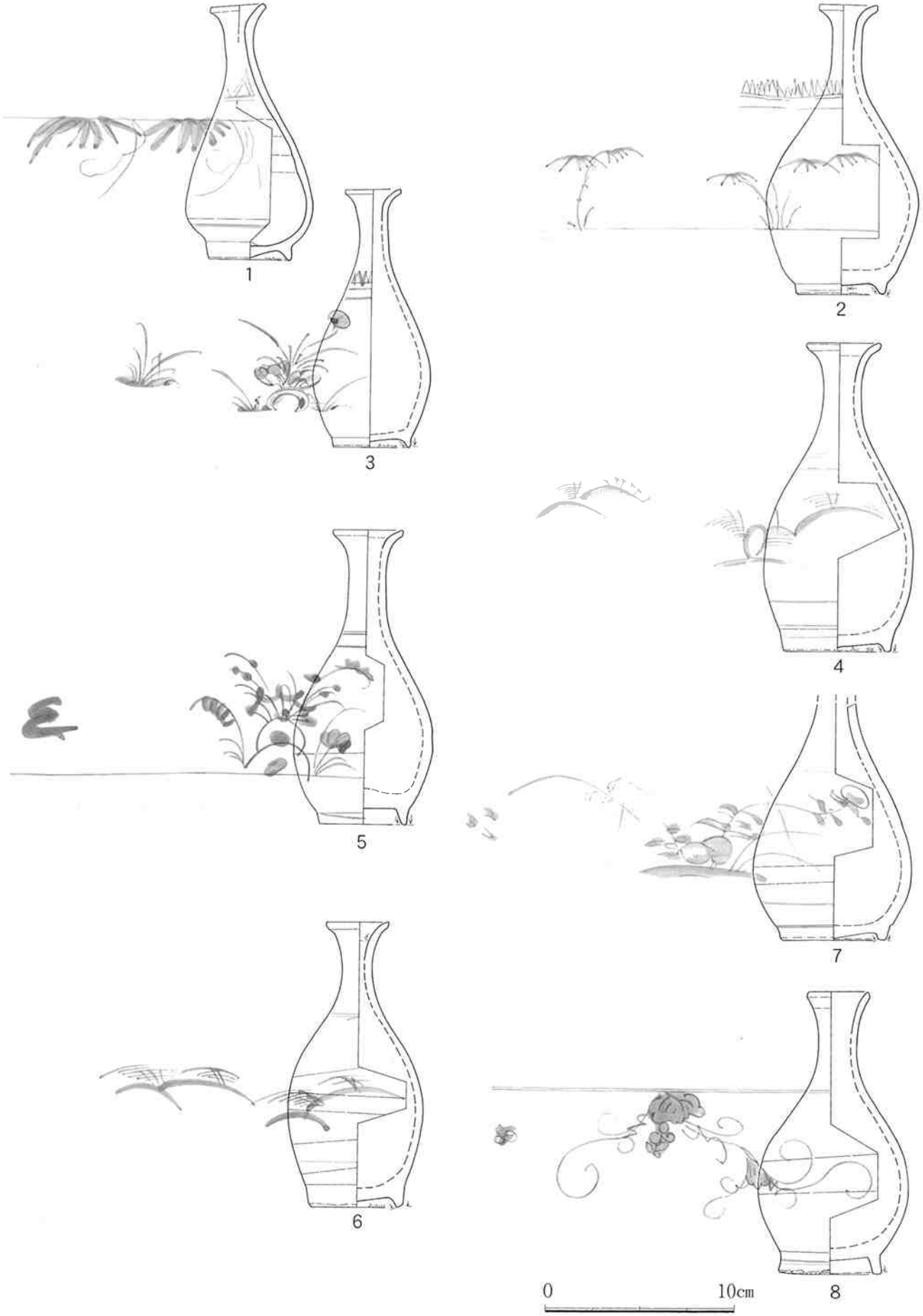
第82図　本土産染付３　碗



第83図　本土産染付４　碗（１～４）、小碗（５～11）、杯(12)、小杯(13～16)

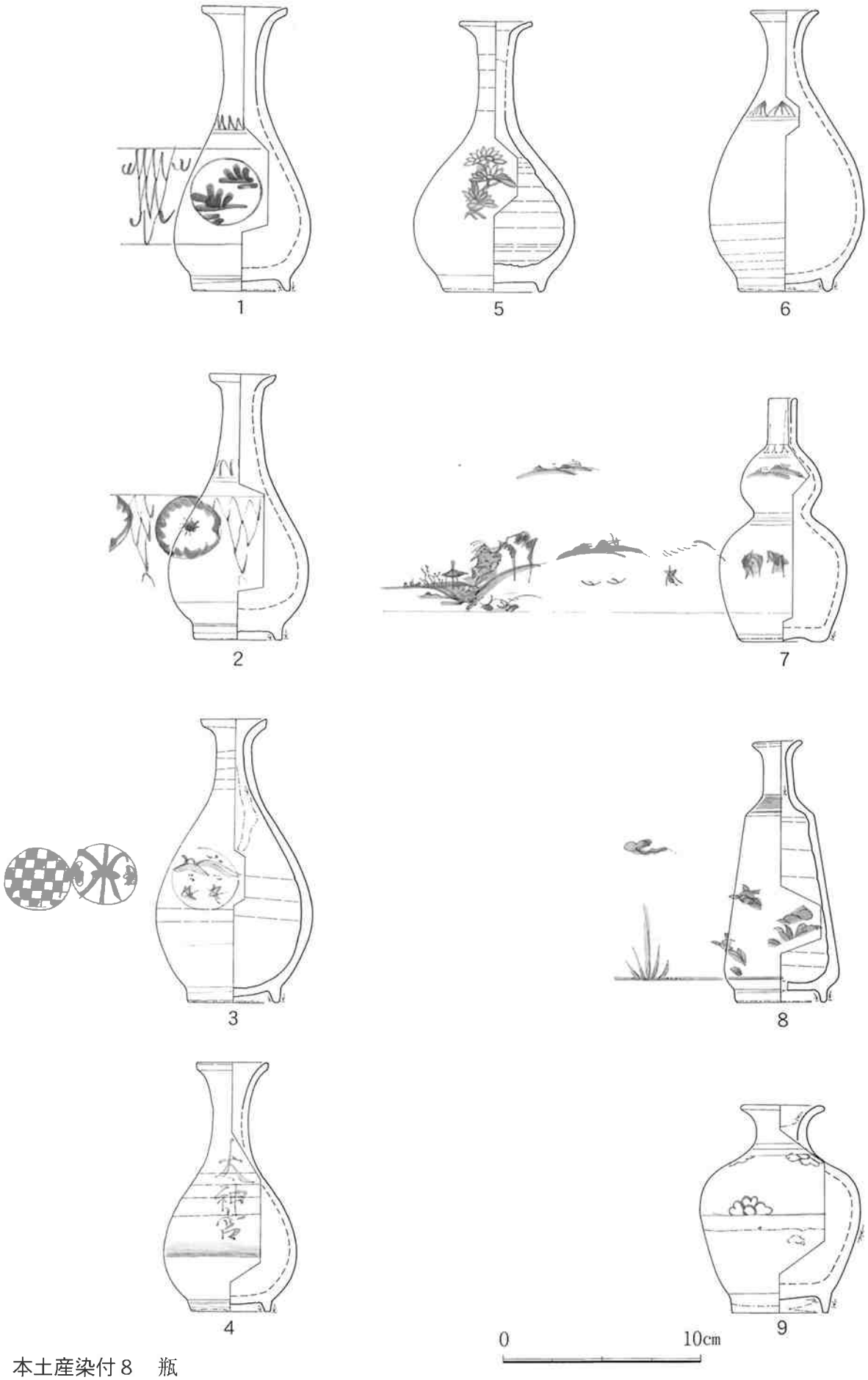


第84図　本土産染付５　瓶



第85図　本土産染付6　瓶

第86図　本土産染付７　瓶



第87図　本土産染付８　瓶

第16節　本土産印判手

明治以降の資料を本土産印判手としてまとめた。確認されたのはいずれも磁器類であった。また、器種としては、碗・小碗・皿・小杯の４器種が確認されている。

ヤッチのガマにおいて検出された本土産印判手の出土総点数は41点で、これら全てが各区画内散乱や旧１トレンチや旧11号区画外トレンチ、入口側トレンチ等のいわゆる前庭部等の表層よりの検出となっていることから、石積遺構や礫敷遺構の地下遺構が埋没した後に持ち込まれた、あるいは上部からの流れ込みが想定されるところであり、これらの資料も遺構の時期差を示す情報を十分に持ち得ているといえる（第18表）。これについての詳細や遺構との関係等については後段にて述べる事としたい。

以下、ヤッチのガマより検出された本土産印判手の分類概念について述べ、特徴的な資料については図示することとする（第88図）。なお、個々の諸特徴等については観察表にまとめた（第19表）。

１．碗

本土産印判手の碗として確認されたのは、直口口縁タイプと外反口縁タイプの２つに分類した。文様や施釉状況等からそれぞれａ・ｂに細分した。

Ⅰ類　直口口縁

ａ全体に濃緑釉を施している。

ｂ白磁に陶試紅等により上絵を加えている。

Ⅱ類　外反口縁

ａ型紙摺りによるものである。

ｂ白磁に陶試紅等により上絵を加えている。

２．小碗

小碗については、口縁形態や全体の形状から、直口口縁タイプをⅠ類、腰折タイプをⅡ類とした。また、Ⅰ類は文様や施釉状況等からａ～ｅに細分した。

Ⅰ類　直口口縁

ａ白磁に陶試紅等により上絵を加えている。

ｂクロム青磁にコバルト等により文様を表している。

ｃ白磁にコバルトにより文様を表している。

ｄ銅版転写により文様を表している。

ｅ外面に色絵が施されている。

Ⅱ類　腰折タイプ

掛分けがなされており、胴上部には笹文を表している。

３．皿

皿については、直口口縁タイプと外反口縁タイプの２つに分類した。また、必要に応じて文様や施釉状況等からａ～ｂに細分化した。

Ⅰ類　直口口縁

ａ型紙摺りによるものである。

ｂ銅版転写により文様を表している。

Ⅱ類　外反口縁

コバルト等により上絵が施されている。

４．小杯

小杯については、直口口縁タイプと外反口縁タイプの２つに分類した。また、必要に応じて文様や施釉状況等からａ～ｂに細分化した。

Ⅰ類　直口口縁

白磁で内外面ともに無文である。

Ⅱ類　外反口縁

ａ全体に緑釉を施している。

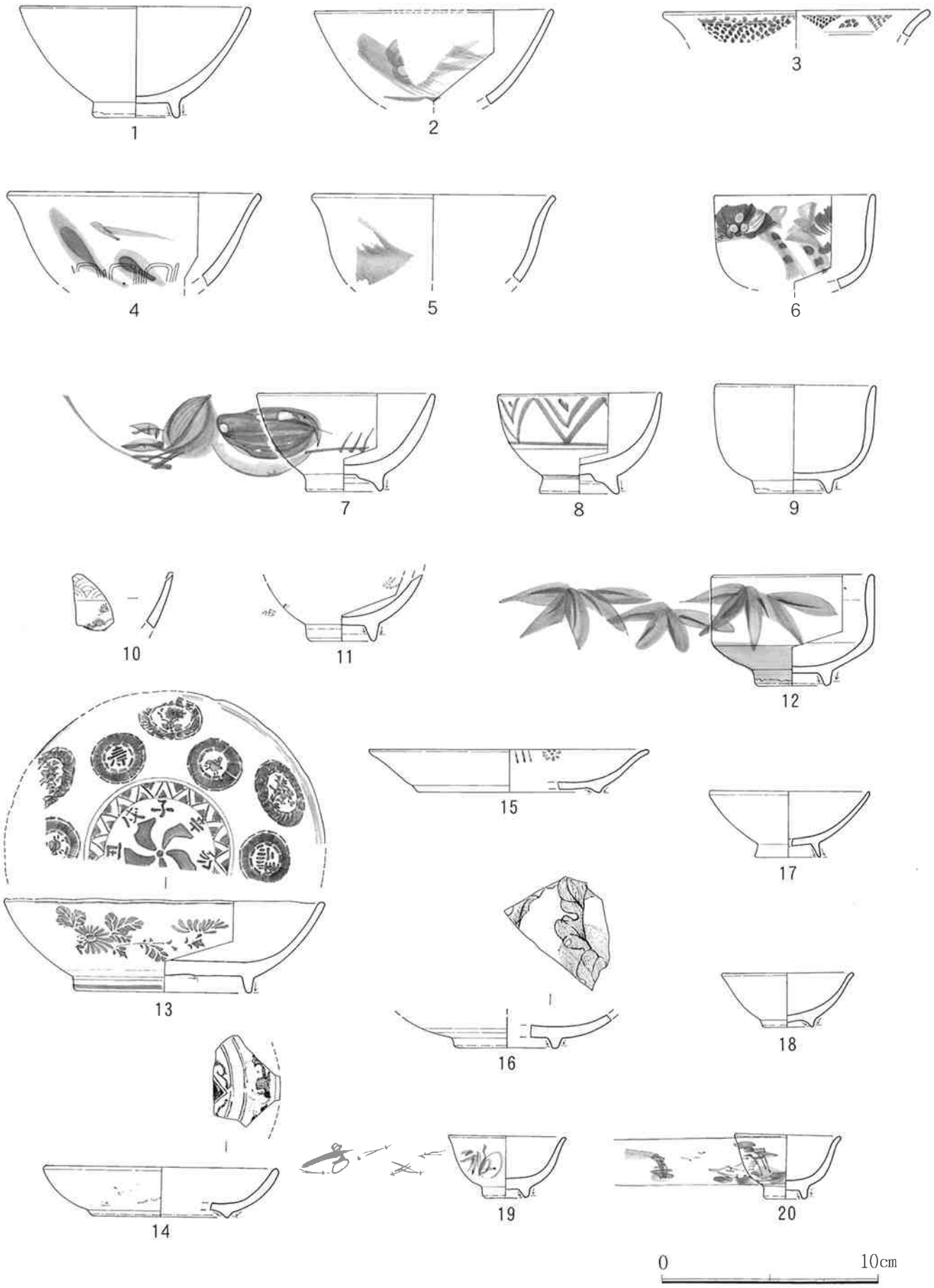
ｂコバルトにより文様が表されている。

第18表　本土産印判手出土状況

出土地 ＼ 器種・分類		碗						小碗										皿						小杯							器種不明			合計
		Ⅰ			Ⅱ		小計	Ⅰ							Ⅱ		小計	Ⅰ			Ⅱ		不明	小計	Ⅰ	Ⅱ				不明	小計			小計	
		a	b		a	b		a		b	c	d	e					a	b							a		b							
		完形	口	胴	口	口		完形	口	完形	完形	胴	底	完品	完形			完形	完形	口	完形	底			完形	完形	口	完品	完形	底		口	胴		
2区	19内																									1					1				1
	40内																										1				1				1
4区			1				1																									1		1	2
10区	上Ⅱ																													1	1				1
	中Ⅵa																										1				1		1	1	2
	散乱15													1			1																		1
11区	43内			1			1																												1
13区	黒土		1				1																												1
			2				2	2	5		1	1	1		1		11		1		1		1	3	1			1	1		3		1	1	20
前庭部	Ⅰ		2			1	3		1	1							2																		5
	Ⅲ								1								1			1				1											2
1～3区上段散乱5、前庭部Ⅰ		1					1																												1
1～3区上段散乱10						1	1																												1
12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅰ										1							1																		1
13区、表採																		1						1											1
合　計		1	4	2	1	2	10	2	7	2	1	1	1	1	1		16	1	1	1	1	1		5	1	1	2	1	1	1	7	1	2	3	41

第19表　本土産印判手観察一覧

挿図図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第88図 図版47	1	碗	Ⅰa	完形	10.8 5.3 3.9	高台は低く、小さい。高台から逆「ハ」の字状に大きく開く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に濃緑釉を施す。畳付には砂？が付着する。	瀬戸・美濃	1～3区上段散乱5、前庭部Ⅰ
	2		Ⅰb	口縁部	11.2 － －	高台から丸みを持って、逆「ハ」の字状に大きく開く。陶試紅等により外面に文様を描く。素地は白色の微粒子で、白濁色の釉を施す。		前庭部Ⅰ
	3		Ⅱa	口縁部	12.6 － －	口縁部を緩やかに外反させる。両面に型紙による文様をあらわすが、内面には三角文・半円状点刻文・圏線が観察できる。素地は淡灰白色の細粒子で淡灰色の釉。	砥部	11区－43内
	4		Ⅱb	口縁部	12.0 － －	口縁部を緩やかに外反させる。陶試紅等により外面に文様を描く。素地は白色の微粒子で、素地は淡灰白色の微粒子で淡灰色の釉を施す。	瀬戸・美濃	前庭部撹乱
	5			口縁部	12.1 － －	口縁部を緩やかに外反させる。陶試紅等により外面に文様を描く。素地は白色の微粒子で、素地は淡灰白色の微粒子で淡灰色の釉を施す。		1～3区上段散乱10
	6	小碗	Ⅰa	口縁部	7.6 － －	高台から丸みを持って立ち上がる。陶試紅等により外面に文様を描く。素地は白色の微粒子で、淡灰色の釉を施す。		13区
	7		Ⅰb	完形	8.4 4.6 3.5	高台から丸みを持って立ち上がる。高台内蛇の目凹形高台を呈する。コバルト等により外面に葉等の文様を描いている。素地は白色の微粒子である。		前庭部Ⅰ
	8			完形	7.7 4.8 3.5	高台から丸みを持って立ち上がる。高台内蛇の目凹形高台を呈する。コバルト等により外面に逆三角の連続文と圏線を描いている。素地は白色の微粒子である。		12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅰ
	9		Ⅰc	完形	7.6 5.1 3.5	高台から丸みを持って立ち上がる。コバルトにより外面に文様を描く。素地は白色の微粒子で、淡灰色の釉を施す。		13区
	10		Ⅰd	胴部	－ － －	胴部片である。外面に銅版転写による青海波や松文を表している。素地は白色の微粒子で、白色の釉を施す。		13区
	11		Ⅰe	底部	－ － 3.0	底部片である。外面に色絵の痕が残る。素地は白色の微粒子で、白色の釉を施す。		13区
	12		Ⅱ	完品	7.6 5.2 3.3	掛分けがなされており、胴上部には淡灰白色釉を下部には鉄釉が施されている。笹文を表している。畳付は露胎である。	美濃	10区散乱15
	13	皿	Ⅰa	完形	15.0 4.3 8.2	高台内蛇の目凹形高台を呈する。外面には花卉文、内面には干支・花卉文・福寿字文等を配した丸文を描いている。素地は白色の微粒子で、淡灰白色の釉。	肥前	13区、表採
	14		Ⅰb	完形	11.0 2.3 6.3	内外面ともに構成の判然としない文様を銅版転写により表している。素地は白色の微粒子で、淡灰白色の釉。	瀬戸・美濃	13区
	15		Ⅱ	完形	13.1 2.0 8.5	内面に構成の判然としない文様を上絵により表している。素地は白色の微粒子で、白色の釉を施す。		13区
	16		不明b	底部	－ － 4.8	内に葉？と思われる文様を銅版転写により表している。素地は白色の微粒子で、淡灰白色の釉。		13区
	17	小杯	Ⅰ	完形	7.5 3.1 3.0	高台から逆「ハ」の字状に大きく開く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に白色釉を施す。		13区
	18		Ⅱa	完形	6.2 2.5 2.3	高台から逆「ハ」の字状に大きく開く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に緑釉を施す。		2区－19内
	19		Ⅱb	完品	5.5 2.8 2.0	高台から丸みを持って、逆「ハ」の字状に大きく開く。コバルトにより渦「福」文や松葉文を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に白濁色の釉を施す。		13区
	20			完形	5.0 3.0 1.9	高台から丸みを持って、逆「ハ」の字状に大きく開く。コバルトにより渦山水楼閣文？を描く。素地は白色の微粒子で、畳付以外に白濁色の釉を施す。		13区



第88図　本土産印判手　碗(１～５)、小碗(６～12)、皿(13～16)、小杯(17～20)

第17節　本土産陶器

本土産陶器の器種として確認されたのは、碗・皿・瓶・水差しの僅かに４器種のみであった。ヤッチのガマにおける本土産陶磁器の出土総点数は113点で、中でも碗は45点で３器種中最も多く検出されており、これに次いで瓶が35点、皿が31点と続いている状況であるが、３器種とも出土点数に大きな開きがないのが特徴といえる。また全体の約４割程度が完品もしくは接合状況が良好な完形品であった（第20表）。

出土地点及び層位別での出土傾向としては、いわゆる前庭部に自然堆積した土中からの検出が全体の約６割を占めていた。産地別にみた場合、内野山等の肥前陶器や薩摩焼、京・信楽、関西系を産地とするものであった。主体となるのは17世紀から18世紀頃の資料であった。

以下、ヤッチのガマより検出された本土産陶器の分類概念について述べ、特徴的な資料については図示することとする（第89図～第92図）。なお、個々の諸特徴等については観察表にまとめた（第22表）。

１．碗

ヤッチのガマにて検出された本土産陶器の碗は、口縁形態や全体の形状から直口口縁、外反口縁、腰折の３つに分類して、必要に応じてａ～ｃに細分した。

Ⅰ類　直口口縁

高台から丸みを持って立ち上がるのと逆「ハ」の字状に開くのとがあり、前者をａ、後者をｂとして細分した。

ａ一般に丸碗と称されるタイプで、高台から丸みを持って立ち上がらせる。

ｂ高台から逆「ハ」の字状に大きく開くタイプである。

Ⅱ類　外反口縁

全体に高台から丸みを持って立ち上がらせる。口縁部を微弱に外反させるのと天目碗様に成形するのとがある。

Ⅲ類　腰折

高台脇から角度を変えて立ち上がるタイプである。

２．皿

皿については、口縁形態や全体の形状から直口口縁、変形皿、腰折の３つに分類した。

Ⅰ類　直口口縁

高台から緩やかな丸みを持って立ち上がるタイプである。

Ⅱ類　変形皿

胴下部から丸みを持って立ち上がり、さらに角度を変えて外側に大きく開くタイプである。

Ⅲ類　腰折

胴部で「く」の字状に立ち上がらせるタイプである。

３．瓶

全体の形状から、胴部中央に最大胴径を有するタイプ、ラッキョウ型、肩衝型、球形型の４つに大別できた。それぞれⅠ類～Ⅳ類とし、必要に応じて１・２、またはａ・ｂに細分した。

Ⅰ類　胴部中央に最大胴径を有するタイプである。外底面の特徴から１～２に細分した。

１外底面に糸切痕を有するタイプである。施釉方法からａ・ｂに細分した。

２外底面に篦削り痕を有するタイプである。

Ⅱ類　ラッキョウ型を呈するタイプである。外底面の特徴から１～２に細分した。

１外底面に篦削り痕を有するタイプである。

２外底に内削りを施して、高台を成形するタイプである。

Ⅲ類　肩衝タイプである。外底面の特徴から１～２に細分した。

１外底面に糸切痕を有するタイプである。

２外底面に篦削り痕を有するタイプである。

Ⅳ類　全体に丸みを帯びた球形状を呈するタイプである。

１外底面に糸切痕を有するタイプである。

２外底面に篦削り痕を有するタイプである。

４．水差し

片口の水差しが得られている。非常に薄造りである。

第20表　本土産陶器出土状況

器種・分類			碗														皿								甕																		水指		器種不明		合計
			I								II	III		不明		小計	I				II	III	不明	小計	I							II		III			IV		不明			小計		小計		小計	
			a				b			不明															1				2		不明	1	2	1	2	不明	1	2									
																									a		b																				
出土地			完品	完形	口	底	完形	口	底	口	完形	完品	完形	胴	底		完形	口	胴	底	口	口	口		完形	底	完形	底	完形	底	口	底	底	底	完形	完形	完形	底	口	胴	底		完形		胴		
1区	I																	2	2					4																							4
1区	III																		1					1															1			1					2
2区	43内																						1	1																							1
3区	9内					1										1																															1
3区	I				1											1																								1		1					2
8区				1	1											2																															2
10区	上III																																						1			1					1
10区	下																											1														1					1
11区	中下																																								1	1					1
11区	下I									4						4																															4
11区	石積み		1		1											2											1					1		1								3			1	1	6
12区	I～II							1		1						2																															2
12区	IIIa			1								1				2											1															1					3
13区	黒土									1						1																															1
前庭部	I			1	1						1					3																															3
前庭部	II				1								1			2		4			1			5																							7
前庭部	III	a		1												1		2	1					3					1													1					5
前庭部	III	a'		2												2									1		1						1									3					5
前庭部	III	b		1												1	1	1						2			1						1									2					5
前庭部	III	d																1						1			1											1				2					3
前庭部	III	f		2												2										2	2	2				1										7					9
前庭部	III	h									1					1																															1
前庭部	III	i		1												1																															1
前庭部	III	j																1						1																							1
前庭部	III	l													1	1																															1
前庭部	III	n																									1															1					1
前庭部	III	m																													1											1					1
前庭部	III			1				1	1							3			1					1																							4
前庭部	SW													1		1																															1
前庭部	石積み																									1																1					1
前庭部	礫内			1												1																															1
前庭部	石灰岩崩落																																				1					1					1
前庭部	撹乱						1									1																															1
1区I・III、前庭部I・II・IIIa・IIIb																				1				1																							1
1区I、前庭部I																		1						1																							1
2区I、前庭部I・II・IIIh																	1							1																							1
2区II、3区、前庭部III																	1							1																							1
2区、前庭部I・II・IIIm																																				1						1					1
10区-16内、前庭部I																						1		1																							1
10区上III・V、10区中II																																											1	1			1
10区下、10区散乱18、前庭部I・IIIf・IIIi・IIIn				1												1																															1
10区下、11区下I・IIIf、前庭部IIIf礫上・IIIf・IIIo																									1																	1					1
10区下、前庭部I・II				1												1																															1
11区中下、11区下I、前庭部IIIf				1												1																															1
11区下I、前庭部IIIa																					1			1																							1
11区下I・石積み、11区散乱、前庭部IIIa'								1								1																															1
11区下I・石積み・礫内、前庭部・IIIn・石積み																	1							1																							1
11区下石積み、12区石積み外、前庭部I・IIIa・IIIa'、石積み3				1												1																															1
11区下石積み、前庭部I・IIIa・IIIa'・IIIh																																		1								1					1
11区下石積み、前庭部II・IIIa'・IIIb				1												1																															1
11区下石積み、前庭部IIIb・IIIf																													1													1					1
11区下、12区I～II、前庭部I・II・IIIn・石積み				1												1																															1
12区I～II・IIIa、前庭部I・II・III																	1							1																							1
12区IIIa、12区																																			1							1					1
12区石積み外、前庭部II・IIIa																		1						1																							1
12区、前庭部II・IIIc・IIId				1												1																															1
前庭部I・IIIa'																														1												1					1
前庭部I・IIIa'・IIIc、北側斜面																		1						1																							1
前庭部I・IIIb・IIIf・IIIe																												1														1					1
前庭部I・IIIe																	1							1																							1
前庭部IIIa・IIId、表採											1					1																															1
前庭部IIIa'・石積み・石灰岩崩落																					1			1																							1
前庭部IIIb・IIId													1			1																															1
合　計			1	19	5	1	2	2	1	6	3	1	2	1	1	45	6	14	5	1	3	1	1	31	2	3	8	4	2	1	1	2	2	2	1	1	1	1	2	1	1	35	1	1	1	1	113

第21表　本土産陶器計測表

番号	器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
1	碗	Ⅰa	内野山	9.7	6.7	4.5	8区
2				10.2	6.7	4.4	12区、前庭部Ⅱ・Ⅲc・Ⅲd
3				10.6	6.4	4.3	前庭部礫内
4				10.7	6.4	4.4	前庭部Ⅲf
5				10.8	7.0	4.2	11区下、12区Ⅰ～Ⅱ、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲn・石積み
6				11.0	6.6	4.2	前庭部Ⅲb
7				11.5	6.7	4.6	前庭部Ⅲf

番号	器種	分類	産地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土地
8	碗	Ⅰa	椎の峰(系)	9.5	7.6	5.0	11区下石積み
9				9.6	7.1	4.7	11区中下、11区下Ⅰ、前庭部Ⅲf
10		Ⅰb		13.0	5.6	4.6	11区下Ⅰ・石積み、11区散乱、前庭部Ⅲa'
11	皿	Ⅰ	京焼風陶器	11.0	5.1	4.8	11区下Ⅰ・石積み・礫内、前庭部Ⅲa・Ⅲn・石積み
12				12.2	4.6	4.4	2区Ⅱ、3区、前庭部Ⅲ
13				12.3	4.6	4.7	2区Ⅰ、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲh

第22表a　本土産陶器観察一覧

挿図図版	番号	器種	分類	部位	口径器高底径(cm)	観察事項	産地	出土地
第89図図版48	1	碗	Ⅰa	完形	11.4 6.7 4.3	高台は低い。内削りは浅く、兜巾状を呈する。外面には轆轤痕が明瞭である。素地は淡灰白色の細粒子で、全面に銅緑釉を施しているが畳付の一部は剥落している。全体に細かい貫入が入る。畳付及び高台内には砂が付着する。	内野山	前庭部Ⅲi
	2			完形	10.7 6.9 4.8	高台はやや高く、内削りは浅い。外面には轆轤痕が明瞭である。素地は淡灰白色の細粒子で、内面から高台脇まで銅緑釉を施すが、一部高台外面まで釉が垂れる。全体に細かい貫入が入る。		10区下、前庭部Ⅰ・Ⅱ
	3			完形	11.4 6.7 4.3	高台は高く、内削りは深い。外面には轆轤痕が明瞭である。素地は淡灰白色の細粒子で、内面から高台脇まで銅緑釉を施すが、一部高台外面まで釉が垂れる。全体に細かい貫入が入る。		10区下、10区散乱18、前庭部Ⅰ・Ⅲf・Ⅲi・Ⅲn
	4			完品	11.6 7.3 4.4	高台は高い。内削りは深く、兜巾状を呈する。外面には轆轤痕が明瞭である。素地は淡灰白色の細粒子で、内面から高台脇まで銅緑釉を施すが、一部高台外面まで釉が垂れる。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲa'
	5			完品	10.1 5.8 4.2	高台は高く、内削りは深い。外面には轆轤痕が明瞭である。素地は淡灰白色の細粒子で、内面から高台脇まで銅緑釉を施すが、一部高台外面まで釉が垂れる。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲa'
	6			完形	11.3 7.3 5.0	高台は高く、内削りは深い。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄白色の釉を総釉後に、畳付部分の釉を掻き取っている。全体に非常に細かい貫入が入る。	椎の峰(系)	12区Ⅲa
	7			完形	10.0 6.8 4.6	高台は高く、内削りは深い。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄白色の釉を総釉後に、畳付部分の釉を掻き取っている。全体に非常に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅰ
	8			完形	11.6 6.8 5.2	高台は高く、内削りは深い。全体に薄造りである。外面胴部に山水文を描いている。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄白色の釉を総釉後に、畳付部分の釉を掻き取る。全体に非常に細かい貫入が入る。	京焼風陶器	11区下石積み、12区石積み外、前庭部Ⅰ・Ⅲa・Ⅲa'、石積み3
	9			完形	9.4 5.9 4.6	高台は低く、内削りは浅い。全体に薄造りである。外面胴部に山水文を描いている。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄灰白色の釉を高台脇まで施している。全体に非常に細かい貫入が入る。高台内には「小松吉」の刻印。		11区下石積み、前庭部Ⅱ・Ⅲa'・Ⅲb
	10			胴部	- - -	内面に白土による刷毛目装飾が観察できる。素地は明茶褐色の細粒子で、両面に褐色釉を施している。全体に非常に細かい貫入が入る。皿の可能性もある。	現川系	前庭部Ⅲ

第22表ｂ　本土産陶器観察一覧

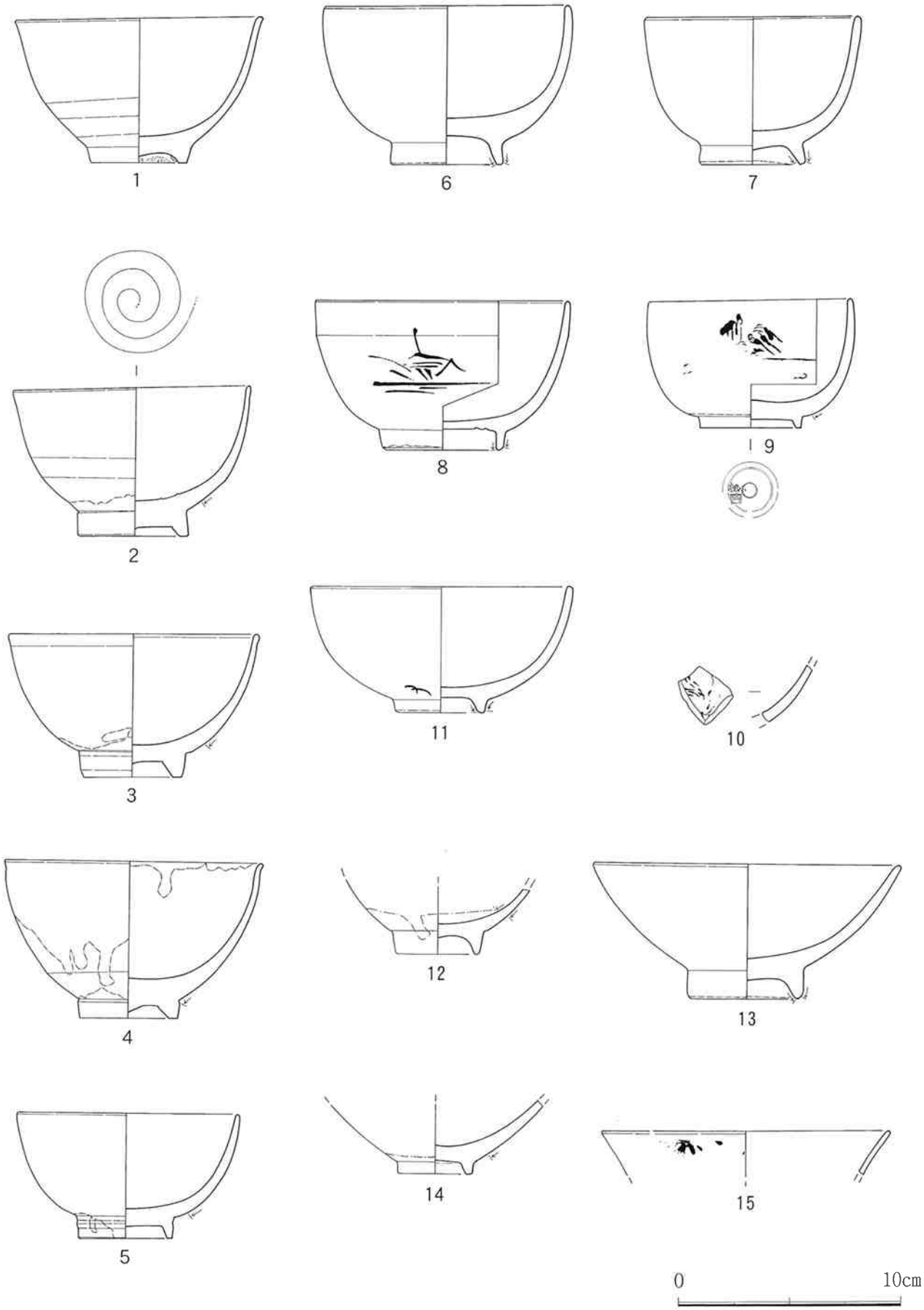
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第89図 図版48	11	碗	Ⅰa	完形	11.8 5.8 3.9	高台は低く、内削りは浅い。全体に薄造りである。高台脇には、鉄絵による千鳥印が観察できる。素地は白色の細粒子で、全面に白濁色の釉を総釉後に畳付の釉を掻き取っている。全体に非常に細かい貫入が入る。	薩摩	前庭部Ⅲａ
	12			底部	－ － 3.8	高台は高く、内削りは深めで丸みを持つ。高台外面及び高台脇を箆削りにより面取りする。素地は黄灰白色の細粒子で、両面に淡灰白濁色の釉を施すが、見込みと胴下部から高台外面にかけては露胎としている。	関西	3区-9内
	13		Ⅰb	完形	14.0 6.2 4.7	高台は高く、内削りは深めである。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄白色の釉を総釉後に、畳付部分の釉を掻き取っている。全体に非常に細かい貫入が入る。	椎の峰 (系)	前庭部撹乱
	14			底部	－ － 3.4	高台は低く、内削りはやや浅めである。素地は白色の細粒子で、両面に淡灰白濁色の釉を施すが、見込みと胴下部から高台外面にかけては露胎としている。	薩摩	前庭部Ⅲ
	15			口縁部	13.0 － －	外面口縁直下に鉄絵にて笹文？を描いている。素地は白色の細粒子で、淡黄灰白濁色の透明釉を両面に施している。両面に細かい貫入が入る。	関西 (中国)	12区Ⅰ～Ⅱ
第90図 図版48	1		Ⅱ	完形	11.9 7.6 4.7	高台は低い。内削りは浅く、兜巾状を呈する。高台脇を斜位に削り調整する。素地は淡灰白色の細粒子で、銅緑釉を高台脇まで施している。全体に細かい貫入が入る。	内野山	前庭部Ⅲａ・Ⅲｄ、表採
	2			完形	9.7 6.4 3.7	高台は低い。内削りは浅く、兜巾状を呈する。外面には轆轤痕が明瞭である。素地は茶褐色の粗粒子で微細な白色の鉱物を含む。鉄釉を胴中央まで施している。全体に失透気味である。	肥前	前庭部Ⅰ
	3			完形	11.0 5.6 4.5	高台は低く、内削りは浅い。素地は内側が灰褐色で、外側が赤茶色を呈する。無釉である。高台内には「十」ｏｒ「×」の線刻が入る。	沖縄？ (喜名焼)	前庭部Ⅲｈ
	4		Ⅲ	完形	8.5 5.6 4.2	高台は低く、内削りは浅い。外面に山水文を描いている。素地は白色の細粒子で、淡黄白色の釉を総釉後に、畳付部分の釉を掻き取っている。全体に非常に細かい貫入が入る。畳付には砂が僅かに付着する。	京焼風 陶器	前庭部Ⅲｂ・Ⅲｄ
	5			完品	8.5 5.5 4.0	高台は低く、内削りは深い。外面に白土による刷毛目装飾が観察できる。素地は淡黄白色の細粒子で、灰濁色の釉を総釉後に、畳付部分の釉を掻き取っている。全体に非常に細かい貫入が入る。畳付には砂が僅かに付着する。	武雄	12区Ⅲａ
	6			完形	8.2 4.6 2.8	高台は低く、内削りは深い。外面に鉄絵による花卉文を施す。素地は灰白色の細粒子で、灰濁色の釉を高台脇まで施す。見込みに僅かだが砂が付着する。	関西 京・ 信楽	前庭部Ⅱ
	7	Ⅲ	Ⅰ	完形	13.1 4.9 4.6	高台は低く、内削りは浅い。全体に薄造りである。見込みには鉄絵により山水文を描いている。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄灰白色の釉を高台脇まで施している。全体に非常に細かい貫入が入る。高台内には「森」の刻印。	京焼風 陶器	前庭部Ⅲｂ
	8			完形	12.8 4.7 4.3	高台は低く、内削りは浅い。全体に薄造りである。見込みには鉄絵により山水文を描いている。素地は淡黄白色の細粒子で、淡黄灰白色の釉を高台脇まで施している。全体に非常に細かい貫入が入る。高台内には「中村金」の刻印。		前庭部Ⅰ・Ⅲｅ
	9			口縁部	12.9 － －	全体にやや厚手である。見込みには鉄絵により山水文を描いている。素地は淡黄白色の細粒子で、黄褐色の釉を両面に施している。全体に非常に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅰ・Ⅲａ'・Ⅲｃ、北側斜面
	10			底部	－ － 4.4	高台は低く、内削りは浅い。全体に薄造りである。内面には鉄絵で蝶？を描いている。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を高台脇まで施している。全体に非常に細かい貫入が入る。		1区Ⅰ・Ⅲ、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂ
	11			胴部	－ － －	全体に薄造りである。内面には鉄絵で蝶？を描いている。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を高台脇まで施している。全体に非常に細かい貫入が入る。		1区Ⅲ

第22表ｃ　本土産陶器観察一覧

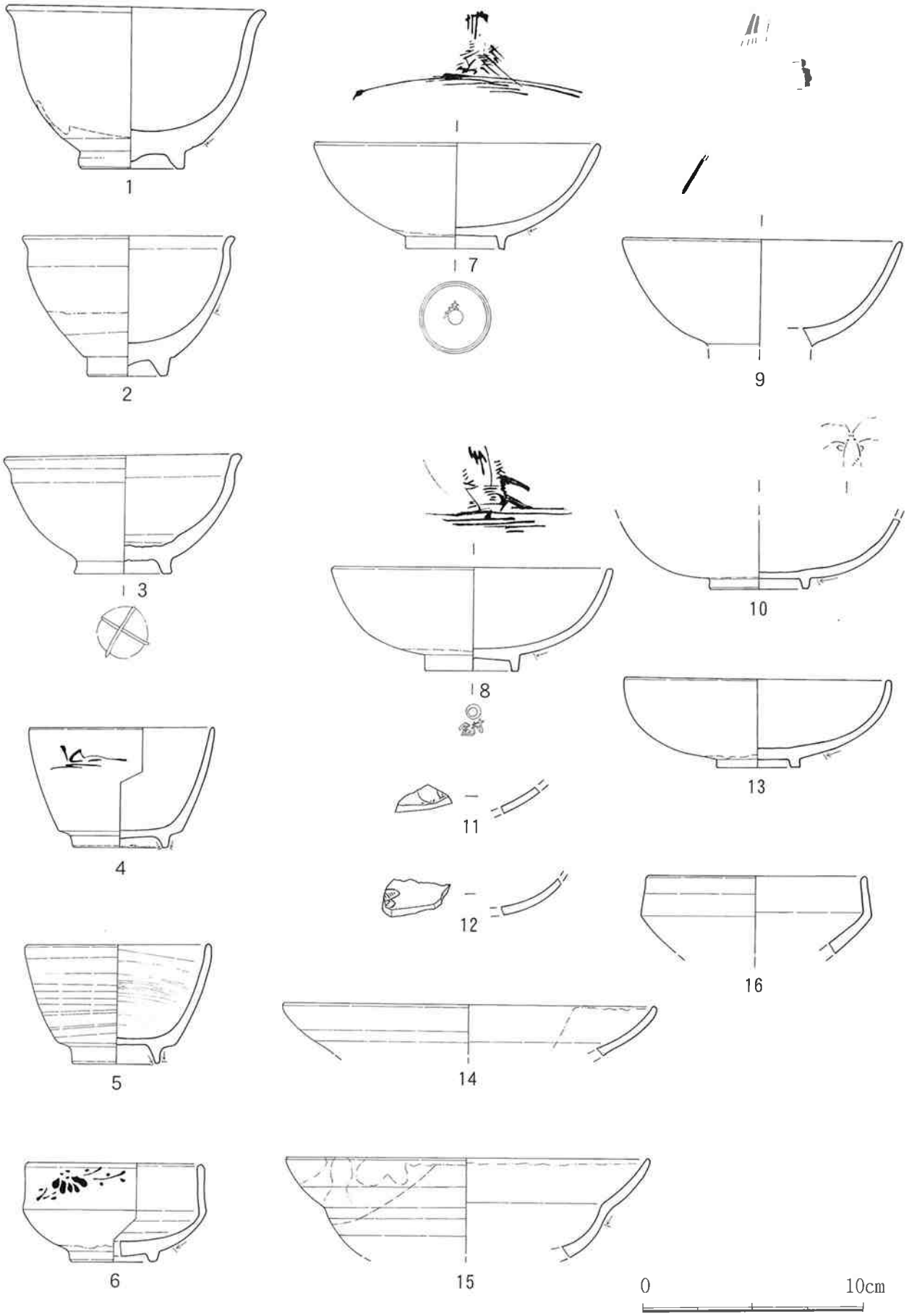
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第90図 図版48	12	皿	Ⅰ	胴部	- - -	全体に薄造りである。内面には鉄絵で蝶？を描いている。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を施している。全体に非常に細かい貫入が入る。	京焼風陶器	1区Ⅰ
	13			完形	12.2 4.2 3.8	高台は低く、内削りは浅い。全体に薄造りである。素地は白色の細粒子で、淡黄白濁色の釉を高台脇まで施している。全体に非常に細かい貫入が入る。	京系	12区Ⅰ～Ⅱ・Ⅲａ、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
	14		Ⅱ	口縁部	17.0 - -	全体の造りは薄手である。両面ともに轆轤痕が顕著である。素地は淡桃褐色の細粒子で、両面に胴緑釉を施している。（薩摩焼の可能性も考慮される。）	内野山	11区下Ⅰ、前庭部Ⅲａ
	15			口縁部	16.5 - -	全体の造りは薄手である。両面ともに轆轤痕が顕著である。素地は淡灰白色の細粒子で、両面に胴緑釉を施している。		前庭部Ⅲａ'・石積み・石灰岩崩落
	16		Ⅲ	口縁部	10.1 - -	全体に薄造りである。素地は白色の細粒子で、淡灰濁色の釉を両面に施している。全体に非常に細かい貫入が入る。	京焼風陶器	10区-16内、前庭部Ⅰ
第91図 図版49	1	瓶	Ⅰ1ａ	完形	2.8 16.3 6.9	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰褐色の粗粒子である。施柚方法は単掛で、口縁内面から胴下部まで灰濁色の釉を厚く施している。全体に細かい貫入が入る。	肥前か	前庭部Ⅲａ'
	2			底部	- - 5.8	素地は灰褐色の粗粒子である。施柚方法は単掛で、口縁内面から胴下部まで緑灰色の釉を厚く施している。全体に轆轤痕が観察できる。		前庭部Ⅲｆ
	3			底部	- - 5.5	素地は灰黒色の粗粒子である。微細な白色の鉱物を含む。施柚方法は単掛で、口縁内面から胴下部まで黒色の釉を厚く施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部石積み
	4		Ⅰ1ｂ	完形	3.0 13.0 6.0	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物を含む。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に黒褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｎ
	5			完形	2.8 13.0 5.8	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物を含む。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に緑黄褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。		11区下石積み
	6			完形	2.8 13.2 7.5	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、施柚方法は掛分け。口縁内面から胴上部に灰褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施すが焼成不良のため本来の釉調は不明である。		前庭部Ⅲｄ
	7			完形	3.1 13.5 5.8	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色の鉱物を含む。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に緑黄褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｂ
	8			完形	3.3 13.5 5.9	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰白色の細粒子である。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｆ
	9			完形	3.1 14.5 5.9	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡桃褐色の細粒子で、微細な白色の鉱物を含む。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。		12区Ⅲａ
	10			完形	3.7 16.8 6.8	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡桃褐色の細粒子で、微細な白色の鉱物を含む。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲａ'
	11			底部	- - 6.1	素地は淡灰白色の細粒子で、施柚方法は掛分けである。口縁内面から胴上部に灰褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施すが焼成不良のため本来の釉調は不明である。		前庭部Ⅲｆ

第22表ｄ　本土産陶器観察一覧

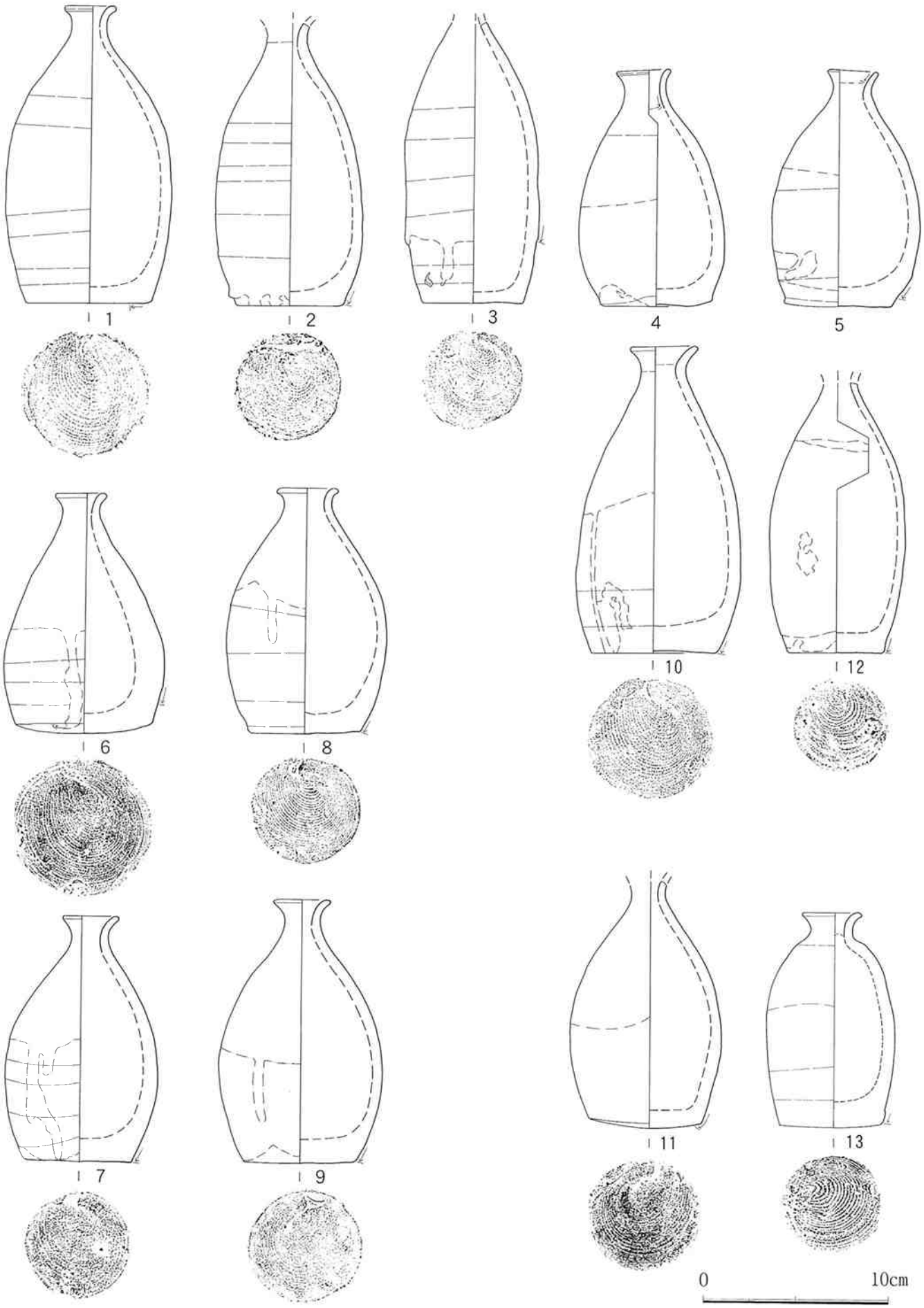
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	産地	出土地
第91図 図版49	12	瓶	Ⅰ1b	底部	- - 5.0	素地は淡灰白色の細粒子である。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に緑黄褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。全体に細かい貫入が入る。	肥前か	前庭部Ⅲｆ
	13			完形	3.2 11.8 5.5	口縁部は緩やかに外反する。素地は灰黒色の粗粒子である。微細な白色の鉱物を含む。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に緑黄褐色の釉を、胴下部まで灰濁色の釉を厚く施している。全体に細かい貫入が入る。		前庭部Ⅲｆ
第92図 図版49	1		Ⅰ2	底部	- - 5.3	素地は灰色の細粒子である。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面にかけて釉を施す。釉調は単黄灰褐色を呈するが、全体に失透気味で本来の釉調は不明である。		前庭部Ⅰ・Ⅲａ'
	2			完形	4.5 16.9 5.4	口縁部は緩やかに外反する。かなり厚手である。素地は灰褐色の細粒子で、微細な白色の鉱物を含む。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面にかけて灰褐色釉を施す。全体に細かい貫入が入る。鮫肌状を呈する。		前庭部Ⅲａ
	3			完形	5.4 15.4 6.6	口縁部は緩やかに外反する。やや厚手である。全体に轆轤痕が顕著である。素地は灰褐色の粗粒子で、微細な白色の鉱物を含む。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面胴中央にかけて茶褐色釉を施す。全体に細かい貫入が入る。鮫肌状を呈する。	東南アジアか	11区下石積み、前庭部Ⅲｂ・Ⅲｆ
	4		Ⅱ1	底部	- - 7.9	素地は灰色の粗粒子である。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面にかけて釉を施す。釉調は単黄灰褐色を呈するが、全体に失透気味で本来の釉調は不明である。	薩摩？	前庭部Ⅲｆ
	5			底部	- - 7.7	素地は灰色の粗粒子である。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面にかけて釉を施す。釉調は単黄灰褐色を呈するが、全体に失透気味で本来の釉調は不明である。	肥前か	11区下石積み
	6		Ⅱ2	底部	- - 4.9	素地は灰色の細粒子である。外面に沈線文を螺旋状に右回転させている。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面にかけて褐色釉を施す。		前庭部Ⅲａ'
	7			底部	- - 5.2	素地は単灰白色の細粒子である。施柚方法は単掛で、口縁内面から外面にかけて淡緑黄灰色を施している。		前庭部Ⅲｂ
	8		Ⅲ1	底部	- - 6.0	素地は淡灰白色の細粒子で、施柚方法は掛分けである。口縁内面から胴上部に淡灰濁色の釉を、胴下部に茶濁色の釉を施す。細かい貫入が入る。		11区下石積み、前庭部Ⅰ・Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｈ
	9			底部	- - 5.2	素地は淡灰白色の細粒子である。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。		11区下石積み
	10		Ⅲ2	完形	3.3 11.1 5.4	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰褐色の細粒子で、施柚方法は単掛で、口縁内面から胴上部に褐色の釉を、全体に細かい貫入が入る。外底面には粗い砂？が付着する。		12区Ⅲａ、12区
	11			完形	3.3 14.9 7.0	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰褐色の細粒子で、施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に緑灰色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。		2区、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲｍ
	12		Ⅳ1	完形	3.7 12.6 5.0	口縁部は緩やかに外反する。素地は淡灰褐色の細粒子で、施柚方法は単掛で、口縁内面から胴上部に褐色の釉を、全体に細かい貫入が入る。外底面には粗い砂？が付着する。		前庭部石灰岩崩落
	13		Ⅳ2	底部	- - 4.7	素地は淡灰白色の細粒子である。施柚方法は掛分けで、口縁内面から胴上部に黒褐色の釉を、胴下部に灰濁色の釉を施している。		前庭部Ⅲｄ
	14	水指	―	完形	8.2 9.4 6.6	片口口縁で、非常に薄造りである。外底は篦削りか？外面には轆轤痕等の調整痕が明瞭である。素地は茶紫色で微細な白色の鉱物を含む。内面に褐色の釉を施す。外面に一部釉垂れが観られる。（東南アジアの可能性も考慮される。）	薩摩	10区上Ⅲ・Ⅴ、10区中Ⅱ



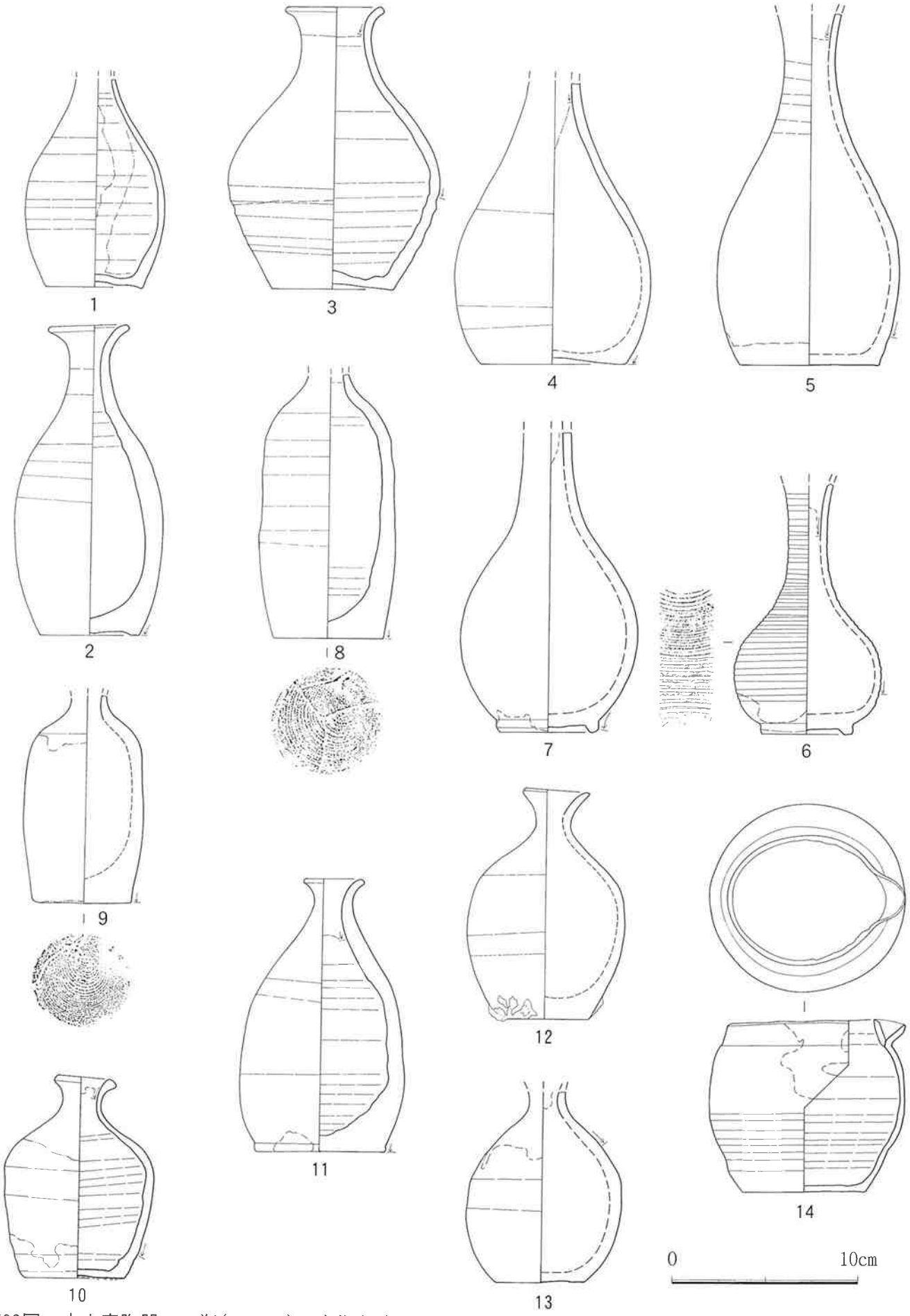
第89図　本土産陶器１　碗



第90図　本土産陶器２　碗（１～６）、皿（７～16）



第91図　本土産陶器３　瓶



第92図　本土産陶器４　瓶(１～13)、水指(14)

第18節　沖縄産施釉陶器

釉薬を施したものであり、一般的にジョウヤチと呼ばれるものである。ここでは白色系の胎土のものを沖縄産施釉陶器として取り扱った。本遺跡から出土した沖縄産施釉陶器の器種は、祭器や酒器を中心として、瓶子や長頸瓶、酒注、油壷、碗、小碗、灯明具がある。釉の種類は、灰釉、透明釉、飴釉、鉄釉があり、白化粧を施すものは酒注の胴部破片の１点（第94図12）を除きみられない。

小碗は出土状況（CD－ROM）に偏りが観られ、１号区画と12号区画の両区画のみの出土である。なお、１トレンチから出土した小碗は１号区画の側からの出土である。

第94図11は厨子内から検出した。その他にも瓶子片が１～４号区画と12号区画の厨子内から７点出土しているが、小破片であるため副葬品と判断しにくいものである。

器形や釉色により分類及び細分を行った。個々の特徴については第23表に提示した。

脱稿後、大橋康二氏より御指示を得た。本土産陶器に分類されるものについては、小見出し脇に注記した。

碗（第93図１）

高台脇から口縁部に斜め上方へ直線的に立ち上がるもので直口口縁を有する。灰釉をフィガキーする。口縁部外面に鉄絵で簡略化した草花文を描く。内底面に砂目痕がある。

小碗（第93図２～４）

Ⅰ類　腰部の丸みは弱く、直口口縁を有し、高台内を半月状に削り出すもの。透明釉を施釉し、腰下部以下露胎。内底面、畳付に白砂が付着する。（２）

Ⅱ類　腰部がやや丸みを持ち口縁部がやや内彎し、削り出し高台を有するもので灰釉を施釉するもの。内底面、畳付け部には粗い砂粒が付着する。

－ａ　高台部は厚いもの。（３）

－ｂ　高台部は薄く小さいもの（４）

皿　唐津（第93図５）

高台からやや内彎ぎみに立ち上がる直口口縁の皿。内底面に４箇所の胎土目痕が残る。透明釉を施し、口縁下位以下露胎である。施釉時の指痕が内底面に露胎となり残る。胎土の粒子はやや粗く、全体の造りは雑な印象を受ける。

瓶子（第93図６～１１）

Ⅰ類　高台からの立ち上がりが緩やかで、胴の最大径が胴部中央になるもの。

－ａ　高台の高いもの（６）

－ｂ　高台の低いもの（７）

Ⅱ類　高台からの立ち上がりが強く胴の最大径が胴部中央より下になるもの。

－ａ　高台の高いもの（８）

－ｂ　高台の低いもの（９）

Ⅲ類　Ⅰ類とⅡ類の中間タイプ、(10)は高台低く分類上ではⅢ－ｂとなる。灰釉を施した後に鉄釉を流し掛ける。

Ⅰ類に分類可能である（11）は、瓶子の高台畳付部を研磨した二次利用品である。現在までに類例はみられない。

瓶（第94図１，２）

１類　（１）は灰釉を施した平底の瓶で、底部からの立ち上がりが強く、胴の最大径が胴下位にあるもの。

２類　（２）は黄褐色の釉を施した、胴の最大径が胴部中央にあるもので、厚めの削りだし高台を有する。

酒瓶（第94図３）

沖縄で渡名喜瓶とよばれるもの。肩部で折れ曲がり、腰部が丸みをもつ器形。肩部から腰上位にかけて飛びカンナをいれる。透明釉を胴下位に、飴釉を頚部から胴上位に流し掛ける。

小型瓶　肥前陶器（第94図４）

いわゆるフチュクルビンとよばれる器種を大きくしたもの。平底の底部からストレートに立ち上がり、肩部で強い屈折をするもの。胴下位以下露胎。外底面にすのこ目。16ｃ末～17ｃ初。

徳利　絵唐津（第94図５）、肥前陶器？（第94図14・15）、産地不明（第94図16）

Ⅰ類　沖縄産無釉陶器のチュワカサー（徳利）に付け高台をもたせた器形である。しかし、渦巻文は有さず、鉄絵で３枚の葉文を２対描いた後、透明釉を腰下部まで施釉する。（５）

Ⅱ類　灰釉を施した付け高台の瓶で、底部からの立ち上がりはやや弱く、胴の最大径は中央よりやや下になるもの。（14）

Ⅲ類　灰釉を施した平底の瓶で、底部からの立ち上がりは極弱く、口縁部の外反も弱いもの。（15）

Ⅳ類　二時焼成を受けており、釉調ははっきりしないが、施釉範囲は口縁部内側から腰下部である。口縁部は肥厚し、やや外反する。頚部は短く、最大径は胴上位にある。底部は上げ底を呈するもの。産地は沖縄を含めた九州のもので、17ｃ前半の資料と思われる。（16）

油壷（第94図６，７）

Ⅰ類　器の最大径が胴部中央より上部にあり明瞭な肩部をもつもの。

Ⅱ類　器の最大径が胴部中央にあるもの。底部は削り出しによる付け高台である。（６）

Ⅲ類　器の最大径が胴部中央より下にあり、器高が低いもの。底部は削り出しによる高台を有する。（７）

小杯（第94図８）

削り出し高台を有し、腰下部に波状文を施すもの。

酒注（第94図９～13）

Ⅰ類　胴上位で折れ曲がり、稜をつくるもので断面は台形状のもの。（10）は乳白色の釉に鉄絵で４条の圏線を描くもの。（12）は肩部破片であるが推定の断面形状は台形を呈すものと思われる。唯一、白化粧を施した資料であり、線刻により区画したそれぞれの箇所に飴釉、緑釉に透明釉を施釉する。

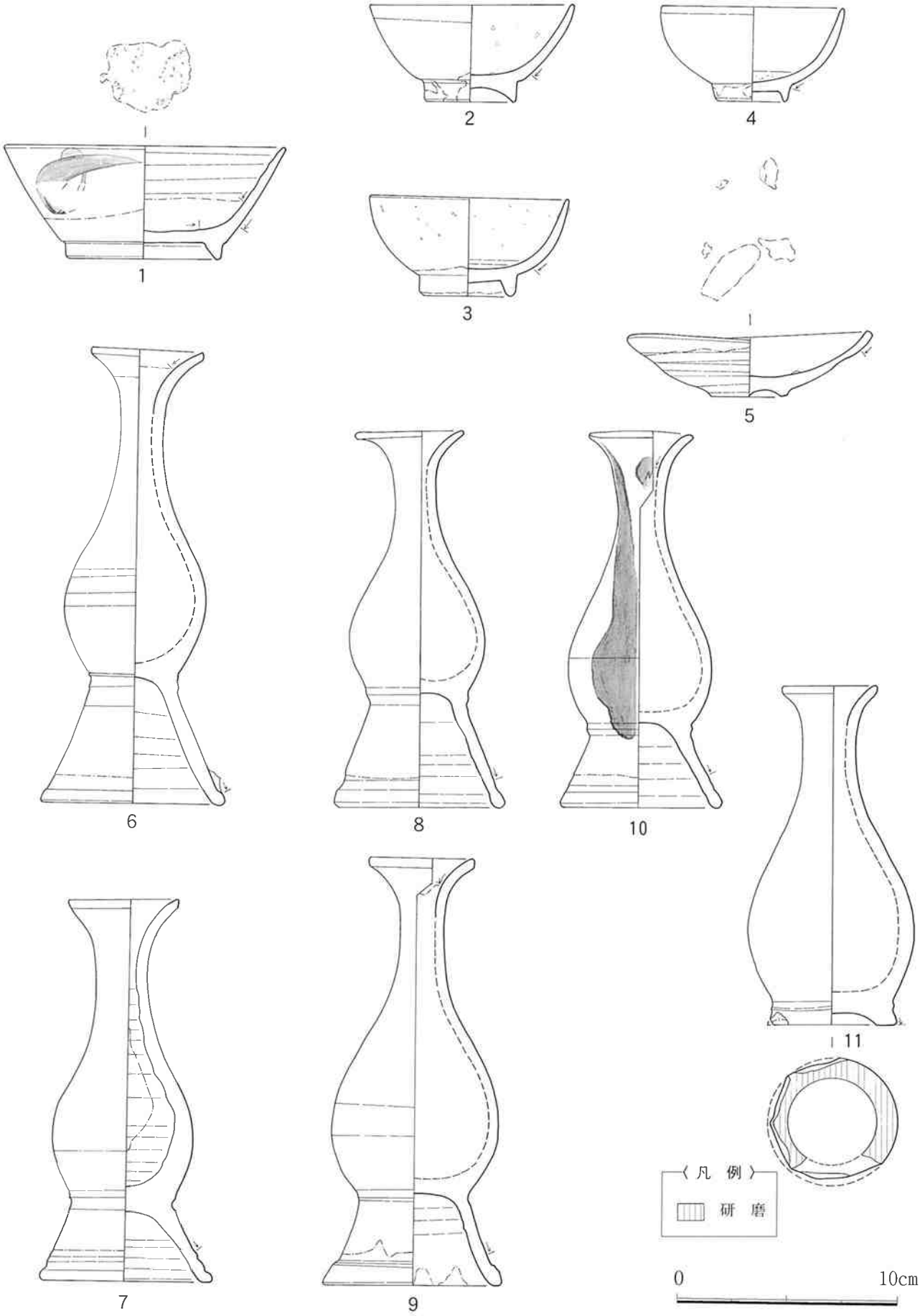
Ⅱ類　最大径は胴部中央にあり、断面は楕円形状のもの。（13）は二次焼成を受け変色するが、褐釉あるいは鉄絵で肩部に２本の簡略化した草花文に藁灰釉または、灰釉、透明釉を施すもの。器高はかなり低い。

第23表ａ　沖縄産施釉陶器観察一覧

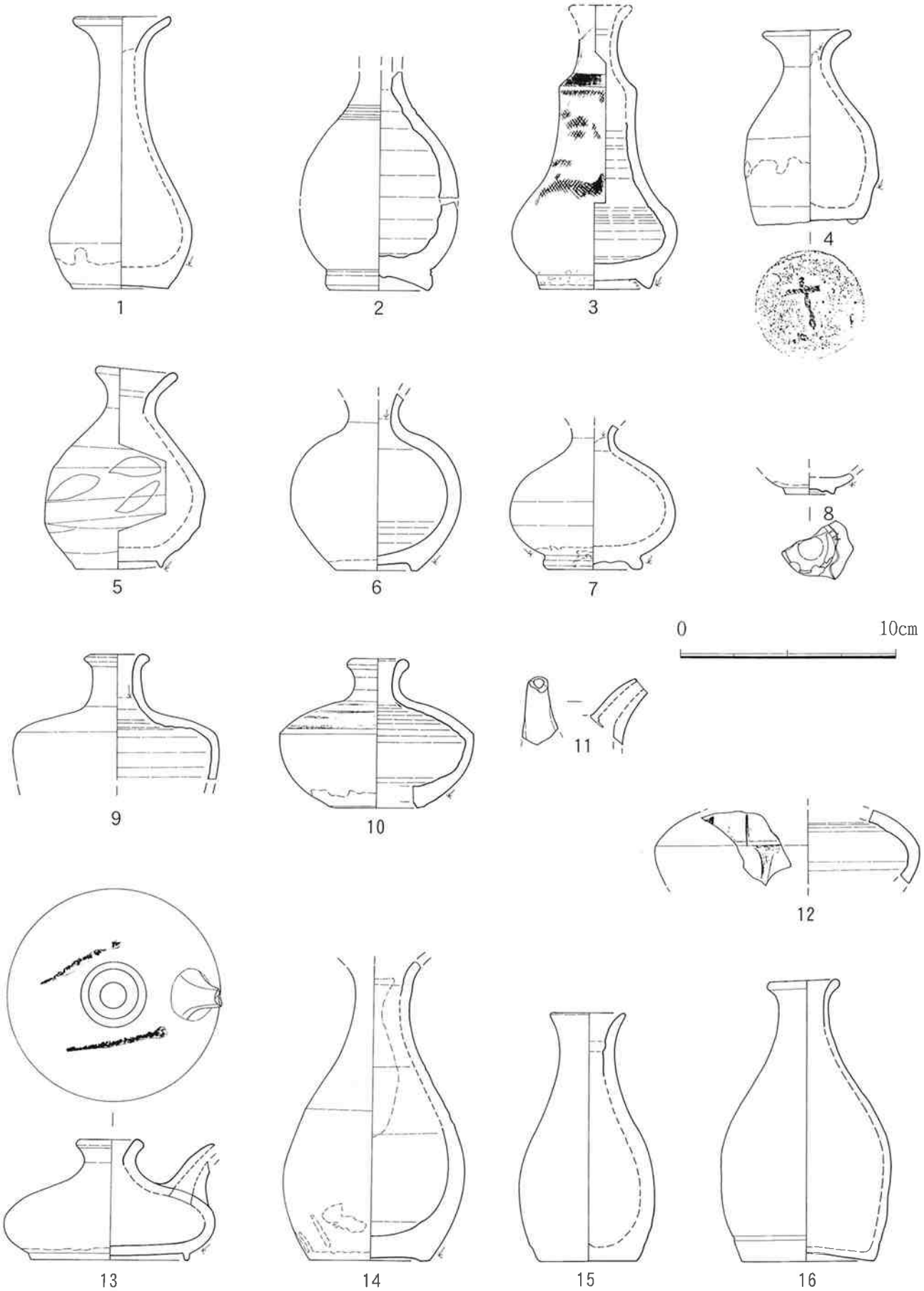
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	釉色・ 施釉範囲	素地・文様などの特徴	出土地
第93図 図版50	1	碗	―	口縁部 ～ 底部	13.0 5.2 6.9	灰釉 内底面、胴部内面 ～胴部外面	灰白色の微粒子。内底面に灰釉を施し蛇の目剥ぎ風に。口縁部外面に鉄絵で簡略化した草花文。内底面、高台部に砂目痕。	1区Ⅰ、2区Ⅰ
	2	小碗	Ⅰ類	完形	9.5 4.6 4.0	透明釉 腰下部以下露胎	黄灰色の微粒子。内底面・畳付けに砂粒が付着。	前庭部Ⅲａ
	3		Ⅱ類-a	口縁部 ～ 底部	9.3 4.6 4.0	灰釉 腰下部以下露胎	灰白色の微粒子。内底面に粗めの砂粒。畳付けに石灰分が付着。	12区Ⅲａ
	4		Ⅱ類-b	完形	8.6 4.4 3.1	灰釉 腰下部以下露胎	灰白色の微粒子。全体に貫入あり。内底面・畳付けに粗めの砂粒が付着。	前庭部Ⅲ
	5	皿	―	完形	11.4 3.1 3.2	灰釉 内底面 ～口縁下部	灰白色の細粒子。内底面に４つの胎土目痕。唐津焼16ｃ末～17ｃ初。	12区Ⅲａ
	6	瓶子	Ⅰ類-a	完形	5.2 21.1 8.5	褐釉 口縁部内面 ～高台脇	黄白色の微粒子。胴部に明瞭な轆轤痕。高台脇に溶着痕。	11区下Ⅱ・Ⅲ、前庭部Ⅲｃ

第23表ｂ　沖縄産施釉陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	釉色・ 施釉範囲	素地・文様などの特徴	出土地
第93図 図版50	7	瓶子	Ⅰ類-b	口縁部 ～ 底部	5.0 17.7 7.7	灰釉 頚部内面 ～高台脇	灰白色の微粒子。高台部に２条の圏線。全体に貫入あり。口縁部の１/３が欠損。	12区-5内・15内、前庭部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲｂ
	8		Ⅱ類-a	口縁部 ～ 底部	5.0 17.4 7.5	褐釉 口縁部内面 ～高台脇	乳白色の微粒子。全体に貫入あり。口縁部のつくりは薄く、外反が最も強い。口縁部の１/９が２ヶ所欠損。	12区Ⅲａ
	9		Ⅱ類-b	口縁部 ～ 底部	4.9 19.8 8.0	褐釉 口縁部内面 ～高台脇	乳白色の微粒子。胴上位に溶着痕。細かい貫入あり。	前庭部Ⅲａ
	10		Ⅲ類	口縁部 ～ 底部	4.8 17.3 7.1	灰釉・飴釉 口縁部内面 ～高台中央部	黄白色の微粒子。高台部に２条の圏線。飴釉を流し掛けする。二次焼成。口縁部の１/３が欠損。	前庭部Ⅲｂ
	11		Ⅰ類-不明	口縁部 ～ 胴部	4.4 15.7 5.6	灰釉 口縁部内面 ～高台部	灰白色の微粒子。スカート状高台を研磨し長頚瓶として二次利用。二次焼成。口縁部の１/３欠損。	前庭部Ⅲｂ
第94図 図版50	1	瓶	１類	完形	4.6 12.6 4.5	灰釉 口縁部内面 ～高台部	緑灰色の微粒子。底部に糸切り痕。二次焼成。	前庭部Ⅲｄ
	2		２類	胴部 ～ 底部	－ － 4.6	黄褐色の釉 ～腰下部	灰白色の微粒子。頚部に渦巻文。口台部の刳りは浅い。貫入あり。	1区Ⅰ、2区Ⅰ
	3	酒瓶	－	頚部 ～ 底部	－ － 5.0	透明釉・飴釉 頚部 ～高台部脇	灰白色の微粒子。胴上位に格子状鉋目。高台内の透明釉はかきとる。高台部に粗い砂粒が付着。貫入あり。	前庭部Ⅱ・Ⅲａ
	4	小型瓶	－	口縁部 ～ 底部	4.1 9.1 5.1	褐釉 口縁部内面 ～胴部	灰白色の細粒子。外底面にすのこ目。底部に溶着痕。貫入あり。口縁部が銀化。口縁部の１/２欠損。肥前陶器16ｃ末～17ｃ初。	前庭部Ⅲｆ
	5	徳利	３類	口縁部 ～ 底部	3.9 9.1 4.0	灰釉 口縁部内面 ～底部	灰白色の粗粒子。鉄絵で3枚の葉を2対描く。付高台内側の釉は拭いとる。腰下部に溶着痕。口縁部の５/６欠損。唐津焼16ｃ末～17ｃ初。	11区下石積み
	6	油壺	Ⅱ類	頚部 ～ 底部	－ － 3.8	黒釉 口縁部内面 ～腰下部	黄橙色の微粒子。付高台。内底面に左回転ろくろ痕。	前庭部撹乱
	7		Ⅲ類	頚部 ～ 底部	－ － 4.2	鉄釉 口縁部内面 ～腰下部	灰褐色の細粒子。二次焼成。	前庭部Ⅲｅ
	8	小杯	－	底部	－ － 2.2	褐釉 内底面 ～腰下部？	黄橙色の細粒子。腰下部に波状文。腰下部から下は釉を拭い取る。焼成悪い。	4区Ⅲ
	9	酒注	Ⅰ類	口縁部 ～ 胴部	3.0 － －	飴釉 口縁部内面 ～—	灰白色の微粒子。	11区中石積み内
	10			口縁部 ～ 底部	2.9 6.9 3.7	灰釉・鉄絵 口縁部内面 ～腰下部	緑灰色の細粒子。肩部に4条の圏線を鉄絵で描く。二次焼成。	1～3区上段、前庭部Ⅰ・Ⅱ
	11		不明	注ぎ口	－ － －	灰釉 外面	灰白色の細粒子。やや銀化する。	11区-4内
	12		Ⅰ類	胴部	－ － －	透明釉・白化粧 胴部外面	明黄褐色の細粒子。肩部に線刻により区画を施し、飴釉、呉須を流す。貫入あり。	13区
	13		Ⅱ類	完形	3.1 5.6 7.3	灰釉・鉄絵 口縁部内面 ～腰下部	灰白色の微粒子。肩部に鉄絵で1対の長線を描く。貫入あり。外底面に胎土目痕。二次焼成。	前庭部Ⅲａ
	14	徳利	４類	頚部 ～ 底部	－ － 5.6	灰釉 口縁部内面 ～腰下部	鈍黄橙色の細粒子。付け高台を有する。腰下部に溶着痕。貫入あり。肥前陶器？17ｃ前？	前庭部Ⅲｆ
	15		５類	口縁部 ～ 底部	3.5 11.6 4.4	灰釉 口縁部内面 ～底部	灰白色の細粒子。腰下部下は二次焼成。外底部が磨り減る。貫入あり。口縁部の３/４が欠損。肥前陶器？17ｃ前？	11区下石積み
	16		６類	口縁部 ～ 底部	3.3 13.2 6.1	灰釉？ 口縁部内面 ～胴部	鈍黄橙色の細粒子。腰下部に１条の圏線。外底面に溶着痕。全体の造りは薄い。口縁部の１/４が欠損。沖縄か九州。17ｃ前	前庭部Ⅲｆ



第93図　沖縄産施釉陶器１　碗（１）、小碗（２～４）、皿〔唐津〕（５）、瓶子（６～11）



第94図　沖縄産施釉陶器２　瓶（１～２）、酒瓶（３）、小型瓶〔肥前陶器〕（４）、徳利〔絵唐津〕（５）、油壷（６～７）小杯（８）、酒注（９～13）、徳利〔肥前陶器？(14・15)〕、〔産地不明(16)〕

第19節　沖縄産無釉陶器

いわゆる、アラヤチと呼ばれるもので、ここでは胎土が茶褐色系のものを沖縄産無釉陶器としてあつかった。基本的には施釉しないものであるが、泥釉や、褐釉など施釉された製品も含まれる。

墓域である本遺跡において、壷、甕、深鉢など比較的大きな器種は厨子として転用されたものと思われるが、全形を窺い知れる個体が多く、今後の調査等に活用できるよい資料であるため本節において取り扱うこととした。

器種には、壷、甕、鉢などの大型のものや、瓶子・徳利などの瓶類、油壷、急須、水鉢、火炉などがある。それぞれの器種を器形により下記のとおりに分類及び細分し、個々の特徴については観察表（第24表）に呈示した。ここでは、特徴的なものを図示した。

瓶（第95図１～５）

１類　底部は削り出しによる高台をもち、頚部はストレートに立ち上がり口縁部はやや外反する。器の最大径は腰部にあるもの。口縁内から腰下部まで黒釉を施釉する。（１）

２類　底部は上げ底を呈し、頚部は弧を描きながら口縁部でラッパ状にひらくもの。
（２）と（４）は12号区画の表土より対で検出された資料である。

３類　底部の造りはベタ底であることを除けば、Ⅱ類と同じ形状である。マンガン釉を腰下部以下を残し施釉する。外底面に５条の長沈線の窯印がある。（５）

徳利（第95図６～１１）

Ⅰ類　器の最大径が底部よりのもの。（６，７）はそれぞれ沖縄で「１合マス」、「２合マス」とよばれるもの。底部は平底、上げ底を呈する。

Ⅱ類　器の最大径が胴部中央付近にあるもので、底部は上げ底を呈する。

－a　肩部の張りが弱く、器形がスマートなもの。（８）

－b　肩部の張りが強く、器形がファットなもの。（９，10）
(10) はほかに比べ口縁部の外反がやや弱い。

Ⅲ類　(11) は、器の最大径が肩部にあり、底部から肩部にかけてほぼストレートに立ち上がるもので、口縁の外反は (10) 同様やや弱い。底部は上げ底を呈する。胎土の質・色調が沖縄産無釉陶器に類似しており、成形なども同じことからここに扱った。

瓶子（第96図１，２）

Ⅰ類　胴の最大径が胴部中央にあるもので、（１）はマンガン釉を胴部に流し掛けするもの。高台は低いタイプである。

Ⅱ類　胴の最大径が胴下位にあるもので、（２）は高台脇まで褐釉を施釉する。高台は低いタイプである。

油壷（第96図３～１１）

Ⅰ類　器の最大径が胴上位にあり、明瞭な肩部をつくるもので、断面は台形状を呈す。

－a　底部が平底のもの（３，４）
（４）は黄白色の釉が口縁部内面から胴上位に施され、頚部の形からさらに細分可能と思われる。外底面に格子状の窯印がある。

－b　底部が付け高台をもつもの（５）

Ⅱ類　器の最大径が胴部中央にあり、断面は円形状のもの。

－a　底部が高台をもつもの（６）

－b　高台をもつが、高台内の断面が三日月状のもの（７，８）

Ⅲ類　器の最大径が胴部中央または胴下位にあり、断面が楕円形状のもの。

－a　底部が高台をもつもの（９，10）

－b　高台をもつが、高台内の刳りが浅く、断面が三日月状のもの (11)

急須（第97図１，２）

（１）は胴径に対して底径が１/３程度のもので尻つぼみの器形である。その形状や大きさから火炉に対応する土瓶である可能性も高い。煤、被熱痕が観察されなかったため、ここでは急須として扱った。

（２）は口縁部内面に突帯をめぐらせ蓋受け部をつくるもの。『湧田古窯跡』（Ⅳ）で「く」の字状蓋受け部として分類しているもの。

火炉（第97図３）

胴上位で折れ曲がり肩部に稜をつくるもので、方形の把手を１対貼り付ける。口縁部は３ヶ所の火窓を設けるため、３つの山形状口縁を呈する。底部には３つの円錐状の脚を有する。肩部に１条の圏線を配し、口縁部外面から胴下位に泥釉を施釉する。

水鉢（第97図４～６）

第Ⅰ類　口縁部を折り曲げて折縁状にするもの。

（４）は胴部上端に波状沈線を施すもので『壺屋古窯群』（Ⅰ）の第Ⅰ類bにあたるもの。

（５）は胴部上端に２条の圏線を施すもの。外底面に「〆」の字状の窯印。

第Ⅱ類　口縁部をほぼ垂直に立ち上げるもの。

（６）は胴部上端に１条の圏線を施し、口縁部外面から胴下位まで泥釉を施釉する。内底面に「×」、肩部に「十」の窯印がある。

鉢（第98図１）

口縁部下位に２条の圏線を有し、口唇部に珊瑚積み目があるもの。口唇部の内・外周部を削り、凸形の断面形を呈す。

壷（第98図２～第99図４）

Ⅰ類　いわゆる四耳壷

Ⅱ類　三耳壷

Ⅲ類　耳をもたないもの

Ⅳ類　ボタン状貼付け（墓番号－５，第129図５）

器の最大径の位置や、口縁部の形状から下記のとおり細分した。

－ａ　肩部の張りが強いもの

－ｂ　肩部の張りが弱いもの

－ｃ　胴部に張りがあるもの

－ぁ　口縁部がやや肥厚するもの

－ぃ　口縁部を折り曲げて肥厚させるもの

－ぅ　玉縁口縁を有するもの

－ぇ　口縁を直角に折り曲げるもので、断面の形状が四角形のもの

甕（第99図５～10）

Ⅰ類　二重口縁を有するもので、肩部にスタンプによる花文を配するもの。（５）

Ⅱ類　口縁内部に突帯を廻らせ蓋受け部を有するもので、肩部に圏線と箆による縄目文を配するもの。（６）

Ⅲ類　口縁部の断面の形状が四角形のもの肩部に圏線と箆による縄目文を配するもの。（７，８）

Ⅳ類　無頸のため口縁部の断面の形状が三角形のもので、（９）は指頭による縄目文の貼り付け、（10）は箆による縄目文の貼り付けである。

擂鉢（第56図１）

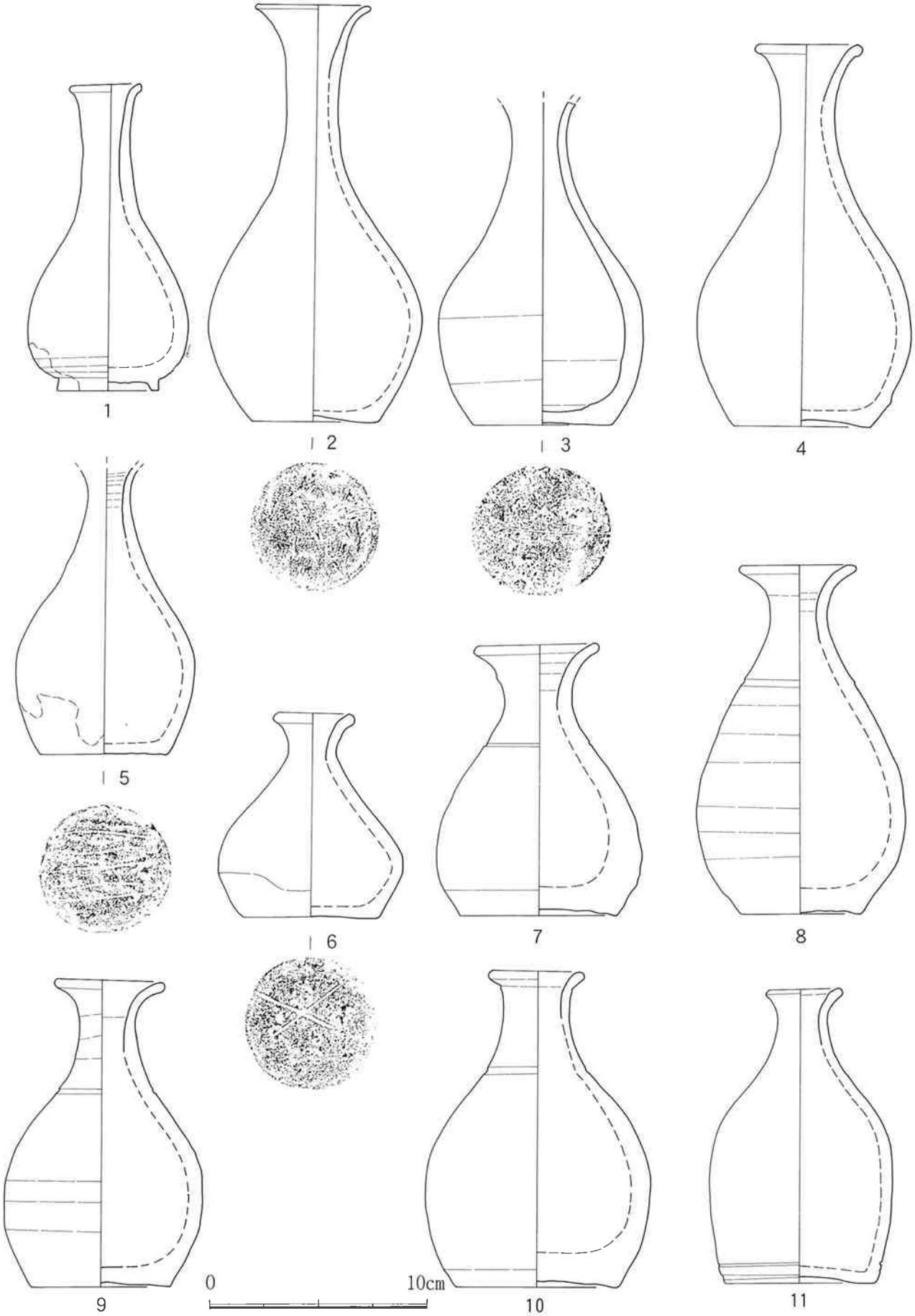
口縁部の下位に1条の突帯を巡らし、小さな平底の底部を有する。８条ほどの擂目を１つの単位とし、各単位

第24表ａ　沖縄産無釉陶器観察一覧

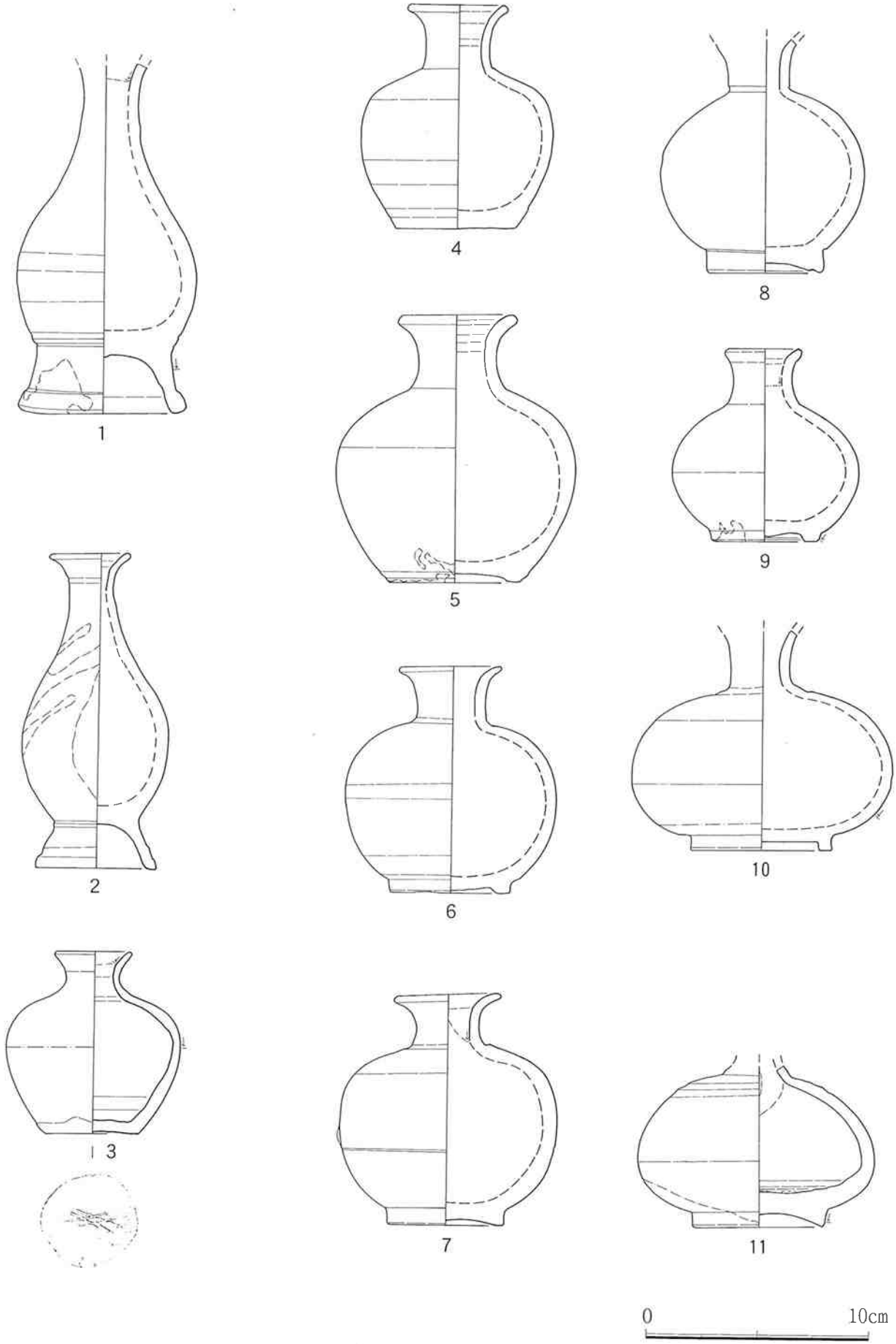
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	素地 器色（外面） 器色（内面）	調整・文様などの特徴	出土地
第95図 図版51	1	瓶	1類	口縁部 ～ 底部	3.3 14.1 4.7	赤色 暗赤灰色 赤褐色	素地に微量の細砂が混入。口縁内面から腰下部に黒釉。全体に灰かぶり。口縁内面に銀化。口縁部1/3欠損。	前庭部Ⅲd
	2		2類	口縁部 ～ 底部	5.4 19.2 5.9	極暗赤褐色 褐灰色 褐灰色	素地に微量のマンガン粒が混入。全体に自然釉。口縁部1/3欠損。外底面に「×」の窯印。器壁は薄いつくり。	12区Ⅰ
	3			頚部 ～ 底部	－ － 6.4	極暗赤褐色 明赤褐色 暗赤褐色	素地に砂粒が混入。外底面に「—」の窯印。	前庭部Ⅱ
	4			完形	5.0 17.6 6.4	— 褐灰色 赤色	素地に砂粒・マンガン粒が混入。胴下位から外底面に石灰分が付着。器壁は薄いつくり。	12区Ⅰ
	5		3類	頚部 ～ 底部	－ － 5.8	極暗赤褐色 明赤褐色 暗赤褐色	素地に石英粒・細砂が混入。口縁内面から腰下部にマンガン釉。	前庭部Ⅲd
	6	徳利	Ⅰ類	完形	3.8 9.5 6.2	— 灰褐色 灰褐色	素地に砂粒が混入。外底面に「×」の窯印。器壁は薄いつくり。	前庭部Ⅲf
	7			完形	5.7 12.6 7.2	— 明赤褐色 赤色	素地に砂粒・マンガン粒が混入。肩部に1条の圏線。	前庭部Ⅲb
	8		Ⅱ類-a	口縁部 ～ 底部	5.4 16.1 5.5	赤褐色 赤色 赤色	素地に微量の細砂が混入。肩部に1条の圏線。外底面に細砂が付着。口縁部2/3欠損。	前庭部Ⅲb
	9		Ⅱ類-b	完形	5.1 14.2 6.4	— 暗赤褐色 鈍赤褐色	素地に砂粒・マンガン粒が混入。肩部に1条の圏線。	前庭部Ⅲb
	10			口縁部 ～ 底部	4.4 14.6 7.4	暗赤色 赤褐色 鈍赤褐色	素地にマンガン粒・わずかに石英粒が混入。肩部に1条の圏線。口縁部の1/3欠損。	前庭部Ⅲb
	11		Ⅲ類	完形	3.5 13.6 6.8	灰赤色 暗赤灰色 暗青灰色	素地に細砂・マンガン粒が混入。底部に2条の圏線。器壁は薄いつくり。	12区Ⅲa
第96図 図版52	1	瓶子	Ⅰ類	頚部 ～ 底部	－ － 7.3	鈍赤褐色 赤褐色 暗褐色	素地に多量の細砂が混入。口縁内面から高台部まで褐釉。畳付けに胎土目痕。貫入あり。	12区Ⅲa
	2		Ⅱ類	口縁部 ～ 底部	3.7 14.3 5.4	赤褐色 赤色 暗赤色	素地に微細な砂粒・マンガン粒がわずかに混入。砂混じりの鉄釉を流し掛ける。口縁部の1/8欠損。	11区下Ⅰ、前庭部Ⅲa'
	3	汕壺	Ⅰ類-a	口縁部 ～ 底部	3.6 8.3 4.2	鈍赤褐色 暗赤褐色 暗赤灰色	素地は砂粒が微量混入。内底面に左回転の轆轤痕。口縁内面から胴上位に黄白色の釉。口縁部の2/3欠損。	前庭部Ⅲf・Ⅲo
	4			口縁部 ～ 底部	4.6 10.2 5.4	極暗赤褐色 黒褐色 黒褐色	素地は微細な砂粒がわずかに混入。口縁部の1/2欠損。	前庭部Ⅲe・Ⅲf
	5		Ⅰ類-b	口縁部 ～ 底部	5.5 12.1 6.0	暗赤褐色 赤色 赤色	素地は砂粒が混入。口縁内面から高台脇まで鉄釉がけ。腰下部に1条の圏線。口縁部の1/4欠損。	前庭部撹乱
	6		Ⅱ類-a	口縁部 ～ 底部	4.7 10.3 5.3	赤色 明赤褐色 橙色	素地にマンガン粒混入。口縁内面から腰下部の一部に自然釉。口縁部の4カ所が約1/10ずつ欠損（手平状）。	前庭部撹乱
	7		Ⅱ類-b	口縁部 ～ 底部	4.9 10.4 5.3	赤褐色 暗赤褐色 暗赤褐色	素地にマンガン粒混入。口縁部内面から腰下部に褐釉。肩部に灰かぶり。胴部に溶着痕。口縁部の1/4欠損。	前庭部Ⅲc
	8			頚部 ～ 底部	－ － 5.1	暗赤色 黒褐色 鈍赤色	素地に微量の砂粒混入。高台内に1条の圏線。全体的に自然釉がかかる。	前庭部Ⅲ礫内
	9		Ⅲ類-a	口縁部 ～ 底部	3.6 8.8 4.6	暗赤褐色 暗赤褐色 鈍赤色	素地に微量の細砂混入。口縁内面から高台外面まで砂混じりの鉄釉。口縁部の1/5が欠損。	前庭部Ⅲd
	10			頚部 ～ 底部	－ － 6.2	暗赤色 暗褐色 黒褐色	素地に細砂が混入。口縁内面から腰下部まで黒釉。肩部に2条の圏線。	前庭部Ⅲd
	11		Ⅲ類-b	胴部 ～ 底部	－ － 5.7	暗赤褐色 黒褐色 暗褐色	素地に細砂・マンガン粒が混入。口縁内面から腰下部まで褐釉。高台内に溶着痕。	前庭部Ⅲ
第97図 図版52	1	急須	—	胴部 ～ 底部	－ － 4.1	鈍橙褐色 鈍橙褐色 橙褐色	素地に微量の細砂が混入する。内底面に明瞭な左回転ろくろ痕。	1～3区Ⅰ、前庭部Ⅲ
	2			蓋受部 ～ 胴部	7.0 － －	橙褐色 鈍橙褐色 橙褐色	素地にマンガン粒と微量の石灰粒が混入する。	1～3区

第24表ｂ　沖縄産無釉陶器観察一覧

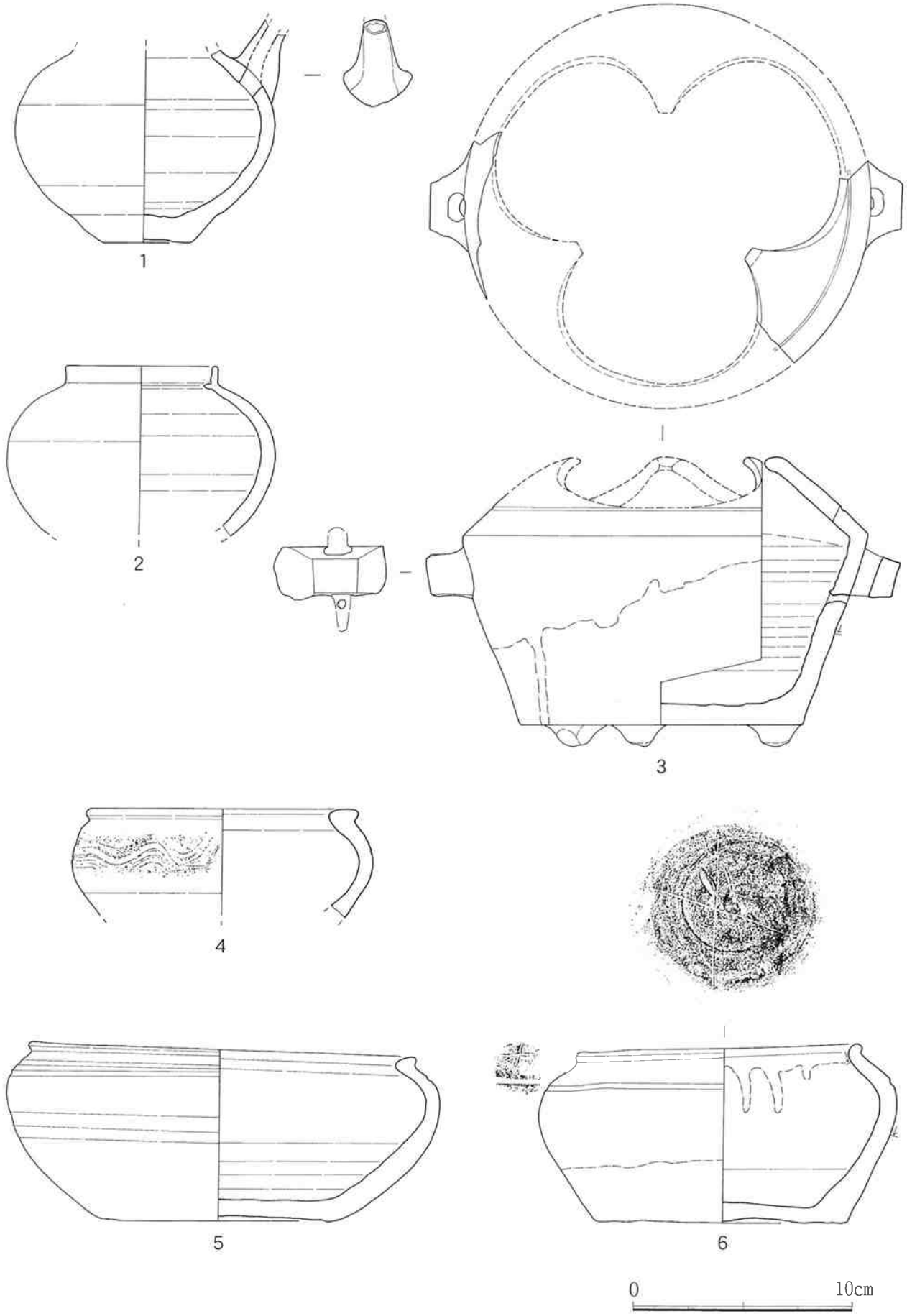
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	素地 器色（外面） 器色（内面）	調整・文様などの特徴	出土地
第97図 図版52	3	火炉	Ⅰ類	口縁部 ～ 底部	8.2 13.3 13.0	暗赤色 赤褐色 鈍赤色	素地に粗石英粒と細砂が混入。内底面に左回転轆轤痕。口縁部内面から胴部に泥釉を塗布。肩部に１条の圏線	前庭部Ⅲａ'・Ⅲｆ
	4	水鉢	Ⅰ類	口縁部 ～ 胴部	13.1 － －	赤褐色 暗褐色 黒褐色	素地に微量のマンガン粒が混入。全体にマンガン釉を掛ける。肩部に刷毛目文。	前庭部Ⅲｂ
	5			完形	17.8 8.2 10.6	赤褐色 黒褐色 赤色	素地にマンガン粒と微量の石灰粒が混入する。肩部に１条の圏線。内面に左回転のろくろ痕。底部にトチン痕。	前庭部Ⅲｆ
	6		Ⅱ類	完形	13.1 8.3 11.5	暗赤色 暗緑灰色 赤灰色	素地に石英粒・細砂・黒色鉱物が混入。黒褐色の釉を塗布。肩部に１条の圏線。	前庭部Ⅲｄ
第98図 図版53	1	鉢	－	口縁部 ～ 底部	37.2 23.0 16.2	褐色 明褐色 黒褐色	素地に砂が少量混入。口唇部に７ヶ所の珊瑚積み目痕。口唇部に２条、胴上位に２条の圏線。	13区-6
	2	壺	Ⅰ類-a-あ	口縁部 ～ 底部	22.3 69.0 24.3	極暗赤褐色 暗赤褐色 暗赤褐色	素地に**微量の細砂が混入**。口縁部に溶着痕。肩部に２**条の圏線。耳の**貼付面は楕円形。窯印「**大山**」**のスタンプ**。	2区-36・44、2区、前庭部Ⅲｊ
	3			口縁部 ～ 底部	20.5 70.8 22.8	極暗赤褐色 暗赤褐色 黒褐色	口縁内面に珊瑚積み目痕。肩部に２条の圏線。耳の貼付面は蝶形。底部に溶着痕。窯印「二」。	10区石積み内、11区-4、前庭部Ⅰ・Ⅲｂ
	4		Ⅱ類-a-あ	口縁部 ～ 底部	13.0 36.3 13.3	暗赤褐色 暗赤褐色 暗赤褐色	肩部と腰下部にそれぞれ１条の圏線。耳の貼付面は楕円形。内面胴部～外面胴下位まで極暗赤褐色の釉。	3区-13
	5		Ⅱ類-a-不明	胴部 ～ 底部	－ － 15.1	暗赤灰色 暗赤褐色 暗緑灰色	素地にマンガン粒・砂粒・白色のラインが混入。肩部に１条の圏線。耳の貼付面は楕円形。腰下部に明瞭な削。	10区下、10区石積み内、前庭部Ⅲｂ
	6		Ⅱ類-a-あ	口縁部 ～ 底部	12.5 44.5 15.6	明褐色 橙色 黒褐色	素地に砂粒混入。肩部に２条の圏線。耳の貼付面は蝶形。窯印「大」。	前庭部Ⅲｂ
	7		Ⅱ類-b-い	口縁部 ～ 底部	15.3 49.6 16.0	暗赤色 暗赤色 オリーブ褐色	素地に砂粒混入。肩部に浅い２条の圏線。耳の貼付面は蝶形。窯印は団子を串刺しにしたような形。	11区-16、前庭部Ⅲｆ・Ⅲｊ
	8			口縁部 ～ 底部	17.3 59.4 20.7	赤褐色 黒褐色 暗赤褐色	素地に砂粒混入。口唇部に珊瑚積み痕。肩部に２条の圏線。耳の貼付面は楕円形。窯印は○に一文字。	11区下石積み内、前庭部Ⅲａ'・Ⅲｆ・Ⅲｈ
	9			口縁部 ～ 胴部	18.0 － －	赤褐色 極暗赤褐色 赤色	素地に砂粒混入。口唇部に珊瑚積み痕。肩部に２条の圏線。耳の貼付面は蝶形？窯印『七』のスタンプ。	11区-31
	10		Ⅱ類-b-う	口縁部 ～ 胴部	17.0 － －	明褐色 橙色 橙色	素地に砂粒・石英粒が混入。口唇部に胎土目痕？。耳の貼付面は楕円形。窯印は「八」。	11区下石積み内、前庭部Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｄ・Ⅲｆ
第99図 図版54	1		Ⅱ類-c-う	口縁部 ～ 胴部	15.5 － －	暗赤褐色 暗赤褐色 明赤褐色	素地にマンガン粒が混入。肩部に２条の圏線。耳の貼付面は蝶形。窯印は山形に八と一の文字。	12区-20、前庭部Ⅰ・Ⅱ
	2		Ⅲ類-b-え	口縁部 ～ 胴部	13.7 － －	極暗赤褐色 極暗赤褐色 赤色	素地にマンガン粒が混入。頚部下に渦巻文。胴部に溶着痕。	9区散乱10・12・27、10区散乱26、前庭部Ⅱ
	3		Ⅲ類-a-え	口縁部 ～ 底部	23.0 74.3 22.0	暗青灰褐色 黒褐色 暗赤褐色	素地に石英粒混入。口唇部に胎土目痕？肩部に縄目文。窯印「３」のような文字。	11区下石積み内、前庭部Ⅲｆ・Ⅲｈ・Ⅲｎ
	4		Ⅲ類-c-不明	胴部 ～ 底部	－ － 11.9	赤褐色 暗赤褐色 鈍赤褐色	素地に砂粒、マンガン粒混入。頚部下に１条の圏線。器壁は薄い。腰下部に溶着痕。	前庭部Ⅲａ・Ⅲａ'・Ⅲｈ
	5	甕	Ⅰ類	口縁部 ～ 底部	17.1 30.9 16.2	極暗褐色 暗赤褐色 黒褐色	肩部を肥厚させ、二重口縁を有する。口縁内面に突帯文を貼付け蓋受部を造る。肩部に花文(スタンプ)が巡る。	2区-45
	6		Ⅱ類	口縁部 ～ 底部	15.9 30.0 16.2	極暗赤褐色 極暗赤褐色 黒褐色	肩部に１条の圏線と縄目文。口縁内面に蓋受部あり。胴部に焼成前に無数のキズ。窯印「十」。	3区-14、北側斜面
	7		Ⅲ類	口縁部 ～ 底部	16.9 34.4 13.4	極暗赤褐色 極暗赤褐色 黒褐色	素地は石英粒がやや混入。泥釉を施釉。内面の一部に釉だれ。肩部に１条の圏線と縄目文。窯印は「三」。	前庭部Ⅲｄ・Ⅲｆ・Ⅲｈ・ⅢI
	8			完形	19.6 34.0 14.8	明赤褐色 暗褐色 鈍橙色	素地は石英粒・白色のラインが混入。肩部に２条の圏線と縄目文。口縁部は内側にもやや肥厚する。窯印は「三」。	8区-13
	9		Ⅳ類	口縁部 ～ 底部	21.3 34.0 15.1	暗赤褐色 鈍赤褐色 オリーブ褐色	肩部の縄目文は指頭によるもの。胴部に竹と雑な３重の円を描く。胴部内面から底部まで泥釉。	前庭部Ⅲｊ・Ⅲｌ・Ⅲｍ・Ⅲｎ
	10			口縁部 ～ 底部	28.5 43.7 21.1	極暗赤褐色 極暗褐色 暗赤褐色	素地に微量の細砂混入。肩部に縄目文。口唇部は外周に向かい、やや反りあがる。	10区石積み内、10区散乱7、前庭部Ⅲｂ



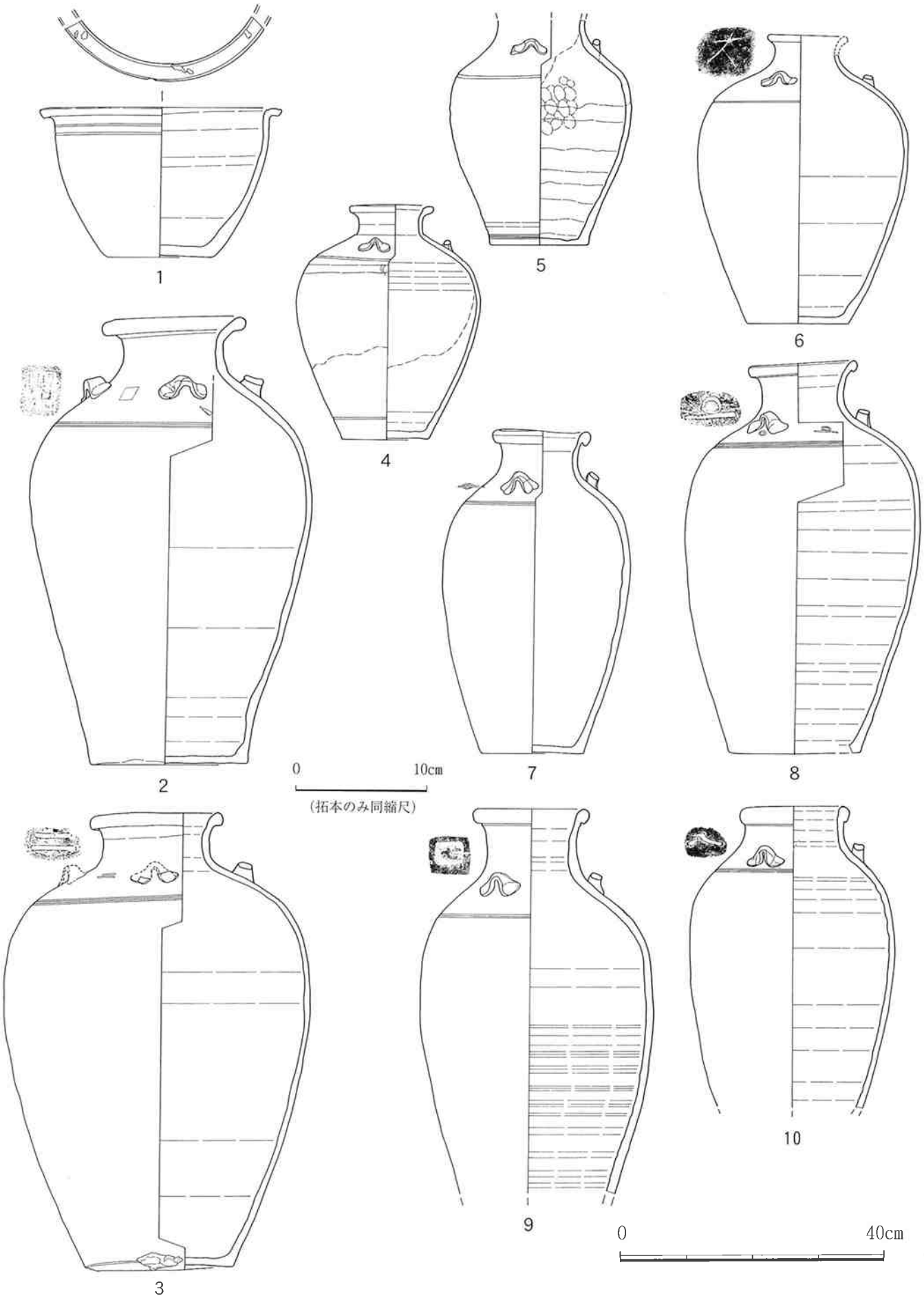
第95図　沖縄産無釉陶器１　瓶（１～５）、徳利（６～11）



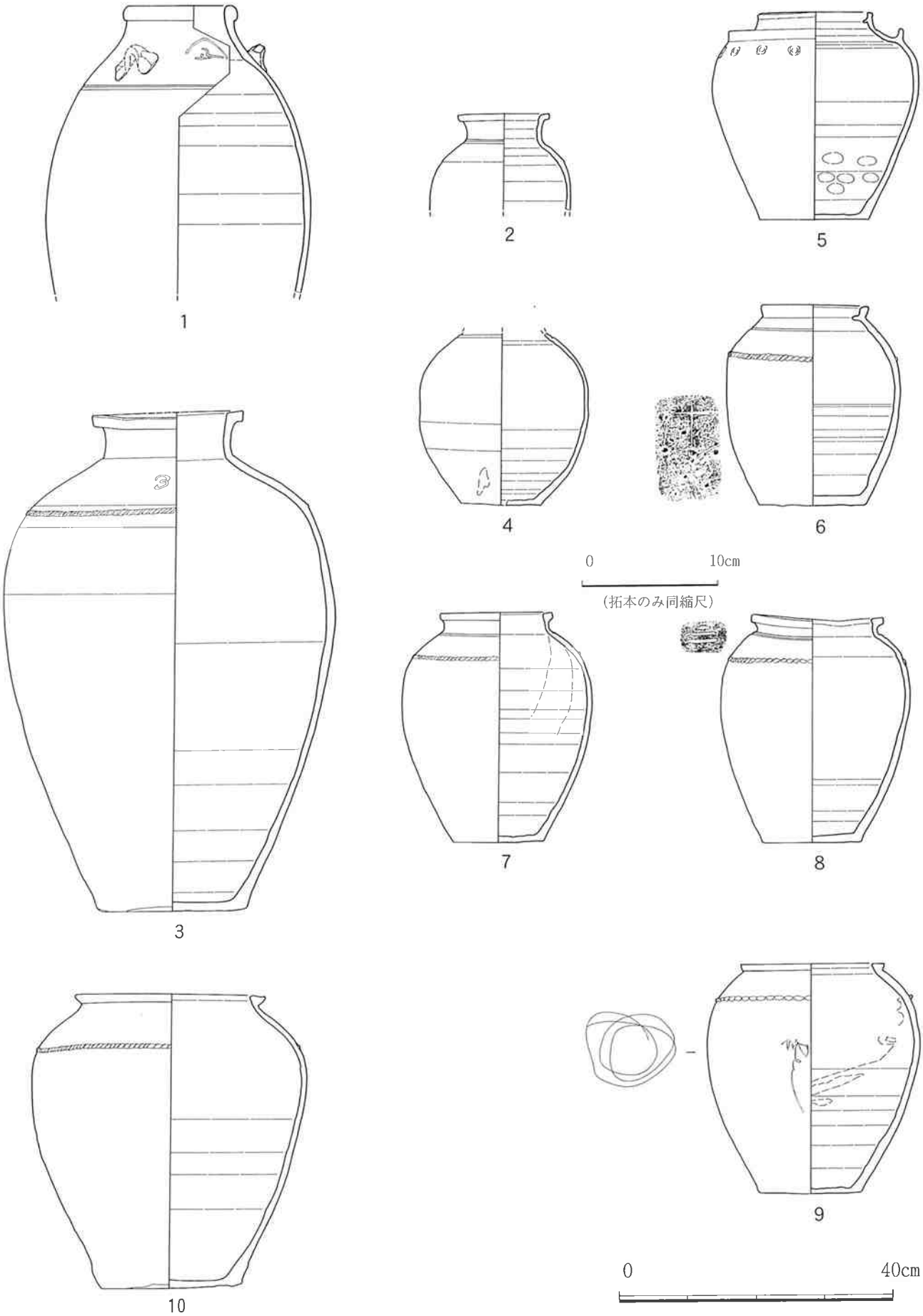
第96図　沖縄産無釉陶器２　瓶子（１～２）、油壷（３～11）



第97図　沖縄産無釉陶器３　急須（１～２）、火炉（３）、水鉢（４～６）



第98図　沖縄産無釉陶器４　鉢(１)、壷(２～10)



第99図　沖縄産無釉陶器５　壷(１～４)、甕(５～10)

第20節　瓦

瓦の細片が３点得られた。表土からの出土であるため近現代の混入と思われる。図などは省略する。

第21節　煙管

煙管は50点得られた。大半は地中からの出土で、若干ながら厨子内からの採集がある。材質は石製・陶製・青銅製があり、青銅製が８割を占める。第100図１～10が雁首、同図11～16が吸口である。後者がやや多い。

同図１～３は石製の雁首である。１・２は火皿のみで、３は首が伸びている。１は筒形に整えられ、外面にはススが付着する。　同図４・５は陶製の雁首である。火皿の上面観は、４は八角形、５は円形である。同図６～10青銅製の雁首である。６は首の短いタイプで、７～10は長いタイプである。９は首が長く立つ。うち、７は羅宇の接続部に何も着かないタイプ、８はリング状の金属環が１つ、９・10は２つ着くタイプである。

同図11～15は青銅製の吸口である。11は内部に竹と思われる羅宇が残っている。11・13は吸口がストレートであるが、12は丸みを帯びるもの、14はラッパ状に開くものである。15は吸口と思われるが、吸口の先端にさらに延長部をつけたと思われる。同図16は陶製（施釉）の吸口である。

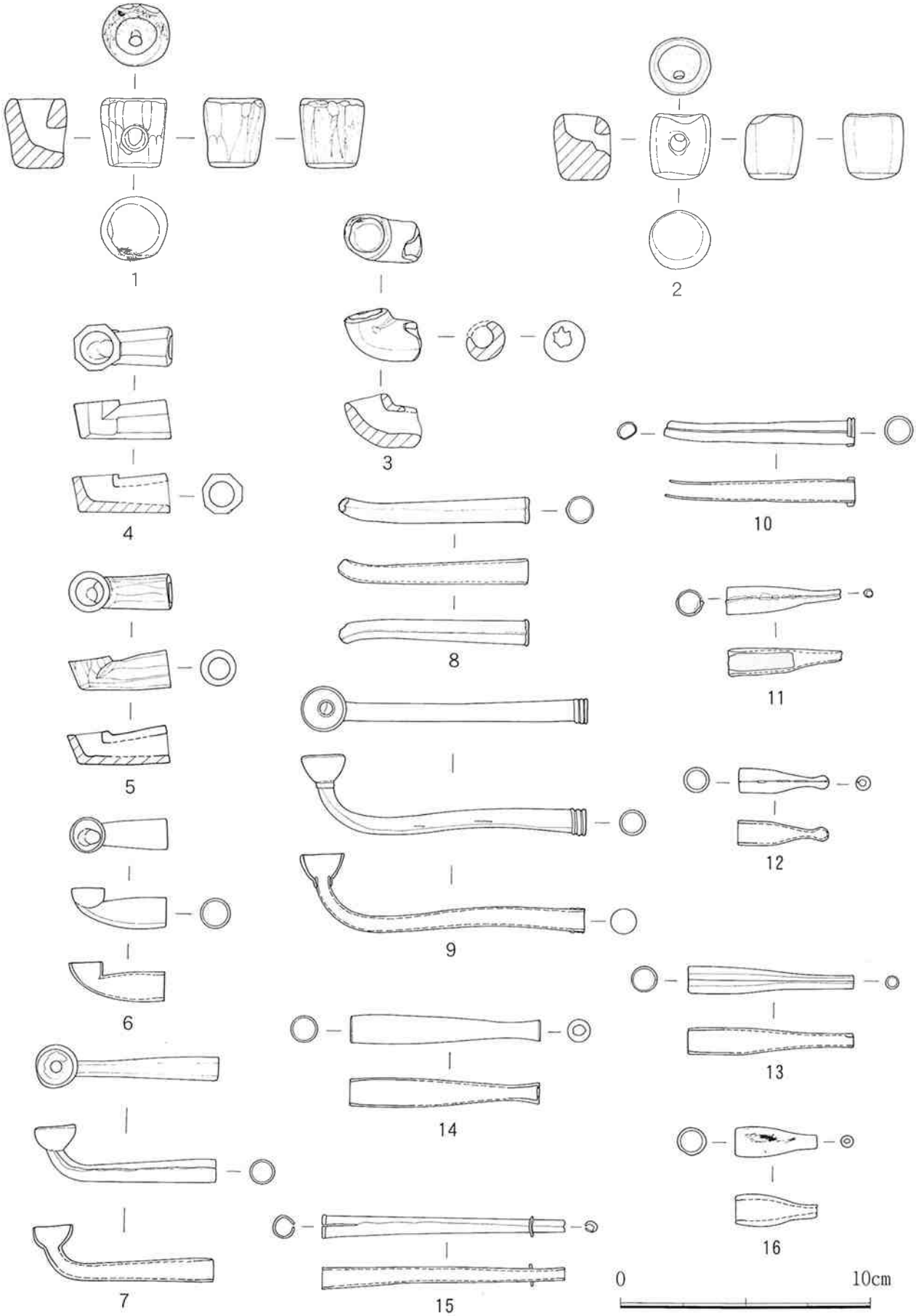
第25表　煙管計測表

材質	部位	火皿径／吸口径（cm）	接続部径（cm）	長さ（cm）	重量（g）	出土地
石製	雁首	外2.3　内1.3	0.7	高さ2.6	15.6	11区下石積み
		外2.3　内1.5	0.7	高さ2.3	18.0	11区中
陶製	雁首	丸1.7	1.5	3.9	8.1	12区Ⅰ～Ⅱ
		丸1.8	1.5	4.4	9.6	洞内表採
		八角1.7	1.4	3.2	8.5	10区上Ⅱ
		八角1.8	1.5	3.7	8.5	1区Ⅲｆ礫上
		八角1.8	－	3.9	6.6	12区Ⅲａ
		八角－	1.4	－	8.3	前庭部Ⅲｆ
青銅製	雁首	1.2	1.2	3.5	5.3	2区
		1.3	－	－	8.4	前庭部Ⅱ
		1.4	1.0	3.8	6.9	11区下石積み
		1.4	1.2	4.4	8.5	前庭部Ⅲ
		1.5	0.9	4.6	4.4	12区Ⅰ～Ⅱ
		1.5	－	－	1.2	11区下Ⅰ
		1.6	0.9	6.7	11.6	2区-4内
		1.6	0.9	6.9	6.9	12区Ⅰ～Ⅱ
		1.6	1.0	6.7	9.8	11区上
		1.6	1.0	7.5	11.0	前庭部Ⅲ
		1.6	－	－	8.0	12区Ⅲｅ
		1.7	0.9	7.6	10.0	11区下石積み
		1.7	1.0	6.3	9.3	9区散乱32
		1.7	1.0	6.4	9.4	前庭部Ⅱ
		1.7	1.0	6.4	10.8	前庭部Ⅲｂ
		1.8	－	－	3.8	前庭部Ⅱ
		－	1.0	－	6.2	前庭部Ⅱ

材質	部位	火皿径／吸口径（cm）	接続部径（cm）	長さ（cm）	重量（g）	出土地
青銅製	雁首	－	1.1	－	5.5	11区下石積み
		－	1.2	－	4.3	前庭部Ⅲｄ
		－	1.2	－	6.1	10区上Ⅵｄ
		－	1.3	－	6.6	12区Ⅰ～Ⅱ
	吸口	0.4	0.8	4.9	3.8	12区Ⅲａ
		0.4	1.0	4.8	5.5	12区Ⅲａ
		0.4	1.0	6.2	4.9	12区Ⅰ～Ⅱ
		0.4	1.1	4.0	6.3	前庭部撹乱
		0.4	1.1	7.1	9.3	前庭部Ⅱ
		0.4	1.2	6.4	6.2	前庭部Ⅲｄ
		0.5	9.4	6.8	6.0	12区Ⅰ～Ⅱ
		0.5	1.0	6.0	5.0	12区Ⅰ～Ⅱ
		0.5	1.1	3.6	3.8	12区Ⅲａ
		0.5	1.1	5.3	6.9	2区
		0.5	1.2	3.9	4.3	前庭部Ⅲｆ
		0.5	－	－	1.5	前庭部撹乱
		0.6	0.9	3.7	3.3	11区上
		0.6	1.1	4.5	(5.2)	11区下石積み
		0.6	1.1	5.1	6.2	10区-10内
		0.7	1.0	5.7	9.1	前庭部Ⅲａ
		－	1.0	－	2.8	前庭部Ⅱ
		－	1.2	－	1.1	前庭部Ⅰ
	不明	－	0.9	－	3.3	前庭部Ⅲｂ
		－	1.0	－	3.4	前庭部Ⅲｄ
		－	1.0	－	4.1	前庭部撹乱

第22節　後期土器

細片のみで全形をうかがうことのできる資料はない。第101図１は尖底の底面を押しつぶして平坦にしている。砂泥質の胎土で、ガラス質鉱物を含む。器面が粗れているため調整は不明。胎土などの特徴からみて大当原式土器（岸本・ほか2000）に属するものと思われる。前庭部（入口側）第Ⅲｑ層出土。



第100図　煙管

第23節　玉

玉は６点得られた。第101図２～４は球状、５は紡錘状、６・７は螺旋状で、いずれもガラス製である。同図２は８号区画９内より検出、直径９㎜、孔径３㎜、重さ0.7ｇ。同図４はいびつな形で１号区画９内より検出、直径10㎜、孔径３㎜、重さ0.8ｇ。同図３は11号区画上段より出土、直径４㎜、孔径１㎜、重さは計測不可。同図５は螺旋状の溝が周囲を巡り、やや濁った透明である。前庭部の石灰岩崩落部から出土。長軸22㎜、短軸９㎜、孔径３㎜、重さ2.1ｇ。同図６・７はいずれも９号区画12内より検出。６は残存長12㎜、幅６㎜、孔径２㎜、重さ0.5ｇ。７は残存長32㎜、幅5.㎜、孔径２㎜、重さ10ｇ。

第24節　釘

鉄釘は８点得られた。全て前庭部の出土である。8点とも断面は方形をしており、サイズも殆どが3～5cmに収まる。前庭部からは木材の焼けた痕が確認されている。

類例としては浦添ようどれ（浦添市教委2000）の発掘調査で得られた鉄釘・銅釘は木製厨子のものと考えられている。また、今帰仁村百按司墓から採集された木製厨子には銅釘が利用されている（注）。以上のことから、前庭部出土の鉄釘も同じ様な性格のものと思われる。

第101図８～15に示し、個々の詳細は観察一覧（第26表）に記載する。断面の横を幅、縦を厚みとした。

（注）今帰仁村教育委員会、宮城弘樹氏のご厚意により実見して確認。

第26表　釘観察一覧

挿図図版	番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	完破	観察事項	出土地
第101図図版56	8	3.7	0.6	0.6	3.0	破	頭部はＬ字状を呈し、身は緩く屈曲する。頭部は約0.6cm角の方形で、身断面も方形をなす。全体に錆が入り、欠失する先端付近で地金が確認できる。	前庭部炭層
	9	3.5	0.7	0.45	1.9	完	頭部はＬ字状を呈し、身は緩く屈曲する。頭部は約0.6cm角の方形で、身断面も方形をなす。全体的に錆が著しく、一部に剥離も見られる。	前庭部Ⅲ
	10	3.95	0.55	0.5	3.4	完	頭部は緩く曲がり頭部と先端部には錆膨れと剥離が見られる。身断面は方形をなす。身の中央は比較的錆による膨れはないが縦に4～5本のヒビが走る。	前庭部Ⅲａ
	11	4.2	0.6	0.6	3.1	破	頭部は欠失し、身は正面へ向け緩く屈曲する。身は方形をなす。錆が付着し、一部膨れている箇所も見られ、縦に数本のヒビも走る。	前庭部Ⅲａ
	12	4.7	0.85	0.63	5.2	破	頭部はＬ字状を呈していたと思われるが判然としない。錆が著しく、錆膨れや剥離なども見られ、縦横に数本のヒビが走る。	前庭部Ⅲａ
	13	5.0	0.5	0.5	4.1	破	頭部はＬ字状を呈していたと思われるが欠失するため判然としない。身断面は方形をなす。全体的に錆が著しく、錆膨れも見られる。	前庭部Ⅲｈ
	14	4.75	0.5	0.5	2.4	破	頭部は欠失する。身はほぼ正方形をなし、先端付近で長方形になる。断面で見ると正面が僅かに膨らんでいる。全体的に細身の感がある。錆は入るが、状態は良い。	前庭部Ⅲｋ
	15	2.85	0.5	0.5	1.3	破	頭部と先端部が欠失する。頭部の基部で逆“く”の字状になっているのが確認できる。身はほぼ同一の太さで正方形を呈し、正面が僅かに膨らむ。全体的に細身の感がある。錆は入るが、状態は比較的良い。	前庭部Ⅲｅ

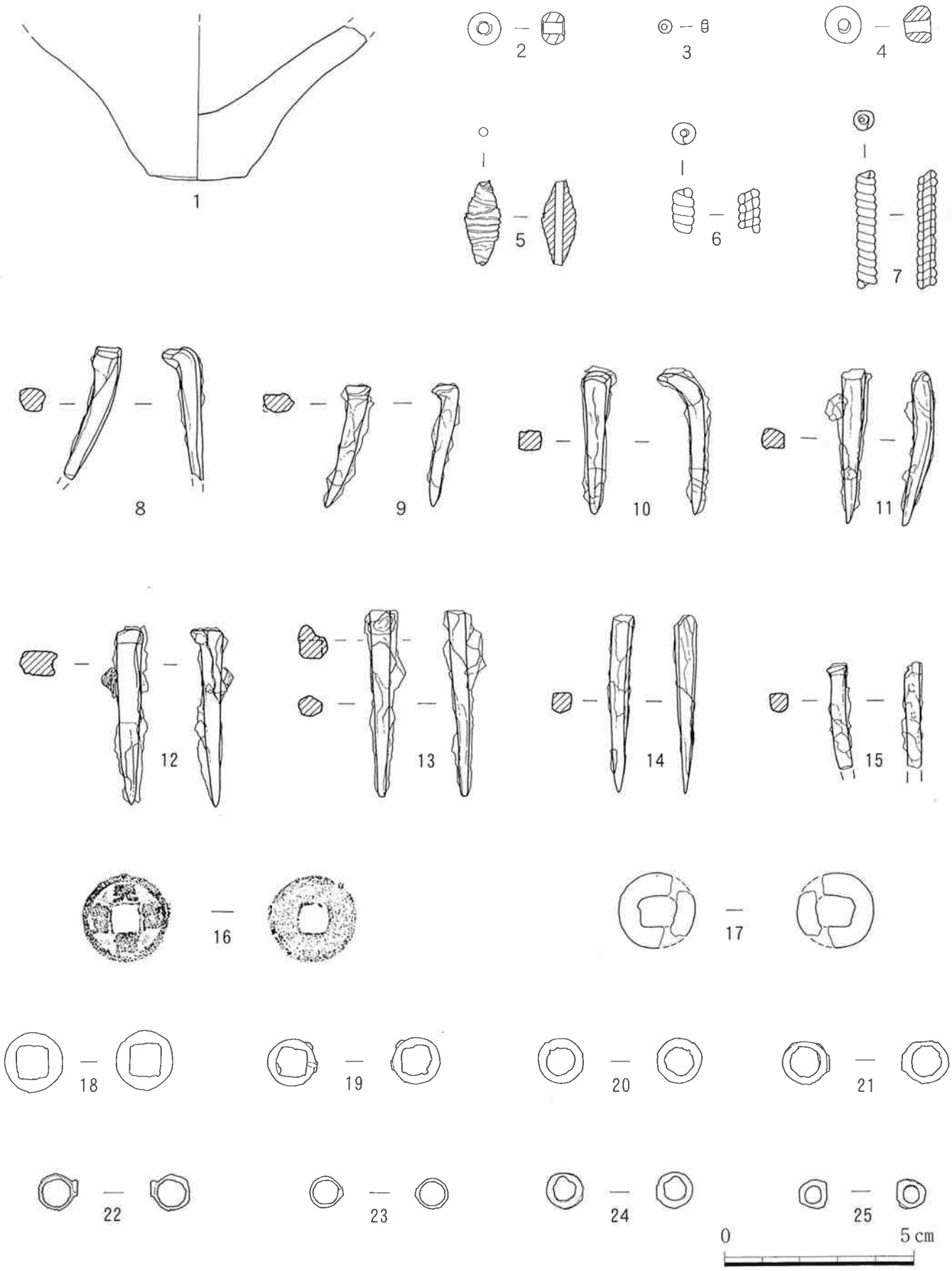
第25節　銭貨

銭貨は433点得られ、431点は11号区画下段の北側から一括で得られた輪銭である。

第101図16は不詳の銭貨である。銘は「天□□寶」（天聖元宝か）。表裏とも摩滅しており保存状態は不良。10号区画28内より検出。外径2.4cm、孔径0.7cm、重さ2.6ｇ。

同図17は無文銭で８号区画９内から検出。保存状態は不良、破損品。外径2.0cm、孔径0.8cm、残存重さ0.5ｇ。

輪銭は同図18～25である。総数431点で、11号区画下段Ⅱ層から一括出土した。１類（同図18・19）：外径１cm以上で孔が四角、２類（同図20・21）：外径１cm以上で孔が丸、３類（同図22・23）：外径が１cm未満で孔が丸（外径と孔の比率が近い）、４類（同図24・25）：外径が１cm未満で孔が丸（孔の比率が小さい）の４つのタイプに分けられる。また、バリがつくものとつかないものがある。各タイプの割合は１類が48点、２類が60点、３類が241点、４類が82点である。３類が約５割を占め主体となる。また、重さは、１類が1.3ｇ、２類が1.1ｇ、３・４類とも0.9ｇが多い。多くは0.8～1.4ｇ内に収まる。



第101図　後期土器(1)、玉(2～7)、釘(8～15)、銭貨(16～25)

第26節　簪

簪は12点得られ、前庭部８点、厨子内３点、２区石積み内１点の出土となっている。花形の簪が破片も含め９点と多い。12点中、状態の良い資料９点を図に示した。形態により花形・耳かき形・匙形の３つに分類できる。いずれも青銅製と思われる。

第102図１～９に示し、個々の詳細は観察一覧（第27表）に記載する。

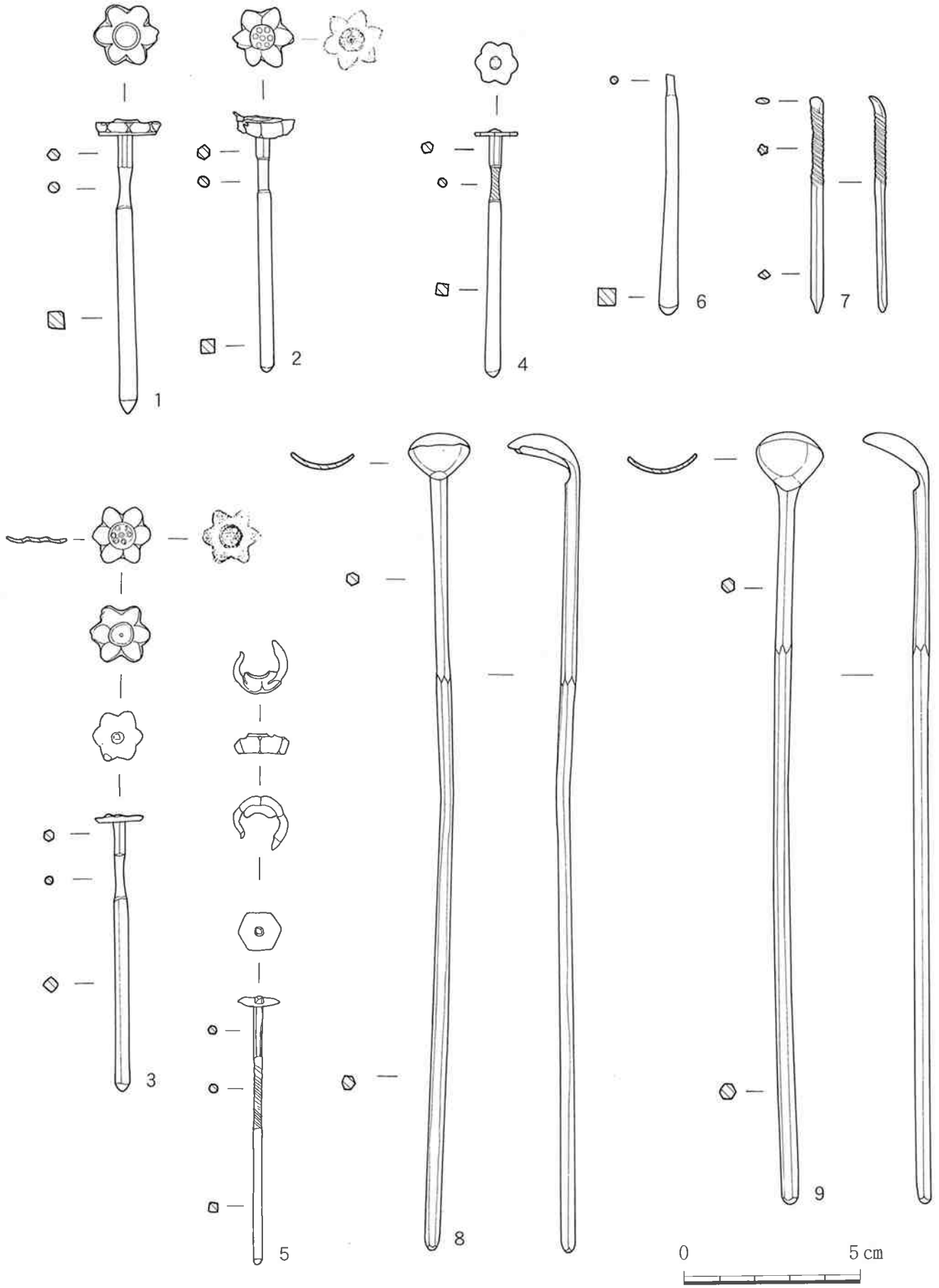
花形・・・・・頭部は花形を呈し、首、ムディー、竿からなる。断面で見ると首は六角形で、ムディーは丸または、ねじれがある。竿は四角形。

耳かき形・・・頭部が耳かき状を呈し、全体的に短い。

匙形・・・・・頭部が匙状を呈し、竿の断面が六角形。

第27表　簪観察一覧

挿図 図版	番号	形状	完破	長さ (cm)	重さ (g)	観　察　事　項	出土地
第102図 図版57	1	花型	完	8.4	12.7	首は径0.34cmの六角形、ムディは径0.3cmの円、竿は径0.5cmの四角形を呈する。竿の先端は四角錘。花は径約1.85cm、厚み0.45cmを計り、水仙型。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅲ e
	2		完	7.3	10.2	首は径0.35cmの六角形、ムディは径0.3cmの丸、竿は径0.4cmの四角形を呈する。竿先端は四角錘を呈するが摩耗し、丸みを持つ。花は水仙型で径約1.75cm、厚み約0.5cmを計り、一部破損する。中央に７つの花心が浅く象られる。全体に青錆が付着。	9区10内
	3		破	7.95	9.0	首は径0.28cmの六角形、ムディは径0.22cmの丸、竿は径0.38cmの四角形を呈する。竿先端は四角錘。花の部分は離れた状態で出土。基部は竿に付き、径約1.4cm、厚みは0.2cmの花型。花部は径約1.7cm、厚み0.44mmを計り水仙型。中央に７つの花心が浅く象られる。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅰ～Ⅱ
	4		破	7.1	7.1	首は径0.33cmの六角形、ムディは径0.27cmの丸、竿は径0.43cmの四角形を呈する。竿先端は四角錘。花は欠失するが、花基部は竿に付き、径1.25cm、厚み0.2cmの花形。ムディには浅いねじれが見られる。竿は先端に向かって若干太くなる。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅲ b
	5		破	7.65	3.9	首は径0.23cmの六角形、ムディは径0.21cmの丸、竿は径0.25cmの四角形を呈する。竿先端は四角錘。ムディには浅いねじれが見られる。竿はほぼ同じ太さだが、ムディとの境で若干太くなるが、細身の作りである。花は形を留めておらず花と基部が離れた状態で出土。花基部は竿に付き径約1.2cm、厚みは0.2cmの六角形で、若干変形する。花部は破片ではあるが径約1.6cm、側面約0.6cmの菊型。全体に青錆が付着。	8区21内
	6		破	6.9	7.8	頭部、首は欠失しているが、花型と思われる。ムディは径0.2cmの丸で僅かに残る。竿は径0.5cmの四角形を呈し、先端に向かって太くなる。竿先端は四角錘を呈するが、摩耗し丸みを持つ。竿の上部2/3辺りから緩く曲がる。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅰ～Ⅱ
	7	耳かき形	完	6.2	3.3	小型品である。竿は菱形とねじれとに分かれる。中央辺りからねじれが耳かきの手前まで施され、平たくなる。竿先端は四角錐で尖る。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅲ f
	8	匙形	完	22.05	22.7	竿は六角形で先端から15.8cmの所で面が互い違いになる。竿は径が約0.4cmで同一の太さを保つが全長の1/3辺りから緩く折れる。竿先端部は六角錐だが、摩滅し丸みを帯びる。カブは径が約1.9cm。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅰ～Ⅱ
	9		完	23.4	21.7	竿は六角形で先端から16.3cmの所で面が互い違いになる。竿は径約0.4cmで同一の太さを保ち、全長の中央辺りから緩く折れる。竿先端部は六角錐だが、摩滅し丸みを帯びる。カブは正面から押され、少しつぶれた感がある。全体に青錆が付着。	前庭部Ⅲ



第102図　簪

第27節　その他の金属製品

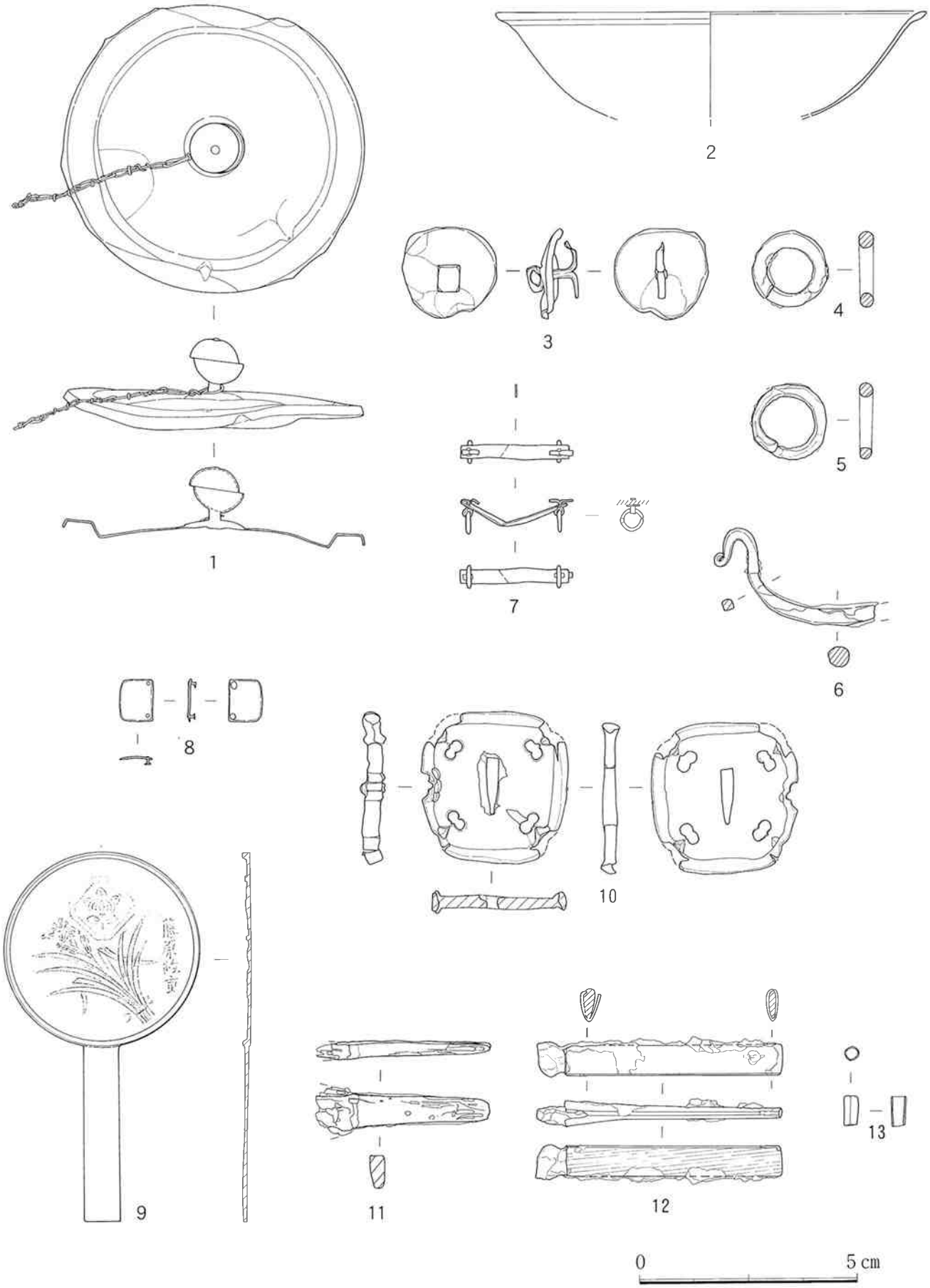
32点が得られた。調度品の金具が11点と最も多く、他に柄鏡や刀の鍔、ヤカンの蓋、現代の貨幣なども出土している。第103図１に示した蓋の類例には読谷村の喜名ヌンドゥンチ墓出土（注）のヤカンがあり、その蓋と形状が似ることからヤカンの蓋と思われる。

第103図１～13に示し、個々の詳細は観察一覧（第28表）に記載する。

（注）読谷村教育委員会の仲宗根求氏のご厚意により実見する機会を得、確認。

第28表　その他の金属製品観察一覧

挿図 図版	番号	種類	完・破	観察事項	素材	出土地
第103図 図版58	1	ヤカンの蓋	完	全体的に少し変型し、青錆も付着する。直径2.3cmの撮みは上下合わせ物になっており、接合面が３㎜ほどずれる。撮み付け根には直径１㎜の鋼で編まれた鎖が約8.6cm残る。直径1.4cm。高さ4.3cm。厚みは蓋が0.3㎜、撮み0.8㎜。重さ57.3ｇ。	銅？	前庭部 Ⅲm
	2	鍋	破	口径20.4cm、厚み約0.13cm、重さ81ｇ。口縁部は舌状を呈する。	銅	10区中 Ⅱ
	3	調度品の金具	完	引手金具と思われる。左半分が変形する。撮みは1.1×1.3cmの方形をし、角は小さく面取りがされ、直径約５㎜ほどの孔があく。上部と足の間は約８㎜の空間がありそこには板状のものがあったと考えられる。上部の裏面には薄茶の石灰らしき物が付着。直径4.3cm、高さ2.4cm、重さ13.2ｇ。	アルミ？	４区１５ 内
	4		破	引手金具の一部と思われる。全体的に錆が生じ、左半分は錆の膨れから大きく割れが出来る。左下の辺りで同図５と同様につなぎ目が確認できる。石灰、砂が付着する。直径3.5cm、厚み約６㎜、重さ11.4ｇ。	鉄	11区上
	5		破	引手金具の一部と思われる。全体的に錆が生じ、一部ヒビが生じている。つなぎの所で約1.5㎜ほど開き、接合面が平たく綺麗に成形されているのが確認できる。直径約3.6cm、厚み約６㎜、重さ9.2ｇ。	鉄	11区上 Ⅰa
	6		破	引手金具と思われる。右半分が欠失する。断面は金具に付くところで5.4×4.9㎜の方形、中央で径9.3㎜の円形を呈する。残存長は7.7cm、幅4.5cm、重さ17.1ｇ。	鉄	11区上
	7		完	小型の引手金具と思われる。中央より少し左側で強く曲がるが、状態は良い。両サイドに鐶が付く。折れをのばした状態で長さ5.3cm、幅0.6cm、厚さ0.5㎜を計る。鐶は共に径1.1cm、厚さ1.7㎜を計る。重さ2.3ｇ。台座と鐶に付く脚との間は約2㎜あり、その厚さの板が挟まれていたものと思われる。	銅？	前庭部 Ⅱ
	8		完	薄手の飾り金具ではないかと思われる。表裏面とも青錆が付着する。縦1.95cm 幅1.55cm、高さ0.35cm、重さ1.2ｇ。	銅？	前庭部 Ⅱ
	9	鏡	完	鏡背には家紋の隅切角タチバナ文、カキツバタ絵が描かれ、右端には京都の鏡屋の制作者「藤原政重」名が入る。文様は浮文で描かれる。表面は平板状で、錆のため細かい砂状の粒が全面に付着するが、元の銅色が見られる箇所もある。柄部は下方で正面へ向け緩く変形する。保存状態は良好。全長17.2cm。鏡部は直径9cm、柄部は長さ8.2cm、幅1.6cm、重さ98ｇを計る。	銅	９区１３ 内
	10	鍔	破	耳は鋤出し（縁が張り出すタイプ）で、形状は木瓜鍔（角が窪む）が少し方形になるものと思われる。各隅にはハートを変形したような透かし孔がある。茎櫃は長さ2.5cm、幅は広いところで5.5㎜、狭いところで2㎜を計る。割れの断面から薄い層が何枚も確認できる。長軸7.5cm、短軸6.8cm、厚み約5㎜、重さ75.8ｇを計る。	銅	石積み 3
	11	包丁	破	おそらく包丁の基部と思われる。差し込み部は、錆は入るが元の形状が方形であることが判る。刃部は残りが少ない上にヒビや割れにより状態が悪く、元の形状は判然としない。長さ8cm、断面部幅1.5cm、厚さ0.7cm、重さ20.3ｇを計る。	鉄	11区上
	12	不明	破	おそらく包丁、又はノミなどの刃物類の柄ではないかと考えられる。鉄を銅で包み込むように造られている。銅の厚みは1㎜を計る。柄縁では綺麗に銅で包まれているが、錆膨れのため、刃付近では包みが剥がれる。裏面に察痕の様な斜めに走る線が観察できる。長さ11.3cm、幅1.53cm、厚さ0.48cm、重さ37.8g。	鉄・銅	前庭部 Ⅲo
	13		完	筒状の製品。つぎ合わせの部分で0.5㎜ほど重なる。保存状態は良好。長さ0.14cm、径約0.6cm、重さ1ｇを計る。	銅？	10区上 Ⅲ



第103図　その他の金属製品

第28節　石器

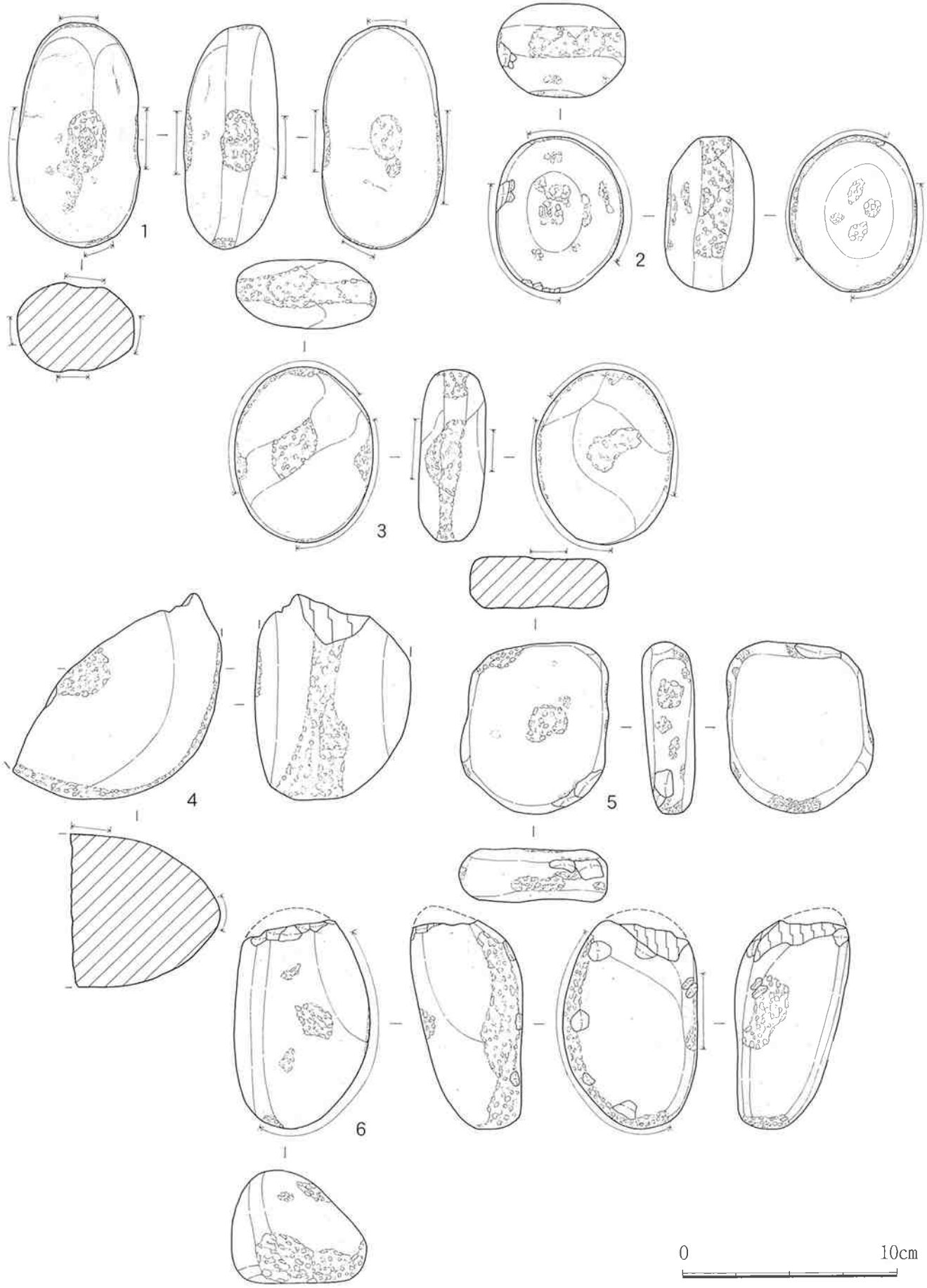
今回の調査で得られた石器は敲石、石斧、石皿の三種類である。総数９点のうち７点は敲石で、石斧と石皿は１点ずつの出土であった。

敲石としたのは敲打痕が認められる石器であり、石斧転用品もこれに含めた。いずれも片手で使用するのに都合の良い形状を呈しており、軽量である。石斧は磨製と思われるが、破損品のため詳細は判然としない。石皿も破損品ではあるが、凹面を呈した使用面が明瞭に残る資料である。石質は、敲石には安山岩や閃緑岩など久米島より入手可能なものが利用されているのに対して、石斧には慶良間諸島や渡名喜島より産出される緑色片岩を利用するなど、石器の種類により使用する石材を使い分けている傾向が窺えた。なお、個々の特徴については第29表の観察一覧に記述する。

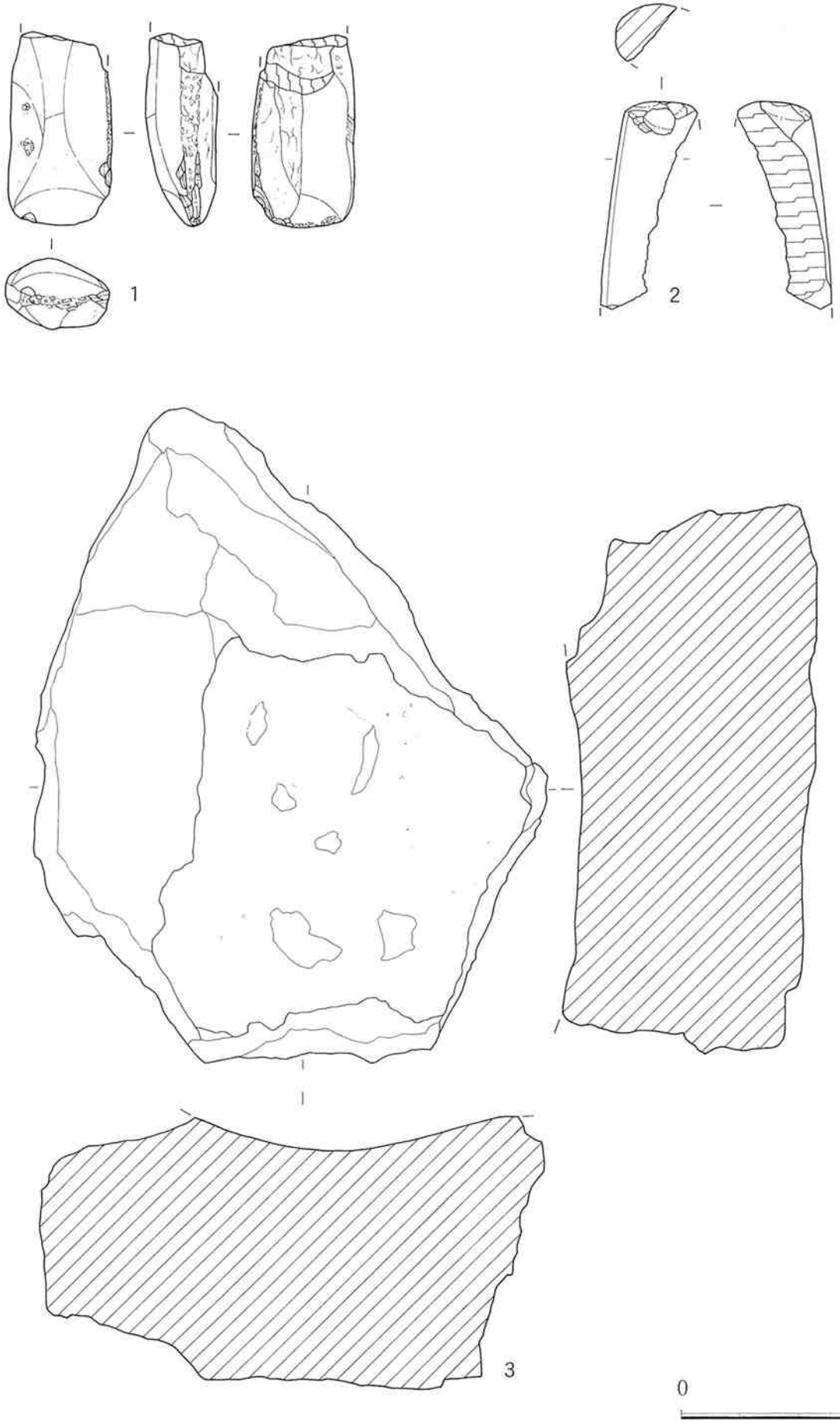
第29表　石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	観察事項	出土地
第104図 図版59	1	敲石	10.6	5.8	4.4	410	安山岩	楕円状を呈する礫を利用している。表裏面、両側面、上下端、いずれも中央よりに敲打痕を有す。特に表面は使用頻度が高かったようで、凹みを形成する。また、右側面も平らになるほど使用している。	前庭部 Ⅲf
	2	敲石	7.3	6	4.3	300	閃緑岩	楕円状を呈する小型の礫を利用している。表裏面の敲打痕は疎らであるが側面部は一部を除き、ほぼ全周にわたって敲打痕を有す。表面及び右側面には浅い凹部が形成され、また左側面及び下端部には、打撃による剥離が認められる。	北側斜面
	3	敲石	8.2	6.5	3.2	280	閃緑岩	楕円状を呈する小型の礫を利用している。側面部は一部を除き、ほぼ全周にわたって軽微な敲打痕を有す。表裏面の平坦面は、両面とも中央部に敲打痕がみられ、一方は浅い凹部を形成している。	12区
	4	敲石	(9.7)	(9.8)	(7.3)	(760)	閃緑岩	敲石の破損品である。周縁部一帯と表面の中央部に敲打痕を有す。本来の形状は楕円形もしくは円形とみられ、使用により破損したものと思われる。	前庭部 Ⅲb
	5	敲石	8.1	6.9	2.5	235	安山岩	平面観は略五角形を呈する薄手の礫を利用している。表面の中央部は敲打により若干凹む。二箇所の角は潰れるほど使用されており、剥離も認められる。他の箇所の敲打痕は、いずれも軽微である。	前庭部 Ⅲa
	6	敲石	(9.9)	6.4	5.3	(460)	安山岩	一部破損しているが、平面形・断面形ともに隅丸三角形状と思われる礫を利用している。三辺のうち二辺には、ほぼ全面にわたる敲打痕と剥離が認められるため、使用頻度の高さが窺える。表面の中央部にも敲打痕を有すが、軽微である。	前庭部
第105図 図版60	1	敲石	(8.4)	4.5	3	(170)	緑色片岩	石斧転用品と思われる敲石である。基端部と身の一部を欠損したため、敲石として再利用したと思われ、刃部には敲打痕と剥離が認められる。石斧の刃部及び身の一部には丁寧な研磨調整を施すが、敲打の痕や自然面が残る箇所も見受けられるため、全体的には粗雑な作りである。側面には石斧利用の際に生じた剥離も認められる。刃部は片側から研ぎだす片刃の様相が濃いが、反対側も幾分研ぎだされている。側面には、紐などで柄に取り付けて使用したことを想定させる、紐ずれ痕のようなものが確認できる。	前庭部 Ⅲa
	2	石斧	(8.8)	(4.1)	(2.4)	(61)	緑色片岩	磨製石斧の破片と思われる資料である。基端部は打割調整のままであるが、身の部分には全体的に丁寧な研磨が施されている。刃部が欠損しているため、刃の研ぎだし方は不明である。使用による衝撃で破損してしまったものと考えられる。	前庭部 Ⅲ
	3	石皿	(28.1)	(22.0)	(11.7)	(9,200)	安山岩	石皿の破損品である。使用面は、全体的に磨面を呈し、中央に向かってゆるやかに傾斜していく。数カ所に剥離も認められる点から、磨石や敲石とセットで使用したと思われる。	11区

※（　）内の数値は残存部の最大値を示す。



第104図　石器１



第105図　石器２

第29節　香炉

サンゴおよびサンゴ石灰岩製のものである。第106図１～３はサンゴ石灰岩を加工した方形で、４はキクメイシを利用した円形のものである。

同図１は上面に方孔を穿ち４脚、やや正方形に近い。ノミ痕は目立たないがやや雑な仕上げである。10号区画下段裏込め内出土。高さ13.4cm、上・下幅14.4cm、上・下奥行き11.8cm、重さ1860ｇ。同図２・３は上面に円孔多数を穿つもので脚はなく底面が平坦。３はすべて円孔と思われるが、２は中心１つが方孔である。どちらも長方形で、３は破損しているが、２と同様な形態であったと思われる。２は２号区画より採集で高さ11.7cm、上幅16.1cm、下幅16.2cm、上奥行き12cm、下奥行き10.6cm、重さ2,280ｇ、３は３号区画より採集で下幅18.8cm、下奥行き10.7cm、重さ1,340ｇ。

同図４は円形で、周囲を丁寧に研磨している。上面、底面ともにくぼむが、上面がより深くくぼむ。上面には円孔を穿つ。前庭部Ⅱ層出土で、高さ６cm、直径11.2cm、重さ220ｇ。

第30節　木製品

木製品は木製厨子の部材、木棺材などが得られた。10・11号区画から多く得られたが、整理上の不手際で一部の資料について採集位置が不明になってしまった。

第107図１・２は彩色の施された木板である。１は黒色・朱色の色彩が残っている。資料が小さいため文様の展開は不明。２は保存が不良であるため判然としない。１・２と併せて考えると芭蕉文が展開すると思われる。11号区画奥採集。

第108図は方形の木製品である。周囲に木釘が打たれ、箱形容器の蓋もしくは底であると思われる。一面は黒色を呈しており、わずかに文字のようなしみがみられる。第109図も同じく木釘を打ち、第111図は一端に木釘が打たれ、形状からして箱形容器の側板であると思われる。いずれとも11号区画上段採集。

第110図２も箱形容器の側板と思われるが木釘はなく、突出部が４ヶ所ありはめ込む形のものである。突出部にはそれぞれほぞ穴？が穿たれている。

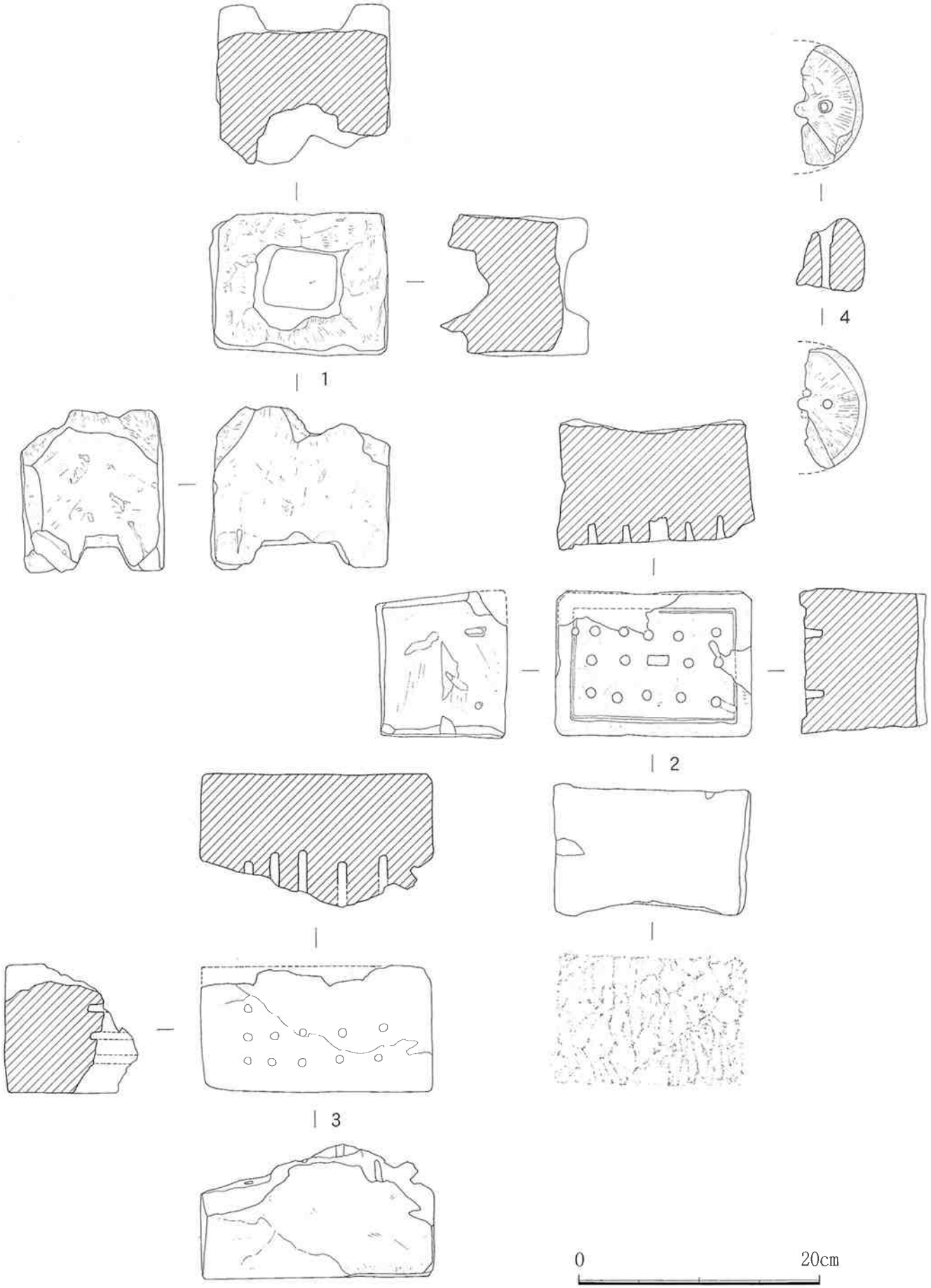
第112図１は木棺の側板と思われる。端部に約３cm四方の方孔を穿つ。ほぞ穴とも思われるが１つのみであるため不明。10号区画採集。

第112図２は木製厨子の部材と思われる。同様の部材が第38図にもみられる。

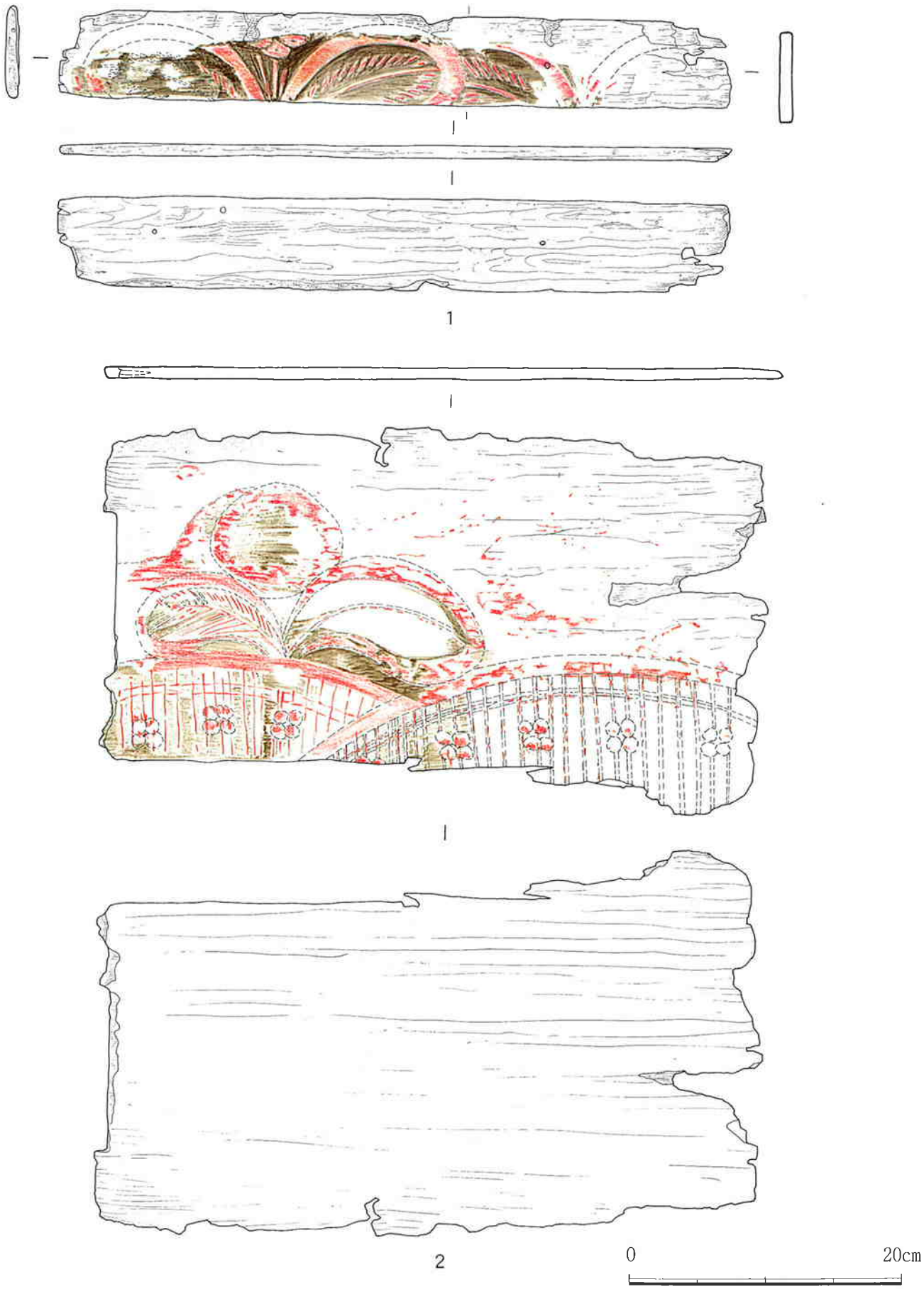
同図３は櫛である縦4.0cm、横3.8、厚さ1.2cm。11号区画木製厨子内から得られた。櫛の端部で、保存状態は良好。漆などは確認できず、白木の櫛と思われる。同図４は匙状の製品である。長い柄を持ち、カブの部分は平坦になっている。乾燥によって捻れているため本来の形状は不明。類例でナーチュー毛古墓群（那覇市教委2000）の木製簪があり、形状が似ることからこれも簪かと思われる。厚さ0.1cm。

第30表　木製品観察一覧

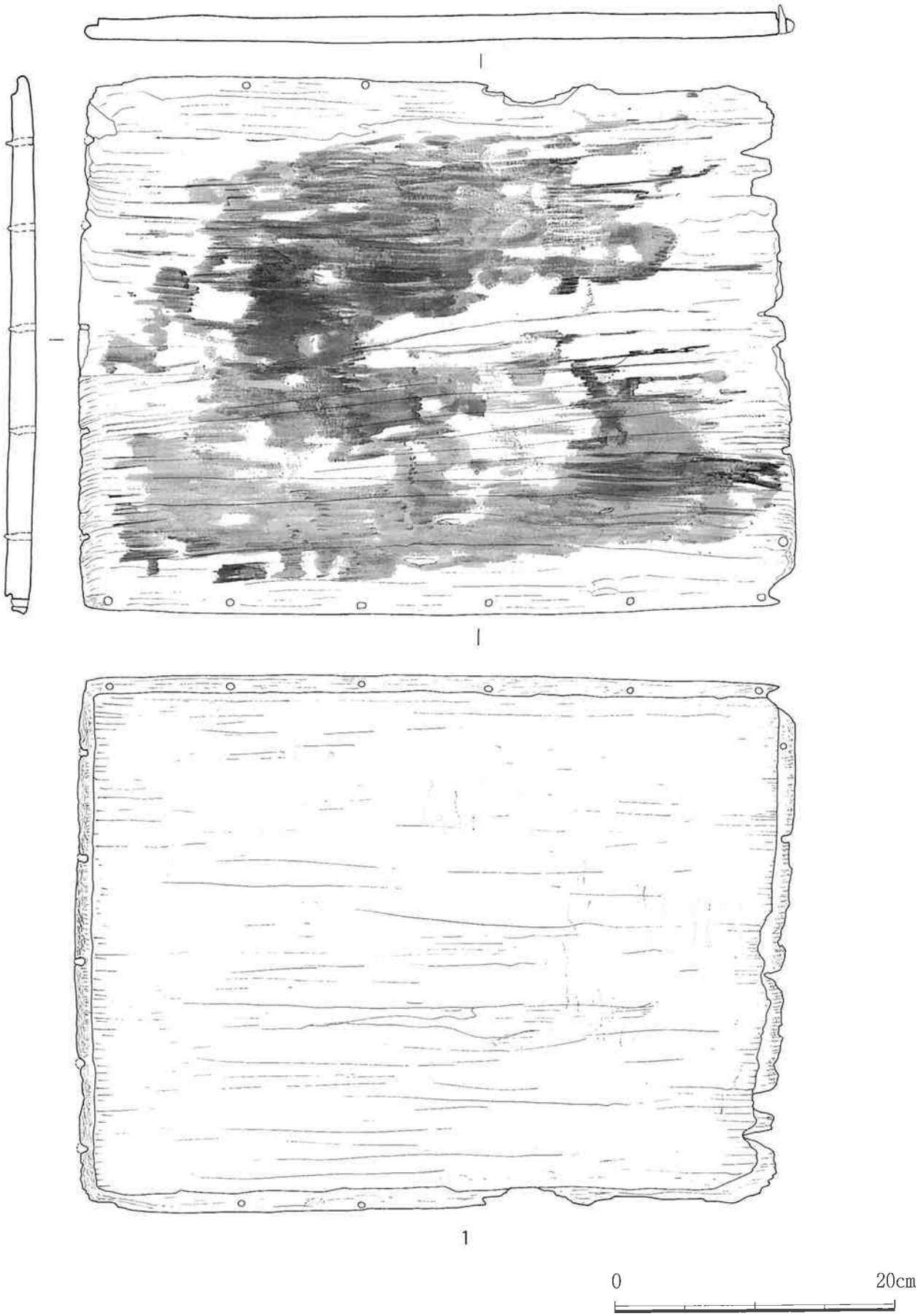
図番号		長さ	幅	厚さ	組手の方法
第107図	1	50.4	6.9	1.0	不明
	2	49.6	22.5	0.9	三枚組接ぎ？、ダボ組
第108図		52.0	39.2	2.0(1.0)	ダボ組
第109図		52.2(49.8)	37.2	1.1	四枚組接ぎ、ダボ組
第110図	1	42.6	8.7	1.1	三枚組接ぎ？、ダボ組
	2	49.6(36.8)	37.5	1.6	ホゾ接ぎ、組接ぎ？
第111図	1	52.8(51.9)	8.4	1.1	不明の組接ぎ、ダボ組
	2	53.4(52.4)	8.5	1.2	不明の組接ぎ、ダボ組
第112図		142.4	39.4	1.5	ホゾ接ぎ？



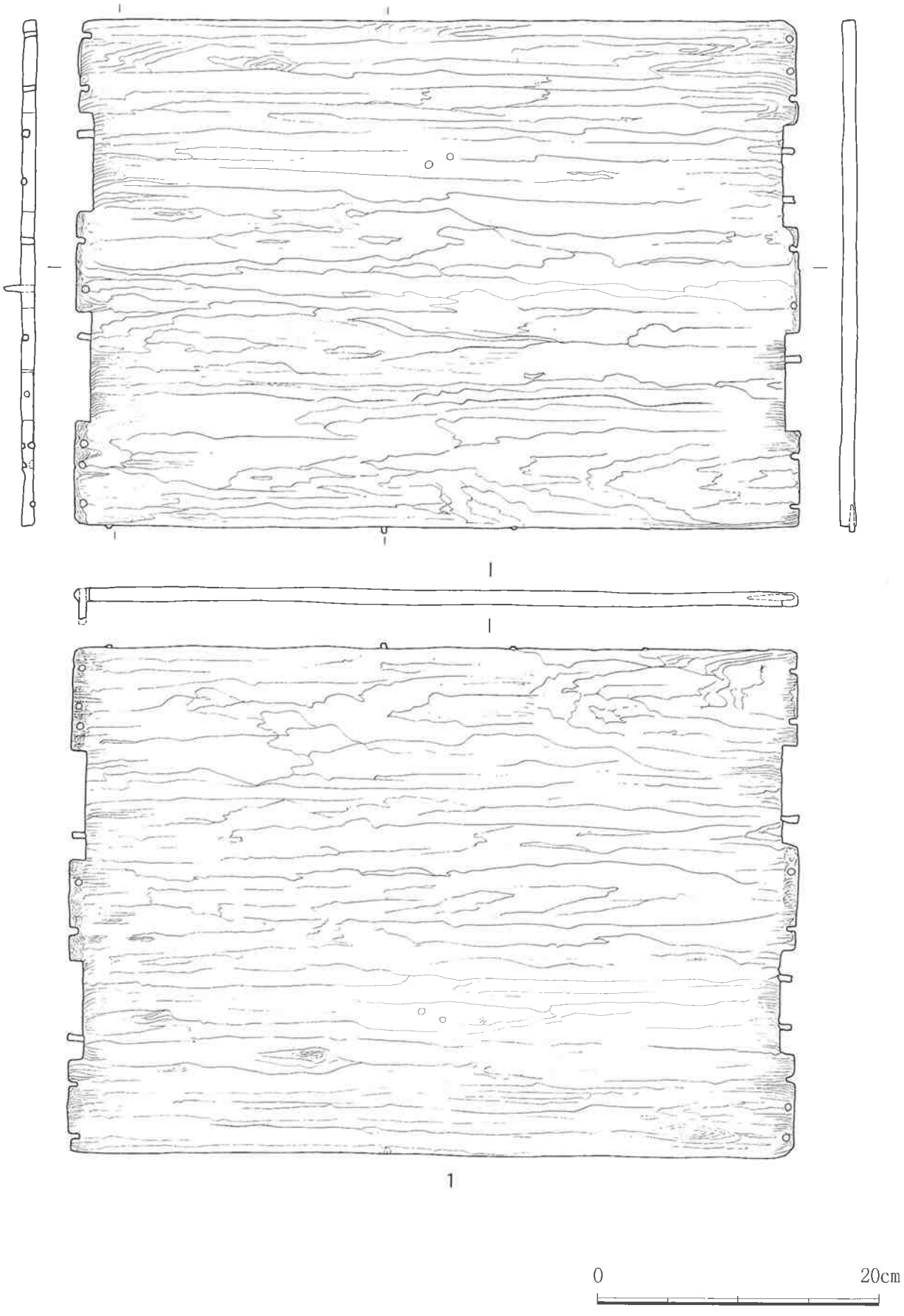
第106図　香炉



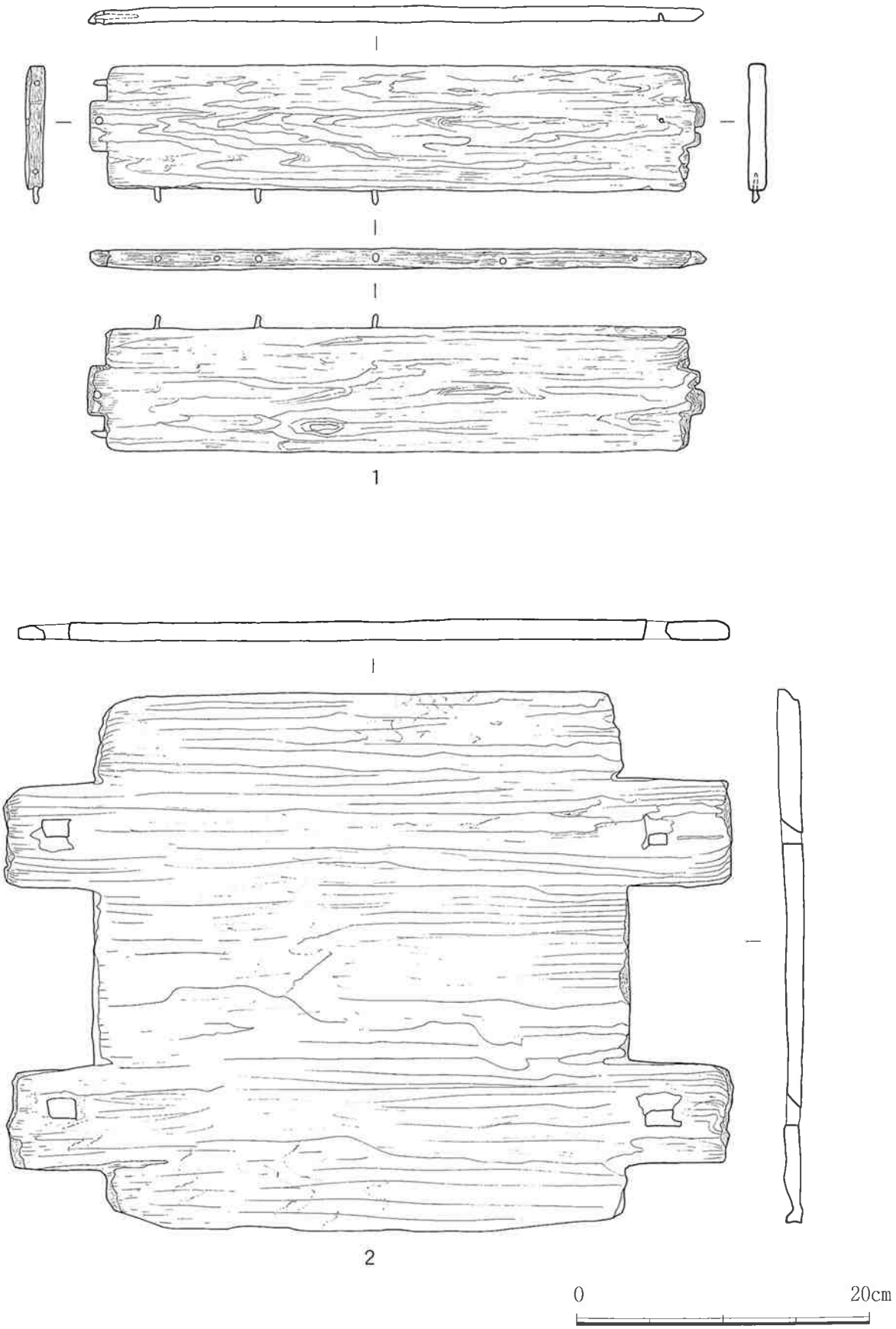
第107図　木製品 1



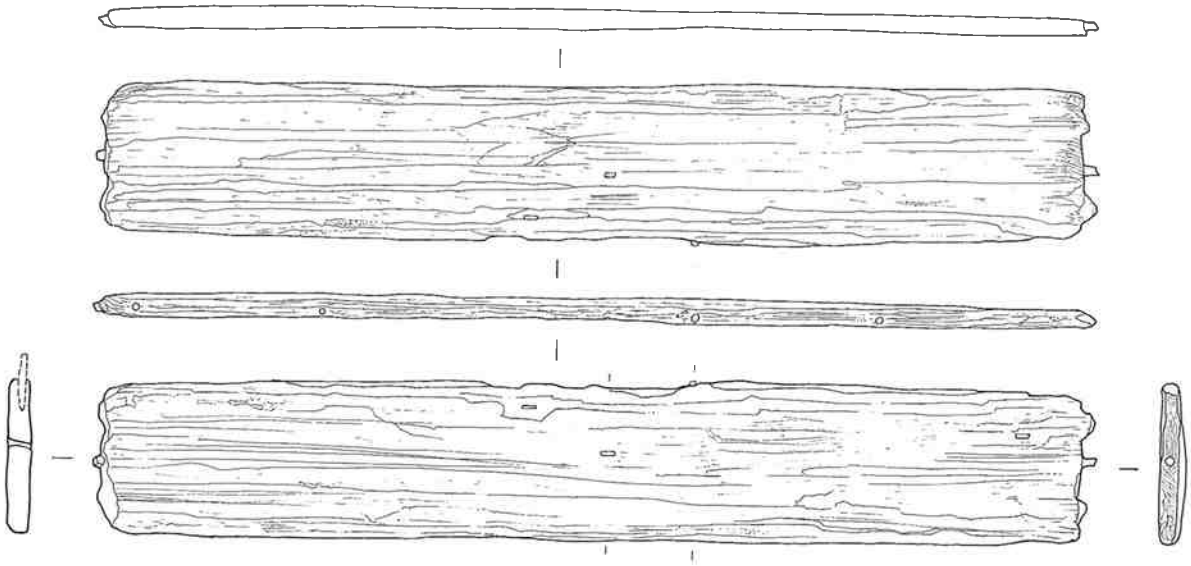
第108図　木製品２



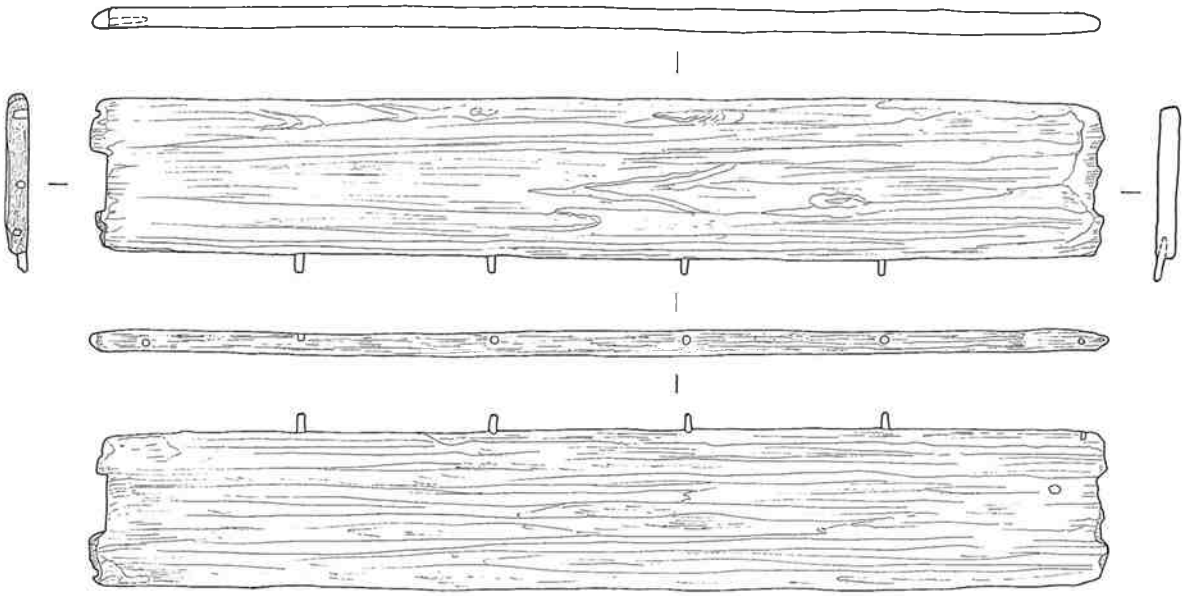
第109図　木製品３



第110図　木製品４



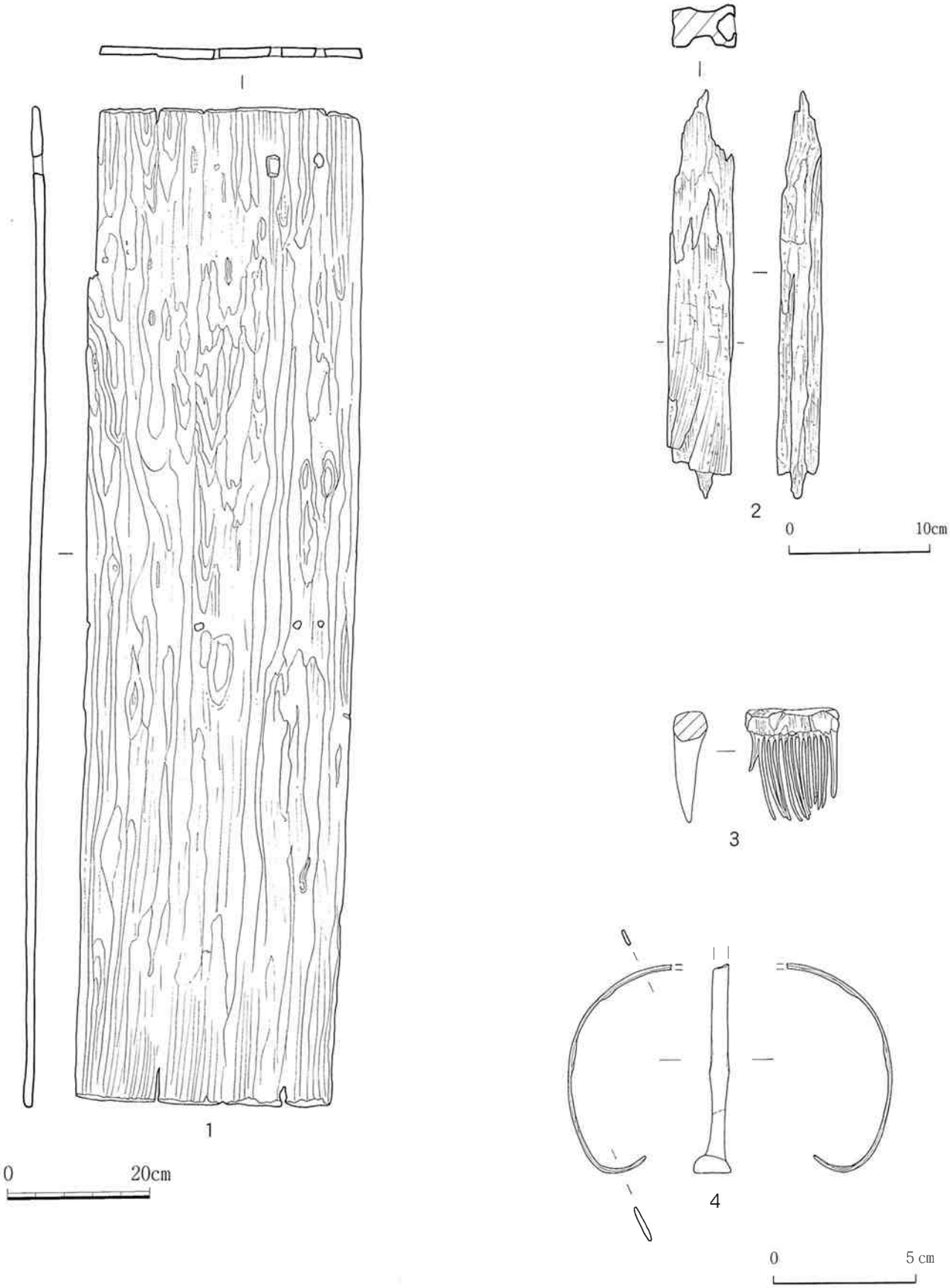
1



2

0　　20cm

第111図　木製品５



第112図　木製品６

第31節　貝製品

本遺跡の貝製品はヤコウガイ製匙14個とその未製品３個、ホシダカラの有孔製品１個で計18個出土している。

・ヤコウガイ製匙

製品が14個と未製品が３個の計17個得られた。

出土状況は主に10・11区の前庭部に限られ、厨子の中からは第132図４（カンジン原古墓群）のみが出土している。

製品は柄の形と貝の用い方で分類できる。柄の形では、中央部に抉りを施し「V」字状にするものをA類、方形状になるものをB類と仮称する。また、殻は背面と腹面を利用したものがそれぞれ見られ、前者を「背面」、後者を「腹面」として表に示した。

柄についてみると、A類は上原(1986）によって「魚」としたもので、抉りの具合や先端の部分が尖るものと丸味を帯びるものがみられ、先端の形状で細分の可能性もあるが今回は記述のみにとどめた。

殻の用い方をみると、背面を利用したものは後期遺跡で出土しているが、腹面を利用したものは今回が初めての出土である。また、柄の配置も殻口側と軸部側の２つの方向が見られる。

以下、第131表に柄の形状、殻の使用、柄の方向及び加工状況について観察した。

また、13～15は未製品であるが、製品と同じ位置に大きなヒビが見られることから、これは製品を製作する工程で生じたものと考えられ、自然貝への第一打撃地点と想定される。

第114図は夜光貝の自然貝の模式図で、製品の取り方を示したものである。これでみると後期遺跡出土の貝匙と同じように殻口側を柄に用いる点は共通しているが、全体的に匙は細身のため、柄の部分を斜めにし、身の中央を螺肋の中心に配置して殻を利用している。後期遺跡や首里城跡（上原1989）、御細工所跡（那覇市教委1991）、湧田古窯跡（沖縄県教委1999）で出土する「ヤコウガイ切り取り残存部」の資料から見てもこの用い方が一般的と思われるが、この他に今回は腹面を利用したもの（3.4.9.10.11.15）が確認され、殻の形状からみると小さいものを製作するために意図的に用いたものと考えられる。殻の大きさを復元すると殻径12.4cmで、同じ久米島の清水貝塚のものを復元すると15.6cmになることから、殻はかなり小さい。また、製品は表裏面とも真珠層が露出し、周縁部も丁寧に加工されている点は本遺跡の製品の特徴として捉えることができる。類例品はヤジヤーガマ洞穴（上原1986）、豊見城村平良グスク（豊見城村教委1988）、宮古島の住屋遺跡（金武・砂川1983）、西表島成屋遺跡（青山大学成屋遺跡調査団1987）、与那国島樽舞地区の崖葬墓（永井・佐野1963）で出土している。そのうち後者の２遺跡は共伴遺物からもほぼ同時期と考えられる。本遺跡では匙が厨子以外の周辺から出土したり、また、未製品もみられることから副葬の習俗や製作地の問題など多くの問題を含んでいると思われる。また、久米島では先史時代の清水貝塚、大原貝塚から大量の夜光貝の貝匙や自然貝が出土し、琉球王府時代には献上物として飼育されていた記録などもみられるため（高梨1998）、重要な考古資料のひとつと考えられる。

・タカラガイ製品

ホシダカラの前端に１cm前後の粗孔を施すもので他に加工痕は見られない。殻長8.61cm、殻幅5.92cm、高さ4.59cm、重さ60g、孔径1.1cmを測り、10区上段の出土である。類例は勝連城跡二の郭（上原1990）で見られるが、出土例が少なく、今後の資料の追加を待ちたい。

＜補記＞

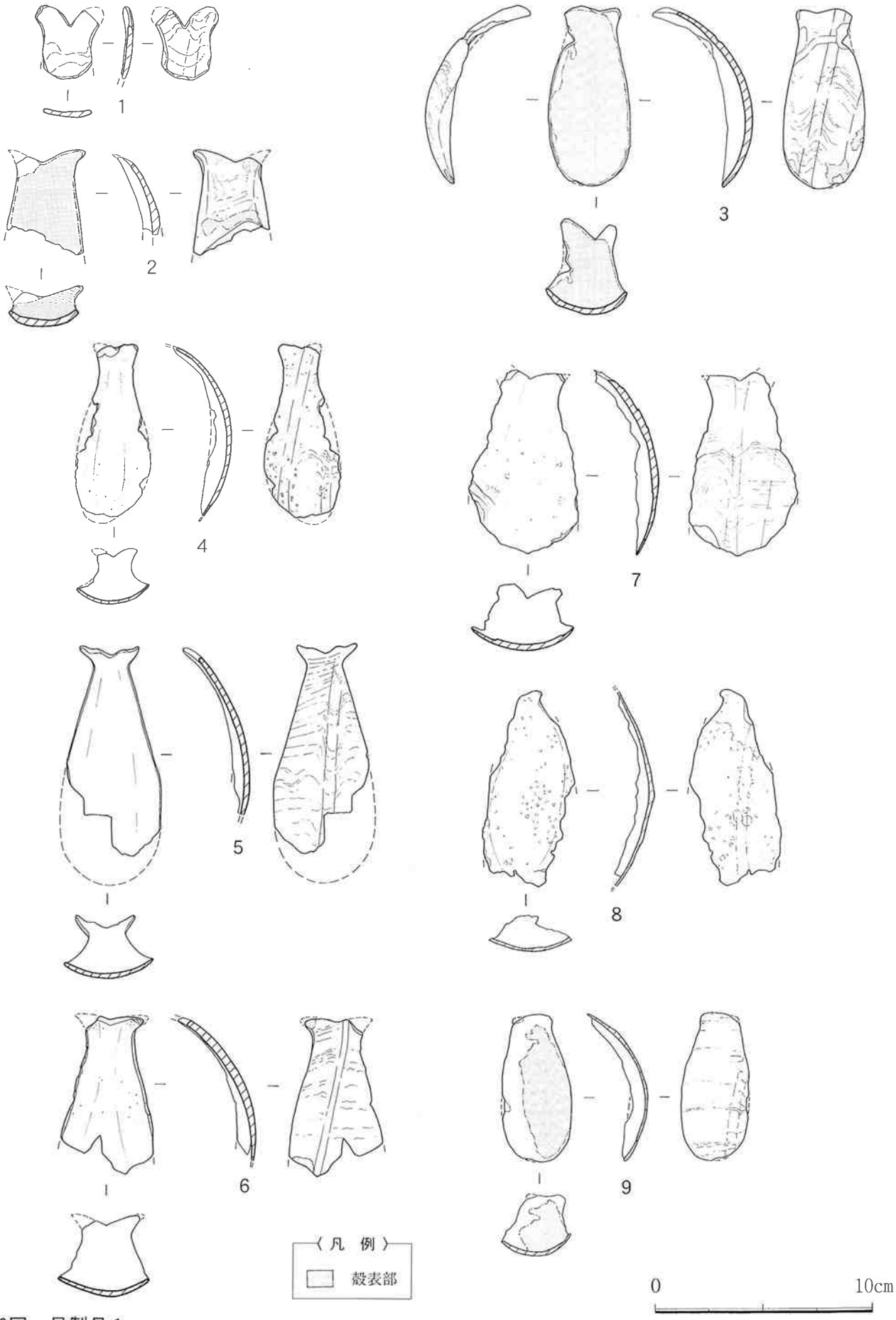
１）第108図の木製品の一部には文字と思われる部分があった。脱稿後の検討で「□□□年（寺ヵ）」と記されているのではないかと考えられた。脱稿後に確認できたため図化が間に合わず、改めて報告する。

２）久米島では明治期ごろまで「カブイ墓」、「ヤングヮーバカ」とよばれる茅葺きの墓があり、納骨施設として用いたとされる（上江洲均　1972「久米島の墓－上江洲家墓について－」『ヤチムン会誌』３ヤチムン会）。しかし、礎石建ちであったのか、堀建柱であったのか不明であり、構造的な部分は詳らかではない。今回２号区画で確認した建物礎石は、同様な性格の建物に伴うものであろうか。

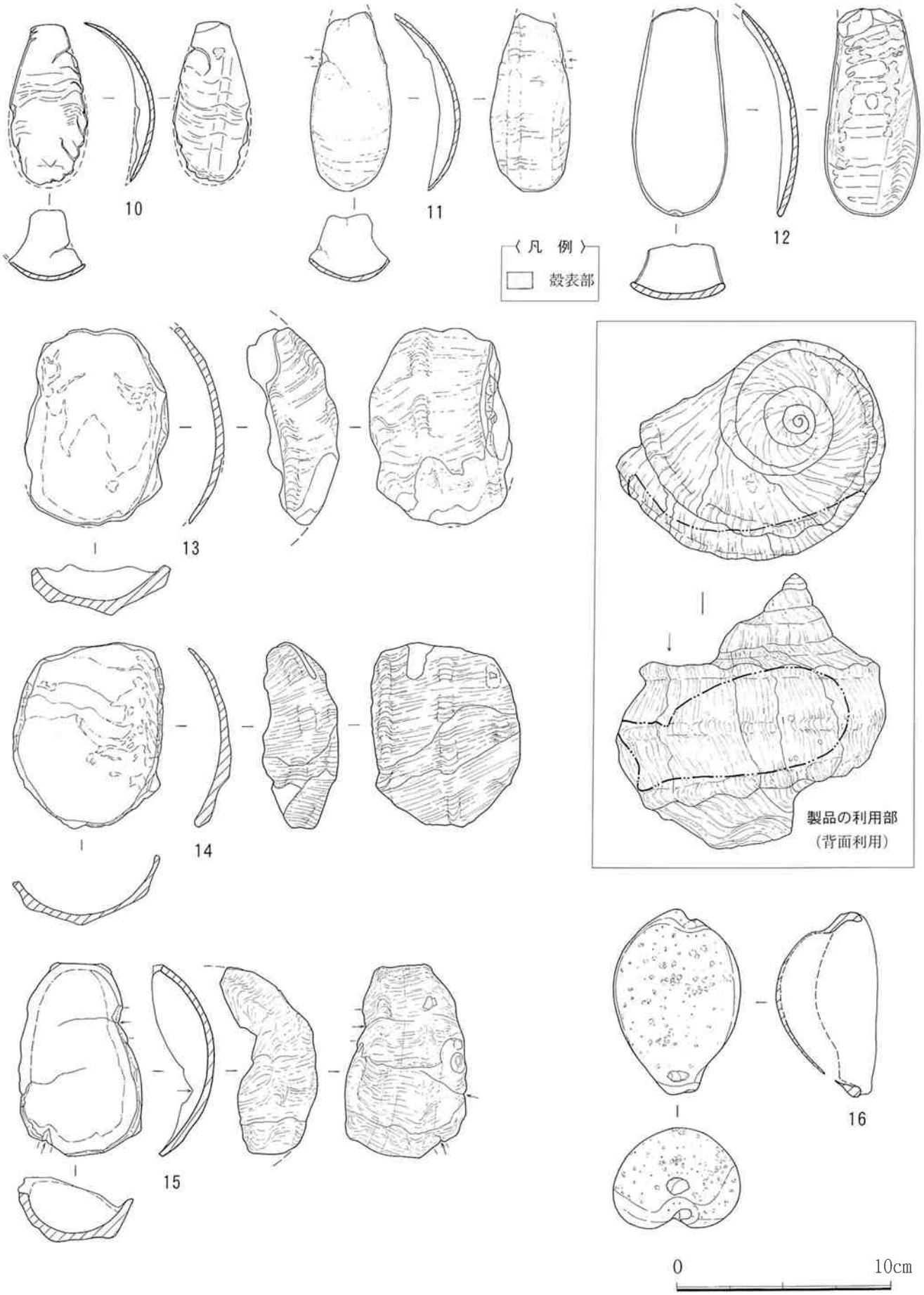
第31表　貝製品観察一覧

挿図 図版	番号	柄形	殻使用面	柄の方向	最大長	身部最大幅	柄部最小幅	観　察　事　項	出土地
第113図 図版64	1	A	背面	殻口	0	0	2.2	真珠層のみ。周縁は研磨。	前庭部石灰岩崩落
	2	A	背面	殻口	0	0	2.7	殻表－内側は多く残り、外側は若干見られる。研磨面が多い。周縁は研磨。	11区
	3	A	腹面	軸部	9.2	3.8	2.2	殻表－内側と外側の先端に若干残る。周縁は研磨、柄の近くに大きなヒビが確認できる。	11区上Ⅰ集中
	4	A	腹面	殻口	8.1	3.5	1.6	真珠層。周縁研磨。	10区中Ⅲ
	5	A	背面	殻口	0	0	1.6	真珠層。周縁研磨。	前庭部石灰岩崩落
	6	A	背面	殻口	0	0	2.1	真珠層が露出するが、アバタが見られる。柄部の抉りの近くに打割の痕を若干残す。	前庭部石灰岩崩落
	7	A	背面	不明	0	0	3.2	真珠層、アバタが見られる。周縁は風化して脆い。	11区上
	8	破損	背面	軸部	0	0	0	真珠層、アバタが顕著。破損しているため詳細は不明。	11区-24内
	9	B	腹面	殻口	7.2	3.2	1.9	内側は殻表を７割残す。外面は真珠層のみ。研磨・打割調整の痕が見られる。	11区下石積み
第114図 図版65	10	B	腹面	軸部	7.3	3.2	1.8	真珠層のみ。周縁は研磨、柄の近くに大きなヒビがみられる。	11区上
	11	B	腹面	殻口	8.5	3.8	2.2	真珠層のみで研磨調整は丁寧。柄と身の境にヒビがみられる。	11区上石積み
	12	B	背面	殻口	9.8	4.5	3.2	外面の肋の近くに殻表を残す。研磨は丁寧。	10区上Ⅳ
	13	未製品	背面	－	9.2	6.8	－	内外面とも殻表が残る。粗割で１カ所に２cmくらいのヒビがみられる。	10区上Ⅰ
	14	未製品	背面	－	9	7	－	内外とも殻表が残る。粗割、１カ所に２cmくらいのヒビがみられる。	前庭部
	15	未製品	腹面	－	9.1	5.7	－	内外とも殻表が残る。粗割、１カ所に２cmくらいのヒビがみられる。	2区Ⅱ
	16	ホシダカラ	－	－	－	－	－	先端に径1.1cmの粗孔のみ、外面かいら穿孔、殻は風化。	10区上
第132図 図版77	4	A	背面	殻口	10.5	4.5	2.2	真珠層のみ、研磨調整は丁寧。椀（巻頭図版９）と共伴している。	カンジン 2号墓35内
	5	破損	背面	不明	0	0	0	真珠層のみ、二次加工か。	カンジン 1号墓北奥Ⅰ

「０」は計測不可、単位cm



第113図　貝製品１

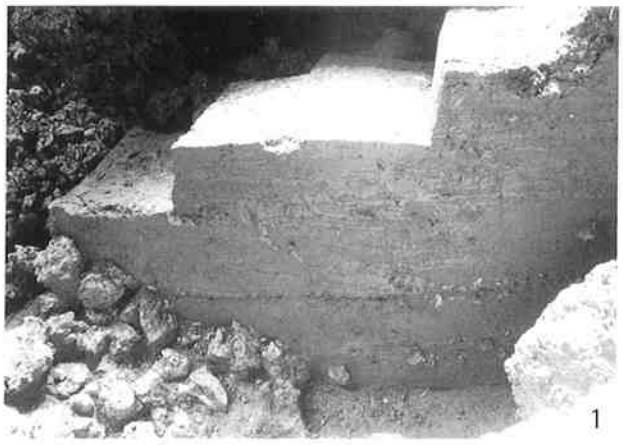


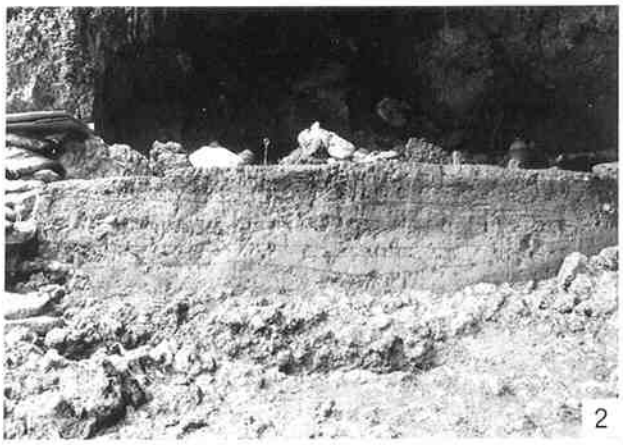
第114図　貝製品２

図　　版

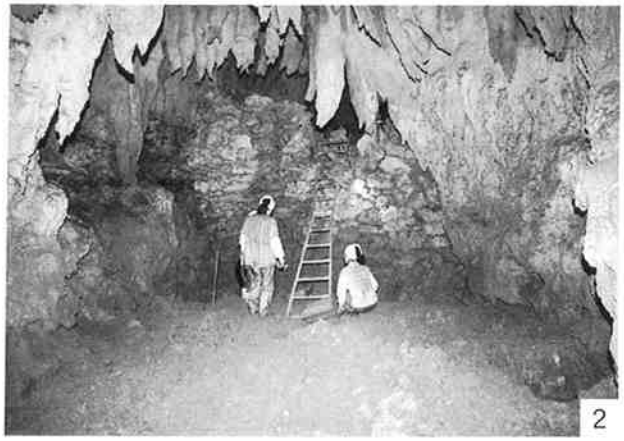
図版1　区画内の状況1　1．1号区画　2．2号区画　3．3号区画　4．4号区画
5．5号区画　6．6号区画　7．7号区画　8．8号区画

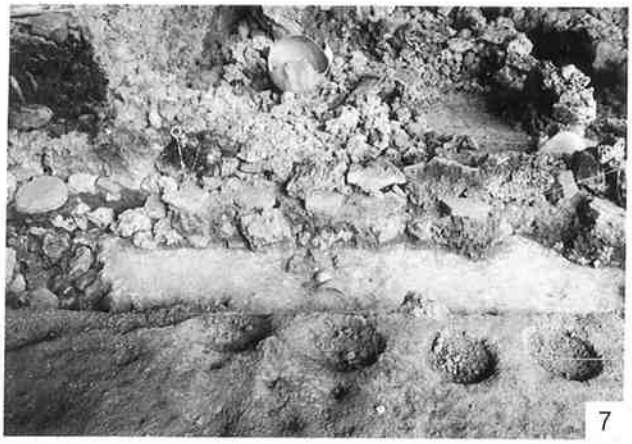
図版２　区画内の状況２　１．９号区画　２．10号区画　３．11号区画　４．12号区画　５．13号区画
６．９･10号区画取り上げ後　７．７号区画焼骨集中部　８．３号区画取り上げ後



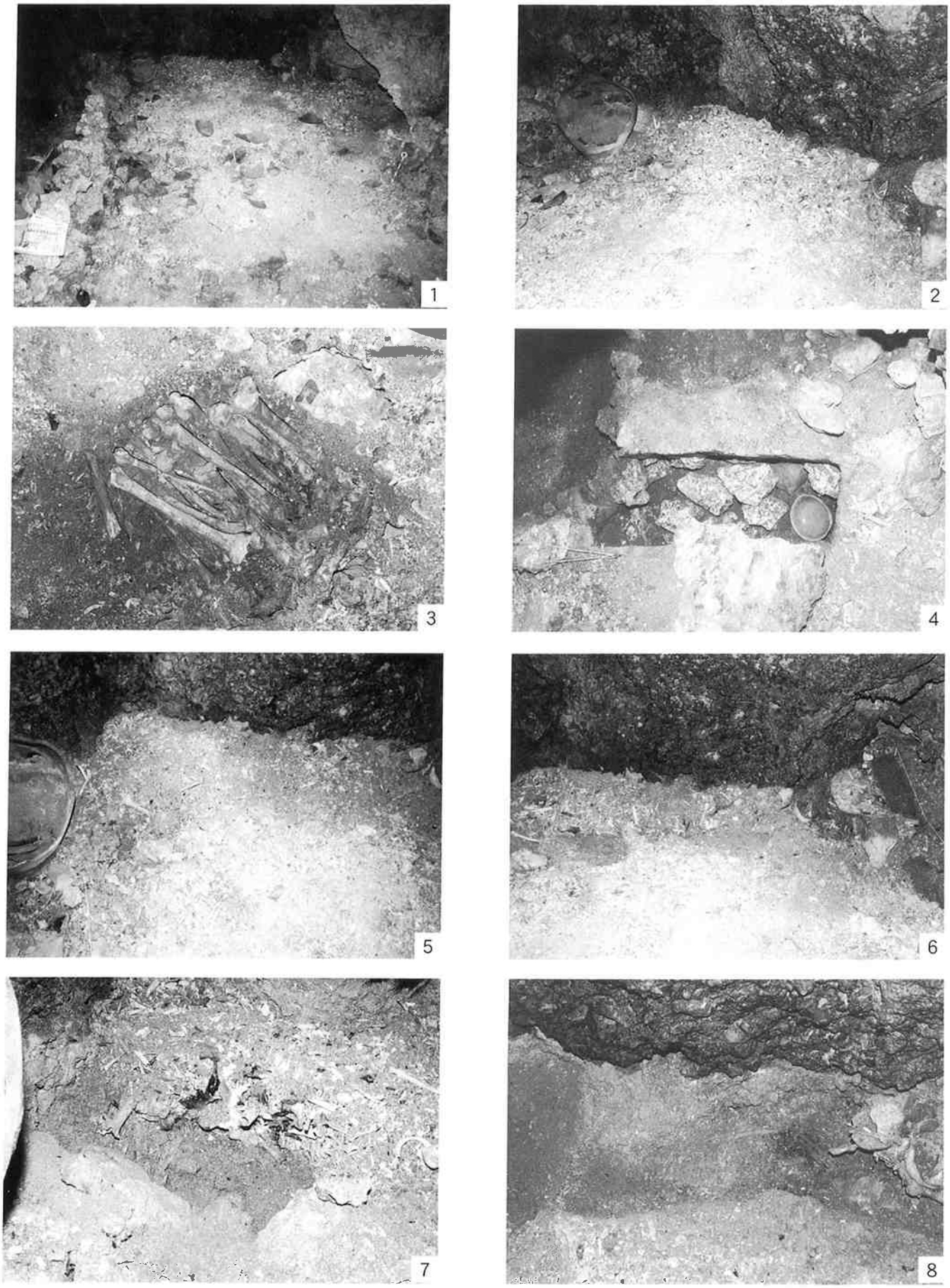


図版３　層序　１．１トレンチ東壁　２．同南壁　３．11号区画東壁　４．同南壁　５．入口トレンチ西壁
６．１号区画北壁　７．12号区画(井戸様遺構内)壁

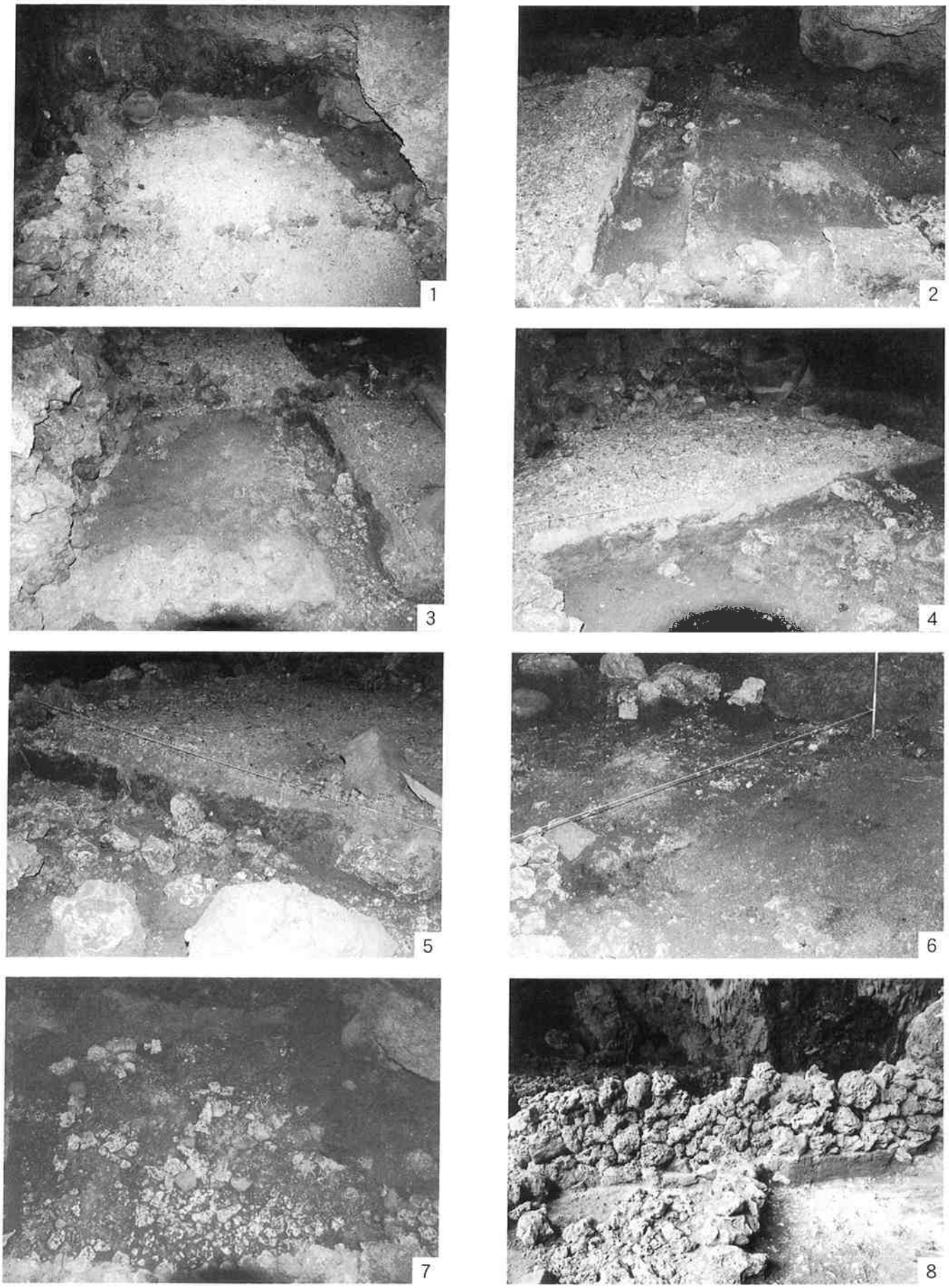




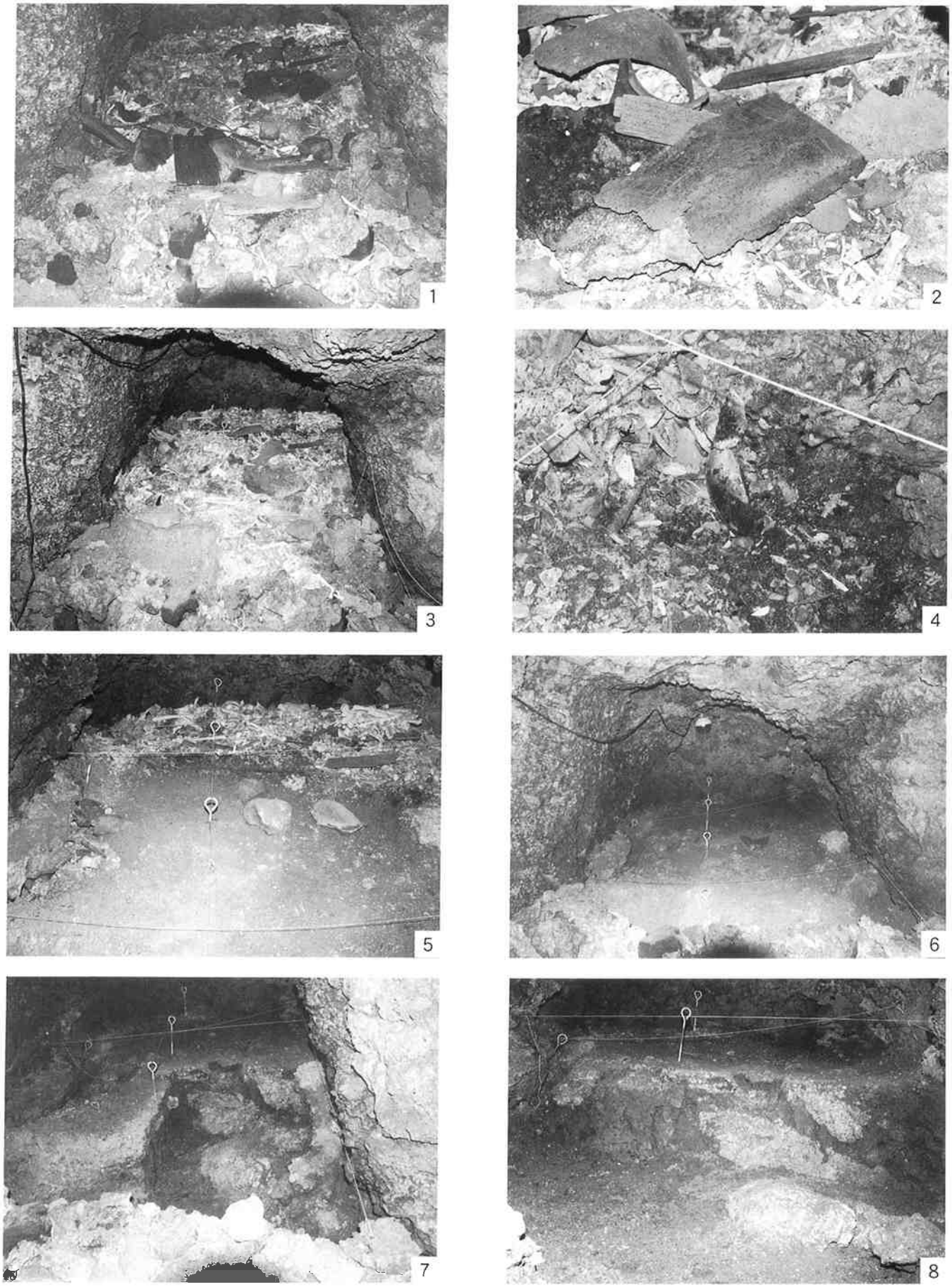
図版４　遺構確認状況　１．遺構全景　２．石積み２　３．石積み３　４．礫敷断面　５．石列Ａ・Ｂ
６．焼土検出　７．２号区画内コーラル層及び建物礎石　８．炭層検出



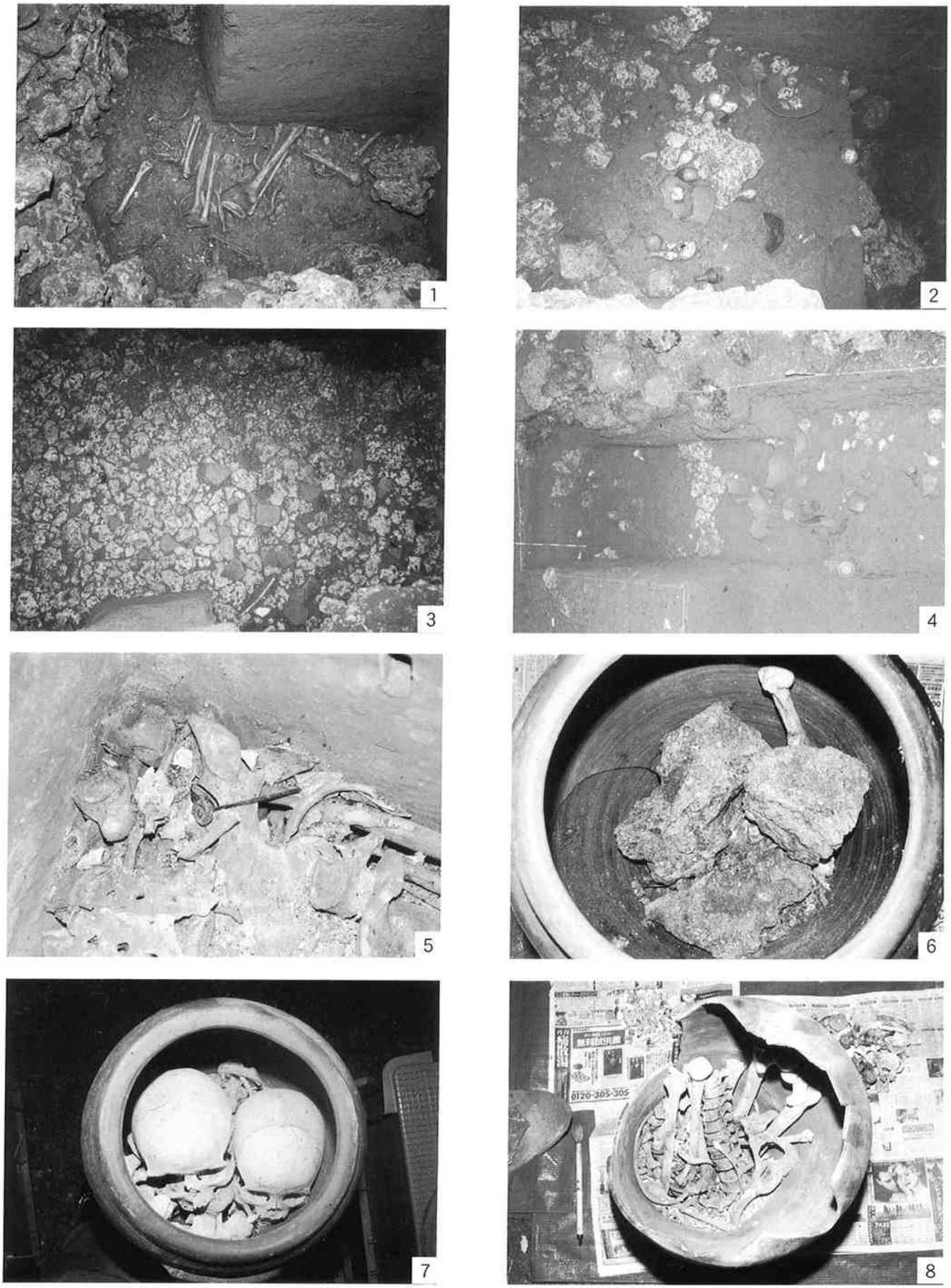
図版5　10号区画検出状況1　1.掘り下げ前　2.人骨集中部掘り下げ前　3.大型人骨検出　4.青磁出土状況
5・6.4層検出　7.4～6層立割り　8.5層検出



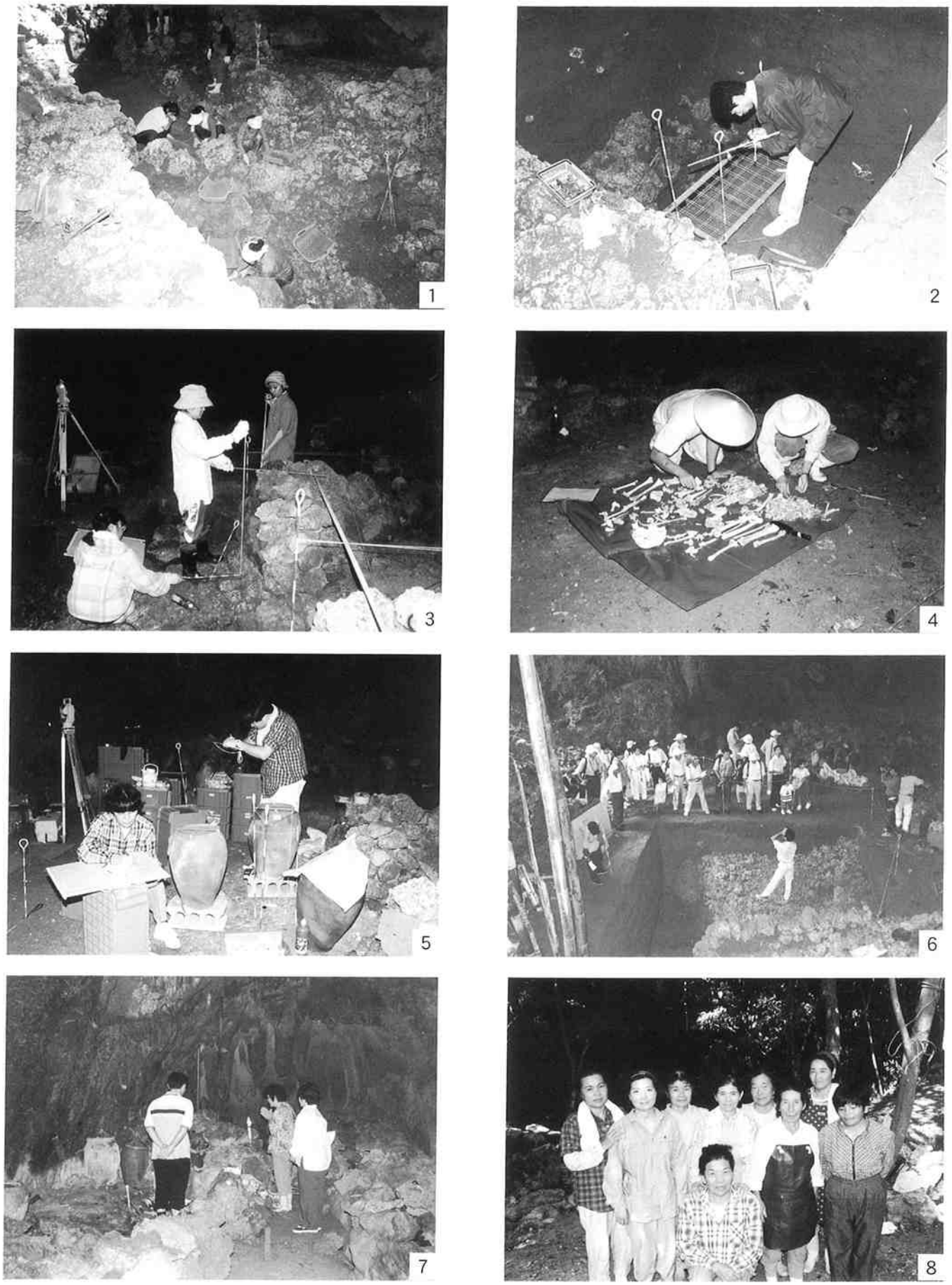
図版６　10号区画検出状況２　1．造成箇所掘り下げ前　2．2層検出(上段)　3．同(中段)　4．2層セクション(上段)　5．同(中段)　6．4層検出(上段)　7．3層検出(上段)　8．区画積み(南側)及び下層造成状況



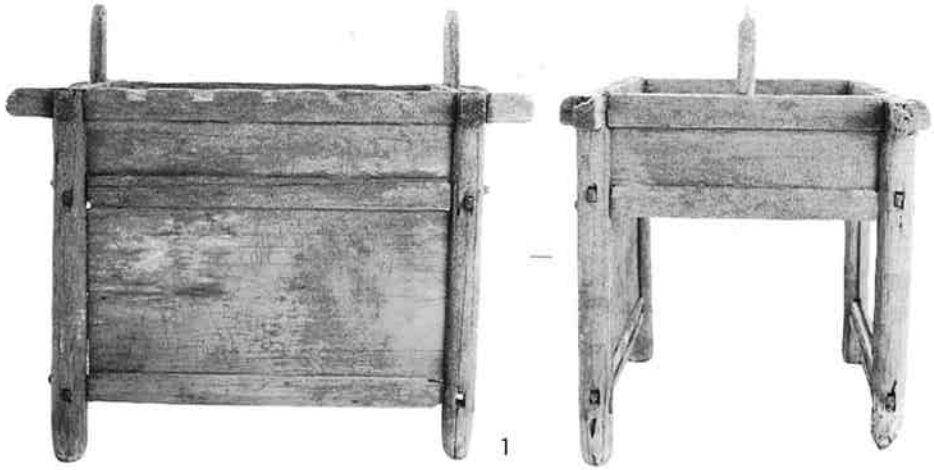
図版７　11号区画上段検出状況　1.掘り下げ前　2.木製品　3.２層検出　4.貝匙出土　5.２層上面検出
6.造成層検出　7・8.同セクション

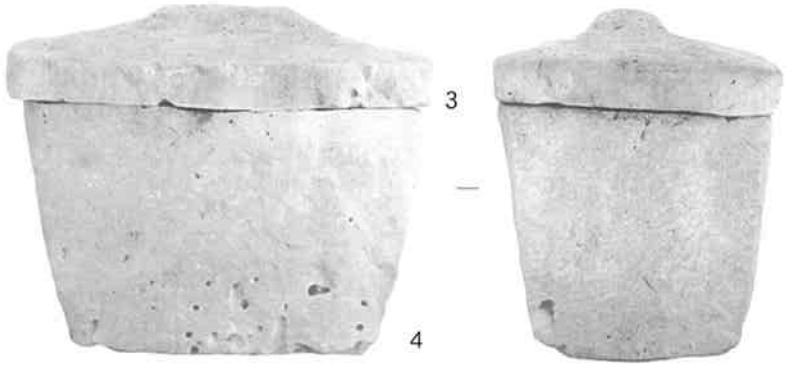


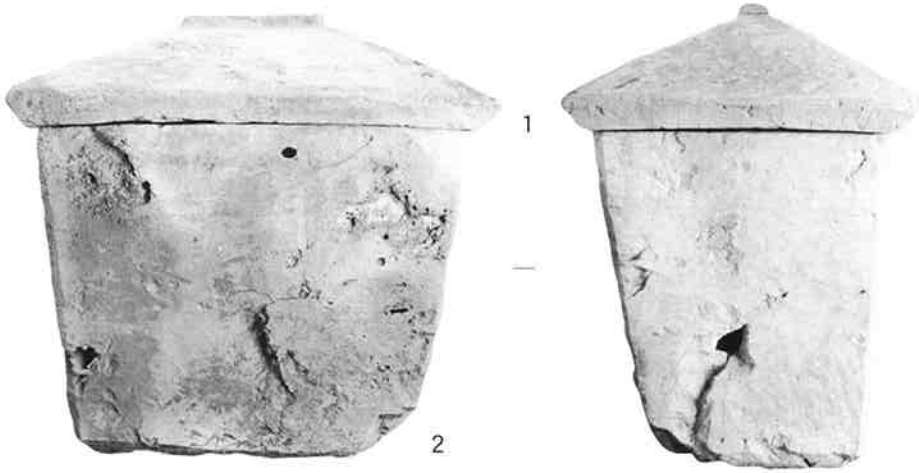
図版８　遺物検出・厨子内状況　１．井戸様遺構内人骨　２～４．遺物出土状況　５．厨子内遺物　６．厨子内の石　７・８．納骨状況

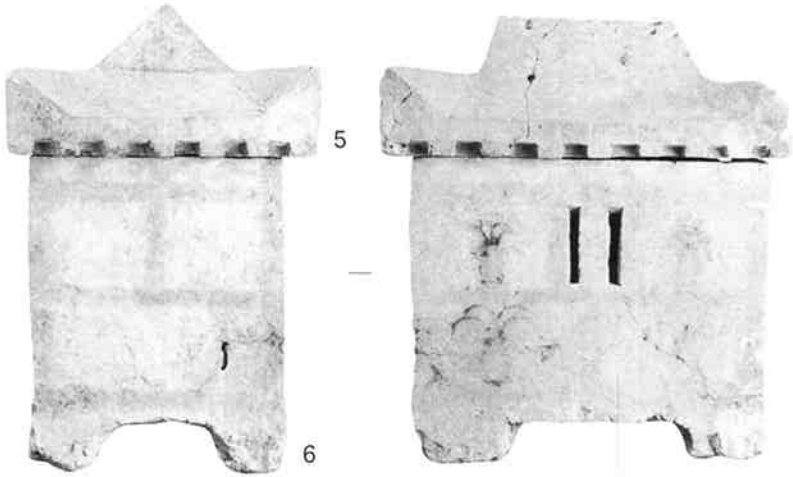


図版９　調査光景　１～５．調査状況　６．現場説明会　７．墓移転の様子　８．調査メンバー









図版10　上左：厨子１　下：厨子２

図版11　厨子３

1

2

3

図版12　厨子４

1

2

3

4

5

6

図版13　厨子５

1

2

3

4

5

6

7

図版14　厨子６

図版15　厨子７

1

4

2

3

図版16　厨子８

1

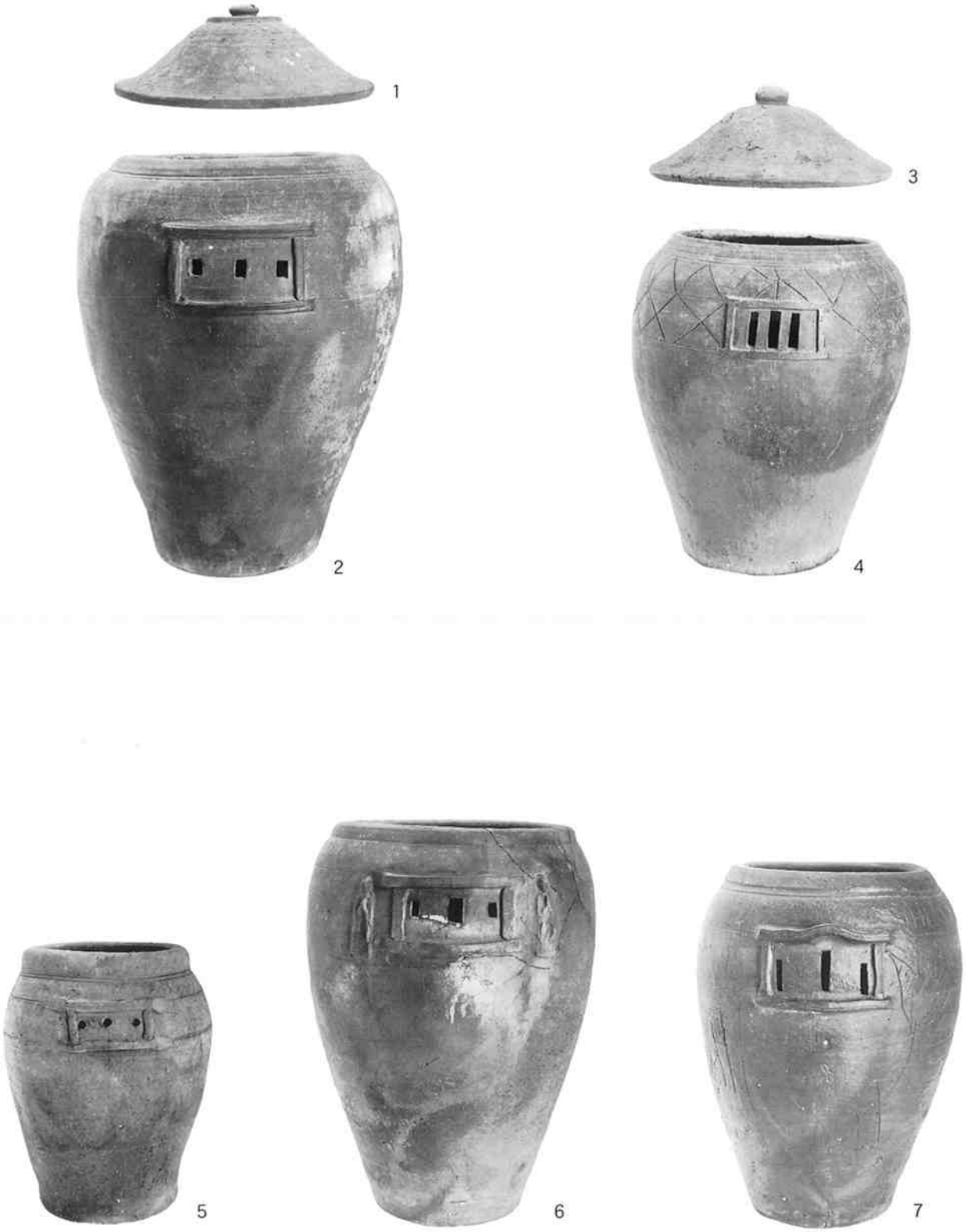
2

3

4

5

図版17　厨子９



図版18　厨子10

図版19　厨子11

1

2

3

5

4

6

図版20　厨子12

図版21　厨子13

1

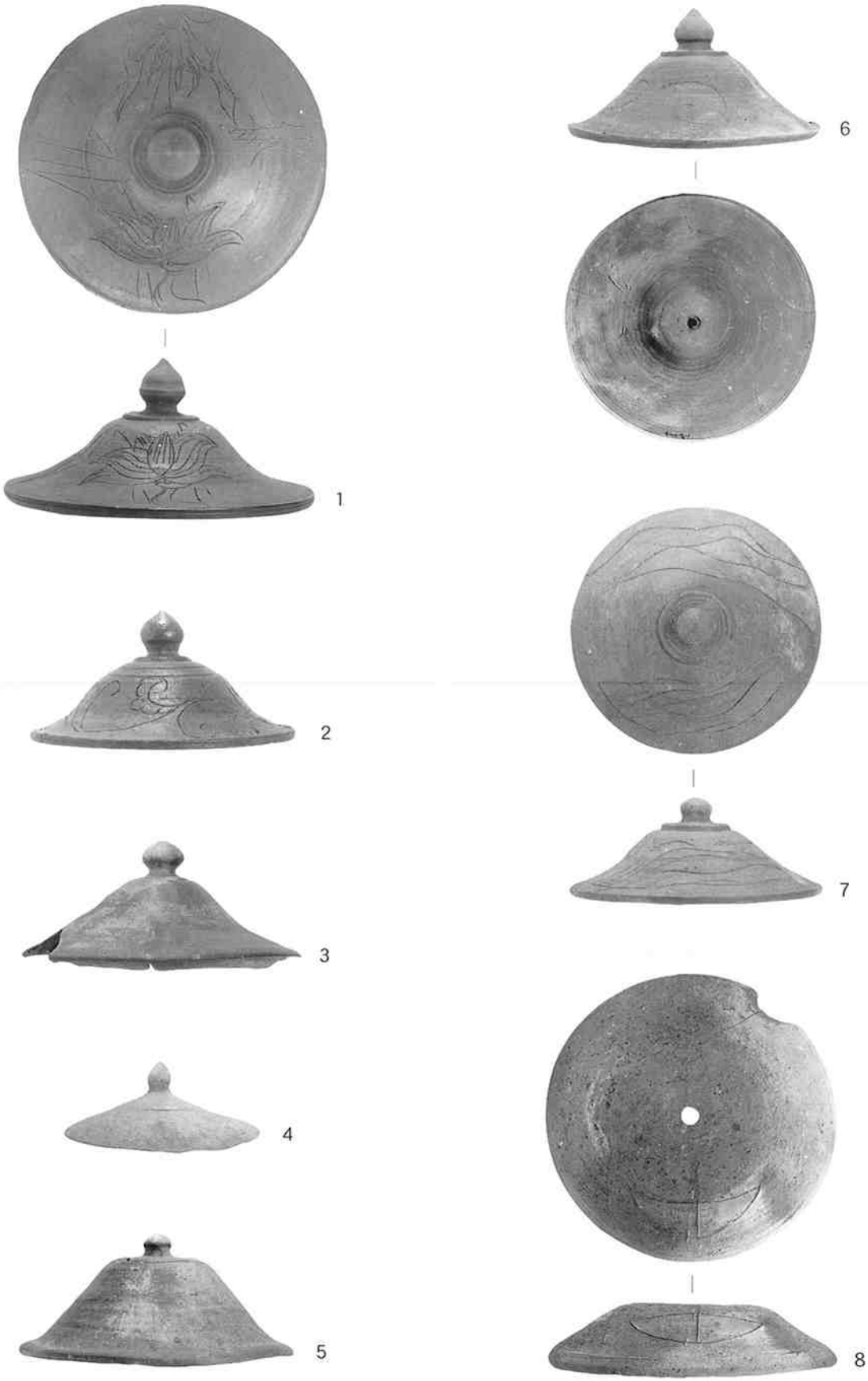
4

2

5

3

図版22　厨子14



図版23　厨子15

1

2

3

4

5

図版24　厨子16

図版25　厨子17

1

2

3

4

5

6

8

9

7

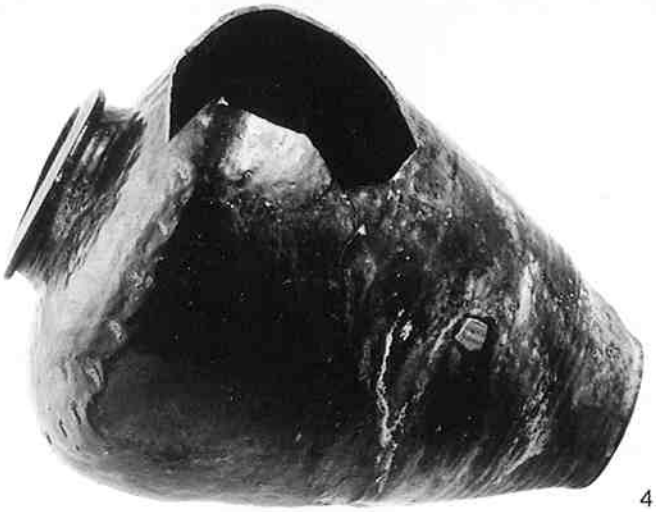
図版26　厨子18

図版27　厨子19

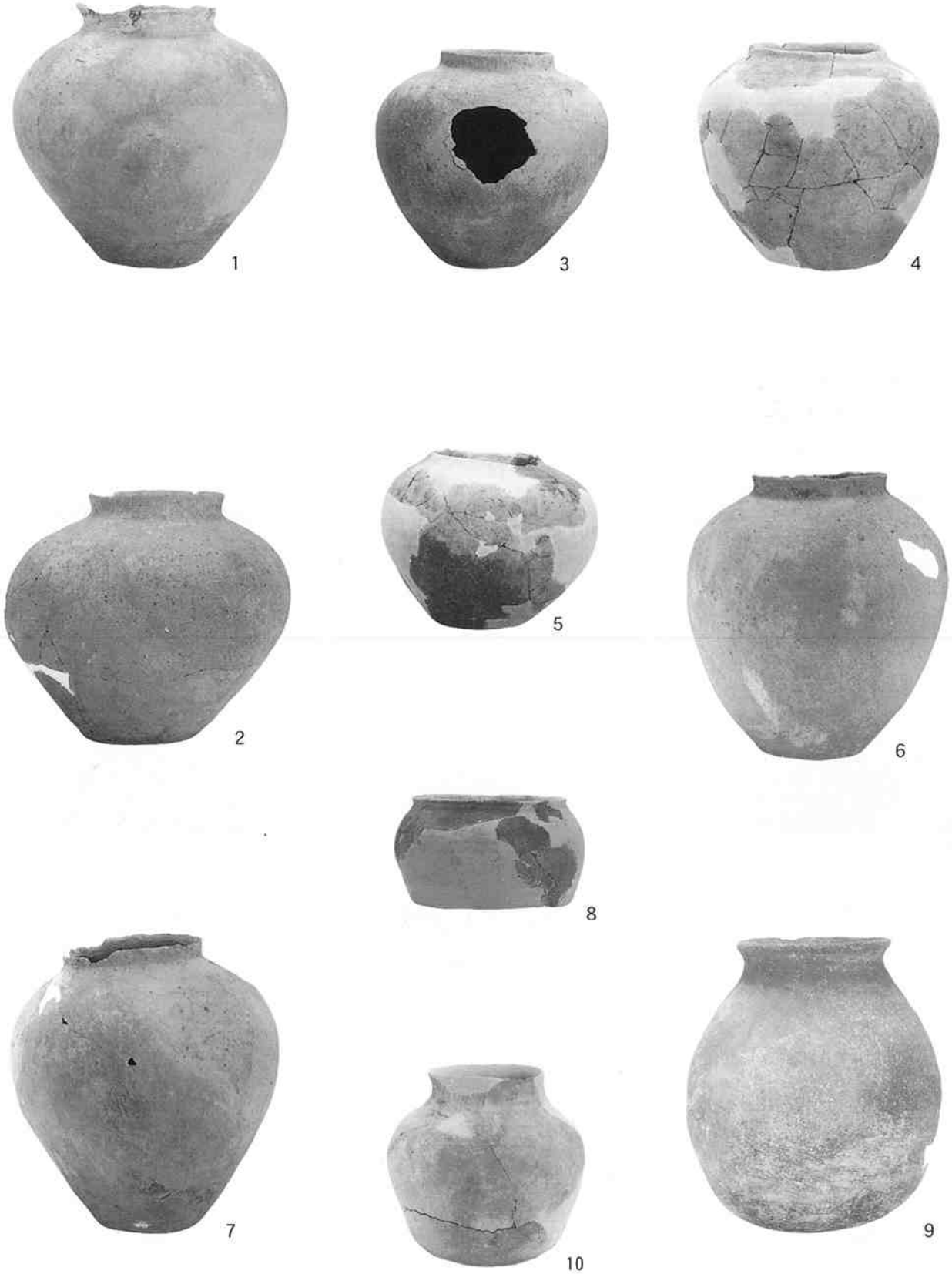
1

2

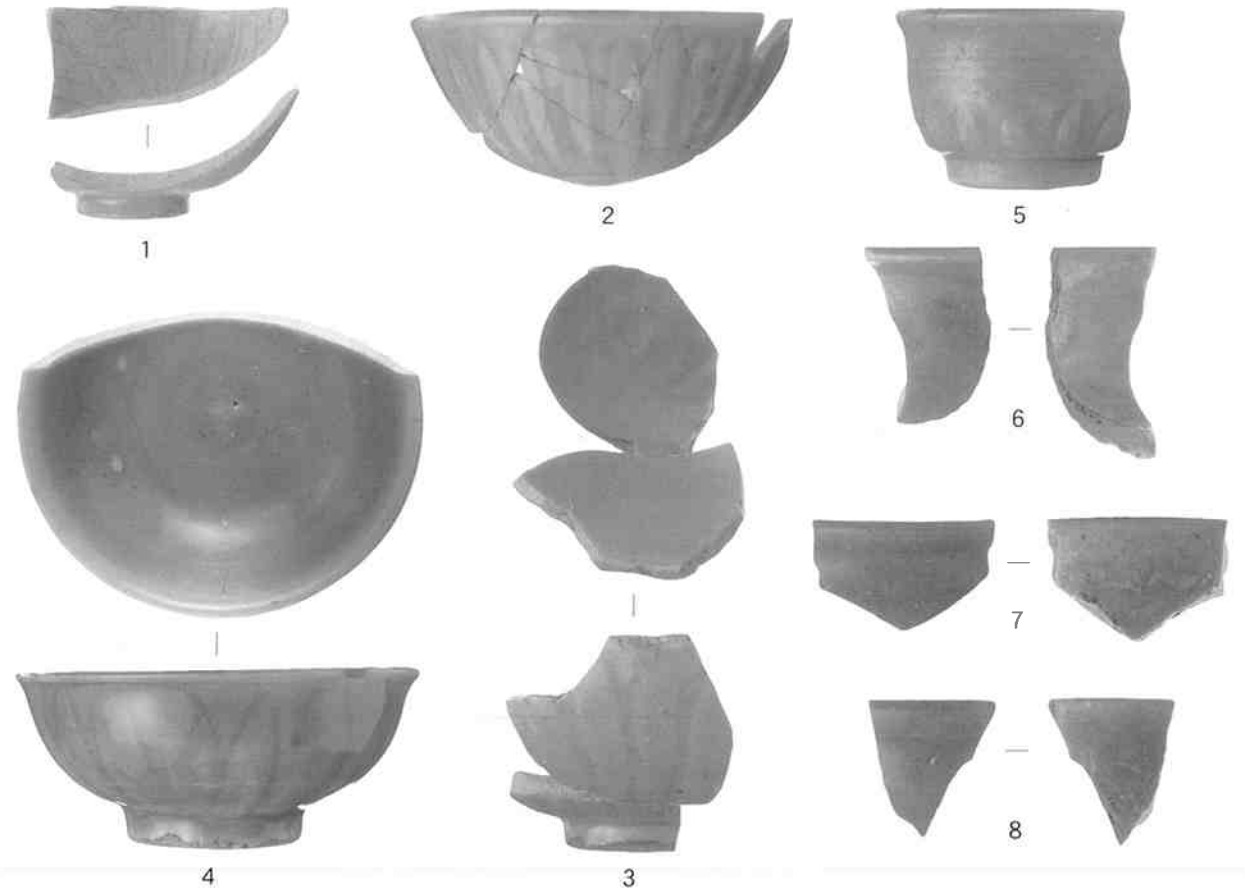
3


4

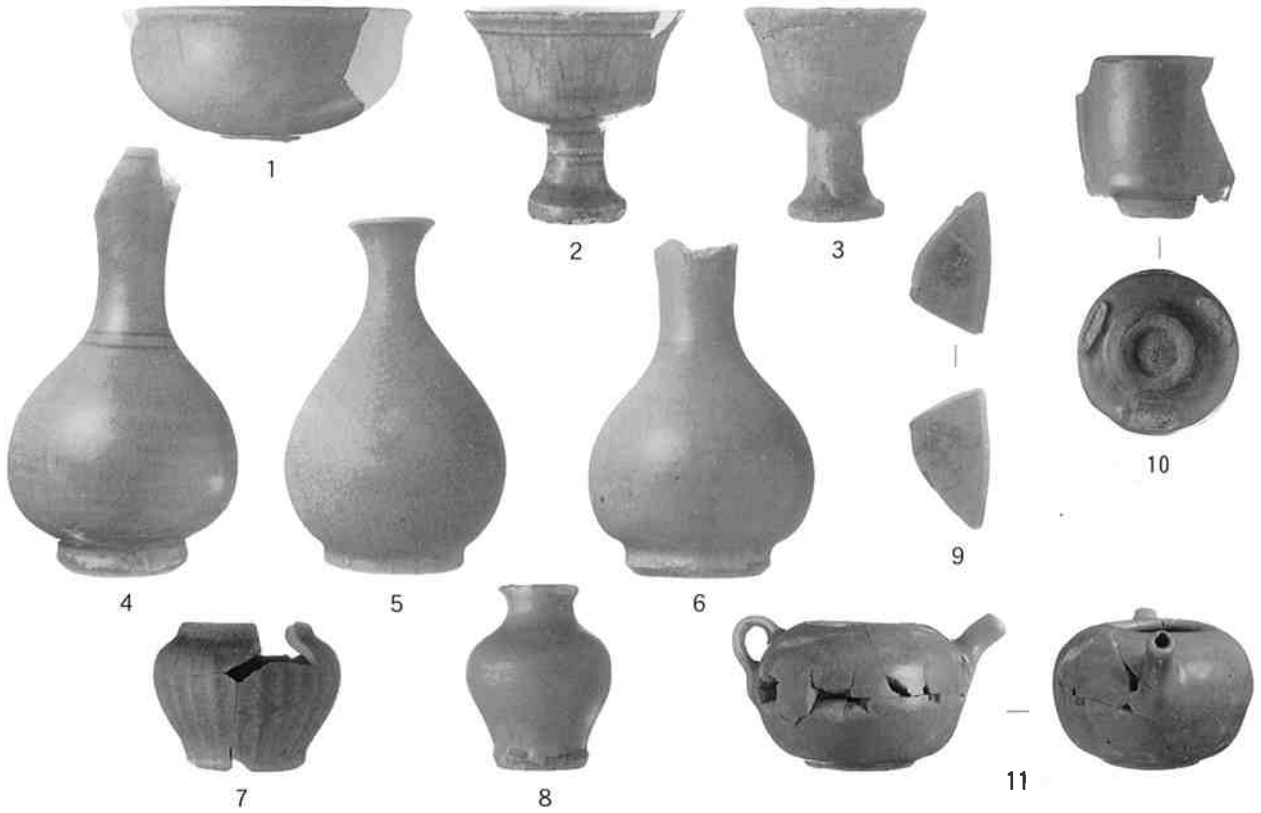
図版28　厨子20

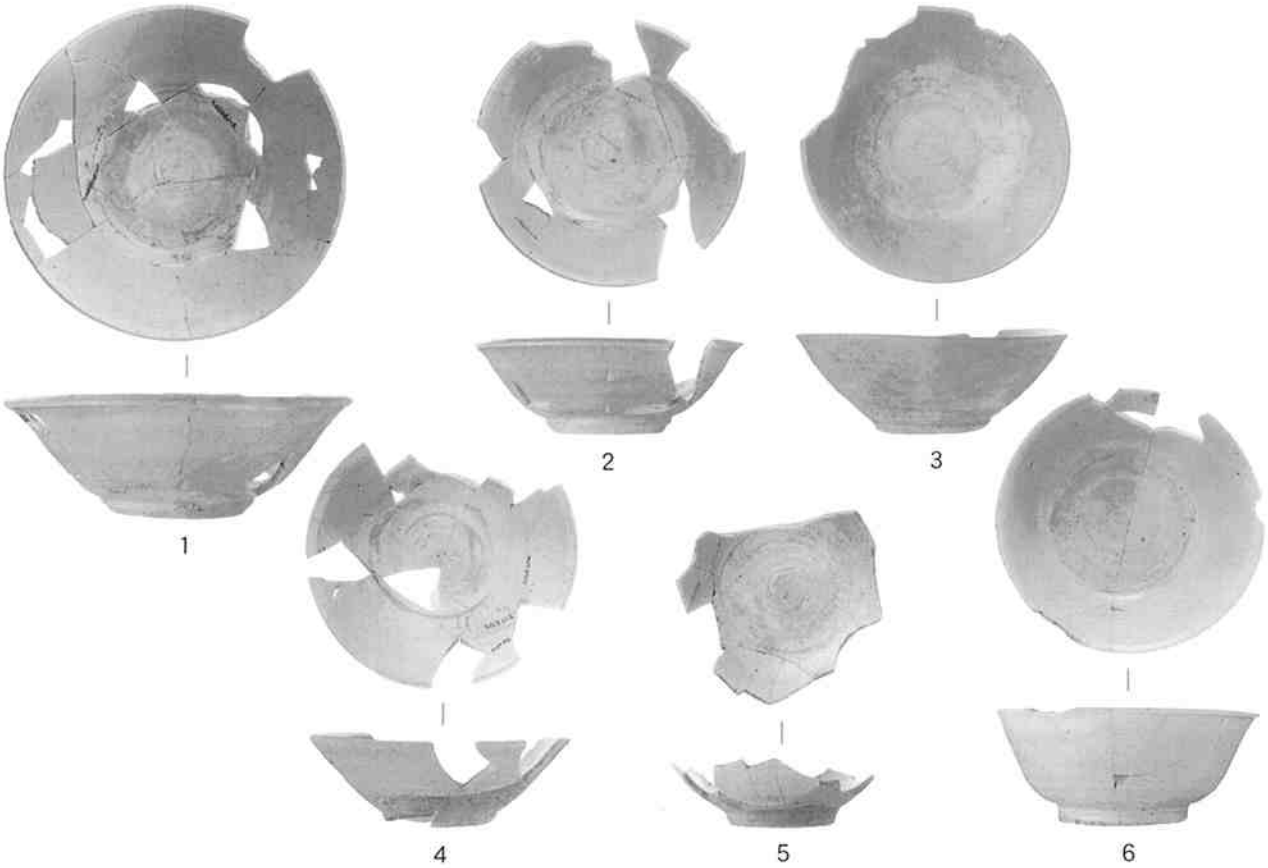


図版29　厨子21

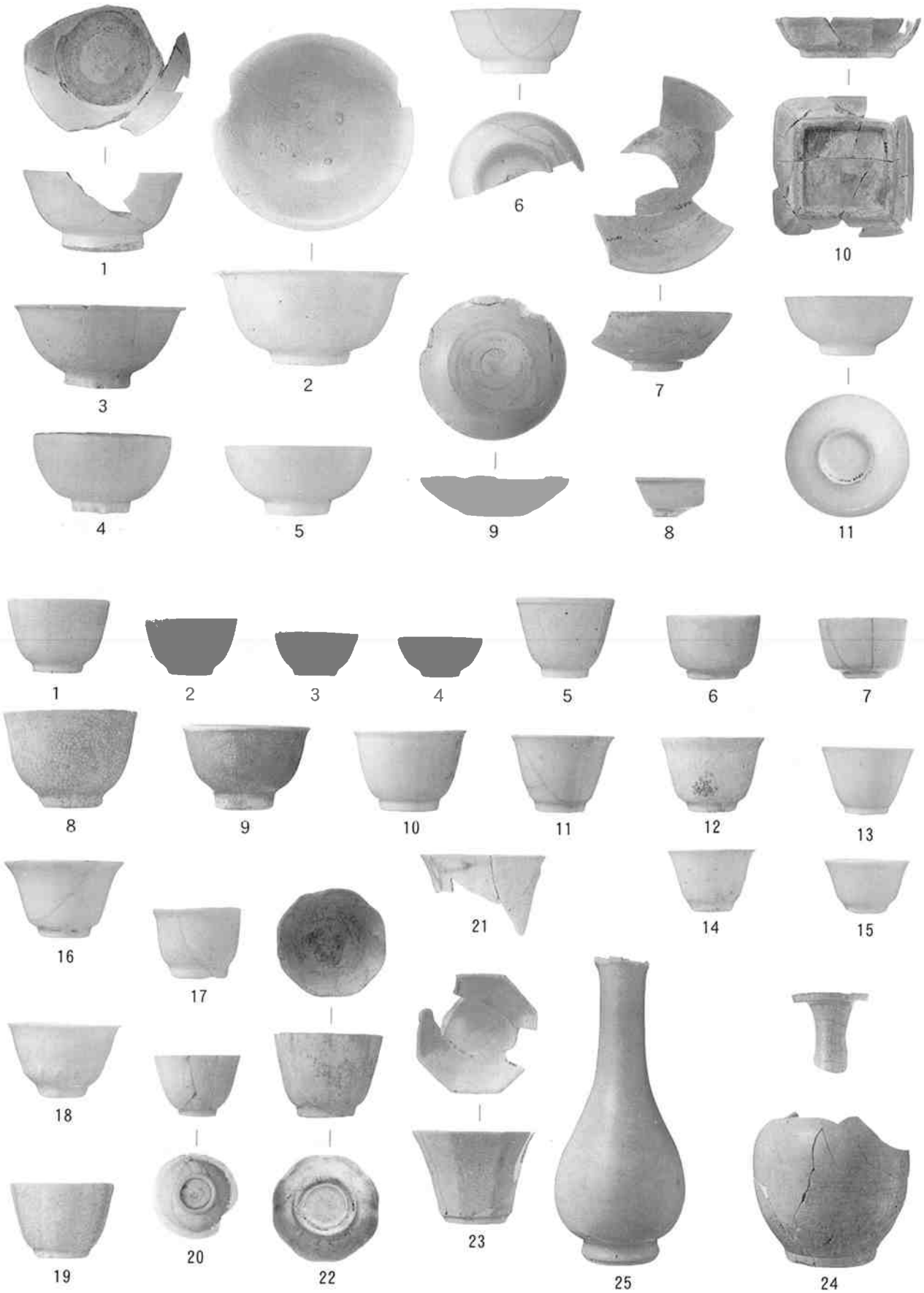


図版30　上：青磁１　下：青磁２

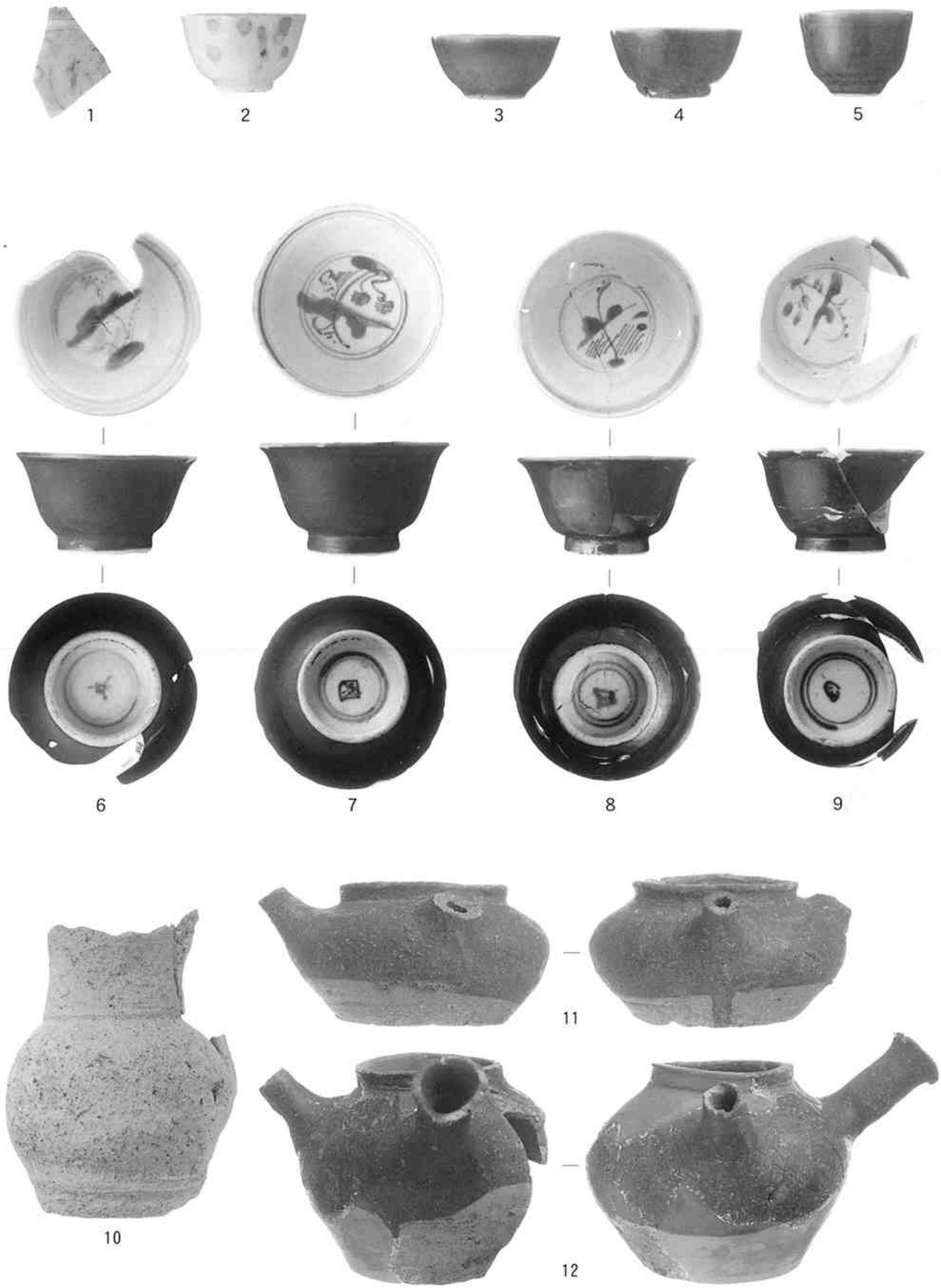




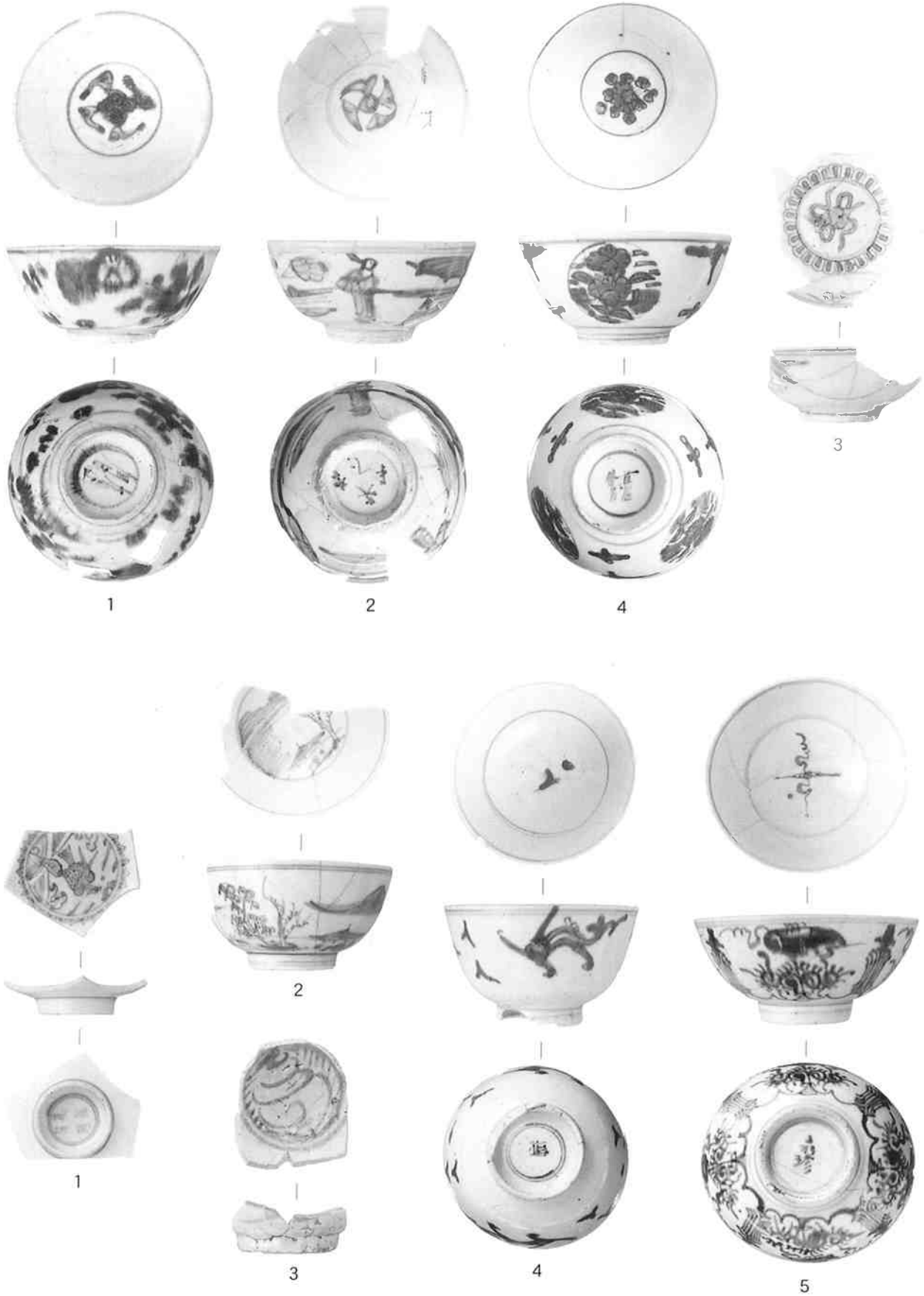
図版31　上：青磁３　下：白磁１



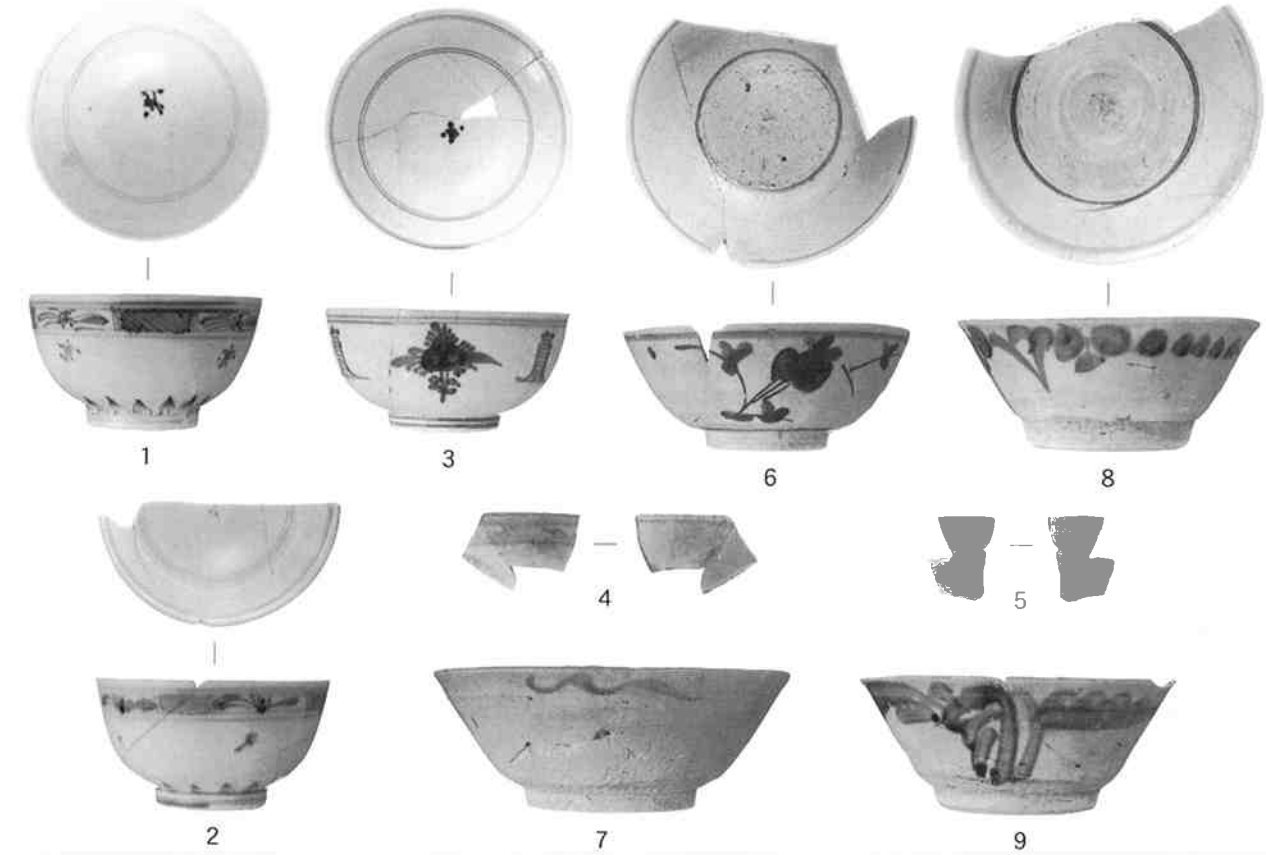
図版32　上：白磁２　下：白磁３

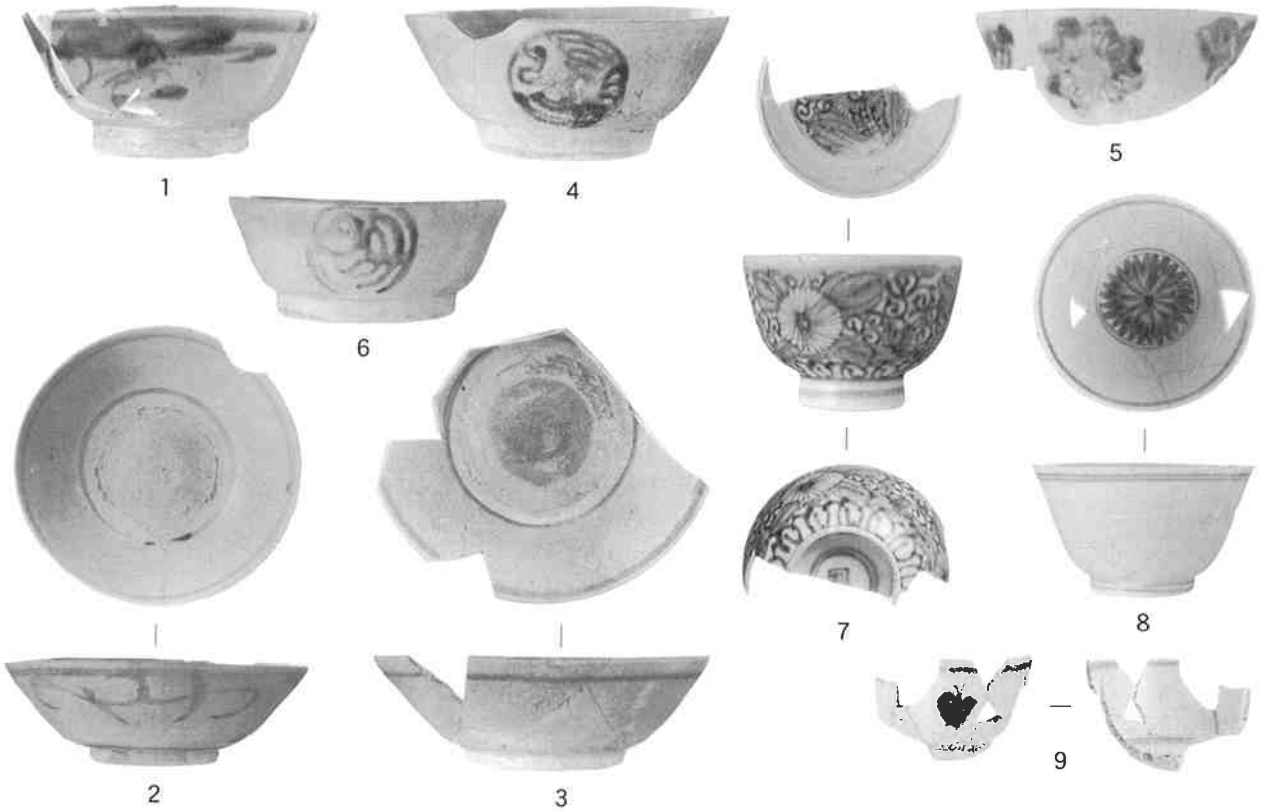


図版33　上左：中国産色絵　上右：瑠璃釉　中：鉄釉染付　下：中国産施釉陶器

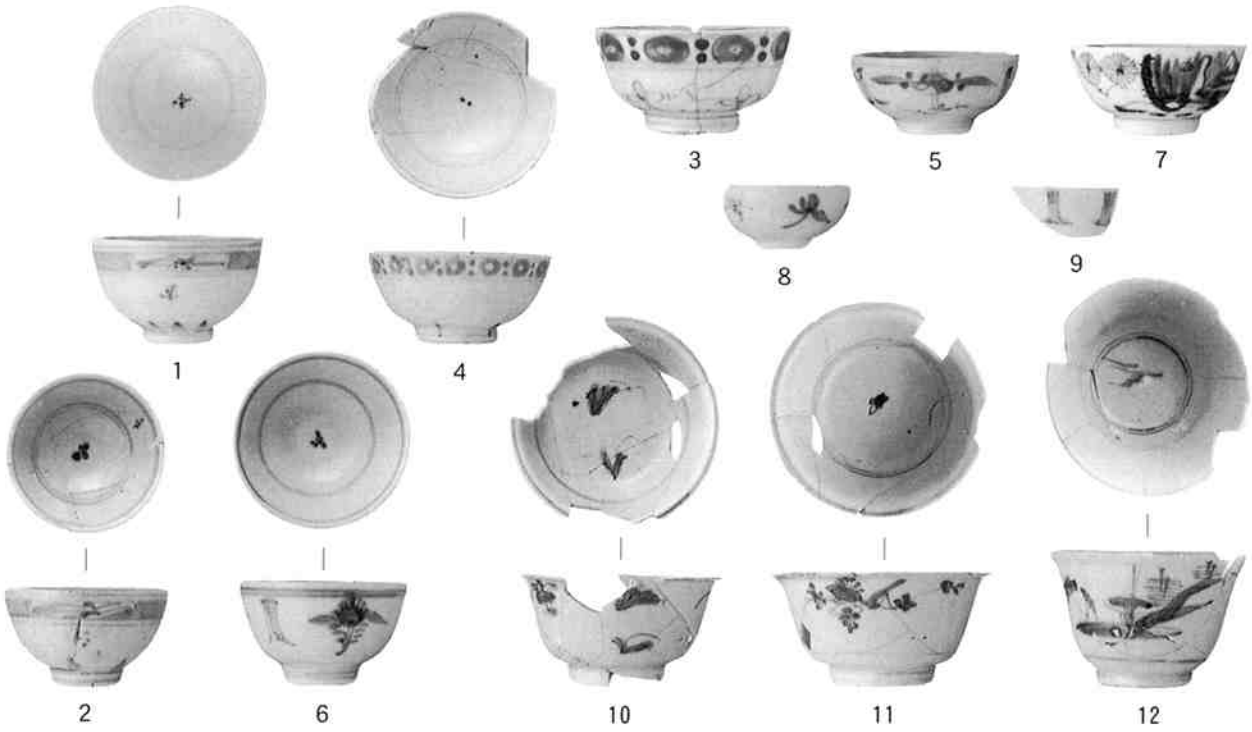


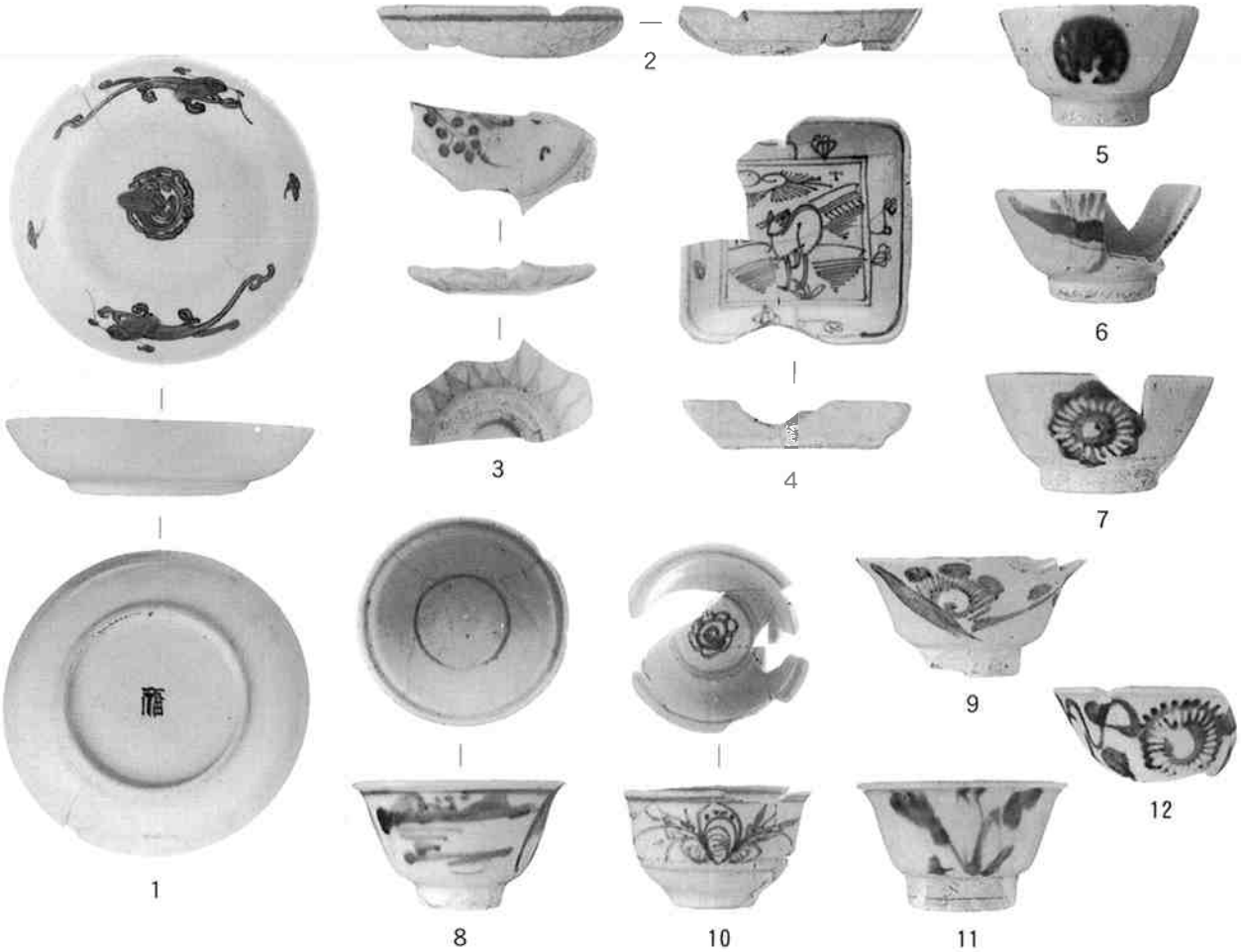
図版34　上：青花１　下：青花２



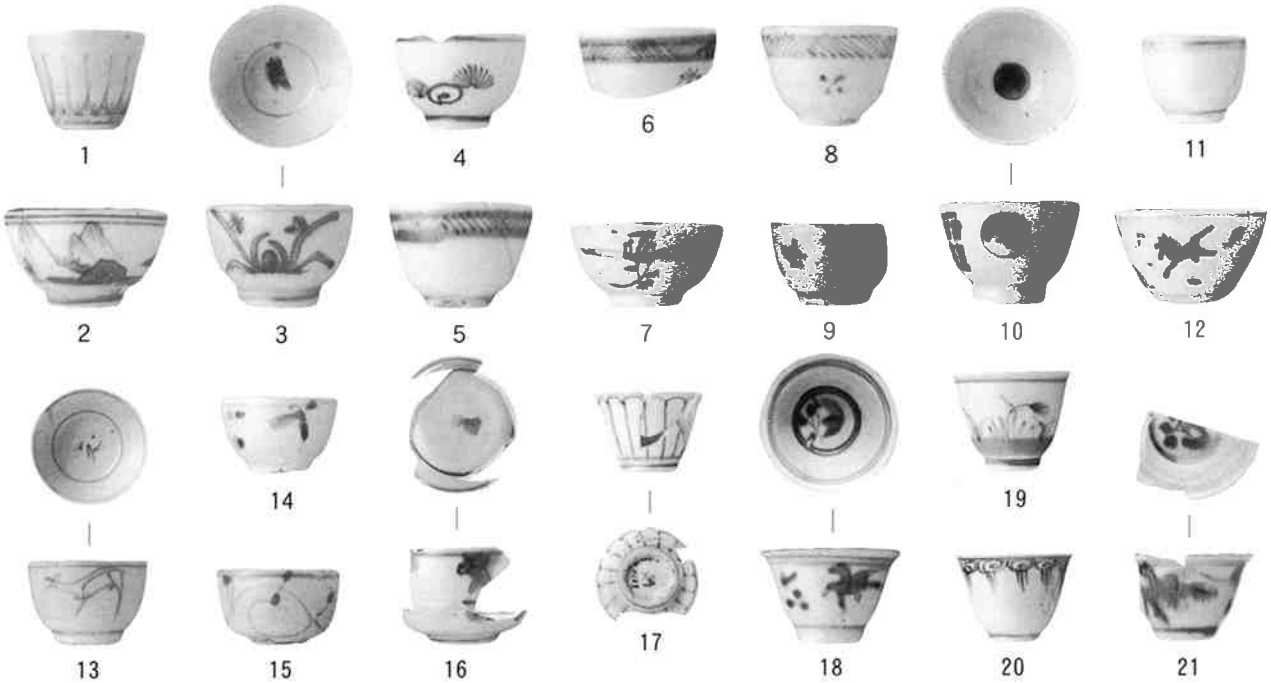


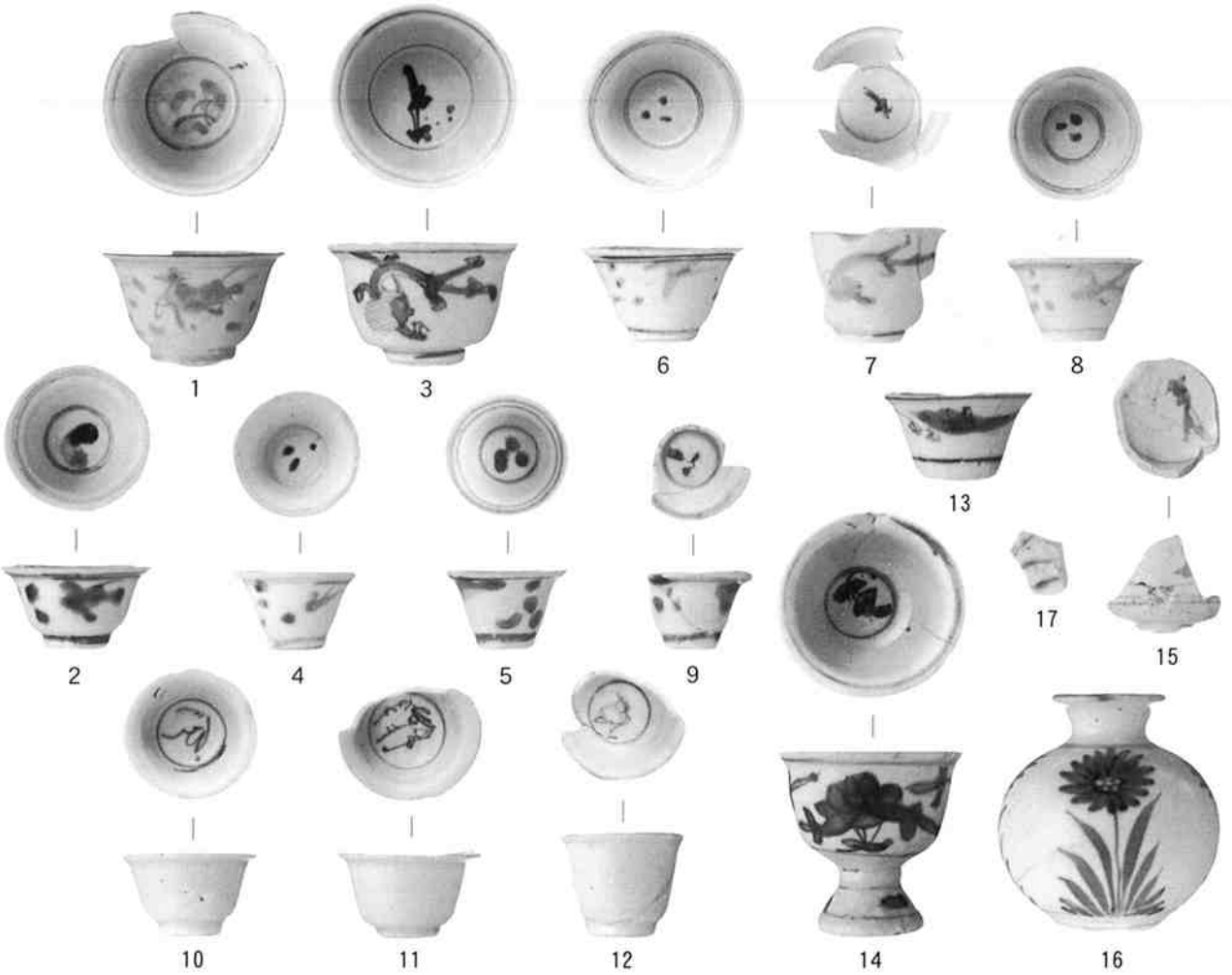
図版35　上：青花３　下：青花４





図版36　上：青花５　下：青花６





図版37　上：青花７　下：青花８

1

2

3

4

5

図版38　中国産褐釉陶器１

1

2

3

4

5

6

図版39　中国産褐釉陶器２

1

3

4

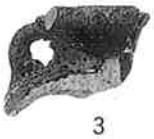
2

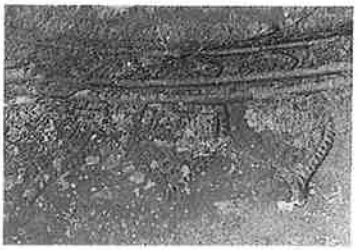
5

6

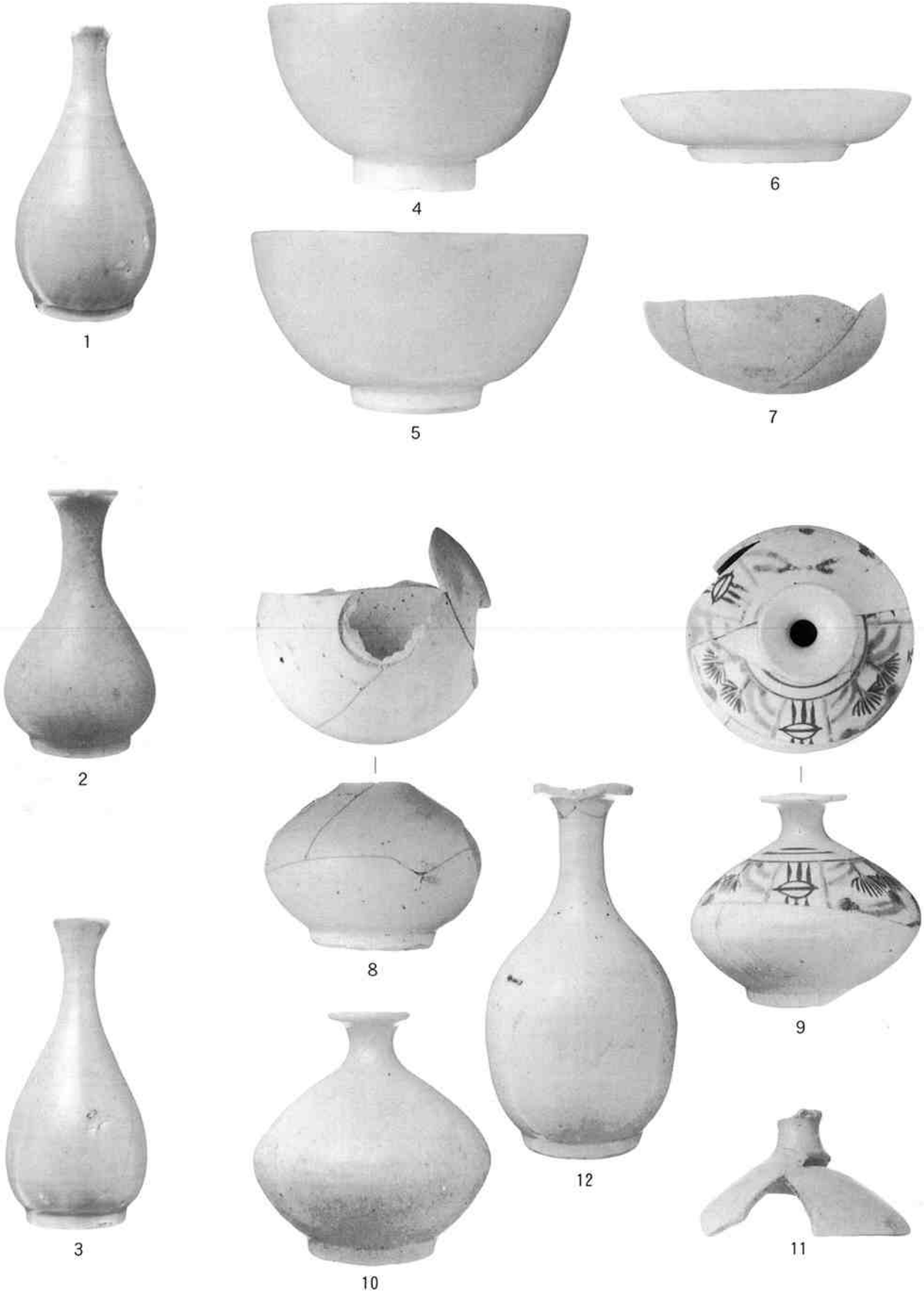
7

図版40　中国産褐釉陶器３

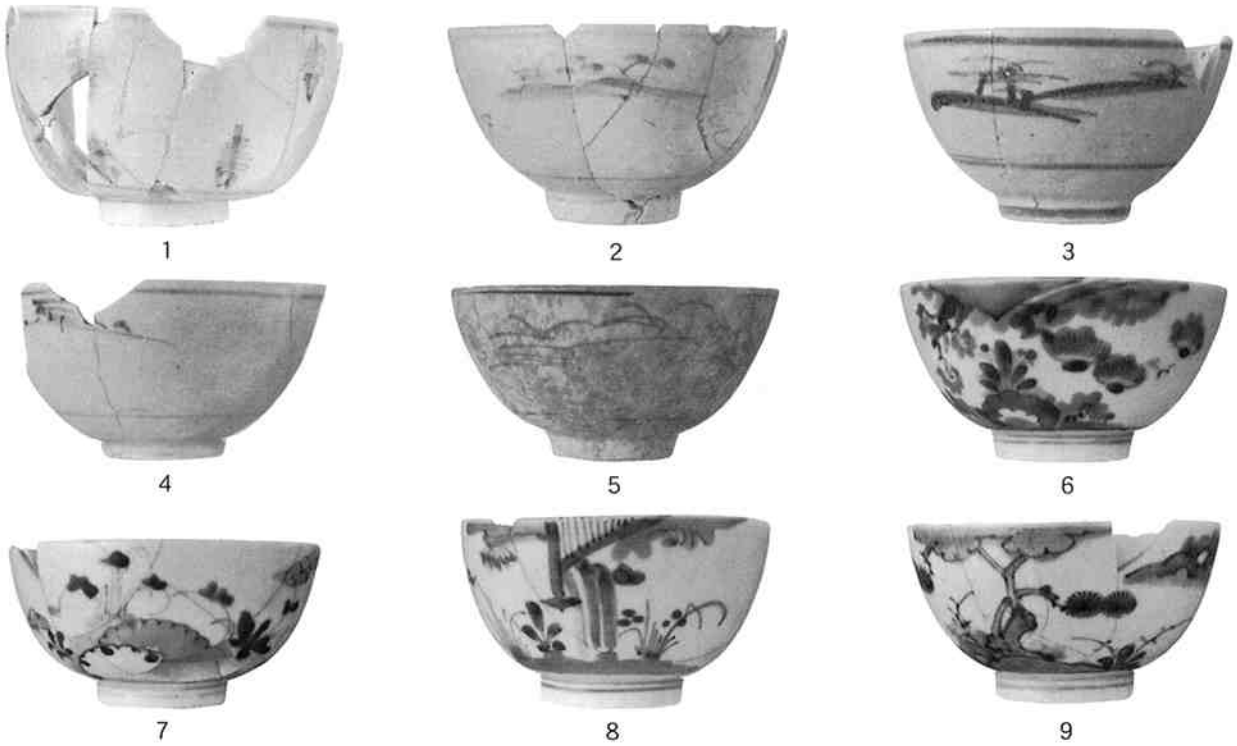




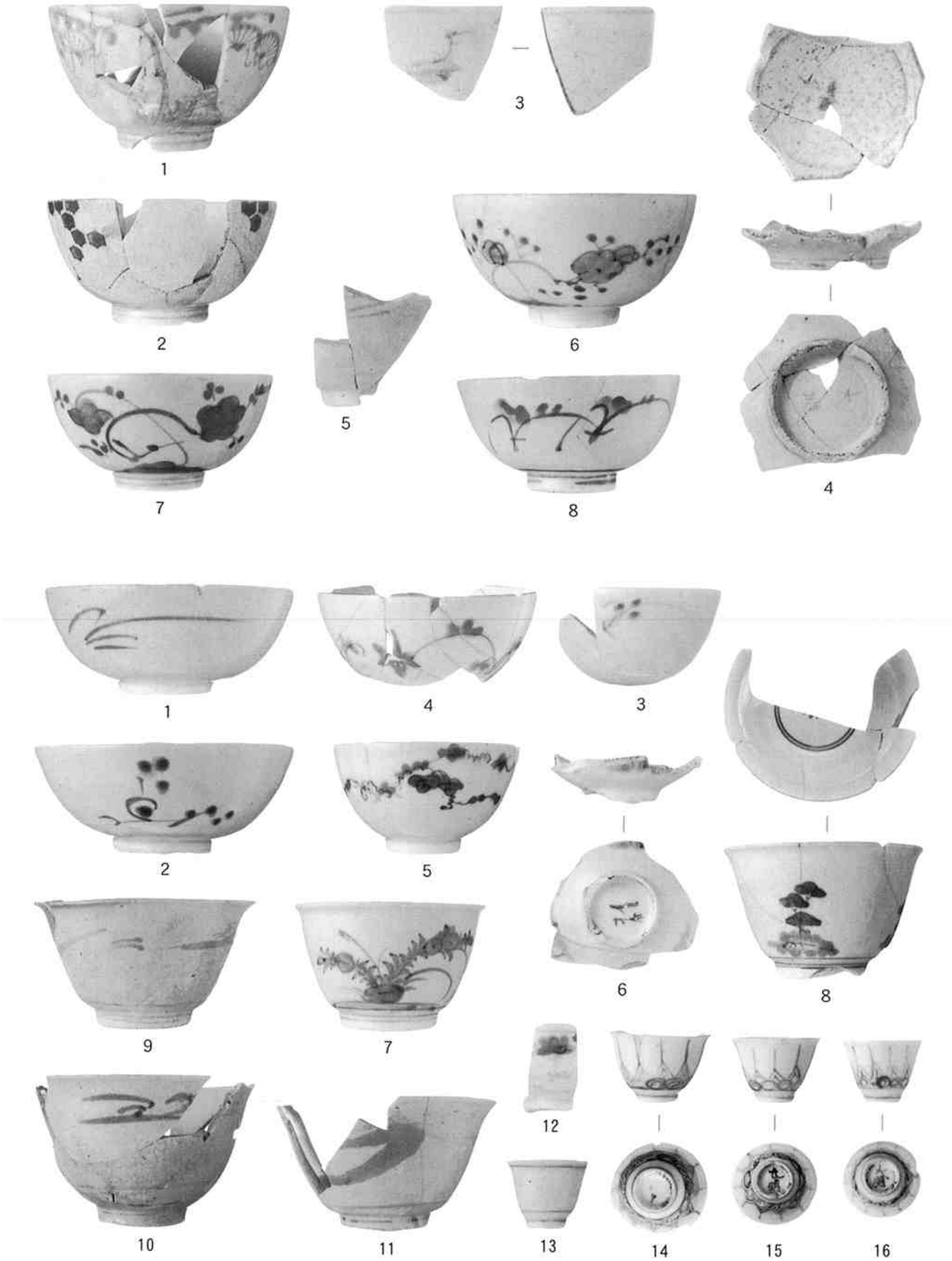
図版41　上：タイ産褐釉陶器１　中：タイ産褐釉陶器２　下右：タイ産炻器



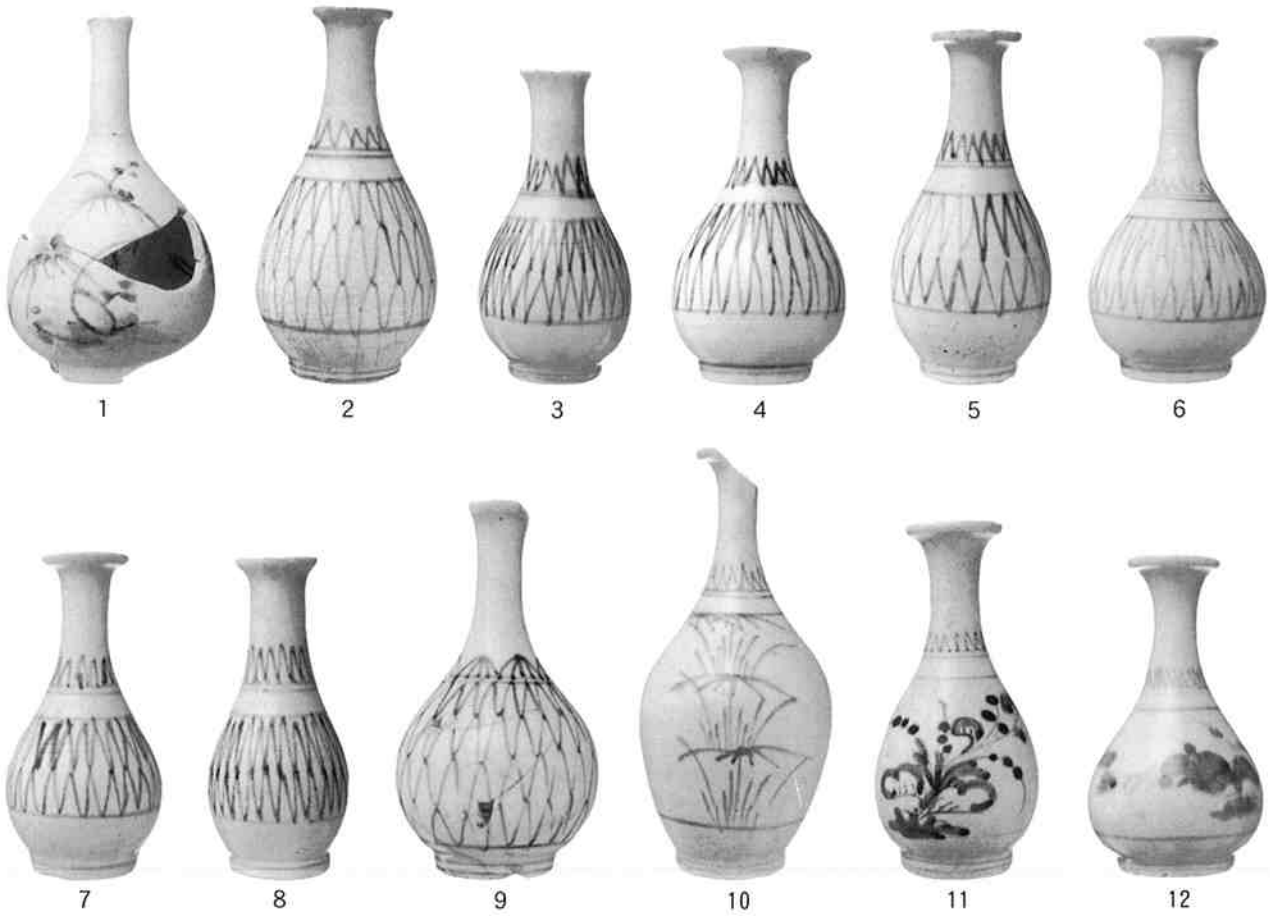
図版42　左：本土産青磁　上右：本土産白磁　下右：本土産色絵



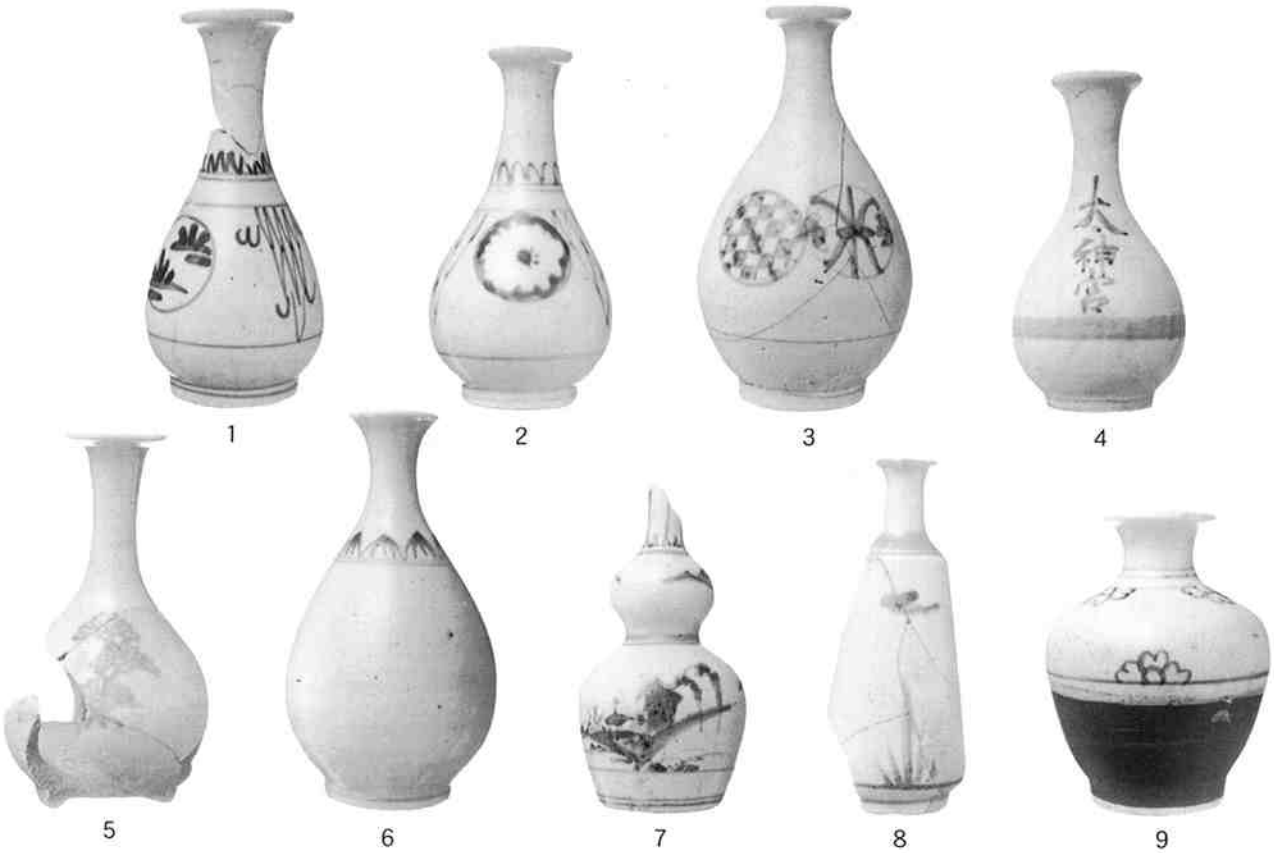
図版43　上：本土産染付１　下：本土産染付２



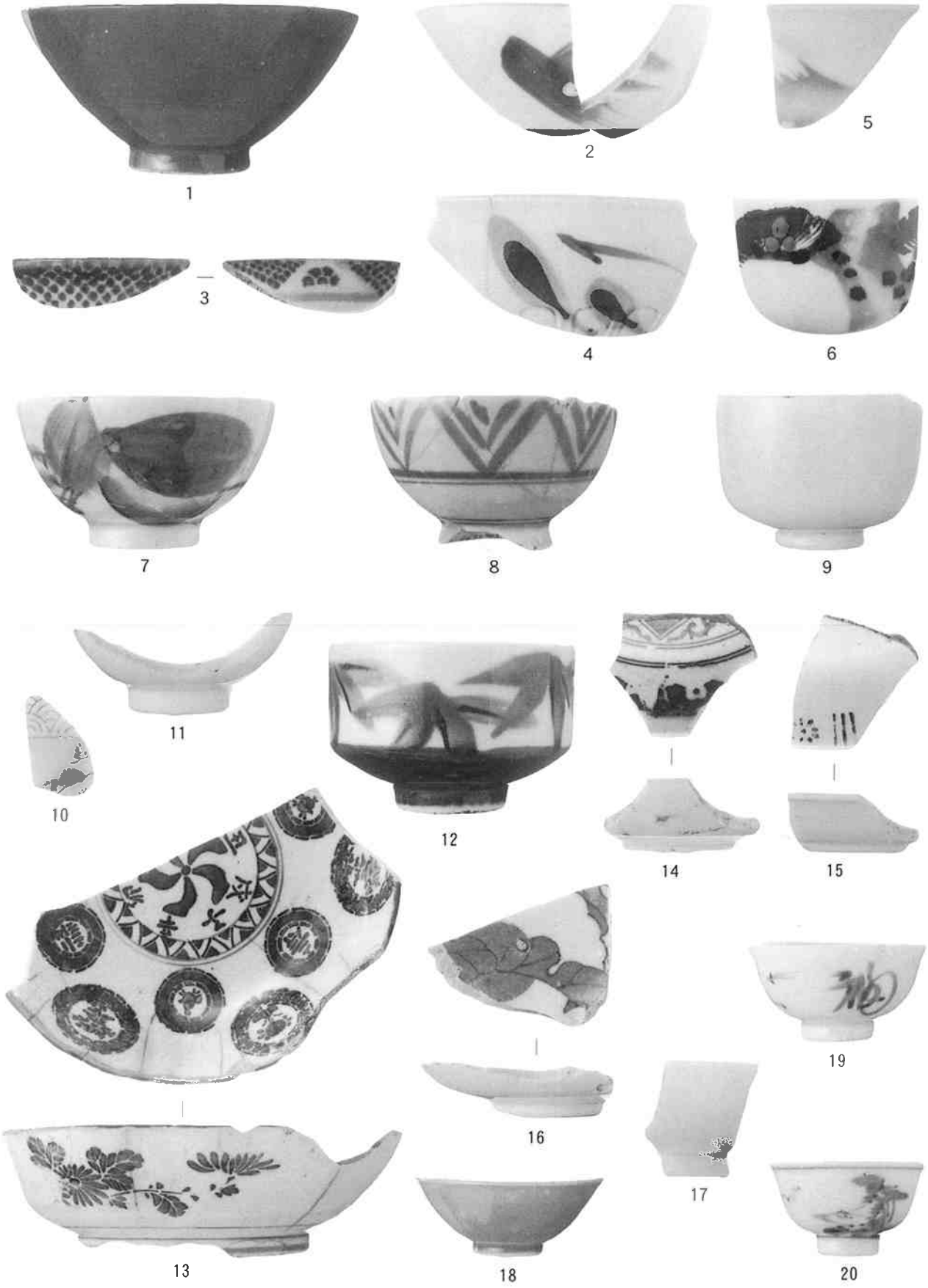
図版44　上：本土産染付３　下：本土産染付４



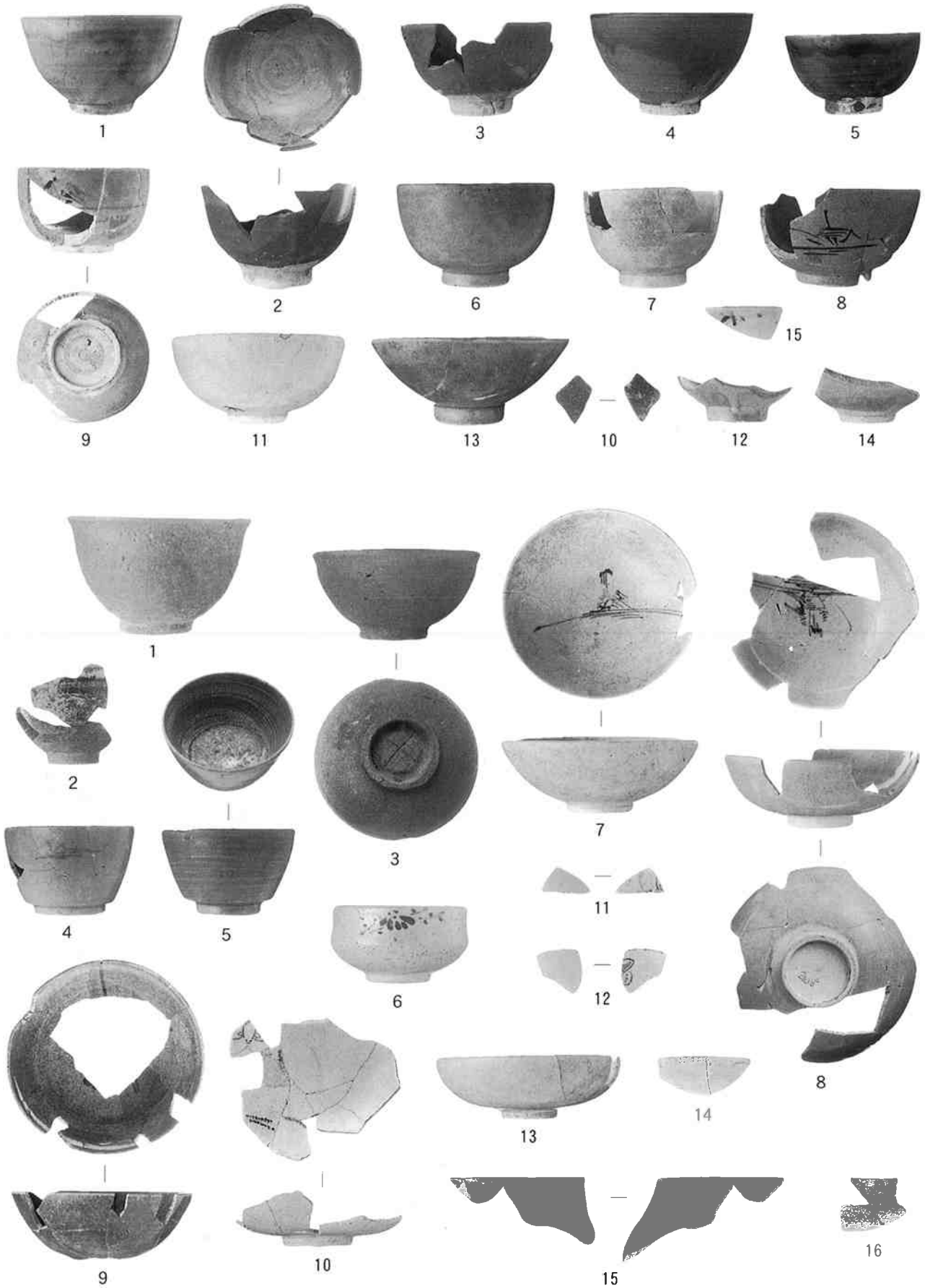
図版45　上：本土産染付５　下：本土産染付６



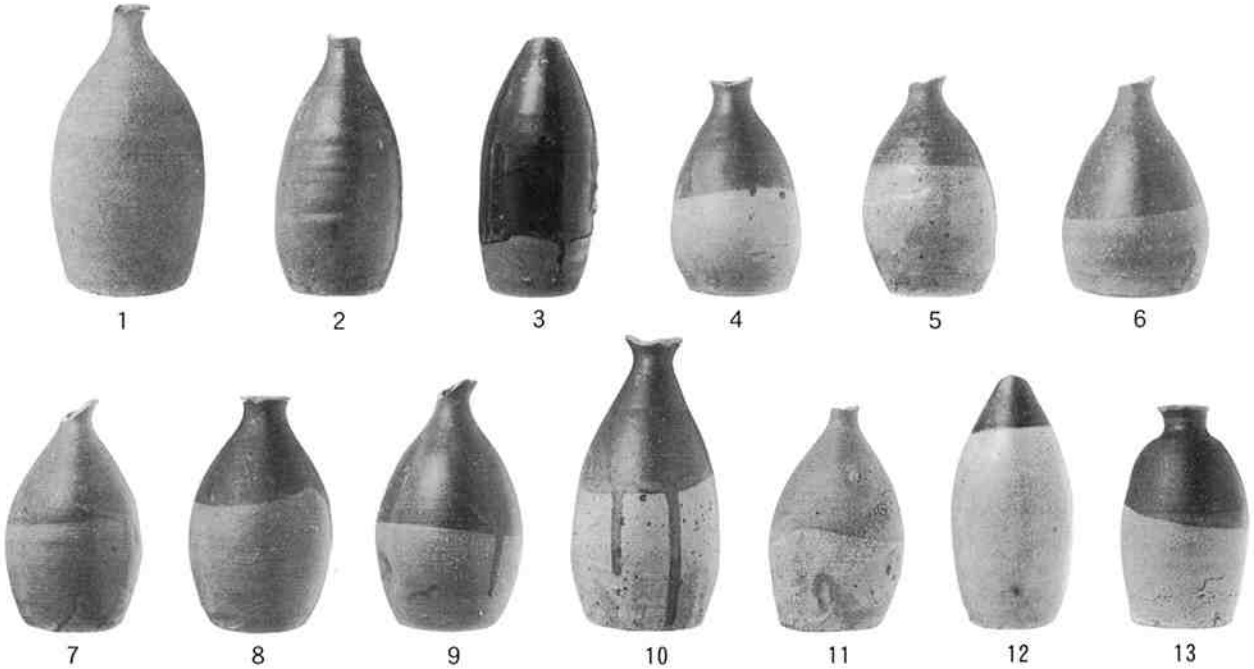
図版46　上：本土産染付７　下：本土産染付８

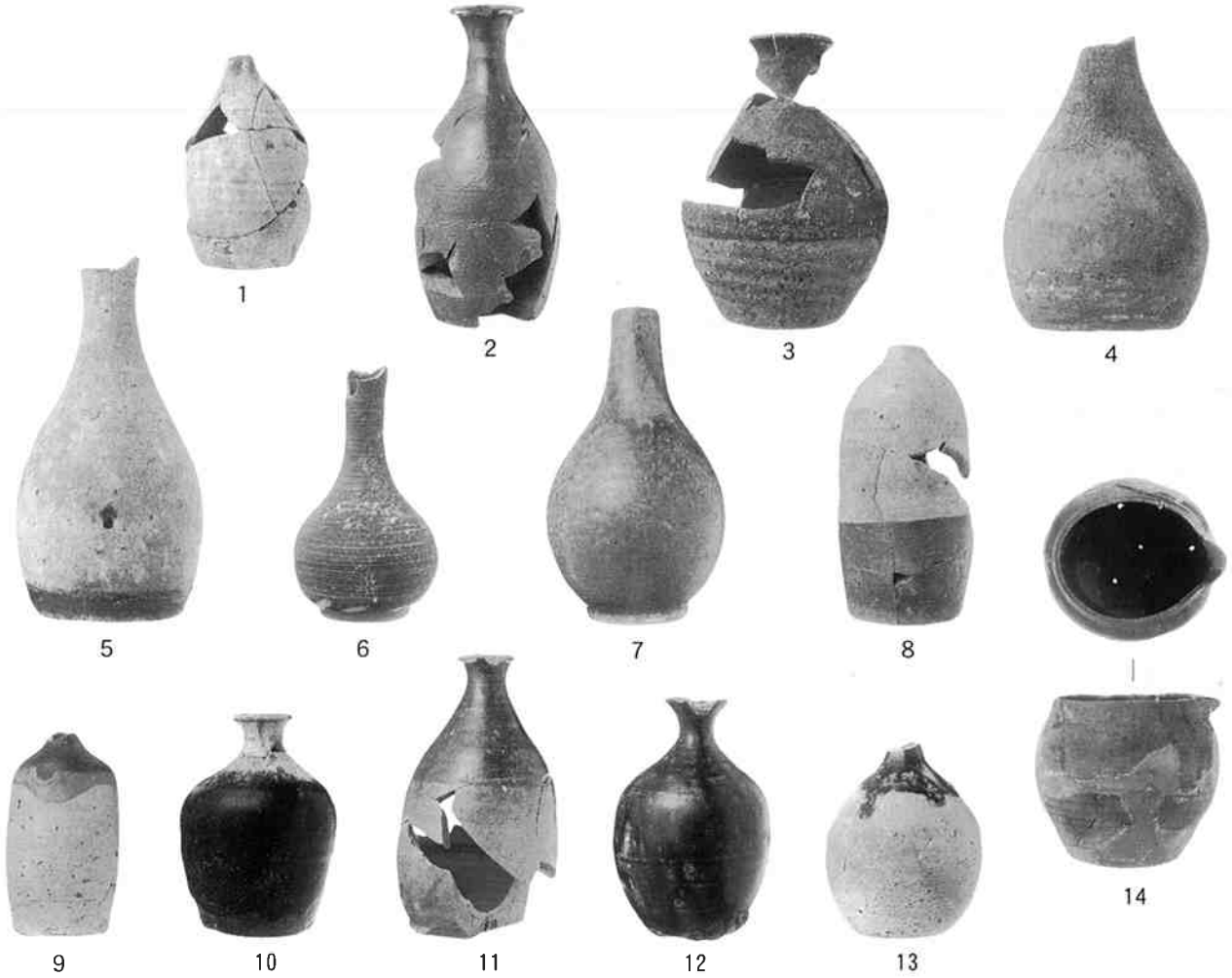


図版47　本土産印判手

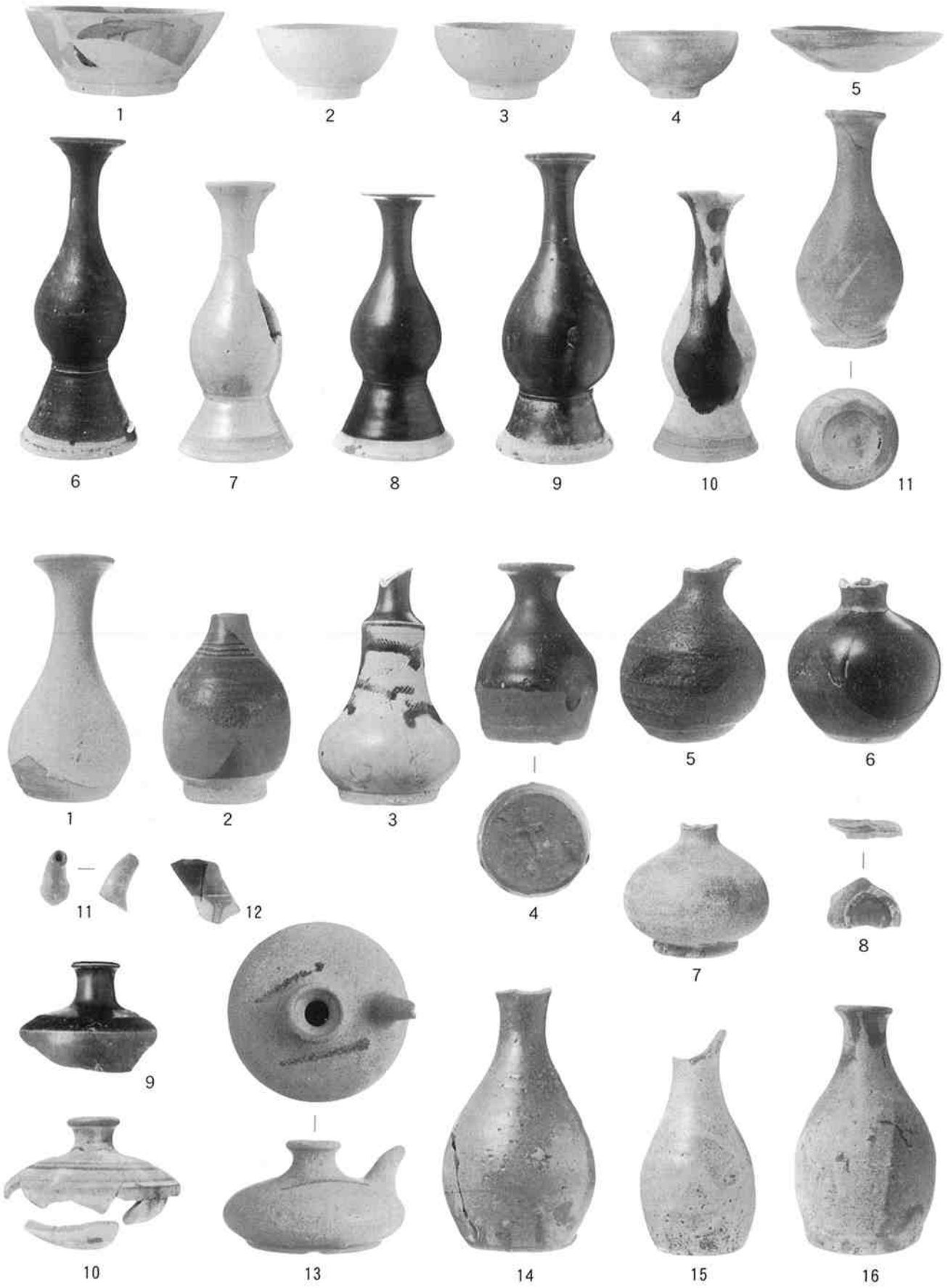


図版48　上：本土産陶器１　下：本土産陶器２

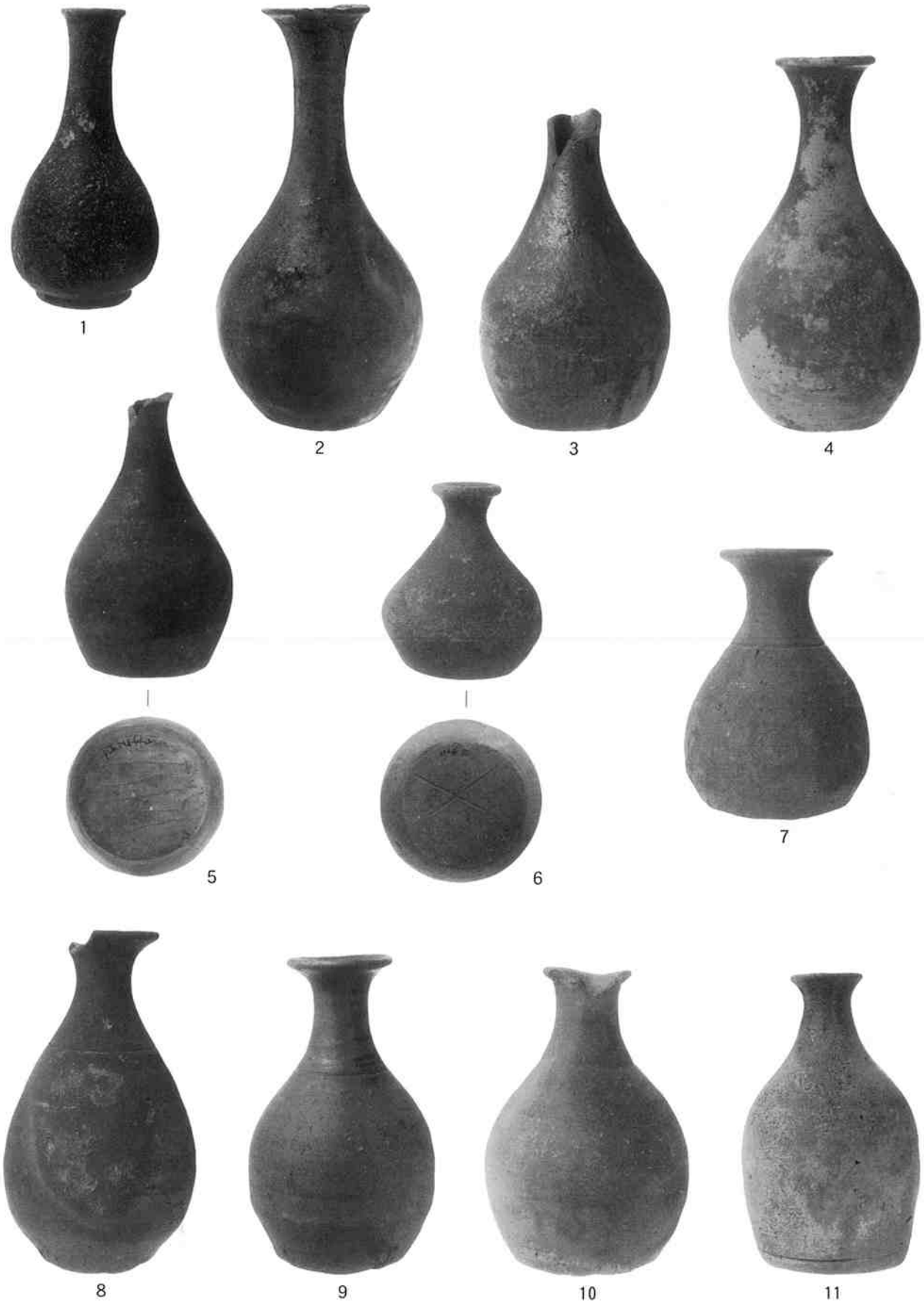




図版49　上：本土産陶器３　下：本土産陶器４

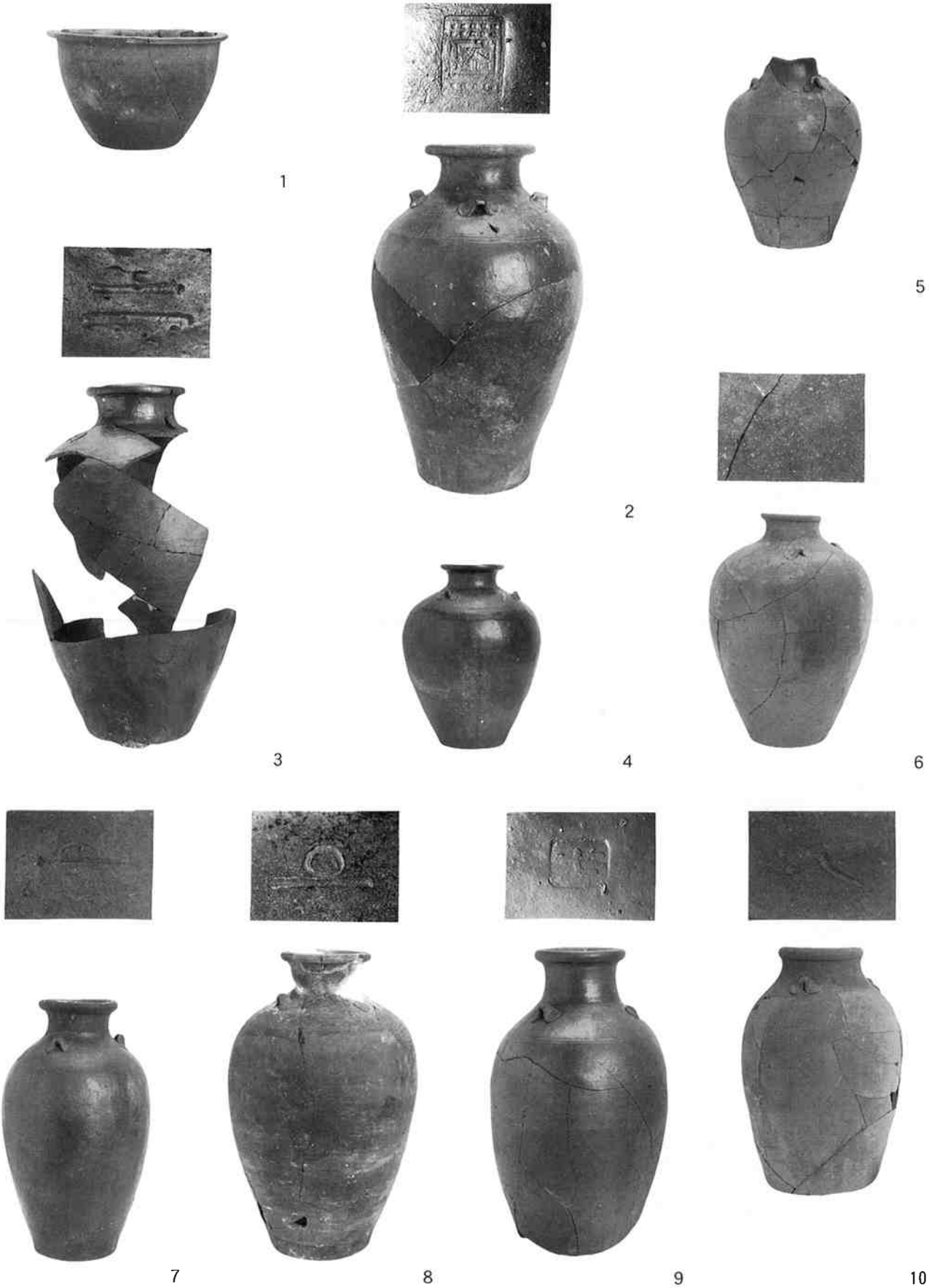


図版50　上：沖縄産施釉陶器１　下：沖縄産施釉陶器２

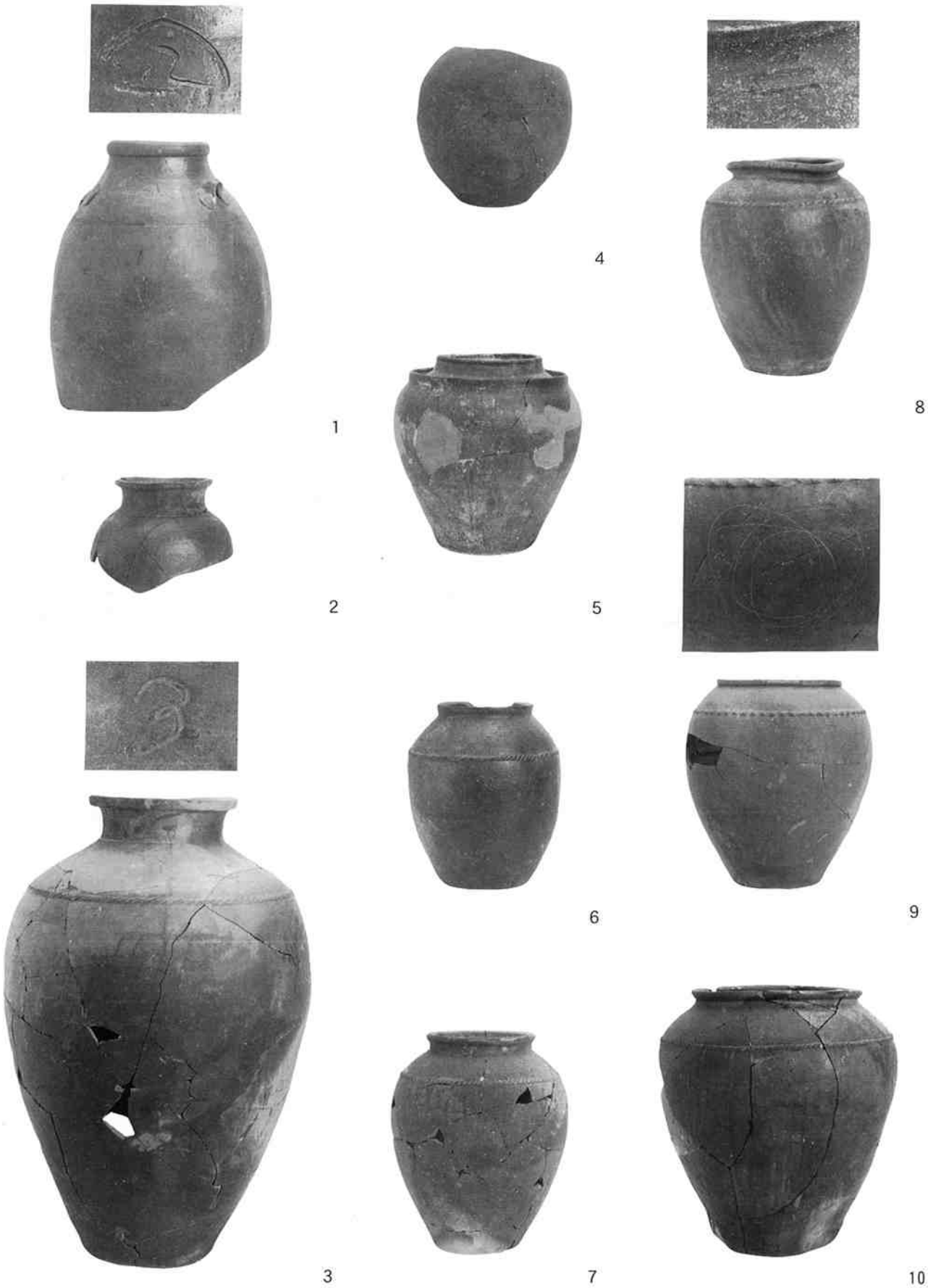


図版51　沖縄産無釉陶器１

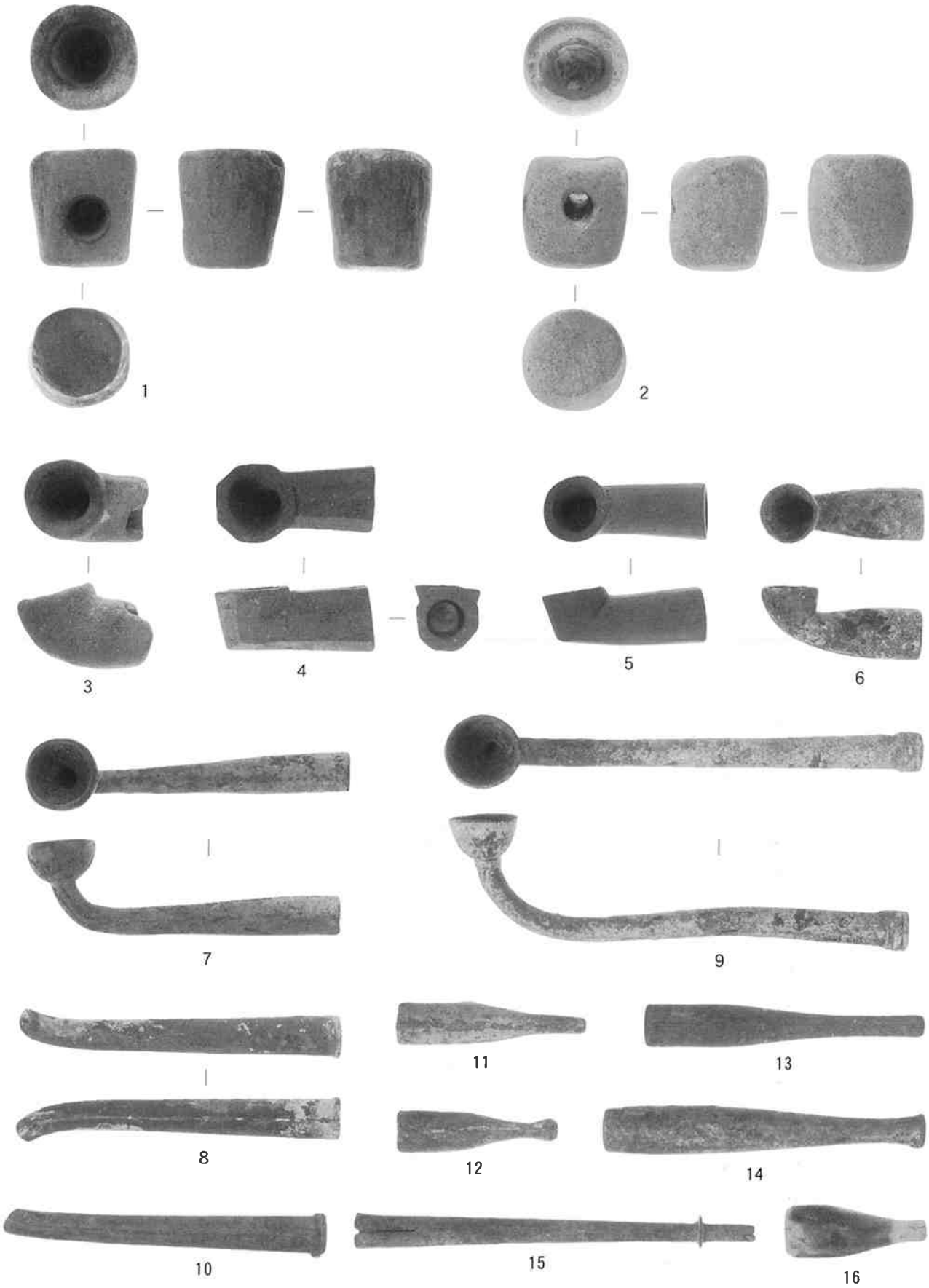
図版52　上：沖縄産無釉陶器２　下：沖縄産無釉陶器３



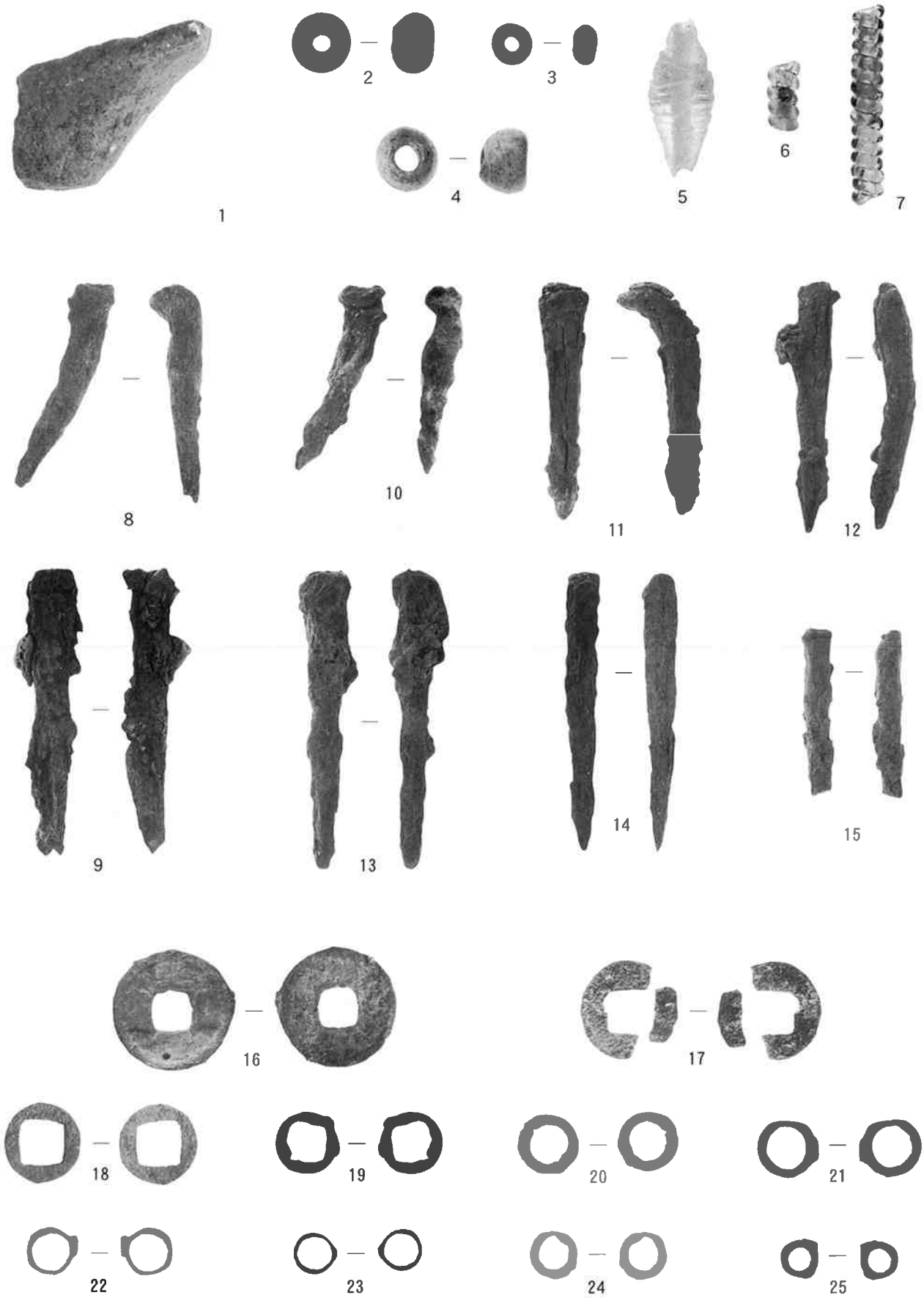
図版53　沖縄産無釉陶器４



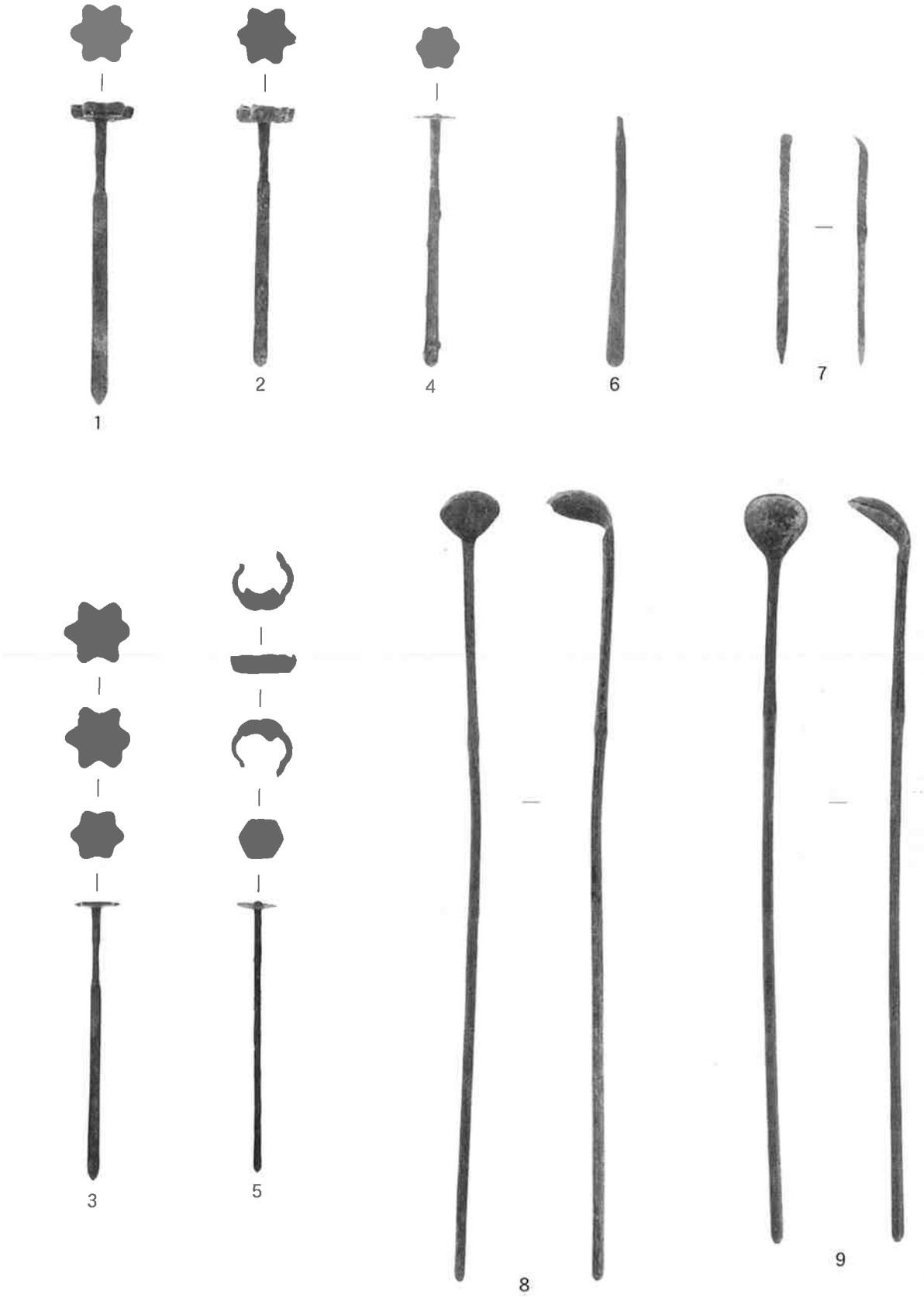
図版54　沖縄産無釉陶器５



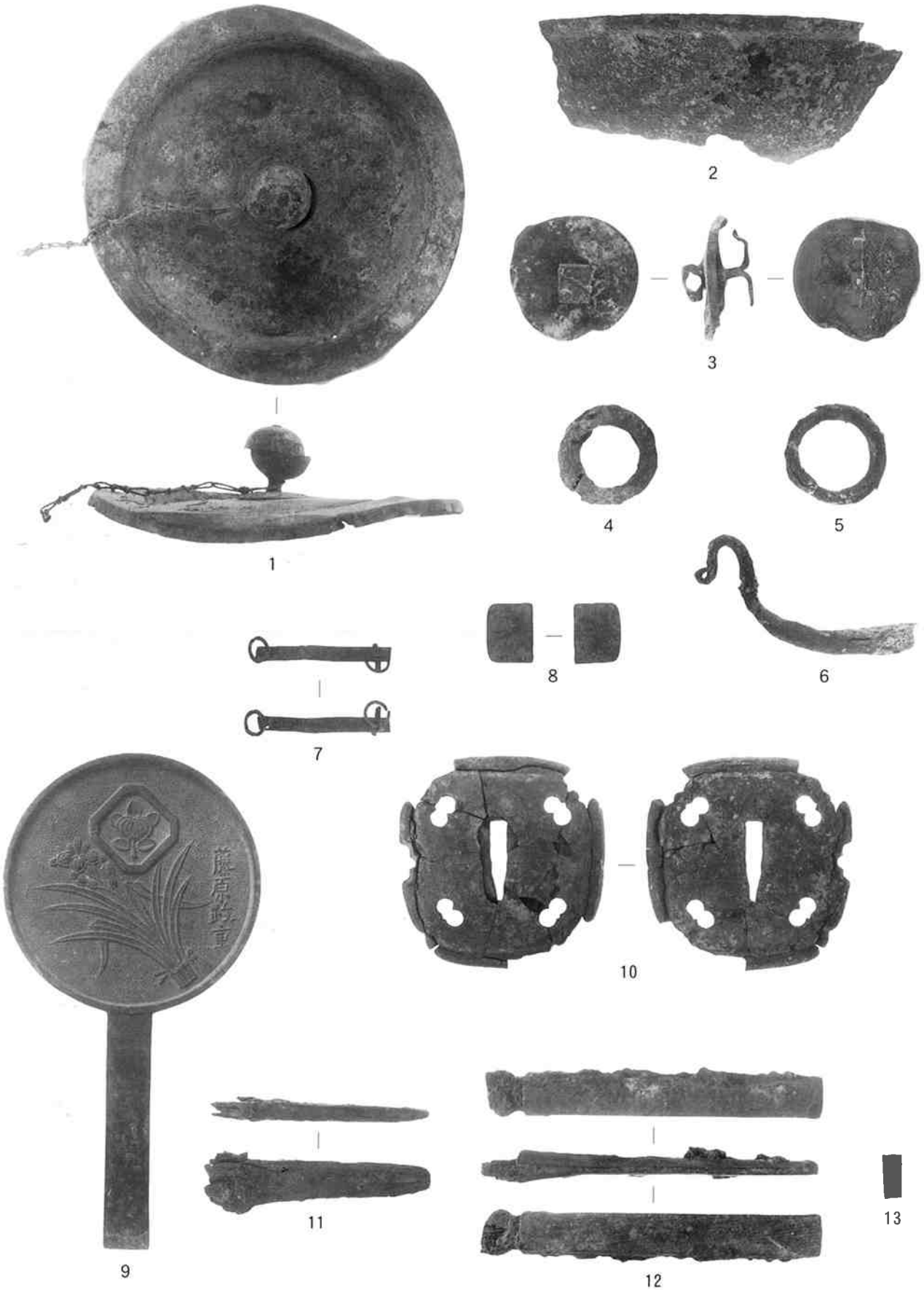
図版55　煙管



図版56　上左：後期土器　上右：玉　中：釘　下：銭貨

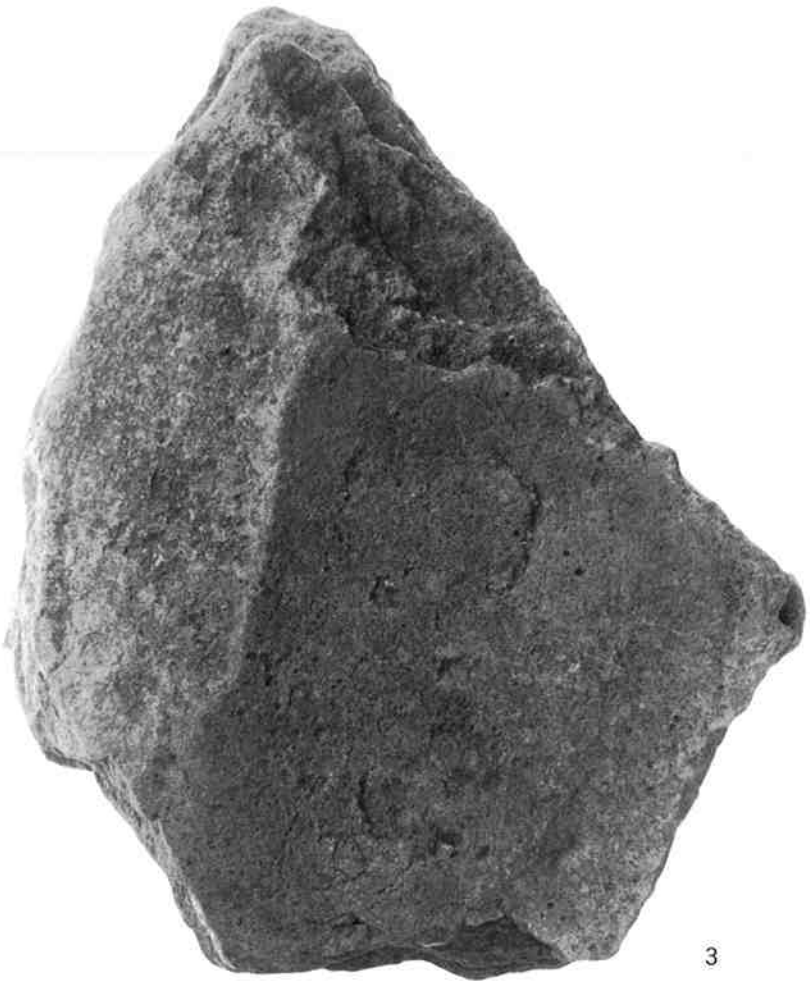


図版57　簪

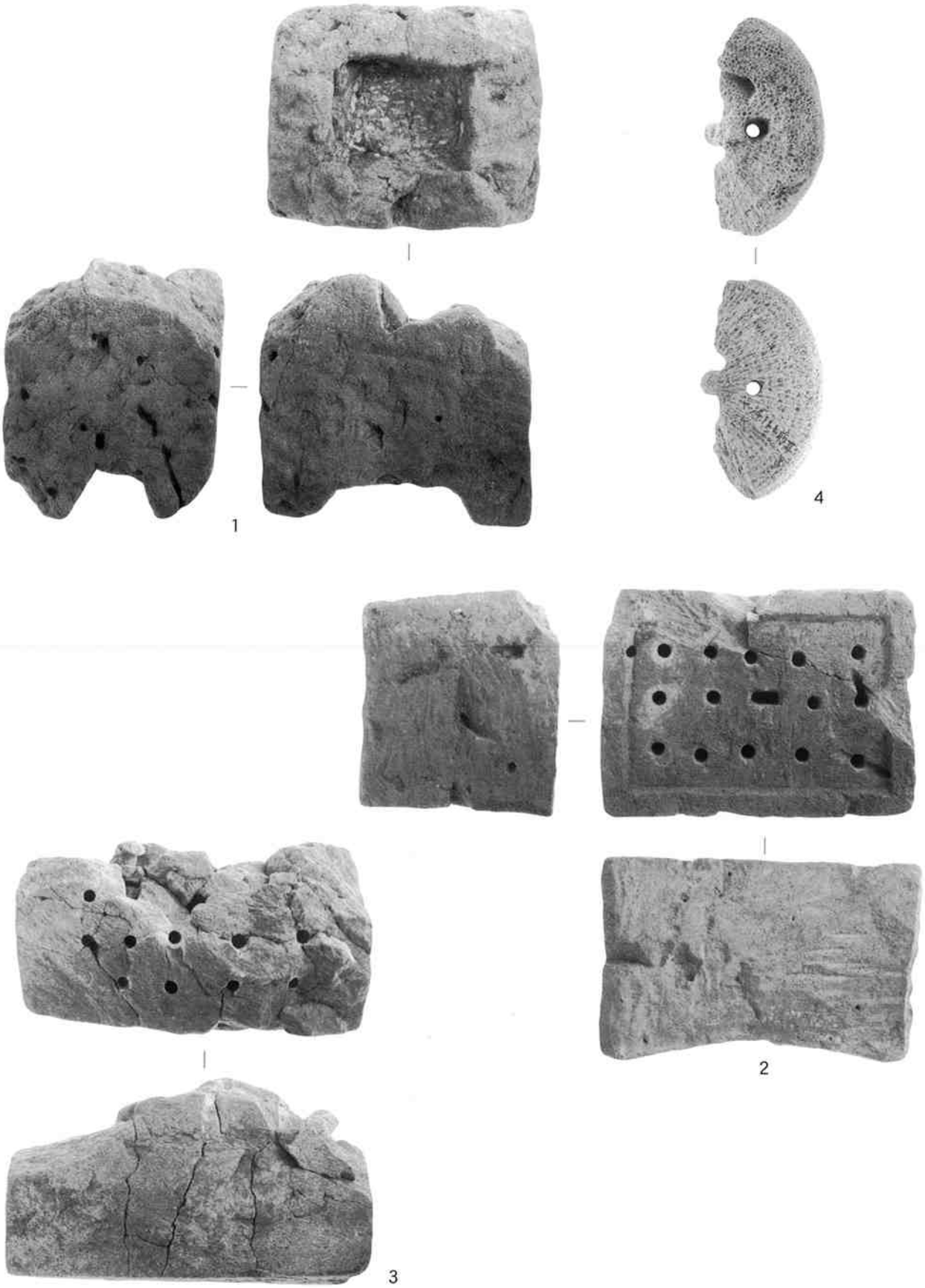


図版58　その他の金属製品

図版59　石器1



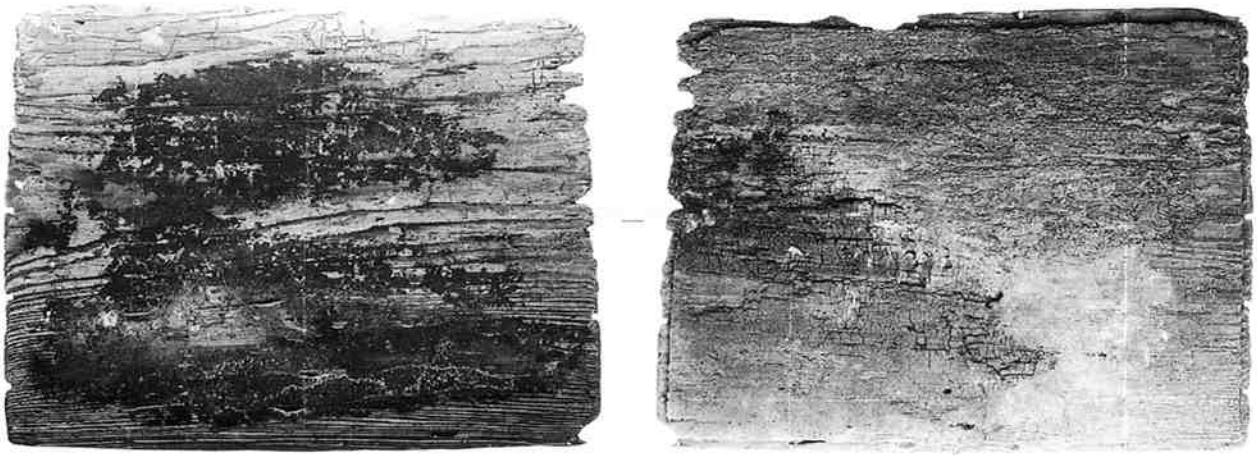
図版60　石器２



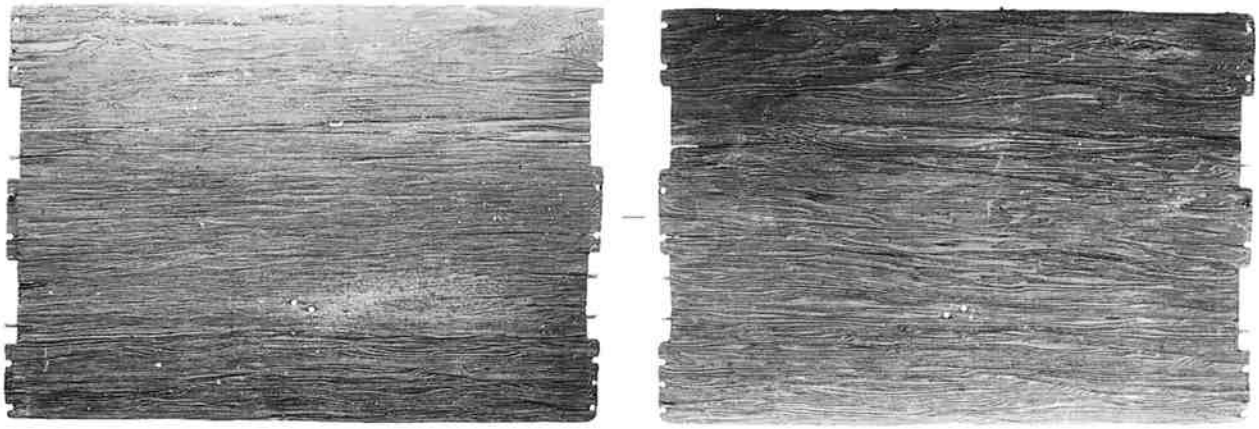
図版61　香炉

1

2

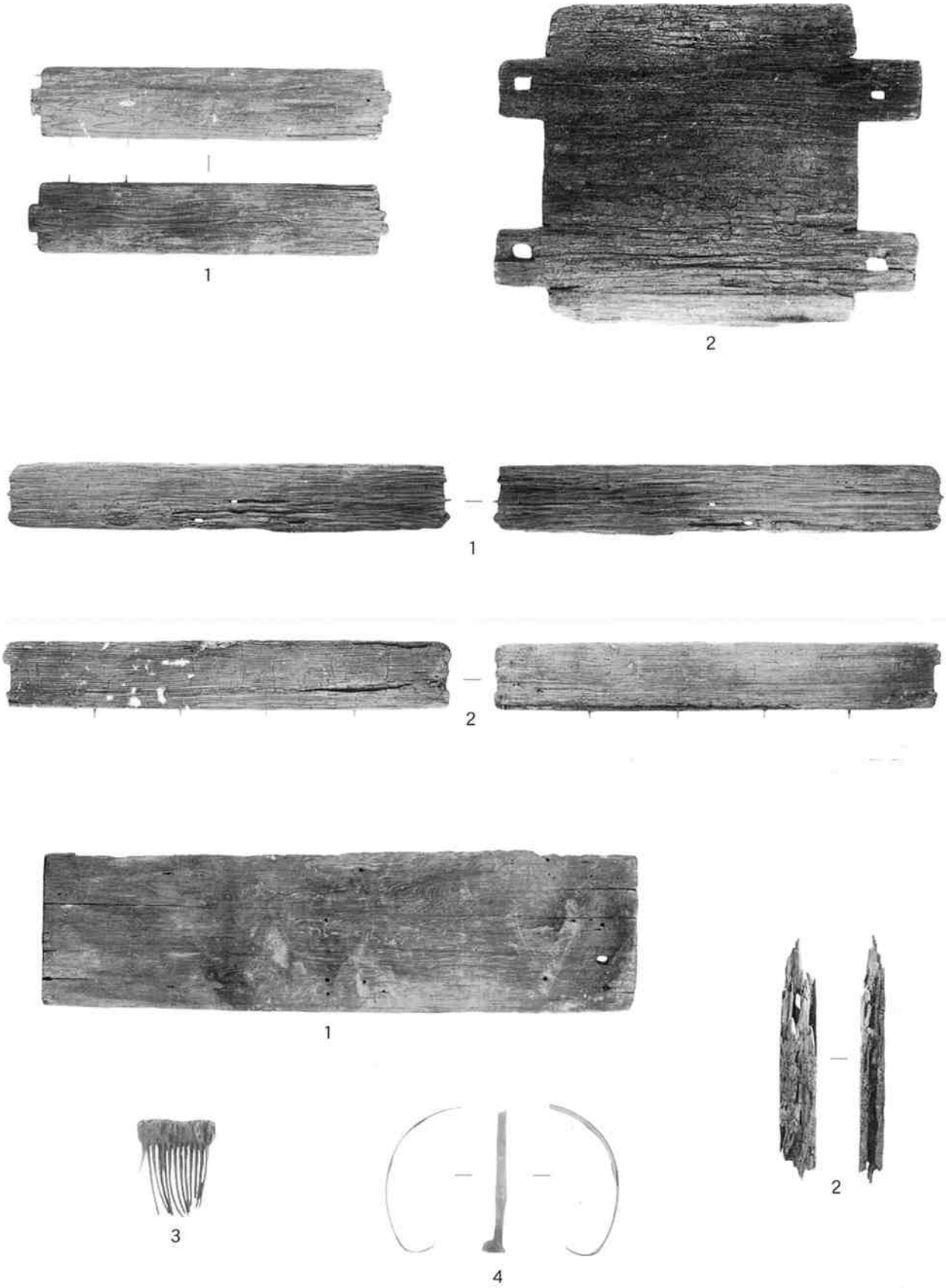


1

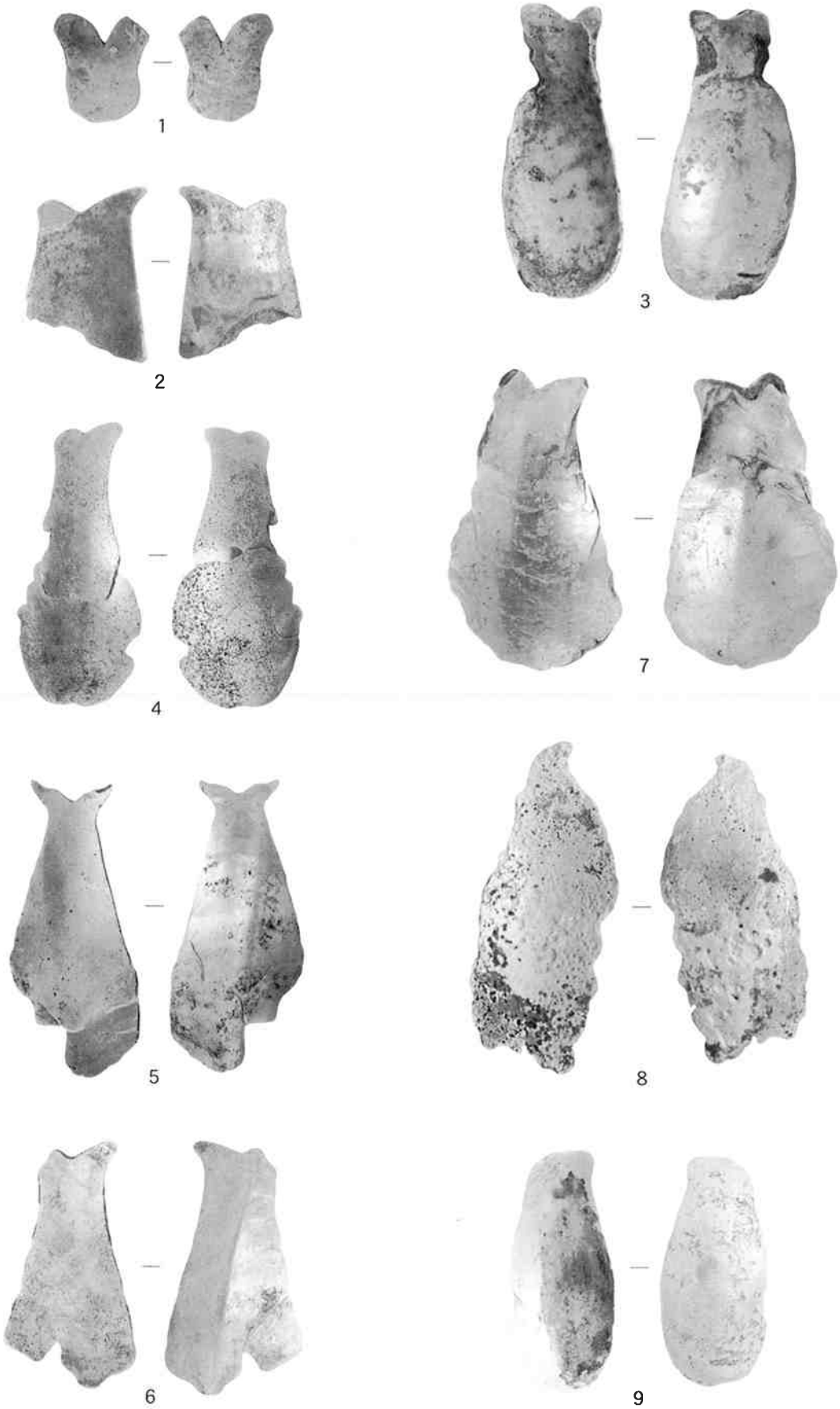


1

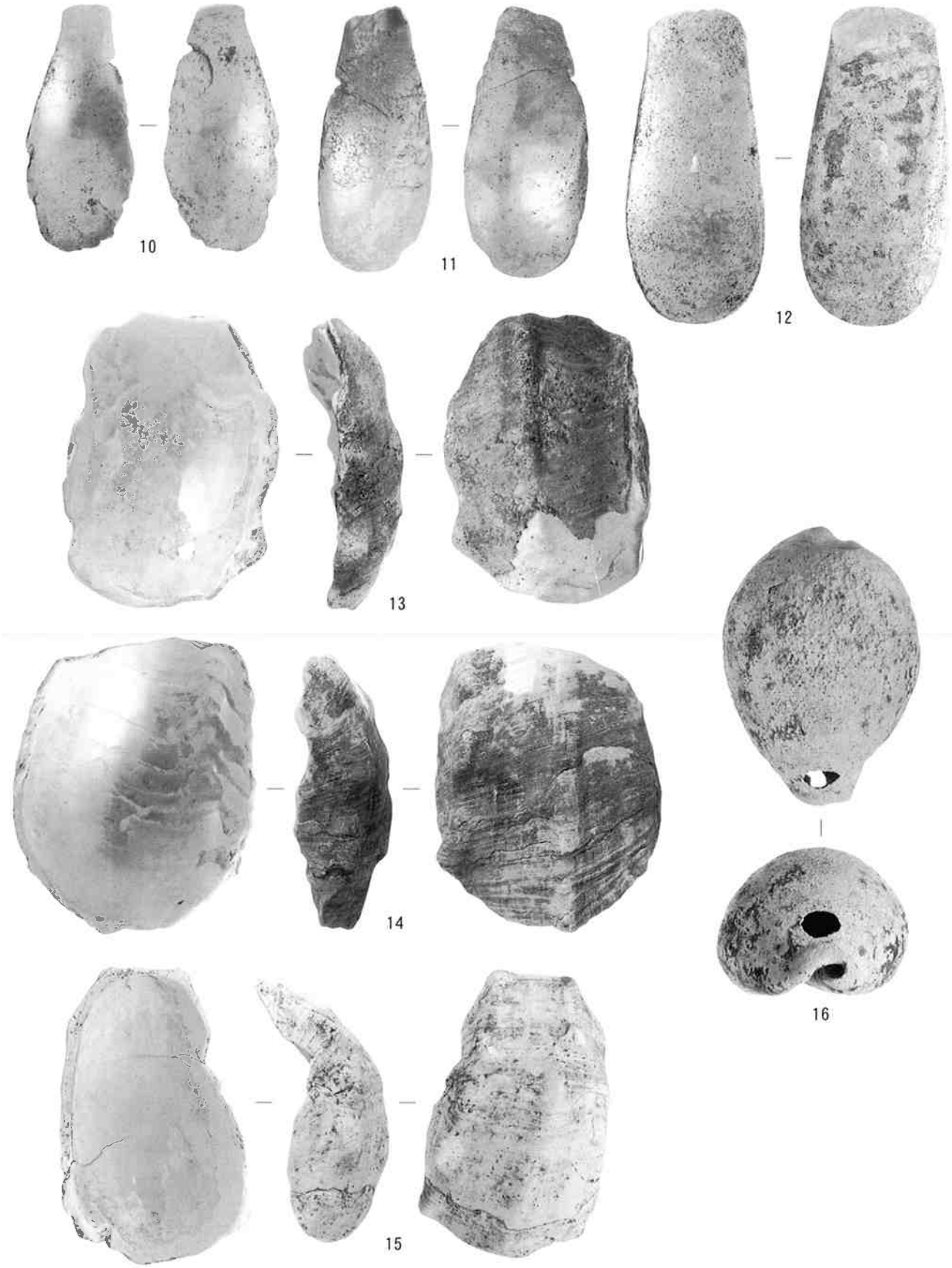
図版62　上：木製品１　中：木製品２　下：木製品３



図版63　上：木製品４　中：木製品５　下：木製品６



図版64　貝製品 1



図版65　貝製品２

第４部　　カンジン原古墓群－ヤッチのガマ周辺－

第１章　調査の概要

ここでは、ヤッチのガマ周辺の墓を扱う。先に述べたとおり、農水部の実施した水没物件調査で各墓に番号が付されているが、今回はヤッチのガマに近い順で反時計回りで１～９号墓とした（第133図－54～60）。調査方法はヤッチのガマと同じく平板測量によって各墓内の厨子に番号を付し、人骨の取り上げを行った。各墓の掘り下げは時間的な余裕がなかったため充分ではなかった。墓前、墓内には散乱遺物が多く、特に１～４号墓前、６・７号墓前は遺物が集中しており、任意に集中部を設定して取り上げを行った。

第２章　遺構

ヤッチのガマ周辺には９つの墓が所在し、８号墓のみが掘込墓である。各墓の概要は次のとおりである。

＜１号墓＞（図版66－１）

ヤッチのガマ石積み３の上位に設けられた墓である。高さ30cmほどに石灰岩を積み上げ１段高くしており、ここに厨子を配置している。段上にはサンゴジャリやコーラルを敷き詰めている。以前はヤッチのガマからこの墓辺りを拝んでいたようであるが、ヤッチのガマとの関連は不明である。

＜２号墓＞（同６）

墓入口を石列により区画し、周囲に土留め状の石積みを有する。調査時も拝みの対象となっていた。

墓の内部には集骨が２ヶ所あり、人骨集中部とした。人骨集中部１（図版66－８）は頭骨、四肢骨などの大型の骨がよく残っている。また、周囲には板材片があることから、木棺に納められていたと考えられる。人骨集中部２（図版67－１）はさらに小さな窪みを利用している。前面に板状の火成岩があり、本来はこれを利用して閉じていたと考えられる。同２の人骨の堆積は、上位に砕けた四肢骨、下位が粉状になった骨であった。また、同２からは建具などの金属製品が多く得られた。

＜３号墓＞（図版67－４）

わずかな窪みを利用したもので、ボージャー厨子が１基のみであった。本来は別の場所にあったものを移したようである。調査時も拝みの対象となっていた。

＜４号墓＞（同５）

前面に石灰岩による区画が設けられている。入口はみられない。内部は厨子が雑然と置かれている。内部を掘り下げたが造成は行っていない。

＜５号墓＞（同６）

わずかな石灰岩のくぼみを利用したもので、区画はみられない。前面に人頭大の火成岩があり、比較的最近まで拝まれていたようである。

＜６号墓＞（同７）

６・７号墓は一連のくぼみ内にあるが中間を石積みで区画していることから区別して扱った。前面を石灰岩で区画し、入口を有する。厨子の配置は雑然としており、19の転用品甕は埋めるように置かれている。

＜７号墓＞（同８）

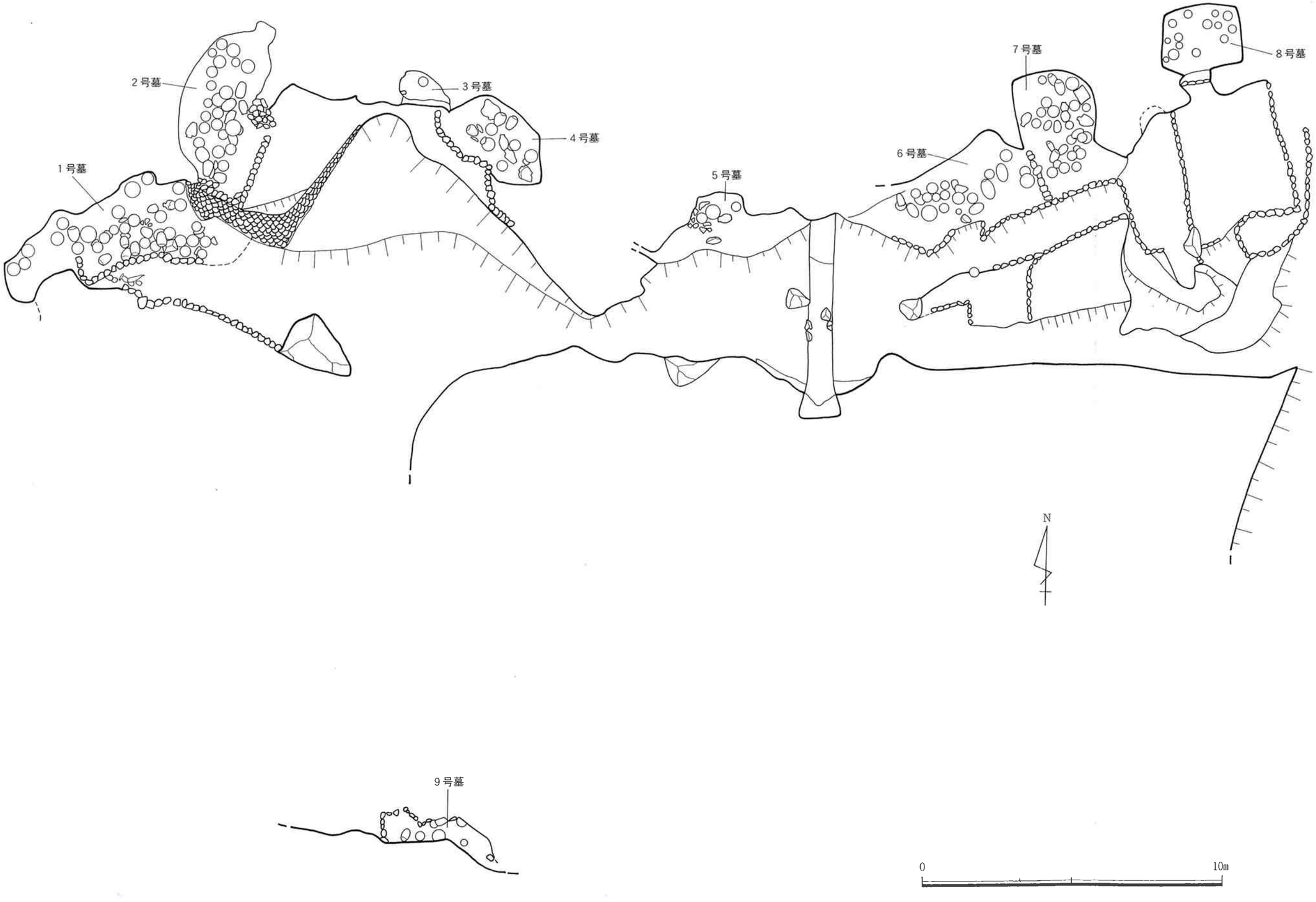
６号墓より深い窪みを利用している。前面の石積みはやや高く積んでおり、入口はみられない。６号墓との間を石積みで区画する。また、内部もわずかに石列で区画している。厨子の配置は整然としており、マンガン掛け厨子は前面にのみみられる。

＜８号墓＞（図版68－１）

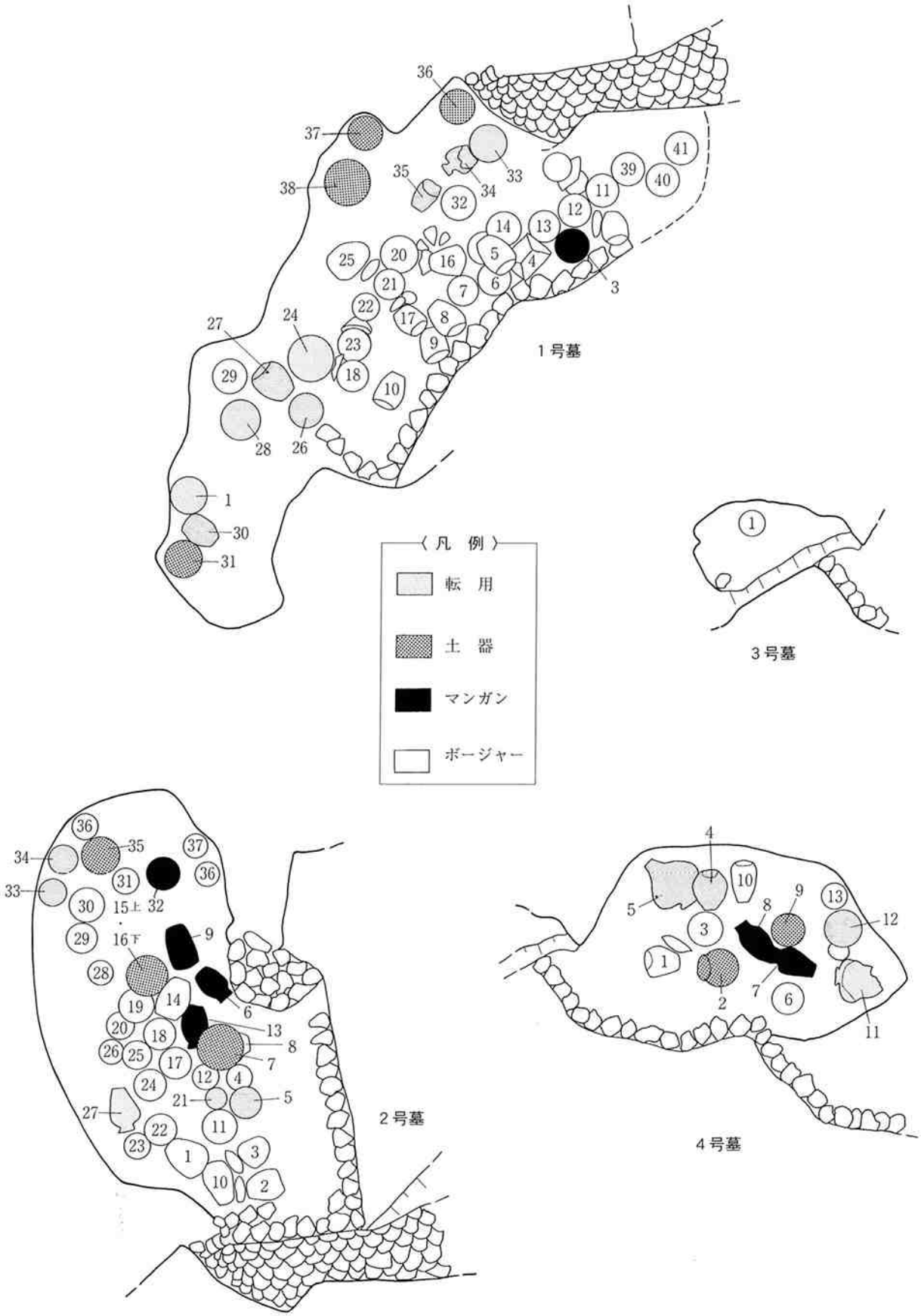
唯一の掘込墓である。前庭部を有し、墓口を大きな石灰岩で蓋をしている。内部は一面にコーラルを敷いている。前庭部は東側に石列をもつが一部崩落している。厨子の銘書に「上里云々」（現在も西銘・上江洲集落に上里姓あり）とあり、その関連の墓と思われるが、持ち主は現れなかったようである。

＜９号墓＞（同４）

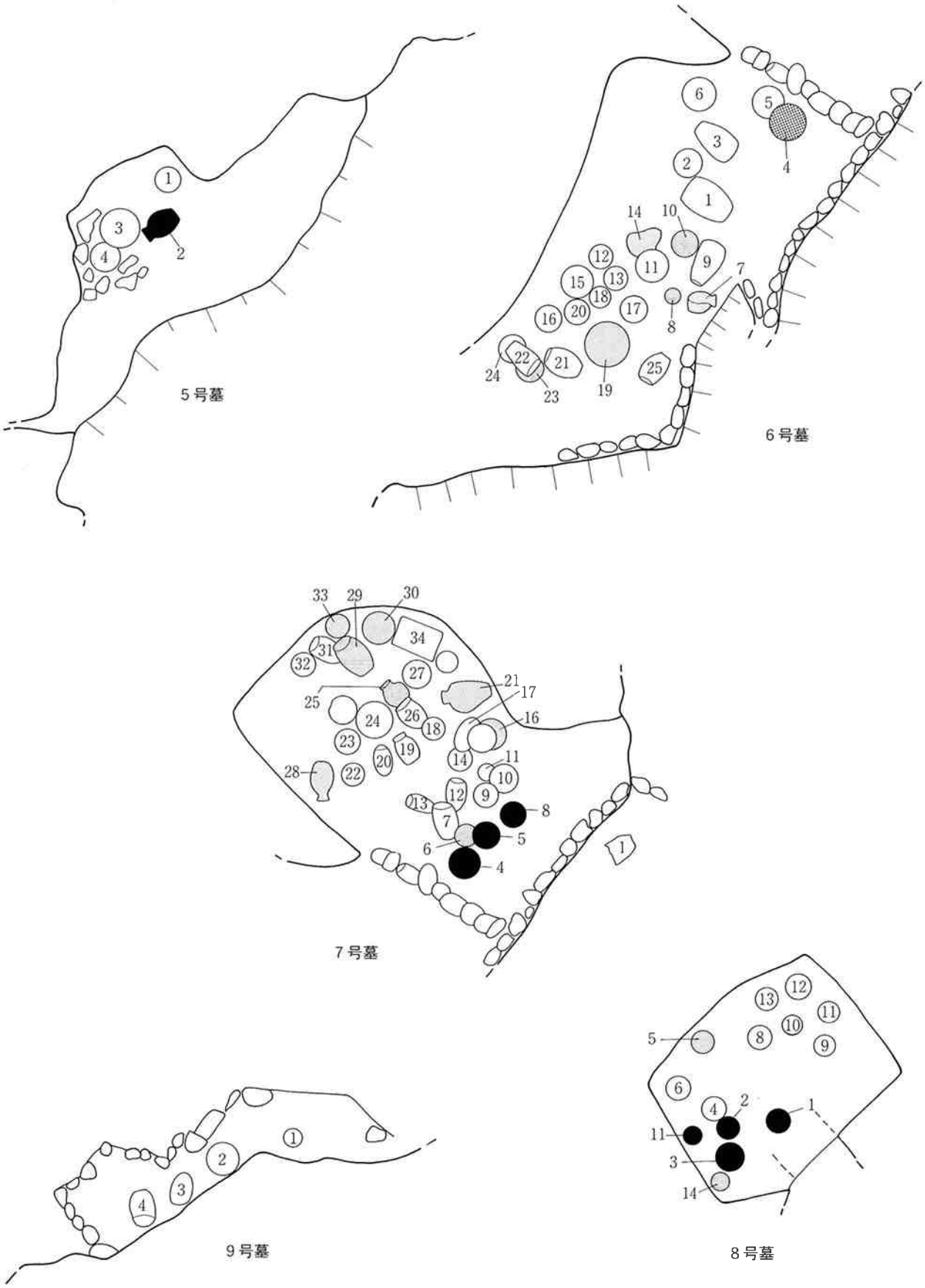
１～８号墓が同じ崖の並びにあるのに対して、離れた場所にある。ヤッチのガマ13号区画と同じく明確な区画をもたない。近現代の遺物が得られたが、墓に伴うものでない。



第115図　厨子配置状況(全体図)



第116図　厨子配置状況（1・2・3・4号墓）



第117図　厨子配置状況（5・6・7・8・9号墓）

第３章　遺物

遺物は厨子が中心であった。その他の陶磁器は墓内やその周辺から得られている。特筆すべき遺物として、厨子内から得られた木製品・ヤコウガイ製匙がある。

第１節　厨子

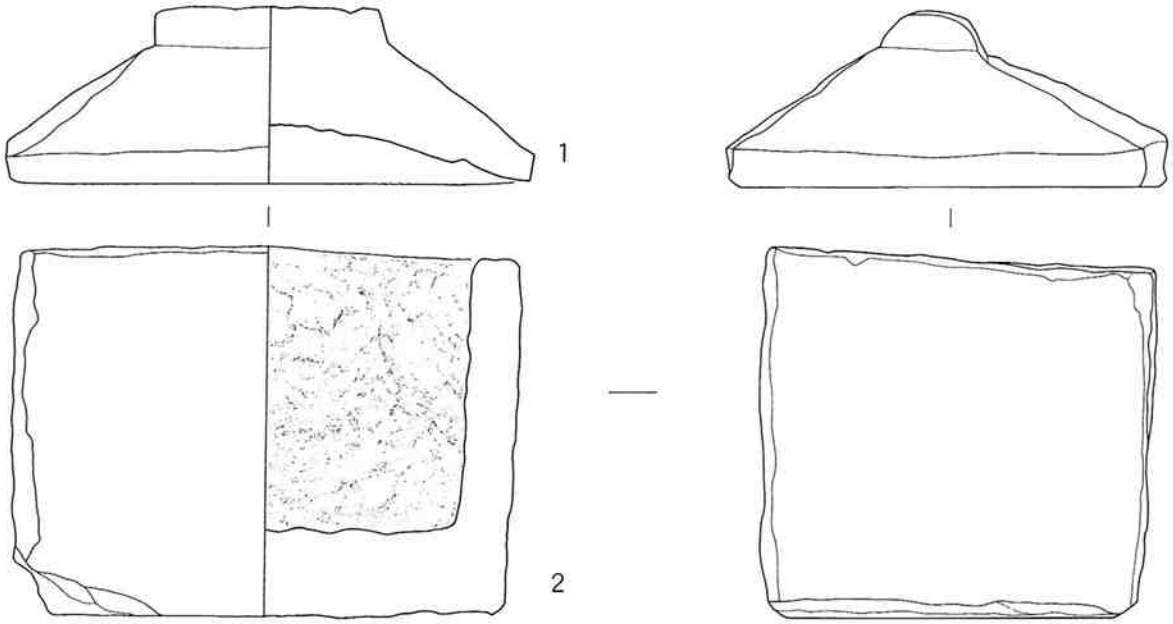
厨子の構成はヤッチのガマと同じくボージャー厨子が６割強を占める（第33表）。ただ、７号墓前面、８号墓はマンガン掛け厨子が比較的多くみられる。銘書はヤッチのガマと同様にほとんどみられず、２・８号墓に偏在する程度である。第123図のように、甕の転用品に「乾隆拾六辛未十一月之入／前首里大屋子／同人妻／同人男子真□（赤ヵ）」と記銘する例があった。第120図１・３のように釘彫りによる記銘があり、１は「□□□□（大知分ヵ人）／久米島具志川間切西目村□□（久之ヵ）ニ而／父親□（女）親入」の、３は「雍正四年丙午□□月十二日／［　　］／死去［　　］／安［　　］／親雲上／南無阿弥陀仏」の文字が彫られている。また、第119図３にも「□／八月六日／［　　］六七」の文字が彫られている。

家形は石製・陶製（赤焼）が３点得られた。ここでは石製を図示した。サンゴ石灰岩を用い、内面はノミの痕がはっきり残っている。屋根は寄棟で、正面の孔はない。蓋と身の間に石を噛ませていた。赤焼は図示していないが、ヤッチのガマで得られたものと同様のタイプが２基得られ、いずれも寄棟の屋根であった。

ボージャー厨子は中型のものが多く、特異なものがみられる。第120図４・５はボージャー厨子的なつくりであるが、その範疇から外れる。第119図２は口縁肥厚部に沈線を巡らせる。蓋では、第121図１には大きな「き」が付けられている。本来は墓内の散乱であったが、２の身に蓋と擦れ合った痕があり、その大きさが１と合致したことから組み合わせて図示した。「き」と宝珠が大きなもので、宝珠には用途不明の小孔が穿たれている。

文様はヤッチのガマと同様に沈線による蓮華文が主体である。第119図４は口縁部に浮文の唐草文を巡らせる。第121図４は背面に扇のスタンプ文を施す。

マンガン掛け厨子は大型のものが多い。第122図４は屋門の形成が小柄で、全体的に丸みを帯びボージャー厨

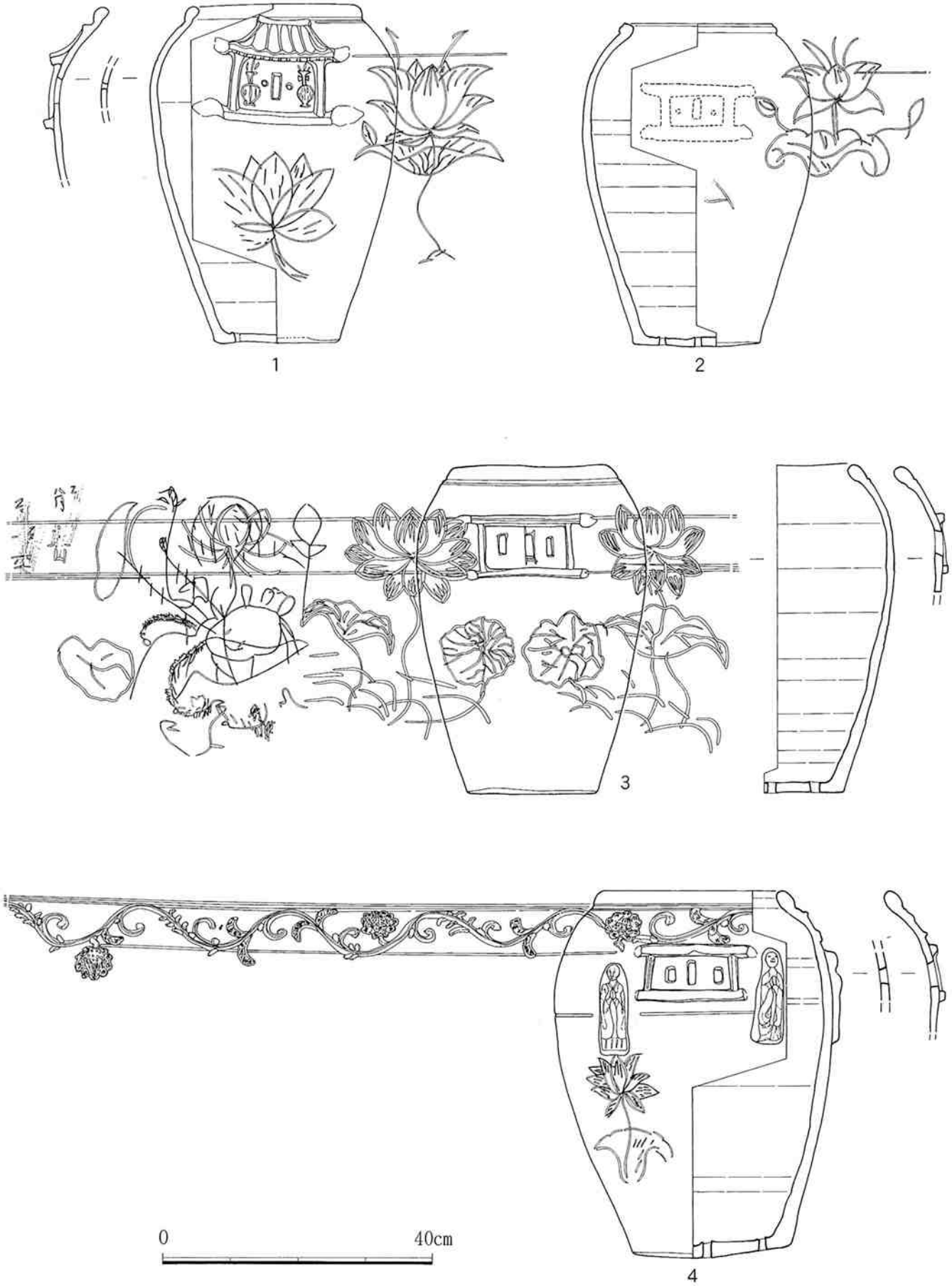


第118図　厨子1

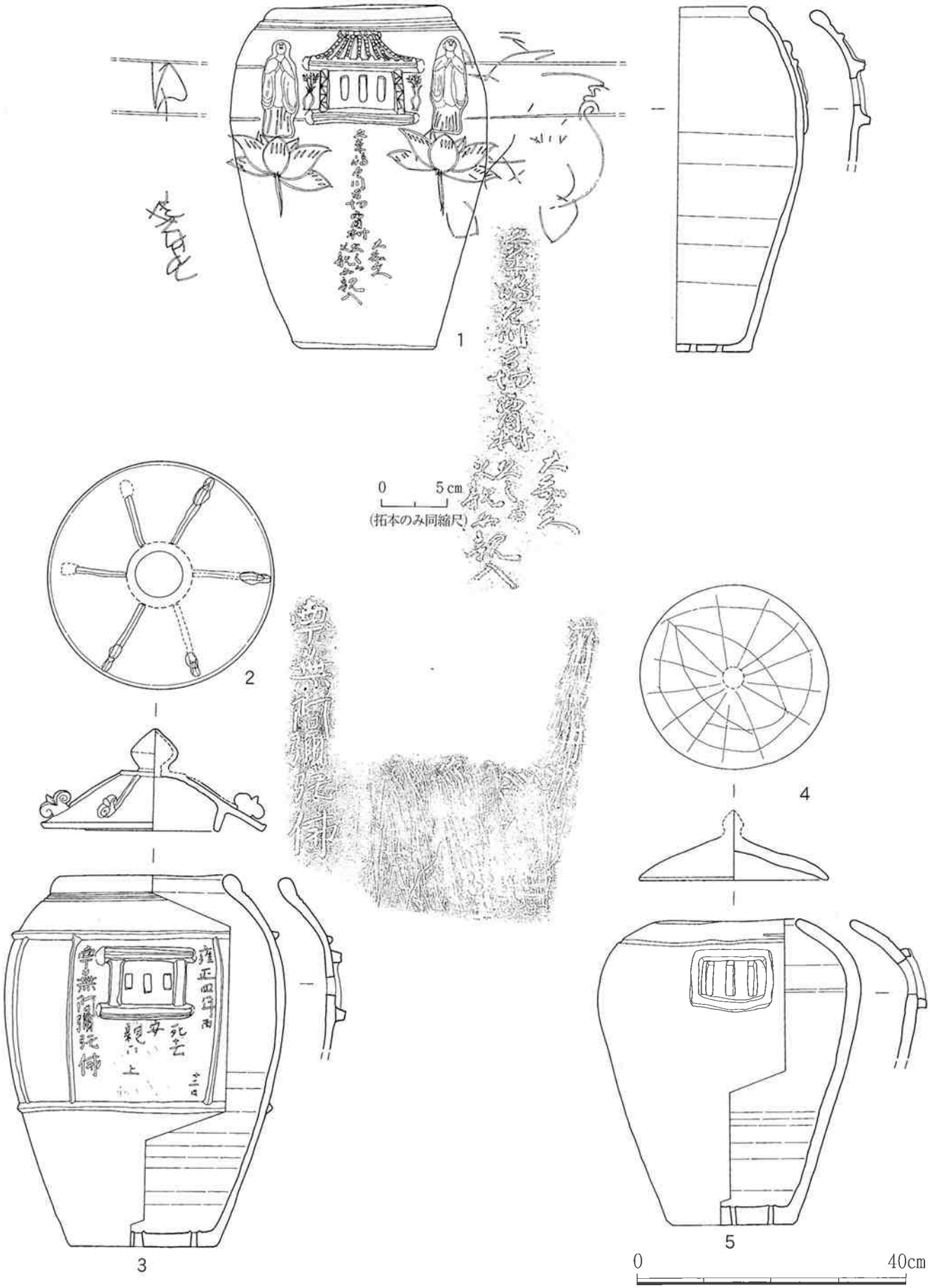
0　20cm

第32表　厨子観察一覧

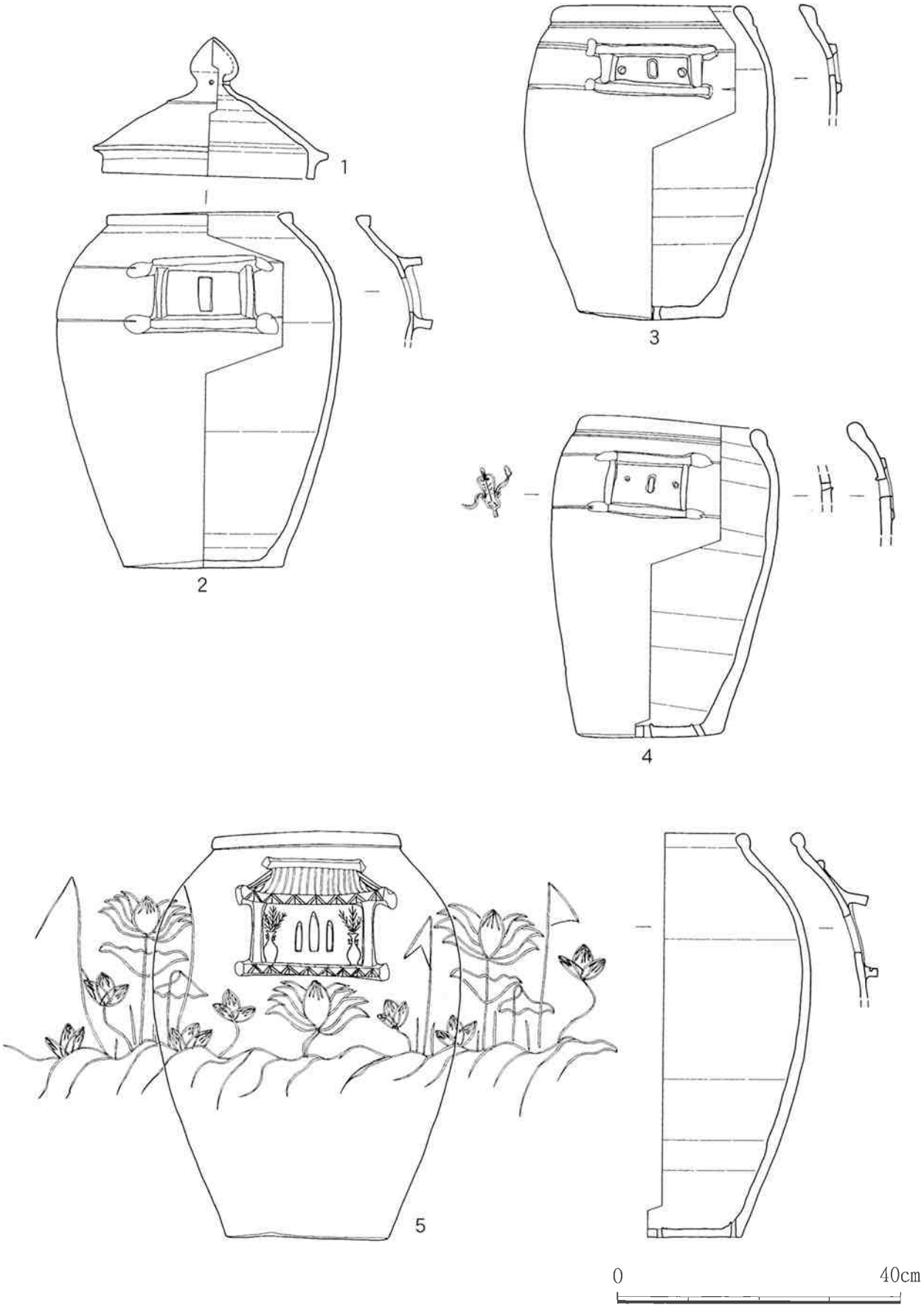
挿図 図版	番号	出土地点	厨子番号	分類		部位	計測値（cm）					観察事項（器形･文様など）	銘書･判	孔
				大分類	小分類		a	b	c	d	e			
第118図 図版69	1	7号墓	34	家形(石製)	A	蓋	23.5	18.8	54.7	43.0	－	内外面に粗いノミ痕が残る。		／
	2				A	身	52.2	38.8	52.2	36.0	37.5			無
第119図 図版69	1	6号墓	26	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	26.2	50.8	17.4	－	－	喜名焼？。泥ぐすりを施す。眉は家を写す。胴部に蓮華文、眉内に仏花瓶。		×
	2	6号墓	22	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	22.6	48.5	19.0	－	－	口縁肥厚部に沈線を巡らす。蓮華文。		4
	3	1号墓	5	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	22.4	49.4	19.6	－	－	喜名焼？。泥ぐすりを施し、口唇部にサンゴ痕。胴部に太い線の蓮華文、背面に浅い沈線で雑多な文様。	「□／八月十一日／［　］／［　］六七」の線彫り。	4
	4	1号墓	32	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	26.8	55.1	23.5	－	－	胴部に法師と蓮華を１対。頸部に貼付による花唐草文。		9
第120図 図版70	1	1号墓	7	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	24.0	52.4	19.8	－	－	眉は家を写す。法師と蓮華文を１対。側面に不明の沈線。	「久米島具志川間切西目村／大知より人／久マニ而／父親女親入」の線彫り。	5
	2	2号墓	4	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	10.2	15.5	34.2	－	－	突帯を施す。内面には「き」。		／
	3		1		B-Ⅰ-1	身	25.7	56.1	23.3	－	－	突帯区画。内部に文字。全体的に赤みを帯び、表面は脆い。	「雍正四年丙午□□月十二日／［　］／死去［　］／安［　］／親雲上」消されている。「南無阿彌陀仏」の線彫り。	11
	4	2号墓	19	ボージャー	Ⅰ-C-b	蓋	－	11.0	28.4	－	－	撮みははずれる。不明の沈線。		／
	5				B-Ⅰ-1	身	21.8	46.4	20.8	－	－	全体的に赤みを帯びる。口縁肥厚部を形成しない。		5
第121図 図版71	1	7号墓	24	ボージャー	Ⅰ-A-a-①	蓋	13.1	20.0	30.4	－	－	大柄な宝珠と「き」。宝珠には焼成前穿孔。		／
	2		27		B-Ⅰ-1	身	26.8	51.4	23.0	－	－	口縁肥厚部を三角形に形成。		無
	3	1号墓	18	ボージャー	B-Ⅰ-2	身	26.5	46.3	21.0	－	－			1
	4	9号墓	3	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	27.5	46.0	21.0	－	－	背面に軍配のスタンプ文。		5
	5	7号墓	31	ボージャー	B-Ⅰ-2	身	27.3	58.9	22.5	－	－	眉は家を写す。胴部に蓮地風に文様を構成。眉内に仏花瓶。		16
第122図 図版72	1	5号墓	2	マンガン	Ⅱ	蓋	15.6	17.8	33.4	－	－			／
	2				B-Ⅱ	身	31.0	64.7	21.0	－	－	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は三角形。沈線による蓮華文。		7
	3	1号墓	散乱	マンガン	Ⅱ	蓋	15.0	14.0	27.1	－	－	薄いマンガン釉。平低な器形。		／
	4		3		B-Ⅱ	身	34.2	61.5	25.2	－	－	屋門は小さな瓦屋形。口縁肥厚部は方形。突帯区画を巡らせ、内部に貼付による蓮華文と法師。		8
	5	2号墓	9	マンガン	Ⅱ	蓋	13.0	14.0	28.4	－	－		前村渠元祖／女ノ子名ハ不明／字仲地原カラ／元祖元ニ壱緒ニス／西暦一九五四年／旧十二月九日	／
	6		6		B-Ⅱ	身	28.6	60.9	31.3	－	－	屋門はアーチ形。口縁肥厚部はバチ形。	内：前村渠元祖女子／名不明字仲地原カラ西暦一九五四年旧／元祖元ニ一緒ニス十二月九日	8
第123図 図版73		6号墓	19	転用	無釉	身	35.2	51.6	26.7	－	－		「乾隆拾六辛未十一月之入／前首里大屋子／同人妻／同人男子真苅」	無



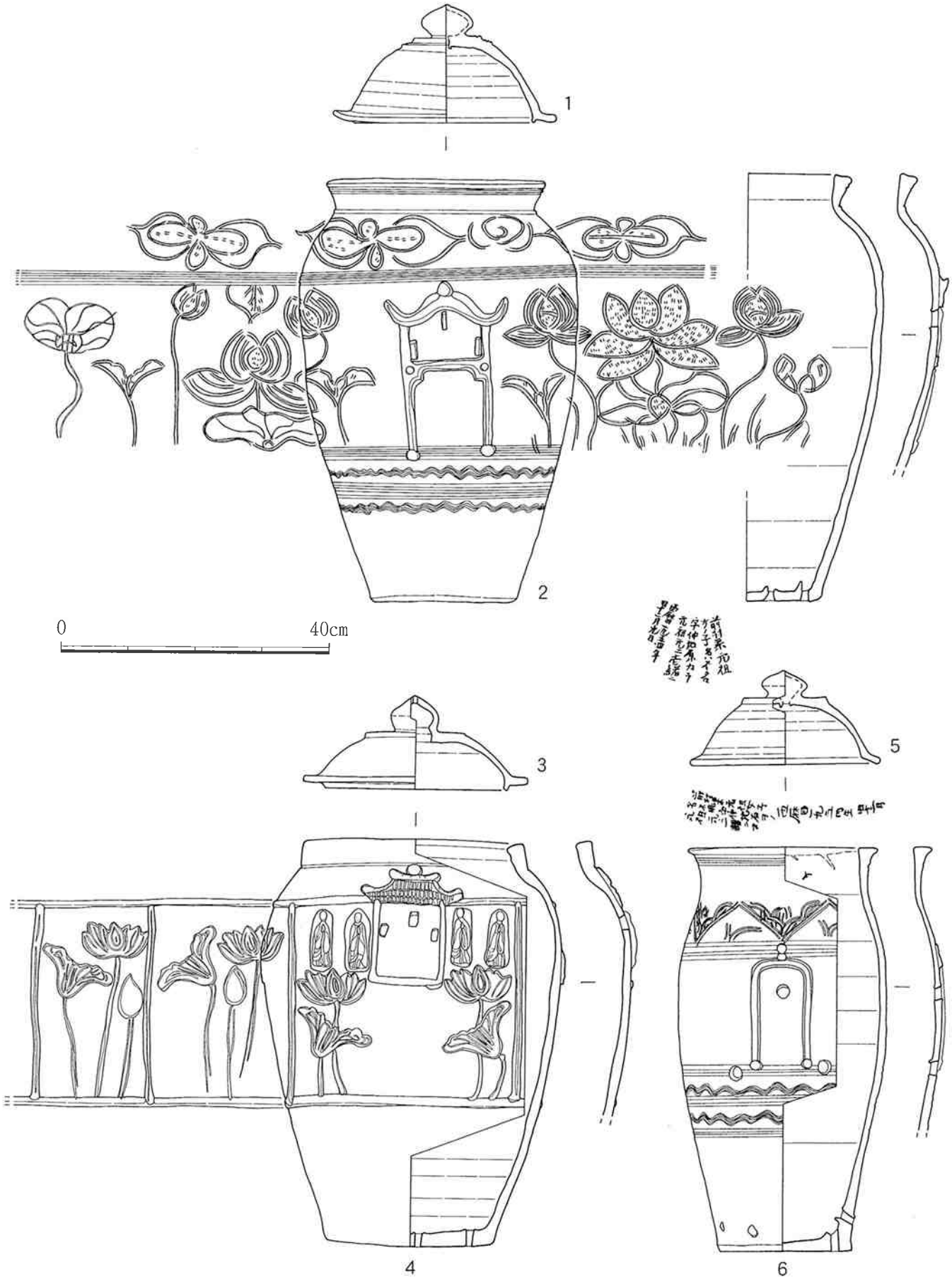
第119図　厨子２



第120図　厨子３



第121図　厨子４

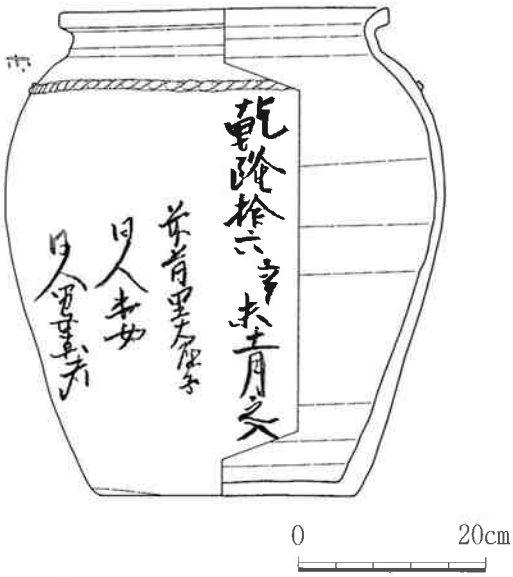


第122図　厨子５

にも似た雰囲気がある。安里（1997）の報告例に近いことから、マンガン掛け厨子の中でも古手のものと思われる。３の蓋は墓内散乱であったが、大きさや釉色が合致したことなどから、組み合わせて図示した。他の蓋に比して低平である。

第33表　各墓の厨子の構成

	ポージャー	マンガン	家　形		転用品	土　器		合計
			赤焼	石製		宮古式	パナリ	
１号墓	29	0	1	0	7	4	0	41
２号墓	25	4	0	0	5	3	0	37
３号墓	1	0	0	0	0	0	0	1
４号墓	5	2	0	0	4	1	1	13
５号墓	3	1	1	0	0	0	0	5
６号墓	18	0	0	0	6	1	0	25
７号墓	22	3	0	1	8	0	0	34
８号墓	8	4	0	0	2	0	0	14
９号墓	4	0	0	0	0	0	0	4
合　計	115	14	2	1	32	9	1	174



第123図　厨子６

第２節　青磁

ヤッチのガマ周辺の墓から検出された青磁は６点で、確認された器種は瓶･蓋・壷の３つであった。全て破片資料であるため、全形が窺えるような資料はない。今回検出された破片資料の6点全てが４号墓より表採されており特徴的であるといえる。（第124図１～４）。

１は瓶の胴部片である。本資料の下端には積痕と思われる部分や内面には調整痕が明瞭に観察できる。素地は単灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が入る。両面に淡緑灰色の釉を施すが、外面に比して内面はかなり薄い。全体に粗い貫入が入る（４号墓散乱）。

２は蓋の撮である。酒会壷等が考えられるところである。最大径は2.4cmを有する。淡灰白色の微粒子で淡緑灰色の釉を比較的厚く施している（４号墓－10内）。

３は蓋の破片資料である。蓋甲面から鍔部へ移行する部分となる。素地は淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が観察できる。蓋甲面に淡緑灰色の釉を施すが、内面は露胎とする。外面に粗い貫入が観察できる（４号墓前）。

４は酒会壷の底部片である。底径は16cmを有する。接地面の両端を斜位に削り面取りする。内面には調整痕が観られる。底部は落とし底としており、外面には箆状工具により、２本の圏線と蓮弁文を表している。淡灰白色の微粒子で、接地面両端以外に緑灰色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る（１～４号墓散乱３、４号墓散乱10）。

第３節　白磁

ヤッチのガマ周辺の墓から検出された白磁は15点で、確認された器種は碗・小碗・小杯の３つであった。完品も含め、破片資料についても接合状況が良く、全形の窺える資料がほとんどであった。これらは17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる徳化窯や漳州窯、または福建・広東系の諸窯を生産地とするものと思われる（第124図５～12）。なお、各分類は第３部第３章第３節白磁に対応する。

５は型成形の碗である（碗Ⅱ類）。高台脇から丸みを持って立ち上がり、口縁をきつく外反させるタイプである。畳付にはハリ支えと思われる積痕が観られる。白色の細粒子で淡黄白色の釉を外底面以外に施している。全体に細かい貫入が入る（７号墓散乱15）。

６も外反口縁の碗である（碗Ⅱ類）。轆轤成形によるもので、外面には轆轤痕が明瞭に観察できる。素地は白色の細粒子で、両面に淡灰白濁色の釉を施しているが、見込み部分を露胎としている（４号墓）。

７は型成形の小碗である（小碗Ⅰ類２）。高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を口唇部以外に施釉して口禿げとしている（５号墓前トレⅡ）。

８も型成形の小碗である（小碗Ⅱ類）。高台脇から丸みを持って立ち上がらせ、口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を口唇部以外に施釉し口禿げとする。高台内面には砂が付着（５号墓前トレⅡ）。

９は型成形の小杯（小杯Ⅰ類）。高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を畳付以外に施釉している。高台の両面には砂が付着する（１～４号墓散乱３）。

10も型成形の小杯である（小杯Ⅰ類ａ２）。高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。素地は白色の細粒子で、

白濁色の釉を全面に施釉している。畳付には砂が付着する（６・７号墓前散乱）。

11も小杯であるが、轆轤成形か。口縁部を微弱に外反させる。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を両面に施釉している（６号墓－８内）。

12も型成形による小杯（小杯Ⅱ類）。高台脇から丸みを持って立ち上がらせ、口縁部を微弱に外反させている。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を全面に施釉している。畳付には砂が付着している（６・７号墓前散乱）。

第４節　中国産色絵

中国産色絵の小杯が１点のみ検出されている（第124図13）。型成形によるもので、高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。白濁色の釉を畳付以外に施している。外面胴部に花卉文？を上絵付けにより描いている（４号墓散乱）。

第５節　瑠璃釉

瑠璃釉の小杯が１点のみ検出されている（第124図14）。型成形によるもので、高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。素地は白色の細粒子で、外面に藍濁色の釉、内面には白濁色の釉を施している。畳付には砂？が付着している（１号墓－10内）。

第６節　青花

ヤッチのガマ周辺の墓から検出された青花は17点で、確認された器種としては、碗・小碗・小杯の３つであった。完品も含め、破片資料についても接合状況が良く、全形の窺える資料が多い。これらは17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる徳化窯や景徳鎮を生産地とするものと思われる資料である（第125図１～10）。なお、各分類は第３部第３章第８節青花に対応する。

１は型成形の碗（碗ａ４）。高台脇から丸みを持って立ち上がらせる。外面の口縁直下には襷文等を、胴下部には芭蕉文を描いている。高台外面には２本の圏線。内面に圏線等を描いている。呉須の発色は藍濁色を呈する。白色の細粒子で淡灰白色の釉を畳付以外に施している。口禿げとなっている。畳付には砂が付着する（７号墓散乱15）。

２は碗の底部片である（碗ｂ）。高台は低く、内削りは浅い。外面に呉須よる文様。白色の粗粒子で、淡灰白濁色の釉を施すが、高台脇から畳付までを露胎とし、見込みを蛇の目釉禿ぎしている（６・７号墓前）。

３は小碗である（小碗Ⅰ類１）。口縁直下に２本の圏線と、構成不明な文様を描く。内面口縁直下と見込みにも圏線。素地は白色の微粒子で、白濁色の釉を両面に施している（１号墓散乱）。

４は型成形の小碗である（小碗Ⅰ類２）。口縁部直下に襷文、胴下部に芭蕉文を描いている。素地は白色の細粒子で、淡青白濁色の釉を畳付以外に施す。口禿げである（５号墓前トレⅡ）。

５も型成形の小碗である（小碗Ⅰ類２）。外面有文。素地は白色の微粒子で白色の釉を畳付以外に施す。畳付には砂が付着している（１号墓－９内）。

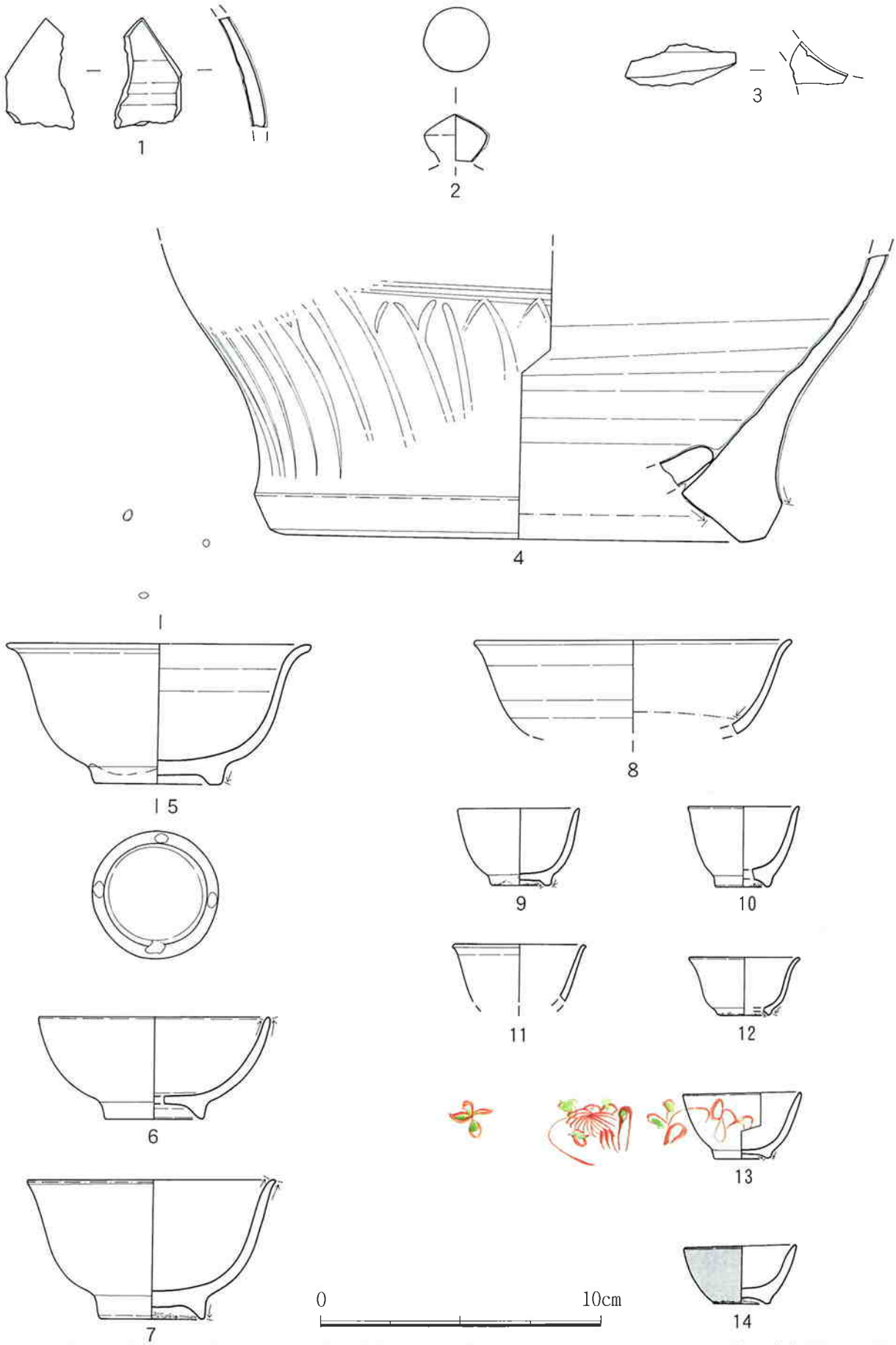
６は外反口縁の小碗である（小碗Ⅱ類）。外面に圏線と花卉文、内面にも圏線を描いている。素地は白色の細粒子で、白色の釉を両面に施している（６・７号墓前）。

７は小杯である（小杯Ⅱａ２）。口縁部は微弱に外反する。外面口縁直下と腰に圏線を廻らせる。素地は白色の細粒子で、淡灰白色の釉を畳付以外に施す。畳付には砂が付着する（６・７号墓前）。

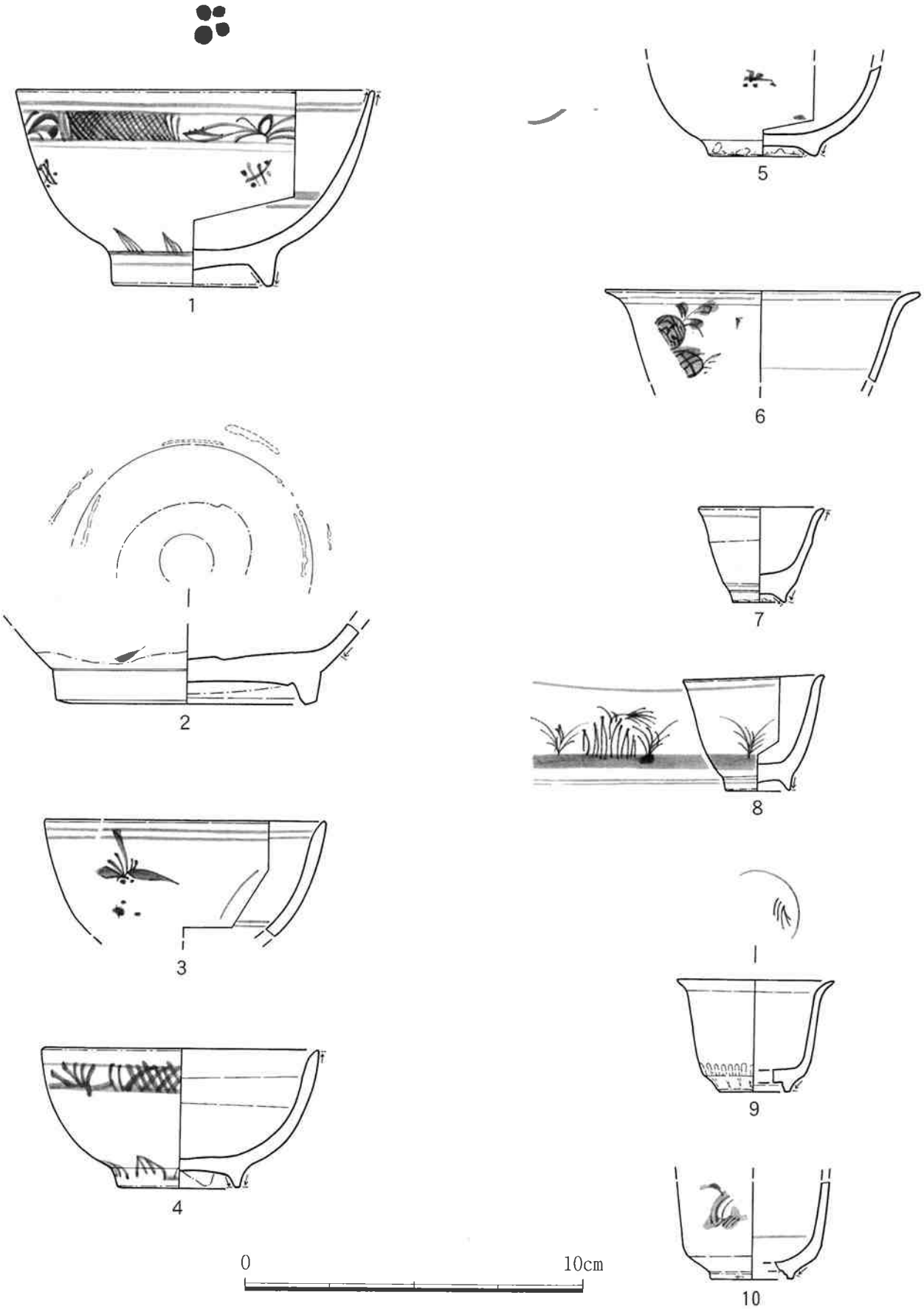
８も小杯である（小杯Ⅱａ２）。口縁部は微弱に外反する。外面口縁直下と腰に圏線、胴部に薄文を描く。素地は白色の微粒子で、白色の釉を畳付以外に施す（６・７号墓前）。

９は型成形の小杯である（小杯Ⅱａ３）。腰折状に角度を変えて立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。見込みに圏線と山水文？を表している（４号墓－11内）。

10も型成形の小杯である（小杯Ⅱｂ２）。腰折状に角度を変えて立ち上がらせる。外面有文で、見込みに圏線を廻らせる（４号墓－11内）。



第124図　青磁　瓶(1)、蓋(2～3)、酒会壺(4)、白磁　碗(5～6)、小碗(7～8)、小杯(9～12)
中国産色絵　小杯(13)、　瑠璃釉　小杯(14)



第125図　青花　碗(1～2)、小碗(3～6)、小杯(7～10)

第７節　中国産褐釉陶器

ヤッチのガマ周辺の墓から検出された中国産褐釉陶器は８点で、確認された壷のみであった。これらは世紀代に位置付けられるものと思われる資料である（第126図１～４、第127図１・２）。なお、各分類は第３部第３章第９節中国産褐釉陶器に対応する。

第126図１は大型の壷である（Ⅰ類ａ大）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁断面形は方形状を呈する。肩部には焼成時の積痕。内面には叩き痕。灰褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。暗茶褐色の釉（４号墓－５）。

同図２は中型の壷である（Ⅰ類ａ中）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁断面形は方形状を呈する。肩部には焼成時の積痕。内外面には叩き痕。灰褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。暗茶褐色の釉（４号墓－４、４号墓散乱２）。

同図３は小型の壷である（Ⅰ類ｂ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁断面形は三角形状を呈する。肩部には焼成時の積痕。内外面には叩き痕。燈褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。緑黄灰色の釉（１号墓－28）。

同図４も小型の壷である（Ⅰ類ｂ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁断面形は三角形状を呈する。肩部には叩き痕。燈褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。茶褐色の釉（１～４号墓散乱３、ヤッチ北側斜面）。

第127図１も小型の壷である（Ⅰ類ｂ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁断面形は三角形状を呈する。肩部には内外面に叩き痕。燈褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。黄緑色の釉（１号墓－28）。

同図２は白釉陶器である（Ⅴ類）。薄手で外面に白濁色の施柚するタイプ。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がる。内面に叩き痕。燈褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。外面に白濁色、内面に茶褐色の釉（１号墓－１）。

第８節　タイ産褐釉陶器

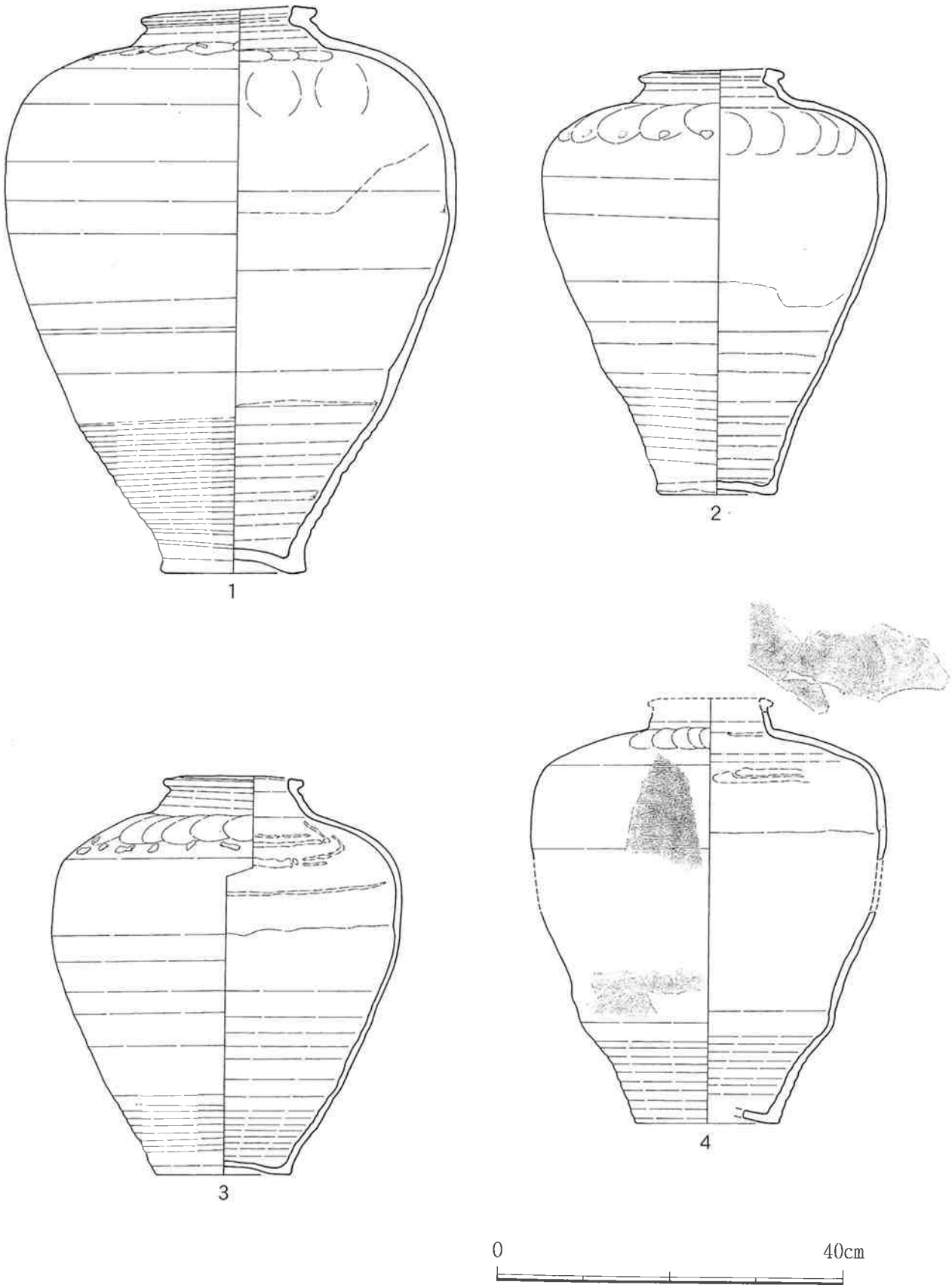
ヤッチのガマ周辺の墓から検出されたタイ産褐釉陶器は５点で、確認された壷のみであった。これらはタイのシーサッチャナライ窯等において生産されたものと思われる資料である（第127図３・４）。なお、各分類は第３部第３章第10節タイ産褐釉陶器に対応する。

第127図３は四耳壷である（Ⅰ類ａ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部を大きく外反させる。肩部には４つの横耳が付される。耳とその下部には沈線を廻らせる。赤茶褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。黒褐色の釉（１号墓－34）。

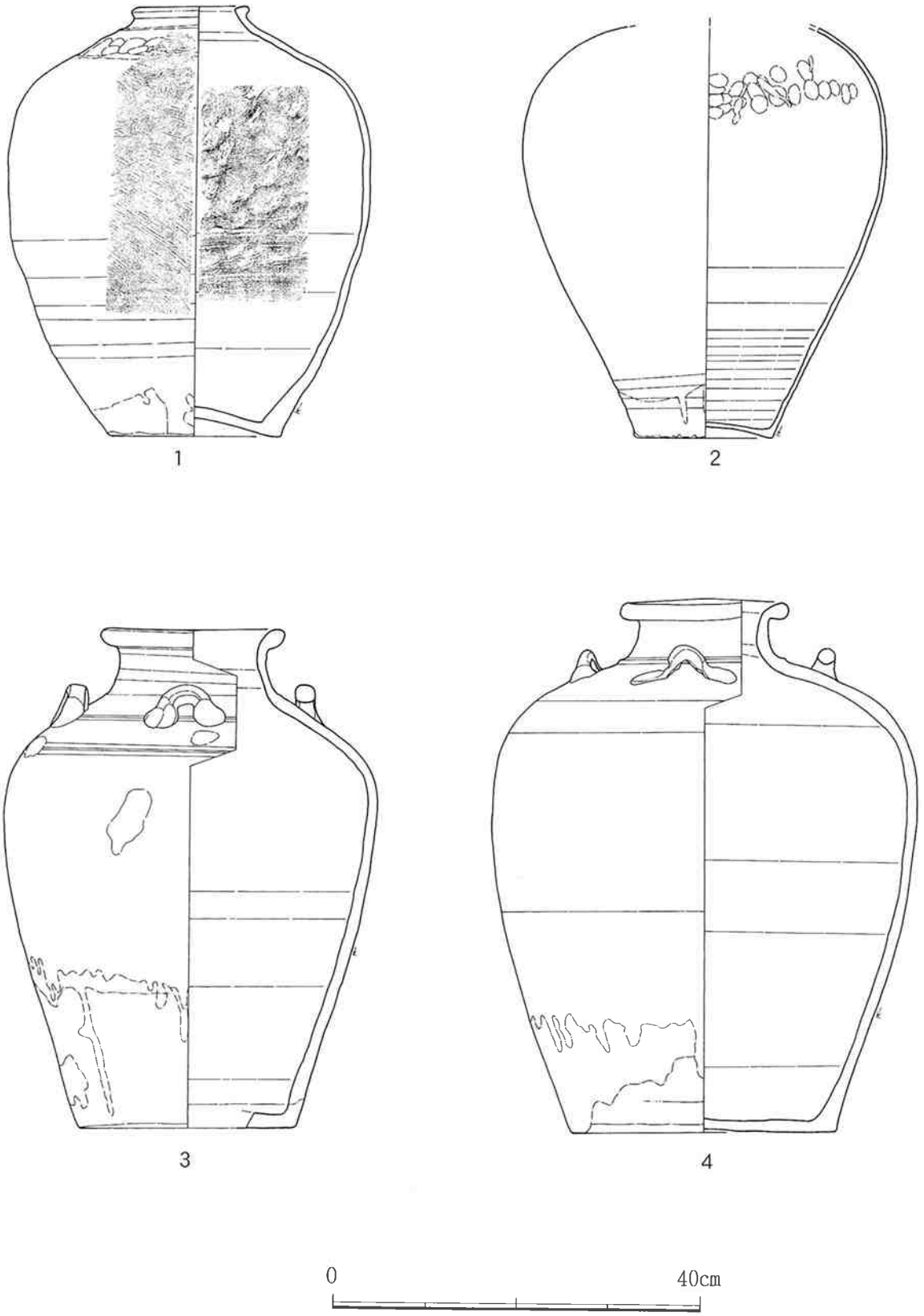
同図４は四耳壷である（Ⅰ類ｂ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部を大きく外反させる。肩部には４つの横耳が付される。頚下部には沈線を廻らせる。茶褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。黒褐色の釉（７号墓－33）。

第９節　タイ産炻器

第３部第３章第11節タイ産炻器と同タイプの資料であるが、小破片であることから割愛した。



第126図　中国産褐釉陶器１　壷



第127図　中国産褐釉陶器２　壷（１～２）、　タイ産褐釉陶器　壷（３～４）

第10節　本土産青磁

瓶の破片資料が２点得られているが、小破片であることから割愛した。

第11節　本土産色絵

本土産色絵の碗１点、瓶１点得られているが、瓶は小破片であることから割愛した。
第128図１は、色絵の碗である。高台はやや高く、内削りは深い。高台から丸みを持って立ち上がる。素地は白色の細粒子で、白色の釉を畳付以外に施している。口唇部は口錆とする。外面に花卉文等を上絵付けにより表している（１～４号墓散乱３、１号墓散乱）。

第12節　本土産染付

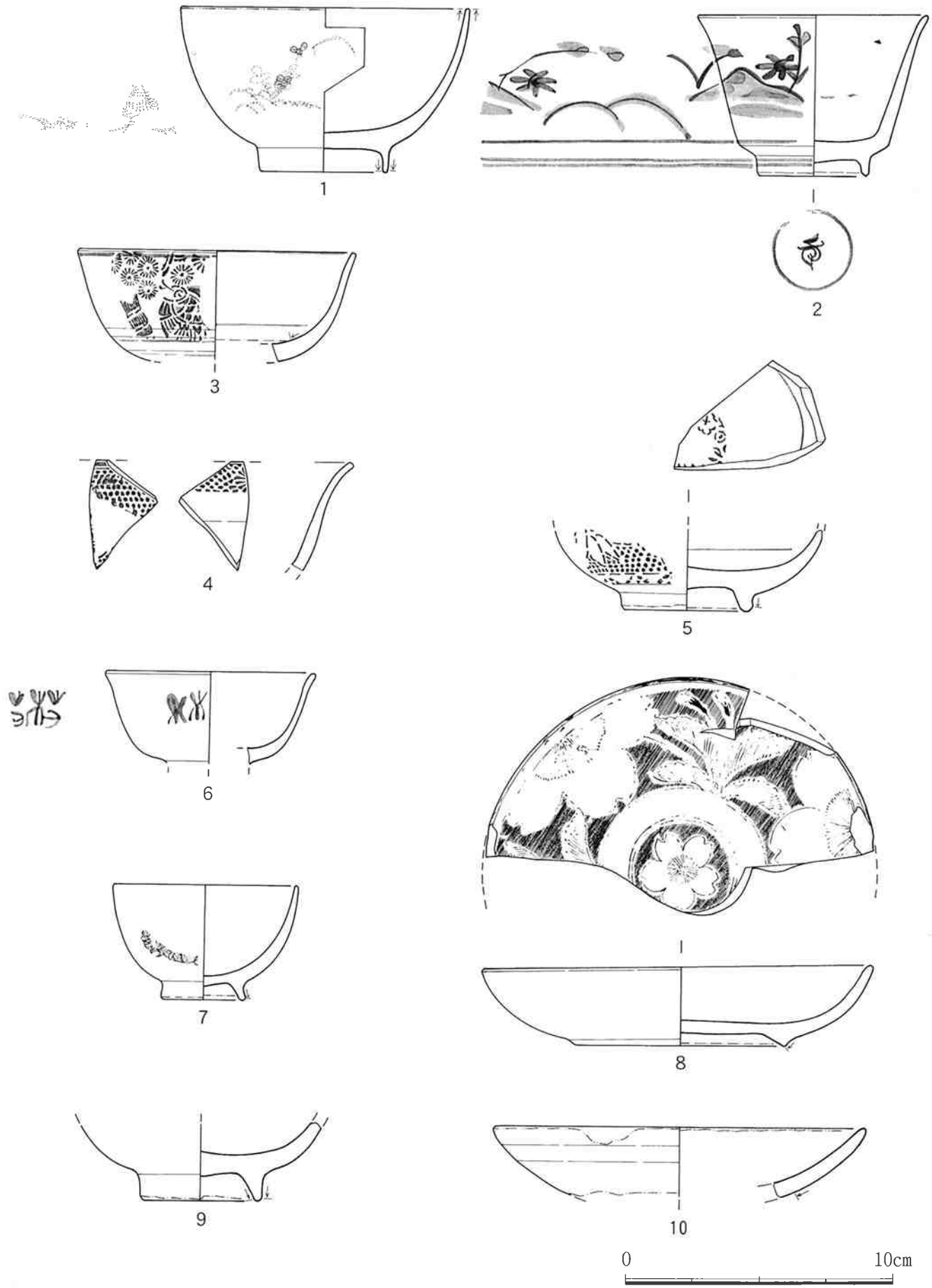
本土産染付の碗・小碗・瓶の完形及び破片資料が20点得られている。小碗のみ図化した。なお、分類は第３部第３章第15本土産染付に対応する。
第128図２は、本土産染付の小碗である（小碗Ⅱ類）。腰折状に角度を変えて立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。外面に山水文を描き、腰と高台外面に圏線を廻らせる。高台内面には圏線と銘。素地は白色の細粒子で、淡灰白色の釉を畳付以外に施す（５・６号墓間）。

第13節　本土産印判手

本土産印判手で確認された器種は碗・小碗・皿の３器種である。全て図化した（第128図３～８）。
３は型紙摺の碗で直口口縁タイプである。外面に圏線と花文等を表している。内面にも圏線が入る。素地は白色の細粒子で、淡灰白色の釉を両面に施すが、見込みは露胎である（６．７号墓前）。
４も型紙摺の碗で外反口縁タイプである。両面に文様を表すが判然としない。素地は白色の細粒子で、白色の釉を両面に施す（９号墓）。
５も型紙摺の碗で底部資料である。外面に笹文や三角の連続文、圏線を表している。内面胴下部に圏線と見込みに松・竹・梅？が入る。素地は白色の細粒子で、白色の釉を両面に施すが、畳付は露胎である（６．７号墓前）。
６は小碗である。外反口縁である。外面胴部に呉須による文様を表す。素地は白色の細粒子で、白色の釉を両面に施す（５号墓散乱）。
７も小碗である。直口口縁。外面に銅版転写による文様。白色細粒子で、白色の釉を畳付以外に施す（９号墓）。
８は皿である。直口口縁タイプである。内面に銅版転写による花文等を表す。素地は白色の細粒子で、淡灰白色の釉を畳付以外に施している。口唇部には鉄釉による口錆を施す（９号墓）。

第14節　本土産陶器

本土産染付の碗・皿の完形及び破片資料が18点得られている。碗・皿1点すつのみ図化した。なお、分類は第３部第３章第17節本土産陶器に対応する。
第128図９は、碗の底部資料である（碗Ⅰ類）。高台は高く、内削りは深い。素地は淡黄白色の粗粒子で、黄白色の釉を畳付以外に施している。全体に細かい貫入が入る（６．７号墓前）。
同図10は皿の口縁破片資料である（Ⅰ類orⅡ類）。厚手で、外面には轆轤痕が顕著である。素地は桃褐色の粗粒子で黄灰褐色の釉を両面に施している。口唇部には鉄釉による口錆が施される（６．７号墓前）。



第128図　本土産色絵　碗(1)、本土産染付　小碗(2)、本土産印判手　碗(3～5)、小碗(6～7)
皿(8)、本土産陶器　碗(9)、皿(10)

第15節　沖縄産施釉陶器

ヤッチのガマ周辺の墓から出土した器種は、瓶子、碗、小碗である。

瓶子は、６・７号墓前から表採したスカート状高台の欠損した資料である。素地は灰白色の微粒子で、飴釉を口縁内面から高台脇にかけて施釉する。口縁部は２/３が欠損する。

碗は、９号墓から検出したもので、黄白色の細粒子に白化粧・透明釉を施釉した胴部資料である。

小碗は、６・７号墓前から表採した、灰白色の微粒子に灰釉を施した口縁部資料である。粗い貫入が入る。

第16節　沖縄産無釉陶器

器種は、壷、甕である。それぞれの器種を器形により、先述の第３部第３章第19節のとおりに分類し、個々の特徴については観察表に呈示した。ここでは特徴的なものを図示した。

壷（第129図１，２）

（１）は三耳壷で、器の最大径は肩部にあり頚部でストレートに立ち上がり、口縁部を折り曲げて肥厚させるものである。（Ⅱ類－ｂ－い）に分類されるものであるが、窯の異常高温のため、素地はスポンジ状にふくれて、器形にゆがみが生じる。

（２）は頚部下に２条の圏線を施し、肩部にやや張りがあるもの。頚部でストレートに立ち上がり口縁部は直角に折れ曲がるもので、（Ⅲ類－ｂ－え）に分類されるものである。

甕（第129図３～５）

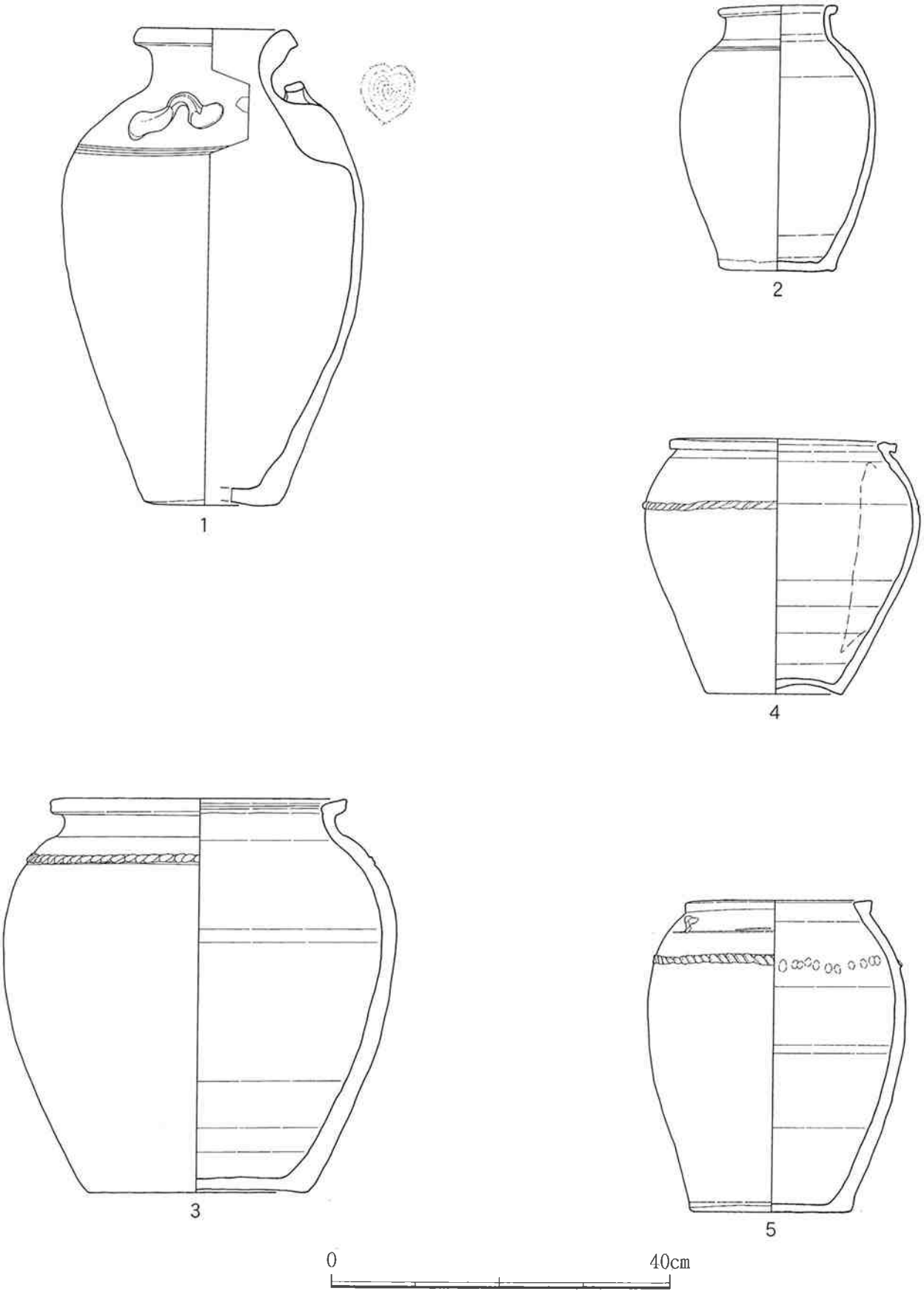
（３）は口縁部の断面形が四角形を呈し、肩部に１条の圏線と縄目文を施すもので、Ⅲ類に分類されるものである。

（４）はⅢ類に分類可能と思われるが、頚部が短く、口縁部は貼付けによりつくられるものである。

（５）は無頚のため口縁部の形状が三角形になるもので、Ⅳ類に分類されるものである。縄目文を施した際の指痕が肩部内面に巡る。

第34表　沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	素地 器色（外面） 器色（内面）	調整・文様などの特徴	出土地
第129図 図版76	1	壷	Ⅱ類-b-い	口縁部 ～ 底部	19.5 56.8 16.2	極暗赤褐色 極暗褐色 暗赤褐色	素地は焼そんじによりスポンジ状の黒灰色に変化。肩部に２条の圏線。耳の貼付面は蝶形。窯印は葉をモチーフ。	7号墓-28
	2		Ⅲ類-b-え	胴部 ～ 底部	14.2 31.8 13.8	鈍赤褐色 橙色 橙色	素地にマンガン粒・石英粒が混入。口縁部・胴部の一部に自然釉。口縁部がやや磨耗する。	9号墓
	3	甕	Ⅲ類	完形	35.0 47.0 25.9	暗赤褐色 鈍赤褐色 暗赤褐色	素地に砂粒・石英粒が混入。２条の圏線と縄目文。	6号墓-23
	4			口縁部 ～ 底部	27.0 30.2 16.4	赤褐色 極暗赤褐色 黒褐色	素地に細砂が混入。口縁部の外周部は貼付け？口径に対して器高は低い。	7号墓-30
	5		Ⅳ類	口縁部 ～ 底部	22.2 37.4 18.7	暗赤褐色 鈍赤褐色 暗赤褐色	素地に細砂が混入。口縁部下に溶着痕。肩部内面に縄目文を施した際の指痕が巡る。口唇部に窯道具跡。	7号墓-25



第129図　沖縄産無釉陶器　壷(1～2)、甕(3～5)

第17節　煙管

第130図１は、青銅製の吸口である。吸口の部分が細く伸びるタイプである。吸口径0.4cm、接続部径0.9cm、長さ7.2cm、重さ6.6ｇ。１号墓17内より検出。

第18節　その他の金属製品

22点が得られた。調度品の金具と思われるものが16点と最も多く、他に指輪や薬莢などが得られた。調度品の金具の中でも引手金具が7点と多い。薬莢は2点得られ、米軍製と思われる。殆どが鉄製だが、3点ほど銅製と思われるものもある。

得られた22点中、10点を第130図２～11に示し、個々の詳細は観察一覧（第35表）に記載する。

第35表　その他の金属製品観察一覧

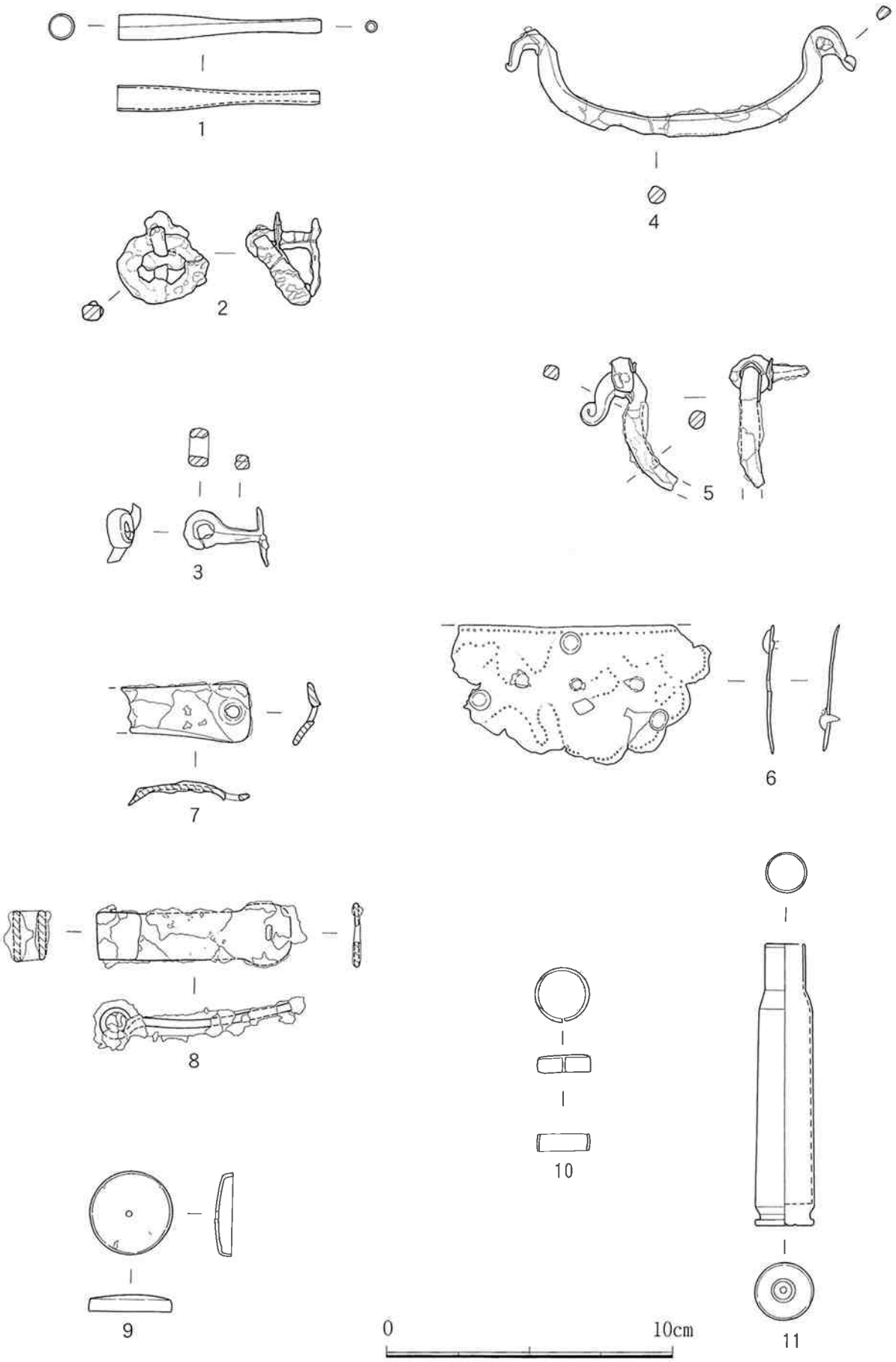
挿図 図版	番号	種類	完・破	観　察　事　項	素材	出土地
第130図 図版75	2	調度品の金具	破	引手金具と思われる。全体に錆が入り膨らむ。錆のため直径３cmの鐶が台に接着する。台には５弁の花状の薄い飾りが取り付けられている。長さ3.3cm、幅3.3cm、高さ2.6cm、重さ11.8ｇを計る。	鉄	２号墓人骨集中部2
	3		破	引手金具などの取り付け金具で、同図2の取り付け金具と同様のものと思われる。全体に赤錆が付着。脚部に対し頭部が少しねじれる。頭部の幅は0.62cm、内径は0.6cm。頭と脚の間は平たく、あまり錆も見られない。長さ３cm、輪の直径1.39cm、重さ3.6ｇ。	鉄	２号墓人骨集中部1
	4		完	引手金具と思われる。右側の湾曲した部分には金具が接着する。取っ手中央部は断面がほぼ円形だが、金具の取り付け部分付近は平たくなり方形を呈する。全面錆のため膨らみ、一部石灰が付着。全長12.5cm、幅3.9cm、中央部直径0.6cm、重さ22.6ｇ。	鉄	２号墓人骨集中部2
	5		破	引手金具の一部と思われる。全面に錆が生じ、一部石灰が付着する。全形は同図4と同様になると思われる。取り付け金具が錆で接着し固定する。取り付け金具には破損しているが約0.8mmの薄い板が一枚見られる。おそらく同図1の様な花形の飾りが付いていたのであろう。全長3.4cm、幅4.3cm、断面部直径0.6cm、重さ9.8ｇ。	鉄	２号墓人骨集中部2
	6		破	飾り金具と思われる。横の中心ラインに取り付けのための3～4mmの小孔が３つ並ぶ。留め具が上部に一つ、両サイドに二つ残る。表面は裏から裏打ちされ、縁取りと、内面に文様が描かれる様である。残存横幅9.1cm、縦幅4.9cm、厚さ0.6～0.85mm、重さ9.3ｇ。	鉄	２号墓人骨集中部2
	7		破	飾り金具の一部と思われる。全体的に錆が入り、若干変形する。右端にある径５mmの孔は、表から打ち込まれた感がある。残存長さ4.6cm、幅2.2～1.8cm、厚さ1.8mm、重さ5.7ｇ。	鉄	２号墓人骨集中部1
	8		完	錠と思われる。緩く曲がり変形する。全体的に錆が生じ、裏面は錆膨れが激しく2～5mmの小石が多数付着する。取り付けのための孔と鍵掛けのための孔は錆で殆どが埋まる。全長7.4cm、幅1.8cm、厚さ３mm、重さ21.7ｇ。	鉄	２号墓人骨集中部2
	9		完	鋲とも考えられるが、孔の大きさが径2mmと小さいため、判然としない。表裏面とも青錆が生じているが、保存状態は良い。直径2.95cm、高さ４mm、厚さ0.9mm、重さ5.9g。	銅	4号墓-11内
	10	指輪	完	指輪。合わせ目は重なっておらず約0.7mm開く。全体に赤・青錆が生じる。文様は見られない。直径1.7～1.9cm、幅5.3～5.9mm、厚さ0.5mm、重さ1.2ｇ。	銅？	4号墓-8内
	11	薬莢	完	薬莢。縦9.95cm、幅2.05cm、口径1.4cm、重さ52.3ｇ。		５号墓前表採

第19節　簪

花形カンザシが1点得られた。頭部の花形と竿部がはずれた状態で出土し、竿部の長さは約8cm。１号墓４内の検出。ヤッチのガマで出土している第102図1の花形カンザシとサイズ的にほぼ同じになると考えられる。

第20節　釘

破片も含めて32点の鉄釘が得られた。その内の4点ほどは全形が伺えるが、他は破片である。全て錆化が著しく、錆膨れやヒビが生じ状態は悪い。サイズは破損していないもので、3.5～5cmを計り、破損しているものの中にはそれより多少長くなると思われるものもある。得られた殆どが角釘で、1点のみ丸釘と思われるものが確認できる。１号墓から21点、２号墓から5点、４号墓から2点、７号墓から3点、８号墓から1点の出土である。



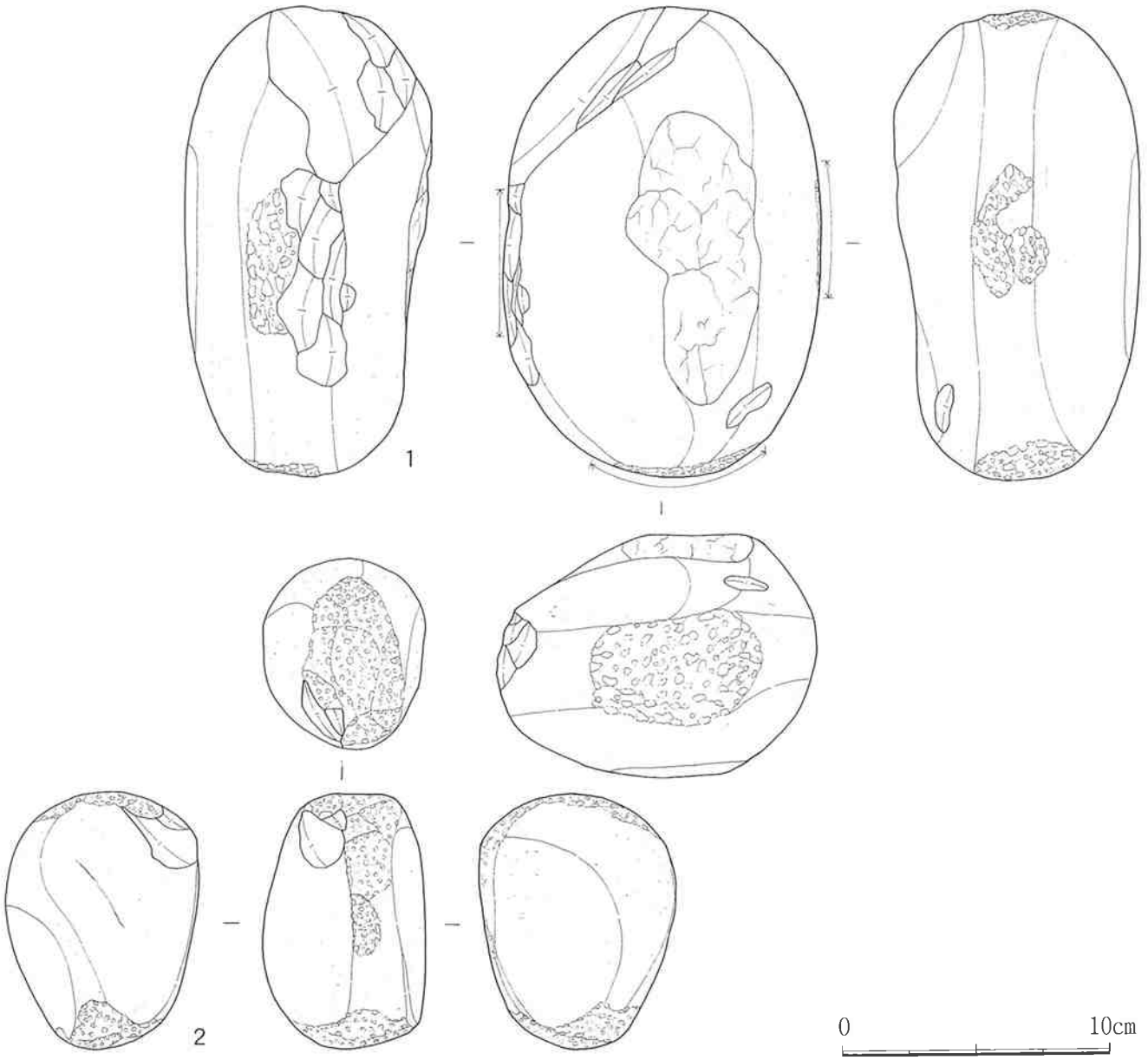
第130図　煙管(1)、　その他の金属製品(2～11)

第21節　石器

今回の調査により得られた石器は敲石２点で、磨石の用途を想定させるような磨面を有するものも、これに含めた。以下、個々の特徴についてを記述する。

第131図１は、楕円状を呈す大型の礫を利用した敲石である。重量があるため、片手では扱いにくい。両側面及び上下端に敲打痕を有し、一部は使用による衝撃からか大きく破損している。裏面の平坦面はツルツルとした磨面を呈しており、磨石としての用途が窺える。長さ18cm、幅12.1cm、厚さ9.4cmを測り、重さは3,070gである。石質は安山岩で、１号墓よりの表採資料である。

同図２は、平面観が隅丸の逆三角形状を呈する礫を利用した、敲石である。上下端は敲打により面を形成し、特に上端部には使用による剥離も見受けられる。三辺のうち一辺にも敲打痕を有している。また、三面のうち一面は形状から磨石の用途も考えられる。長さ9.8cm、幅7.4cm、厚さ6.1cmを測り、重さは660gである。石質は安山岩で、６・7号墓前よりの表採資料である。



第131図　石器

第22節　香炉

第132図１は、サンゴ製の香炉である。わずかにノミ痕が残るが、丁寧な仕上げである。上面に方形の孔を穿っている。一端が破損しており、別のサンゴ石灰岩で補っている。４脚をなす。高さ14.6cm、幅16.4cm、奥行き12.9cm、重さ2,740ｇである。１号墓前より採集。

第23節　木製品

第132図２・３、巻頭図版９である。

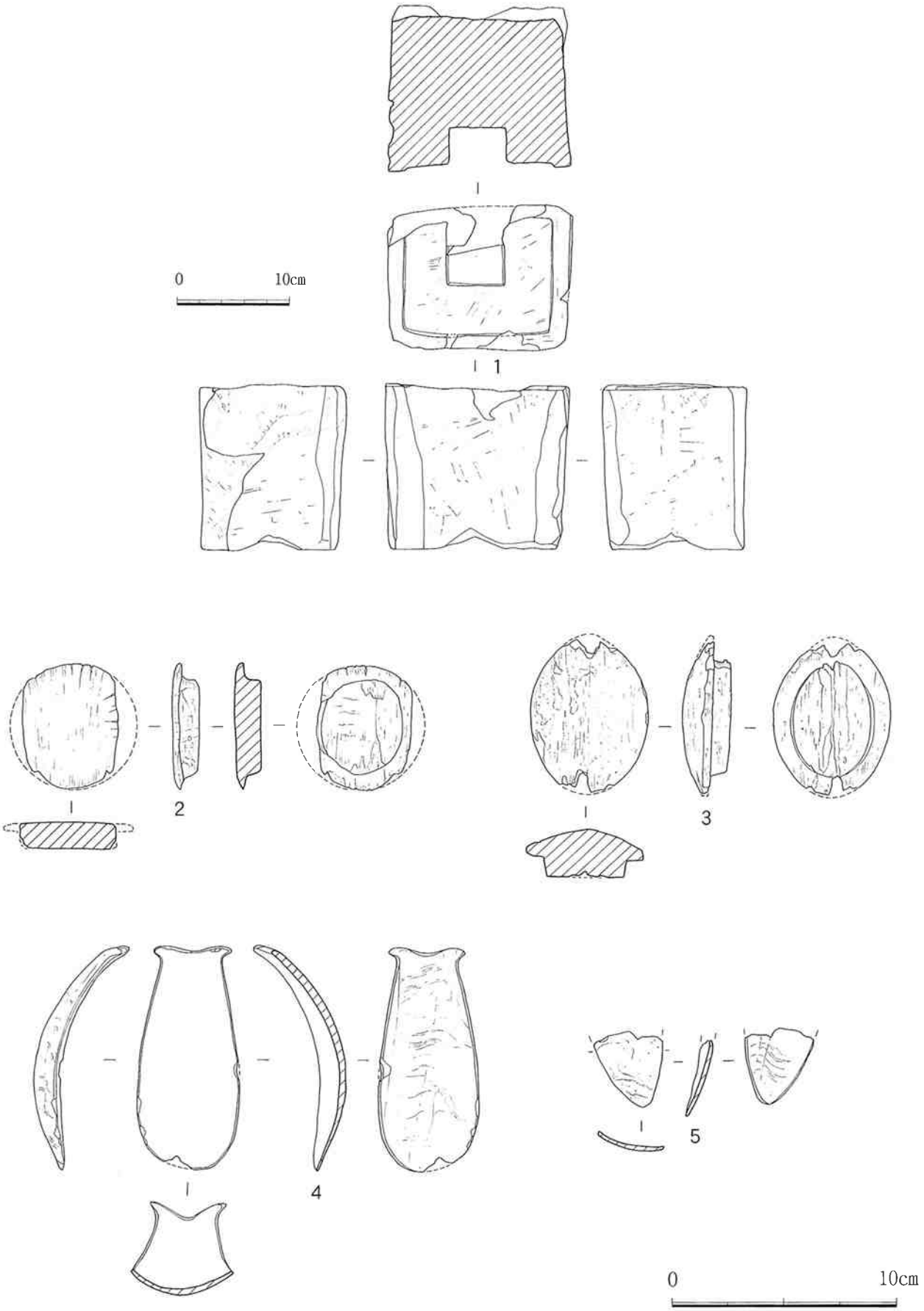
同図２・３はボタン状の木製品である。１は円形、２は楕円形をなす。１は直径5.6cm、厚さ1.1cmである。２は長軸6.9cm、短軸5.2cm、厚さ2.1cmである。何らかの部品であると思われるが、何に伴うものか不明。１は１号墓18内から、２は１号墓35内からの検出である。

巻頭図版９は椀の底部である。２号墓35内からの検出で、ヤコウガイ製匙が伴っていた。内底面には巴文を施す。内部からは沈金を施した漆の剥片が得られたことから、朱漆の地に沈金を施した小椀と思われる。さらに外底面には墨書による文字がみられるが、判然としない。底径2.3cm。

第24節　貝製品

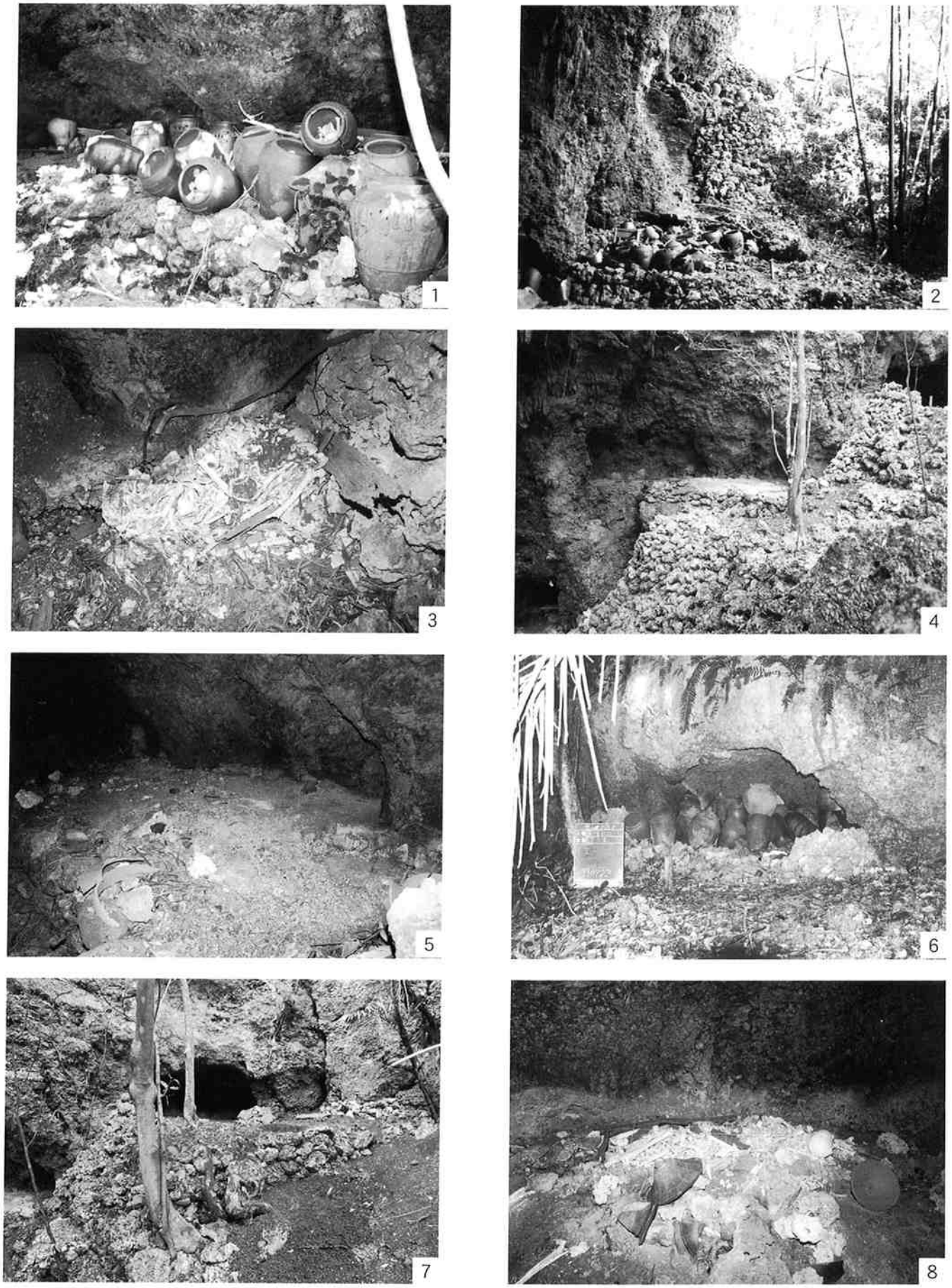
ヤコウガイ製の匙は２点出土している。第132図4は完形で、５は破損品である。４の柄は魚形（Ａ）注１の柄で背面を利用している。２号墓35の土器（宮古式土器）の中から前述の漆椀（巻頭図版9）と共伴して出土している。ヤコウガイ匙の用途や副葬事例の面からも貴重な資料である。５は若干、殻の大きいものを用い、破損面の状況から２次加工の可能性も考えられる。（製品の詳細はヤッチのガマの観察一覧にまとめて示した。）

注１．ヤッチのガマの貝製品の項参照。



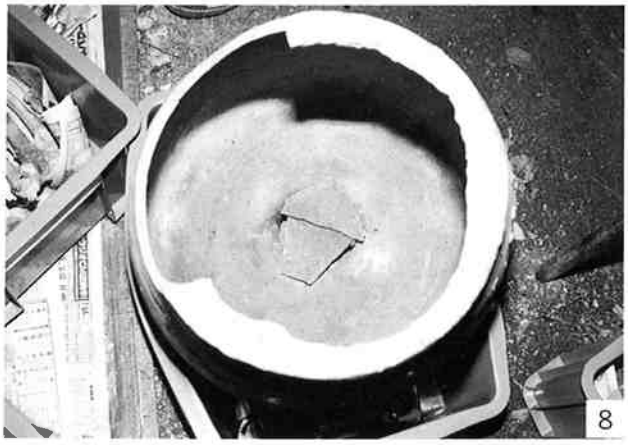
第132図　香炉（1）、木製品（2～3）、貝製品（4～5）

図　　版

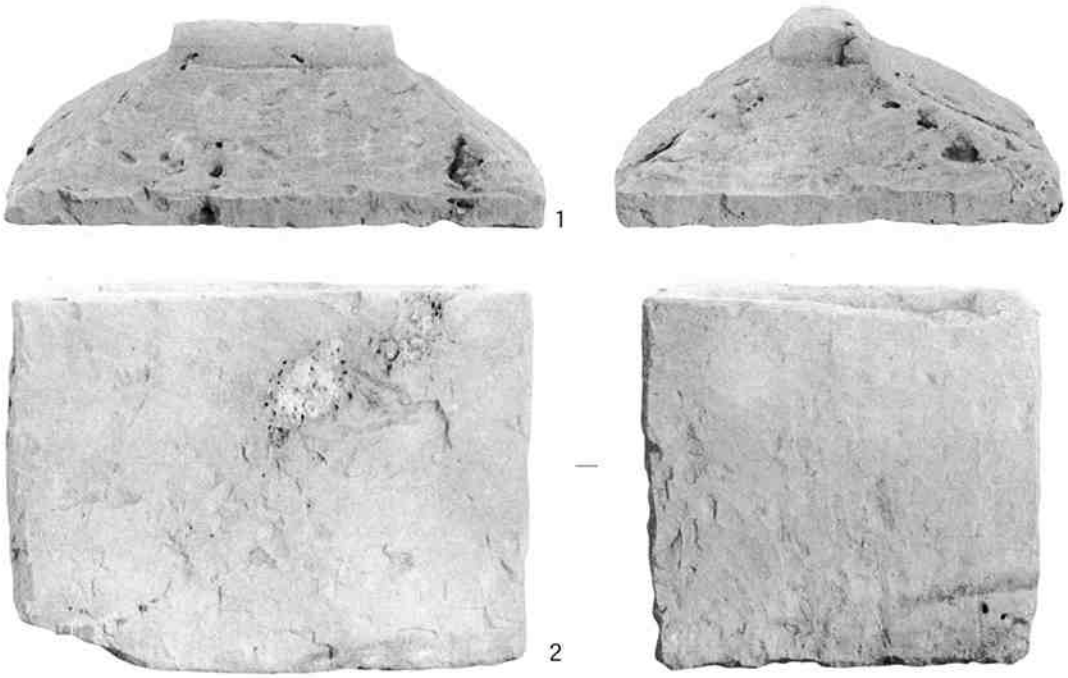


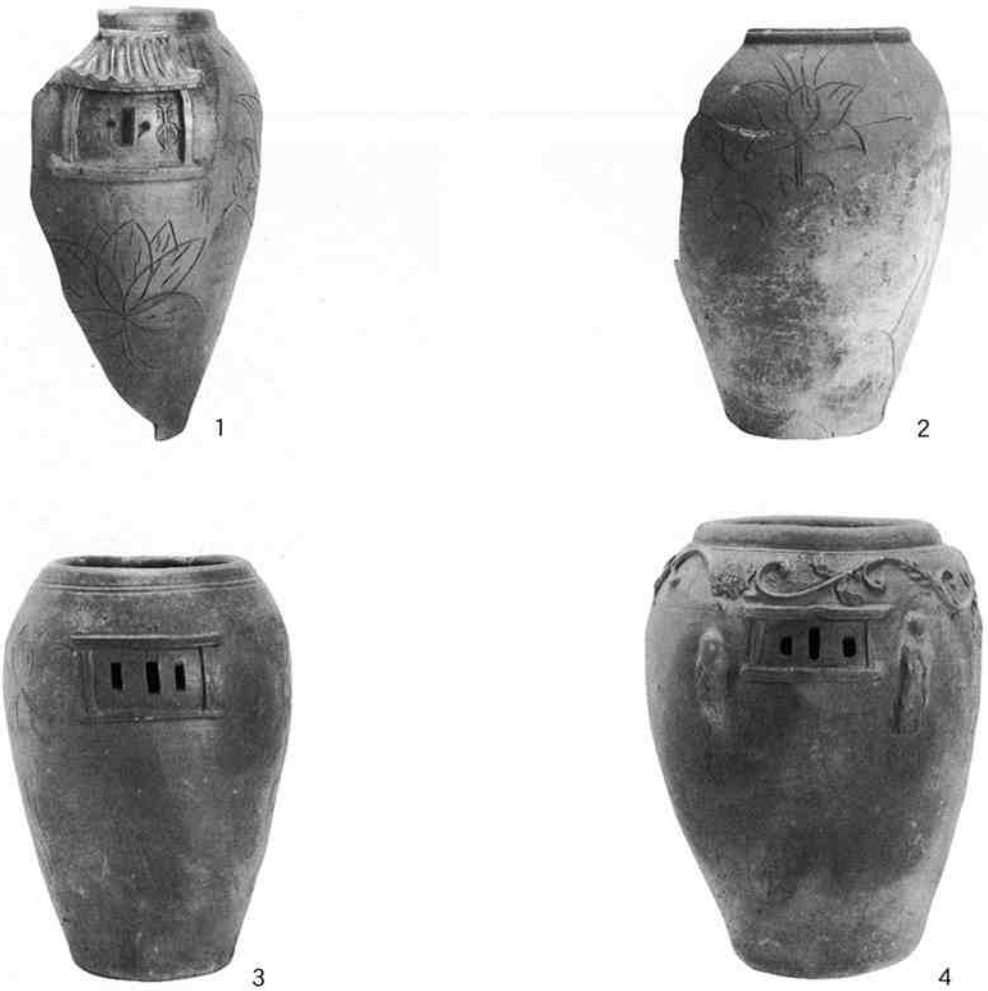
図版66　調査状況１　１．１号墓厨子配置状況　２．同遠景　３．同人骨集中部　４．同取り上げ後　５．同サンゴジャリ
６．２号墓厨子配置状況　７．２号墓取り上げ後　８．２号墓人骨集中部１

図版67　調査状況２　１．２号墓人骨集中部２　２．同取り上げ後　３．同南側石積　４．３号墓厨子配置状況
５．４号墓厨子配置状況　６．５号墓厨子配置状況　７．６号墓厨子配置状況　８．７号墓厨子配置状況



図版68　調査状況３　１．８号墓　２．同内　３．５～８号墓遠景　４．９号墓厨子配置状況　５．小碗検出
６．８号墓内の厨子　７．納骨状況　８．転用品のおとし蓋





図版69　上：厨子１　下：厨子２

図版70　厨子３

1

2

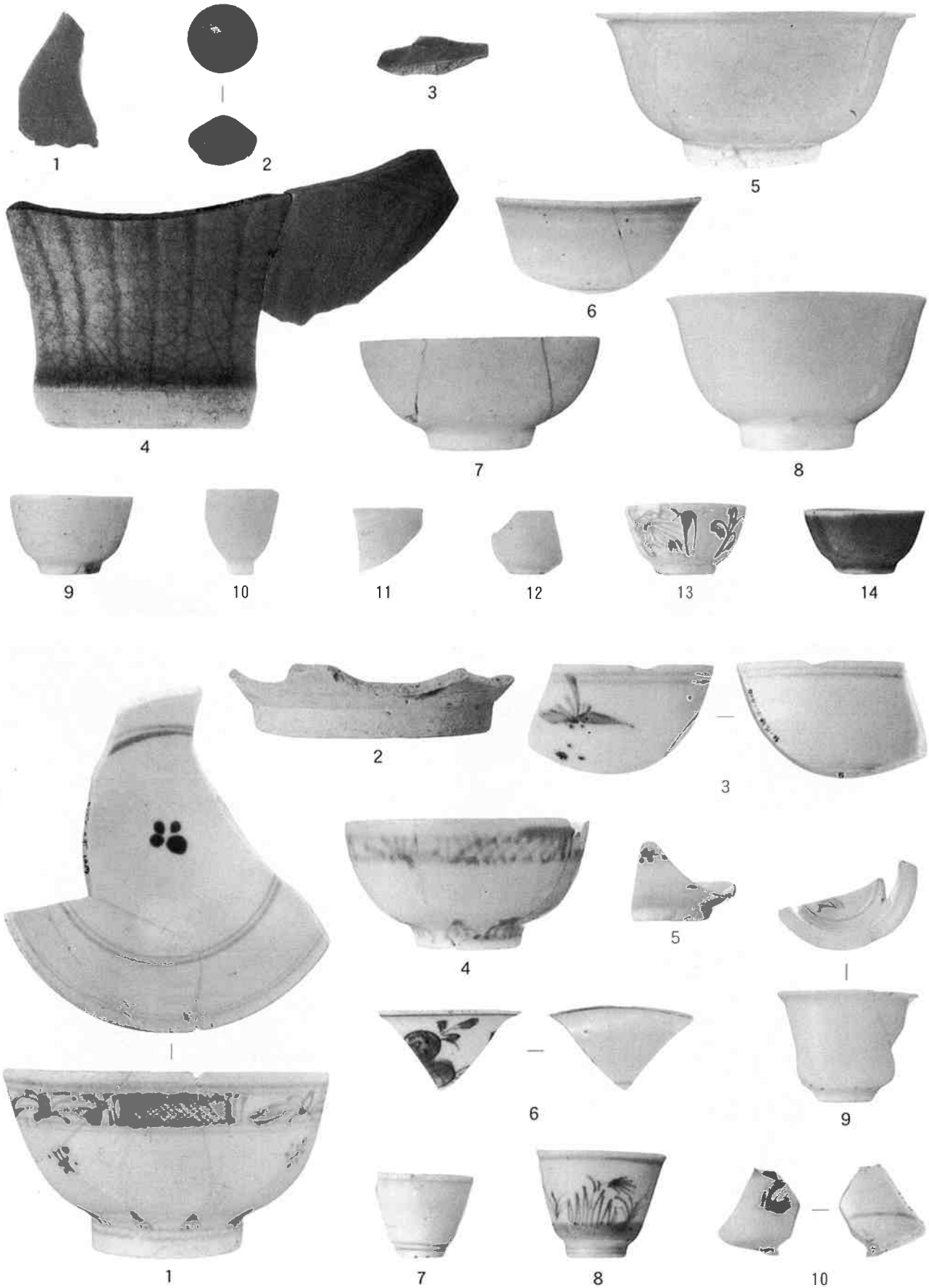
4

3

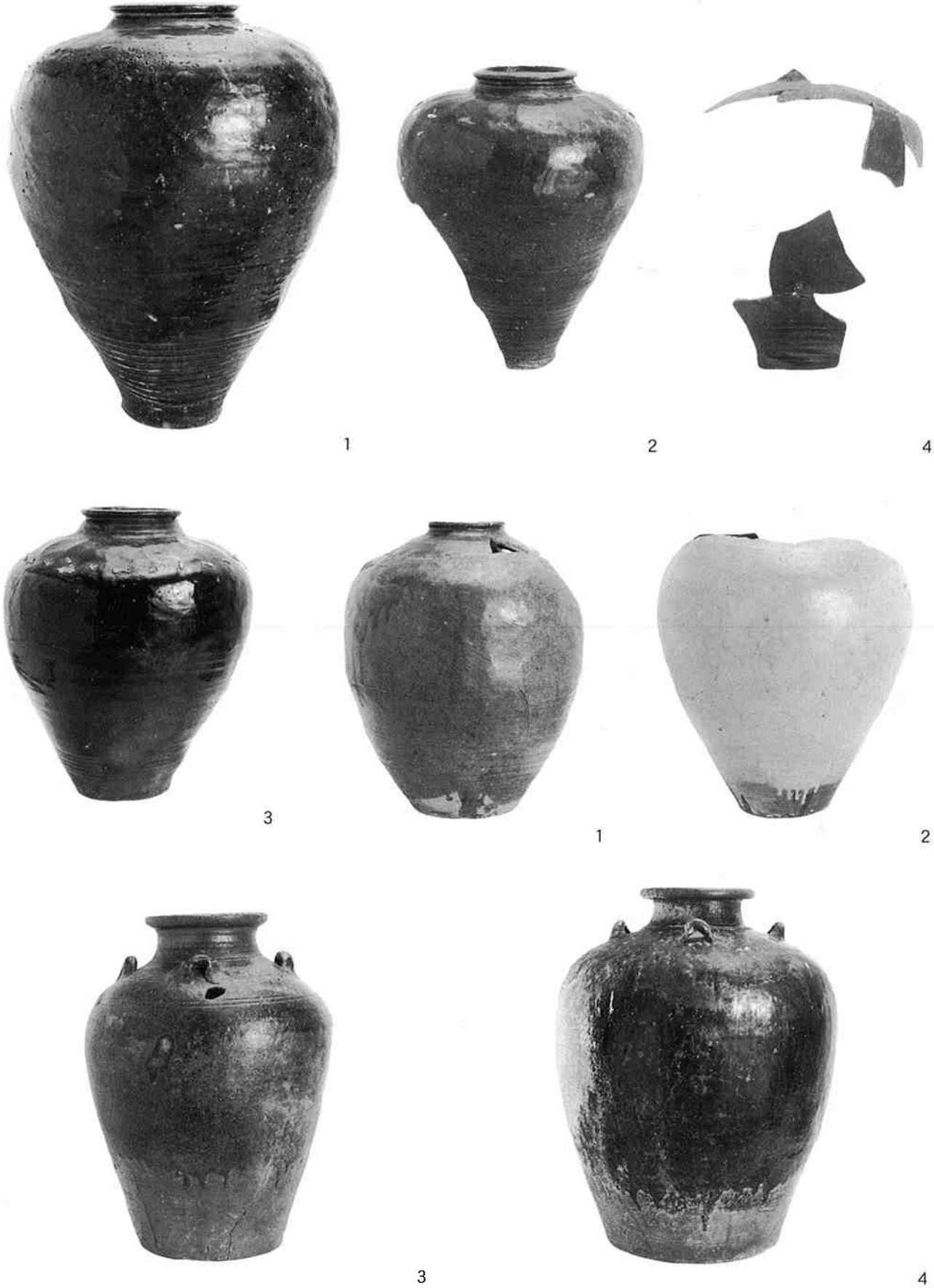
5

図版71　厨子４

図版72　上：厨子５　下右：厨子６



図版73　上：青磁・白磁・中国産色絵・瑠璃釉　下：青花



図版74　上：中国産褐釉陶器１　下：中国産褐釉陶器２・タイ産褐釉陶器

図版75　上：本土産色絵・本土産染付・本土産印判手・本土産陶器　下：煙管・その他の金属製品

1

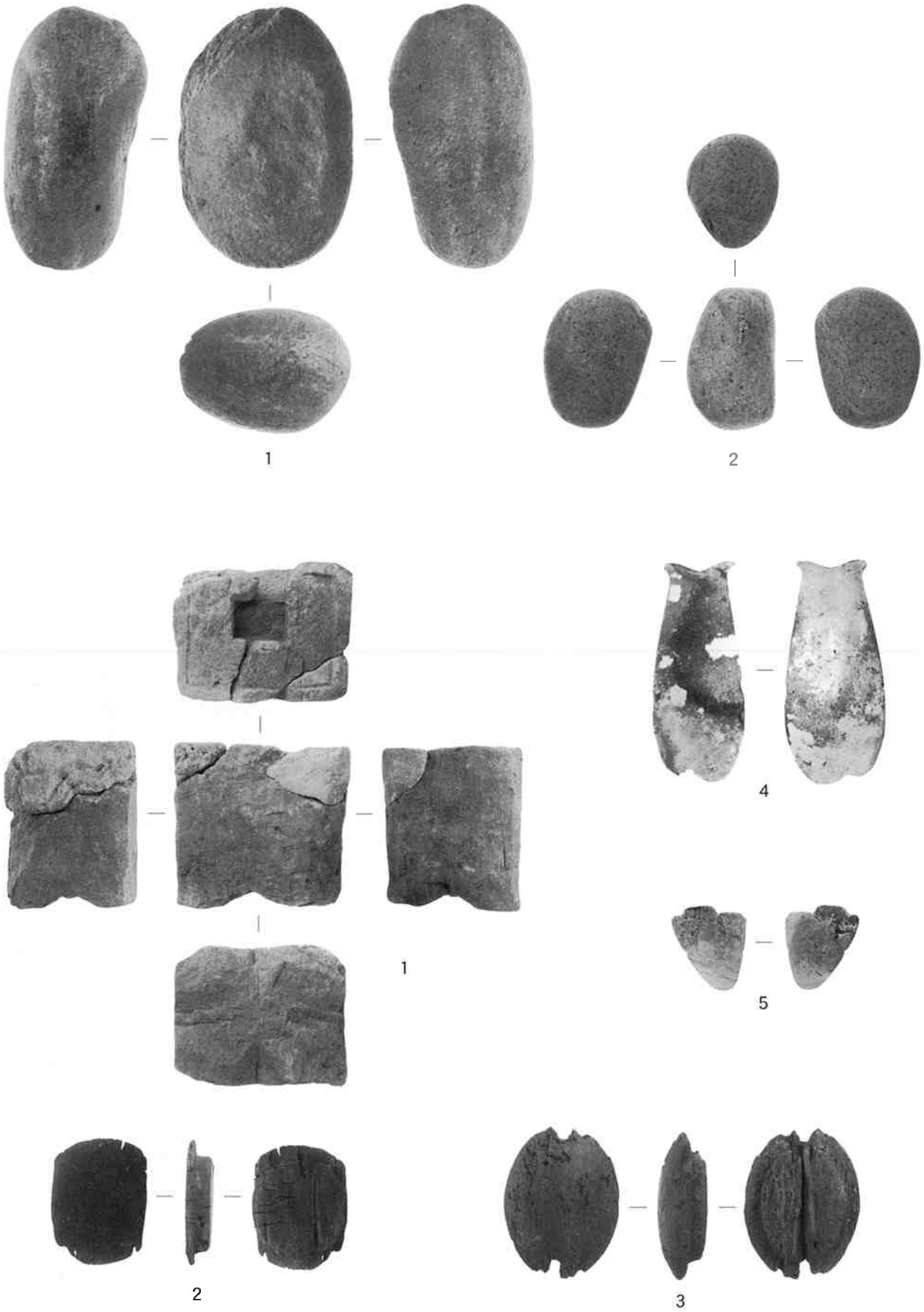
2

4

3

5

図版76　沖縄産無釉陶器



図版77　上：石器　下：香炉・木製品・貝製品

第５部　カンジン原古墓群
－その他の墓・チャラのクブ・カンジン原遺跡－

第１章　調査の概要

カンジン原内のその他の墓は、調査日程の都合で踏査による分布調査が主体となった。墓の多くが崖沿いに分布している。墓の番号は農水部の行った水没物件番号に準じた。ここでは１～20番代をⅠ地区、30～60番代をⅡ地区、70～80番代をⅢ地区、90～120番代をⅣ地区、130番代をⅤ地区とする。

墓の分布状況には偏りがみられることから、地区分けが可能である。地区によって、破風墓・亀甲墓が中心になる地区、崖の窪みを利用した墓が中心になる地区があり、前者は集落寄りのⅢ・Ⅳ地区、後者は集落から離れたⅠ・Ⅱ地区である。Ⅴ地区は破風墓・亀甲墓が主であるが、集落から最も離れた地区である。

調査はチャラのクブを中心に行った。平成11年度の試掘調査で後期土器を含んだ包含層を確認したため、平板測量を実施後、前回の調査区を拡大して調査した。結果、明確な包含層とみるよりも、上部からの流れ込みの土が堆積したものと考えられた。

調査中、庸壁の際に不時発見として墓１基（図版79－１）、ヤギ埋葬？（同２）を確認したため、厨子、ヤギ骨の取り上げを行なった。また、工事に係る墓の移転に伴う調査を行った。

第２章　遺構

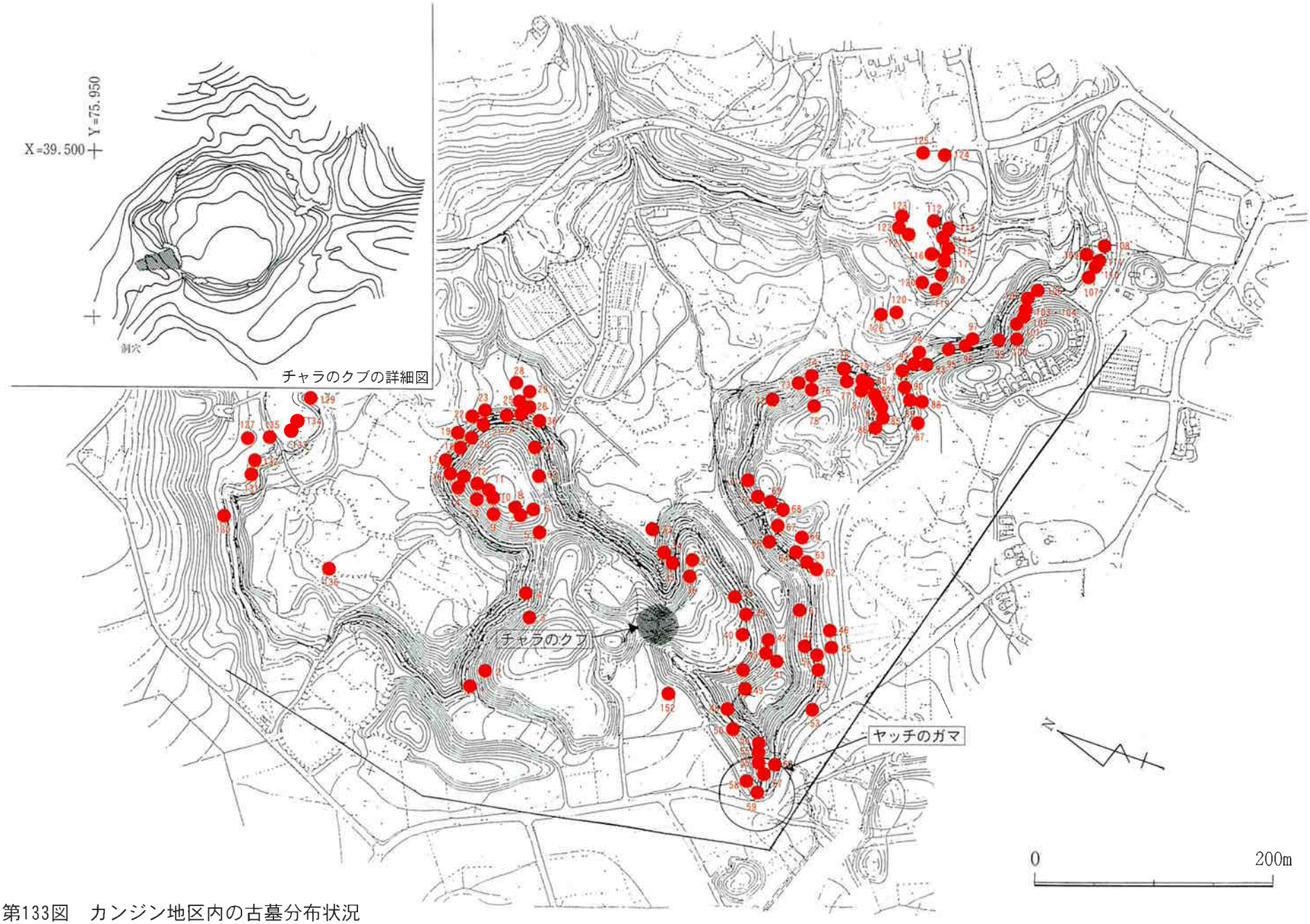
前章で述べたとおり、地区により墓の形態が異なる。内部に残されていた厨子から考えると、ボージャー厨子などの古手の厨子はⅠ・Ⅱ地区およびⅣ地区の一部に、上焼家形などの新しいタイプの厨子はⅢ・Ⅳ地区に多いことから、当初は集落から離れた場所に墓を設けていたものが次第に集落近くへ移動してきたことが分かる。大型の亀甲・破風墓はⅣ地区（110～120番代）に多くみられる。

チャラのクブではヤッチのガマと同じく洞穴開口部に石積みを巡らせ墓域としている（第134回）。石積みは高さが約１m、長軸が10m、短軸が５mの長方形をなしている。石積み内部は１段高く設け、ほとんどの厨子は段上に配置されている。入口付近にも１m四方の小区画があり散乱人骨がある。サンゴジャリを敷いた部分が２ヶ所確認できた。移転のタイミングが合わなかったため、厨子の調査を行うことはできなかった。納骨堂へ移転。

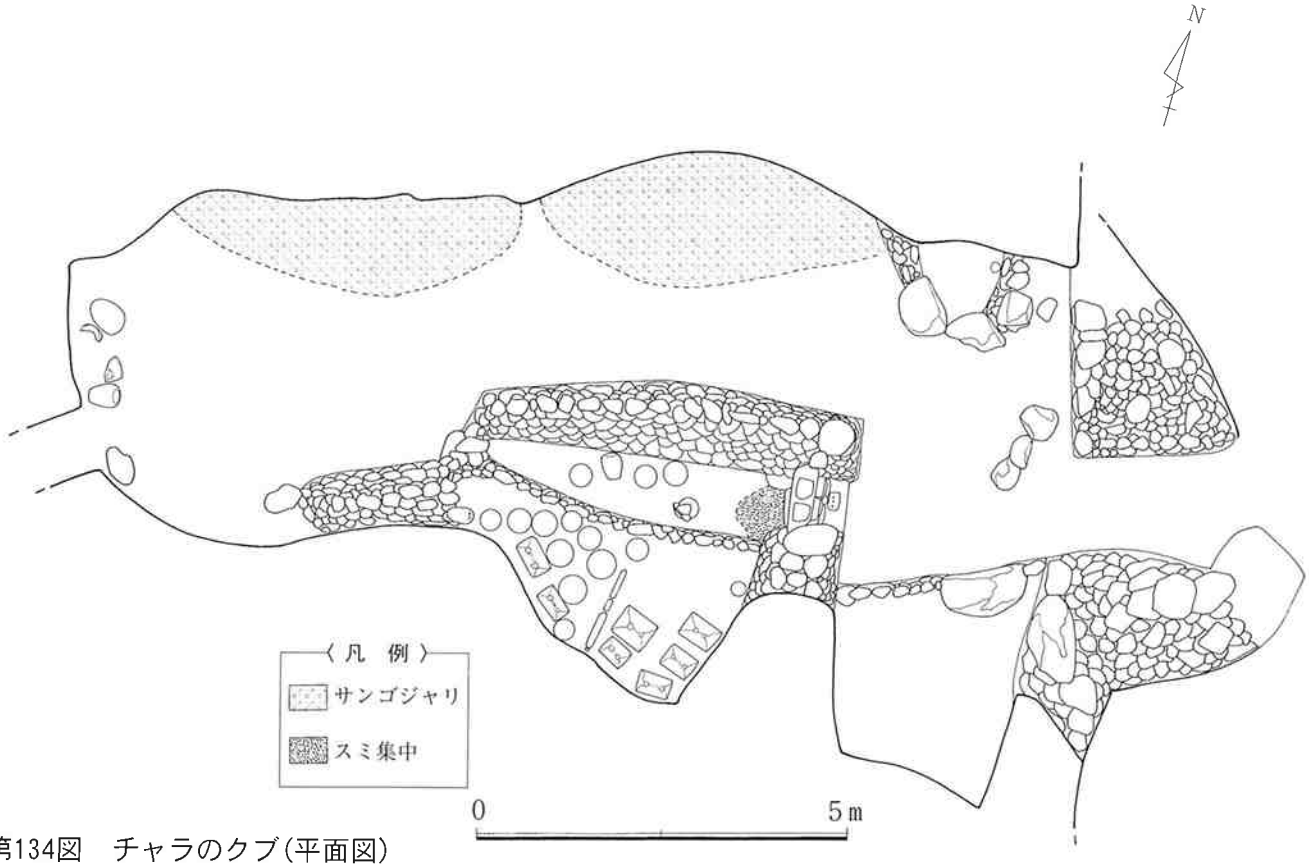
チャラのクブ以外でも調査を行うことができた。まず、所有者である盛吉秀雄氏のご厚意により地区内Ⅱ地区に所在する「大太（おほたい、ウフタイ）の墓」の調査を行った（図版78－５）。型式は掘込み墓、正面を石灰岩の切石で覆っている。内部は棚はなく、フラットな状態である。厨子はボージャー厨子、マンガン掛け厨子が各１基で、銘書はなかったものの、マンガン掛け厨子には家判（十一？）と思われる記号を記していた。また、マンガン掛け厨子には底に拳大の石灰岩が10個入れられていた。調査後は地区外へ移転した。

次いで、同じく盛吉氏のご厚意で地区外にある「シナグラヤーの墓」を調査した。地下ダムからの導水管敷設工事に伴うもので、久米島自然文化センターの上江洲均館長からご協力を頂いた。伝承ではシナグラヤーという人物の墓で、上江洲氏によれば『おもろさうし』巻二十一「くめの二間切おもろ御さうし」に現れる「しのくりや」という西銘の神女ではないか、とのことであった（『日本思想大系』18「おもろさうし」のおもろ通し番号1497）。型式は石灰岩の小洞穴を用いた岩陰利用墓で、正面は石灰岩で閉じている。内部は正面、両脇に石灰岩の切石による棚を設け、厨子は棚上に配している。棚と床には砕いた石灰礫を敷き詰めている。壁は空間を埋めるために人頭大の石灰岩を積んでいる。厨子は15点で、ボージャー厨子13点、マンガン掛け厨子２点であった。銘書のある厨子はなかった。特異なものを図版79にあげた。７はボージャー厨子で、東風平町所在の八重瀬古墓（城間2000）に似る。身に対して蓋が大きく、撮みがはずれるようになっている。身は突帯による区画があり、法師像が２体、眉の下に蓮華文を刻んでいる。内部からは簪、指輪が得られた。５（左から２番目）はボージャー厨子で、大ぶりの眉である。文様は第121図５に似る。６はマンガン掛け厨子で、屋門は小振り。文様は口縁部などに四角のスタンプ文、頸部には貼り付けの花唐草文と沈線の瑞雲文。蓋はボージャー厨子の蓋と同じであり、別個体の蓋の可能性がある。また、底に石を入れた厨子が５例あった。地区外へ移転。

墓以外の遺構では、畑の跡および畑の区画と思われる石列や土留めの石積みを確認した。また、カンジン原付近に屋取集落があったと聞く。



第133図　カンジン地区内の古墓分布状況



第134図　チャラのクブ(平面図)

第3章　遺物

ここでは、その他の墓、チャラのクブ、カンジン原遺跡をまとめて扱った。うちチャラのクブ、カンジン原遺跡からは後期土器などの先史遺物が得られた。厨子以外の壺・鉢などの陶磁器は転用品として用いられたものであろう。

第1節　厨子

ヤッチのガマ・カンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺）と同様に多くの厨子が得られている。先に述べたように新しい墓も多いため、施釉家形など新しい時期の厨子が若干みられる。ここに関しては移転済みの墓が多く、本来は更に多い厨子があったと考えられる。ボージャー厨子はヤッチのガマなどと大差はないが、マンガン掛け厨子には庇付きや形の崩れたものがみられバリエーションが比較的豊富である。銘書は少なくほとんどは新しい紀年銘で、マンガン掛け厨子にみられた。家形には「久米島行」と記された例が複数あり、沖縄本島から久米島へ運ばれた際に記されたのであろう。

家形は上焼がまとまって得られた。第135図で重ね焼きのための突起を有する、いわゆる「ツノ型」のタイプで全面にコバルト釉などを施すものである。赤焼の家形はチャラのクブにみられる（納骨堂へ納めた）。

ボージャー厨子は全体的にみて中型が主体である。また、眉の形成がルーズなものが多く、粗造であるといえる。ここでは特徴的なものをあげた。第136図３・４は、肩部の浮文、胴部の区画文がカンジン原古墓群の第119図４、第120図３・４の折衷的なつくりである。第138図３はボージャー厨子的な雰囲気を持つが、器形は甕に近い。同図４・５は口縁肥厚部を方形につくるものである。

文様は他の例と同じく沈線による蓮華文を施すものが主体をなす。第137図１のように法師の貼り付けを施すものがあり、同図４の人物？の顔を貼り付けた例がある。

マンガン掛け厨子は80cm超の大型（第144図３・４）のものから、30cm程度の小型（第143図７）のものまでみられ、器形ともにバリエーションが豊富である。第143図５・６はマンガン釉を施さない無釉のものである。頸部の屈曲は直角的に折れるタイプよりも曲線的なものが目立つ。第142図６のように頸部を形成しない樽形の器形のものがみられる。庇付きのタイプ（第144図）も得られた。

文様は沈線によるものが大半を占め、新しい紀年銘をもつものほど施文が簡略化されている（第143図）。また、屋門の形態も様々で、文様と同じく新しい紀年銘をもつものは雑なつくりになっている。

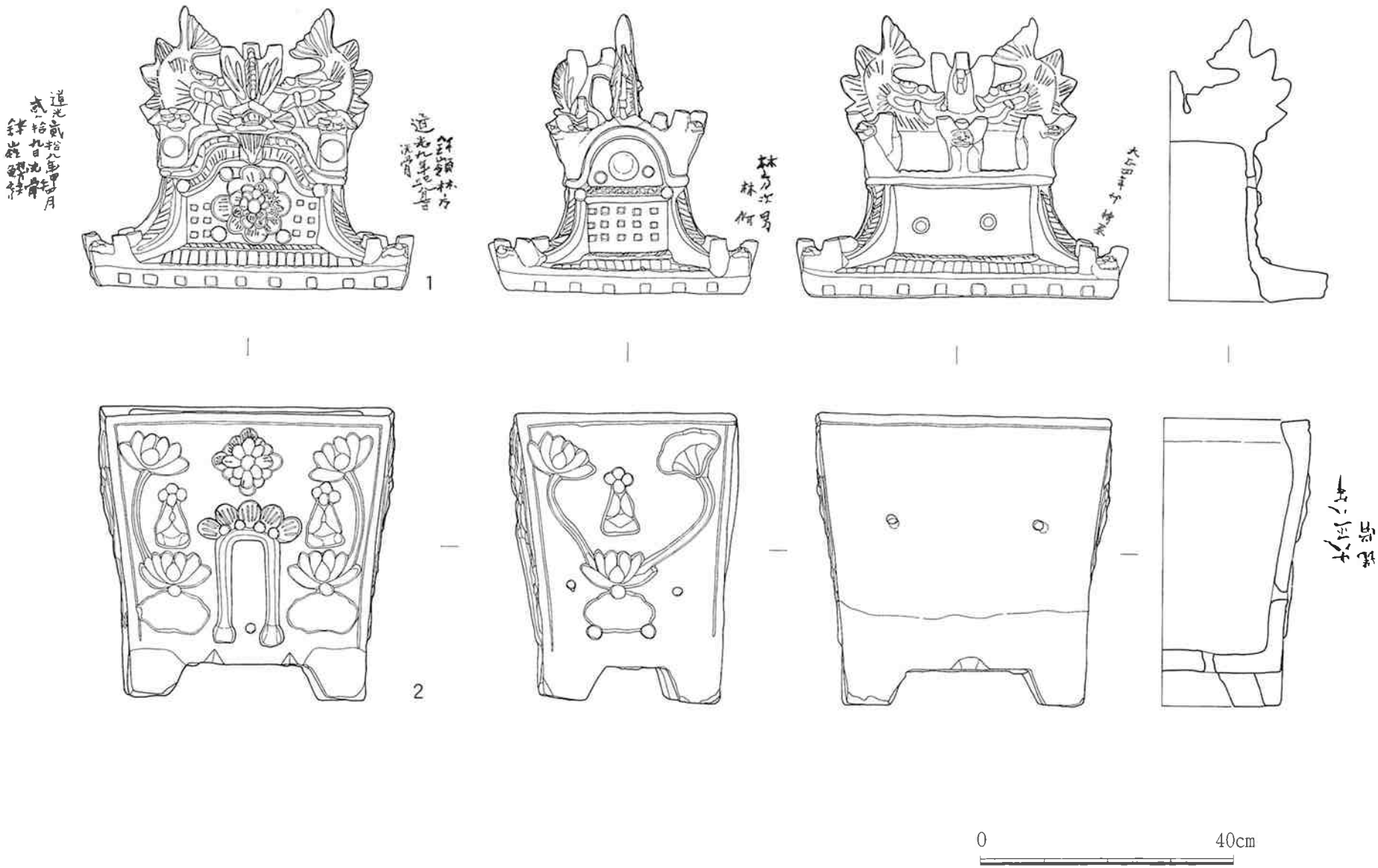
転用品は沖縄産陶器・褐釉陶器を使用したものが得られている。土器は宮古式土器が１点のみである。

第36表ａ　厨子観察一覧

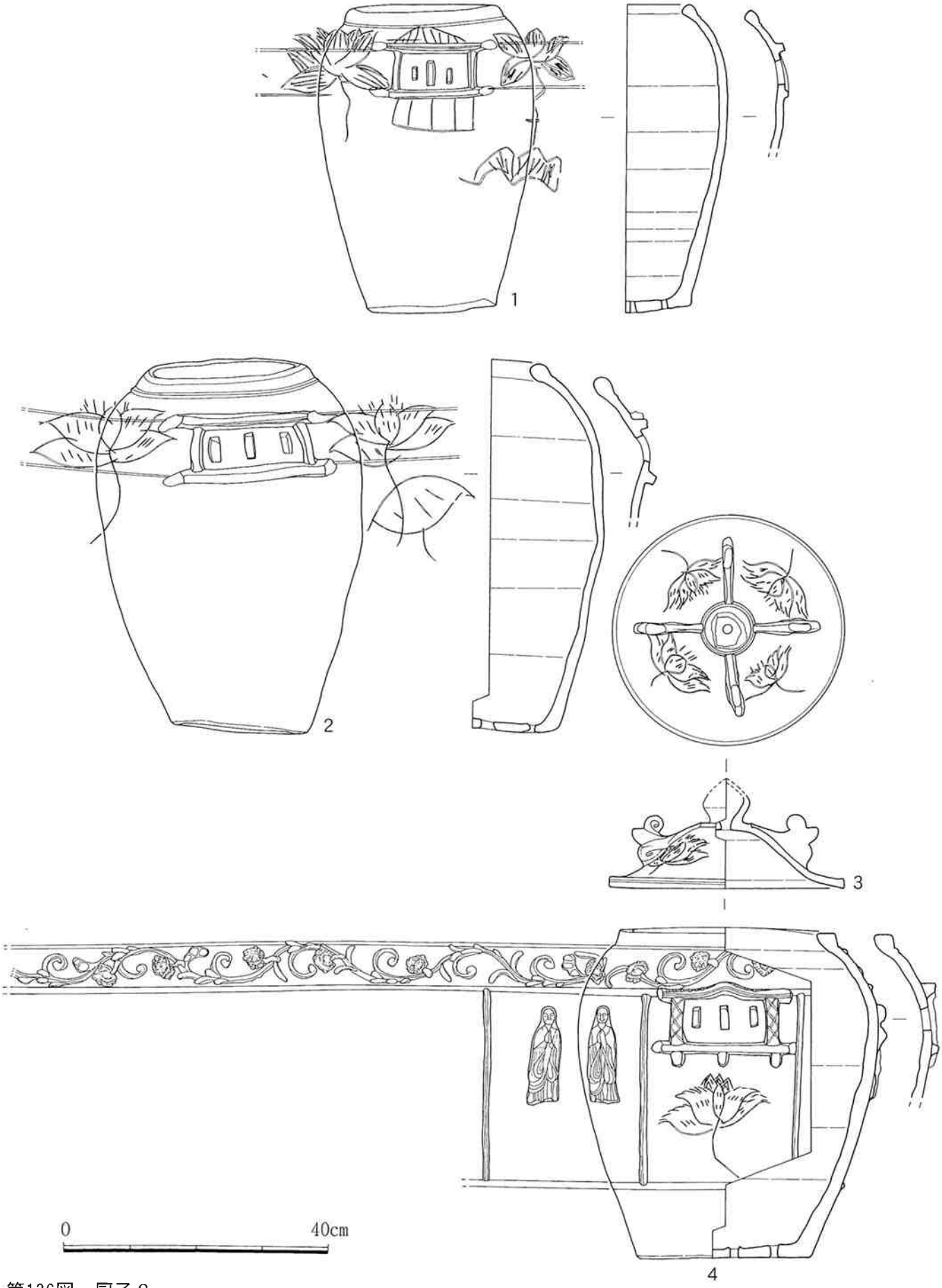
挿図図版	番号	出土地点	墓番号	分類 大分類	分類 小分類	部位	計測値(cm) a	b	c	d	e	観察事項(器形・文様など)	銘書・判	孔
第135図 図版80	1	スイボツ	不明	家形(上焼)	A	蓋	37.0	—	44.8	47.7	38.4	ツノ型のタイプ。貼付による雑多な文様を施す。	縁に「鉢嶺林方／道光九年己丑八月七日／洗骨／道光弐拾八年甲午（戊申）四月／弐拾九日洗骨／鉢嶺林方妻／思かまと」、「林方次男／林脩」、「大正四年卯轉墓」	
	2				A	身	46.7	32.3	45.0	36.5	27.5		内面に「大正八年／洗骨」の銘書。	2
第136図 図版81	1	スイボツ	39	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	21.6	47.4	34.0	—	—	泥ぐすりを施す。眉の上下に沈線を施し、屋根、床？を足す。蓮華文１対。		5
	2	スイボツ	不明	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	25.0	57.9	21.5	—	—	泥ぐすりを施す。大柄な眉で、蓮華文１対。やや歪になっている。		6
	3	スイボツ	29	ボージャー	Ⅰ-A-a	蓋	7.9	17.0	35.7	—	—	突帯と蓮華文。		
	4		39		B-Ⅰ-2	身	32.6	50.5	26.4	—	—	突帯区画内に法師と蓮華文。頸部に貼付の牡丹唐草文。口縁肥厚部は三角形。		12
第137図 図版82	1	スイボツ	13	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	32.8	62.5	24.0	—	—	眉の上に玉飾り。突帯区画内に法師、背面に大柄な蓮華文。		7
	2	スイボツ	65	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	29.3	55.3	22.5	—	—	頸部に花（牡丹？）唐草文。眉とその内部に沈線。		5
	3	スイボツ	35	ボージャー	B-Ⅰ-1	身	28.0	57.4	22.1	—	—	眉の位置がやや高い。オモダカ文。	「六七」の判。	3
	4	スイボツ	53	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	30.0	45.6	23.3	—	—	眉の上に玉飾り（人物？）。	「弐八」の判。	5
第138図 図版83	1	スイボツ	40	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	23.3	36.6	17.8	—	—	口径・胴径・底径がほどんど同じ。口縁肥厚部は形成しない。	「六」の判。	3
	2	スイボツ	5	ボージャー	B-Ⅰ-3	身	27.0	49.8	23.5	—	—	焼成時に歪んだと思われる。	「十六」の判。	4
	3	スイボツ	130	ボージャー	B-Ⅰ-4	身	30.5	48.9	21.8	—	—	水甕のような器形。頸部をくびれさせる。		4
	4	スイボツ	不明	ボージャー	B-Ⅰ-4	身	29.2	50.9	23.0	—	—	口縁肥厚部を方形に形成。	「一」の判？	5
	5	スイボツ	96	ボージャー	B-Ⅰ-4	身	27.2	46.5	22.2	—	—	口縁肥厚部を方形に形成。花のスタンプ文。	「二」の判。	5
第139図 図版84	1	スイボツ	66	マンガン	B-Ⅱ	身	32.5	58.4	25.0	—	—	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は方形。貼付の蓮華文・法師と沈線の蓮葉文。		5
	2	スイボツ	不明	マンガン	B-Ⅱ	身	31.4	64.1	23.9	—	—	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は三角形。貼付の蓮華文と法師。		6
	3	スイボツ	不明	マンガン	B-Ⅱ	身	27.7	54.5	22.6	—	—	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は三角形。貼付の蓮華文。		5
	4	スイボツ	99	マンガン	B-Ⅱ	身	25.2	33.0	18.3	—	—	屋門は唐破風形。口縁肥厚部は薄い。貼付の蓮華文。		14
第140図 図版85	1	スイボツ	21	マンガン	B-Ⅱ	身	35.5	67.9	25.7	—	—	屋門は唐破風形。口縁肥厚部はバチ形。沈線の蓮華文。	銘書？	25
	2	スイボツ	28	マンガン	B-Ⅱ	身	30.5	54.0	22.4	—	—	屋門は唐破風形で、内部に沈線。口縁肥厚部は三角形。沈線による蓮華文。		15
	3	スイボツ	37	マンガン	B-Ⅱ	身	28.1	55.3	22.4	—	—	屋門はアーチ形。口縁肥厚部は三角形。沈線による蓮華文。		12

第36表ｂ　厨子観察一覧

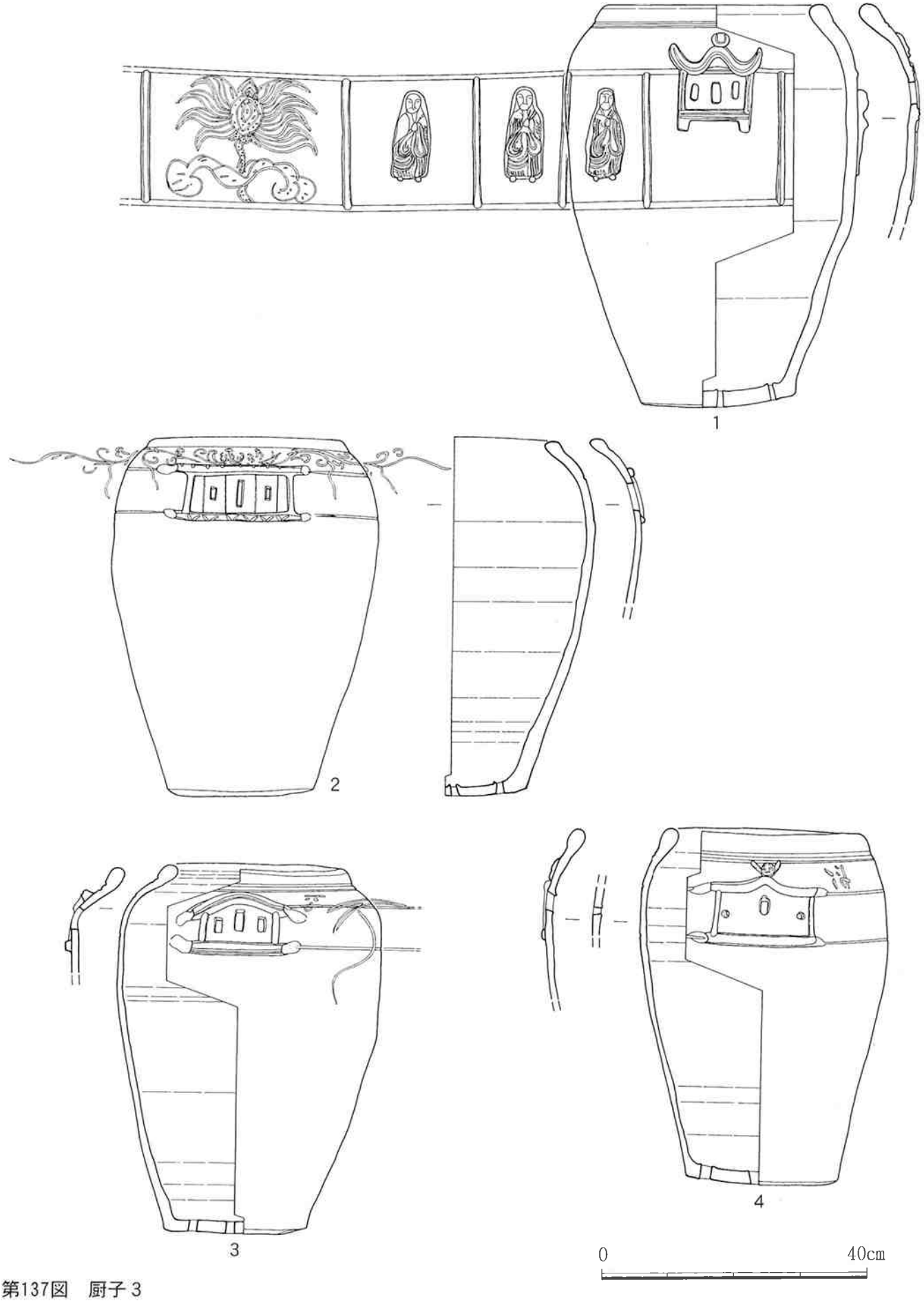
挿図図版	番号	出土地点	墓番号	分類 大分類	分類 小分類	部位	計測値(cm) a	b	c	d	e	観察事項(器形・文様など)	銘書・判	孔
第141図 図版85	1	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	12.2	16.2	30.2	－	－		「赤頭／天久にや／（以下、不詳）」の銘書。	
	2				B-Ⅱ	身	29.0	53.8	20.0	－	－	屋門はアーチ形で周囲に玉飾り。口縁肥厚部は三角形。沈線による蓮華文。		12
	3	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	17.1	16.4	31.7	－	－			
	4				B-Ⅱ	身	29.3	53.5	21.7	－	－	屋門はアーチ形で上部に貼付文。口縁肥厚部はバチ形。沈線による蓮華文。		7
	5	スイボツ	不明	マンガン	B-Ⅱ	身	28.6	52.9	21.1	－	－	屋門はアーチ形で上下に獅子、内部に法師。口縁肥厚部は三角形。沈線による蓮華文。		6
第142図 図版86	1	スイボツ	不明	マンガン	B-Ⅱ	身	22.1	44.6	18.0	－	－	屋門は沈線によるアーチ形。口縁肥厚部はバチ形。沈線による蓮華文。粘土塊を貼付け3脚をなす。		7
	2	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	9.5	10.9	21.9	－	－		「前村渠太郎／前村渠二郎／大正十一年／七月十日洗骨仕」の銘書。	
	3				B-Ⅱ	身	22.1	33.9	13.6	－	－	屋門は沈線による唐破風形。口縁肥厚部は三角形。沈線による蓮華文。		11
	4	スイボツ	20	マンガン	B-Ⅱ	身	19.5	37.2	15.6	－	－	屋門は沈線による唐破風形と思われる。口縁肥厚部はバチ形。沈線による蓮華文。粘土塊を貼付け3脚をなす。		12
	5	スイボツ	7	マンガン	Ⅱ-b	蓋	－	9.5	19.6	－	－	蓋・身とも焼きが弱い。	「明治四十一年戊申一月十日卒□□享／仲村渠昌清長女カメ子」の銘書。	
	6				B-Ⅱ	身	19.3	30.6	16.8	－	－	樽形の器形。屋門は柱のみで、口縁肥厚部は弱い三角形。沈線による蓮華文。		6
第143図 図版87	1	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	12.7	14.2	26.1	－	－	角張った器形。	「昭和十九年九月十七日死去ス／享年二歳／中村泰子／昭和二十年八月十八日死去ス／享年三十七歳／中村昌尚」の銘書。	
	2				B-Ⅱ	身	26.2	58.0	19.7	－	－	屋門はアーチ形。口縁肥厚部の発達は弱い。胴部は無文。	内側に「昭和十九年九月十七日死去ス／享年二歳／中村泰子／昭和二十年八月十八日死去ス／享年三十七歳／中村昌尚」の銘書。	14
	3	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	14.3	12.3	27.9	－	－	蓋・身ともガラス質の釉。宝珠は潰れる。		
	4				B-Ⅱ	身	28.9	59.4	20.4	－	－	屋門はアーチ形。口縁肥厚部は弱い三角形。胴部は無文。		6
	5	スイボツ	不明	ボージャー	Ⅰ-A-b	蓋	－	12.7	29.5	－	－	蓋・身とも無釉で焼きが弱い。ボージャー厨子のような蓋。	「昭和十八年四月二十五日死去ス／享年六十七歳／仲村渠昌□」の銘書。	
	6			マンガン	B-Ⅱ	身	28.1	50.3	22.9	－	－	屋門はアーチ形。口縁肥厚部は形成しない。胴部は無文。	内側に「昭和十八年四月二十五日□□□（死去ス）／享年六十七歳／仲村渠昌□」の銘書。	8
	7	スイボツ	21	マンガン	B-Ⅰ	身	15.4	21.6	10.1	－	－	屋門はなし。口縁肥厚部の形成は弱い。波状文のみ。		5
第144図 図版86	1	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	11.0	16.1	28.2	－	－	庇付き。下り棟に獅子。		
	2				B-Ⅱ	身	28.0	55.8	21.7	－	－	庇付き。大柄な龍文などの貼付。		18
	3	スイボツ	不明	マンガン	Ⅱ	蓋	14.5	18.7	32.5	－	－	蓋・身ともガラス質の釉。庇付きで下り棟に獅子。	「前村智輝／昭和四五年八月十六日／享年七十五才／前村ウシヤ／昭和五〇年七月八日／享年八十五才」の銘書（マジック書き）。	
	4				B-Ⅱ	身	32.3	73.5	23.3	－	－	庇付き。大柄な龍文などの貼付。		12



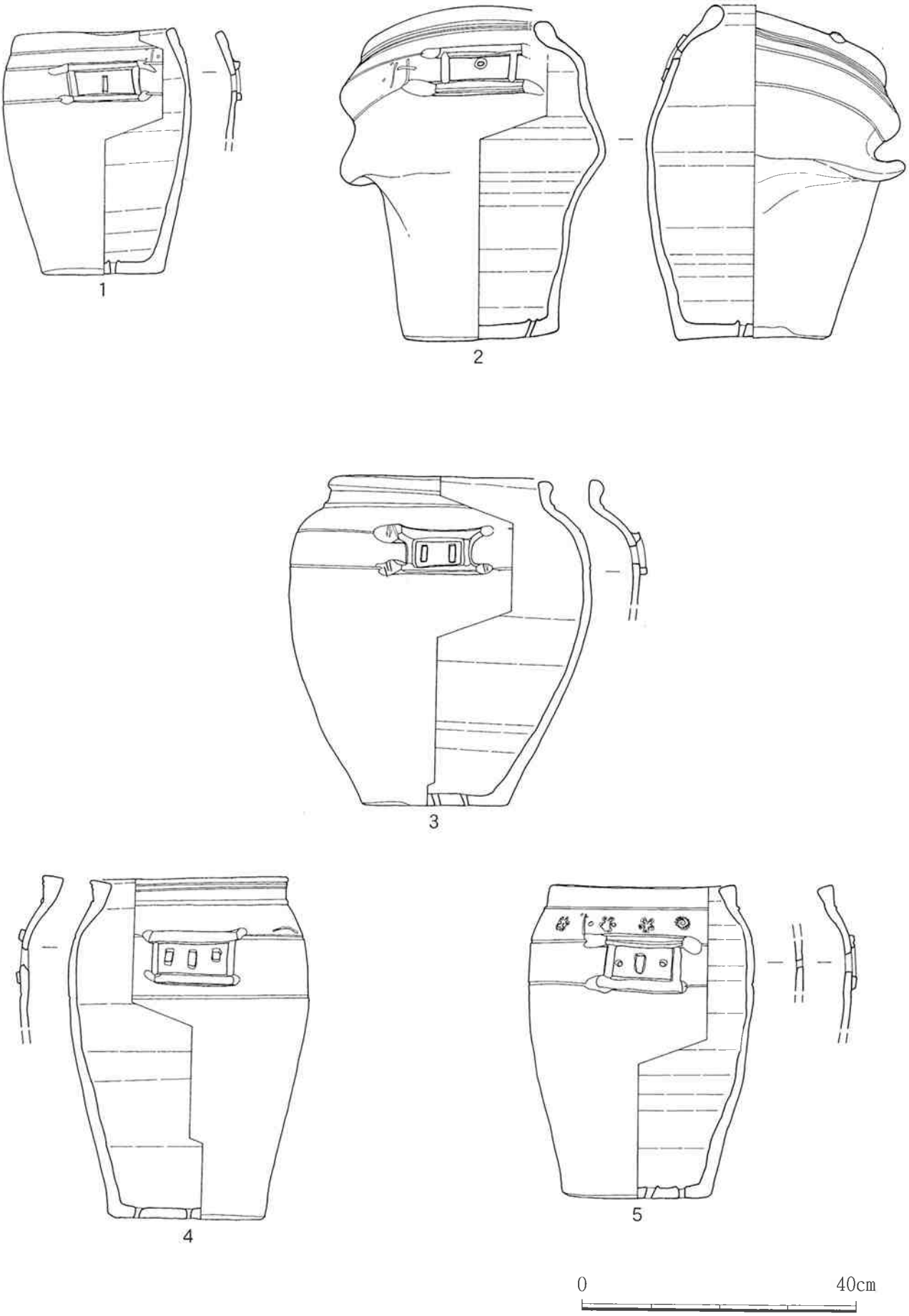
第135図　厨子１



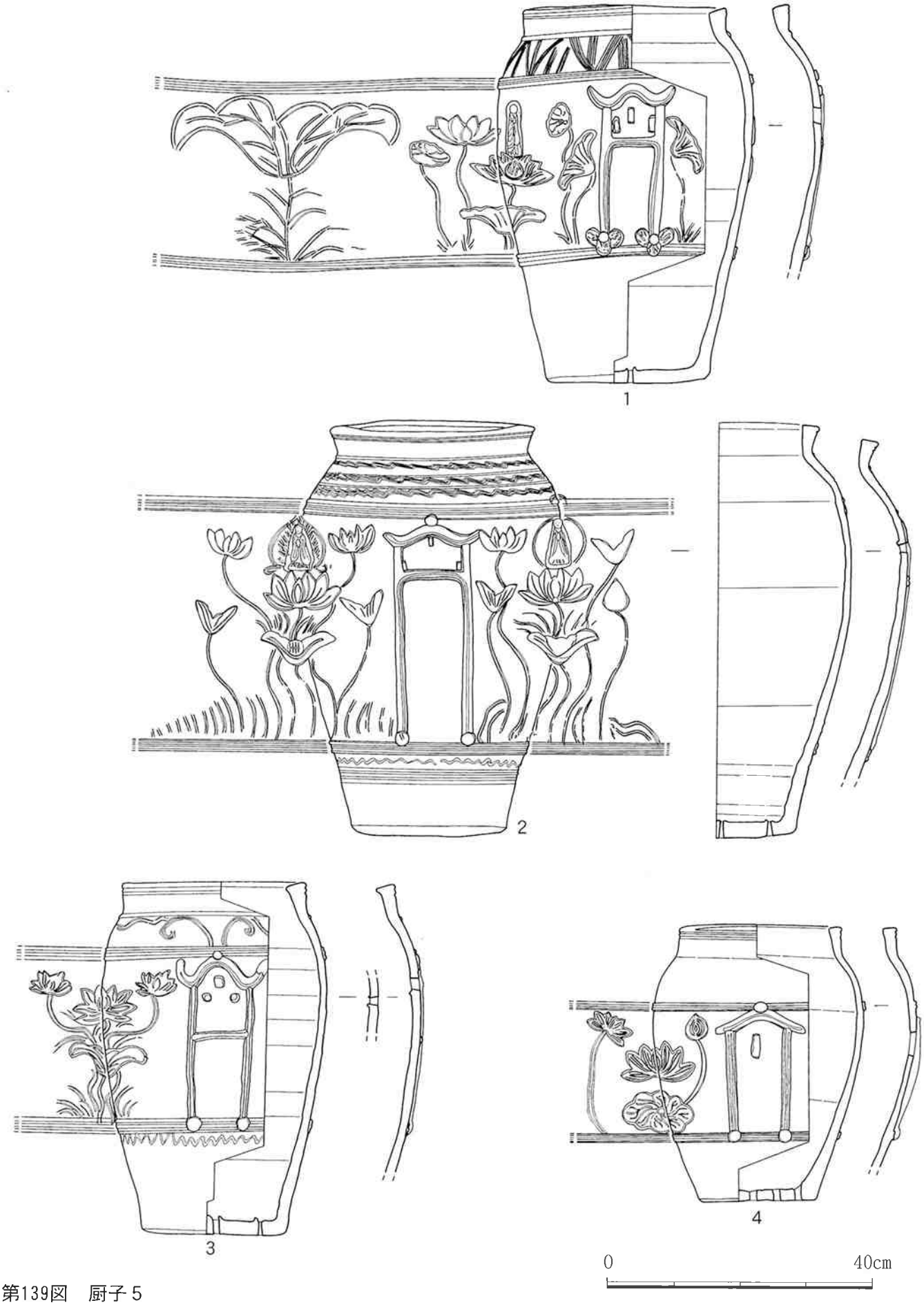
第136図　厨子２



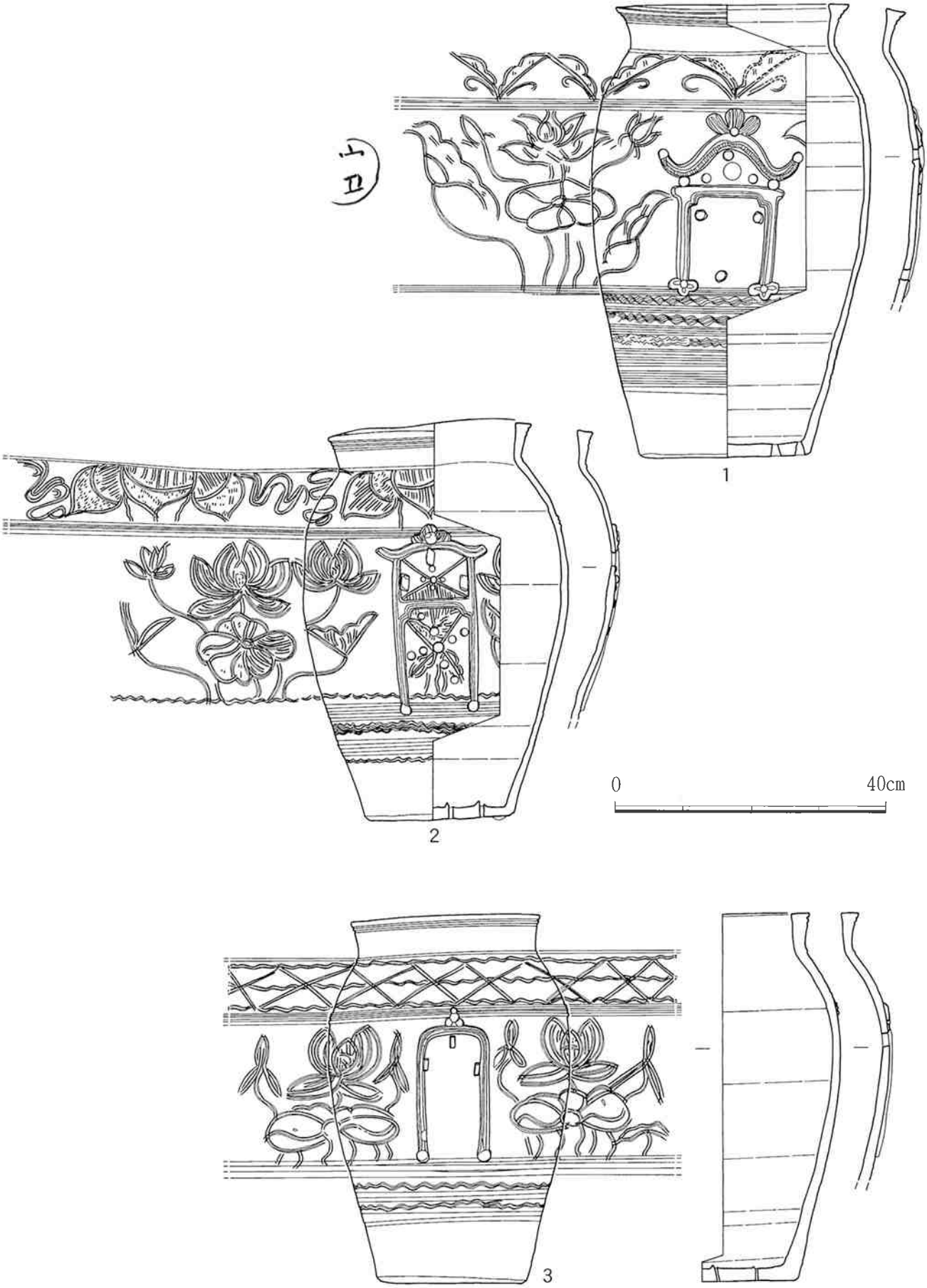
第137図　厨子３



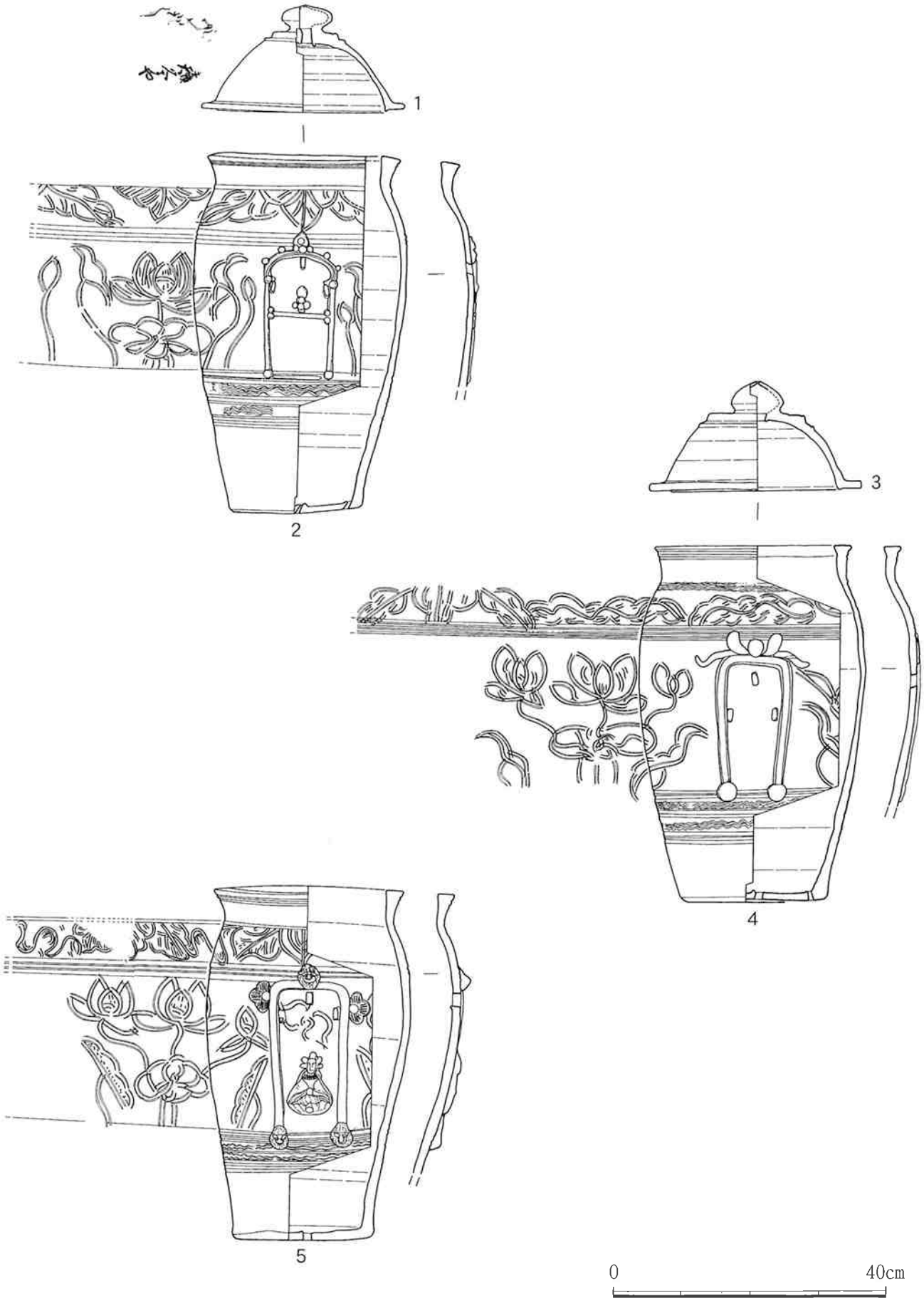
第138図　厨子４



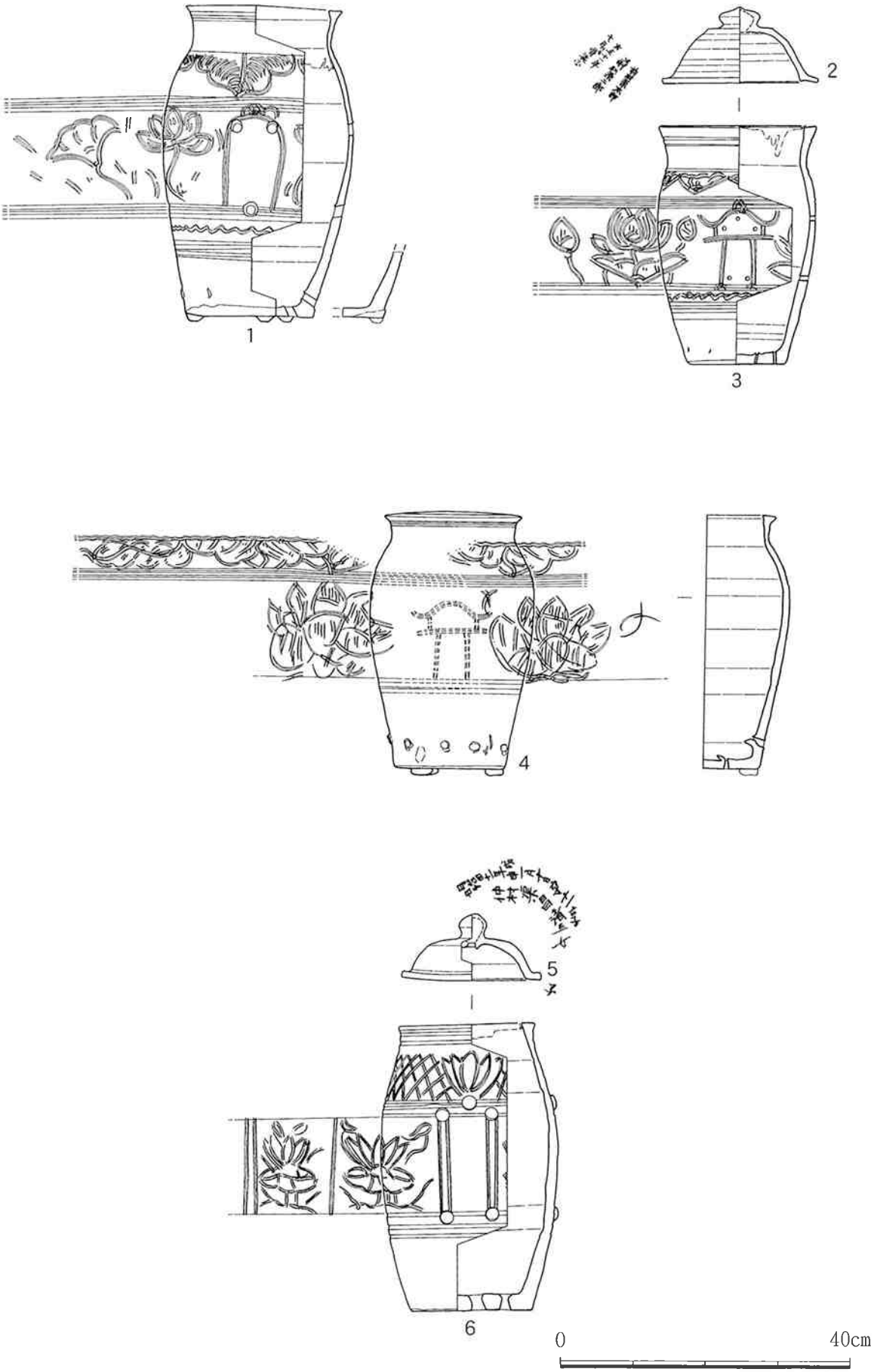
第139図　厨子５



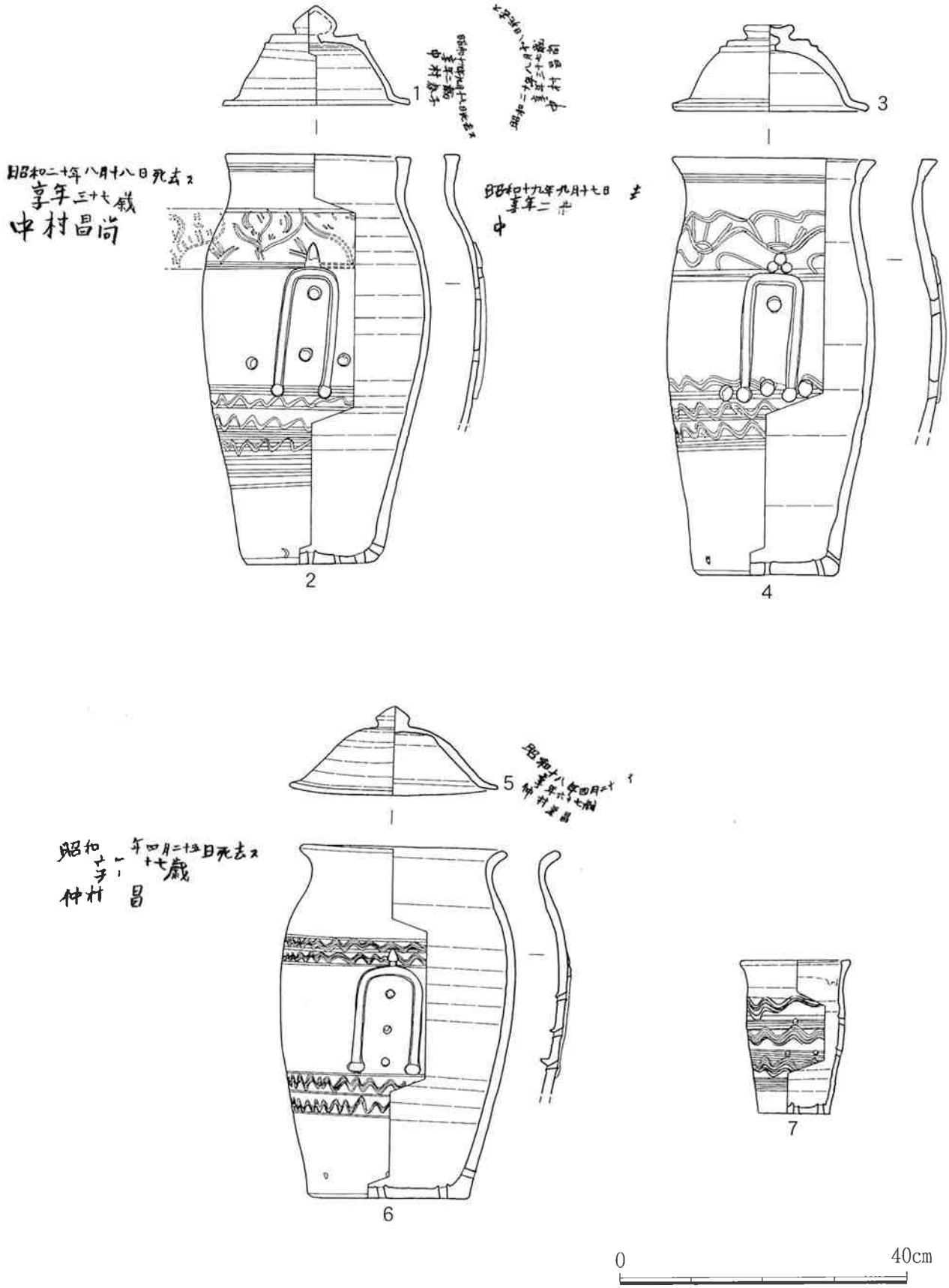
第140図　厨子６



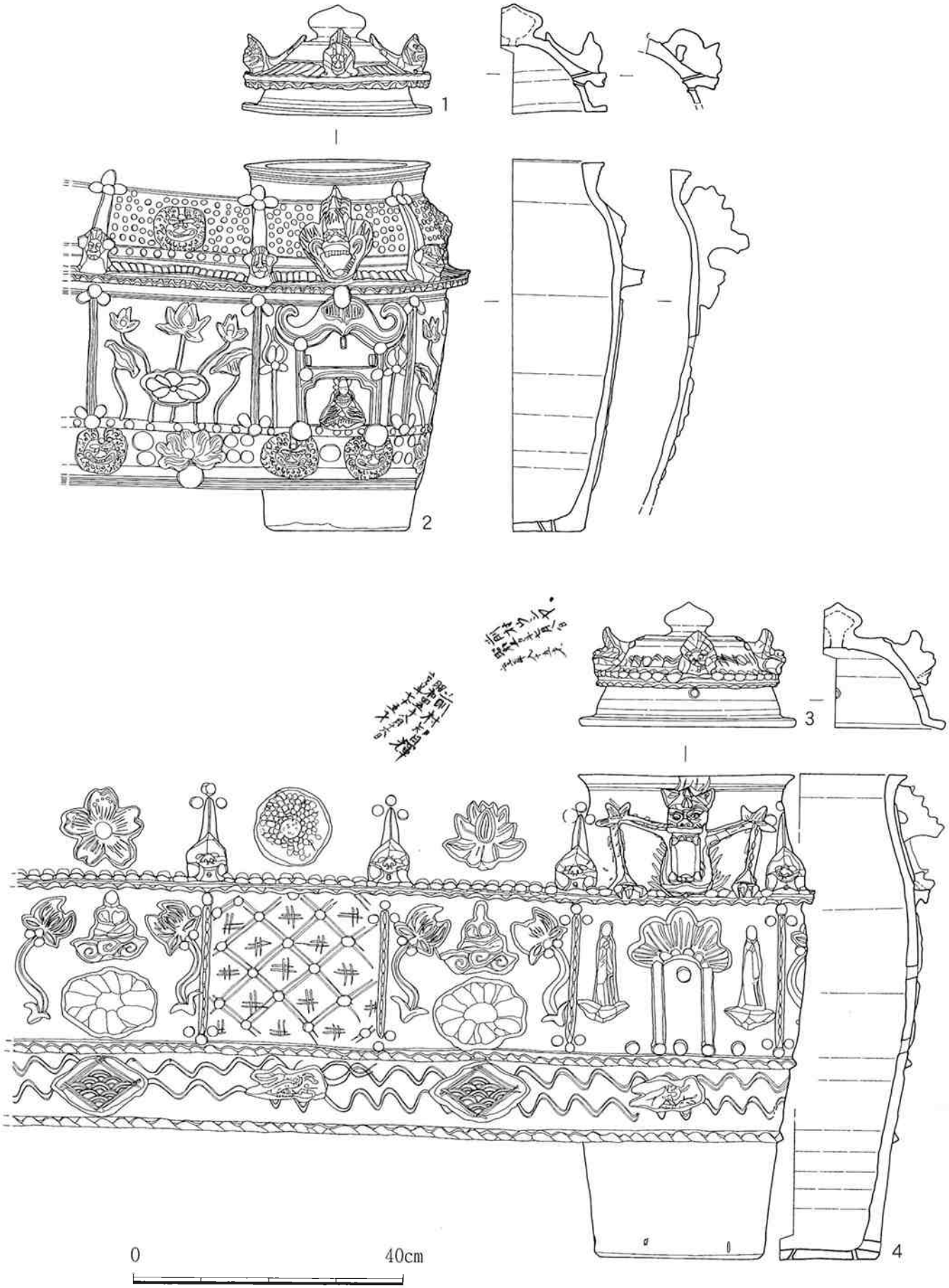
第141図　厨子７



第142図　厨子８



第143図　厨子９



第144図　厨子10

第２節　青花

碗・小碗の破片資料が３点得られているが、小破片であることから割愛した。

第３節　中国産色絵

中国産色絵の破片資料が２点のみ検出されている。いずれも図化した（第145図１．２）。
１は碗の胴部片か。素地は白色の細粒子で、白濁色の釉を両面に施している。外面胴部に松文？を上絵付けにより描いている（チャラのクブⅡ）。
２は小杯である。外反口縁である。素地は白色の微粒子で灰白濁色の釉を両面に施している。外面に蛸唐草を上絵付けにより表している（チャラのクブⅠ）。

第４節　鉄釉磁器

鉄釉磁器の杯の破片資料が１点のみ得られている。
第145図３は口縁部から高台脇までの破片資料である。口縁部を微弱に外反させている。素地は白色の微粒子で、外面に鉄釉、内面に白釉を施している（チャラのクブＴＰ２）。

第５節　本土産染付

本土産染付は今回図化する器種不明の口縁は片資料と瓶の胴部・底部片が合計４点得られているが、瓶については小破片であることから割愛した。
第145図４は器種不明の口縁破片資料である。皿が想定されるところである。外側に大きく開くタイプで、素地は白色の微粒子である。内面には呉須による濃みを加えている（チャラのクブⅠ）。

第６節　本土産印判手

本土産印判手については、型紙摺の碗の口縁破片資料が１点得られているのみである。
第145図５は直口口縁タイプの碗で、外面に笹文、内面に圏線を表している。素地は白色の微粒子で、淡灰白色の釉を両面に施している（カンジン原遺跡）。

第７節　本土産陶器

本土産陶器については、碗・瓶・壷の完形もしくは破片資料が6点確認されているが、今回は碗1点、壷1点を図化し、瓶の破片資料については小破片であることから割愛した。
第145図６は碗である。高台は低く、内削りは浅めである。直口口縁タイプ。外面には轆轤痕が入る。素地は白色の細粒子で、黄灰濁色の釉を畳付以外に施す（墓番号不明）。
第146図１は壷の底部資料である。当初、第３部第３章第９節中国産褐釉陶器の分類Ⅵ類としていたもので、後に薩摩焼の壷であるとされた資料と同タイプの資料である。全体の成形は同一であるが、外底に貝目は観察できない（墓番号不明）。

第８節　後期土器

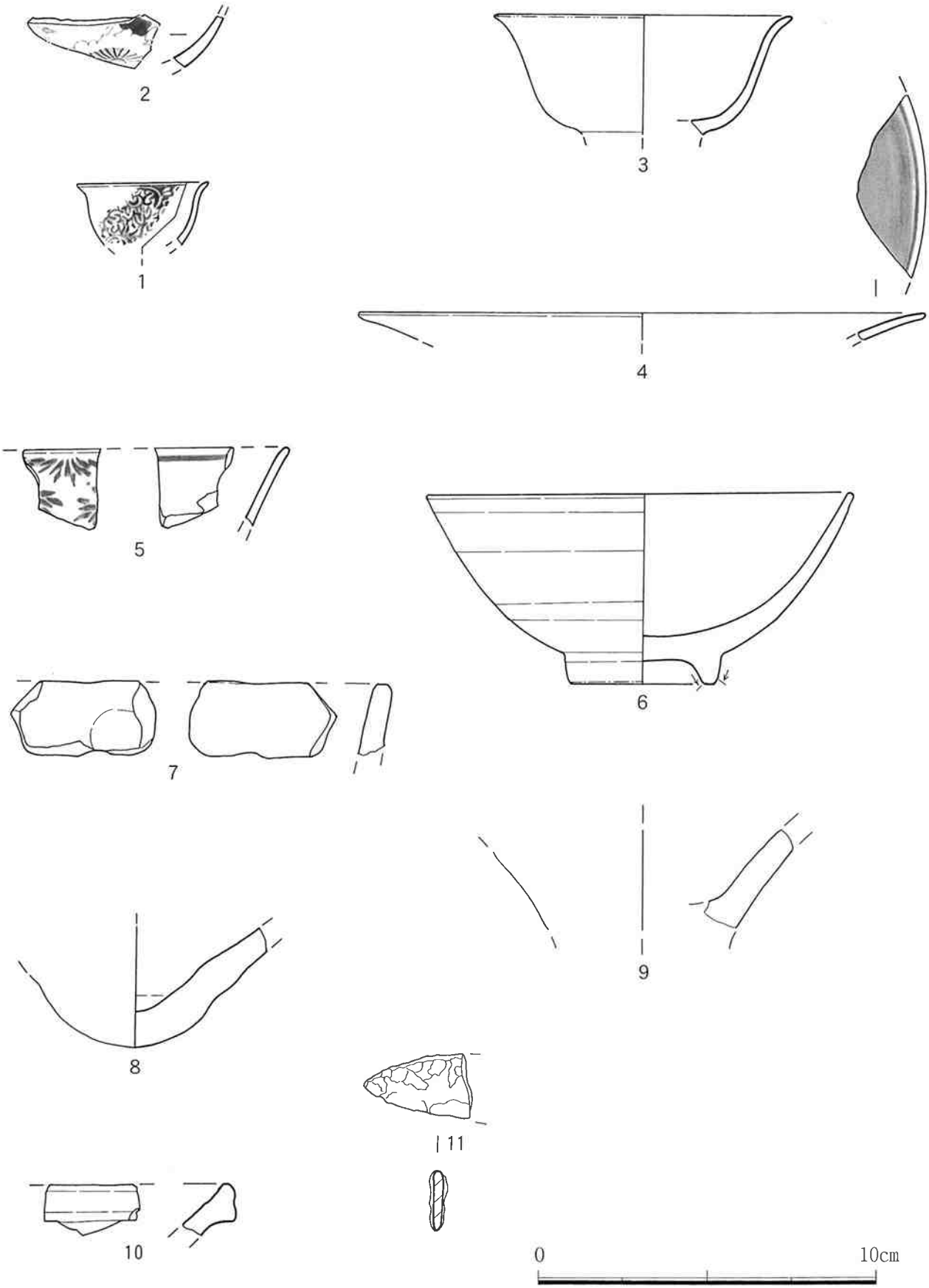
チャラのクブから出土した。ほとんどが細片で全形をうかがうことのできる資料はない。いずれも砂泥質の胎土で、ヤッチのガマで得られた後期土器と同じく大当原式に属すると思われる。第145図７は口縁部、８・９は底部で、８は丸底状をなす。いずれも器面が粗れているため、器面調整は不明。
カンジン原遺跡からはグスク土器と思われる細片が得られている。図等は省略した。

第９節　類須恵器

第145図10でカンジン原遺跡からの表採である。壺の口縁部で、口唇端部をわずかにくぼませる。

第10節　その他の金属製品

第145図11は鉄鎌の刃先と思われる。錆が付着し、断面も判然としない。長さ3.1㎝、幅2㎝、厚さ4㎜、重さ4.1ｇを計る。チャラのクブ遺跡ＴＰ１Ⅰ層出土。



第145図　中国産色絵　小杯(1)、器種不明(2)、鉄釉磁器　小杯(3)、本土産染付　器種不明(4)
本土産印判手　碗(5)、本土産陶器　碗(6)、後期土器(7～9)、類須恵器(10)
その他の金属製品(11)

第11節　中国産褐釉陶器

カンジン原古墓群－地区内その他の墓－より得られた中国産褐釉陶器は壷のみで、特徴的な３点の資料を図化した（第146図２～４）。なお、各分類は第３部第３章第９節中国産褐釉陶器に対応する。

２は大型の壷である（Ⅰ類ａ大）。底部から開き気味に立ち上がる。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は灰褐色の粗粒子で、白色の鉱物を含む。暗茶褐色の釉を施している（墓番号５－１、156）。

３は小型の壷である（Ⅰ類ｂ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は桃褐色の粗粒子。茶褐色の釉を施している（墓番号不明）。

４はカンジン原古墓群一帯において1点のみ確認されたタイプである。Ⅳ類として分類した。底部から開き気味に立ち上がり、「く」の字状に角度を変えて立ち上がり、口縁部へと移行する。口縁部には丸みを持った肥厚帯を有する。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は灰色の粗粒子。茶褐色を施している（墓番号２）。

第12節　タイ産褐釉陶器

カンジン原古墓群－地区内その他の墓－より得られたタイ産褐釉陶器は壷のみで、特徴的な３点の資料を図化した（第146図５～７）。なお、各分類は第３部第３章第10節タイ産褐釉陶器に対応する。

５は小型の壷である（Ⅰ類ａ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁部を大きく外反させる。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は灰紫色粗粒子。白色鉱物を含む。黒褐色の釉を外面に施している（墓番号39）。

６は大型の壷である（Ⅱ類ａ）。底部から開き気味に立ち上がり、肩部から強く内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部へ移行する。口縁部を大きく外反させる。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は赤茶色粗粒子。白色鉱物を含む。黄灰褐色の釉を外面に施している（墓番号78）。

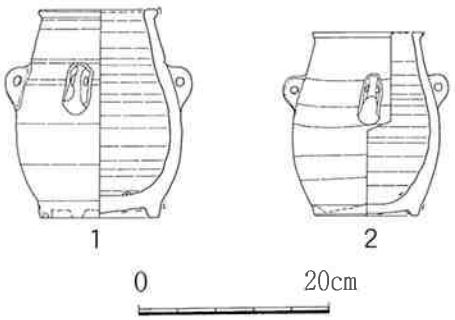
４はカンジン原古墓群一帯において1点のみ確認されたタイプである。Ⅲ類として分類した。底部から開き気味に立ち上がり、「く」の字状に角度を変えて立ち上がり、口縁部へと移行する。全体に轆轤痕が明瞭である。素地は灰紫色粗粒子で、白色鉱物を含む。外面に黒褐色を施している（墓番号54）。

第13節　沖縄産施釉陶器

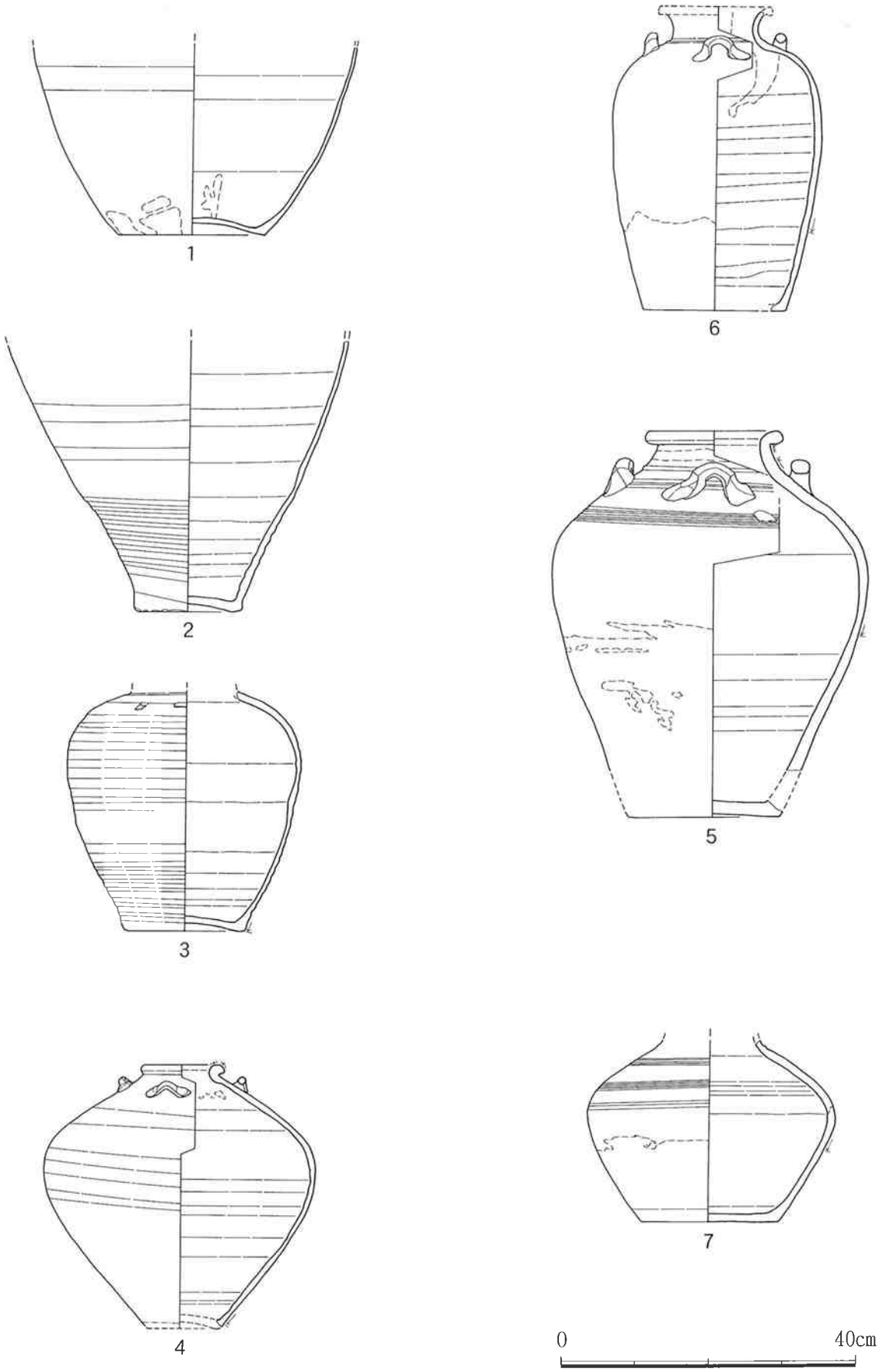
（第147図１，２）は縦耳の四耳壷で、沖縄で「アンダーガーミ」とよばれるものである。胴下位が膨らみ、頚部は内湾ぎみにたちあがり、口縁部を三角形に肥厚させる器形である。

（１）は、淡黄色の微細な素地に白化粧を施し、飴釉を口唇部、内底面をのぞき施釉する。文様は胴上位に２条の圏線と胴下位に鉋目を施す。内底面にアルミナが付着し、全体に粗い貫入が入る。口縁部の１/３が欠損する。墓番号10－５より検出。

（２）は淡橙色の細かい素地に白化粧を施し、黒釉を口唇部、内底面をのぞき施釉する。内底面にアルミナと畳付部に粗い砂粒が付着する。口縁部の１/３が欠損する。墓番号21より検出。



第147図　沖縄産施釉陶器　油壷



第146図　本土産陶器　壷(1)、中国産褐釉陶器　壷(2～4)、タイ産褐釉陶器　壷(5～7)

第14節　沖縄産無釉陶器

器種は、瓶子、擂鉢、火炉、水鉢、花鉢、壷、甕などがある。それぞれの器種を器形により下記のとおりに分類し、個々の特徴については観察表に呈示した。ここでは特徴的なものを図示した。

碗（第148図１）
大ぶりで浅い削り出し高台を有するもので、内底面に左回転の轆轤痕がのこる。外底面に石灰分が付着する。

瓶子（第148図２）
胴の最大径が胴下位にあり、高台の低いタイプで、分類上Ⅱ類－ｂにあたるもの。口縁部内面から底部まで黒釉を施釉する。

火炉（第148図３）
胴部内面に３つの突起をつけるもので、胴上位でいったんすぼまり、口縁で外反する。底部は刳りの浅い高台を有する。口縁部の１ヶ所にU字状の抉りをいれ火窓を造る。内底面、器物受けに煤が付着する。

擂鉢（第148図４）
擂目が密に入る底部資料。その大きさから、厨子の落し蓋として利用されたものと考えられる。

水鉢（第148図５）
口縁部を折り曲げて折縁状にするもので、分類上Ⅰ類にあたる。ヤッチのガマより出土したグループより、底径は小さく、口径に対して器高が高い。胴部上端に１条の圏線を有する。

花鉢（第148図６～９）
Ⅰ類　口径に対して器高のやや低いもの
（６）は口縁部に縄目文、胴部に草花文を貼付けるもの。
（７）は胴部に３条の圏線と簡略化した草花文を組み合わせたもの。口縁下部に突帯を配し、口縁部が垂れ下がる。
Ⅱ類　口径に対して器高の高いもの。
（８）は口縁部に２条の圏線を施すもの。口縁下部に突帯を巡らし、口縁部が垂れ下がる。
（９）は小型のもので口縁部に１条の圏線を施す。口縁下部に突帯を巡らし、口縁部が垂れ下がる。

鉢（第148図10，11）
（10）は口縁部下に２条の圏線を施したもの。
（11）は口縁部下に圏線と波線文を組み合わせたもの。口縁下部に突帯を巡らし、口縁部が垂れ下がる。

壷（第149図１～５）
分類上Ⅲ類（１～４）、Ⅳ類（５）にしたものである。
（１）は器の最大径は胴部にあり、頚部で弧を描きながら口縁部で外反させるもの。肩部上に渦巻文と圏線を配する。
（２）は頚部下に２条の圏線を施し、肩部にやや張りがあり、頚部でストレートに立ち上がり口縁部で直角に折れ曲がるもの。
（３）は器の最大径は胴部にあるもので、頚部で内湾ぎみにに立ち上がり口縁部で直角に折れ曲がるもの。肩部上に２条の圏線を施す。
（４）は器の最大径は胴部にあり、頚部でストレートに立ち上がる小型もので、口縁部は直角に折れ曲がるものと思われる。頚部下に１条の圏線を施す。
（５）は肩部にボタン状貼付けを施すもの。器高に対して口径が大きく、器の最大径は胴部にあり、短い頚部から直角に口縁部が折れるもの。

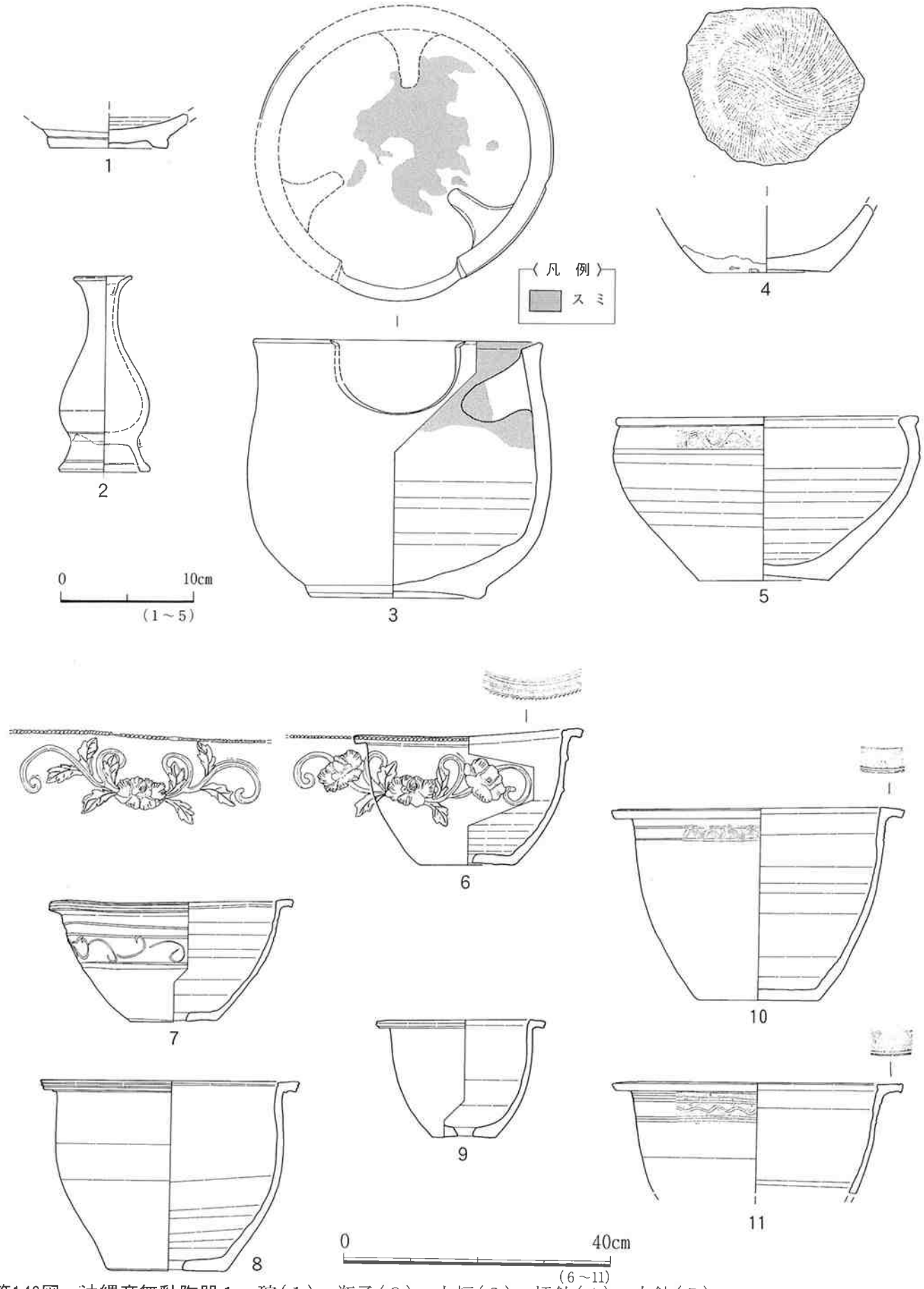
水甕（第149図６～８）

口縁下部に段をつくり、口縁部が直角に折れ曲がるもので、『壺屋古窯群』（Ⅰ）の第Ⅰ類ｂにあたる。

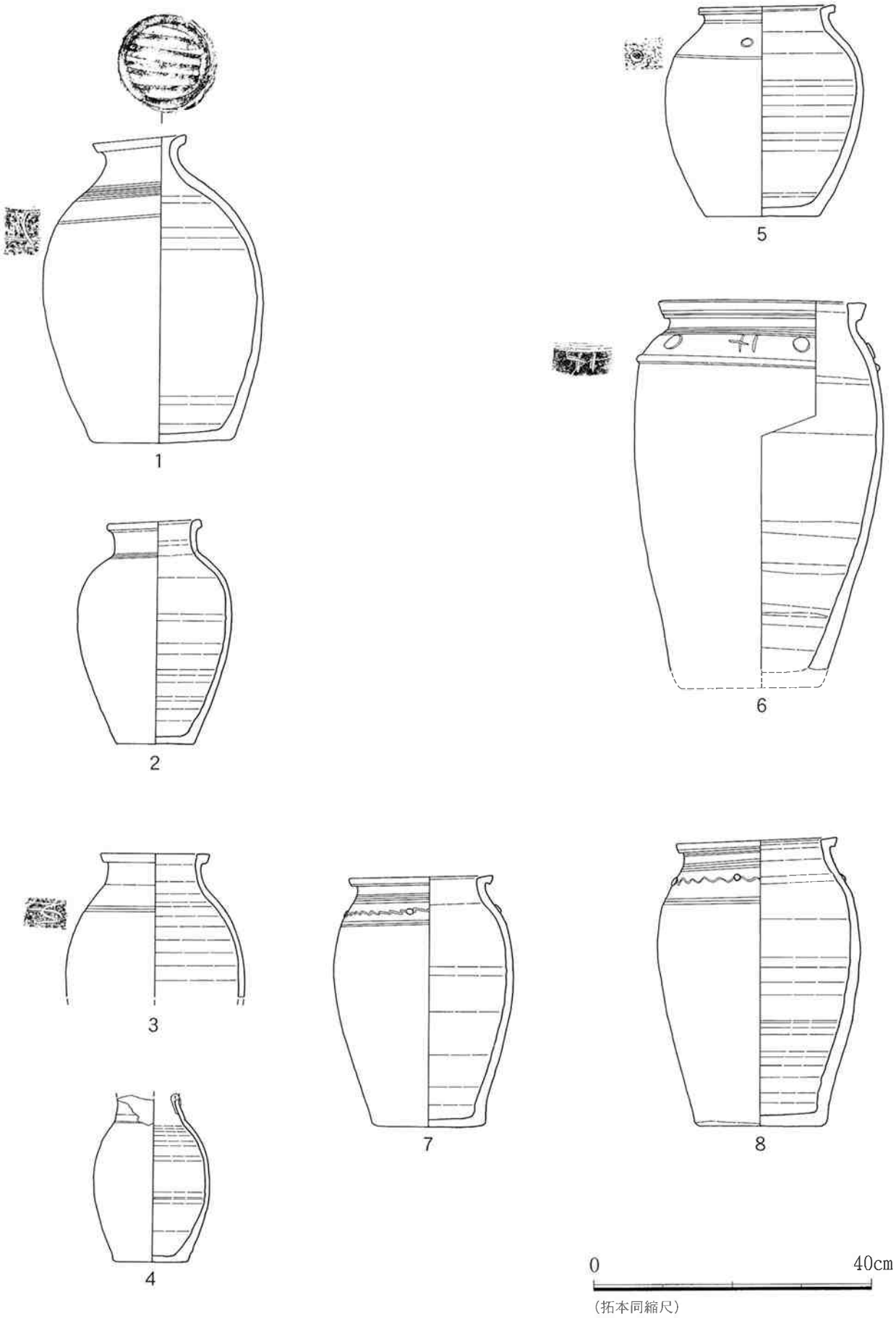
それぞれ、渦巻文を施すが、ボタン状貼付け以下の文様に相違がみられる。大きなボタン状貼付けに、突帯を巡らせるもの（６）。小さなボタン状貼付けに、波線文、２条の圏線を有するもの（８）と、小さなボタン状貼付けに、波線文のみもの（７）がある。

第37表　沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	素地 器色(外面) 器色(内面)	素地・文様などの特徴	墓番号
第148図 図版90	1	碗	―	底部	－ － 8.6	橙色 明橙色 鈍橙色	素地に砂粒・マンガン粒が混入。腰下部に1条の圏線。転用蔵骨器の落し蓋として利用？	不明
	2	瓶子	Ⅱ類-b	口縁部 ～ 底部	4.4 14.8 7.2	暗赤褐色 鈍赤褐色 暗赤褐色	素地に微量の細砂混入。口縁部内面から腰下部に黒釉。胴部に溶着痕。釉の表面は銀化。口縁部の１/５欠損。	10
	3	火炉	Ⅱ類	口縁部 ～ 底部	22.7 19.3 12.6	赤色 明褐色 明赤褐色	素地に砂粒が混入。口縁部はやや外反する。	125
	4	擂鉢	―	底部	－ － 9.4	赤色 赤色 赤色	素地にマンガン粒・微量の細砂混入。外面ナデ調整をした後底部に削。転用蔵骨器の落し蓋として利用？	不明
	5	水鉢	Ⅰ類	口縁部 ～ 底部	22.7 12.4 11.8	暗赤褐色 赤褐色 明赤褐色	素地に微量の細砂混入。口縁部に波状文に1条の圏線。	119-1
	6	花鉢	Ⅰ類	口縁部 ～ 底部	34.7 20.8 14.3	暗赤褐色 暗赤色 褐灰色	素地に微量の細砂混入。口唇部に渦巻文と縄目文。胴部外面に貼付け草花文。口唇部が磨耗する。	不明
	7			口縁部 ～ 底部	38.0 18.6 14.0	赤色 明赤褐色 赤色	素地に石英粒が混入。口縁部から胴上位にかけて2条の圏線と渦巻文。胴部に簡略化した草花文。	2
	8		Ⅱ類	口縁部 ～ 底部	39.0 29.1 17.0	赤色 明赤褐色 褐灰色	素地に砂粒が混入。口縁内面に1条の圏線と胴上位に2条の圏線。ナデ調整の後、腰下部に削。	不明
	9			口縁部 ～ 底部	25.4 18.0 9.5	明赤褐色 赤色 赤色	素地に砂粒混入。胴上位に2条の圏線。ナデ調整の後、腰下部に削。	2
	10	鉢	―	口縁部 ～ 底部	44.2 29.7 18.0	赤色 赤色 赤色	素地に砂粒が混入。胴上位に渦巻文と波状文。	35
	11			口縁部	43.6 － －	明赤褐色 赤色 赤色	素地に砂粒が混入。口縁内面に1条、口唇部に2条、胴上位に2条の圏線と波状文。	不明
第149図 図版91	1	壺	Ⅲ類-c-お	口縁部 ～ 底部	13.5 45.4 20.4	暗赤色 褐色 赤色	素地に石英粒・貝殻が混入。肩部上に渦巻文と１条の圏線。窯印「三」。	10
	2		Ⅲ類-b-え	口縁部 ～ 底部	13.5 32.9 11.1	暗赤褐色 暗赤褐色 赤色	素地にマンガン粒・微量の細砂混入。頚部下に2条の圏線。口唇部に胎土目痕。底部の欠損部を漆喰で補修。	不明
	3		Ⅲ類-c-え	口縁部	15.6 － －	赤色 暗赤褐色 赤色	素地に微量の細砂混入。肩部に2条の圏線。窯印は「ち」の字状。	61
	4		Ⅲ類-c-不明	底部	－ － 11.0	暗赤色 オリーブ黒色 鈍赤褐色	素地に貝殻混入。頚部下に1条の圏線。口縁部をセメントで補修した痕あり。	21
	5		Ⅳ類-b-え	口縁部 ～ 底部	20.2 31.2 16.7	明赤褐色 明赤褐色 橙色	素地に砂粒が混入。口縁部と肩部に圏線。円形のぼたん状貼付けは、全てはがれ落ちている。	37
	6	水甕	―	口縁部	30.6 57.0 20.0	赤色 明褐色 赤色	素地にマンガン粒混入。口縁部外面に2条の圏線。肩部に1条の突帯文と渦巻文。ぼたん状貼付け。	6
	7			口縁部 ～ 底部	20.8 37.3 16.2	赤色 極暗赤褐色 赤色	口縁部外面に2条の圏線。肩部に1条の突帯文と渦巻文。ぼたん状貼付け。窯印「十一」。	10
	8			口縁部 ～ 底部	24.1 42.6 18.4	赤色 暗赤褐色 赤色	素地にマンガン粒混入。文様は６と同様であるが雑に施す。	154



第148図　沖縄産無釉陶器１　碗（１）、瓶子（２）、火炉（３）、擂鉢（４）、水鉢（５）
花鉢（６～９）、鉢(10～11)



第149図　沖縄産無釉陶器２　壷(１～５)、水甕(６～８)

第15節　石器

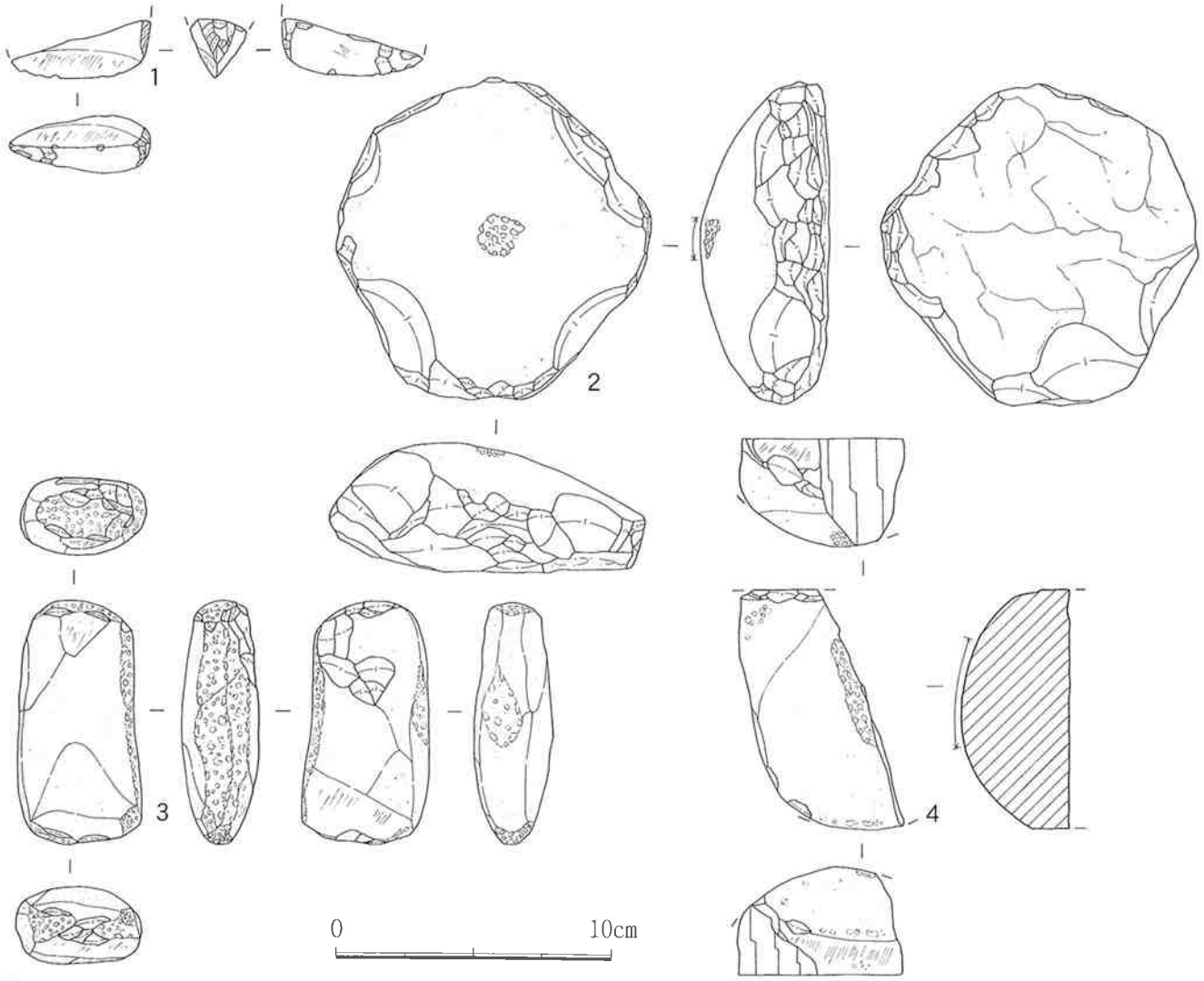
今回の調査で得られた石器は石斧１点、敲石３点の計４点である。石斧は刃部破片のため、詳細は判然としない。敲石には、石斧転用品や磨石の用途が想定できるものも含めてある。以下、個々の特徴についてを記述する。

第150図１は、石斧の刃部破片である。両刃の磨製石斧と思われ、両面とも丁寧な研磨が施される。使用による擦痕が明瞭に残り、刃先には剥離や刃こぼれも観察できる。残存部のサイズは長さ2.1cm、幅5.1cm、厚さ2cmを測り、重さは19gである。石質は緑色片岩で、カンジン原遺跡の表採資料である。

同図２は、断面形が半月状を呈する敲石である。剥片を利用しており、鋭く尖った縁辺部を打割調整により整えているため、平面観は八角形状を呈している。この調整は手で握って使用しやすいようにと、尖った縁辺部を打割したものと考えられる。弧を描く表面の中央部に敲打痕を有すが、軽微である。長さ11.7cm、幅11.5cm、厚さ4.7cmを測り、重さは800gである。石質は安山岩で、チャラのクブ遺跡ＴＰ２Ⅱ層よりの出土である。

同図３は、石斧転用品と思われる敲石である。石斧の刃部を敲石として利用したようで、刃先は敲打により潰れ、数カ所に剥離も認められる。両刃の磨製石斧であるが研磨は丁寧ではなく、刃部と身や基端部の一部に施される程度で、敲打調整の痕や自然面の残る箇所も見受けられる。長さ8.9cm、幅4.6cm、厚さ2.8cmを測り、重さは202gである。石質は緑色片岩で、チャラのクブ遺跡の表採資料である。

同図４は、敲石の破損品である。弧を描く表面の中央部に敲打痕を有す。図上で示した上下端に、ツルツルとした研磨面を有し、平らになるほど使用されているため、磨石の用途も兼ね備えていたと考えられる。残存部のサイズは長さ8.7cm、幅6cm、厚さ3.9cmを測り、重さは271gである。石質は細粒閃緑岩で、チャラのクブ遺跡ＴＰ2 よりの出土である。



第150図　石器

图　　版

図版78　その他の墓１　１～４．地区内の墓　５．大太の墓　６．チャラのクブ内部
７．同厨子配置状況　８．同人骨集中の小区部

図版79　その他の墓２　１.不時発見墓　２.不時発見獣骨　３.シナグラヤーの墓
４・５.同内部　６・７.同内厨子　８.厨子内の石

図版80　厨子１

1

3

2

4

図版81　厨子２

1

2

3

4

図版82　厨子３

1

3

2

4

5

図版83　厨子４

1

2

3

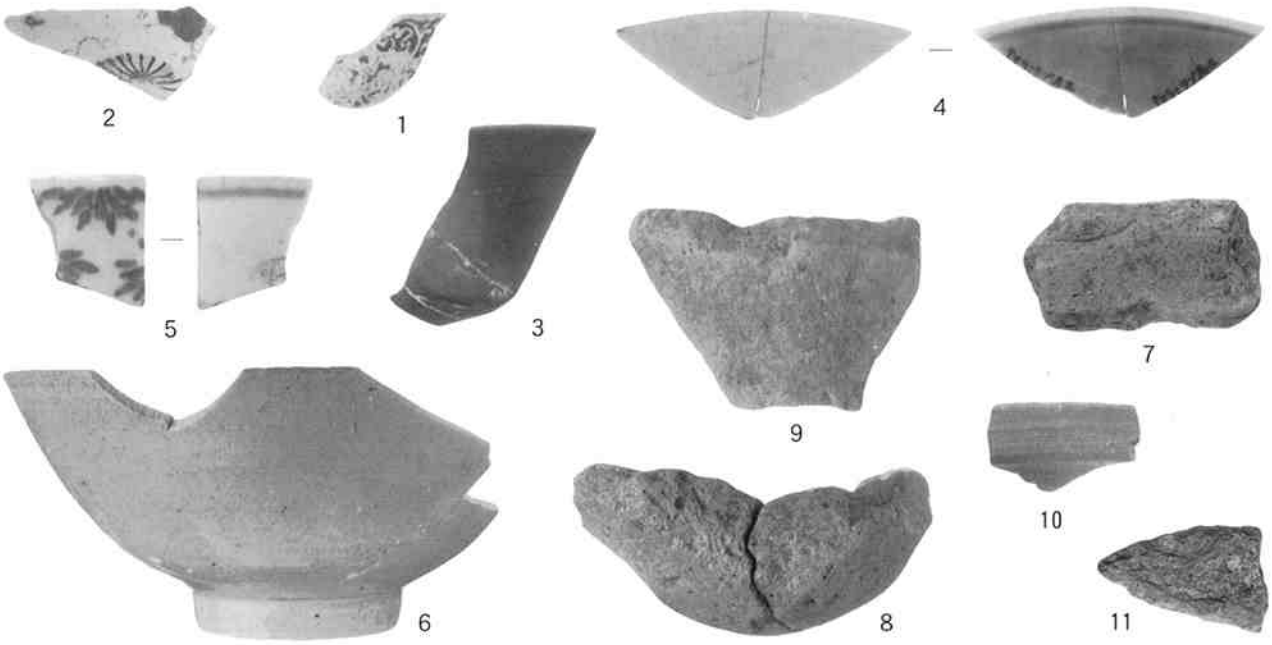
4

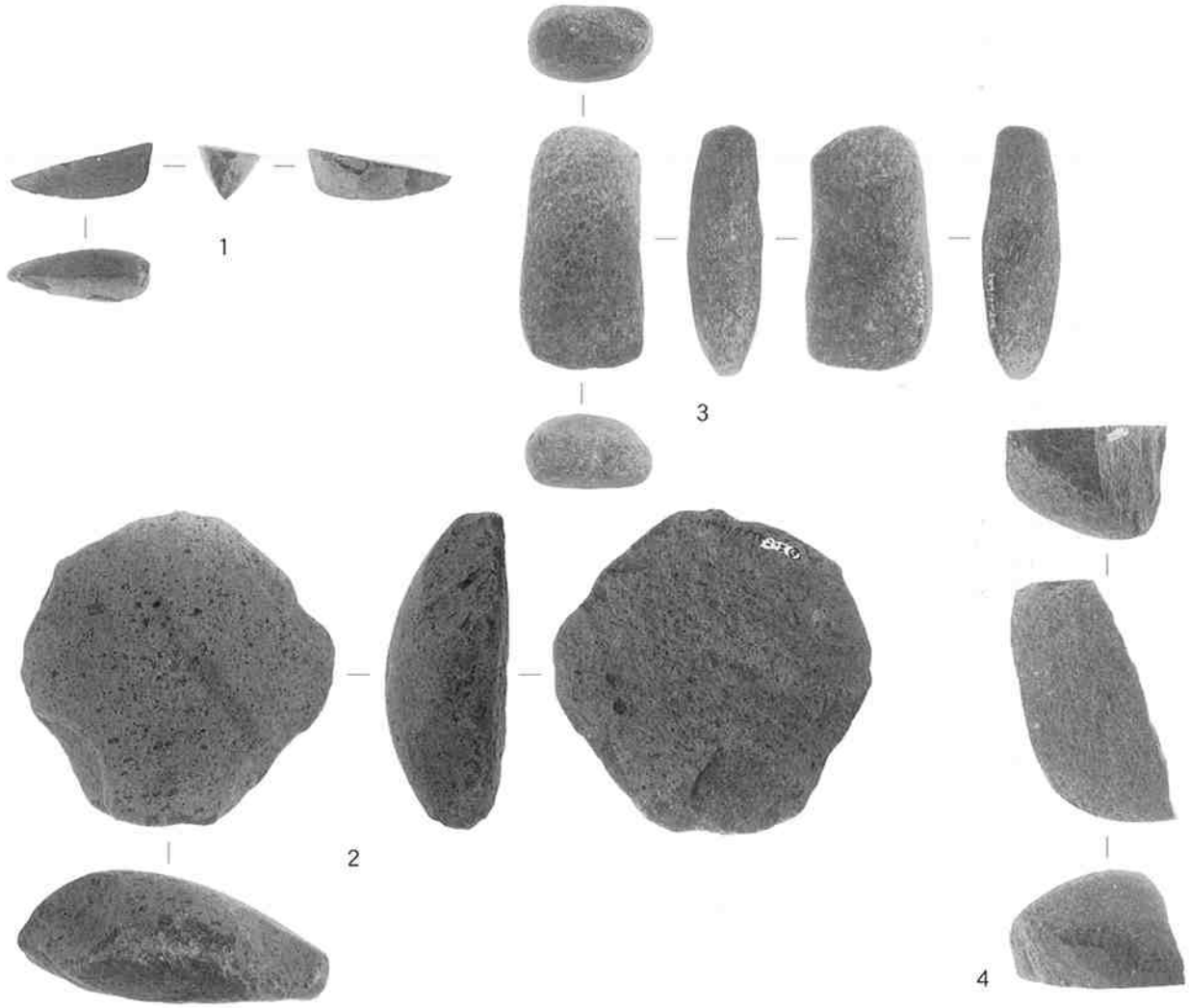
図版84　厨子５

図版85　上：厨子６　下：厨子７

図版86　左：厨子８　右：厨子10

図版87　厨子９





図版88　上：中国産色絵・鉄釉磁器・本土産染付・本土産印判手・本土産陶器・後期土器・類須恵器
その他の金属製品　下：石器

1

2

3

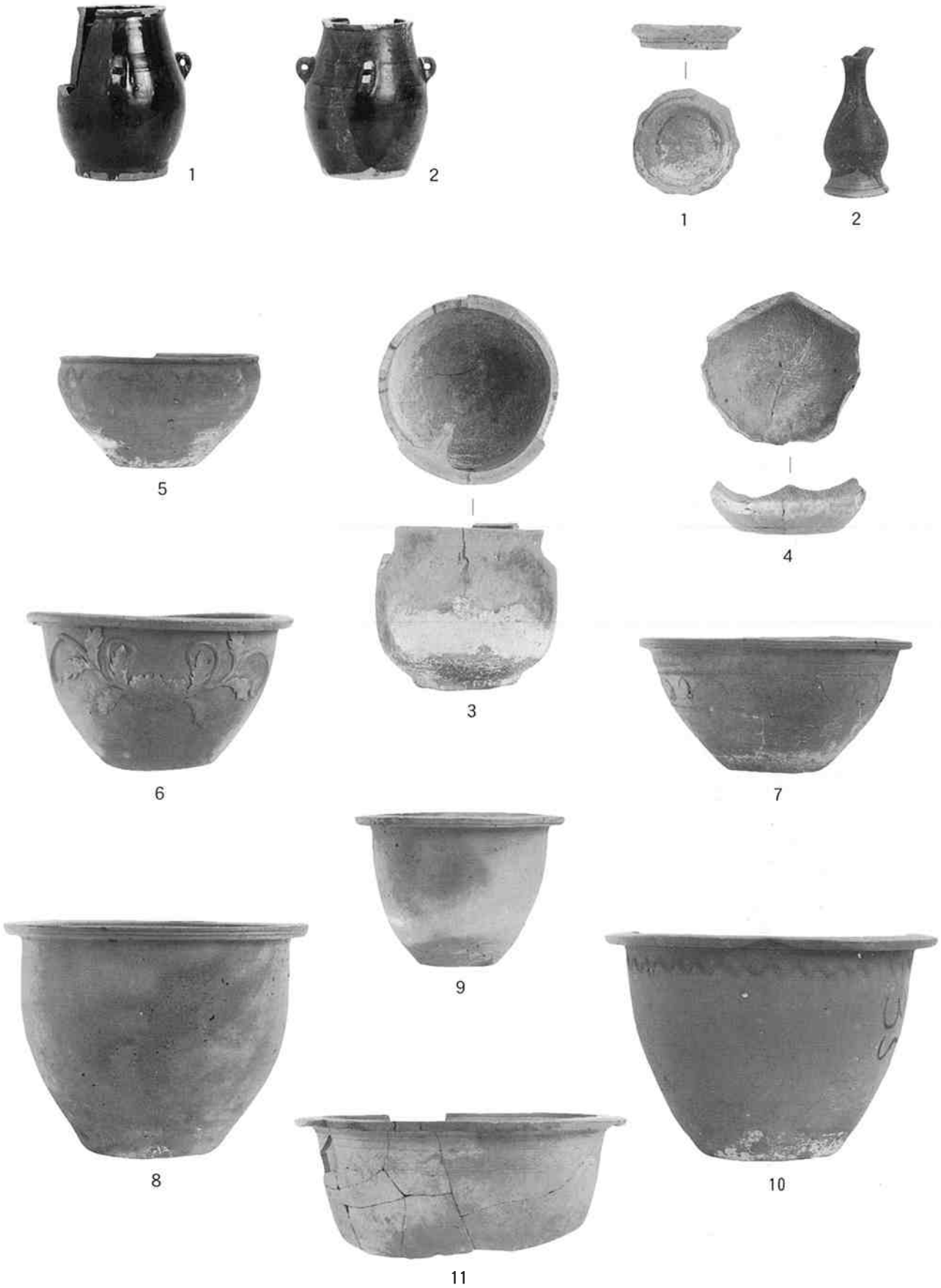
4

5

6

7

図版89　本土産陶器・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器



図版90　上左：沖縄産施釉陶器　下：沖縄産無釉陶器１

1

2

3

4

5

6

7

8

図版91　沖縄産無釉陶器２

第６部　ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨

琉球大学医学部解剖学第1講座
譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇・瑞慶覧朝盛
・泉水奏・佐宗亜衣子・比嘉貴子

【はじめに】

ヤッチのガマおよびカンジン原古墓群は、沖縄県によるかんがい排水事業に伴い一帯が水没することになったため、平成10年度から平成12年度まで沖縄県教育委員会が記録保存のための緊急発掘調査を行った。

遺跡群は久米島具志川村のほぼ中央に位置していて、ヤッチのガマは鍾乳洞の前庭部を利用して作られた近世に属する古墓群である。その開口部は幅約20m、高さ約10m、前庭部約400m²とかなりの広さを持ち、石灰岩の石積みにより13の区画に分けられていた。各区画内には、厨子が10～20基、多いところでは40基ほども納められている区画も見られた。厨子の制作年代より17世紀後半から20世紀中頃まで使用されていたと考えられている。カンジン原古墓群（以下、カンジン原）は、ヤッチのガマの周囲に点在する古墓群で、１号墓から９号墓まで調査が行われた。古墓の形式や厨子の種類は類似しており、年代はヤッチのガマとほぼ同年代と考えられている。

沖縄で出土する近世人骨は、洗骨された人骨がひとつの厨子に複数体納められているため、個体識別が困難なものが多い。その中でヤッチのガマ、カンジン原より出土した人骨には、個体識別が可能で保存状態が良いものが数多く見られた。それはつまり、信頼性の高い沖縄近世人骨の基礎データを提供する好資料になるといえる。今回は頭蓋骨と四肢骨の計測値を報告し、それを基に、ヤッチのガマならびにカンジン原にそれぞれ葬られていた集団の比較をし、さらに近～現代に属する周辺集団との比較も合わせて報告をする。

【人骨の出土状況】

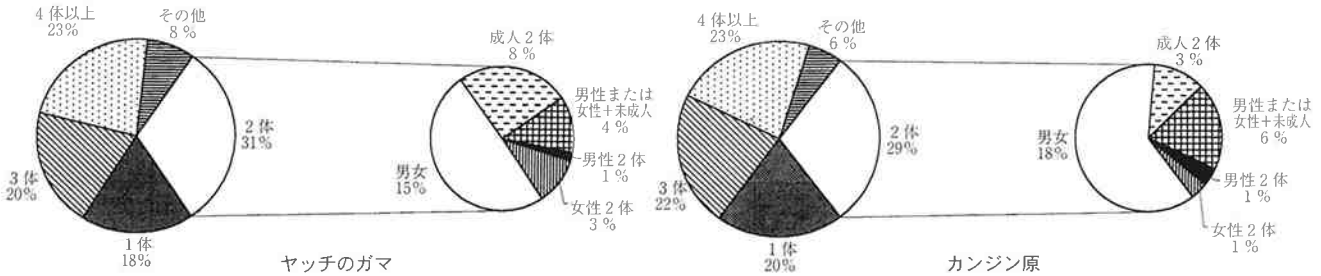
人骨のほとんどは、第152・153図に示すように基本的には厨子の内壁に四肢骨が立てかけられ、最後に頭蓋が納められている状態で出土している。また、厨子のまわりに散乱しているものや、区画内で一定の場所に集められていた人骨もあり、その構成が不明なものもわずかながら見られた。

【出土人骨の構成】

確認された最小個体数を第38表に示す。また各人骨の鑑定結果の要約をFile:出土人骨の構成（CD-ROM）に載せた。厨子ごとの人骨構成（第151図）は、ひとつの厨子に2体納められていた例が、ヤッチのガマで337例中103例、カンジン原で167例中52例と、全体の約3割を占めていた。その中で男性と女性が一緒に葬られている例がヤッチのガマで51例（31%）、カンジン原で32例（29%）ともっとも多くみられた。しかし、その他の例もそれぞれ２割程度みられることから、夫婦やその子供などといった複数の人が、ひとつの厨子に葬られるさまざまな蔵骨方法がうかがえる。未成人骨の割合はヤッチのガマが20%、カンジン原が26%となり、ともに低い傾向を

第38表　出土人骨の構成

	成人男性	成人女性	性別不明 成人	性別不明 若年	性別不明 小児	性別不明 幼児	性別不明 乳児	合　計
ヤッチのガマ	258	262	151	20	58	65	28	842
カンジン原	143	145	48	13	32	51	20	452



第151図　厨子ごとの人骨構成

示す。しかし、土肥・北条（1998）が指摘しているように、出土した未成人骨の割合は実際の死亡数よりもかなり低いと思われる。

【観察と計測】

調査方法は、現場にて厨子に納められている人骨を取りだした後、個体識別を行い、あわせて年齢、性別を推定し記録した。その後、琉球大学に持ち帰り、調査を行ったものの中から、ほぼ全身の骨格が確認され、性判定に有効な骨盤が残存している人骨を中心に選び出し、計測を行った。資料の構成はヤッチのガマが成人男性57体、成人女性52体、カンジン原が成人男性28体、成人女性30体である。下顎骨に関しては、頭蓋骨と比較して保存不良が多いため、他の集団との比較では除外している。

一般の計測法はKnussmann（1988）に従った。顔面の平坦度計測はYamaguchi（1973）の方法に従った。また形質の特徴を概観するため第39表に示す日本列島集団と比較・分析を行った。

第39表　比較集団

資　料	
畿内	宮本（1924、1925）、平井・田端（1928）
関東	森田（1950）、Yamaguchi（1973）、Dodo（1986）
西南日本	鋳鍋（1955）、平田（1957）、専頭（1957）、溝口（1957）
福岡	Doi and Tanaka（1987）
佐賀	Doi and Tanaka（1987）
天福寺	中橋（1987）、九州大学解剖学講座編（1988）
奄美	Dodo et al.（2000）
与論島	大山（1957）平田（1958）、広沢（1959）
沖縄本島	Dodo et al.（2000）
先島	Dodo et al.（2000）
宮古島	池田（1974）

【計測・観察結果】

頭蓋

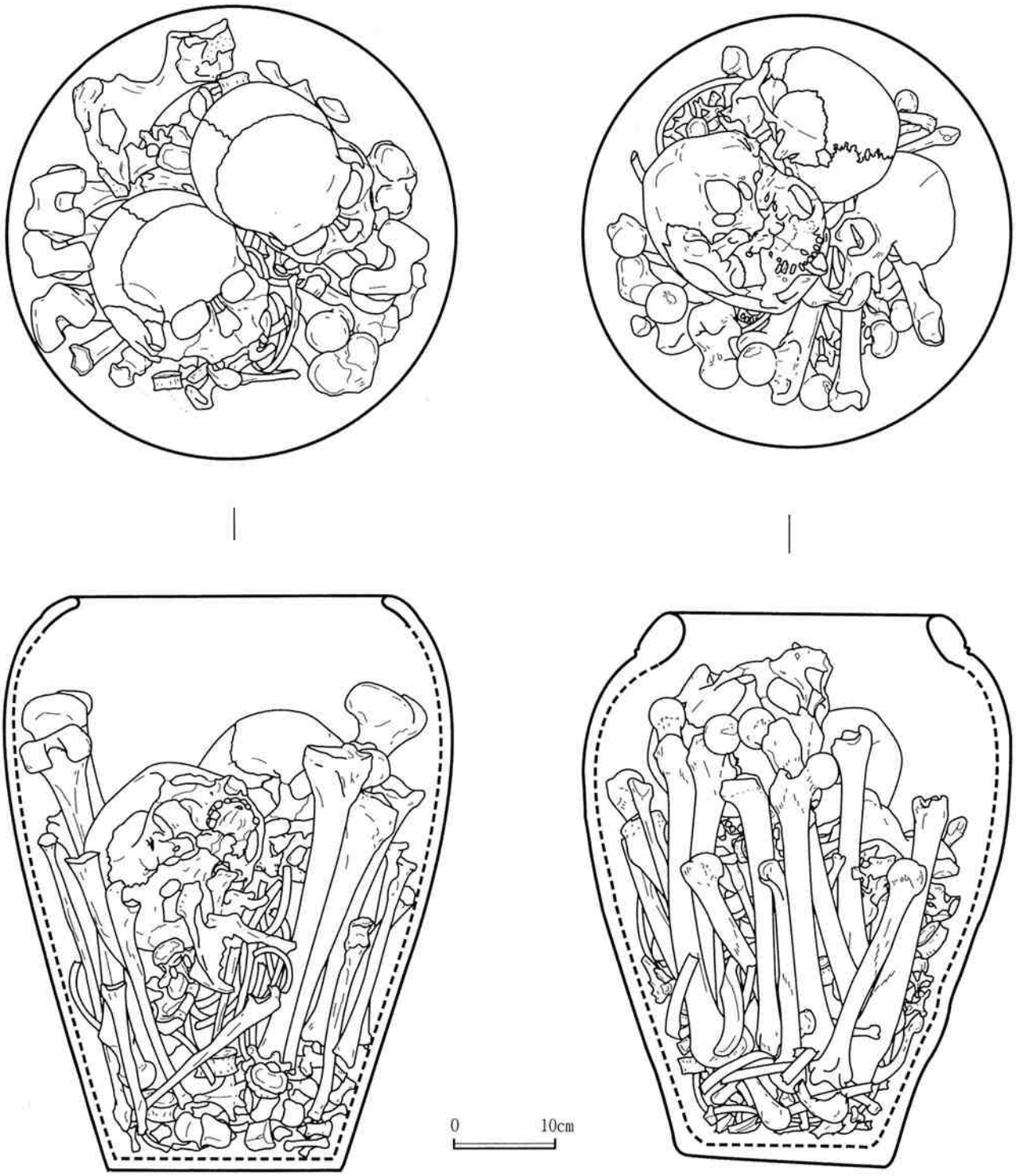
頭蓋計測の結果を第51～53表に示す。

1）脳頭蓋

主要計測結果を比較群とともに第40・41表に示す。

脳頭蓋の計測結果ではヤッチのガマ、カンジン原の二集団間に有意差は認められなかった。第154～159図でみるように変異域も全体的に類似した傾向を示した。

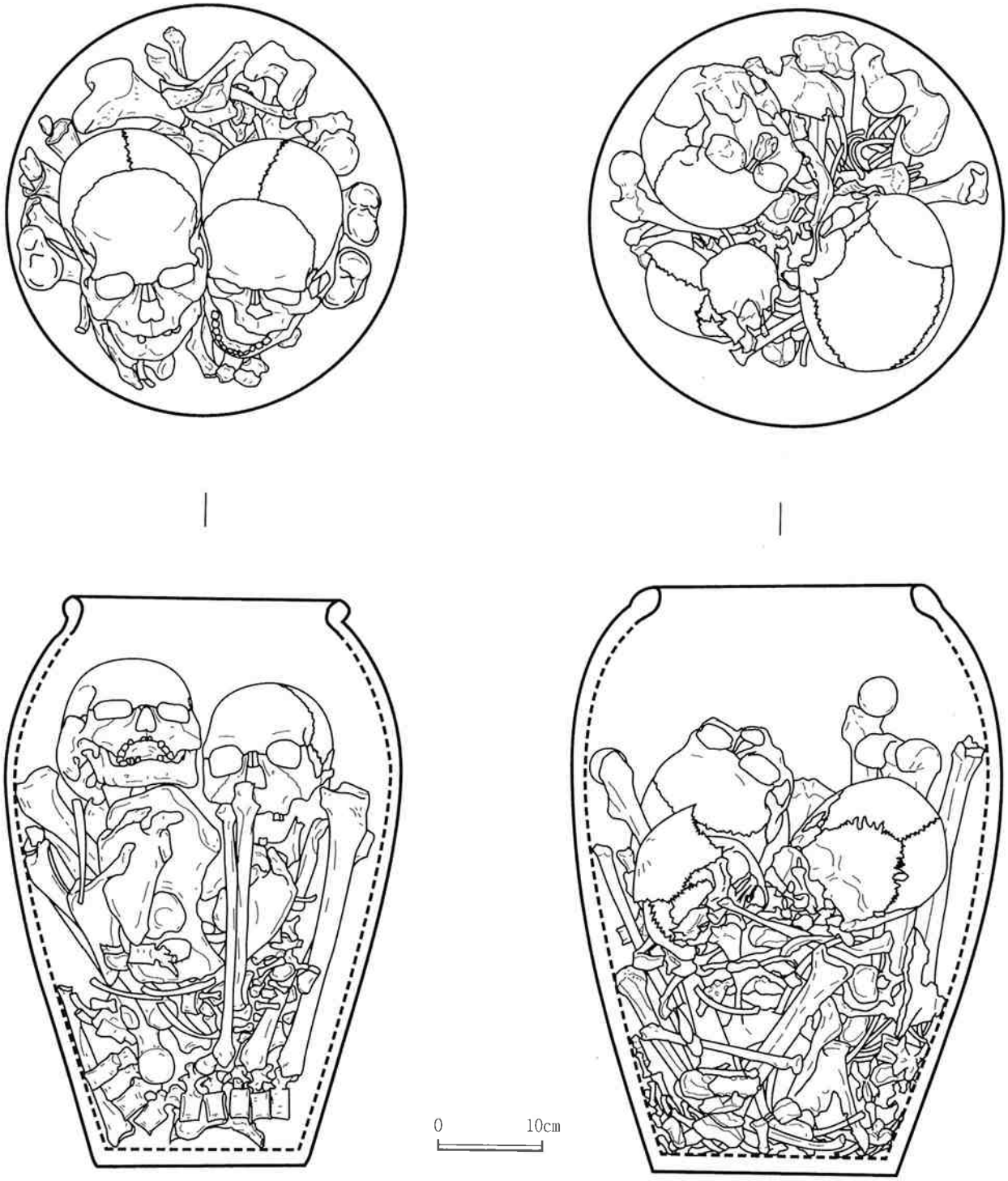
他の集団と比較を行うため、関東現代人を基準とした偏差折線を第160図に示す。実線は男性、破線は女性を表している。各集団の男女間には、大きな差はみられなかった。また、ヤッチのガマとカンジン原は、頭蓋最大長がわずかにマイナスに傾き、宮古は逆にプラスへ偏っているため長幅示数や長高示数で異なった振れ方をしている。頭蓋最大長から正中前頭弧長まで左右の振れ幅が小さく、大きな違いはみられなかった。西南日本人も同様に振れ幅は小さく天福寺と似たパターンを示し、宮古は久米島群よりも与論島と近似した振れ方をしていた。ヤッチのガマやカンジン原、宮古、与論島の南西諸島集団の特徴として、正中頭頂弧長が大きく、正中後頭弧長が小さいため折線が左右に大きく振れているのがみられ、それに合わせて弧長の各示数値も大きく左右に振れている。これとは逆に、西南日本人や天福寺、畿内現代人の本土集団は、ほとんど折線が振れていないのがわかる。頭頂弧長と後頭弧長に関してBENEVOLENSKA（1980）は、北東アジア集団では矢状頭頂後頭示数（M28/27）が大きく、東南アジアやヨーロッパの集団では示数値が小さいことを見いだしている。つまり、頭頂弧長に対して後頭弧長が短い集団が東南アジアやヨーロッパに多くみられる、ということである。今回は比較集団や資料数が少ないため詳細な考察は避けるが、南西諸島集団は頭頂弧長が大きく、後頭弧長が小さいという、共通する地域性を持っていると考えられる。続いて各計測値と示数値を詳しくみていきたい。



1号区画1

2号区画5

第152図　納骨状況1（1号区画1・2号区画5）



6号区画6

7号区画6

第153図　納骨状況２（６号区画６・７号区画６）

第40表　脳頭蓋計測値の比較（男性）

(mm)

脳頭蓋主要計測項目	ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	宮古 n	宮古 Mean		与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		関東現代人 n	関東現代人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
1　脳頭蓋最大長	27	176.5	17	176.5	70	182.4	＊＊☆☆	37	185.4	＊＊☆☆	38	182.6	＊＊☆☆	87	180.8	＊＊☆	143	178.9	＊	30	178.3	
8　脳頭蓋最大幅	27	140.3	16	141.2	68	141.1		38	142.8	＊	38	138.6	☆☆	87	139.2	☆	143	140.3		30	141.2	
17　バジオン・ブレグマ高	23	135.8	10	138.2	34	136.8		33	136.5		33	139.2		86	139.2	＊＊	143	138.1	＊	30	139.7	＊
8/1　頭蓋長幅示数	26	80.3	15	80.7	65	77.4	＊＊☆☆	37	77.3		37	76.0		87	77.0	＊＊☆☆	143	78.5	☆	30	79.7	
17/1　頭蓋長高示数	22	76.4	11	78.3	35	74.8	＊☆☆	33	73.8		33	76.2		87	77.0		143	77.3		30	78.5	＊
17/8　頭蓋幅高示数	23	96.4	11	98.0	33	97.0		33	96.0		33	100.8		87	100.0	＊＊	143	98.6	＊	30	99.3	＊
23　脳頭蓋水平周	23	514.8	13	508.9	59	514.7		37	525.9	＊＊☆☆	38	519.1		87	513.6		142	513.7		30	513.5	
25　正中矢状弧長	18	368.3	12	370.8	47	376.4	＊	34	382.8	＊＊☆☆	33	380.6		87	376.8	＊＊	143	371.7		30	372.5	
26　正中前頭弧長	26	124.0	19	124.7	74	127.1	＊	38	128.2	＊＊☆	37	128.5		87	128.3	＊＊☆☆	143	127.4	＊☆	30	127.0	
27　正中頭頂弧長	29	131.0	17	130.9	76	131.5		38	134.9	＊	35	128.5		87	128.4		143	125.1	＊＊☆	30	127.2	
28　正中後頭弧長	20	114.8	12	111.9	51	119.5	＊☆☆	34	119.9	＊＊☆☆	30	122.4		87	120.5	＊＊☆☆	143	119.1	＊＊☆☆	30	118.2	☆
26/25　前頭矢状弧長示数	18	33.6	12	33.6				34	33.4		33	33.9		87	34.0		143	34.3	＊	30	34.1	
27/25　頭頂矢状弧長示数	18	35.2	12	36.2				34	35.2		30	33.8		87	34.1	＊＊☆☆	143	33.7	＊＊☆☆	30	34.0	☆☆
28/25　後頭矢状弧長示数	18	31.1	12	30.2				34	31.3	＊	30	32.2		87	32.0	＊＊☆	143	32.0	＊☆☆	30	31.9	☆☆

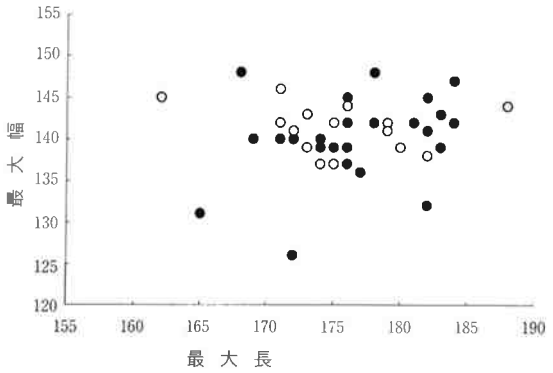
ヤッチのガマ　＊P<0.05　＊＊P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01

第41表　脳頭蓋計測値の比較（女性）

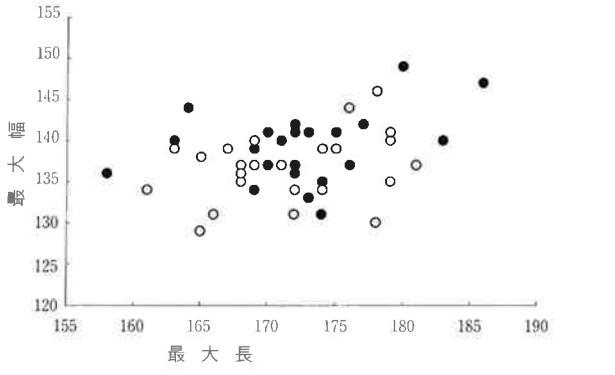
(mm)

脳頭蓋主要計測項目	ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	宮古 n	宮古 Mean		与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		関東現代人 n	関東現代人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
1　脳頭蓋最大長	25	172.2	26	171.0	38	173.9	☆	42	177.9	＊＊☆☆	38	174.7	☆	55	173.3		82	170.8		20	169.3	
8　脳頭蓋最大幅	26	139.0	25	137.0	40	138.2		42	138.7		38	133.5	＊＊☆☆	53	134.0	＊＊☆☆	82	135.9	＊＊	20	137.7	
17　バジオン・ブレグマ高	20	132.4	18	131.1	21	133.4		38	132.1		35	132.7		55	132.5		81	132.5		20	132.5	
8/1　頭蓋長幅示数	25	80.8	24	79.8	36	79.2		42	78.0	＊＊☆	38	76.5	＊＊☆☆	53	77.3	＊＊☆☆	82	79.7		20	81.5	
17/1　頭蓋長高示数	21	77.1	18	77.1	21	76.6		38	74.4	＊＊☆☆	35	76.1		55	76.5		81	77.7		20	77.9	
17/8　頭蓋幅高示数	21	95.1	18	95.6	20	96.8		38	95.2	☆	35	99.4	＊＊☆☆	53	98.9	＊＊☆☆	81	97.7	＊＊☆	20	95.8	
23　脳頭蓋水平周	23	500.1	23	498.0	28	498.5		42	506.3	☆	36	497.4		55	493.2		81	493.7		20	493.0	
25　正中矢状弧長	21	360.0	16	359.1	25	363.6		37	370.2	＊＊☆☆	34	364.9		55	361.3		82	357.6		20	359.0	
26　正中前頭弧長	29	123.6	26	120.8	39	122.7		42	123.8	☆	36	123.5		54	122.9		81	122.1		20	122.2	
27　正中頭頂弧長	32	128.9	27	125.4	38	129.1	☆	42	131.0	＊＊☆☆	33	125.4		54	122.9	＊＊	81	121.0	＊＊☆	20	121.2	＊＊☆
28　正中後頭弧長	20	111.8	16	108.3	26	114.5	☆☆	37	115.4	＊＊☆☆	31	116.0	＊☆☆	54	115.2	☆☆	82	114.3	☆☆	20	115.0	☆☆
26/25　前頭矢状弧長示数	20	34.4	16	33.9				37	33.5	☆	34	33.9		54	34.1		81	34.2		20	34.1	
27/25　頭頂矢状弧長示数	20	35.8	16	35.7				37	35.5	☆	30	34.2	＊☆☆	54	34.1	＊☆☆	81	33.8	＊＊☆☆	20	33.8	＊＊☆☆
28/25　後頭矢状弧長示数	19	31.1	16	30.2				37	31.2	☆	30	31.8	☆☆	54	32.0	☆☆	82	32.0	☆☆	20	32.2	☆☆

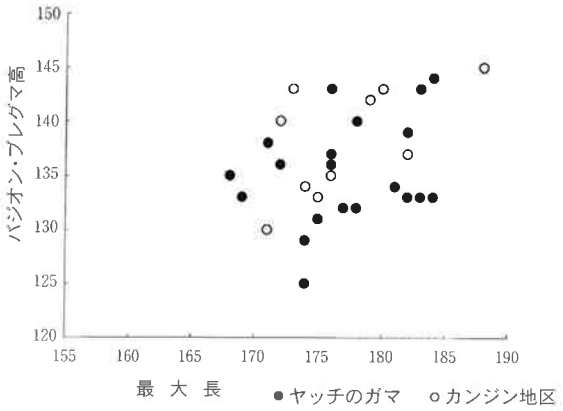
ヤッチのガマ　＊P<0.05　＊＊P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01



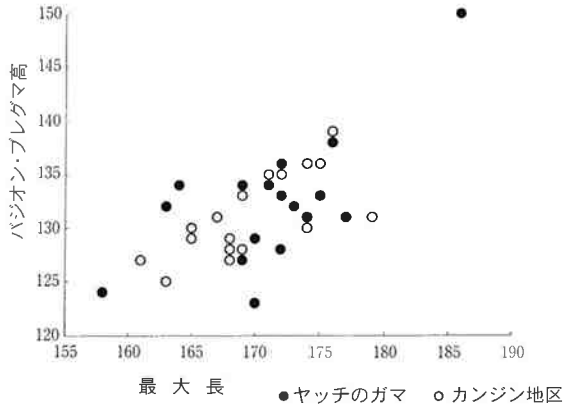
第154図　脳頭蓋最大幅/脳頭蓋最大長(男性)



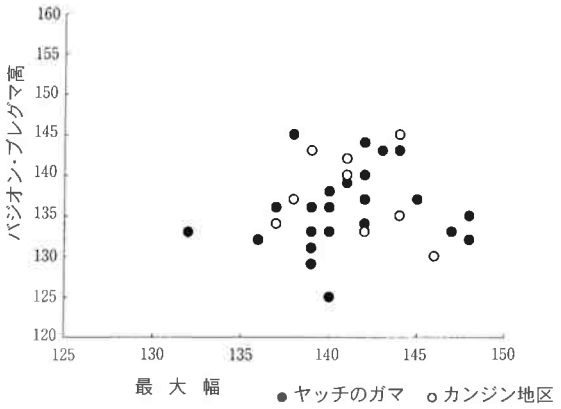
第155図　脳頭蓋最大幅/脳頭蓋最大長(女性)



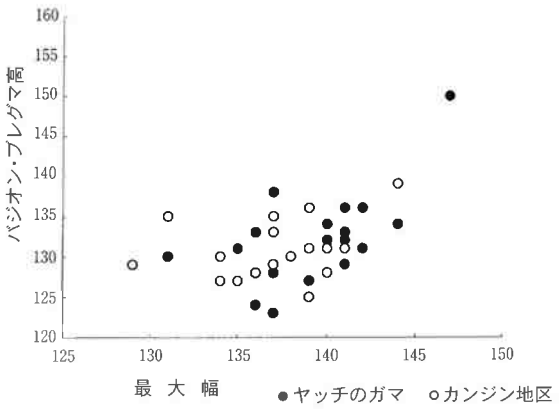
第156図　バジオン・ブレグマ高/脳頭蓋最大長(男性)



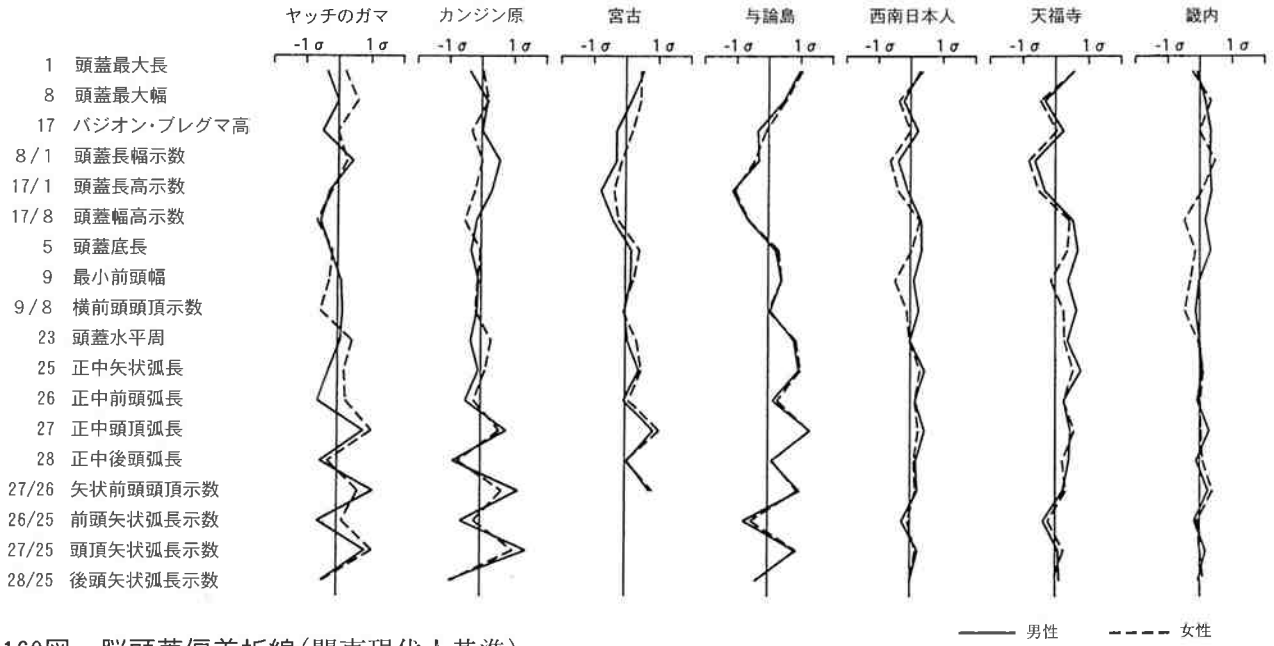
第157図　バジオン・ブレグマ高/脳頭蓋最大長(女性)



第158図　バジオン・ブレグマ高/頭最大幅(男性)



第159図　バジオン・ブレグマ高/頭最大幅(女性)

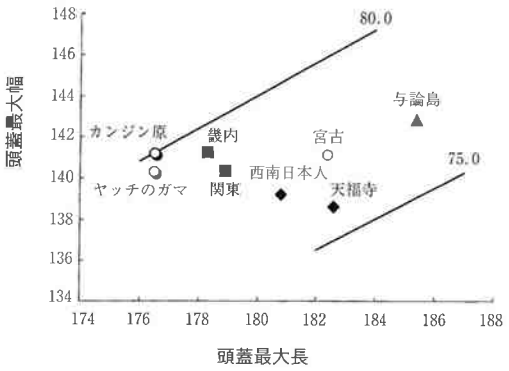


第160図　脳頭蓋偏差折線(関東現代人基準)

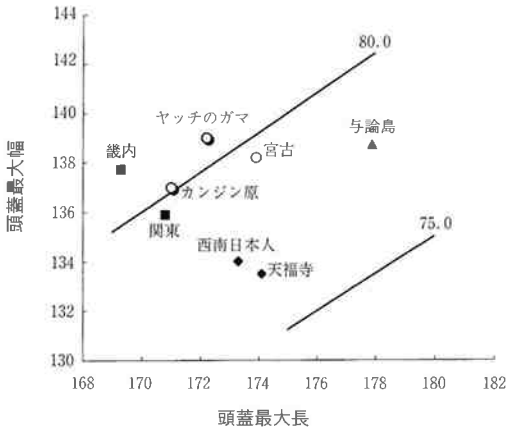
頭蓋最大長・最大幅

男性の頭蓋最大長の平均値は、ヤッチのガマ、カンジン原ともに176.5mmと、今回比較した集団間ではもっとも小さな値をとり、畿内現代人を除くほとんどの集団との間に有意差が見られた。頭蓋最大幅はやや大きく、比較群内で中間的な値をとっている。縦軸に頭蓋最大長、横軸に頭蓋最大幅をとり、各集団の平均値を置いて比較してみると（第161図）、ヤッチのガマ、カンジン原は最大長が小さいため、他の集団とやや離れたところに位置していて、畿内現代人、関東現代人がこれに続く。長幅示数はヤッチのガマが80.3、カンジン原が80.7と短頭型に属している。

女性は男性と同様短頭型を示している。頭蓋最大長の平均値はヤッチのガマが172.2mm、カンジン原が171.0mmと、畿内現代人（169.3）や関東現代人（170.8）よりやや大きい。頭蓋最大幅では、ヤッチのガマが比較群中もっとも大きな値をとっていて（139.0）、関東現代人、西南日本人、天福寺より有意に大きい。カンジン原（137.0）は関東現代人（135.9）、西南日本人（134.0）、天福寺（133.5）より大きく、西南日本人、天福寺との間に有意差が見られた。第162図でヤッチのガマ、カンジン原は男性と異なり各集団とも比較的まとまって分布している。



第161図　頭蓋最大幅/頭蓋最大長(男性)

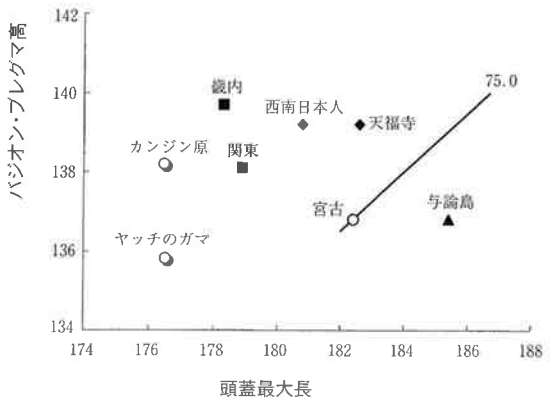


第162図　頭蓋最大幅/頭蓋最大長(女性)

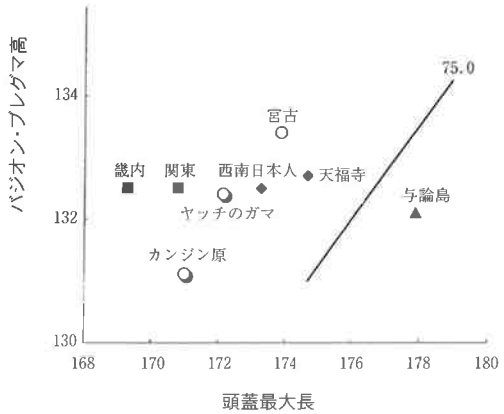
頭蓋最大長・バジオン・ブレグマ高

男性のバジオン・ブレグマ高の平均値はヤッチのガマが135.8mm、カンジン原が138.2mmと、カンジン原が比較的大きく、幾内現代人（139.7）、西南日本人（139.2）、天福寺（139.2）に続く。ヤッチのガマは比較群中もっとも小さな値をとり、宮古（136.8）、与論（136.5）以外の集団と有意な差が見られた。縦軸にバジオン・ブレグマ高、横軸に頭蓋最大長をとると（第163図）、頭蓋最大長が小さいためヤッチのガマは離れたところに位置しているが、長高示数ではカンジン原とともに高頭型に分類される。

女性のバジオン・ブレグマ高の平均値はヤッチのガマで132.4mm、カンジン原で131.1mmである。ヤッチのガマは比較群内で中間的な値をとり、カンジン原が比較群中もっとも小さい値となっているが、有意差は見られなかった。第164図ではヤッチのガマとカンジン原は頭蓋最大長が比較的大きいため、幾内現代人や関東現代人、西南日本人と近いところに位置していて、高頭型に属する。



第163図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大長(男性)

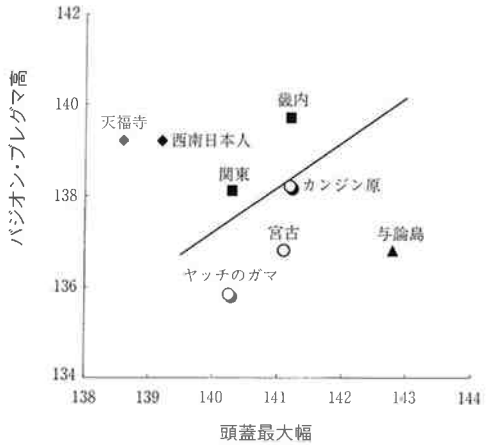


第164図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大長(女性)

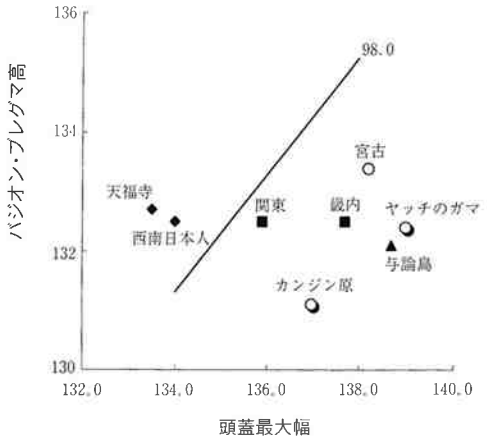
頭蓋最大幅・バジオン・ブレグマ高

縦軸にバジオン・ブレグマ高、横軸に頭蓋最大幅をとった男性の分布図（第165図）では、ヤッチのガマ、カンジン原ともに中頭型に属する。南西諸島集団はバジオン・ブレグマ高に対して最大幅が相対的に大きい傾向があるため、やや集まった状態で分布している。

女性（第166図）では、図の右下に位置していて、幾内と南西諸島集団が比較的まとまって分布している。幅高示数はヤッチのガマで95.1、カンジン原で95.6となり、中頭型に属していて、男性と比較してより中頭傾向が強くなっている。



第165図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大幅(男性)

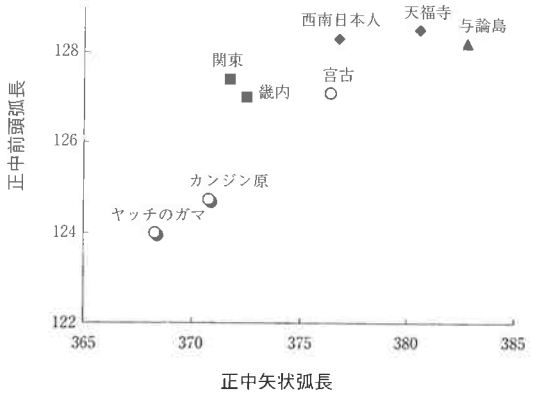


第166図　バジオン・ブレグマ高/頭蓋最大幅(女性)

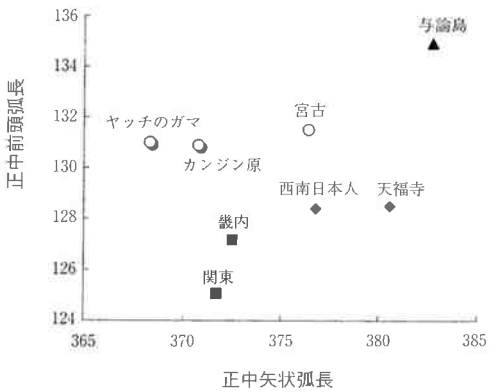
脳頭蓋の弧長

男性の正中矢状弧長はヤッチのガマが368.3mm、カンジン原が370.8mmと、ともに小さな値をとり、ヤッチのガマは比較群中もっとも小さく、畿内現代人（372.5）、関東現代人（371.7）を除く集団との間で有意差がみられた。正中前頭弧長、後頭弧長も同様に小さい傾向があり、ほとんどの集団より有意に小さい結果となった。これに対し頭頂弧長はヤッチのガマ（131.0）、カンジン原（130.9）ともに大きい値をとり、与論島（134.9）、宮古（131.5）に次いで大きい。比較群中もっとも小さな関東現代人（121.0）とは有意差もみられた。横軸に正中矢状弧長、縦軸に前頭弧長、頭頂弧長、後頭弧長をそれぞれとり二次元で表すと（第167～169図）、全体に変異域が大きく、ヤッチのガマ、カンジン原が他の集団とやや離れて位置しているのがわかる。

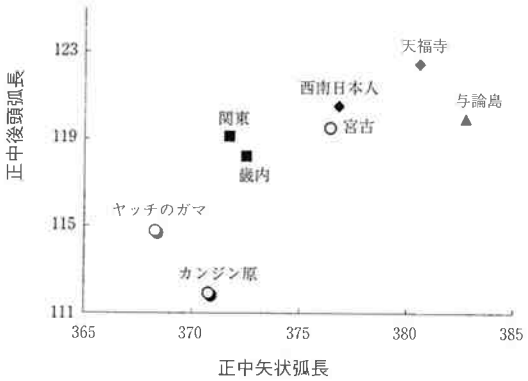
女性の正中矢状弧長はヤッチのガマが360.0mm、カンジン原が359.1mmと関東現代人（357.6）、畿内現代人（359.0）より大きい。比較群中もっとも大きい与論島（370.2）との間では有意差がみられた。正中前頭弧長は、カンジン原（120.8）が比較群中もっとも小さいが、ヤッチのガマ（123.6）はもっとも大きな与論島（123.8）に次いで大きく、男性の結果とは異なっている。頭頂弧長はヤッチのガマ（128.9）、カンジン原（125.4）ともに大きい傾向があり、関東現代人（121.0）、畿内現代人（121.2）より有意に大きい。またヤッチのガマと西南日本人（122.9）の間には有意差がみられた。後頭弧長は男性と同様に小さい傾向をみせ、とくにカンジン原（108.3）は比較群中もっとも小さな値をとり、比較群すべてに有意差がみられた。第170図、第172図では、与論島を除く集団はまとまって分布し、ヤッチのガマとカンジン原は図の左下へ位置しているのに対し、第171図では、ヤッチのガマとカンジン原の頭頂弧長が大きいため、やや離れて分布しているのがわかる。



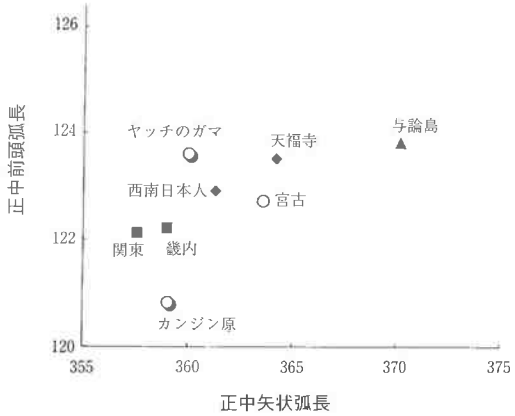
第167図　正中前頭弧長/正中矢状弧長(男性)



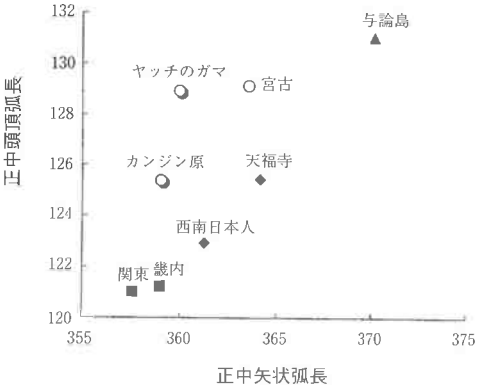
第168図　正中前頭弧長/正中矢状弧長(女性)



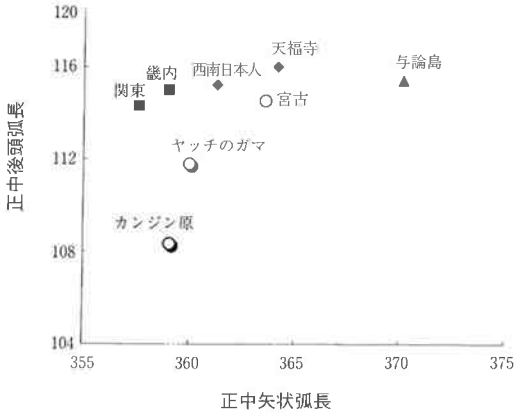
第169図　正中後頭弧長/正中矢状弧長(男性)



第170図　正中前頭弧長/正中矢状弧長(女性)



第171図　正中頭頂弧長/正中矢状弧長(女性)



第172図　正中後頭弧長/正中矢状弧長(女性)

2）顔面頭蓋

主要計測結果を比較群とともに第42・43表に示す。

ヤッチのガマとカンジン原の集団間では、男性の顔長でカンジン原が有意に小さかったが、その他の計測値では有意差はみられなかった。二集団の各計測値の分布を第173～178図に示す。脳頭蓋と同様に、変異域は全体的に類似した傾向がみられた。

第42表　顔面頭蓋計測値の比較（男性）

(mm)

顔面頭蓋主要計測項目	ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	宮古 n	宮古 Mean		与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		関東現代人 n	関東現代人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
40 顔長	15	100.5	9	95.4	31	101.8	☆☆	20	101.8	☆☆	17	101.8	☆	82	99.1		144	97.6	**	29	100.1	☆
45 頬骨弓幅	15	135.1	7	129.3	42	134.3		37	138.8	**	25	136.4		85	134.3		144	132.9		30	133.5	
48 上顔高 (alv)	20	68.7	13	67.3	67	69.4		25	70.0		18	74.5	**☆☆	79	71.7	**☆☆	144	70.7	*☆☆	29	72.9	**☆☆
48/45 コルマン上顔示数(alv)	11	51.0	8	53.2	40	51.4		24	50.8		17	54.4	**	77	53.3	*	144	53.3	*	29	54.6	**
51l 眼窩幅(l)	26	41.3	19	41.1	69	43.2	**☆☆	37	42.6	*☆	24	42.6	☆	87	42.8	**☆☆	142	42.7	*☆☆	30	43.0	**☆☆
52l 眼窩高(l)	26	32.7	18	33.2	69	34.0	**	37	34.0	**	24	34.1	**	87	34.3	**☆☆	144	34.3	**☆☆	30	34.4	**☆
52/51 眼窩示数(l)	26	79.2	18	80.8	68	78.7		37	79.8		23	80.9		87	80.4		142	80.4		30	79.6	
54 鼻幅	28	25.8	17	26.0	70	26.9	**	37	27.3	**☆	24	26.5		87	26.3		144	25.0		30	26.4	*☆
55 鼻高	26	49.7	17	49.3	69	52.1	**☆☆	37	51.4	*☆☆	24	52.9	**☆☆	87	52.2	**☆☆	143	52.0	**☆☆	30	52.4	**☆☆
54/55 鼻示数	26	51.7	16	52.6	66	51.3		37	53.2		24	50.1	*☆	87	50.3		143	48.4	**☆☆	30	50.3	

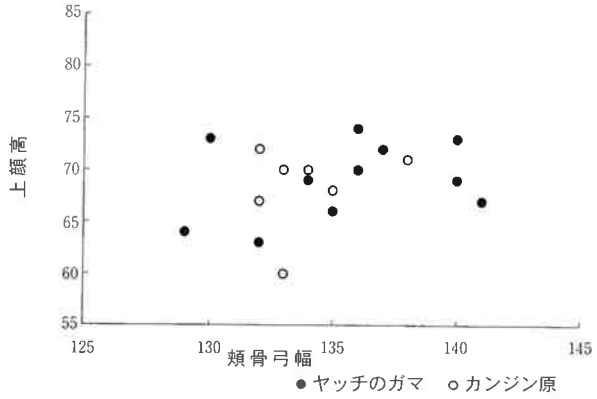
ヤッチのガマ　*P<0.05　**P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01

第43表　顔面頭蓋計測値の比較（女性）

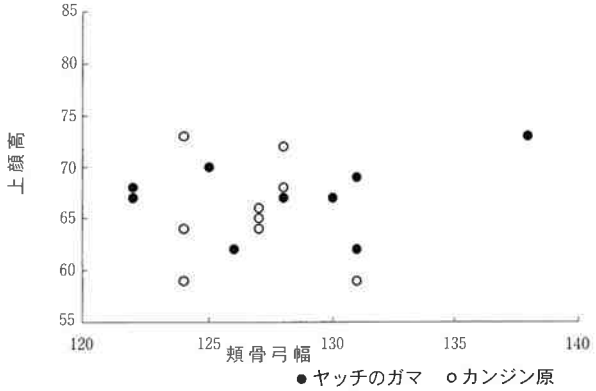
(mm)

顔面頭蓋主要計測項目	ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	宮古 n	宮古 Mean		与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		関東現代人 n	関東現代人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
40 顔長	12	93.8	13	93.0	18	97.0	*☆	27	97.6	**☆☆	20	95.1		51	94.0		83	94.4		20	94.3	
45 頬骨弓幅	14	127.1	10	127.3	15	127.9		38	130.2	*☆	30	126.5		54	124.9	☆	84	124.9	☆	20	125.8	
48 上顔高 (alv)	17	66.1	16	64.6	32	64.9		29	65.6		22	68.8	*☆☆	53	68.1	☆☆	83	67.1		20	68.3	☆
48/45 コルマン上顔示数(alv)	9	50.3	9	53.1	14	51.3		26	50.6		22	54.3		52	54.5		83	53.8		20	54.6	
51l 眼窩幅(l)	28	40.2	23	40.0	37	40.7		42	41.1	*☆	30	40.5		55	41.5	**☆☆	84	41.1	*☆	20	41.0	☆☆
52l 眼窩高(l)	27	32.6	22	32.5	37	32.8		42	32.9		30	34.3	**☆☆	55	34.3	**☆☆	84	33.8	**☆☆	20	34.4	**
52/51 眼窩示数(l)	27	81.7	22	81.6	37	80.6		42	80.4		29	84.8	**☆☆	55	82.8		84	82.4		20	83.0	
54 鼻幅	29	25.3	23	25.2	33	26.2	☆	42	25.7		26	25.3		55	24.9		84	24.5	*☆	20	25.1	
55 鼻高	27	47.0	22	47.5	34	48.8	*	42	47.9		28	49.9	**☆☆	55	49.9	**☆☆	84	49.0	**☆	20	48.6	
54/55 鼻示数	27	54.2	21	53.1	33	53.5		42	53.7		26	51.0	**☆	55	50.0	**☆☆	84	50.2	**☆☆	20	51.2	*

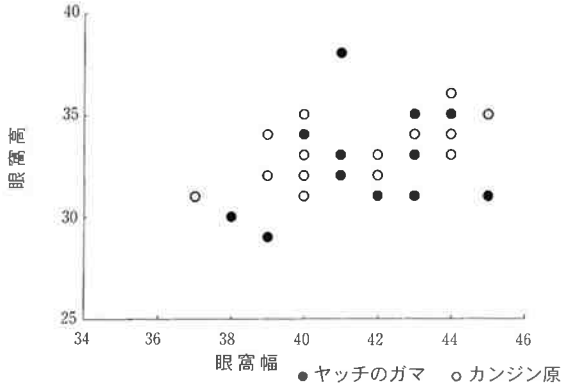
ヤッチのガマ　*P<0.05　**P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01



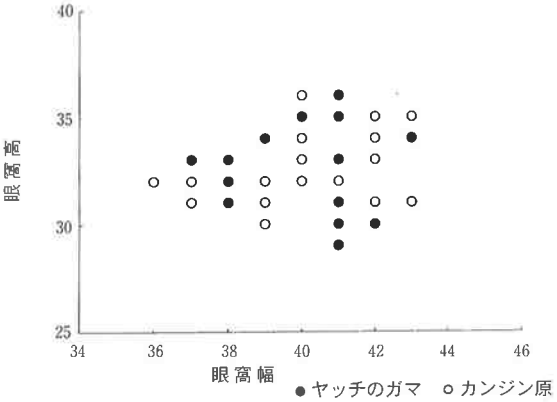
第173図　頬骨弓幅/上顔高(男性)



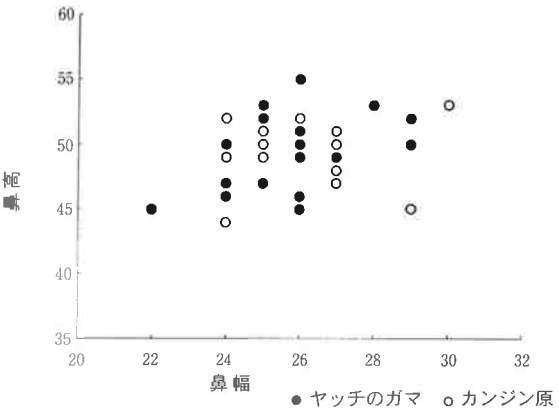
第174図　頬骨弓幅/上顔高(女性)



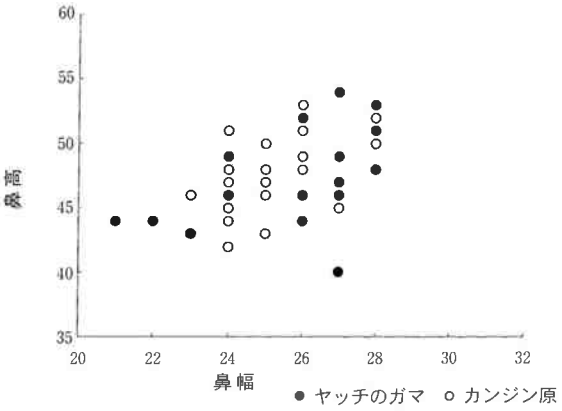
第175図　眼窩高/眼窩幅(男性)



第176図　眼窩高/眼窩幅(女性)

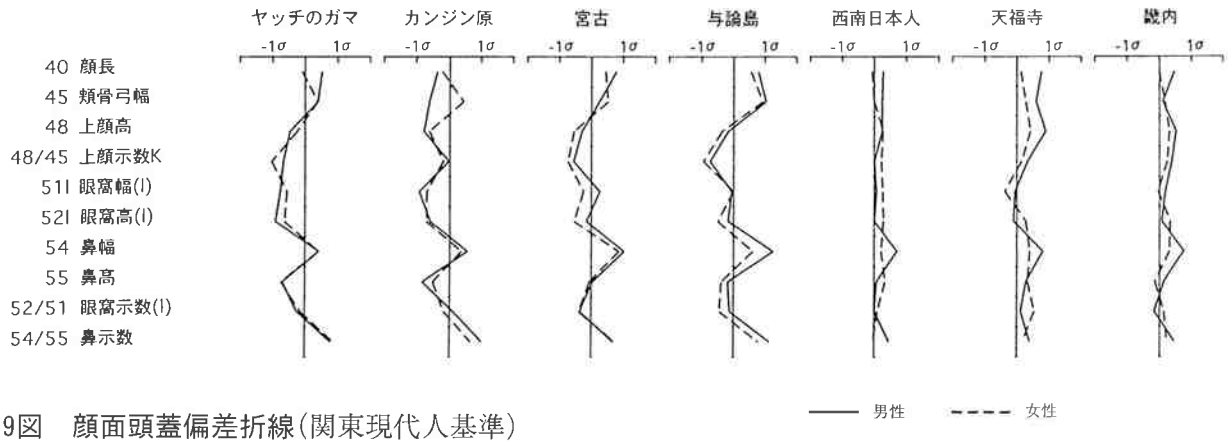


第177図　鼻幅/鼻高(男性)



第178図　鼻幅/鼻高(女性)

関東現代人を基準とした偏差折線（第179図）では、本土集団は脳頭蓋の場合と同様に振れ幅が小さく、特に西南日本人と畿内現代人は、鼻幅がわずかにプラスへ傾いている以外は基準線に近く、関東現代人と同じ傾向をみせている。ヤッチのガマとカンジン原は、男性で顔長と頬骨弓幅の振れ方が異なっているものの、全体的には類似した傾向を示し、眼窩高と眼窩幅がマイナスに傾き、鼻幅がわずかにプラスに振れるが、鼻高はマイナスに振れるという同じような傾向がみられた。宮古や与論島は全体的に大きい傾向をみせるが、折線の振れ方はヤッチのガマやカンジン原とほぼ同傾向を示す。南西諸島集団の特徴としては、上顔高に対して頬骨弓幅がやや大きく、鼻高に対して鼻幅が大きい傾向があり、高径より相対的に横径が大きくなる形質的特徴をみてとれる。ヤッチのガマとカンジン原の両集団は男女とも全体的に小さい傾向を示している。各計測値や示数値を以下に詳しくみていく。



第179図　顔面頭蓋偏差折線(関東現代人基準)

顔長

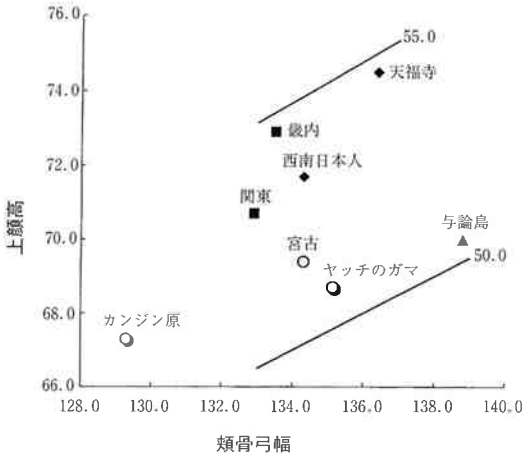
カンジン原は比較群中もっとも小さく、それに対してヤッチのガマは、天福寺（101.8）や宮古（101.8）、与論島（101.8）に続き大きな値をとる。

女性の平均値はヤッチのガマが93.8、カンジン原が93.0と、ともに近い値をとり、比較群中もっとも小さい。有意差は宮古（97.0）、与論島（97.6）との間でみられた。

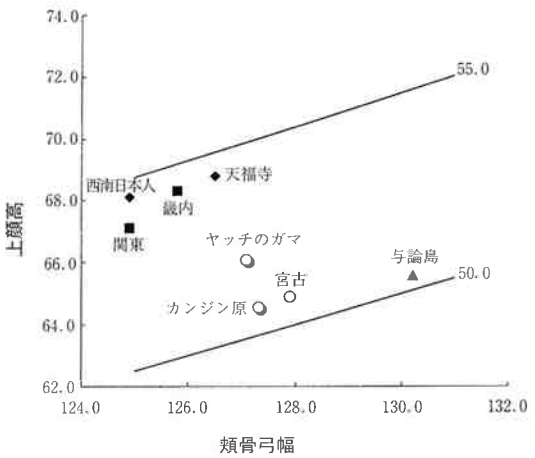
頬骨弓幅・上顔高

男性の頬骨弓幅はカンジン原（129.3）がもっとも小さいが、観察は7例とやや少なく、また比較群との間に有意差もみられなかった。ヤッチのガマは135.1mmと与論島（138.8）、天福寺（136.4）に続き比較的大きい。上顔高はカンジン原が67.3mmと頬骨弓幅同様に比較群中でもっとも小さく、ヤッチのガマが68.7mmとカンジン原に次いで小さい。縦軸に上顔高、横軸に頬骨弓幅をとった第180図では、南西諸島集団は上顔高が低いため、本土集団と離れて位置している。ヤッチのガマは宮古に近く、カンジン原はどの集団からも離れて左下に分布している。コルマン上顔示数は比較群すべて中上顔に分類される。

女性の頬骨弓幅はヤッチのガマが127.1mm、カンジン原が127.3mmと類似した傾向をみせ、本土集団より大きい。カンジン原は関東現代人（124.9）、西南日本人（124.9）より有意に大きい。上顔高ではカンジン原（64.6）が男性の場合と同様に比較群中もっとも小さな値をとり、ヤッチのガマ（66.1）は比較群内で中間的な値をとっている。第181図では男性に比べ、ヤッチのガマ、カンジン原、宮古など南西諸島集団がまとまっていて、本土集団と離れて分布しているが、上顔示数は男性と同様に比較群すべてが中上顔に分類される。



第180図　上顔高/頬骨弓幅(男性)

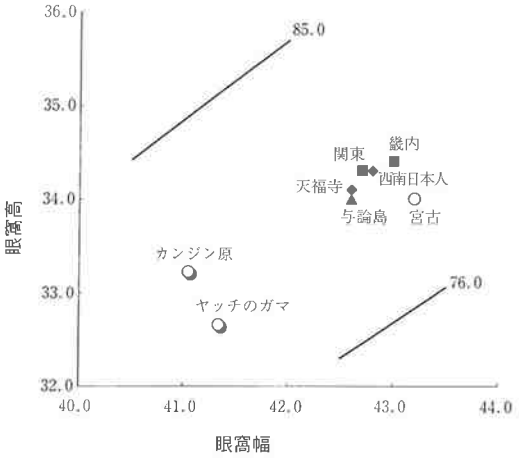


第181図　上顔高/頬骨弓幅(女性)

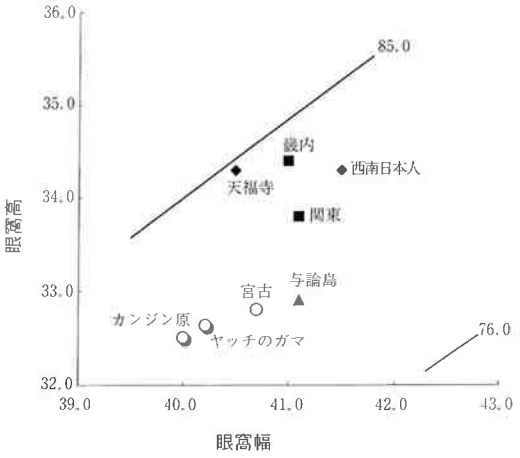
眼窩幅・眼窩高

男性の眼窩幅の平均値はヤッチのガマが41.3mm、カンジン原が41.1mm、眼窩高がヤッチのガマで32.7mm、カンジン原で33.2mmと、比較群中もっとも小さい。第182図ではヤッチのガマおよびカンジン原の絶対値が小さいため比較群から離れて位置しているが、眼窩示数ではすべての集団が中眼窩型に分類される。

女性では、眼窩幅の平均値がヤッチのガマで40.2mm、カンジン原で40.0mm、眼窩高がヤッチのガマで32.6mm、カンジン原で32.5mmと、男性と同様に比較群中もっとも小さな傾向を示している。第183図では、眼窩高が低いため、宮古、与論島がヤッチのガマ、カンジン原の近くに分布し、本土集団とやや離れた位置にある。眼窩示数は男性と同様に中眼窩型に属しているが、南西諸島集団でまとまる傾向にある。



第182図　眼窩幅/眼窩高(男性)

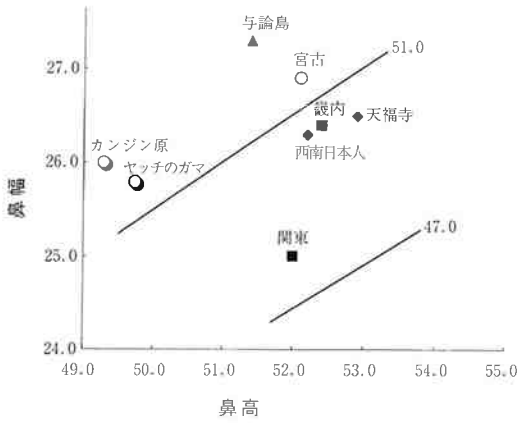


第183図　眼窩幅/眼窩高(女性)

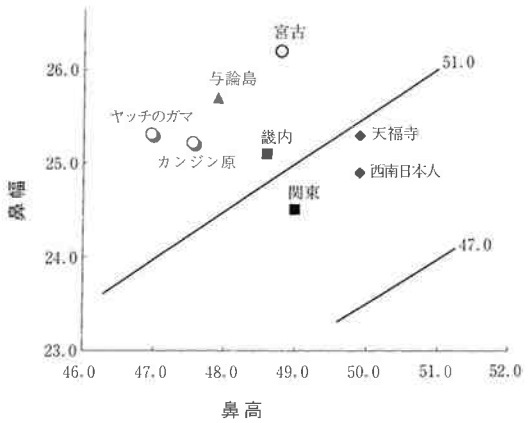
鼻幅・鼻高

男性は鼻幅がヤッチのガマで25.8mm、カンジン原で26.0mmと、他の集団より小さい傾向がみられたが、比較群中もっとも小さい関東現代人（25.0）より有意に大きかった。鼻高の平均値はヤッチのガマが49.7mm、カンジン原が49.3mmと、比較群すべてに対して有意に小さい。縦軸に鼻幅、横軸に鼻高をとった第184図では、ヤッチのガマ、カンジン原は鼻高がかなり小さいため離れて分布している。鼻示数では本土集団が中鼻型に分類されるが、ヤッチのガマとカンジン原は宮古、与論島と同じく広鼻型に分類される。

女性の鼻幅の平均値はヤッチのガマが25.3mm、カンジン原が25.2mmで、男性と比較してやや大きな傾向を示しているのに対して、鼻高はヤッチのガマが47.0mm、カンジン原が47.5mmと比較群中もっとも小さく、男性と同様の結果となった。第185図ではヤッチのガマ、カンジン原の鼻幅がやや大きいため、宮古、与論島と近いところに分布している。鼻示数では男性と同じく広鼻型に属する。



第184図　鼻幅/鼻高(男性)



第185図　鼻幅/鼻高(女性)

3）顔面平坦度

計測結果を比較群とともに第44・45表に示す。

第44表　顔面平坦度の比較（男性）

(mm)

計測項目	ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	沖縄本島 n	沖縄本島 Mean	先島 n	先島 Mean		奄美 n	奄美 Mean		福岡 n	福岡 Mean		佐賀 n	佐賀 Mean		関東現代人 n	関東現代人 Mean	
43(1) 前頭弦	25	96.8	18	94.9	53	96.0	61	97.5	☆	41	97.8	☆☆	46	96.1		17	96.4		86	97.8	☆☆
43c 垂線高	25	14.6	18	13.8	53	13.8	61	14.6		41	14.4		46	14.7		17	14.6		86	16.3	＊＊☆☆
43c:43(1) 平坦度示数	25	15.0	18	14.6	53	14.3	61	14.9		41	14.7		46	15.3		17	15.1		86	16.7	＊＊☆
57 鼻骨弦	27	8.5	15	8.9	52	8.3	61	7.8	☆	42	8.2		45	7.1	＊＊☆☆	16	7.6	☆	86	7.2	＊＊☆☆
57a 垂線高	27	2.3	15	2.7	52	2.4	61	2.6		42	2.4		45	2.5		16	2.5		86	2.7	
57a:57 平坦度示数	27	26.6	15	29.4	52	29.3	61	33.8	＊＊	42	28.8		45	33.7	＊＊	16	33.3	＊	86	38.7	＊＊☆☆
46b 頬上顎弦	23	101.8	14	98.5	38	98.8	＊ 52	99.5		35	98.2	＊	45	99.3		17	98.3	＊	83	97.9	＊＊
46c 垂線高	23	20.7	14	20.9	38	20.0	52	21.8		35	20.8		45	23.8	＊＊☆☆	17	22.7	＊＊	83	23.6	＊＊☆☆
46c:46b 平坦度示数	23	20.3	14	21.2	38	20.2	52	21.9	＊＊	35	21.2		45	24.0	＊＊☆☆	17	23.1	＊＊	83	24.1	＊＊☆☆

ヤッチのガマ　＊P<0.05　＊＊P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01

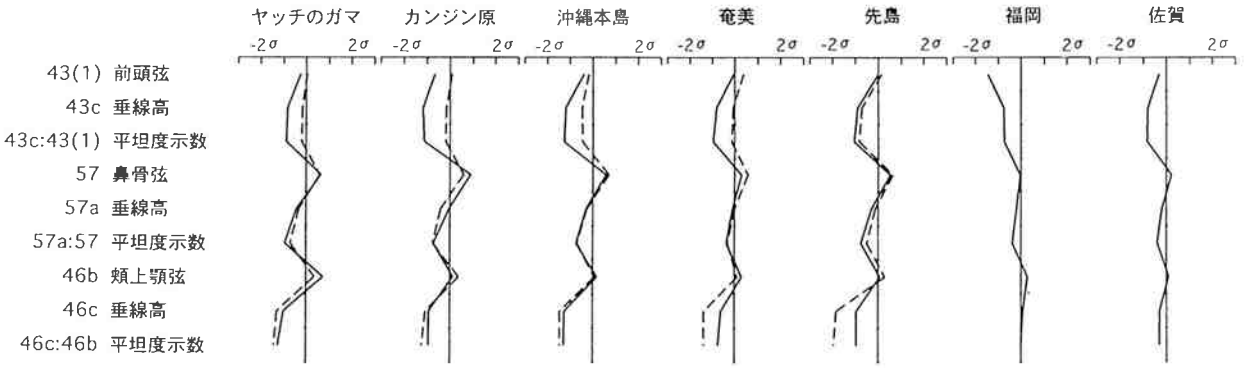
第45表　顔面平坦度の比較（女性）

(mm)

計測項目	ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	沖縄本島 n	沖縄本島 Mean	先島 n	先島 Mean	奄美 n	奄美 Mean		関東現代人 n	関東現代人 Mean	
43(1) 前頭弦	26	92.7	20	92.9	66	91.9	29	93.9	34	93.1		51	92.6	
43c 垂線高	26	13.9	20	13.9	66	13.2	29	14.1	34	12.7	＊☆	51	14.3	
43c:43(1) 平坦度示数	26	15.0	20	15.0	66	14.4	29	15.1	34	13.6	＊☆	51	15.4	
57 鼻骨弦	25	8.2	20	8.2	57	8.4	29	8.2	32	8.3		50	7.4	☆
57a 垂線高	25	2.0	20	1.9	57	2.0	29	2.2	32	2.1		50	2.2	
57a:57 平坦度示数	25	23.4	20	22.8	57	23.4	29	27.3	32	25.4		50	30.6	＊＊☆☆
46b 頬上顎弦	20	95.3	17	95.5	48	93.9	25	94.1	23	95.0		49	93.6	
46c 垂線高	20	19.4	17	19.9	48	19.0	25	19.2	23	18.1	☆	49	22.3	＊＊☆☆
46c:46b 平坦度示数	20	20.4	17	20.8	48	20.3	25	20.5	23	19.1		49	23.8	☆☆

ヤッチのガマ　＊P<0.05　＊＊P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01

顔面平坦度はヤッチのガマ、カンジン原の男女とも各示数値が全体的に小さく、平坦な傾向がみられた。関東現代人を基準とした偏差折線（第186図）をみると、福岡、佐賀といった本土集団は鼻骨弦以下の振れ幅が小さく、関東現代人と近い特徴を持つのに対し、ヤッチのガマやカンジン原を含む南西諸島集団は、脳頭蓋や顔面頭蓋の偏差折線と比較して振れ幅はやや大きくなり、鼻骨・頬上顎弦がプラスに振れ、各平坦度示数はマイナスに傾く平坦な顔立ちをもつ特徴がみられた。前頭弦は、福岡が小さい傾向をみせる以外は、各集団とも大きな差はみられず、特にヤッチのガマやカンジン原、沖縄本島、奄美の女性では基準線に近づき、関東現代人とほとんど差が無くなっている。以下に各示数値を詳しくみていく。

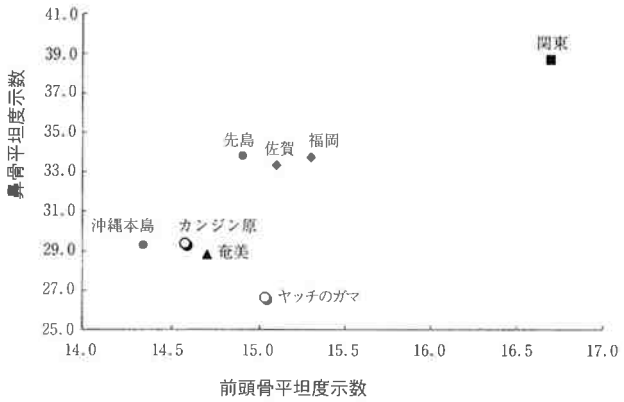


第186図　顔面平坦度偏差折線（関東現代人基準）

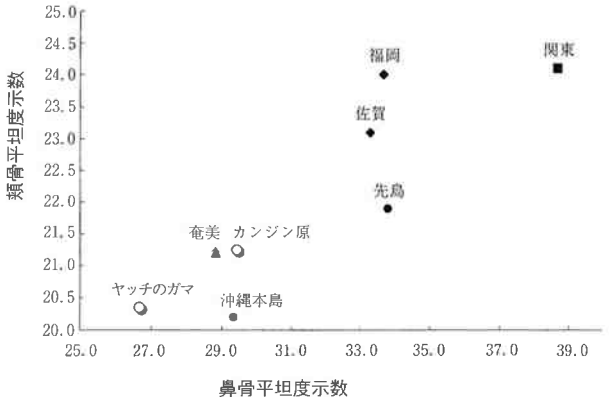
―― 男性　---- 女性

男性の前頭骨平坦度示数では、カンジン原（14.6）が沖縄本島（14.3）の次に小さく、ヤッチのガマ（15.0）は比較群内で中間的な値をとっている。関東現代人（16.7）はヤッチのガマ、カンジン原より有意に大きい。鼻骨平坦度示数、頬骨平坦度示数もヤッチのガマ、カンジン原は同様に小さい。とくにヤッチのガマは比較群中もっとも小さく、先島や関東現代人、福岡、佐賀より有意に小さかった。第187・188図ではヤッチのガマ、カンジン原が、各示数値が小さいため図の左下に位置し、沖縄本島や奄美の近くに分布している。先島はやや離れ福岡や佐賀に近い。関東現代人はかなり離れて位置している。

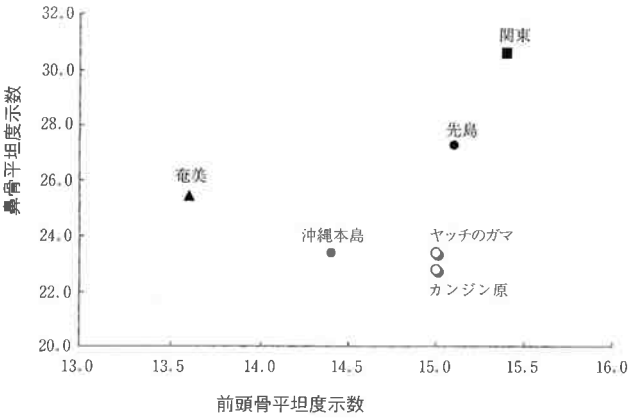
女性では、前頭骨平坦度示数と頬骨平坦度示数はヤッチのガマ、カンジン原ともにやや大きい傾向をみせ、奄美がもっとも小さい示数値をとる。鼻骨平坦度示数は逆に奄美（25.4）が大きい傾向をみせ、ヤッチのガマ（23.4）やカンジン原（22.8）は小さく、とくにカンジン原は比較群中もっとも小さい値をとる。第189・190図では男性と同様にヤッチのガマやカンジン原、沖縄本島がまとまり、先島と奄美が離れて分布している。



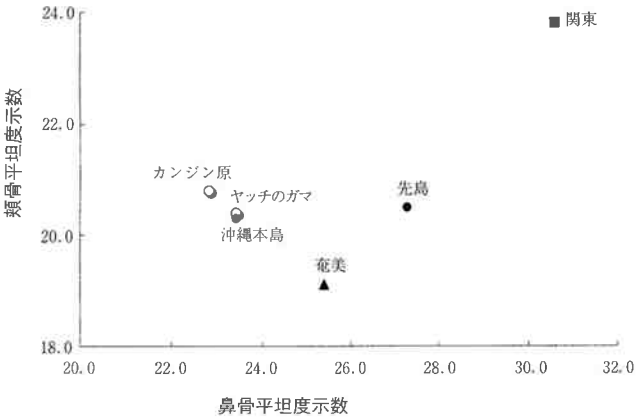
第187図　前頭骨平坦度示数/鼻骨平坦度示数(男性)



第188図　鼻骨平坦度示数/頬骨平坦度示数(男性)



第189図　前頭骨平坦度示数/鼻骨平坦度示数(女性)



第190図　鼻骨平坦度示数/頬骨平坦度示数(女性)

四肢骨

四肢骨の主要計測の結果を第54～59表に示す。

1）上肢骨

主要計測結果を比較群とともに第46・47表に示す。

上肢骨の主要計測値を用いて、畿内現代人を基準とした偏差折線を第191図に示す。ヤッチのガマの折線は、全体的にマイナスへ偏る傾向がみられた。上腕骨は骨幹部が小さく、特に最小径と最小周が小さい傾向を示した。カンジン原も全体的にマイナスに偏るが、振れ幅はヤッチのガマより小さい。尺骨の骨体横径は、ヤッチのガマを除く他の集団がプラスに振れ、特に与論島の女性ではその傾向が強くなっている。また、西南日本人は比較群中もっとも振れ幅が小さく、天福寺はほとんどプラスに偏っている。上肢骨全体では、ヤッチのガマとカンジン原は男女とも全体的に小さい値をとり、長径が短い傾向を示す。また、ヤッチのガマはカンジン原と比較して小さな値をとる傾向があるが、その差はわずかである。以下に各計測値と示数値の特徴を詳しくみていく。

第46表　上肢骨の比較（男性）

(mm)

計測項目				ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
上腕骨	1	上腕骨最大長	r	41	283.8	15	286.8	15	295.0	**	22	299.6	** ☆	106	297.7	** ☆	30	294.2	**
	5	中央最大径	r	54	21.6	26	22.3	15	23.5	** ☆	24	23.2	** ☆	106	22.5	**	30	22.3	*
	6	中央最小径	r	54	16.0	26	16.8	15	17.6	**	24	17.9	** ☆	106	17.5	** ☆☆	30	17.4	**
	7	骨体最小周	r	55	59.6	25	61.9	15	63.5	**	22	63.8	**	106	62.9	**	30	64.6	** ☆
	6/5	骨体横断示数	r	54	74.2	26	75.3	15	75.1		24	77.4	*	106	78.1	** ☆	30	78.1	** ☆
	7/1	長厚示数	r	41	20.9	15	21.5	15	21.5		17	21.1		106	21.1		30	21.9	**
尺骨	1	尺骨最大長	r	19	229.2	10	233.4	10	240.0	*	12	248.3		61	238.9	**	30	238.8	*
	3	骨体最小周	r	41	34.9	16	35.8	10	35.4		14	39.2		63	36.5	**	30	36.8	**
	11	骨体矢状径	r	55	12.3	21	12.9	10	13.0	*	18	12.9	**	63	13.1	**	30	12.8	
	12	骨体横径	r	55	15.6	21	16.4	10	16.9		18	17.4	** ☆	62	16.5	**	30	15.6	☆
	3/2	長厚示数	r	30	17.3	12	17.6	10	16.7		12	17.9		62	17.3		30	17.6	
	11/12	骨体横断示数	r	55	79.1	21	78.5	10	79.0		18	75.0	*	61	79.5		30	81.8	
橈骨	1	橈骨最大長	r	25	213.3	12	221.0	13	226.8	*	21	228.4	**	65	220.8	*	30	223.0	**
	3	骨体最小周	r	50	39.6	21	40.7	13	40.4		24	42.3	** ☆	65	40.8	*	30	42.3	** ☆
	4	骨体横径	r	52	15.5	21	16.4	13	16.0		26	17.3	** ☆	65	16.4	**	30	16.6	**
	5	骨体矢状径	r	52	11.5	21	11.8	13	11.2		26	12.5	** ☆	65	11.9	*	30	11.6	
	3/2	長厚示数	r	34	19.6	18	20.3	13	19.1		17	19.8		61	20.7	**	30	20.4	*
	5/4	骨体断面示数	r	52	74.5	21	72.0	13	69.2		26	72.2		60	71.5	**	30	70.3	**

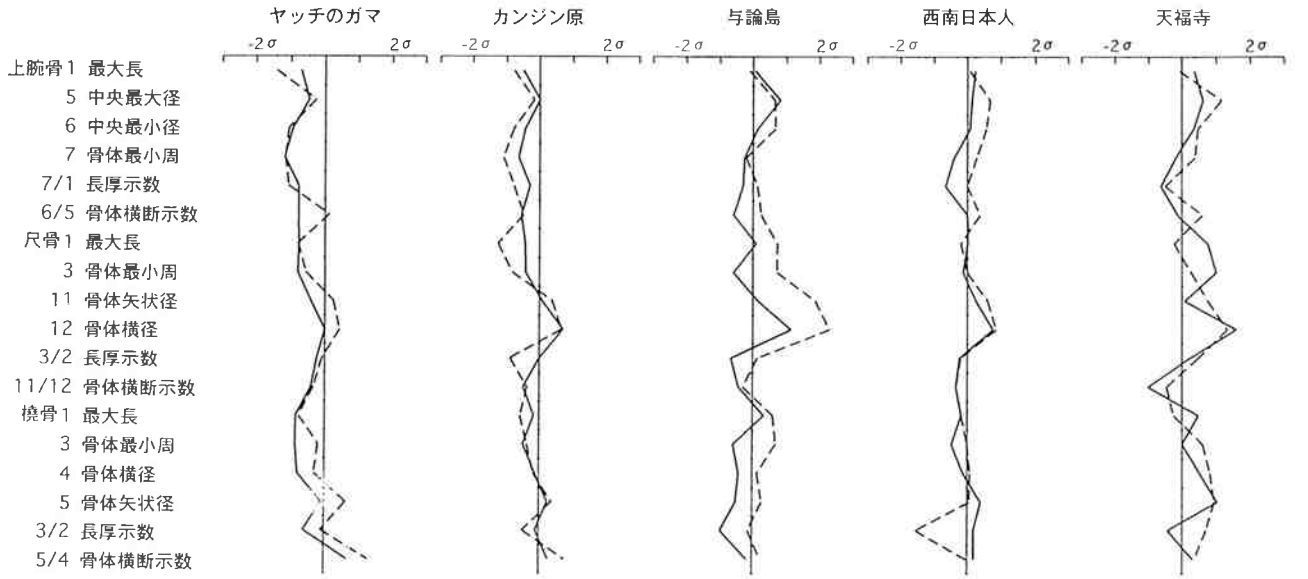
ヤッチのガマ　＊P<0.05　＊＊P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01

第47表　上肢骨の比較（女性）

(mm)

計測項目				ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
上腕骨	1	上腕骨最大長	r	27	258.4	17	265.4	17	272.4	**	20	272.9	**	35	274.4	** ☆	20	273.5	**
	5	中央最大径	r	44	19.3	28	19.4	17	20.1	*	24	20.5	** ☆	35	20.1	**	20	19.5	
	6	中央最小径	r	44	13.7	28	13.9	17	15.2	** ☆☆	24	15.0	** ☆☆	35	15.1	** ☆☆	20	14.6	** ☆
	7	骨体最小周	r	45	52.2	28	52.4	17	54.4	** ☆	22	55.8	** ☆☆	35	55.5	** ☆☆	20	54.9	** ☆☆
	6/5	骨体横断示数	r	44	71.0	28	72.2	17	75.9	** ☆	24	73.3		35	75.3	** ☆	20	75.3	**
	7/1	長厚示数	r	26	20.0	17	19.5	17	20.1		19	20.4	☆	35	20.2		20	19.9	
尺骨	1	尺骨最大長	r	10	210.6	5	206.2	10	224.9	* ☆☆	17	215.8		13	216.2		20	218.0	☆
	3	骨体最小周	r	31	31.3	17	30.8	10	33.8	** ☆☆	17	32.9	* ☆☆	13	32.4	☆	20	32.4	☆
	11	骨体矢状径	r	46	10.7	25	10.8	10	12.0	** ☆☆	22	11.1		13	11.0		20	10.5	
	12	骨体横径	r	46	13.8	25	14.0	10	15.5	** ☆☆	22	14.6	*	13	14.2		20	13.4	☆
	3/2	長厚示数	r	19	16.9	10	15.9	10	17.2	☆	15	17.6	☆☆	13	16.7		20	17.0	☆
	11/12	骨体横断示数	r	46	77.5	25	77.2	10	77.8		22	76.6		13	77.4		20	79.5	
橈骨	1	橈骨最大長	r	22	194.8	7	196.4	11	206.9	**	17	199.2		12	199.8		20	201.5	*
	3	骨体最小周	r	45	34.8	21	34.5	12	36.3	*	20	36.1	*	13	35.1		20	35.1	
	4	骨体横径	r	47	14.1	25	14.3	12	14.7	** ☆☆	21	15.5		13	14.6		20	14.5	
	5	骨体矢状径	r	47	10.1	25	9.9	12	9.8		21	10.4		13	9.7	*	20	9.6	*
	3/2	長厚示数	r	32	18.9	10	18.5	11	18.9		16	19.7	*	12	17.4	**	20	19.0	
	5/4	骨体断面示数	r	47	72.1	25	69.7	12	67.3		19	67.8	*	12	66.0	**	20	66.2	** ☆

ヤッチのガマ　＊P<0.05　＊＊P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01



第191図　上肢骨偏差グラフ（畿内現代人基準）

上腕骨

男性は、ヤッチのガマが最大長、中央最大幅、中央最小幅、最小周すべてにおいて比較群中もっとも小さい値をとり、カンジン原がその次に小さい。またヤッチのガマと比較群すべてとの間で有意差が見られた。骨体断面示数はヤッチのガマが74.2、カンジン原が75.3と、カンジン原がやや大きい。長厚示数ではヤッチのガマが20.9、カンジン原が21.5となり、カンジン原はヤッチのガマよりやや細長い傾向を示した。

女性は男性と同様にヤッチのガマの各計測値が比較群中もっとも小さく、カンジン原が次いで小さい値をとる。とくに中央最小幅と最小周は、ヤッチのガマ、カンジン原は比較群すべてに対して有意に小さかった。長厚示数ではカンジン原（19.5）がヤッチのガマ（20.0）と比較してやや示数値が小さく、細長い傾向を示す。

尺骨

男性では、ヤッチのガマがすべての計測値で、比較群中もっとも小さい。カンジン原は最小周で与論より、また、矢状径・横径で畿内現代人より大きい値をとるが、全体的には小さい値をとる傾向を示す。長厚示数はヤッチのガマが17.3、カンジン原が17.6、ヤッチのガマがカンジン原と比較してやや細長い傾向がみられた。

女性では、カンジン原は最大長と最小周が比較群中もっとも小さく、矢状径と横径はヤッチのガマや畿内現代人と近似した値を示している。断面示数はヤッチのガマが77.5、カンジン原が77.2と与論島（77.8）や西南日本人（77.4）に近い。長厚示数では、カンジン原は15.9と比較群中でもっとも小さく、細長い傾向にある。

橈骨

男性ではヤッチのガマの計測値は全体的に小さく、カンジン原は尺骨の場合と同様にやや大きい。横径ではヤッチのガマとカンジン原間に有意差がみられた。長厚示数はヤッチのガマが19.6、カンジン原が20.3で、カンジン原は西南日本人（20.7）、畿内現代人（20.4）に次いで大きかった。断面示数はヤッチのガマ（74.5）が比較群中でもっとも大きく、カンジン原（72.0）は天福寺（72.2）と西南日本人（71.5）の間に位置する。

女性は男性と同様に、ヤッチのガマの計測値は全体的に小さいが、矢状径（10.1）は大きく、比較群中天福寺（10.4）に次いで大きい。カンジン原も全体的に小さいが、矢状径（9.9）は大きい。そのため断面示数ではヤッチのガマで72.1、カンジン原で69.7と大きな値を示している。

2）下肢骨

主要計測結果を比較群とともに第48・49表に示す。

畿内現代人を基準とした下肢骨の偏差折線（第192図）では、与論島、西南日本人、および天福寺は上肢骨と比較してプラスへの振れが小さくなっているが、ヤッチのガマとカンジン原の男性は、わずかに折線がプラスへ偏っていて、畿内現代人との差が上肢骨より小さくなっている。最大長などの長径は、与論島、西南日本人、および天福寺の振れ幅が小さく、畿内現代人と同傾向を示すのに対し、ヤッチのガマとカンジン原はマイナスに振れ、そのため長厚示数が大きくなりプラスに振れているのがわかる。また、大腿骨の横径は、ほぼ基準線に重なるが、矢状径がマイナスに傾き、骨幹部の発達が弱い傾向を表している。しかし脛骨の断面示数では、ヤッチのガマとカンジン原の男女ともマイナスへ偏って横径に対して矢状径が発達する傾向をみせ、特に女性では与論島も含めて、その傾向が強い。全体として折線のパターンは与論島に近く、天福寺は畿内現代人とほとんど差が無い。ヤッチのガマ、カンジン原は男女ともに長径が短く、大腿骨の骨幹部では矢状径に対して相対的に横径が大きく、脛骨では逆に矢状径がやや大きくなっている。全体的には、上肢骨と同様に計測値が小さい。以下に各計測値と示数値の特徴を詳しくみていく。

第48表　下肢骨の比較（男性）

(mm)

計測項目				ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
大腿骨	1	大腿骨最大長	r	28	393.1	12	400.6	22	407.0	*	19	416.9	**☆	62	405.7	*	30	413.5	**
	2	自然位全長	r	23	388.3	12	395.4	22	403.4	**	12	412.8	*	62	402.5	**	30	410.1	**☆
	6	骨体中央矢状径	r	49	26.7	24	27.7	23	26.9		18	27.7		62	26.5		30	27.3	
	7	骨体中央横径	r	50	25.6	24	25.6	23	25.8		18	26.7		62	25.2		30	25.2	
	8	骨体中央周	r	48	83.2	24	84.3	23	84.0		17	85.2		61	82.1		30	83.1	
	9	骨体上横径	r	49	29.5	26	29.6	23	29.6		17	30.2		62	29.2		30	29.2	
	10	骨体上矢状径	r	49	23.4	26	24.3	23	24.4		17	26.2	**☆☆	62	24.2	*	30	25.2	**
	8/2	長厚示数	r	23	21.0	12	21.3	22	21.0		8	20.6		61	20.3	*☆☆	30	20.3	*☆☆
	6/7	骨体中央断面示数	r	49	104.5	24	108.3	23	104.2		17	103.4		61	105.8		30	107.8	
	10/9	骨体上断面示数	r	49	79.4	26	82.1	23	82.7		17	87.3	**☆	61	83.0	**	30	86.3	**☆
脛骨	1	脛骨全長	r	29	314.0	11	313.2	20	327.6	**☆☆	13	334.5	**☆☆	64	321.3		30	326.8	*☆
	1a	脛骨最大長	r	38	319.1	11	319.0	23	333.9	**☆☆	17	336.5	**☆☆	64	328.5	*☆	30	332.3	**☆
	8	中央最大径	r	35	28.0	11	28.5	24	28.6		13	29.6	*	64	27.4		30	28.5	
	8a	栄養孔最大径	r	48	31.6	24	32.6	24	33.8	**	17	33.1		60	30.5	**☆☆	30	32.8	*
	9	中央横径	r	34	20.1	10	20.7	24	21.1	*	13	22.0	**	64	21.0	**	30	21.0	
	9a	栄養孔位横径	r	48	22.1	24	23.3	24	24.4	**	17	23.9	**	61	23.8	**	30	23.8	**
	10	骨体中央周	r	34	76.0	10	76.0	24	78.8	*	13	79.5	*	61	78.0	*	30	78.7	*
	10a	栄養孔位周	r	48	84.4	24	87.5	24	90.1	**	16	88.9	*	61	88.5	**	30	89.3	**
	10b	骨体最小周	r	45	70.6	22	71.0	24	72.1		15	73.1		61	71.0		30	71.9	
	9/8	中央断面示数	r	34	72.4	10	76.1	24	74.0		13	74.5		64	77.1	**	30	74.2	
	9a/8a	脛示数	r	48	70.3	24	71.6	24	72.0		17	72.3		60	78.3	**☆☆	30	72.5	
	10b/1	長厚示数	r	26	22.3	11	22.5	20	21.7		11	22.6		61	22.2		30	21.9	
腓骨	1	腓骨最大長	r	17	308.2	4	316.8	15	324.5	**	10	330.0	*	59	322.3	**	30	326.7	**
	2	中央最大径	r	17	14.2	4	15.0	15	14.7		11	14.2		61	14.9		30	14.1	
	3	中央最小径	r	17	10.3	4	10.8	15	10.3		11	10.9		61	10.3		30	10.3	
	4	中央周	r	17	40.7	4	42.5	15	43.8	*	13	41.2		61	42.8		30	41.5	
	4a	最小周	r	41	33.6	17	34.9	15	36.6	**	12	35.5	*	61	35.9	**	30	35.0	*
	3/2	中央断面示数	r	17	72.7	4	72.1	15	70.1		11	77.1		61	69.8		30	74.1	
	4a/1	長厚示数	r	17	10.9	4	11.4	15	11.3		9	10.8		59	11.2		30	10.7	

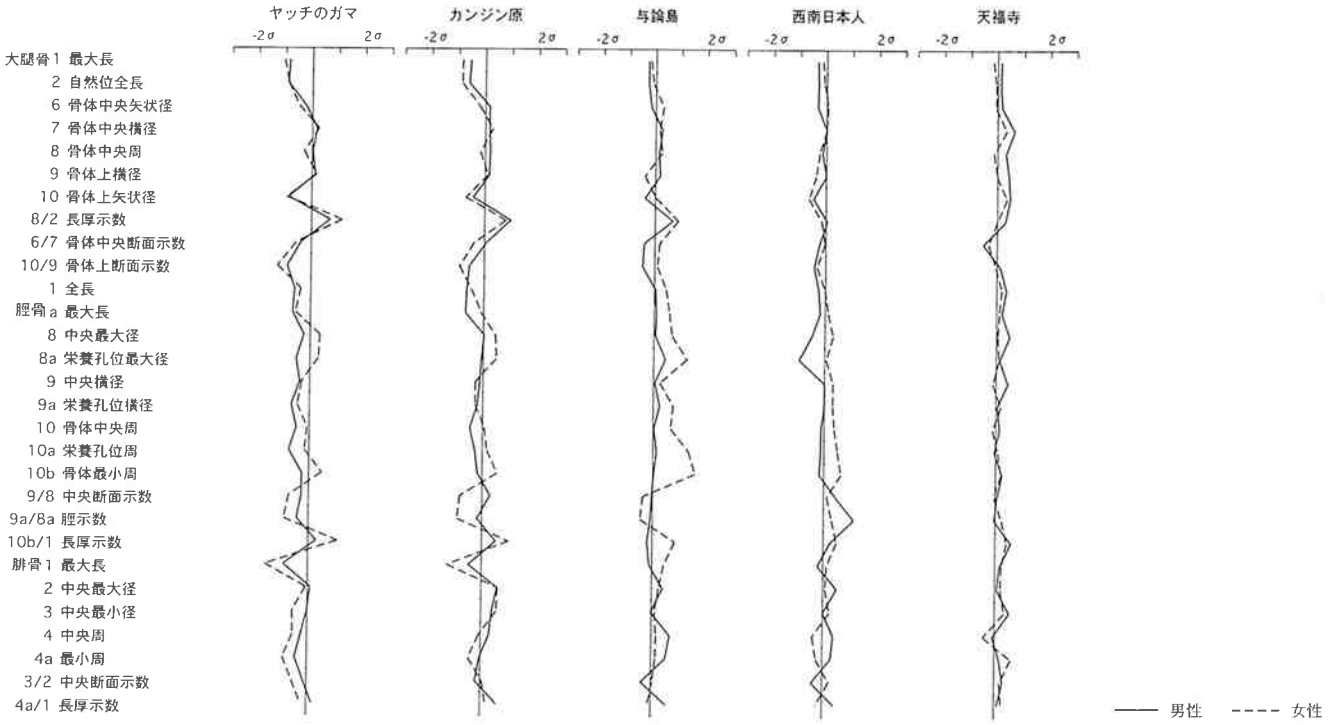
ヤッチのガマ　*P<0.05　**P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01

第49表　下肢骨の比較（女性）

(mm)

計測項目				ヤッチのガマ n	ヤッチのガマ Mean	カンジン原 n	カンジン原 Mean	与論島 n	与論島 Mean		天福寺 n	天福寺 Mean		西南日本人 n	西南日本人 Mean		畿内現代人 n	畿内現代人 Mean	
大腿骨	1	大腿骨最大長	r	21	361.9	10	365.8	10	378.9	*	13	379.4	*	13	379.8	*	20	382.8	**
	2	自然位全長	r	16	359.9	8	360.5	9	375.7		11	376.2	*	13	375.9	*	20	377.4	**
	6	骨体中央矢状径	r	39	22.6	23	23.1	12	24.0	*	16	23.4		13	23.6		20	23.5	
	7	骨体中央横径	r	39	23.7	23	23.7	12	23.5		16	23.9		13	23.2		20	23.2	
	8	骨体中央周	r	39	73.3	23	73.8	12	76.0	*	17	74.0		13	73.4		20	74.7	
	9	骨体上横径	r	40	27.6	24	27.5	12	26.6		16	27.3		13	26.6		20	27.3	
	10	骨体上矢状径	r	39	20.7	24	21.1	12	22.3	**☆	16	22.9	**☆☆	13	21.2		20	22.3	**☆
	8/2	長厚示数	r	16	20.8	8	20.4	11	20.5		11	19.7	*	13	19.6		20	19.7	**
	6/7	骨体中央断面示数	r	39	95.6	23	97.5	12	103.2	**☆	16	98.1		13	101.1	*	20	101.4	*
	10/9	骨体上断面示数	r	39	75.1	24	77.0	12	82.6	**☆☆	16	81.8	**	13	80.3	*	20	82.0	**☆☆
脛骨	1	脛骨全長	r	18	295.1	9	293.6	12	308.2	*	14	304.1		14	300.9		20	301.0	
	1a	脛骨最大長	r	22	294.7	12	303.2	11	315.7		15	306.9	*	14	307.2	*	20	305.0	
	8	中央最大径	r	22	24.6	8	24.8	13	25.2		16	24.0		14	24.5		20	23.9	
	8a	栄養孔最大径	r	43	27.8	20	28.2	12	29.7	**☆	17	27.4		14	27.3		20	27.2	
	9	中央横径	r	22	18.2	8	18.3	13	19.1		15	18.5		14	19.2		20	18.7	
	9a	栄養孔位横径	r	43	19.9	20	20.2	12	21.8	**☆☆	17	20.9	*	14	21.1	*	20	20.6	
	10	骨体中央周	r	21	67.6	8	68.1	13	70.4	*	15	67.4		14	69.3		20	67.9	
	10a	栄養孔位周	r	43	75.0	20	76.5	13	81.7	**☆☆	18	76.1		14	78.0		20	75.8	
	10b	骨体最小周	r	41	63.2	19	63.4	13	66.7	**☆☆	17	62.3		14	63.7		20	61.7	
	9/8	中央断面示数	r	22	74.5	8	74.1	13	76.2		15	77.7		14	78.5		20	78.0	*
	9a/8a	脛示数	r	43	71.7	20	71.7	12	73.7		17	77.1	*☆	14	77.4		20	76.0	**☆☆
	10b/1	長厚示数	r	18	21.9	6	21.8	12	21.6		13	21.1		14	21.2		20	20.6	**
腓骨	1	腓骨最大長	r	4	273.8	3	278.7	6	305.8		8	302.8	**	14	300.8	*	20	299.0	*
	2	中央最大径	r	3	13.0	3	14.0	8	13.5		10	13.4		14	13.2		20	13.1	
	3	中央最小径	r	3	8.3	3	9.7	8	9.1		10	9.4		14	9.3		20	9.0	
	4	中央周	r	3	36.7	3	38.3	8	39.3		9	37.0		13	37.2		20	38.6	
	4a	最小周	r	17	30.4	16	31.7	8	33.5		7	34.7	**☆☆	14	32.3	*	20	33.0	**
	3/2	中央断面示数	r	3	64.1	3	69.1	8	69.1		10	70.3		14	70.7		20	68.7	
	4a/1	長厚示数	r	3	10.8	3	11.3	6	11.0		7	11.4		14	10.8		20	11.1	

ヤッチのガマ　*P<0.05　**P<0.01
カンジン原　☆P<0.05　☆☆P<0.01



第192図　下肢骨偏差グラフ(畿内現代人基準)

大腿骨

男性の最大長はヤッチのガマが393.1mm、カンジン原が400.1mmと、比較群中もっとも小さく、ヤッチのガマはカンジン原を除くすべての集団に対して有意に小さかった。中央矢状径はカンジン原が27.7mmと、天福寺と並びもっとも大きい値をとり、ヤッチのガマは26.7mmで、西南日本人（26.5）と与論島（26.9）の間に位置する。横径はヤッチのガマ、カンジン原ともに25.6mmで、畿内現代人（25.2）や西南日本人（25.2）より大きいが、その差はわずかで有意差もみられなかった。中央断面示数はカンジン原が108.3ともっとも大きな値で、畿内現代人（107.8）と同じく大きな値をとっているが、ヤッチのガマは矢状径が小さいため104.5とやや小さい値になった。骨体上部の断面示数はヤッチのガマ（79.4）が小さく、矢状径に対して横径が発達する傾向がみられた。長厚示数はヤッチのガマ、カンジン原ともに全長が短いため大きな値を示すが、各集団間の差は小さい。

女性では、ヤッチのガマ、カンジン原の最大長は男性と同様に小さい傾向を示した。また矢状径が小さく、横径が大きいため、中央断面示数はヤッチのガマが95.6、カンジン原が97.5ともっとも小さく、骨幹部が矢状方向に偏平な傾向を示したが、有意差はみられなかった。骨体上断面示数では両集団とも小さく、男性と同様に矢状径に対して横径の発達がみられた。長厚示数は、ヤッチのガマとカンジン原の全長が小さいため、大きくなる傾向がみられた。

脛骨

男性ではヤッチのガマ、カンジン原は中央最大径と栄養孔最大径で、西南日本人より大きいが、他の項目では比較群中もっとも小さな値をとる。また栄養孔位横径と栄養孔位周では、カンジン原がヤッチのガマより有意に大きい。中央断面示数はカンジン原が76.1で西南日本人（77.1）に次いで扁平性が弱いが、ヤッチのガマ（72.4）は比較群中もっとも小さな値をとる。脛示数はヤッチのガマ（70.3）、カンジン原（71.6）であり、脛骨の扁平性はみとめられない。長厚示数ではヤッチのガマ（22.3）、カンジン原（22.5）とも全長が短い傾向があるため高い値を示し、頑丈性がやや強い結果となった。

女性の脛骨は男性と同様に長径は短く、矢状径が大きい傾向をみせるが、カンジン原は各計測値の観察例がやや少なく、比較群中で目立った有意差は認められなかった。中央断面示数と脛示数はヤッチのガマ、カンジン原ともに横径に対して相対的に矢状径が発達する傾向がみられ、長厚示数も太く頑丈な傾向を示した。

腓骨

男性の最大長はヤッチのガマで308.2、カンジン原が316.8と、他の下肢骨同様小さい値をとる。特にヤッチの

ガマはカンジン原を除く集団との間で有意差がみられた。中央最大径、最小径はカンジン原が大きい傾向をみせるが、ヤッチのガマはやや小さい結果となった。中央断面示数はヤッチのガマ（72.7）、カンジン原（72.1）とも比較群中では中間的な値をとる。長厚示数はカンジン原が11.4で比較群中もっとも大きく、ヤッチのガマは10.9と比較群内で平均的な値をとる。

女性は全体的に観察例が少ないものの、ヤッチのガマがすべての計測値で比較群中もっとも小さく、カンジン原は最大長がヤッチのガマに次いで短く、最大径、最小径はもっとも大きい。

【身長の推定】

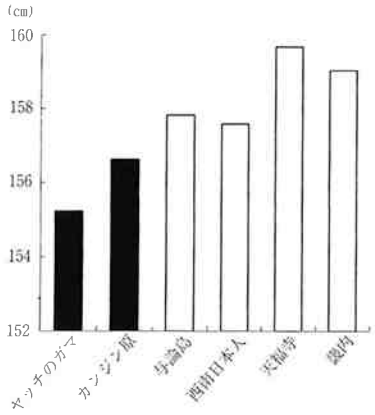
Peason（1899）の式をもとに大腿骨最大長から算出した推定身長を第50表に示す。

男性ではヤッチのガマが155.2cm、カンジン原が156.6cmで、カンジン原がやや高いが有意差はみられなかった。女性ではヤッチのガマが143.2cm、カンジン原が144.0cmとなり、二集団間でほとんど差はみられなかった。ここでヤッチのガマとカンジン原の身長の特徴を概観するため、他の集団の大腿骨最大長の平均値を利用して比較を行った。その結果男性（第193図）ではヤッチのガマがもっとも身長が低く、次いでカンジン原が低い。この低身長傾向は女性（第194図）でより顕著になり、他の集団が146cm以上なのに対し、ヤッチのガマとカンジン原はかなり低い。

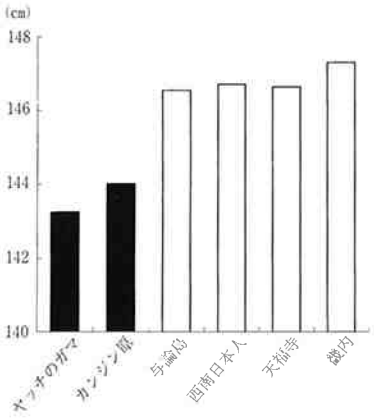
第50表　推定身長（Peasonの式より）

	男性			女性		
	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.
ヤッチのガマ	28	155.2	4.11	21	143.2	3.38
カンジン原	12	156.6	3.29	10	144.0	5.46
平　　均		155.9			154.7	

右の大腿骨最大長を使用。（cm）



第193図　大腿骨最大長による推定身長の比較（男性）



第194図　大腿骨最大長による推定身長の比較（女性）

【まとめ】

久米島に所在するヤッチのガマとカンジン原の古墓群は近世に属し、あわせて1000体以上もの人骨が出土した。その中から保存状態の良い成人骨の計測値を用いて、近～現代に属する日本列島集団との比較、検討を行い、ヤッチのガマ、カンジン原両集団の特徴を報告した。その結果、ヤッチのガマとカンジン原は全体的に類似した形態を示していて、以下のように要約することができる。

頭蓋

ヤッチのガマとカンジン原は全体的にサイズが小さいが、本土の一地方型の変異を越えない。その中で久米島の両集団の特徴として、やや短頭で、相対的に長径より幅径が大きい傾向が挙げられる。偏差折線では与論島が、久米島よりも、宮古と似た傾向をみせていた。また、久米島、宮古や与論島の南西諸島に共通する特徴としては、後頭弧長に対し相対的に頭頂弧長が大きい傾向を示していた。BENEVOLENSKA（1980）に従えば、南西諸島集団は北東アジア集団より東南アジアやヨーロッパ集団に共通する特徴といえる。今回比較群には加えてないが、男性に関して沖縄本島（許、1948）や喜界島（Tagaya and Ikeda、1976）でも同傾向があり、南方独自の形質的特徴が残存していた可能性もあり、今後の課題としたい。

四肢骨

上肢骨は頭蓋骨と同様に全体的なサイズが小さく、長径が短い傾向を示す。また骨幹部では上腕骨に幾分横径に対して矢状径が大きい傾向がみられるが、全体的には細く頑丈性が弱い。尺骨に関してはカンジン原が与論島や西南日本人、天福寺と類似してやや大きな傾向を示す。橈骨ではヤッチのガマが細く扁平性が弱い傾向を示す以外は、比較群間で大きな差はみられなかった。下肢ではカンジン原の男性が、大腿骨の骨幹部が他の集団とほとんど差がみられなかったが、ヤッチのガマの男女とカンジン原の女性はともに骨幹部の発達が弱い傾向がみられた。それに対して脛骨はやや横径に対して矢状方向の発達がみられたが、扁平性はみとめられなかった。Peasonの推定式により求めた身長は、男性ではヤッチのガマが155.2cm、カンジン原が156.6cm、女性ではヤッチのガマが143.2cm、カンジン原が144.0cmとなり、かなり低身である。

久米島は、グスク時代には琉球・中国間の海上交通において寄港地のひとつとして重要な位置を占め、沖縄本島に地理的に近いため、人々の往来も盛んであったと考えられている（沖縄県立博物館編、1996）。また、南西諸島では比較的小さな島ながら、グスクなどの遺跡が数多く所在していることでも知られ、文化的にも歴史的にも興味深い島となっている。今後は、南西諸島の比較集団を増やし、詳しい地域差や時代差を検討していきたい。

謝辞

ヤッチのガマ、カンジン原古墓群から出土した人骨の研究と執筆の機会を与えてくださった、沖縄県教育委員会の皆様に心からの謝意を表します。

引用文献

阿部英世　1955：現代九州人大腿骨の人類学的研究，　人類学研究　2

Benevolenskaya YD　1980： The world distribution of the occipito-parietal ndex. In Recent Problems and New Methods in Anthropology. Nauka, Leningrad：pp. 70-90.

Dodo Y 1986：A Study of the facial flatness in several cranial series from East Asia and North America . Journal of Anthropological Society of Nippon. 94(1) pp81-93.

Dodo Y., Doi N., and Kondo O.　2000：Flatness of facial skeletons of Ryukyuans,　Anthropological Science, 108；pp.183-198.

Doi N., and Tanaka Y.,　1987：A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun Skull from Western Japan,　Journal of Anthropological Society of Nippon. 95(3)　：pp.325-343.

土肥直美,北条真子 1998：那覇市銘刈古墓群南（B.E）地区出土の人骨,銘苅古墓群（Ⅰ）那覇市文化財調査報告書第39集,那覇市教育委員会　pp.235-251.

平井　隆, 田幡丈夫　1928：現代日本人の人類学的研究　第4部　下肢骨の研究,人類学雑誌　43(4附,5附).

平田和生　1958：鹿児島県大島郡与論島島民の下肢骨の研究，　人類学研究　5（1-4）：pp.263-315.

平田直行　1957：頭蓋骨の性差に関する研究，　人類学研究　4（1-4）：pp.142-179.

広沢正彦　1959：奄美郡島与論島住民上肢骨の人類学的研究，　人類学研究　6（2）：pp.71-107.

許　鴻樑　　1948：琉球人頭骨の人類学的研究，　国立台湾大学解剖学研究室論文集2：pp227-330.

池田次郎　1974：沖縄・宮古島現代人頭骨の計測，　人類学雑誌　82（2）：pp.150-160.

鋳鍋勝登　1955：現代九州日本人下肢骨の人類学的研究，　人類学研究　2（1）：pp.1-41.

KNUSSMANN, R.,　1988：MALTIN/KNUSSMANN - Anthropoligie, Handbuch der Vergleichenden Biologie des　Menschen, Bd. I. Suttgart, Gustav Fischer Verlag.

菊池順正　1959：奄美郡島与論島住民頭骨の人類学的研究，　人類学研究　6（2）：pp.196-228.

九州大学解剖学第2講座編　1988：日本民族・文化の生成2，　九州大学解剖学第2講座所蔵古人骨資料集成，　六興出版.

溝口静男　1957：現代九州人前腕骨の人類学的研究，　人類学研究　4（1-4）：pp.237-272.

宮本博人　1925：現代日本人人骨の人類学的研究　第2部　上肢骨の研究，　人類学雑誌　40（6,7,8）.

宮本博人　1924：現代日本人人骨の人類学的研究　第1部　頭蓋骨の研究，　人類学雑誌　39（10-12）

森田　茂　1950：関東地方人頭蓋骨の人類学的研究，　慈恵医科大解剖学業績集　3：pp.1-59.

中橋孝博　1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨，人類誌，95(1)：pp89-106.
大山秀高　1956：鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究，　人類学研究3　(3-4)　：pp.92—130.
沖縄県立博物館編　1996：特別展「大久米島展」～しぜん・ひと・もの～，　沖縄県立博物館.
沖縄県地域史協議会編　1989：シンポジウム　南島の墓 — 沖縄の葬制・墓制，　(有) 沖縄出版，　沖縄.
Pearson K　1899：Mathematical contribution to the theory of evolution V. On the reconstrucion of the stature of prehistoric races. Philon. Trans. R. Lon., Ser.A 192:pp169-244 .
専頭時義　1957：現代九州人上腕骨の人類学的研究，　人類学研究　4 (1-4)　：pp.273-301.
Tagaya A., and Ikeda J.,　1976：A Multivariate of the Cranial Measurements of the Ryukyu Islanders (Male) , Journal of Anthropological Society of Nippon. 84：pp.204-220.
Yamaguchi B　1973：Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania, Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo 16：pp.161-171.

第51表　脳頭蓋計測値

(mm)

	ヤッチのガマ						カンジン地区					
	男　性			女　性			男　性			女　性		
頭蓋主要計測項目	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.
1　脳頭蓋最大長	27	176.5	5.23	25	172.2	5.87	17	176.5	6.45	26	171.0	5.84
8　脳頭蓋最大幅	27	140.3	4.98	26	139.0	4.20	16	141.2	2.81	25	137.0	4.22
17　バジオン・ブレグマ高	23	135.8	4.96	20	132.4	5.64	10	138.2	5.09	18	131.1	3.80
8/1　頭蓋長幅示数	26	80.3	4.87	25	80.8	3.11	15	80.7	3.59	24	79.8	2.99
17/1　頭蓋長高示数	22	76.4	2.86	21	77.1	2.68	11	78.3	2.51	18	77.1	1.93
17/8　頭蓋幅高示数	23	96.4	4.04	21	95.1	3.18	11	98.0	4.28	18	95.6	3.17
5　頭蓋底長	22	99.7	4.59	20	94.9	4.51	10	99.4	4.90	20	95.5	4.99
9　最小前頭幅	28	93.7	4.04	28	89.8	4.69	19	92.8	5.10	27	90.5	4.06
9/8　横前頭頭頂示数	26	66.9	3.03	25	64.9	3.21	15	66.0	4.55	24	66.2	3.13
23　脳頭蓋水平周	23	514.8	9.89	23	500.1	14.17	13	508.9	12.13	23	498.0	14.22
24　横弦長	23	314.7	9.03	22	309.9	15.49	14	316.9	10.31	22	308.8	11.56
25　正中矢状弧長	18	368.3	11.72	21	360.0	19.80	12	370.8	12.03	16	359.1	12.74
26　正中前頭弧長	26	124.0	5.87	29	123.6	5.70	19	124.7	5.17	26	120.8	6.38
27　正中頭頂弧長	29	131.0	8.67	32	128.9	9.58	17	130.9	8.59	27	125.4	7.98
28　正中後頭弧長	20	114.8	6.04	20	111.8	7.11	12	111.9	6.60	16	108.3	4.87
27/26　矢状前頭頭頂示数	26	105.9	7.35	29	103.7	6.42	16	106.4	8.46	26	103.9	6.30
26/25　前頭矢状弧長示数	18	33.6	1.12	20	34.4	2.12	12	33.6	1.31	16	33.9	1.02
27/25　頭頂矢状弧長示数	18	35.2	1.62	20	35.8	2.86	12	36.2	1.74	16	35.7	1.42
28/25　後頭矢状弧長示数	18	31.1	1.34	19	31.1	1.90	12	30.2	1.25	16	30.2	1.40

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第52表　顔面頭蓋計測値

(mm)

	ヤッチのガマ						カンジン地区					
	男　性			女　性			男　性			女　性		
顔面頭蓋主要計測項目	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.	n	Mean	S.D.
40　顔長	15	100.5	3.11	12	93.8	2.89	9	95.4	＊ 5.46	13	93.0	5.00
45　頬骨弓幅	15	135.1	4.02	14	127.1	4.55	7	129.3	12.22	10	127.3	2.41
48　上顔高 (alv)	20	68.7	3.03	17	66.1	3.99	13	67.3	3.95	16	64.6	4.62
48/45　コルマン上顔示数(alv)	11	51.0	2.74	9	50.3	7.19	8	53.2	6.79	9	53.1	5.85
511　眼窩幅(l)	26	41.3	2.53	28	40.2	1.52	19	41.1	2.25	23	40.0	1.98
521　眼窩高(l)	26	32.7	1.98	27	32.6	1.74	18	33.2	1.40	22	32.5	1.68
52/51　眼窩示数(l)	26	79.2	6.43	27	81.7	4.45	18	80.8	3.78	22	81.6	4.49
54　鼻幅	28	25.8	1.55	29	25.3	1.79	17	26.0	1.73	23	25.2	1.31
55　鼻高	26	49.7	2.62	27	47.0	3.31	17	49.3	2.42	22	47.5	2.91
54/55　鼻示数	26	51.7	3.18	27	54.2	4.35	16	52.6	4.46	21	53.1	3.11
65　下顎関節突起幅	12	123.3	4.77	9	119.8	7.95	2	123.0	2.83	3	111.3	7.57
66　下顎角幅	13	103.3	7.97	13	92.7	5.74	5	101.6	5.32	3	95.0	3.00
68　下顎長	14	66.2	3.04	12	65.2	3.41	5	63.4	4.45	3	64.3	2.52
69　オトガイ高	15	31.1	3.20	14	30.1	2.73	6	33.2	1.47	5	30.2	6.76
69(3)1　下顎体厚(l)	16	14.0	1.37	15	13.1	1.39	13	12.9	＊ 1.44	14	12.6	1.28
701　下顎枝高(l)	18	60.9	3.66	18	54.7	4.80	6	60.7	2.58	4	56.3	4.03
711　下顎枝幅(l)	17	32.9	2.30	15	29.9	3.88	10	31.3	2.58	7	32.7	＊ 2.21
71/70　下顎枝示数(l)	16	54.5	4.63	15	55.1	7.63	6	53.1	5.17	4	59.7	4.13

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第53表　顔面平坦度計測値

(mm)

計測項目	ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D.	女性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 男性 n	Mean	S.D.	女性 n	Mean	S.D.
43(1)　前頭弦	25	96.8	3.98	26	92.7	3.47	18	94.9	3.88	20	92.9	2.92
43c　垂線高	25	14.6	2.45	26	13.9	2.15	18	13.8	3.31	20	13.9	1.76
43c:43(1)　平坦度示数	25	15.0	2.29	26	15.0	1.96	18	14.6	3.40	20	15.0	1.91
57　鼻骨弦	27	8.5	1.52	25	8.2	1.95	15	8.9	1.45	20	8.2	1.53
57a　垂線高	27	2.3	0.96	25	2.0	0.93	15	2.7	1.01	20	1.9	0.79
57a:57　平坦度示数	27	26.6	9.11	25	23.4	8.69	15	29.4	8.74	20	22.8	8.41
46b　頬上顎弦	23	101.8	6.04	20	95.3	4.69	14	98.5	4.80	17	95.5	4.20
46c　垂線高	23	20.7	2.27	20	19.4	2.14	14	20.9	3.20	17	19.9	2.81
46c:46b　平坦度示数	23	20.3	1.93	20	20.4	2.47	14	21.2	2.99	17	20.8	2.91

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第54表　上腕骨計測値

(mm)

計測項目		ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D	女性 n	Mean	S.D	カンジン地区 男性 n	Mean	S.D	女性 n	Mean	S.D
1　上腕骨最大長	r	41	283.8	15.57	27	258.4	14.73	15	286.8	14.26	17	265.4	15.49
	l	38	279.4	17.66	23	257.7	16.49	18	284.0	12.83	16	267.3	13.28
2　上腕骨全長	r	33	278.3	17.30	26	256.3	12.97	15	282.8	14.43	12	257.8	15.22
	l	36	276.0	17.60	23	254.6	16.19	16	281.4	13.25	16	263.1	12.88
3　上端幅	r	33	46.3	2.31	19	41.4	2.24	13	46.5	2.26	11	41.0	2.90
	l	29	46.2	1.83	18	40.9	2.18	17	46.6	2.09	12	41.6	1.78
4　下端幅	r	36	55.6	2.75	25	50.8	2.30	15	57.9	4.01	13	48.7 ＊	2.90
	l	40	57.0	3.75	21	49.5	2.29	17	57.5	3.30	22	49.6	2.06
5　中央最大径	r	54	21.6	1.50	44	19.3	1.40	26	22.3	1.38	28	19.4	1.70
	l	54	21.5	1.53	46	19.0	1.58	26	22.3 ＊	1.69	27	19.2	1.62
6　中央最小径	r	54	16.0	1.11	44	13.7	1.31	26	16.8 ＊＊	1.18	28	13.9	1.09
	l	54	16.1	1.15	46	13.6	1.33	26	16.6	1.30	27	13.5	1.16
7　骨体最小周	r	55	59.6	3.12	45	52.2	3.43	25	61.9 ＊	3.66	28	52.4	3.55
	l	52	59.4	3.21	44	51.4	3.52	25	61.4 ＊	3.65	28	51.4	3.30
7a　中央周	r	54	62.6	3.57	44	54.9	3.85	26	65.0 ＊＊	3.77	28	55.2	4.41
	l	54	62.3	3.86	46	54.1	3.88	26	64.4 ＊＊	4.02	27	54.0	4.27
8　頭周	r	24	132.1	7.63	16	117.4	3.81	9	135.1	5.09	11	116.4	6.10
	l	28	131.1	6.61	20	115.0	6.37	11	135.8 ＊	4.21	6	118.0	6.54
9　頭最大横径	r	26	40.3	2.17	22	35.6	1.33	11	41.1	1.38	11	35.0	1.90
	l	31	40.2	2.17	19	35.4	1.89	12	41.3 ＊	1.30	9	35.6	2.01
10　頭最大矢状径	r	39	43.3	2.67	23	37.5	2.33	14	43.9	1.99	17	38.4	2.23
	l	36	43.2	2.77	24	36.8	2.30	15	43.7	1.98	13	38.6 ＊	2.10
6/5　骨体横断示数	r	54	74.2	3.83	44	71.0	4.34	26	75.3	4.89	28	72.2	5.96
	l	54	75.3	4.46	46	71.5	5.37	26	74.7	6.09	27	70.8	6.49
7/1　長厚示数	r	41	20.9	1.19	26	20.0	0.84	15	21.5	1.20	17	19.5	1.13
	l	38	21.2	1.09	22	19.7	1.19	18	21.8	1.31	16	19.4	1.10
9/10　骨頭断面示数	r	25	93.9	3.71	19	93.9	3.56	11	93.9	3.26	12	92.5	4.01
	l	30	94.1	3.21	19	95.0	3.19	12	94.4	3.37	7	93.7	3.90

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第55表　尺骨計測値

(mm)

計測項目		ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D.	女性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 男性 n	Mean	S.D.	女性 n	Mean	S.D.
1　尺骨最大長	r	19	229.2	13.48	10	210.6	13.23	10	233.4	11.44	5	206.2	9.58
	l	25	234.0	10.46	11	212.2	11.76	4	237.5	15.15	5	212.6	8.02
2　尺骨機能長	r	31	201.5	12.26	21	185.6	10.39	14	204.7	9.60	10	191.1	11.90
	l	37	202.8	11.22	17	186.4	10.69	11	202.7	12.60	8	190.5	9.86
3　骨体最小周	r	41	34.9	2.47	31	31.3	2.93	16	35.8	2.76	17	30.8	2.08
	l	41	34.9	2.53	25	31.4	2.60	15	34.6	2.75	14	30.6	2.37
6　肘頭幅	r	21	23.2	1.30	21	20.8	1.55	14	24.5 ＊	1.51	14	20.9	1.17
	l	28	23.4	1.68	17	20.4	1.54	13	24.2	1.77	10	20.7	1.77
7　肘頭深	r	44	23.3	1.61	34	21.5	1.46	19	23.8	2.14	24	21.3	1.78
	l	47	23.0	1.97	28	20.9	1.30	21	23.3	1.38	20	21.2	2.48
8　肘頭高	r	46	18.8	1.62	40	17.0	1.46	20	19.3	1.13	24	16.9	1.23
	l	50	19.1	1.54	33	17.0	1.69	20	18.9	1.12	22	16.8	1.33
11　骨体矢状径	r	55	12.3	1.11	46	10.7	1.01	21	12.9	1.24	25	10.8	0.96
	l	53	12.4	1.08	42	10.7	0.92	22	12.9	1.02	23	10.3	0.78
12　骨体横径	r	55	15.6	1.33	46	13.8	1.30	21	16.4 ＊	1.29	25	14.0	1.08
	l	53	15.2	1.34	42	13.4	1.31	22	15.7	1.28	24	13.5	0.88
3/2　長厚示数	r	30	17.3	1.68	19	16.9	1.77	12	17.6	1.32	10	15.9	1.21
	l	36	17.2	1.61	14	16.8	1.45	11	16.8	1.13	8	16.1	1.67
7/6　肘頭深幅示数	r	21	100.9	6.21	21	104.5	8.56	14	96.5 ＊	6.20	14	104.1	7.58
	l	27	98.0	6.11	15	102.0	7.49	13	96.1	6.32	10	104.9	6.93
8/6　肘頭高幅示数	r	20	81.6	9.03	21	84.0	11.78	14	79.5	5.65	14	79.6	5.55
	l	28	82.0	7.61	16	85.9	13.75	13	78.9	5.54	10	80.4	6.78
11/12　骨体横断示数	r	55	79.1	7.24	46	77.5	6.27	21	78.5	7.69	25	77.2	4.74
	l	53	82.1	7.08	42	80.4	7.81	22	82.4	6.47	22	76.6 ＊	6.53

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第56表　橈骨計測値

(mm)

計測項目		ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D.	ヤッチのガマ 女性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 男性 n	Mean		S.D.	カンジン地区 女性 n	Mean	S.D.
1 橈骨最大長	r	25	213.3	13.41	22	194.8	11.08	12	221.0		11.94	7	196.4	11.73
	l	24	212.3	11.82	18	195.7	12.95	11	216.3		13.81	6	194.3	13.46
2 橈骨機能長	r	34	200.1	11.79	33	184.1	10.64	18	202.8		11.91	10	183.1	12.93
	l	36	200.7	11.15	27	183.4	11.45	18	201.8		11.44	8	184.5	12.68
3 骨体最小周	r	50	39.6	2.48	45	34.8	2.70	21	40.7		2.37	21	34.5	3.11
	l	47	39.6	2.66	38	34.9	2.65	20	40.0	*	2.86	18	34.6	2.33
4 骨体横径	r	52	15.5	1.43	47	14.1	1.24	21	16.4		1.36	25	14.3	1.24
	l	45	15.5	1.31	44	13.8	1.29	20	15.9		1.25	22	14.0	1.50
4a 骨体中央横径	r	24	14.3	1.46	22	12.9	1.13	12	15.2		1.11	8	13.4	1.60
	l	24	14.0	1.27	18	13.0	1.14	11	14.9		1.38	4	13.0	2.45
4(1) 骨頭横径	r	11	21.2	1.08	14	18.4	1.15	1	21.0			4	19.5	1.00
	l	11	20.9	0.94	10	18.5	0.97	4	21.5		1.00	4	18.8	0.50
4(2) 頚横径	r	45	12.4	1.13	41	10.6	0.99	17	13.3	*	1.31	23	11.1	1.10
	l	39	12.2	1.29	39	10.6	1.21	20	13.1	*	1.33	18	10.9	0.80
5 骨体矢状径	r	52	11.5	0.90	47	10.1	0.86	21	11.8		1.08	25	9.9	0.91
	l	46	11.5	0.84	44	10.0	0.73	21	11.7		1.11	22	10.3	0.88
5a 骨体中央矢状径	r	24	11.5	0.72	22	9.9	0.77	12	12.1		1.24	8	9.9	0.99
	l	24	11.6	0.88	18	10.1	0.94	11	11.9		1.14	4	10.5	1.00
5(1) 骨頭矢状径	r	12	22.2	1.11	10	18.5	1.58	3	23.3		1.15	7	19.3	0.95
	l	9	21.7	1.32	10	18.7	1.57	4	23.3	**	0.50	4	19.3	1.26
5(2) 頚矢状径	r	45	13.7	1.14	40	12.1	1.34	17	14.6	*	1.66	23	12.3	0.88
	l	39	14.0	1.09	39	12.6	1.35	18	14.4		1.46	20	12.9	0.79
5(3) 頭周	r	6	70.0	3.03	3	58.7	2.52	1	70.0			1	61.0	
	l	6	66.7	2.88	7	61.0	3.37	2	71.5			1	60.0	
5(5) 骨体中央周	r	24	40.8	3.19	20	36.7	2.62	11	43.3	*	3.00	6	36.2	3.06
	l	22	41.0	2.91	16	37.3	2.82	11	42.3		3.29	4	37.0	4.24
5(6) 下端幅	r	29	31.8	1.84	17	27.9	1.25	16	32.9		3.76	11	28.0	1.48
	l	22	31.6	1.97	17	28.2	2.19	13	32.2		1.59	11	27.5	1.51
3/2 長厚示数	r	34	19.6	1.42	32	18.9	1.28	18	20.3		1.16	10	18.5	1.88
	l	34	19.7	1.25	25	19.3	1.31	18	20.0		1.18	7	18.7	1.55
5/4 骨体断面示数	r	52	74.5	6.03	47	72.1	5.84	21	72.0		4.57	25	69.7	5.72
	l	45	74.5	6.49	44	72.8	6.16	20	73.4		5.75	22	73.5	5.46
5a/4a 骨体中央断面示数	r	24	80.8	7.91	22	77.0	6.66	11	79.4		5.07	8	74.1	4.82
	l	24	83.0	8.29	18	77.6	7.15	11	80.0		5.80	4	82.1	10.16

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第57表　大腿骨計測値

(mm)

計測項目		ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D.	ヤッチのガマ 女性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 男性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 女性 n	Mean	S.D.
1 大腿骨最大長	r	28	393.1	21.86	21	361.9	17.37	12	400.6	17.51	10	365.8	28.05
	l	29	396.3	21.54	17	361.5	17.58	14	402.7	16.50	5	381.0	20.42
2 自然位全長	r	23	388.3	19.60	16	359.9	17.54	12	395.4	17.16	8	360.5	30.70
	l	29	392.2	21.58	18	358.4	17.38	13	399.8	15.64	5	375.4	21.27
6 骨体中央矢状径	r	49	26.7	2.24	39	22.6	1.95	24	27.7	2.22	23	23.1	2.03
	l	48	27.1	2.44	42	22.8	1.73	23	27.7	2.29	20	23.3	1.87
7 骨体中央横径	r	50	25.6	1.50	39	23.7	1.52	24	25.6	1.67	23	23.7	1.25
	l	48	25.9	1.64	42	23.9	1.44	23	25.7	1.69	20	23.7	1.31
8 骨体中央周	r	48	83.2	5.09	39	73.3	4.43	24	84.3	4.88	23	73.8	4.27
	l	47	84.1	4.64	42	73.7	3.86	23	84.3	5.34	20	73.7	4.37
9 骨体上横径	r	49	29.5	1.94	40	27.6	1.82	26	29.6	1.79	24	27.5	1.32
	l	51	29.8	1.89	43	27.6	1.64	23	29.7	1.68	21	27.7	1.68
10 骨体上矢状径	r	49	23.4	2.07	39	20.7	1.90	26	24.3	2.16	24	21.1	1.60
	l	51	23.4	1.89	42	20.7	1.71	23	24.0	1.78	21	20.7	1.59
13 大腿骨上幅	r	31	87.4	5.38	23	79.5	4.03	17	89.3	5.00	16	81.3	4.06
	l	31	88.0	5.37	23	80.2	3.82	15	89.7	5.13	10	83.8	4.13
15 頚垂直径	r	43	31.7	2.36	33	27.7	1.64	22	32.1	1.97	21	27.9	1.95
	l	38	31.9	3.25	36	27.6	1.96	23	31.9	2.00	18	27.2	1.63
16 頚矢状径	r	44	27.7	3.61	33	23.2	1.99	22	27.1	2.44	21	23.6	2.04
	l	33	27.2	2.22	33	22.6	1.93	22	27.0	2.79	15	22.7	1.67
17 頚周	r	42	93.6	5.98	32	81.8	4.65	20	94.9	4.92	21	83.1	5.71
	l	33	94.3	5.67	31	81.6	5.27	21	95.1	5.23	15	82.1	5.25
18 頭垂直径	r	36	43.7	2.75	20	39.0	1.69	15	44.2	2.21	9	39.0	1.87
	l	29	43.8	2.62	18	39.4	1.38	8	45.4	1.92	9	38.6	1.67
19 頭横径	r	32	43.8	2.58	19	38.6	2.09	16	43.9	2.00	13	38.8	2.17
	l	26	44.1	2.37	19	38.7	1.48	11	44.2	2.36	10	38.8	1.75
20 頭周	r	24	138.5	7.68	11	125.7	5.55	8	142.6	6.55	6	125.8	6.59
	l	18	141.1	7.96	11	124.1	4.13	5	143.6	7.96	5	124.6	6.50
21 上顎幅	r	24	76.2	2.63	13	68.8	2.01	4	75.0	0.82	6	68.2	3.82
	l	21	76.1	3.32	11	68.8	1.47	7	75.7	2.56	6	65.2	6.74
8/2 長厚示数	r	23	21.0	1.10	16	20.8	1.08	12	21.3	0.93	8	20.4	1.28
	l	28	21.3	0.96	18	20.6	0.68	13	21.2	0.93	3	20.0	1.76
6/7 骨体中央断面示数	r	49	104.5	9.18	39	95.6	7.73	24	108.3	7.60	23	97.5	7.22
	l	48	105.0	10.36	42	95.5	7.39	23	107.8	8.36	20	98.5	5.85
10/9 骨体上断面示数	r	49	79.4	7.21	39	75.1	6.84	26	82.1	5.39	24	77.0	6.74
	l	51	78.8	7.07	42	75.0	6.32	23	80.7	4.50	21	74.8	5.36
(6+7)/2 頑丈示数	r	23	13.2	0.70	16	13.2	0.70	12	13.4	0.70	8	13.1	0.78
	l	29	13.4	0.56	18	13.1	0.53	13	13.4	0.58	3	12.5	1.04

＊P<0.05　＊＊P<0.01

第58表　脛骨計測値

(mm)

計測項目		ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D.	ヤッチのガマ 女性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 男性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 女性 n	Mean	S.D.
1 脛骨全長	r	29	314.0	19.99	18	295.1	15.25	11	313.2	10.84	9	293.6	20.71
	l	21	313.8	13.13	13	295.5	13.06	13	319.2	28.05	5	282.2	22.71
1a 脛骨最大長	r	38	319.1	19.04	22	294.7	15.43	11	319.0	12.02	12	303.2	21.31
	l	29	319.7	16.40	19	302.9	15.24	13	327.9	24.84	8	293.9	20.49
1b 脛骨長	r	39	309.8	18.76	24	286.6	15.76	12	306.8	12.62	11	290.9	18.45
	l	29	308.1	16.37	20	291.4	15.76	17	313.5	23.37	8	285.5	20.36
3 最大上端幅	r	20	71.5	3.55	11	66.3	2.65	8	72.4	1.85	7	64.0	4.86
	l	18	72.0	3.61	11	65.7	2.33	7	73.6	4.31	5	65.8	5.63
6 最大下端幅	r	21	45.9	1.76	13	40.9	1.80	11	46.2	3.03	8	41.3	3.45
	l	22	45.2	1.87	12	41.4	1.73	8	45.4	2.67	6	41.2	2.40
7 下端矢状径	r	34	37.5	1.91	20	33.2	1.85	16	38.2	3.02	13	33.1	1.38
	l	33	37.0	1.94	22	33.6	1.73	15	37.7	1.68	8	33.0	1.41
8 中央最大径	r	35	28.0	1.93	22	24.6	1.89	11	28.5	4.68	8	24.8	1.98
	l	29	28.3	2.05	16	24.8	2.02	12	27.6	2.43	6	24.3	1.37
8a 栄養孔最大径	r	48	31.6	2.08	43	27.8	2.22	24	32.6	2.60	20	28.2	1.95
	l	49	32.1	2.27	36	28.0	2.35	21	32.1	2.82	17	27.4	1.87
9 中央横径	r	34	20.1	0.99	22	18.2	1.15	10	20.7	1.57	8	18.3	1.16
	l	29	20.0	1.50	16	18.4	1.75	12	20.5	1.24	6	17.8	1.47
9a 栄養孔位横径	r	48	22.1	1.53	43	19.9	1.67	24	23.3 *	1.90	20	20.2	1.84
	l	49	22.2	1.77	37	19.7	1.58	21	22.8	1.83	18	19.7	1.61
10 骨体中央周	r	34	76.0	4.09	21	67.6	3.99	10	76.0	5.52	8	68.1	4.16
	l	29	76.8	4.84	14	68.2	4.68	12	76.6	5.21	6	66.3	4.03
10a 栄養孔位周	r	48	84.4	4.95	43	75.0	5.12	24	87.5 *	6.14	20	76.5	4.65
	l	48	85.3	5.43	36	75.4	5.10	21	85.8	6.13	17	74.8	4.22
10b 骨体最小周	r	45	70.6	3.44	41	63.2	3.86	22	71.0	4.06	19	63.4	3.39
	l	48	70.9	3.50	39	63.6	3.88	21	70.3	3.41	16	62.8	3.08
9/8 中央断面示数	r	34	72.4	6.00	22	74.5	6.27	10	76.1	5.54	8	74.1	6.68
	l	30	71.0	5.81	16	74.5	7.41	12	74.6	4.90	6	73.4	6.25
9a/8a 脛示数	r	48	70.3	4.69	43	71.7	5.86	24	71.6	4.90	20	71.7	5.24
	l	49	69.3	5.37	36	70.6	5.94	21	71.2	5.59	17	72.1	6.12
10b/1 長厚示数	r	26	22.3	1.21	18	21.9	0.94	11	22.5	1.23	6	21.8	1.24
	l	22	22.4	0.87	12	21.6	1.18	13	22.1	1.72	4	22.1	1.14

*P<0.05　**P<0.01

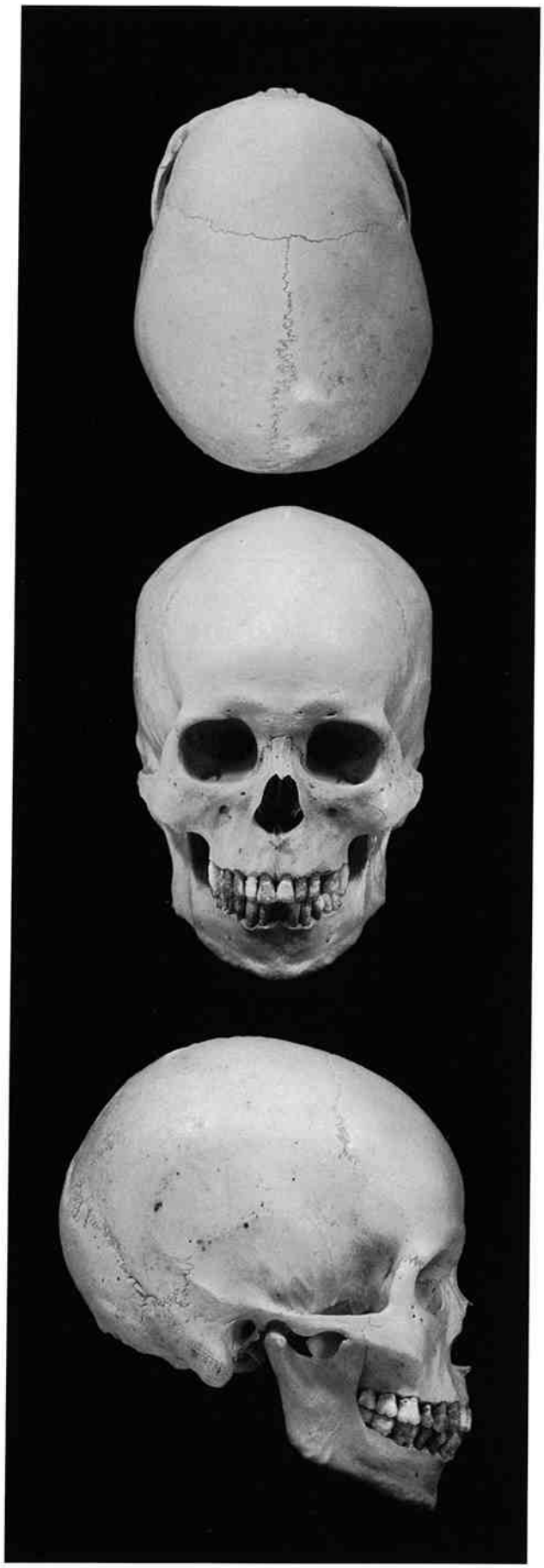
第59表　腓骨計測値

(mm)

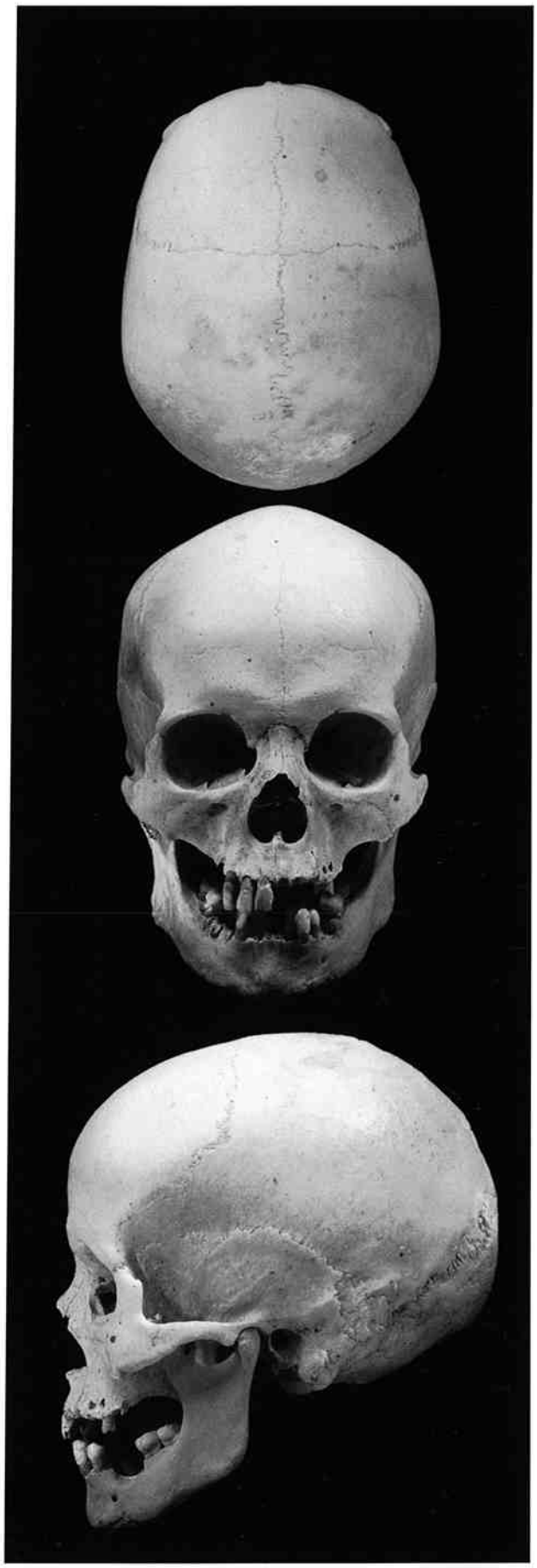
計測項目		ヤッチのガマ 男性 n	Mean	S.D.	ヤッチのガマ 女性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 男性 n	Mean	S.D.	カンジン地区 女性 n	Mean	S.D.
1 最大長	r	17	308.2	13.82	4	273.8	12.50	4	316.8	11.79	3	278.7	29.87
	l	12	312.5	15.31	6	286.3	13.81	5	312.8	19.02	3	274.7	24.83
2 中央最大径	r	17	14.2	1.60	3	13.0	1.00	4	15.0	2.00	3	14.0	1.00
	l	10	13.8	1.62	6	12.5	1.52	5	15.6	1.52	3	13.0	1.73
3 中央最小径	r	17	10.3	1.16	3	8.3	1.53	4	10.8	1.26	3	9.7	0.58
	l	10	10.1	1.10	6	8.7	0.82	5	11.0	1.58	3	9.3	0.58
4 中央周	r	17	40.7	4.04	3	36.7	4.16	4	42.5	5.20	3	38.3	2.08
	l	10	39.7	4.06	6	35.2	2.93	4	41.5	3.70	3	36.3	4.04
4a 最小周	r	41	33.6	2.61	17	30.4	2.53	17	34.9	2.26	16	31.7	3.05
	l	35	32.9	2.77	25	30.8	2.09	11	34.9	3.36	17	30.9	2.73
4(1) 上端幅	r	13	24.0	3.83	4	22.0	1.83	5	25.8	1.10	3	22.7	0.58
	l	13	24.8	2.64	6	21.7	2.07	2	24.0		3	22.3	0.58
4(1a) 上端矢状径	r	11	25.5	2.54	4	23.3	3.10	3	26.0	1.73	4	23.5	1.91
	l	9	24.4	2.83	4	22.3	0.50	1	24.0		0		
4(2) 下端幅	r	30	18.8	1.58	15	17.8	1.42	14	19.1	1.46	9	16.8	1.72
	l	33	19.3	1.74	16	17.6	1.31	12	19.0	1.48	13	17.2	1.21
4(2a) 下端矢状径	r	37	24.1	1.64	18	21.6	0.92	17	24.3	1.49	13	21.8	1.48
	l	33	24.1	2.13	18	21.9	1.02	15	23.6	1.59	13	21.3	1.49
4a' 下端最小周	r	39	35.3	2.19	25	32.1	2.36	22	36.1	3.24	14	32.0	2.66
	l	45	35.0	2.23	27	32.2	2.59	16	35.5	2.92	15	31.9	2.50
3/2 中央断面示数	r	17	72.7	7.41	3	64.1	11.10	4	72.1	7.63	3	69.1	2.35
	l	10	73.5	5.99	6	69.7	5.89	5	70.5	7.20	3	72.2	4.79
4a/1 長厚示数	r	17	10.9	0.87	3	10.8	1.39	4	11.4	0.59	3	11.3	0.49
	l	11	10.4	0.64	6	10.5	0.58	3	10.8	0.31	3	11.0	1.32

*P<0.05　**P<0.01

図　　版

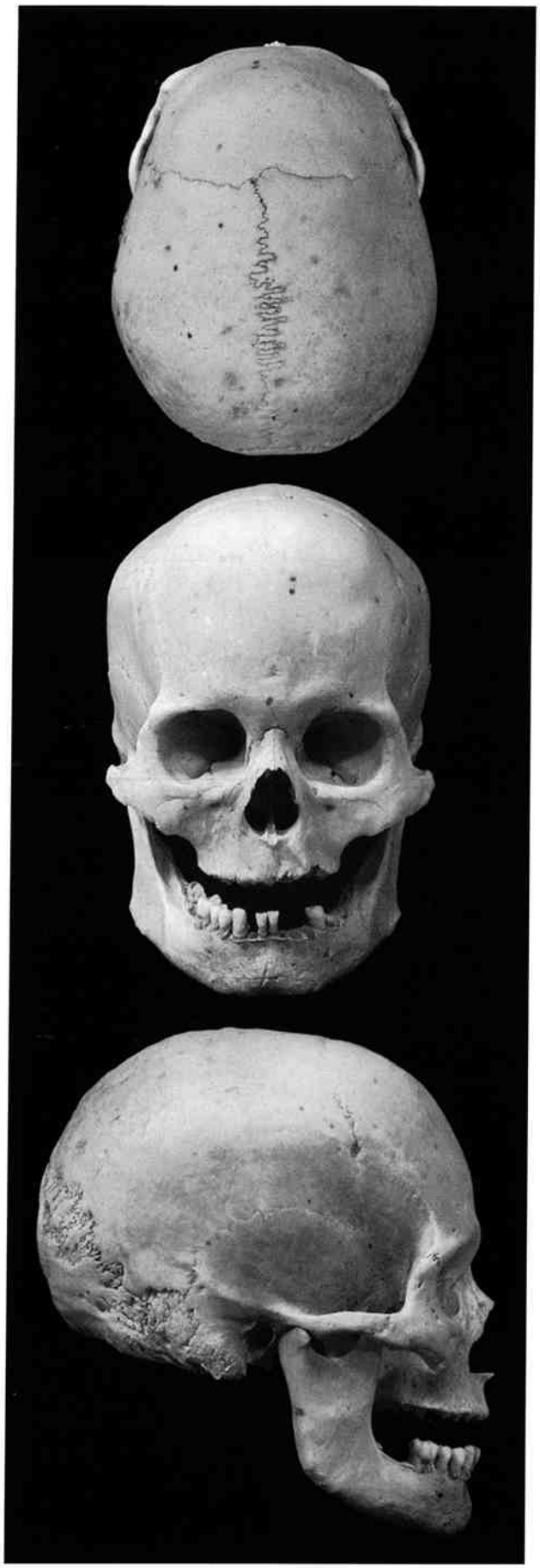


2号区画－2（♂・熟年）

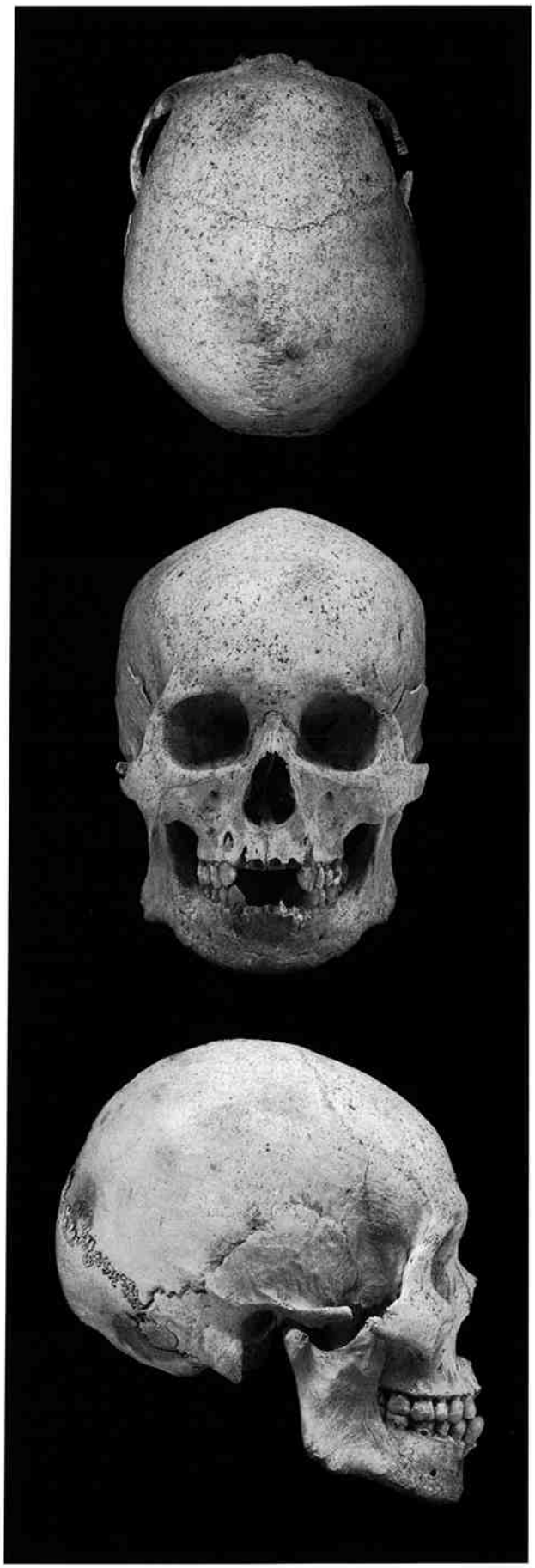


2号区画－5（♂・熟年）

図版92　人骨1

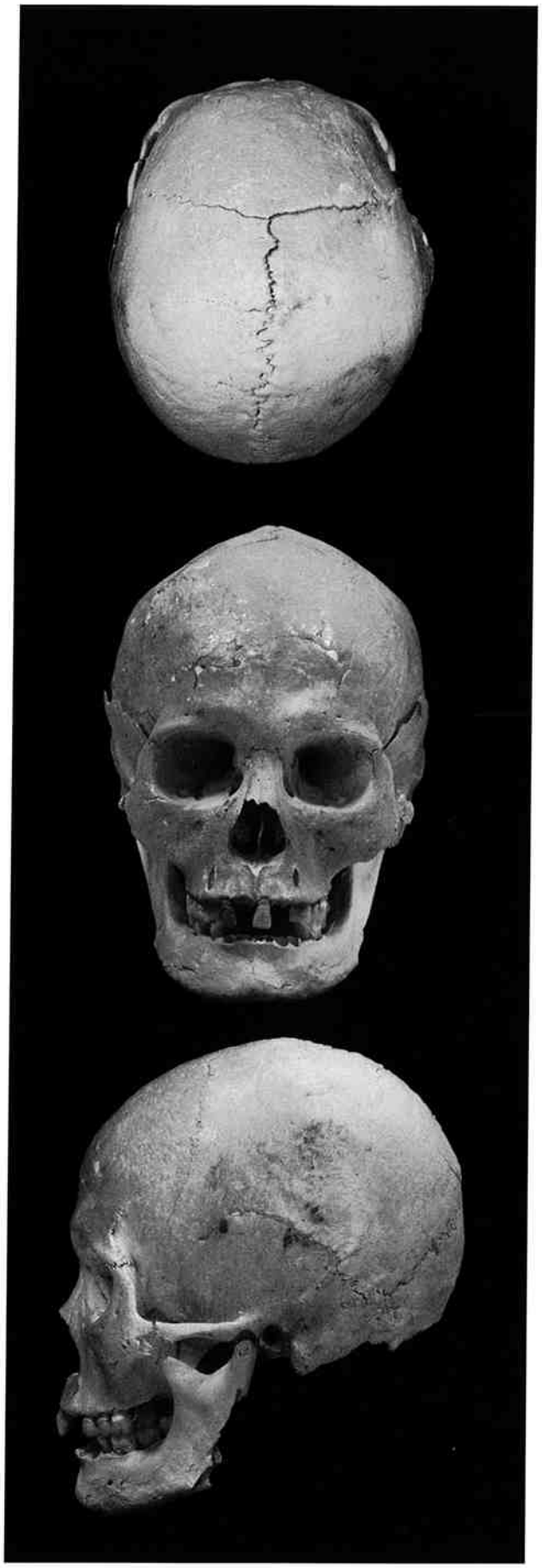


2号区画－30（♂・熟年）

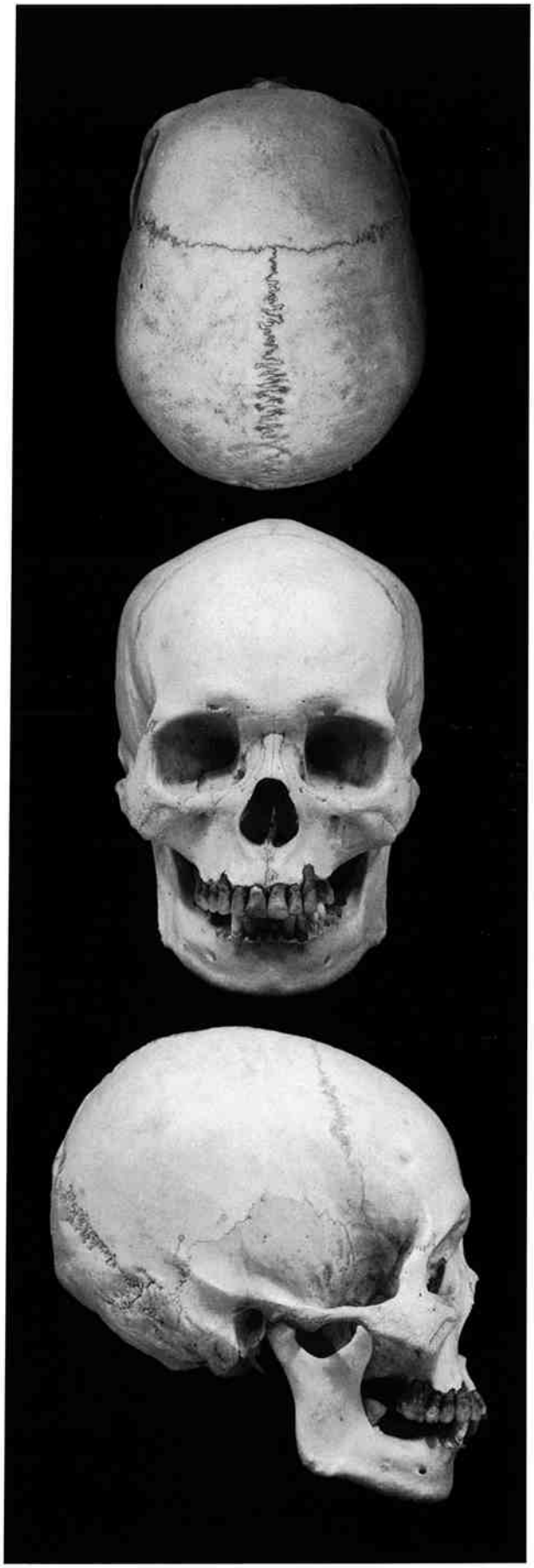


6号区画－6（♂・成年）

図版93　人骨2

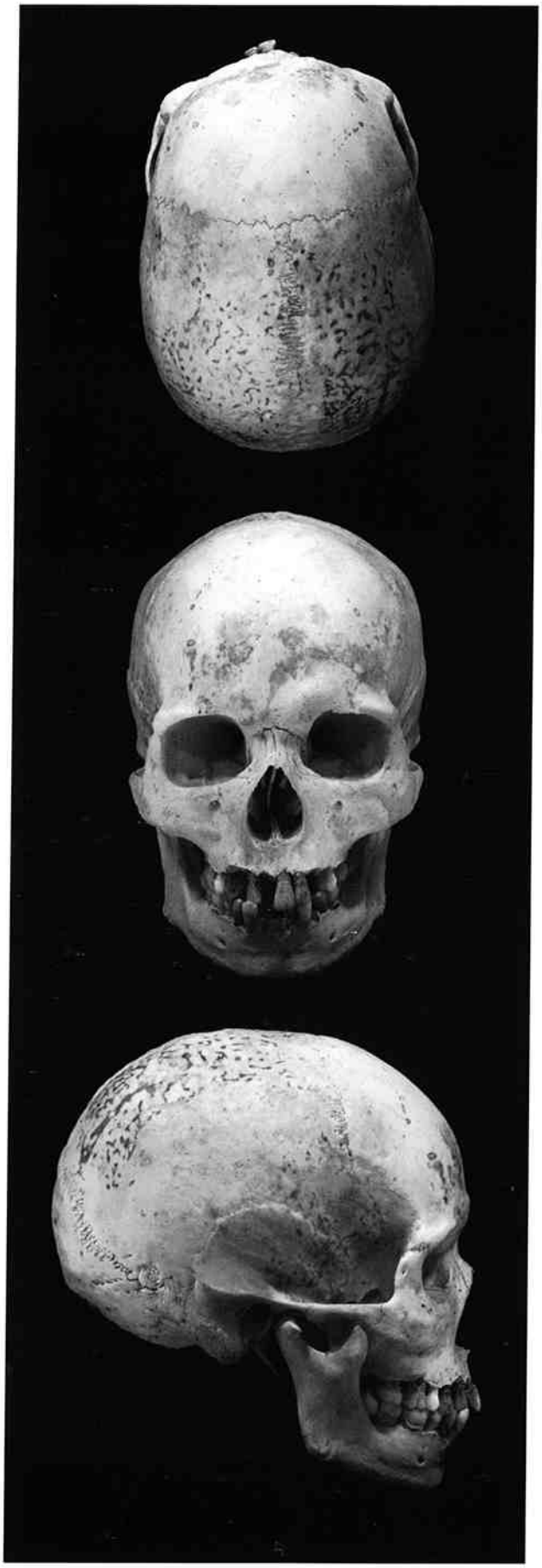


7号区画－12（♂・成～熟年）

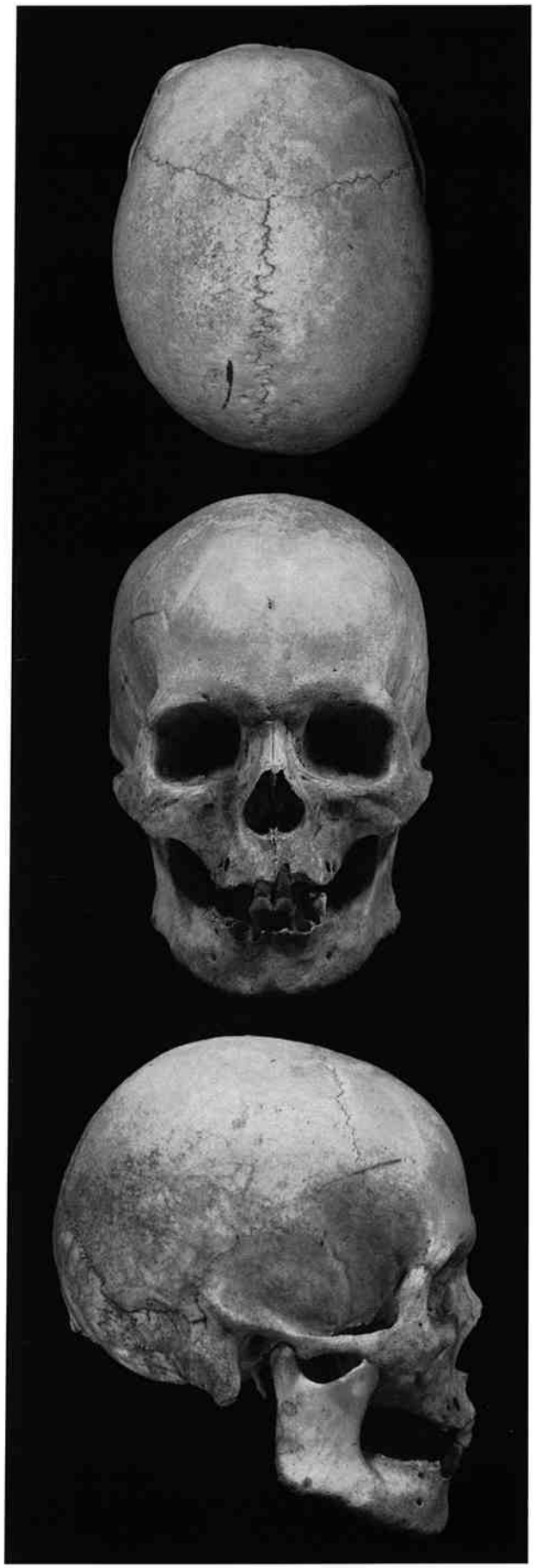


11号区画－5（♂・熟年）

図版94　人骨3

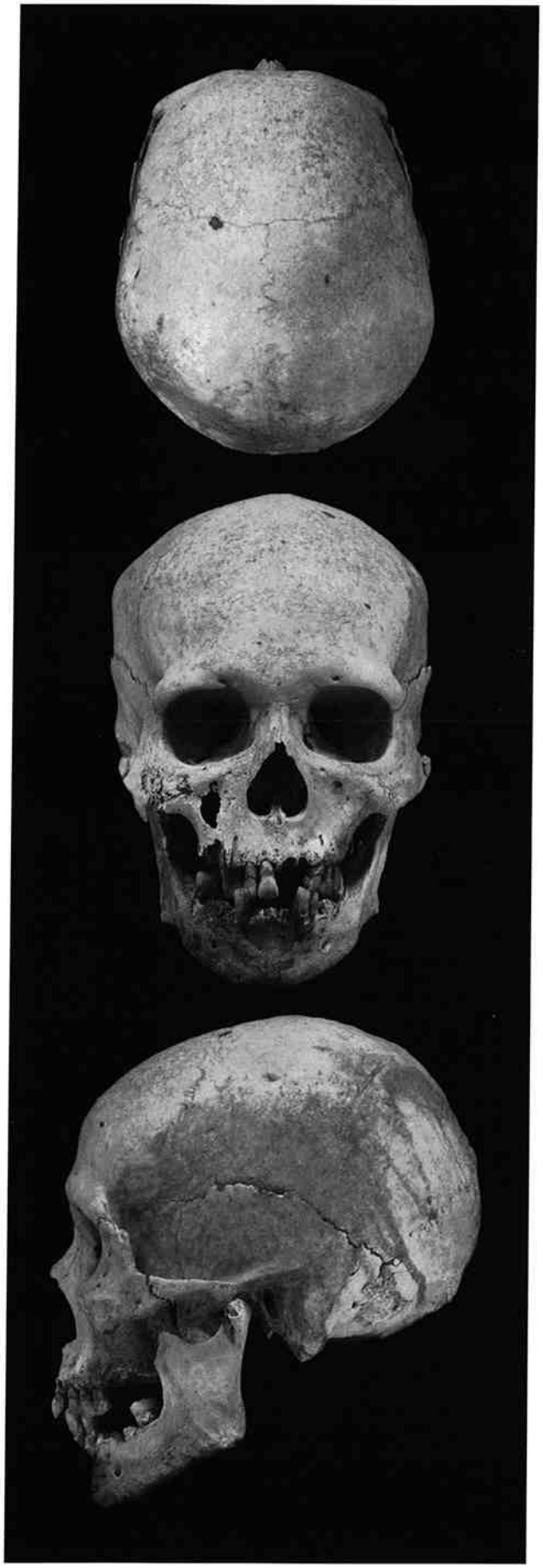


11号区画－15（♂・成年）

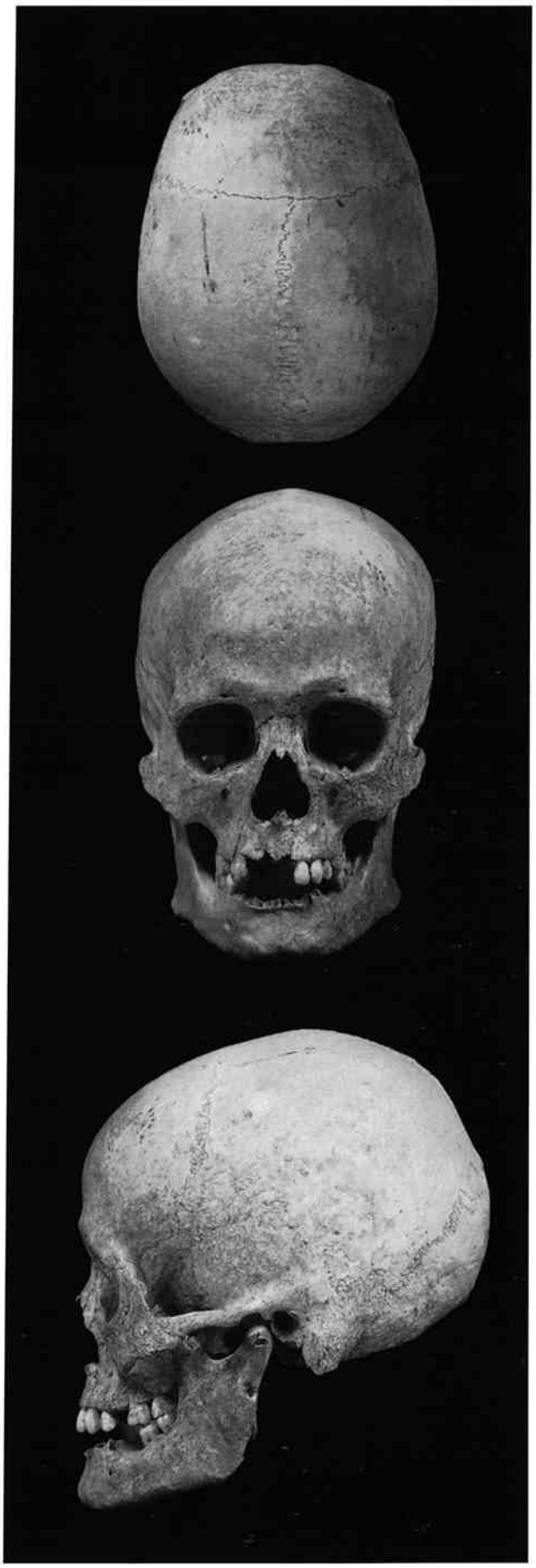


11号区画－33（♂・熟年）

図版95　人骨４

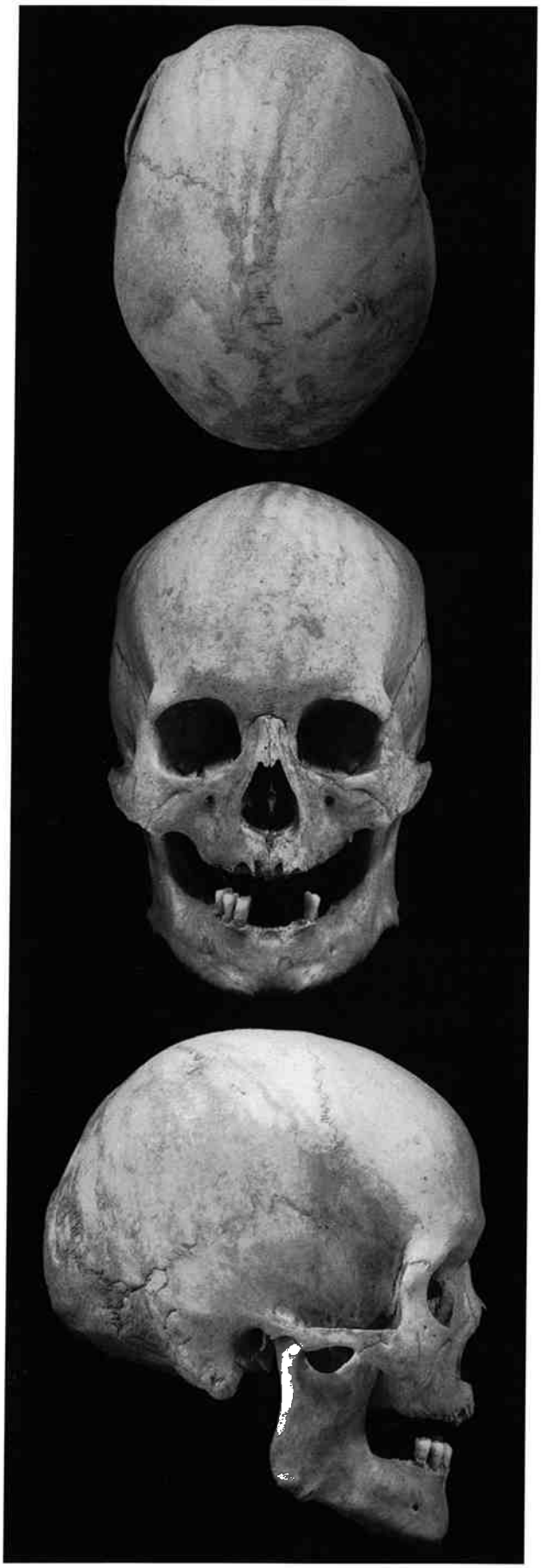


11号区画－34（♂・熟年）

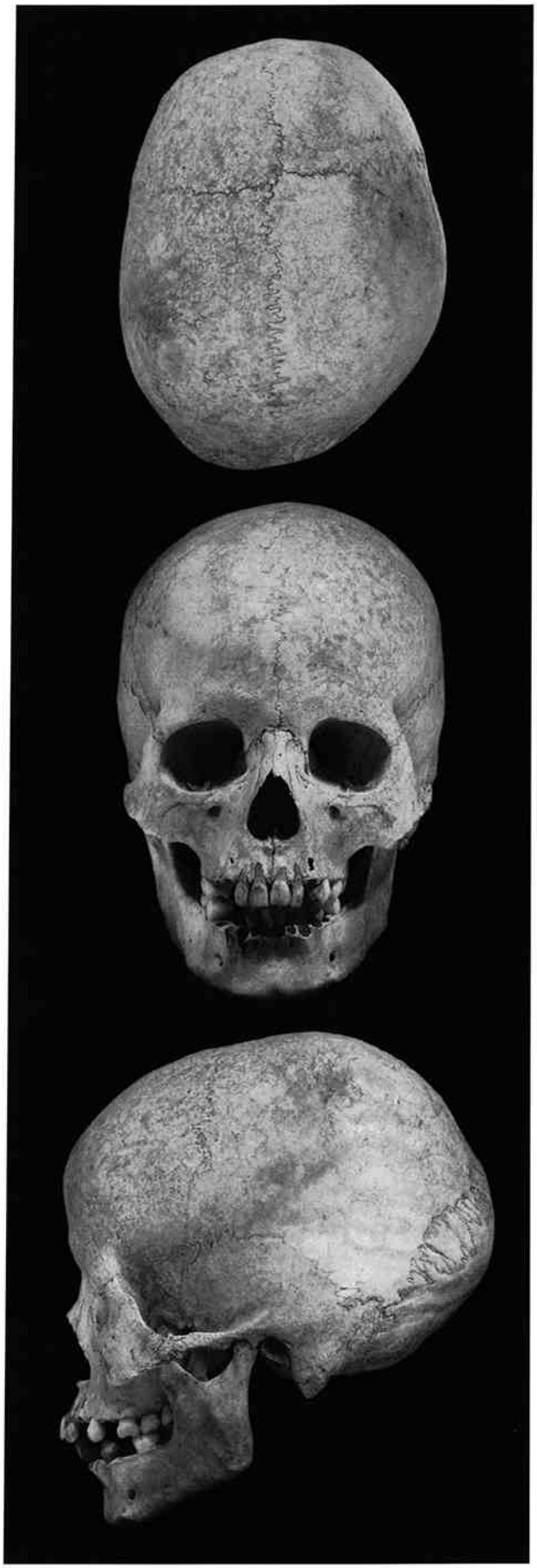


13号区画－９（♂・熟年）

図版96　人骨５

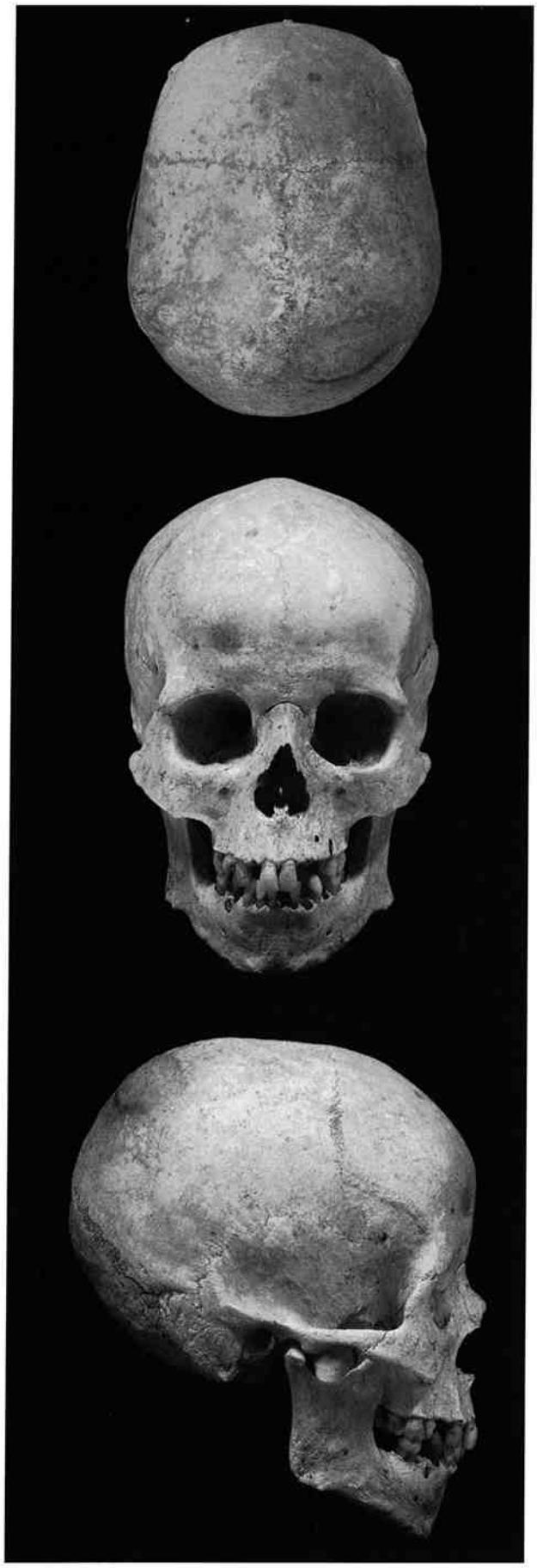


11号区画－42（♂・熟年）

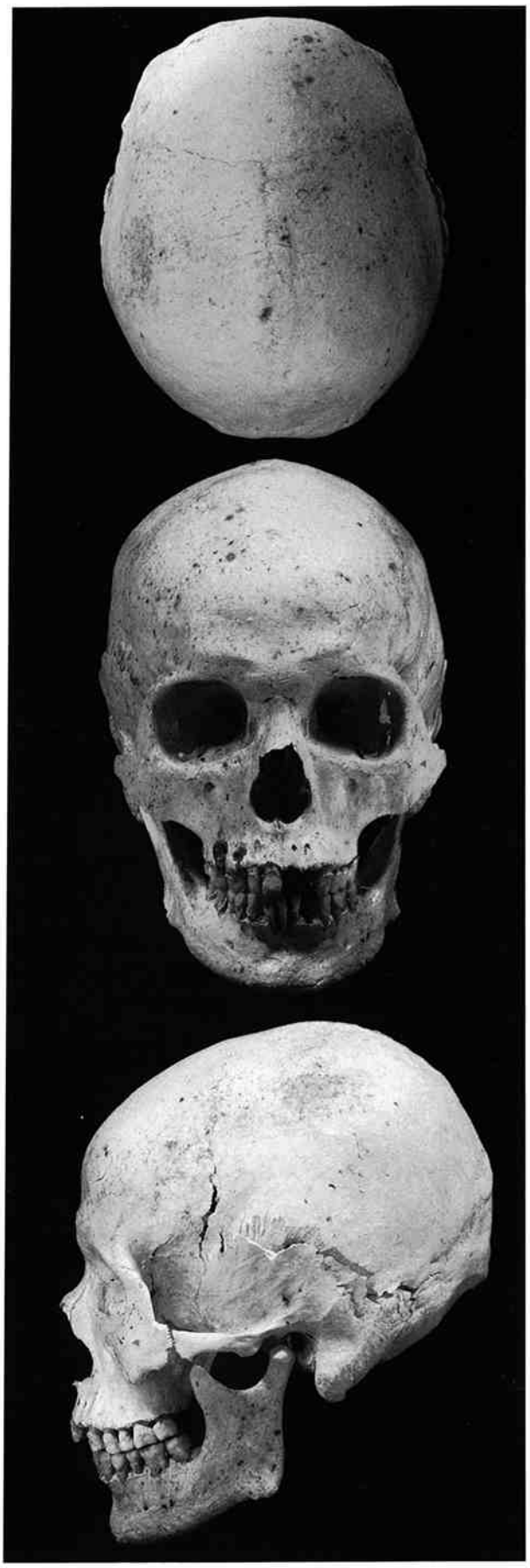


11号区画－42（♂・成年）

図版97　人骨６

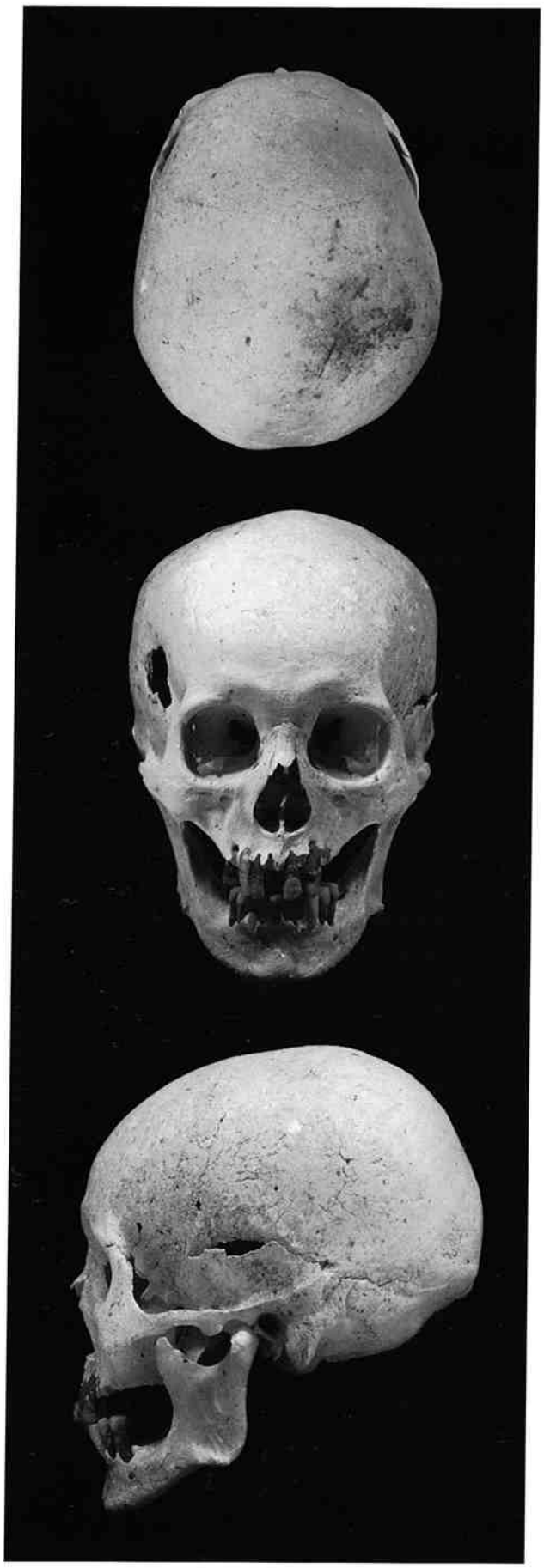


2号墓－13（♂・成年）

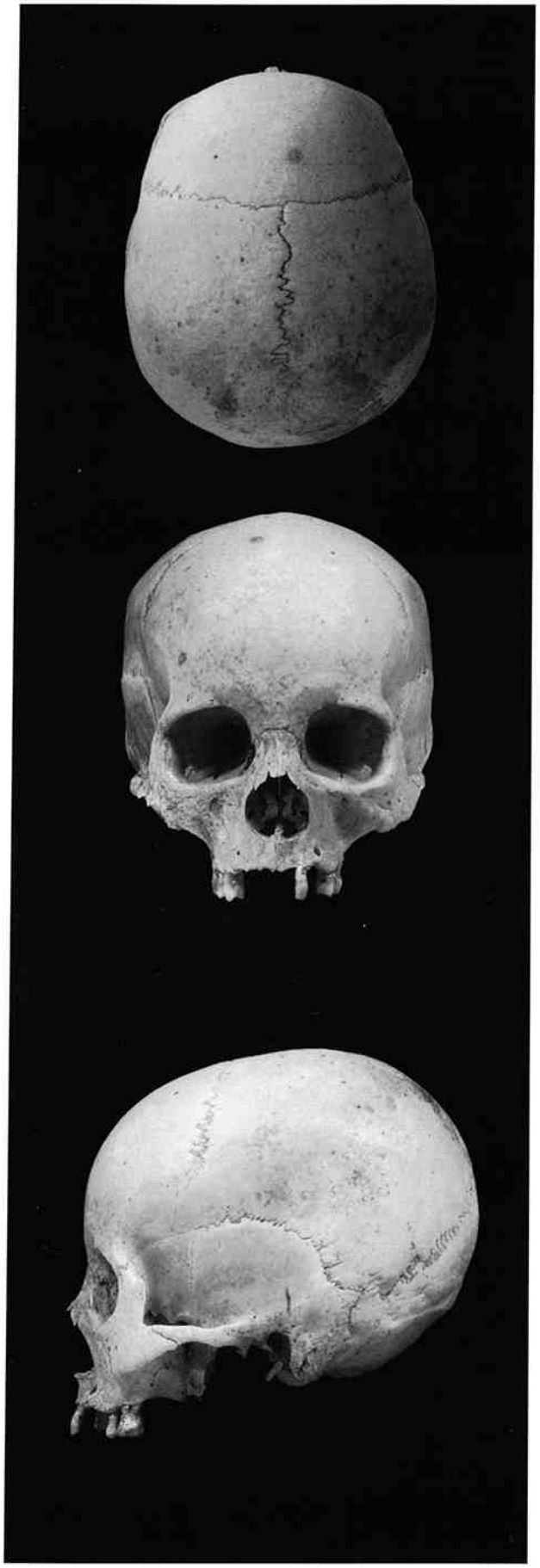


2号墓－32（♂・熟年）

図版98　人骨７

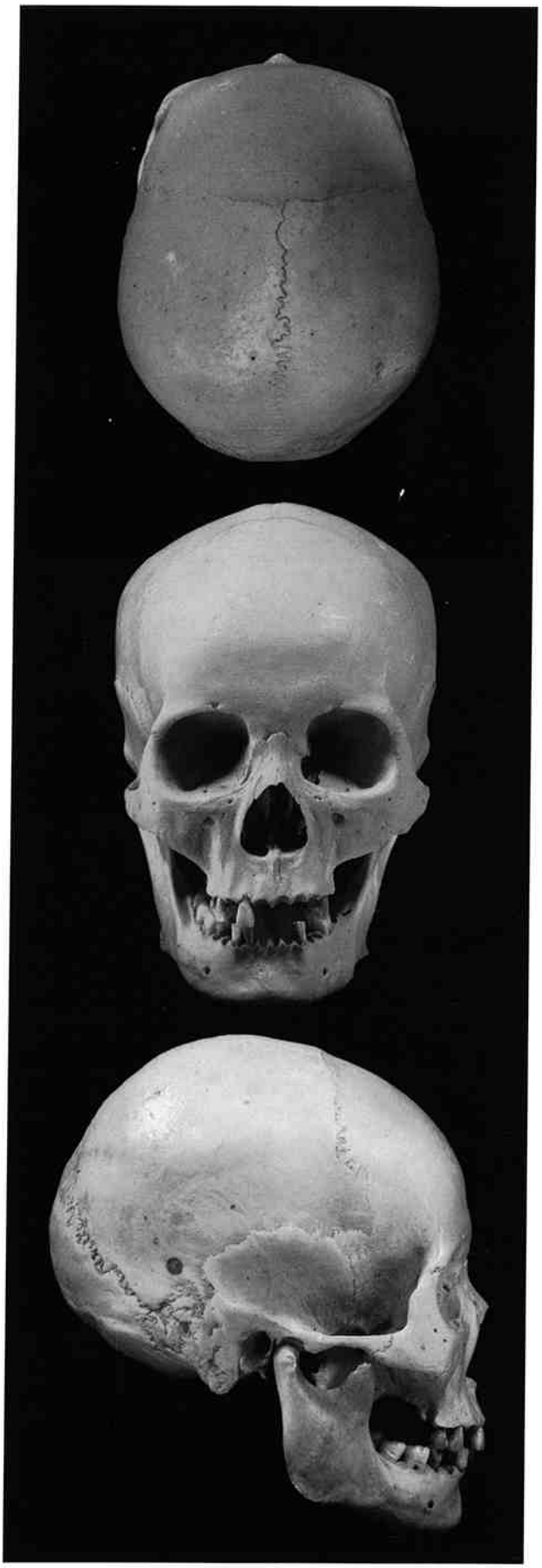


7号墓－23（♂・熟年）

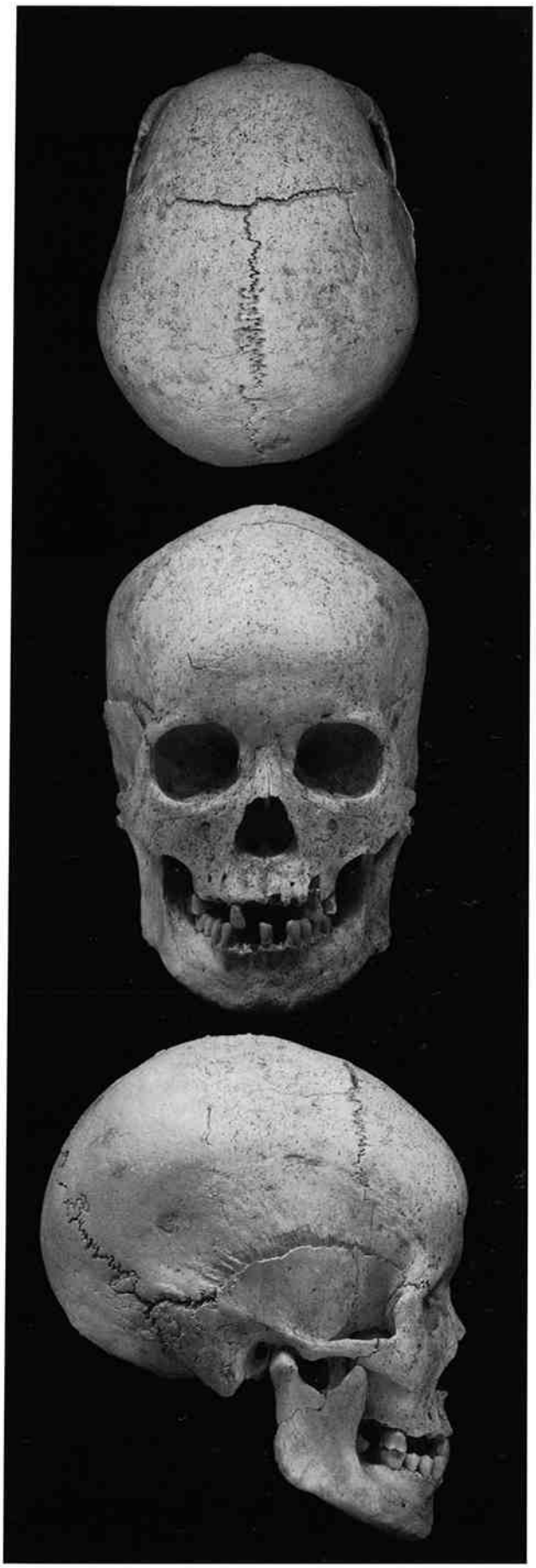


1号区画－1（♀・熟年）

図版99　人骨8

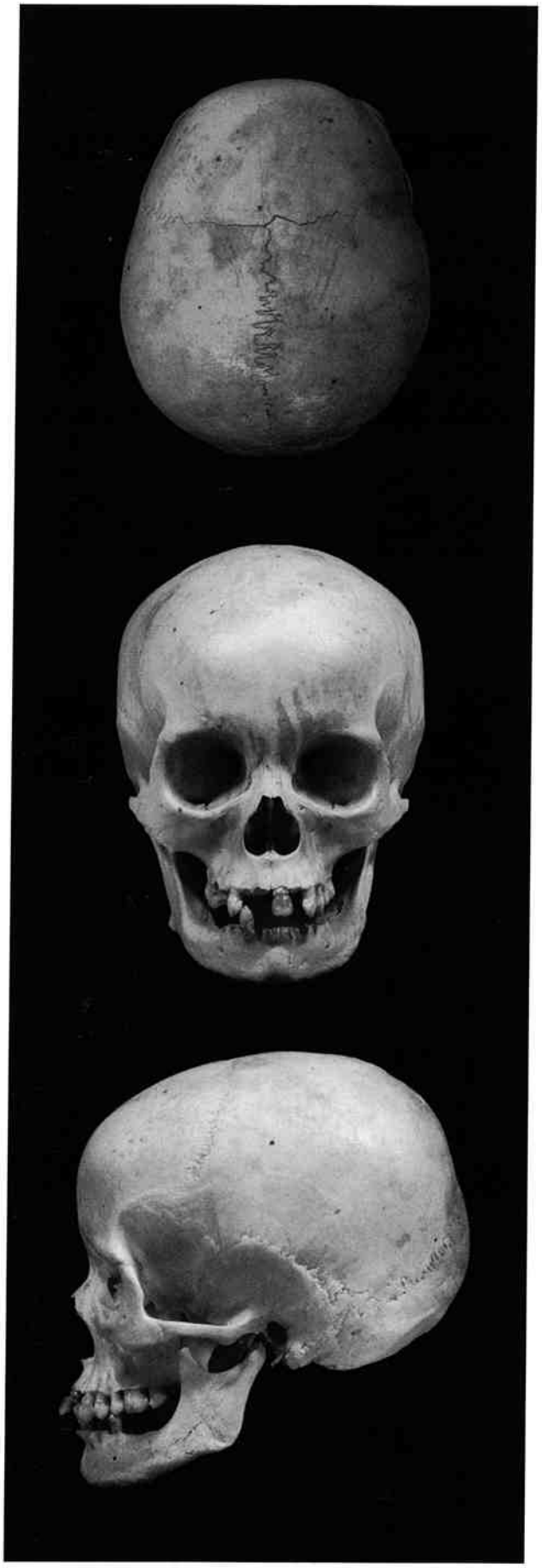


2号区画－5（♀・熟年）

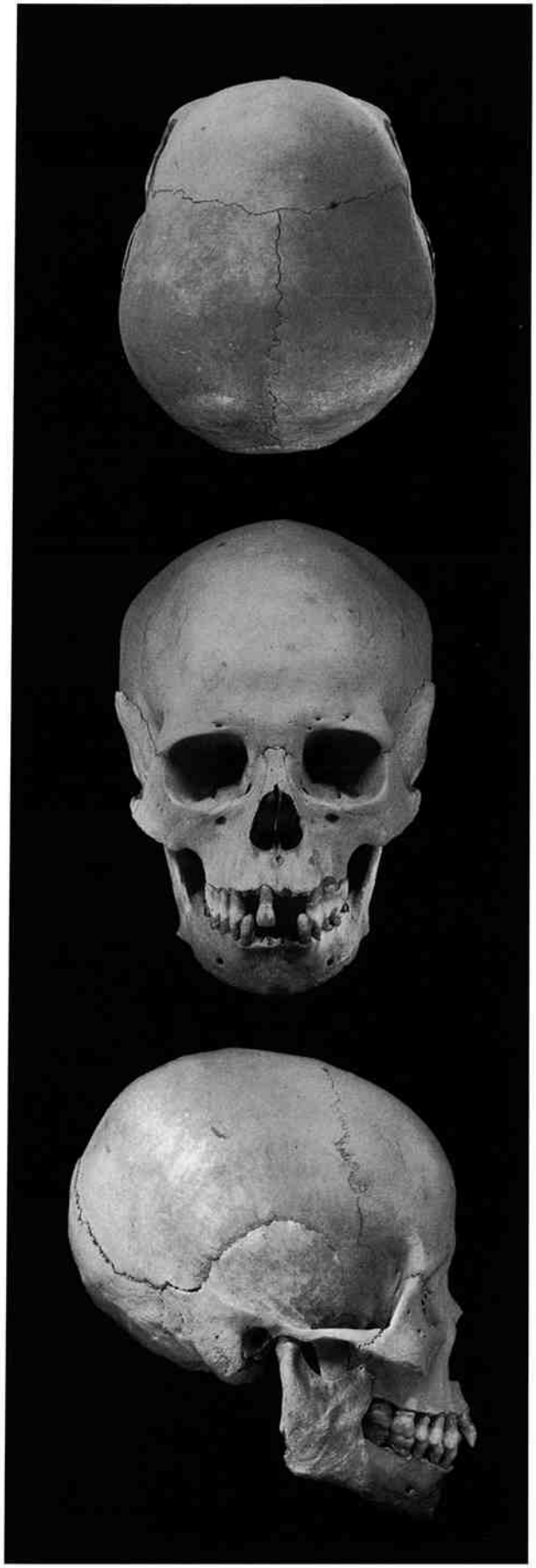


6号区画－6（♀・成～熟年）

図版100　人骨9

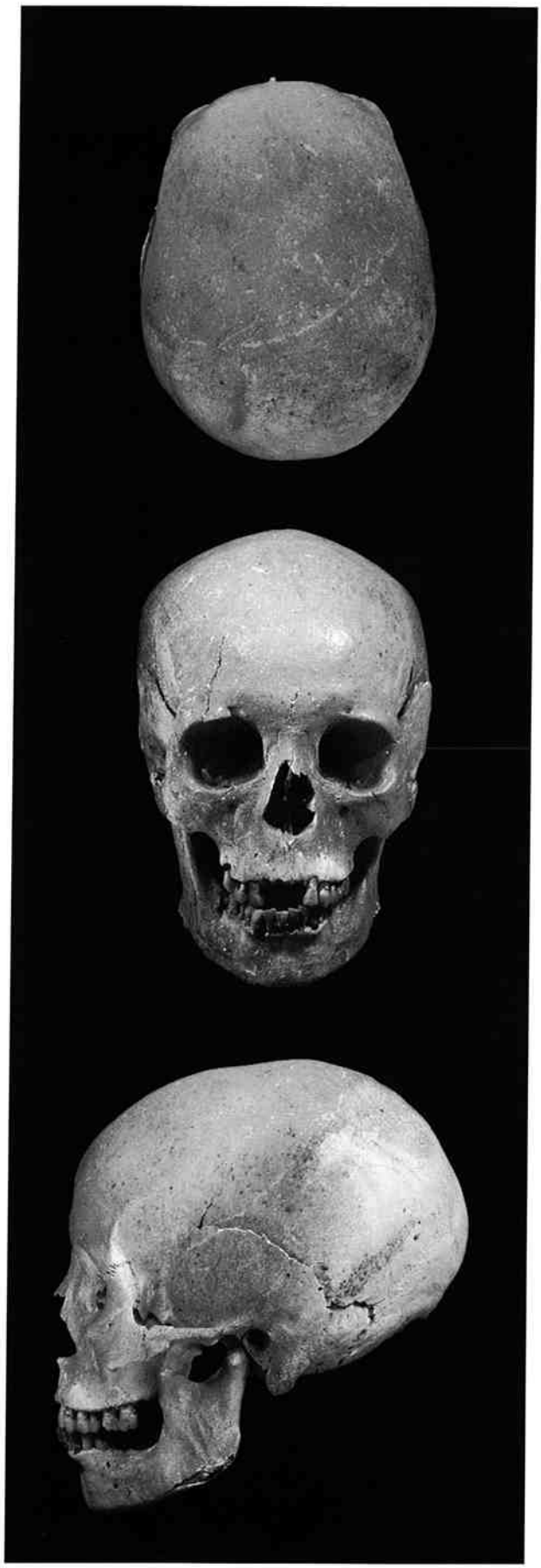


7号区画－6（♀・熟年）

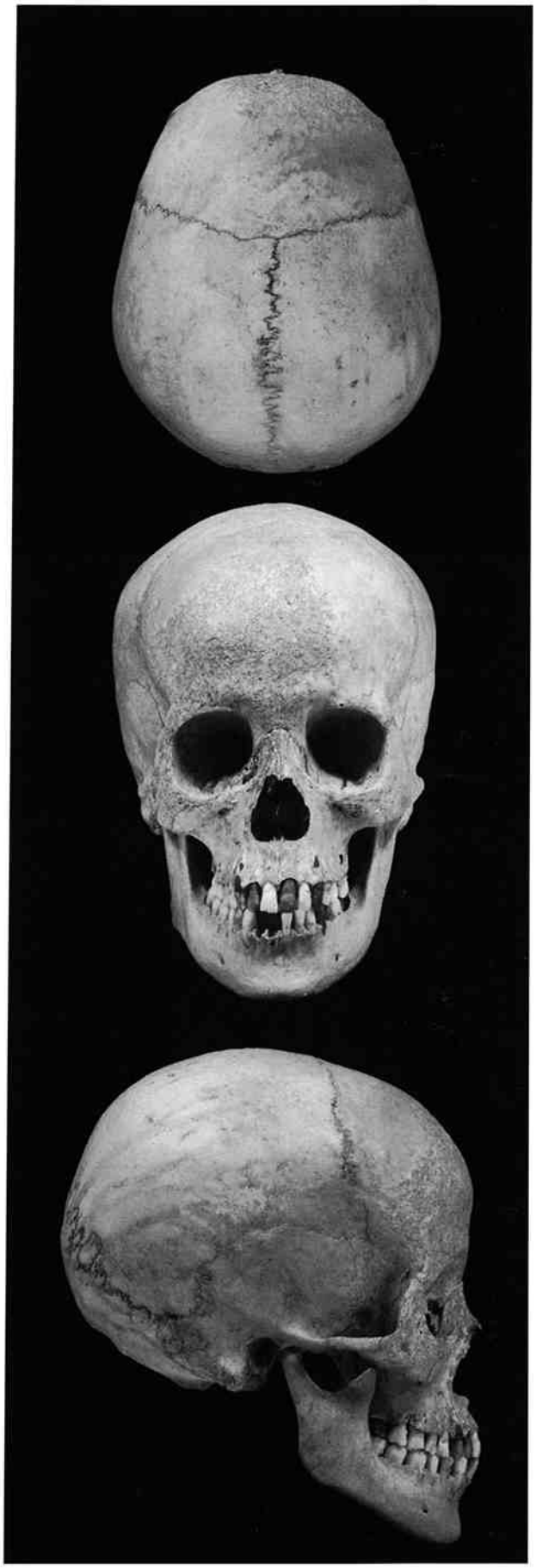


8号区画－14（♀・成年）

図版101　人骨10

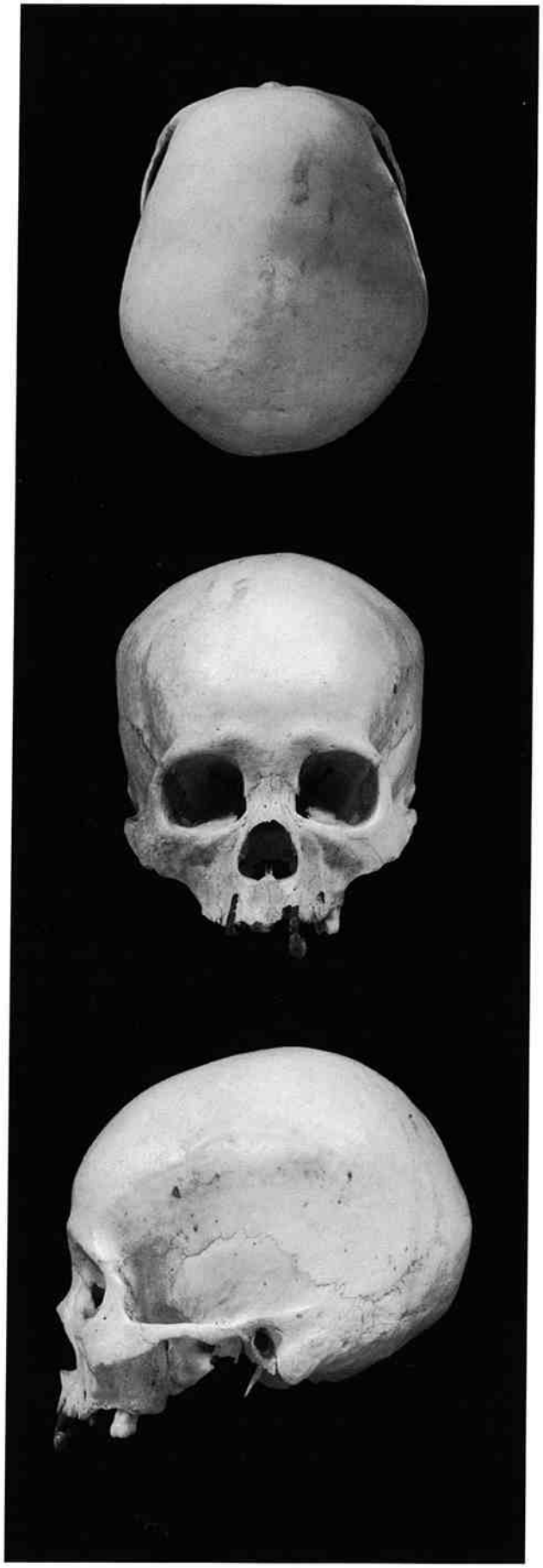


9号区画－15（♀・熟年）

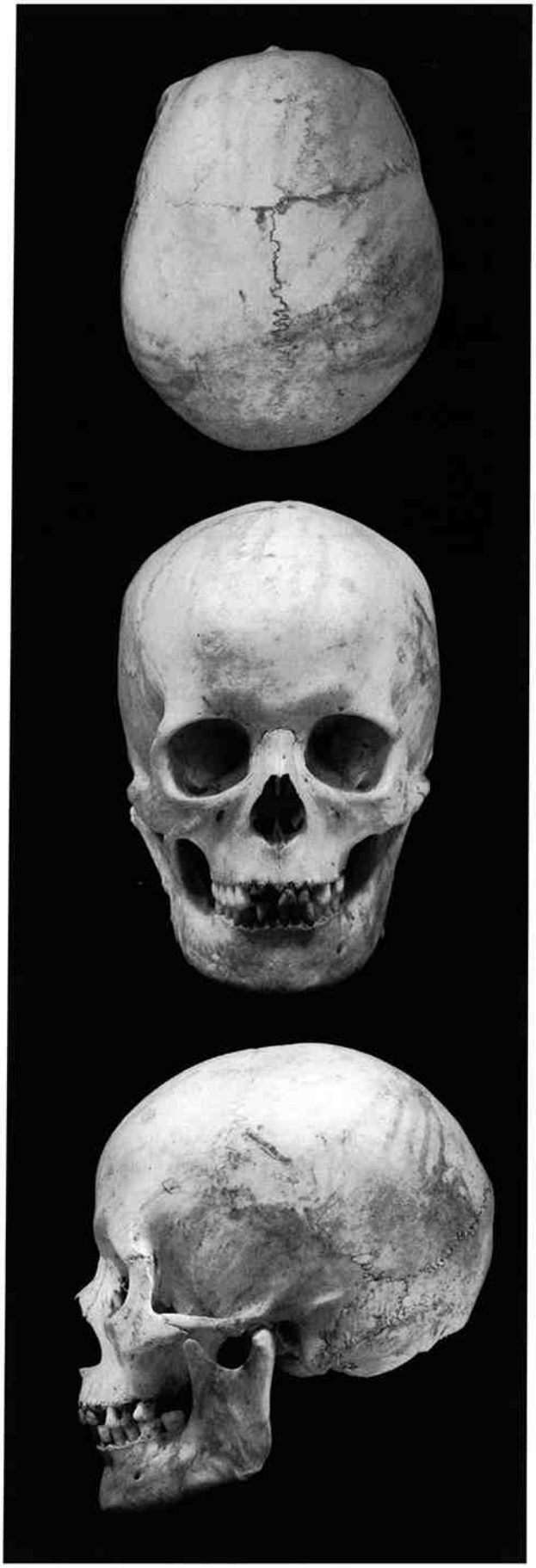


11号区画－14（♀・成～熟年）

図版102　人骨11



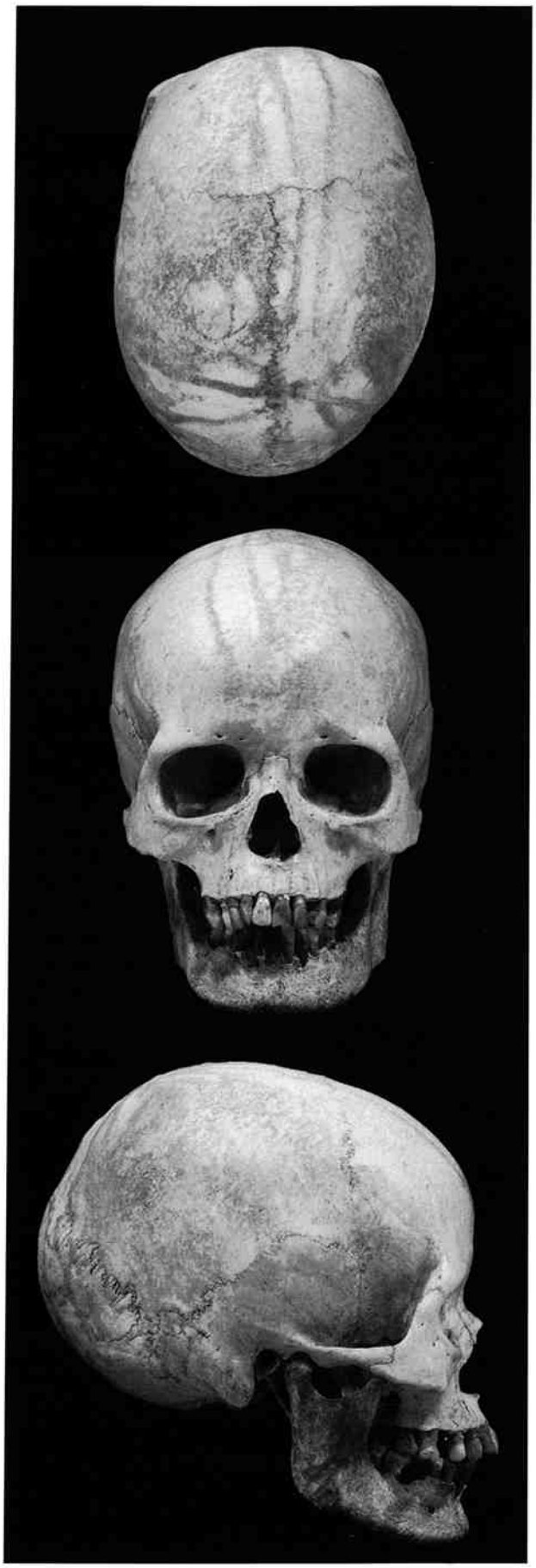
11号区画－17（♀・熟年）



11号区画－19（♀・熟年）

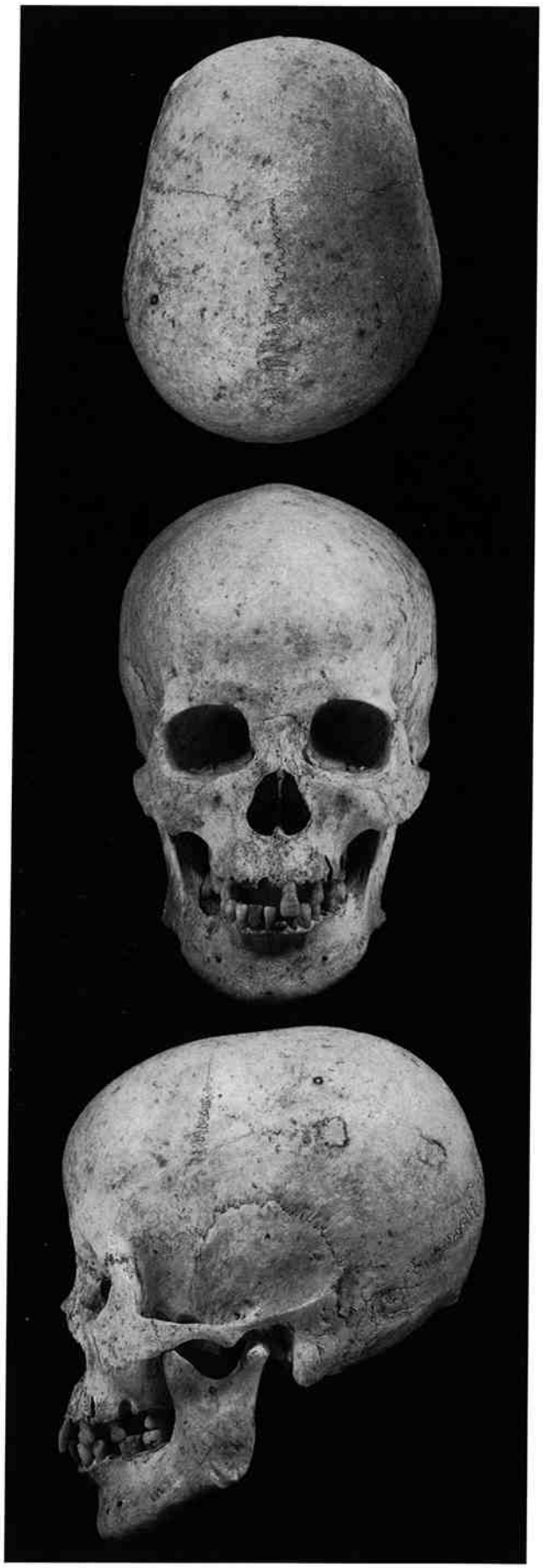
図版103　人骨12

11号区画－21（♀・熟年）

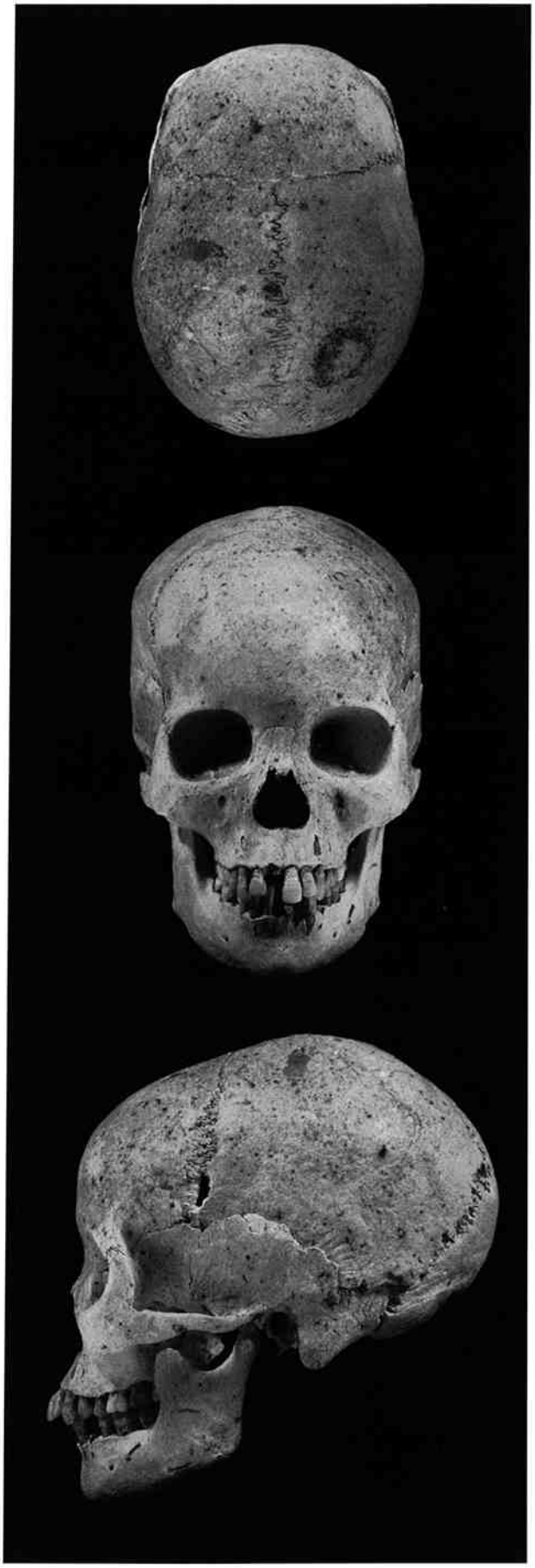


11号区画－42（♀・熟年）

図版104　人骨13



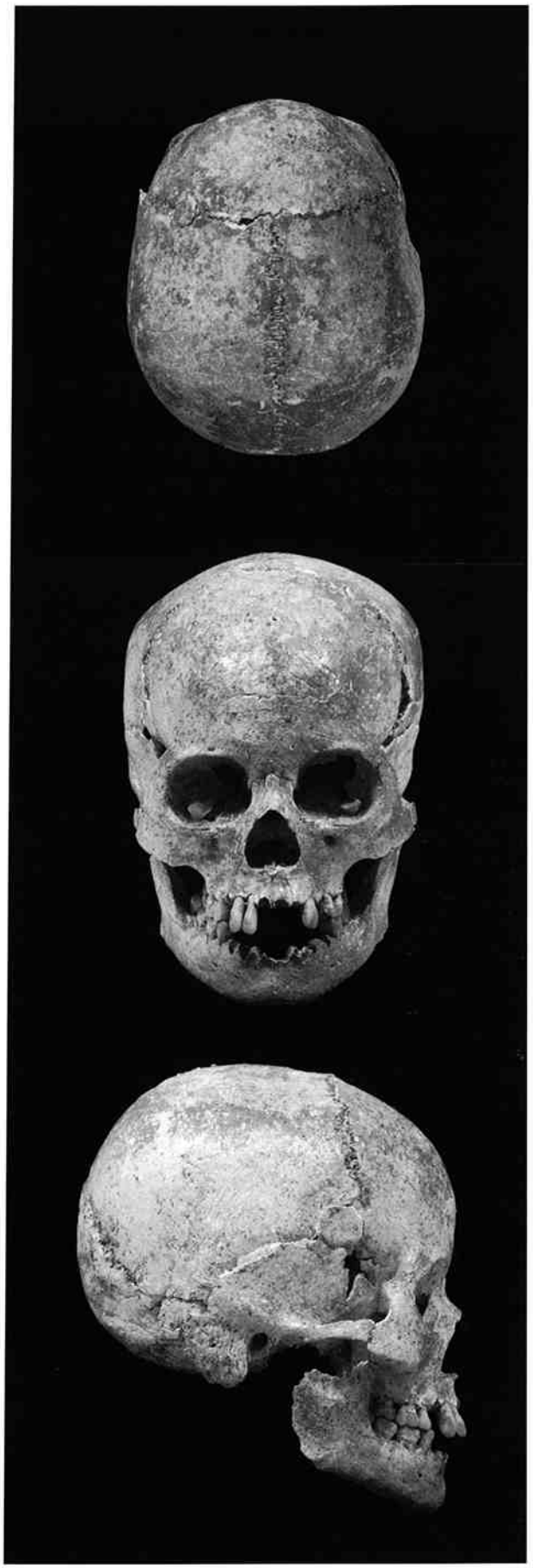
2号墓－16（♀・熟年）



2号墓－18（♀・成年）

図版105　人骨14

2号墓－30（♀・熟年）



8号墓－1（♀・成～熟年）

図版106　人骨15

第７部　自然遺物

第１章　動物遺存体

動物遺存体種名一覧

硬骨魚網　Class Osteichthyes
　科・属種不明　Fam. et gen.indet.
両性網　Class Amphibia
　無尾目　Order Anura
　　科・属種不明　Fam. et gen.indet.
爬虫網　Class　Reptilia
　有隣目（ヘビ亜目）　Order Ophidia
　　科・属種不明　Fam. et gen.indet
鳥網　Class Aves
　キジ目　Order Galliformes
　　キジ科　Family Phasianidae
　　ニワトリ　Gallus gallus var. domesticus
　スズメ目　Order Passeriformes
　　カラス類　Corvus sp.
　フクロウ目　Order Strigiformes
　　科・属種不明　Fam. et gen.indet.
哺乳網　Class Mammalia
　霊長目　Order Primates
　　ヒト科　Family Hominidae
　　ヒト　Home sapiens
　齧歯目　Order Rodentia
　　ネズミ科　Family Muridae
　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　海牛目　Order Sirennia
　　ジュゴン科　Family Dugongidae
　　ジュゴン　Dugong dugong
　偶蹄目　Order Artiodactyla
　　イノシシ科　Family Suidae
　　ブタ　Sus scrofa var.domesticus
　　ウシ科　Family Bovidae
　　ウシ　Bos taurus
　　ヤギ　Capura hirucus

ヤッチのガマ

第60表　魚骨出土状況

部　位	右/左	出土地	個数
前鰓蓋骨	左	13号区画8内	1
破片	不明	2号区画Ⅱ	2
不明		1号区画Ⅲ	1
		12号区画Ⅰ～Ⅱ	2
		13号区画11内	1
		不明	1

第61表　カエル出土状況

部　位		右/左	出土地	個数
腰椎			12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
中手骨		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
脛骨？	完存	不明	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
不明			12号区画2内	1

第62表　ヘビ出土状況

部位	右/左	出土地	個数
犬歯	不明	10号区画集骨Ⅳ下部	1
助骨	不明	10号区画16内	7

第63表　カラス出土状況

部　位		右/左	出土地	個数
尺骨	近位端	右	12号区画石積み外	1
	遠位端	右	12号区画石積み外	1
	遠位端	左	9号区画22内	1
胸骨			12号区画Ⅰ～Ⅱ	1

第64表　ニワトリ出土状況

部　位			右/左	出土地	個数
頸椎				10号区画3内	3
中手骨	完存		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
大腿骨	完存	キズあり	左	前庭部	1
脛骨	完存	キズあり	左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
中足骨	近位端		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	遠位部		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1

第65表　フクロウ？出土状況

部　位		右/左	出土地	個数
胸骨			12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
上腕骨	遠位端	左	2号区画24内	1
橈骨	完存	左	2号区画24内	1
中足骨	完存	左	11号区画	1

第66表　鳥類出土状況

種類	部　位		右/左	出土地	個数
トリA	尺骨	近位部～遠位端	右	12号区画石積み外	1
	大腿骨	完存	左	石積み3	1
				11号区画下石積み	1
トリB	尺骨	完存	左	2号区画24内	1
	中手骨	完存	左	2号区画24内	1
	大腿骨	近位部～遠位部	右	12号区画	1
種不明	破片			12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
				11号区画	1

ヤッチのガマ

第67表　ネズミ出土状況（1個体）

部位＼出土地		2号区画14内 右	左	不明
上顎骨		1	1	
下顎骨		1	1	
環椎		1		
頸椎		7		
仙骨		1		
胸骨		7		
腰椎		4		
尾椎		8		
助骨				8
肩甲骨	完存	1	1	
上腕骨	完存	1	1	
橈骨	完存	1		
尺骨	完存	1		
中手・中足骨				3
寛骨	完存		1	
大腿骨	完存	1		
脛骨	完存	1	1	
腓骨	完存	1	1	

第68表　ネズミ出土状況

部位		右/左	出土地	個数
下顎骨		左	12号区画3内	1
下顎骨		左	石積み3	1
頸椎			11号区画上	1
尺骨	両端はずれ	左	石積み3	1

第69表　ジュゴン出土状況

部位	右/左	出土地	個数
助骨	不明	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1

第70表　ウシ出土状況

部位		右/左	出土地	個数
上顎骨	P^3	右	前庭部Ⅰ	1
	M^3	左	北側斜面	1
下顎骨	M_1	右	前庭部Ⅲ	1
	P_3		前庭部Ⅲ f 礫敷き	1
	P_1		前庭部Ⅱ	1
	M_3	左	前庭部Ⅲ h	1
	破片	右	前庭部Ⅲ	1
助骨		不明	12号区画Ⅱ	1
破片		不明	前庭部石灰岩崩落	1

第73表　種不明出土状況

部位	右/左	出土地	個数
不　明		8号区画14内	1
		13号区画8内	1
		12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
		石積み3	1

第71表　ヤギ出土状況

部位			右/左	出土地	個数
下顎骨	$dm_{3-1}M_{(1)}$		右	2号区画19内	1
	$I_{(1)}\ dm_{3-1}M_1$			表採	1
棘突起				12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
頸椎				前庭部Ⅱ	1
助骨	(近位)		右	前庭部Ⅱ	1
				13号区画	1
		キズあり		12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	近位		左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	4
		キズあり		13号区画	1
	破片		左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	2
		キズあり	不明	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
肩甲骨	遠位端	キズあり	右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
		キズあり	左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	破片		不明	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
		キズあり		12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
上腕骨	近位部～遠位骨端はずれ		右	12号区画Ⅰ	1
	近位骨端はずれ～遠位端	キズあり		前庭部Ⅱ	1
	近位部～近位端		左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	近位骨端のみ(大結節)			12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	近位骨端のみ(骨頭)			前庭部Ⅱ	1
橈骨	近位端～遠位部		右	前庭部Ⅱ	1
			左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
				前庭部Ⅱ	1
	遠位骨端のみ		左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
尺骨	近位骨端はずれ～骨体		右	前庭部Ⅱ	1
	骨体～遠位部		左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
寛骨	腸骨部～坐骨		左	11号区画8内	1
	腸骨部			前庭部Ⅰ	1
大腿骨	遠位部	キズあり	右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	近位骨端はずれ～骨体	キズあり	左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
脛骨	完存	キズあり	右	12号区画Ⅰ～Ⅱ 前庭部Ⅱ	1
中手骨	近位端～骨体		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	近位端～遠位部		左	前庭部Ⅱ	1
距骨	完存		右	前庭部Ⅱ	1
			左	前庭部Ⅱ	1
踵骨	近位骨端はずれ～遠位端		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
中足骨	近位端		右	前庭部Ⅱ	1
		キズあり	左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
基節骨	完存		右	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	近位骨端はずれ～遠位端			前庭部Ⅱ	1
	遠位端		左	12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
	破片			12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
末節骨			左	出土地不明	1
胸骨				12号区画Ⅰ～Ⅱ	1
尾椎				8号区画14内	1
				出土地不明	2
仙骨				前庭部Ⅰ	1

第72表　ブタ出土状況

部位			右/左	出土地	個数
下顎骨	$P_{1-2-3-4}\ M_{1-2}$	キズあり	右	1号区画Ⅲ	1
	P_3M_{2-3}		左	1号区画Ⅲ	1
中手骨	Ⅳ 近位端～遠位部		右	前庭部Ⅱ	1
中手骨	Ⅴ 近位端～遠位骨端はずれ		右	前庭部Ⅱ	1
棘突起		キズあり		11号区画19内	1

ヤッチのガマ周辺の墓

第74表　ネズミ出土状況

部位 ＼ 出土地		7号墓4内 右	7号墓4内 左
後頭顆		1	
下顎骨		1	1
上腕骨	近位骨端はずれ～遠位端	1	1
大腿骨	完存		1
	近位～遠位骨端はずれ	1	
脛骨	近位～遠位骨端はずれ		1
腓骨	近位～遠位骨端はずれ		1

第75表　トリ出土状況

部位		右/左	個数	出土地
肩甲骨	近位部～遠位端	右	1	4号墓散乱
仙骨			1	6号墓13内
上腕骨	完存	左	1	4号墓散乱

不時発見

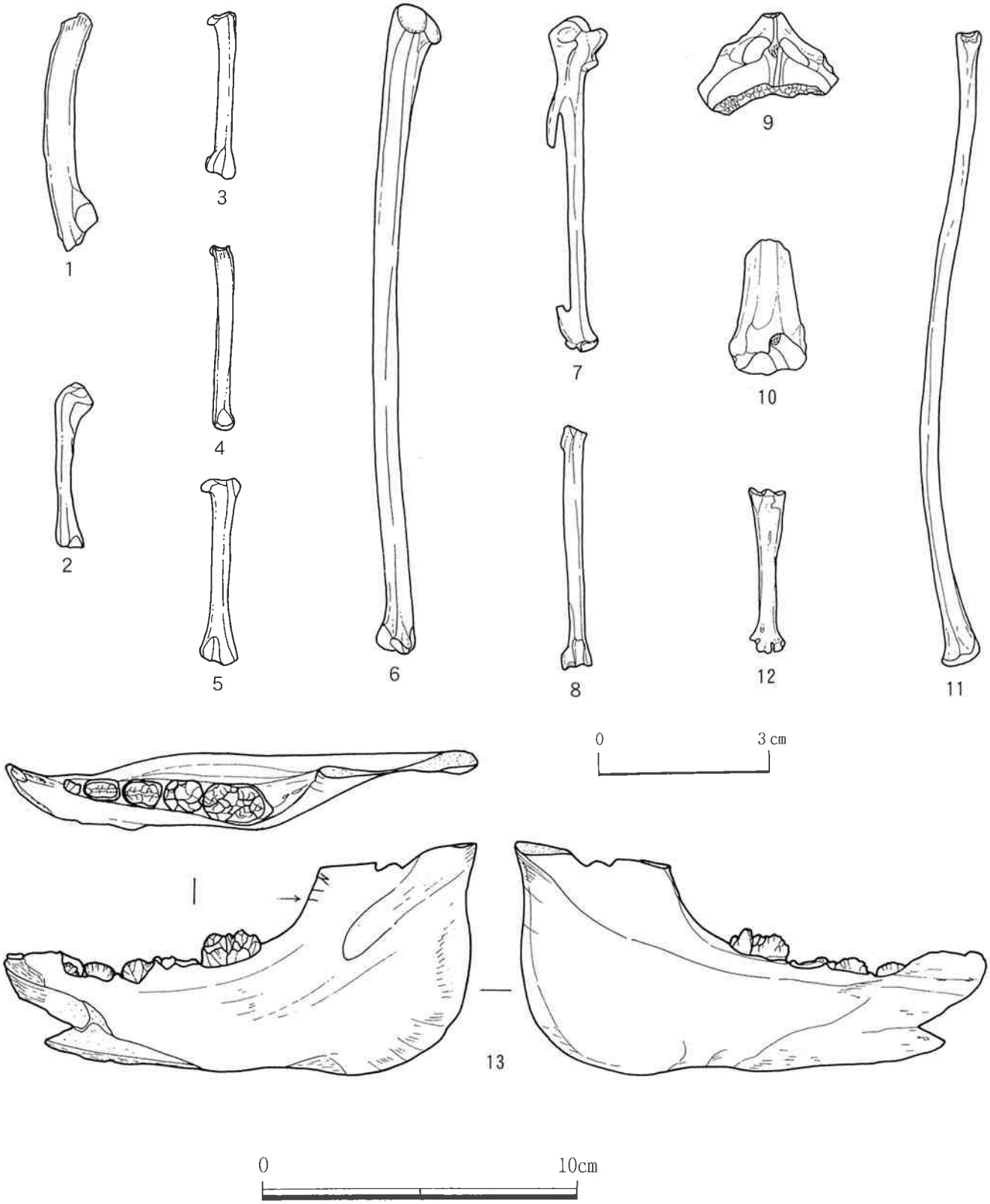
第76表　ウシ出土状況

部位		右/左	個数
下顎骨	M_1	左	1

不時発見

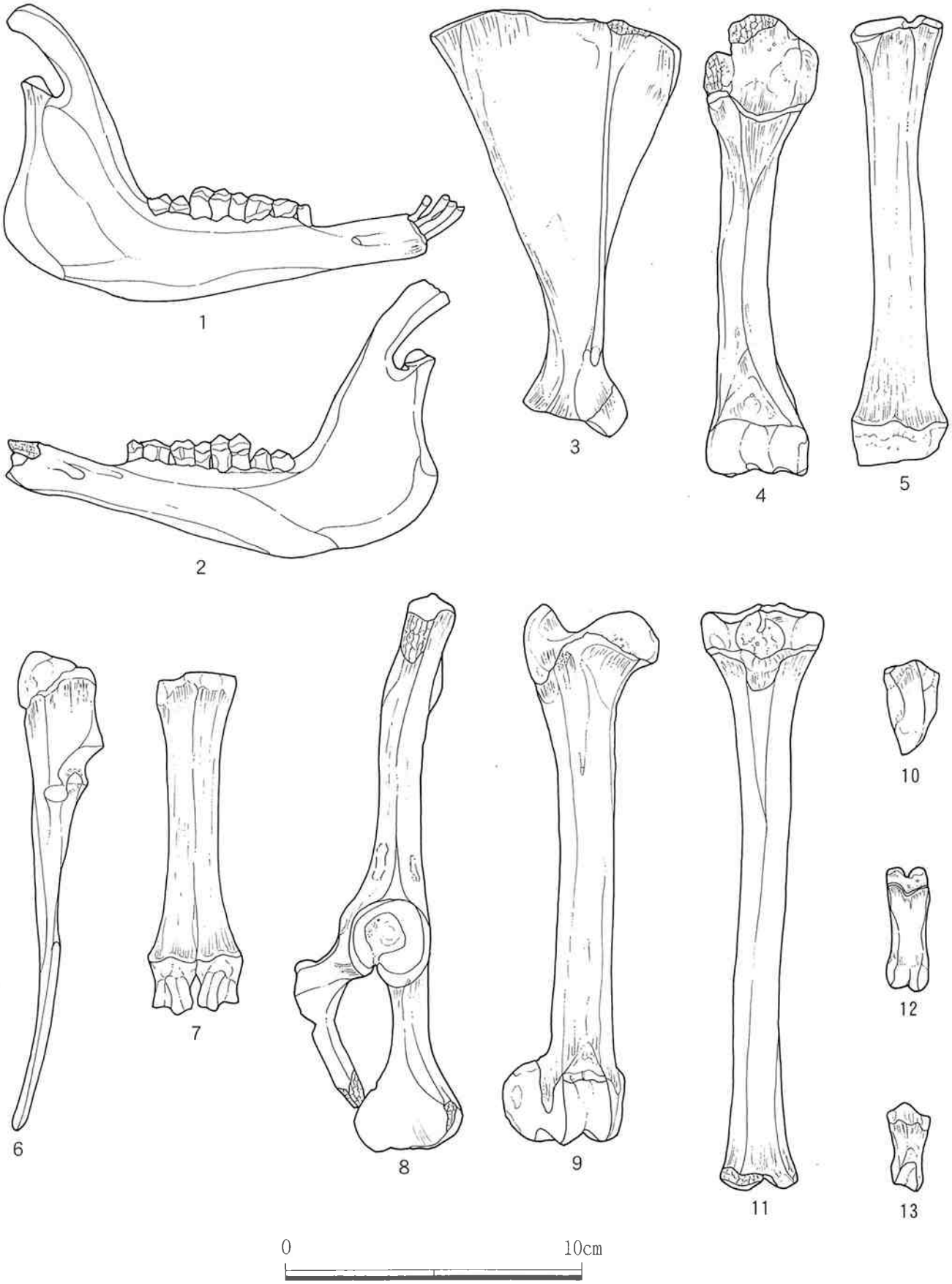
第77表　ヤギ出土状況（1個体）

部位		右/左	個数
上顎骨	$dm^{2\,3\,4}M^{1\,2}$	右	1
	$dm^{2\,3\,4}M^{1\,2}$	左	1
下顎骨	$i_{1\,2\,3}I_{\cdot 1}\ C\,dm_{2\,3\,4}M_{1\,2}$	右	1
	$I_{\cdot 1}\ dm_{2\,3\,4}M_{1\,2}$	左	1
椎体	頸椎		5
	環椎		1
	軸椎		1
	胸椎		11
	胸骨		6
	腰椎		8
	仙骨～尾椎		1
助骨		右	13
		左	13
肩甲骨	完存	右	1
		左	1
上腕骨	完存	右	1
		左	1
橈骨	完存	右	1
		左	1
尺骨	両端はずれ	左	1
	近位端～遠位部	右	1
橈側手根骨		右	1
		左	1
尺側手根骨		右	1
中間手根骨		右	1
		左	1
2＋3手根骨		右	1
		左	1
第4手根骨		右	1
		左	1
中手骨	完存	右	1
		左	1
寛骨	完存	右	1
		左	1
大腿骨	完存	右	1
		左	1
膝蓋骨		右	1
脛骨	近位端～遠位骨端はずれ	右	1
		左	1
基節骨		右	2
		左	2
中節骨		右	2
種子骨			2



第195図　骨　（ヤッチのガマ周辺の墓）
（ヤッチのガマ）

トリ　1、右肩甲骨　2、左上腕骨
トリA　3、左大腿骨　4、右尺骨　5、左大腿骨
トリB　6、左尺骨　7、左中手骨　8、右大腿骨
フクロウ　9、胸骨　10、左上腕骨　11、左橈骨　12、左中足骨
ブタ　13、右下顎骨



第196図　骨　ヤギ　1、右下顎骨　2、左下顎骨　3、右肩甲骨　4、左上腕骨
(不時発見)　5、左橈骨　6、右尺骨　7、左中手骨　8、左寛骨　9、右大腿骨
10、右膝蓋骨　11、右脛骨　12、右基節骨　13、右中節骨

第78表　貝類出土状況（巻貝）－ヤッチのガマー

番号	科名	貝種名	生息地	合計 完形	合計 殻頂	合計 破片	個体数
1	ユキノカサガイ科	ヒメコザラ	Ⅰ-1-a	1	0	0	1
2	ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b	0	0	1	△
3		ニシキウズ	Ⅰ-2-a	1	0	3	1
4		サラサバテイラ	Ⅰ-4-a	0	3	3	3
5	リュウテン科	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	0	2	4	2
6		チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	1	0	0	1
7		カンギク	Ⅱ-1-b	70	12	13	82
8		カンギクの蓋	Ⅱ-1-b	13	0	0	13
9		ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	1	0	29	1
10		ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a	0	0	1	△
11	アマオブネ科	コシダカアマガイ	Ⅱ-1-b	18	9	22	27
12		マルアマオブネ	Ⅱ-1-b	6	0	0	6
13		アマオブネ	Ⅰ-1-b	8	0	5	8
14		ニシキアマオブネ	Ⅰ-0-c	2	0	1	2
15	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	111	9	25	120
16	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c	0	2	4	2
17		カヤノミカニモリ		1	0	0	1
18		オニノツノガイ科不明		117	179	51	296
19	トウガタカワニナ科	スグカワニナ		1	1	0	2
20	カワニナ科	カワニナ	Ⅳ-5,6	2	0	0	2
21	ウミニナ科	イトカケヘナタリ	Ⅲ-0-d	6	2	2	8
22		リュウキュウウミニナ		152	58	15	210
23	ソデボラ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c	10	7	2	17
24	タカラガイ科	ヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a	1	1	0	2
25		キイロダカラ	Ⅰ-1-a	0	0	1	△
26		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	2	0	0	2
27		ホシダカラ	Ⅰ-2-c	5	0	7	5
28		ホシキヌタ	Ⅰ-2-a	1	0	1	1
29		タカラガイの一種A		1	0	0	1
30		タカラガイの一種B		0	1	0	1
31		タカラガイ科不明		0	0	3	△
32	タマガイ科	トミガイ	Ⅰ-2-c	0	1	0	1
33		ホウシュノタマガイ	Ⅱ-1-c	4	5	1	9
34		トミガイの一種	Ⅰ-2-c	1	2	0	3
35		タマガイ科不明		0	0	1	△
36	アヤボラ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a	1	0	0	1
37	アクキガイ科	ヨウラクレイシガイダマシ	Ⅰ-2-a	4	0	1	4
38		ツノテツレイシ	Ⅰ-1-a	2	0	0	2
39		テツレイシ	Ⅰ-3-a	1	0	0	1
40	フトコロガイ科	フトコロガイ		7	1	0	8
41	オリイレヨフバイ科	ヒメオリイレオムシロガイ		3	1	1	4
42	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c	1	1	0	2
43	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a	1	0	10	1
44	オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	Ⅰ-3-a	0	0	1	△
45	イモガイ科	クロフモドキ	Ⅰ-2-c	0	0	1	△
46		マダライモ	Ⅰ-1-a	0	0	4	△
47		サヤガタイモ	Ⅰ-1-a	1	0	0	1
48		アジロイモ	Ⅱ-2-c	1	0	1	1
49		イモガイ科不明		0	0	1	△
50	キセルガイ科	ツヤギセル	Ⅴ-8	10	0	1	10
51	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ		0	0	2	△
52	カサマイマイ科	オオカサマイマイ		3	0	0	3
53	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8	47	12	41	59
54		オキナワヤマタカマイマイ		16	1	20	17
55	マイマイ科	パンダナマイマイ		18	4	3	22
56	オナジマイマイ科	トウガタホソマイマイ		2	0	0	2
57		オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9	34	8	39	42
合計				688	322	321	1010
個体数				1010			

出土地	層序	合計	個体数
1号区画	貯子内	完形 34 殻頂 7 破片 10	41
1号区画	区画内	完形 1 殻頂 1 破片 2	2
2号区画	貯子内	完形 7 殻頂 3 破片 6	10
2号区画	区画内	完形 74 殻頂 44 破片 34	118
3号区画	貯子内	完形 18 殻頂 1 破片 18	19
3号区画	区画内	完形 2	2
4号区画	貯子内	完形 2 殻頂 2 破片 1	4
4号区画	区画内	完形 2	2
7号区画	貯子内	完形 1	1
7号区画	区画内	完形 1	1
8号区画	貯子内	完形 5	5
8号区画	区画内	完形 9 殻頂 11 破片 2	20
9号区画	貯子内	完形 3 殻頂 1 破片 1	4
9号区画	区画内	完形 2 破片 1	2
10号区画	貯子内	完形 3 殻頂 2 破片 2	5
10号区画	区画内	完形 249 殻頂 184 破片 98	433
11号区画	貯子内	完形 24 殻頂 5 破片 3	29
11号区画	区画内	完形 44 殻頂 9 破片 22	53
12号区画	貯子内	完形 18 殻頂 6 破片 6	24
12号区画	区画内	完形 38 殻頂 8 破片 39	46
13号区画	貯子内	完形 39 殻頂 2 破片 13	41
13号区画	区画内	完形 1 殻頂 1 破片 5	2
1〜3号区画		完形 1 破片 1	1
9・10号区画		完形 8 殻頂 7 破片 3	15
前庭部		完形 99 殻頂 24 破片 53	123
洞内		殻頂 1 破片 1	1
北側斜面		完形 1 殻頂 3	4
不明		完形 1	1
合計		完形 688 殻頂 322 破片 321	1010

第79表　貝類出土状況（二枚貝）

番号	科名	貝種名	生息地	2号区画 区画内 完形L	完形R	破片	3号区画 貯子内 完形L	完形R	4号区画 区画内 完形L	完形R	7号区画 貯子内 破片	8号区画 区画内 完形L	完形R	9号区画 貯子内 完形L	完形R	殻頂L	殻頂R	10号区画 区画内 完形L	完形R	殻頂L	殻頂R	破片	11号区画 貯子内 完形L	完形R	11号区画 区画内 完形L	完形R	殻頂L	殻頂R	破片	12号区画 区画内 完形L	完形R	13号区画 貯子内 完形L	完形R	破片	13号区画 区画内 完形L	完形R	破片	前庭部 完形L	完形R	殻頂L	殻頂R	破片	洞内 殻頂L	殻頂R	破片	合計 完形L	完形R	殻頂L	殻頂R	破片	個体数
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a		1																																	1	2							1	3	0	0	0	4
2	イガイ科	ヒバリガイモドキ		1															2			1																								1	2	0	0	1	3
3	ウグイスガイ科	クロチョウガイ	Ⅰ-4-a																																		1								1	0	0	0	0	2	△
4	ウミギク科	メンガイの一種																																							1					0	0	0	1	0	1
5	イタボガキ科	カキの一種																																								1				0	0	0	0	1	△
6	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	4	3	1									1			8	6	2	1	7			1	4			2									20	22	2	9	5				33	36	4	10	15	83
7	キクザルガイ科	カネツケザルガイ？	Ⅰ-2-c										1			1																							1							0	2	1	0	0	3
8	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a															1				1																				1				1	0	0	0	2	1
9	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	2	2	4		1	6	13										1	2	5					1	1	4	3	5	3			4	4		8	16	1	3	4				26	40	3	6	17	75
10	シャコガイ科	シラナミ	Ⅰ-2-a																											1																1	0	0	0	0	1
11		シャゴウ	Ⅰ-2-c																										1										1			1			1	0	1	0	0	3	1
12		ヒメジャコ	Ⅰ-2-a																							1			2									1	1			2				1	2	0	0	4	3
13	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c			1																4														1			1							0	2	0	0	5	2
14	チドリマスオガイ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c		1													1	1																											1	2	0	0	0	3
15	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-2-c	1	1	2													1		1	4							1									1				3				2	2	0	1	10	5
16	ソオサザナミ科	リュウキュウマスホウガイ	Ⅱ-1-c			1																												1												0	0	0	0	2	△
17	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-1-c																																			1								1	0	0	0	0	1
18		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c		2	2					1							2	5		1	2						1	3									4	5		1	1				6	12	0	3	9	21
19		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c																				1															1	1					1		2	1	0	1	0	4
20		ヒメリュウキュウアサリ？																														1			2	4		2	1		1	2				5	5	0	1	2	11
21		オイノカガミガイ	Ⅱ-1-c			2												3				1																4	4			1				7	4	0	0	4	11
22	二枚貝不明				1																																									0	1	0	0	0	1
合計				8	11	13	0	1	6	13	1	0	1	0	1	1	0	15	15	3	5	25	1	0	1	5	1	2	13	4	5	4	0	1	6	9	1	43	55	3	15	21	0	1	2	88	115	8	23	77	234
個体数				19			1		19		△	1		2				38					1		9					9		4			15			116					1			234					

〈貝の生息地の分類〉

外用～内湾	水深	底質
Ⅰ 外用・サンゴ礁域	0 潮間帯上部（1ではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a 岩盤
	1 潮間帯中・下部	b 転石
Ⅱ 内湾・転石地域	2 亜潮間帯上縁部（1ではイノー）	c 岩礫底、砂泥底 砂底
	3 干潮（Ⅰにのみ適用）	d マングローブ植物上
Ⅲ 河口干潟・マングローブ域	4 礁斜面およびその下部	e 淡水の流入する礫底
Ⅳ 淡水域	5 止水 6 流水	
Ⅴ 陸域	7 林内 8 林内・林縁部 9 林縁部 10 海浜域	
Ⅵ その他	11 打ち上げ物 12 化石	

第80表　貝類出土状況(巻貝)

巻貝 ＼ 出土地　層序				1号墓						2号墓						3号墓			4号墓						5号墓						5・6号墓間
				厨子内			墓内			厨子内			墓内			厨子内			厨子内			墓内			厨子内			墓内			墓内
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形
1	ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a																						1		1				
2	リョウテン科	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a																1												
3		カンギク	Ⅱ-1-b																12			1		1	39		2				
4	アマオブネ科	コシダカアマガイ	Ⅰ-1				2		4	2									12						29						
5		マルアマオブネ	Ⅱ-1-b																			1									
6	ヤマタニシ科	アオミオカタニシ	Ⅴ-8				1																								
7		オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	5	2		31	6	2	11		1	8	1		2	4	2	18	1	3	32	8	16	80	4	3				1
8	タニシ科	マルタニシ																								2	2				
9		スクミリンゴガイ																							1						
10	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c						1																	4					
11		カヤノミカニモリ		1	1		4	9	2				1																1		
12	トウガタカワニナ科	スゲカワニナ																		1						1					
13	ウミニナ科	イトカケヘナタリ	Ⅲ-0-d						1																	1			1		
14		リュウキュウウミニナ		1			17	10	2	1																			1		
15	ソデボラ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c																												
16	タマガイ科	トミガイの一種	Ⅰ-2-c																1												
17	アクキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a							1															1						
18		ツノレイシ	Ⅰ-3-a																						2						
19		ツノテツレイシ	Ⅰ-1-a																1						6						
20	オリイレヨフバイ科	イボヨフバイ	Ⅱ-1-c																1						1						
21	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c						1																						
22	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a																												
23	キセルガイ科	ツヤギセル	Ⅴ-8				1															1			1	1		1			
24	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ						1											3	4	2			1	16	5	6				
25	カサマイマイ科	オオカサマイマイ					1												1			1			1						
26	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8	1	1	3	2	9	13	23	4	9		3	3	6		2	5	3	2	1	3	21	116	2	8				
27		オキナワヤマタカマイマイ			1	2	2	3			1								4	1	2	4	3	12	45	2	4				1
28	マイマイ科	パンダナマイマイ		2			3	3		1						2						1		1	1						
29	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9				8	4	4	12	4	5	1		3	5	2	2	1		2	4	2	1	16	2	4		1		
合計				10	5	5	72	45	30	51	9	15	10	4	6	15	6	6	60	10	11	46	16	53	356	24	30	4	1		2
個体数				15			117			60			14			21			70			62			380			4			2

巻貝 ＼ 出土地　層序				6号墓						7号墓						8号墓	9号墓					合計			個体数
				厨子内			墓内			厨子内			墓内			厨子内	厨子内			墓内					
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	完形	殻頂	破片	完形	完形	殻頂	破片		
1	ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a																			1	0	1	1
2	リョウテン科	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a																			1	0	0	1
3		カンギク	Ⅱ-1-b	7		3										1	3					63	0	6	63
4	アマオブネ科	コシダカアマガイ	Ⅰ-1	7	2	1				1						1	9					63	2	5	65
5		マルアマオブネ	Ⅱ-1-b	25	8	5																26	8	5	34
6	ヤマタニシ科	アオミオカタニシ	Ⅴ-8	3				1					1									5	1	0	6
7		オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	1			5		2	18	1	1	11		3		6		1			229	27	34	256
8	タニシ科	マルタニシ																				0	2	2	2
9		スクミリンゴガイ																				1	0	0	1
10	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c		1																	0	5	1	5
11		カヤノミカニモリ																				7	10	2	17
12	トウガタカワニナ科	スゲカワニナ																				0	2	0	2
13	ウミニナ科	イトカケヘナタリ	Ⅲ-0-d	1									2								1	5	1	1	6
14		リュウキュウウミニナ																				20	10	2	30
15	ソデボラ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c																		2	2	0	0	2
16	タマガイ科	トミガイの一種	Ⅰ-2-c																			1	0	0	1
17	アクキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a																			2	0	0	2
18		ツノレイシ	Ⅰ-3-a																			2	0	0	2
19		ツノテツレイシ	Ⅰ-1-a	1													3					11	0	0	11
20	オリイレヨフバイ科	イボヨフバイ	Ⅱ-1-c																			2	0	0	2
21	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c																			0	0	1	△
22	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a		1					1												1	1	0	2
23	キセルガイ科	ツヤギセル	Ⅴ-8	2						2											2	10	1	0	11
24	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ		3		8		1														22	11	17	33
25	カサマイマイ科	オオカサマイマイ																				4	0	0	4
26	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8	18	4	10			2	4	3	3	1	3	7		2					179	35	83	214
27		オキナワヤマタカマイマイ		5	2	9	3	2	2	9	1		3	2	10		1		1			77	18	42	95
28	マイマイ科	パンダナマイマイ		5	1					2												17	4	1	21
29	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9	14	5	8		2		4		1			1			1				65	22	32	87
合計				92	24	44	8	6	6	41	5	5	18	5	21	2	24	1	2	5		816	160	235	976
個体数				116			14			46			23			2	25			5		976			

ーヤッチのガマ周辺の墓ー

第81表　貝類出土状況(二枚貝)

二枚貝 ＼ 出土地　層序				1号墓							2号墓						6号墓		9号墓			合計					個体数
				厨子内		墓内					厨子内	墓内					墓内		墓内								
				完形		完形		殻頂		破片	完形	完形		殻頂			完形		完形		破片	完形		殻頂		破片	
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R	L	R		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		L	R	L	R		
1	イタヤガイ科	チサラガイ	Ⅰ-2-c												1							0	0	1	0	0	1
2	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1						1												1	0	0	0	1	1
3	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c			1	2	1												1		1	3	1	0	0	5
4	シャコガイ科	ヒメジャコ	Ⅱ-2-a															1				0	1	0	0	0	1
5	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c					1											1			1	0	1	0	0	2
6	マルスダレガイ科	ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c		1						1											1	1	0	0	0	2
7		リュウキュウアサリ												1					1	2	1	1	3	0	0	1	4
8		オイノカガミガイ	Ⅱ-1-c																1	1		1	1	0	0	0	2
合計				1	1	1	2	2	0	1	1	0	0	1	1	0	0	1	3	4	1	6	9	3	0	2	18
個体数				2		5					1		2				1		7			18					

ーチャラのクブー

第82表　貝類出土状況(巻貝)

巻貝 ＼ 出土地　層序				Ⅰ			Ⅱ	TP1Ⅱ		TP1Ⅳ			TP2	TP2Ⅱ	TP2Ⅲ	合計			個体数
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	殻頂	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	破片	完形	完形	殻頂	破片	
1	ニシキウズ科	サラサバティラ	Ⅰ-4-a			1										0	0	1	△
2	リュウテン科	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a						1							0	0	1	△
3	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8										1			1	0	0	1
4	オニノツノガイ科	オニノツノガイ科不明					1									0	1	0	1
5	ウミニナ科	イトカケヘナタリ	Ⅲ-0-d		1											0	1	0	1
6		リュウキュウウミニナ													1	1	0	0	1
7	ソデボラ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c							1	1					1	1	0	2
8	アヤボラ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a									1				0	0	1	△
9	アクキガイ科	アクキガイ科不明						1								0	1	0	1
10	ミノムシガイ科	ミノムシガイ		1												1	0	0	1
11	オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	Ⅰ-3-a												1	1	0	0	1
12	イモガイ科	イモガイ科不明A												1		0	0	1	△
13		イモガイ科不明B					1									0	1	0	1
14	キセルガイ科	ツヤギセル		4												4	0	0	4
15	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8										1			1	0	0	1
16	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9										2			2	0	0	2
合計				5	1	1	2	1	1	1	1	1	4	1	2	12	5	4	17
個体数				6			2	1		2			4	1	2	17			

第83表　貝類出土状況(二枚貝)

二枚貝 ＼ 出土地　層序				Ⅰ					Ⅱ	TP1Ⅰ		合計					個体数
				完形		殻頂		破片	破片	完形		完形		殻頂		破片	
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R			L	R	L	R	L	R		
1	ウグイスガイ科	ミドリアオリガイ	Ⅰ-1-a				1					0	0	0	1	0	1
2	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	5	2		1					5	2	0	1	0	8
3	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1								1	0	0	0	0	1
4	シャコガイ科	シラナミ	Ⅰ-2-a							1		1	0	0	0	0	1
5		シャゴウ	Ⅰ-2-c						2			0	0	0	0	2	△
6	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c					1				0	0	0	0	1	△
7	シオサザナミ科	リュウキュウマスホウ	Ⅱ-1-c		1							0	1	0	0	0	1
8	マルスダレガイ科	ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c	1	5		1	1				1	5	0	1	1	7
9		オイノカガミガイ	Ⅱ-1-c					1				0	0	0	0	1	△
合計				7	8	0	3	3	2	1	0	8	8	0	3	5	19
個体数				18						1		19					

图　　版

1

0　5 cm

1　2　3　4

5

0　5 cm

ヤッチのガマ　図版107

上：ブタ　1.右下顎骨$P_{1(2,3,4)}M_{1(次),2}$キズあり

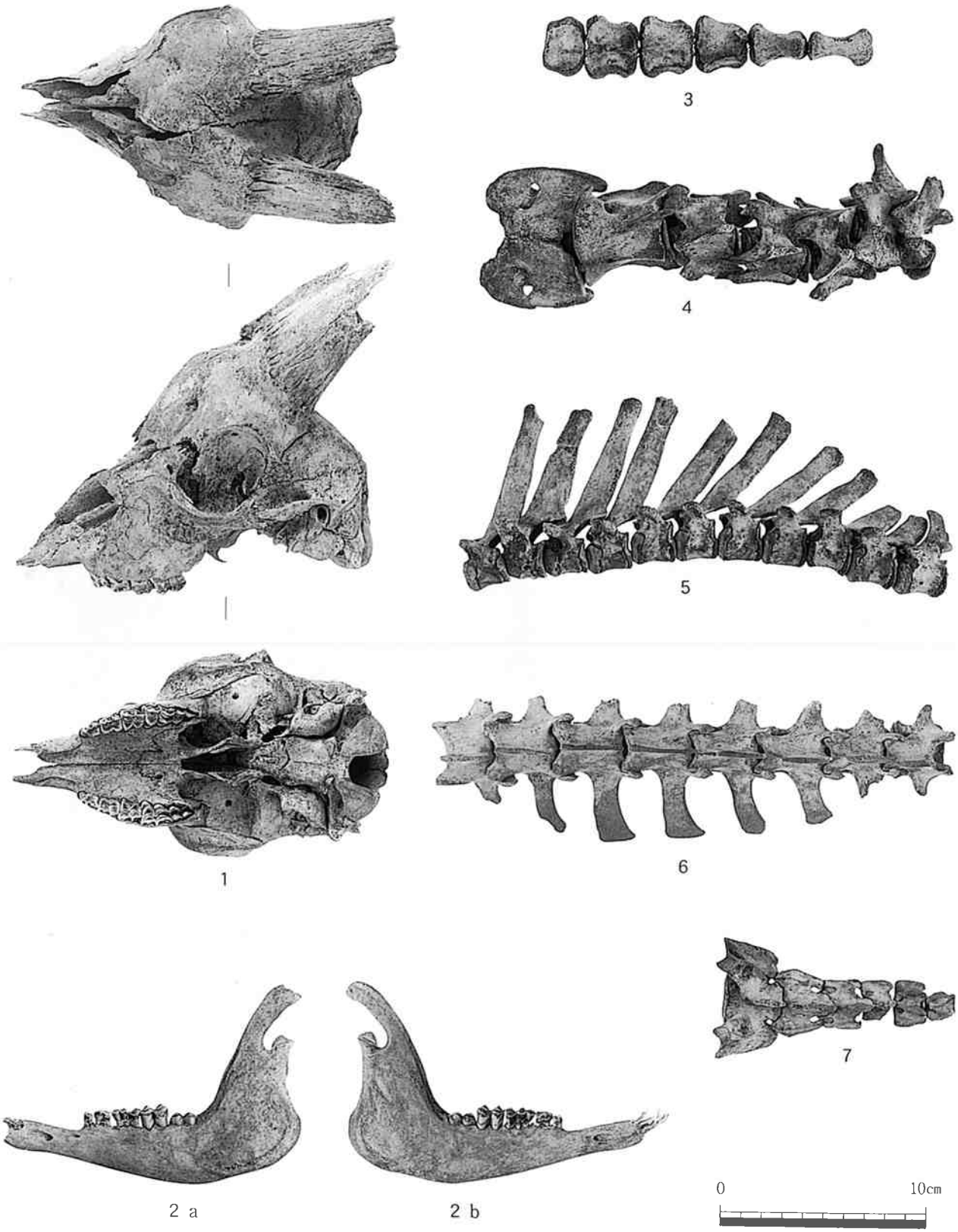
下：ウシ　1.右上顎骨P^4　2.左上顎骨M^3　3.右下顎骨P_3　4.右下顎骨P_4　5.左下顎骨M_3

ヤッチのガマ　図版108

トリA　　1.右尺骨 近位部～遠位端 2.左大腿骨 完存 3.左大腿骨 完存
トリB　　4.左尺骨 完存 5.左中手骨 完存 6.右大腿骨 近位部～遠位部
フクロウ？7.胸骨 8.左上腕骨 遠位端 9.左橈骨 完存 10.左中足骨 完存
カラス　　11.胸骨 12.右尺骨 近位端 13.右尺骨 遠位端 14.左尺骨 遠位端

ヤッチのガマ　図版109

ヤギ　1.右下顎骨$I_{(1)}$ $dm_{3,4}$ M_1　2.右下顎骨$dm_{3,4}$ $M_{(1)}$　3.左肩甲骨 遠位端キズあり
4.右上腕骨 近位骨端はずれ～遠位端キズあり　5.右尺骨 近位骨端はずれ～骨体　6.左橈骨 近位端～遠位部
7.左中手骨 近位端～遠位部　8.左寛骨 腸骨部　9.左大腿骨 近位骨端はずれ～骨体　10.右脛骨 完存キズあり
11.右踵骨 近位骨端はずれ～遠位端　12.右距骨 完存　13.左中足骨 近位端　14.右基節骨 完存

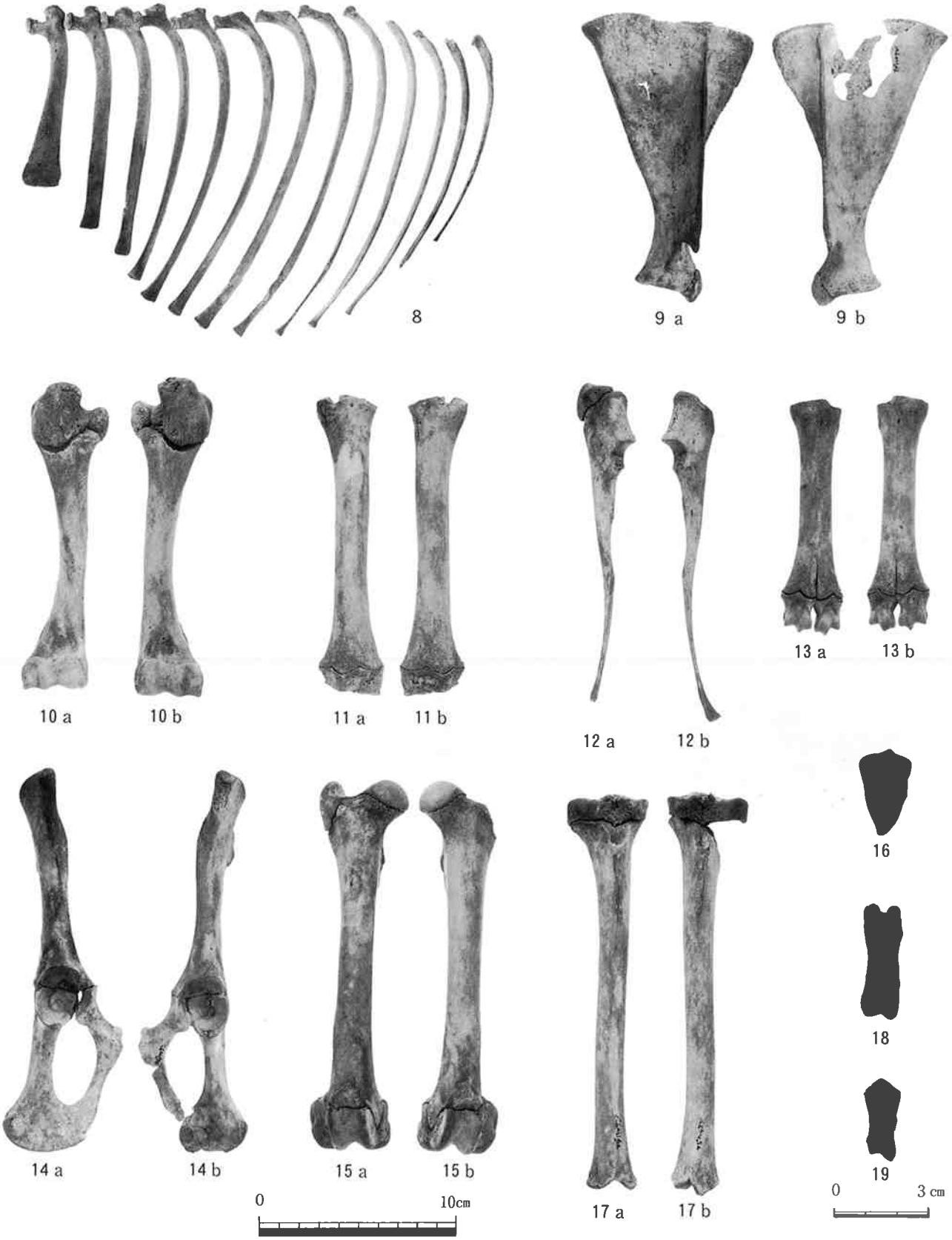


不時発見　図版110

ヤギ　1.左右上顎骨 $dm^{2,3,4}M^{1,2}$

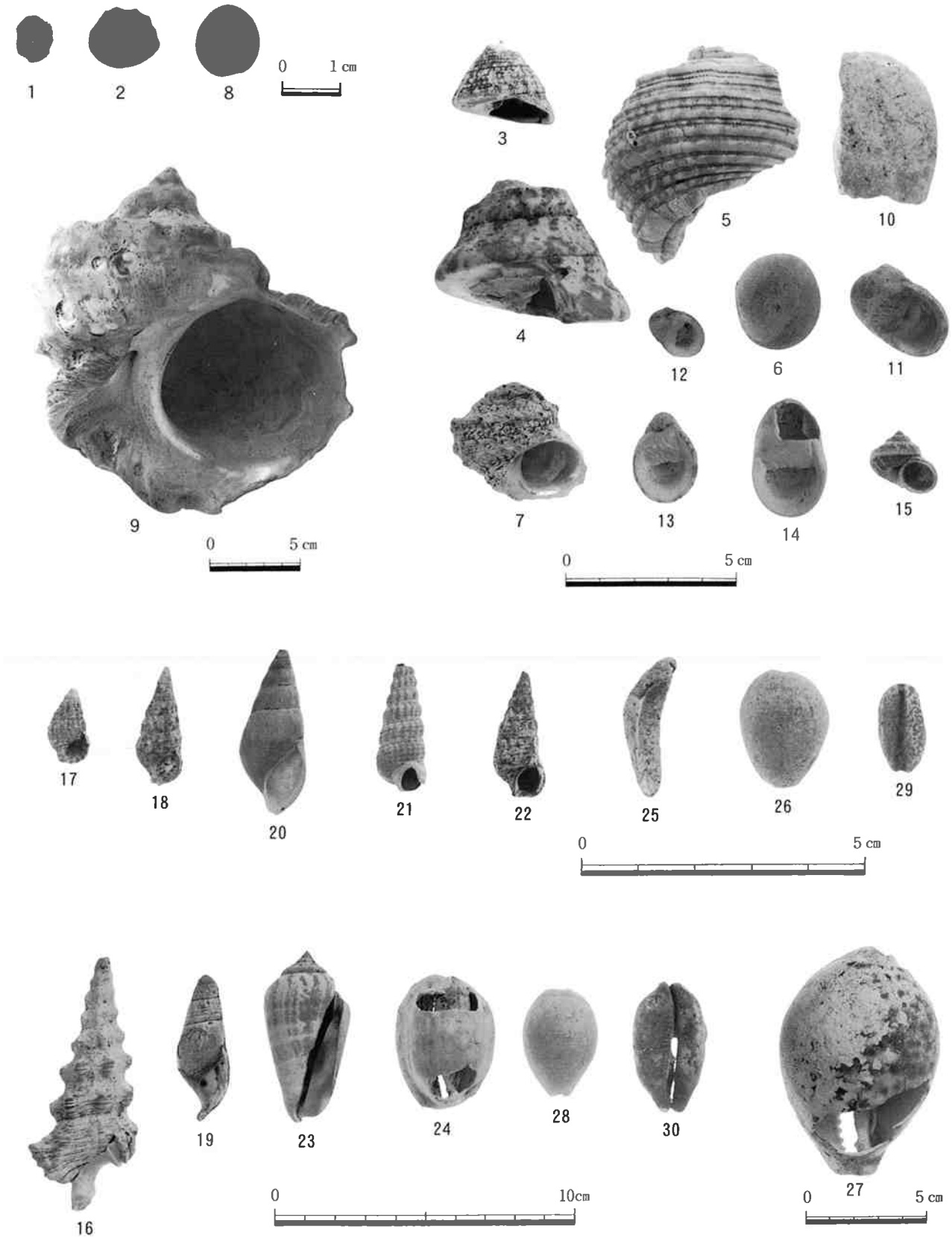
2 a.左下顎骨 $I_{(1)}$ $dm_{2,3,4}M_{1,2}$　b.右下顎骨 $i_{1,2,3}$ $I_{(1)}$ C $dm_{2,3,4}M_{1,2}$

3.胸骨　1～6　4.頸骨　1～5　5.胸推　1～11　6.腰推　1～8　7.仙骨～尾骨



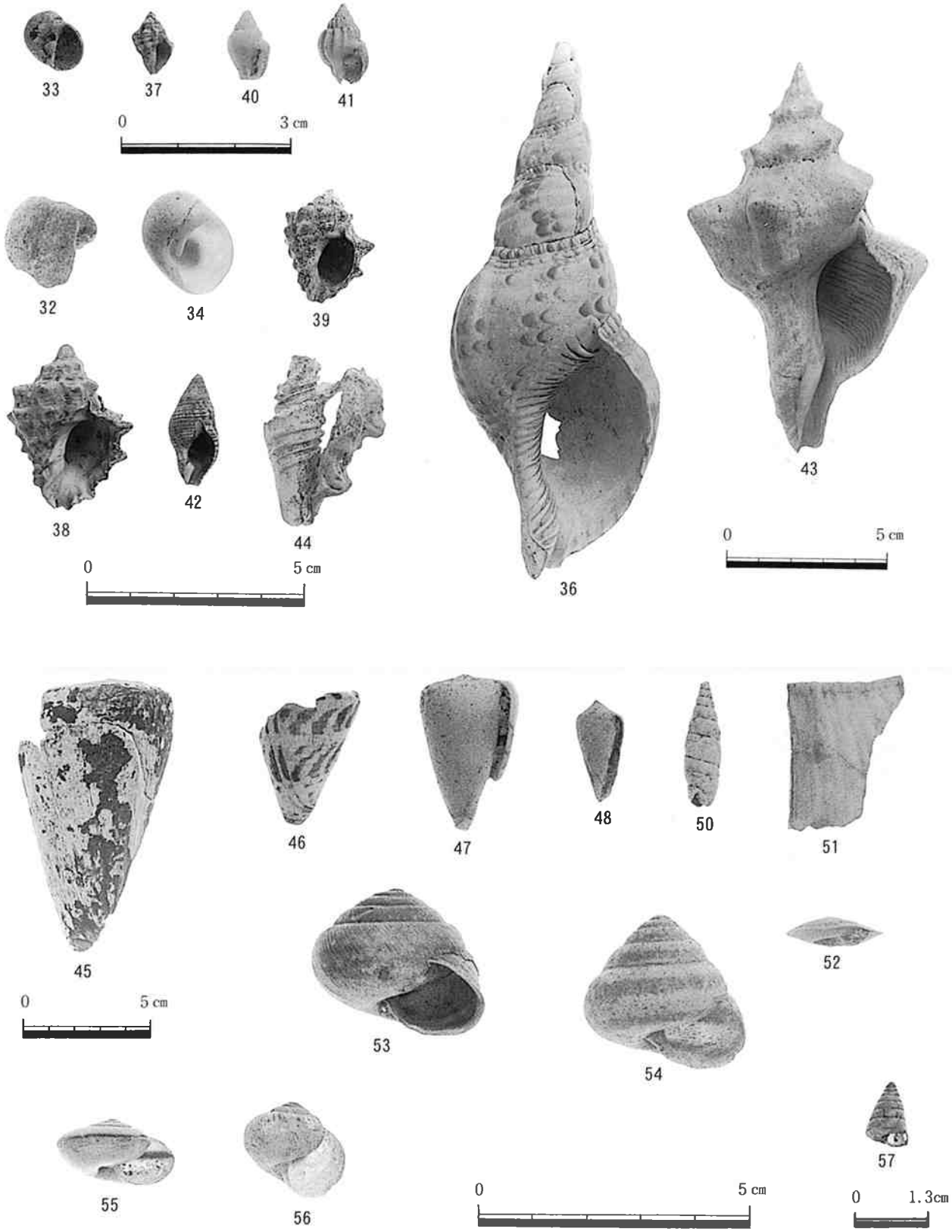
不時発見　図版111

ヤギ　8.左助骨　1～13　9a.右肩甲骨　完存　b.左肩甲骨　完存　10a.右上腕骨　完存　b.左上腕骨　完存
11a.右橈骨　完存　b.左橈骨　完存　12a.右尺骨　近位端～遠位部　左尺骨　両端はずれ
13a.右中手骨　完存　b.左中手骨　完存　14a.右寛骨　完存　b.左寛骨　完存　15a.右大腿骨　完存　b.左大腿骨　完存
16.右膝蓋骨　17a.右脛骨　近位端～遠位骨端はずれ　b.左脛骨　近位端～遠位骨端はずれ　18.右基節骨　19.右中節骨



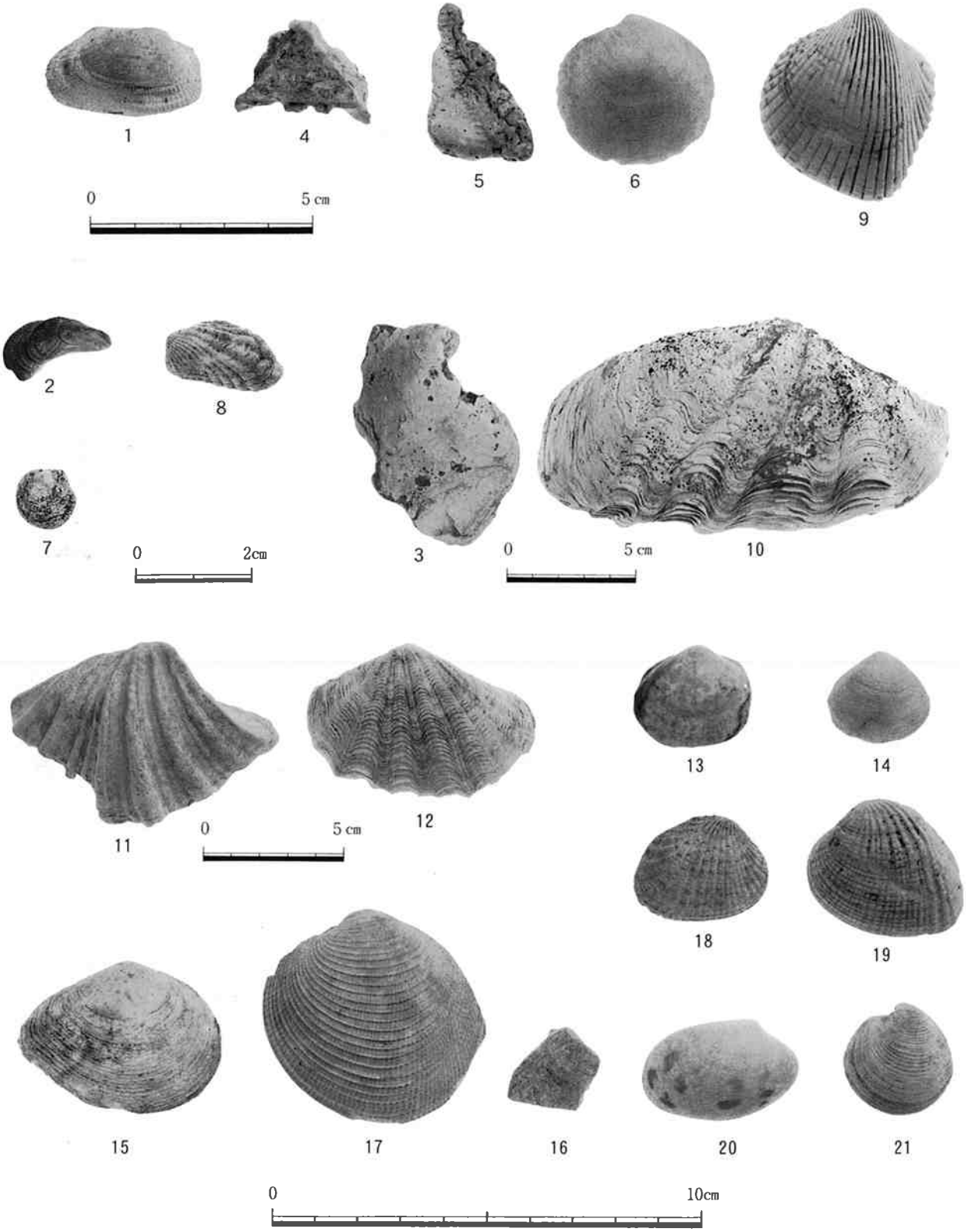
ヤッチのガマ　図版112

巻貝1　1.ヒメコザラ 2.オキナワイシダタミ 3.ニシキウズ 4.サラサバティラ 5.チョウセンサザエ
6.チョウセンサザエの蓋 7.カンギク 8.カンギクの蓋 9.ヤコウガイ 10.ヤコウガイの蓋
11.コシダカアマガイ 12.マルアマオブネ 13.アマオブネ 14.ニシキアマオブネ 15.オキナワヤマタニシ
16.オニノツノガイ 17.カヤノミカニモリ 18.オニノツノガイ科不明 19.スグカワニナ 20.カワニナ
21.イトカケヘナタリ 22.リュウキュウウミニナ 23.マガキガイ 24.ヤクシマダカラ 25.キイロダカラ
26.ハナビラダカラ 27.ホシダカラ 28.ホシキヌタ 29.タカラガイの一種A 30.タカラガイの一種B



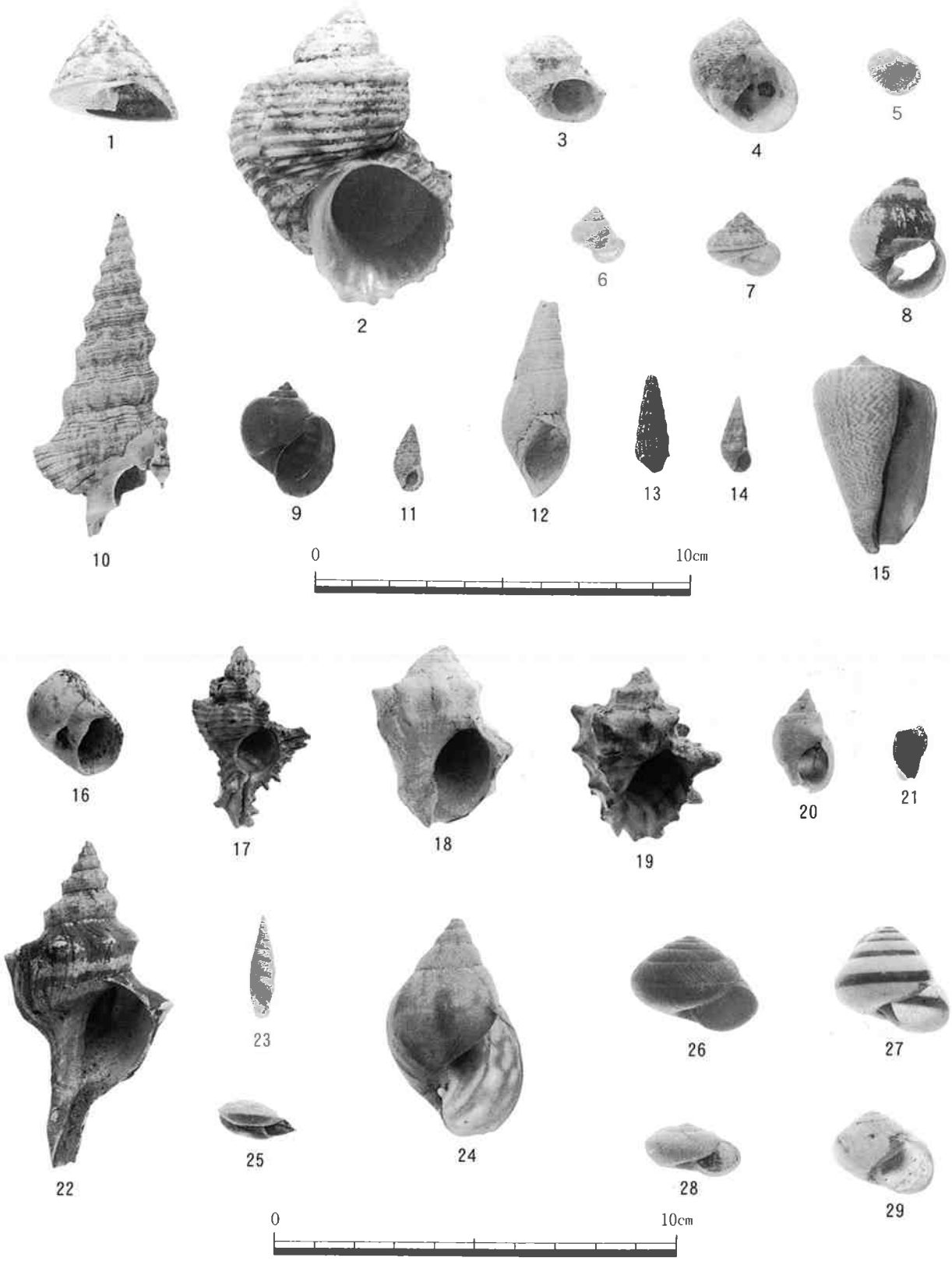
ヤッチのガマ　図版113

巻貝２　32. トミガイ 33. ホウジュノタマガイ 34. トミガイの一種 36. ホラガイ 37. ヨウラクレイシガイダマシ
38. ツノテツレイシ 39. テツレイシ 40. フトコロガイ 41. ヒメオリイレオムシロガイ 42. シマベッコウバイ
43. イトマキボラ 44. コオニコブシ 45. クロフモドキ 46. マダライモ 47. サヤガタイモ 48. アジロイモ
50. ツヤギセル 51. アフリカマイマイ 52. オオカサマイマイ 53. シュリマイマイ 54. オキナワヤマタカマイマイ
55. パンダナマイマイ 56. オキナワウスカワマイマイ 57. トウガタホソマイマイ



ヤッチのガマ　図版114

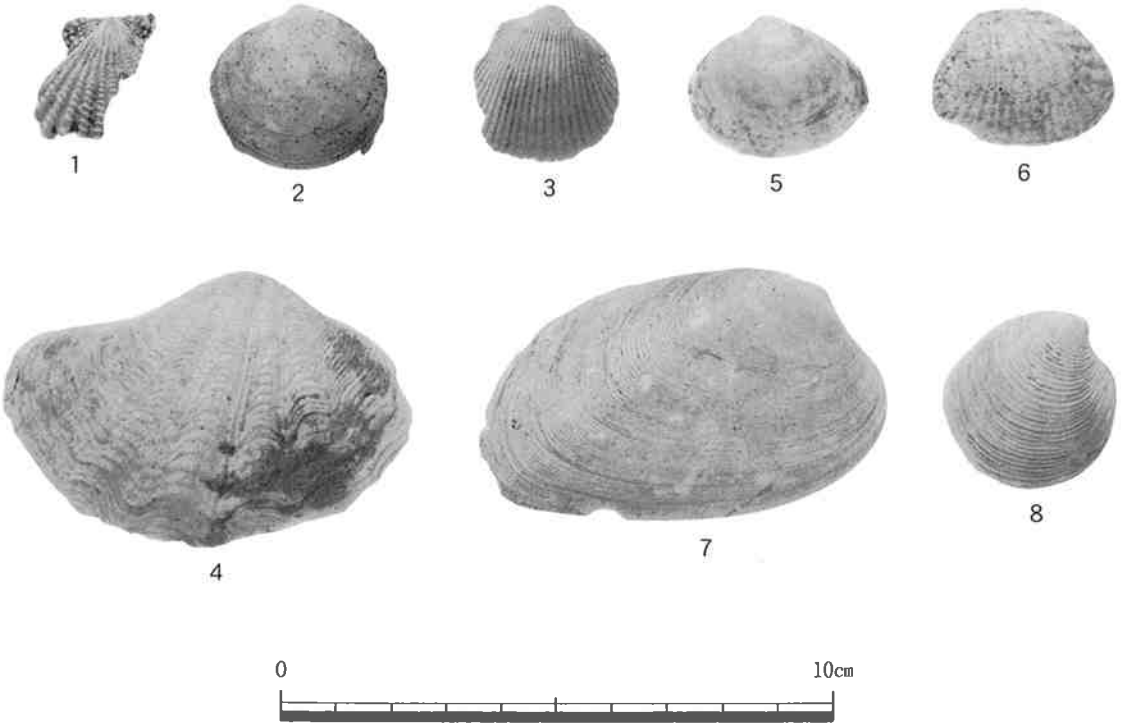
二枚貝　1.エガイ　2.ヒバリガイモドキ　3.クロチョウガイ　4.メンガイの一種　5.カキの一種　6.ウラキツキガイ
7.カネツケザルガイ？　8.クロフトヤマガイ　9.カワラガイ　10.シラナミ　11.シャゴウ　12.ヒメジャコ
13.リュウキュウバカガイ　14.イソハマグリ　15.リュウキュウシラトリ　16.リュウキュウマスホウガイ
17.ヌノメガイ　18.ホソスジイナミガイ　19.アラスジケマンガイ　20.ヒメリュウキュウアサリ？
21.オイノカガミガイ

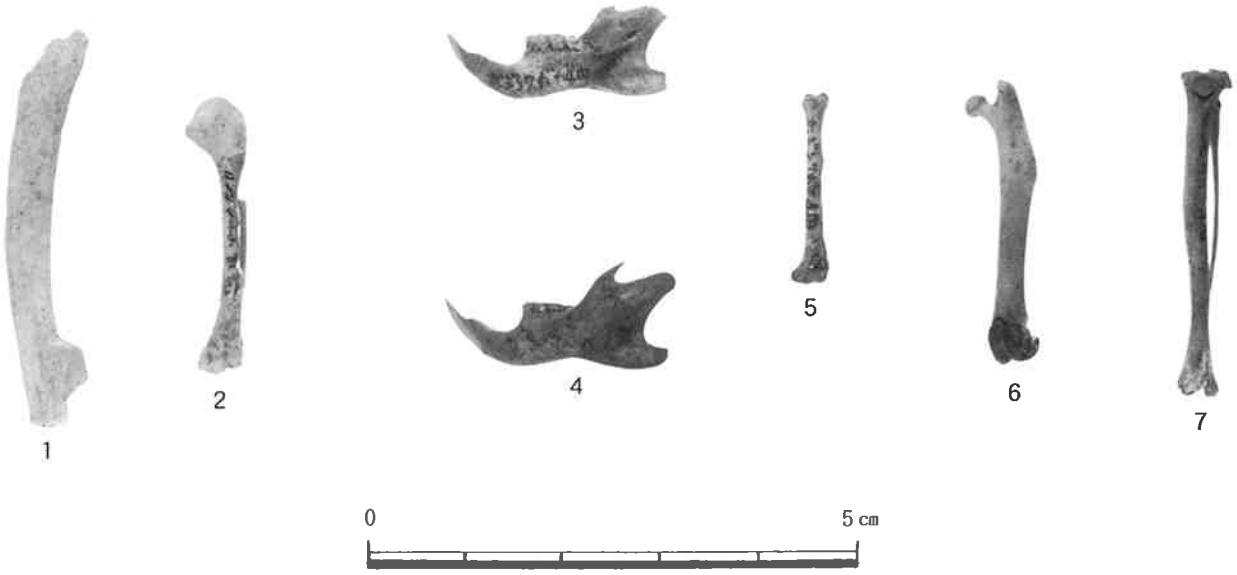


ヤッチのガマ周辺の墓　図版115

上：巻貝　1.ニシキウズ 2.チョウセンサザエ 3.カンギク 4.コシダカアマガイ 5.マルアマオブネ
6.アオミオカタニシ 7.オキナワヤマタニシ 8.マルタニシ 9.スクミリンゴガイ 10.オニノツノガイ
11.カヤノミカニモリ 12.スグカワニナ 13.イトカケヘナタリ 14.リュウキュウウミニナ 15.マガキカイ

下：巻貝　16.トミガイの一種 17.ガンゼキボラ 18.ツノレイシ 19.ツノテツレイシガイ 20.イボヨフバイ
21.シマベッコウバイ 22.イトマキボラ 23.ツヤギセル 24.アフリカマイマイ 25.オオカサマイマイ
26.シュリマイマイ 27.オキナワヤマタカマイマイ 28.パンダナマイマイ 29.オキナワウスカワマイマイ

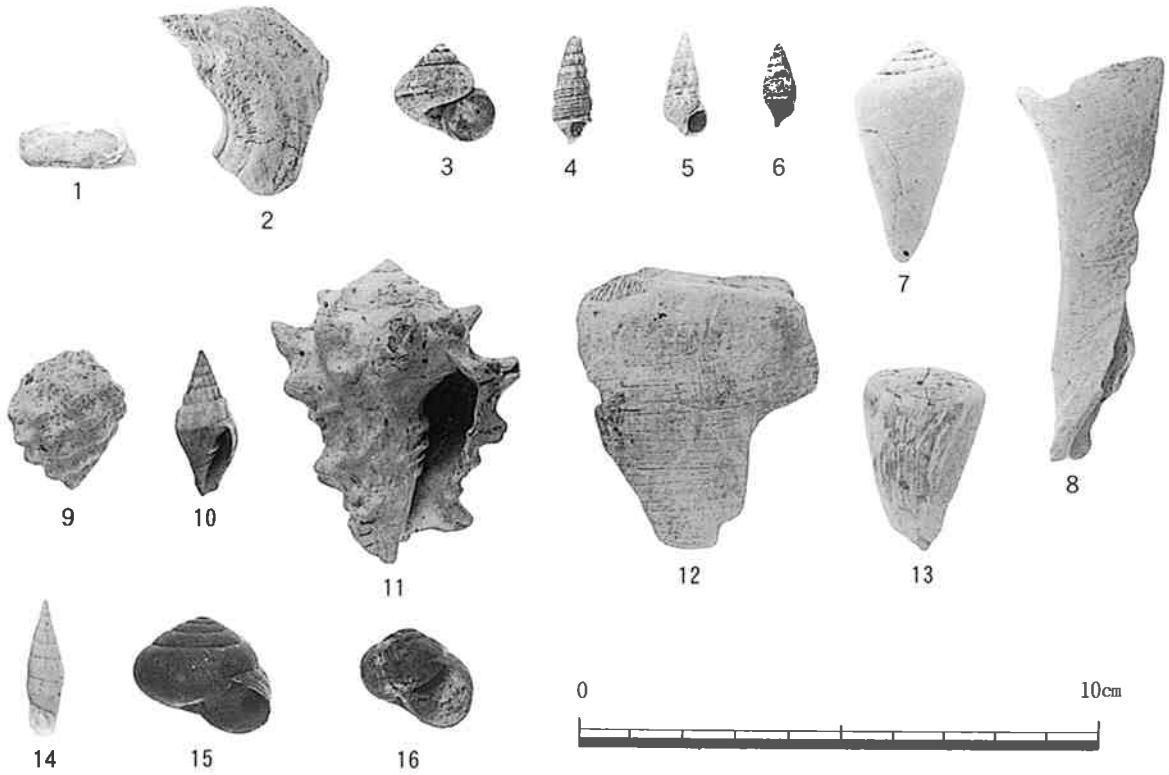


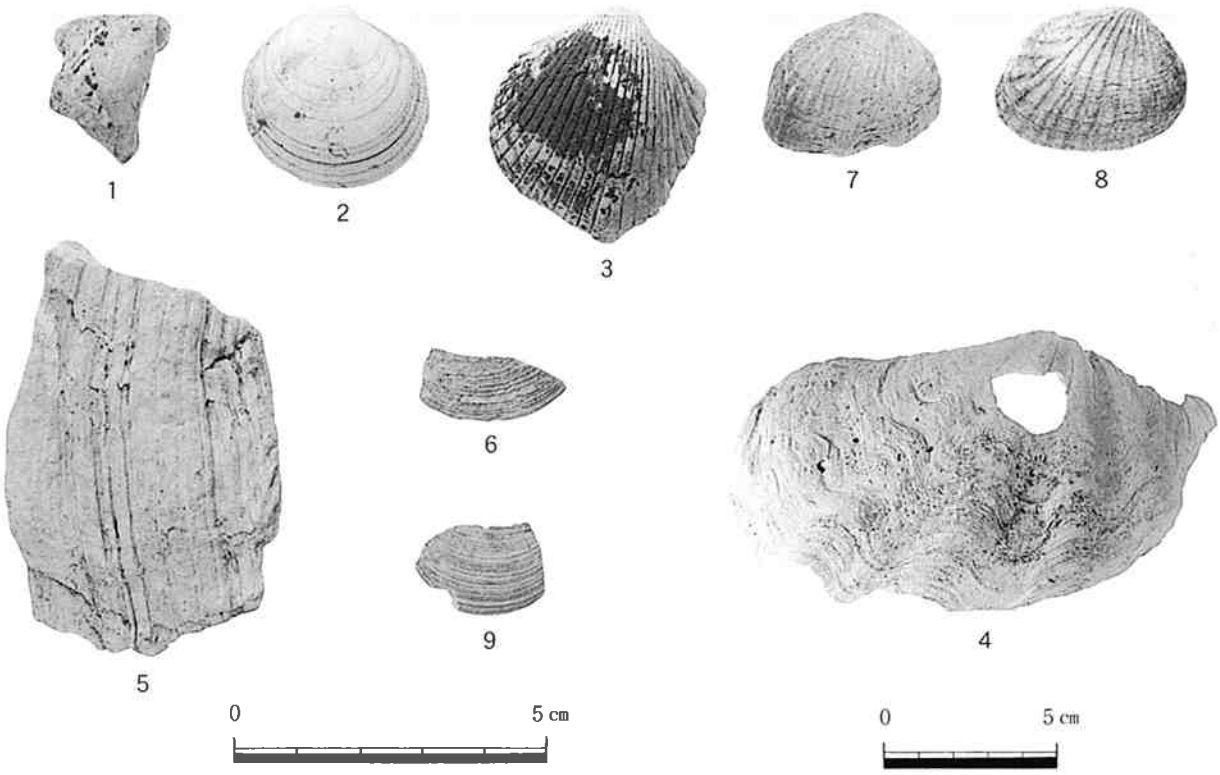


ヤッチのガマ周辺の墓　図版116

上：二巻貝　1.チサラガイ　2.ウラキツキガイ　3.カワラガイ　4.ヒメジャコ　5.リュウキュウバカガイ
6.ホソスジイナミガイ　7.リュウキュウアサリ　8.オイノカガミガイ

下：トリ　1.右肩甲骨 近位端～遠位部　2.左上腕骨 完存
ネズミ　3.右下顎骨　4.左下顎骨　5.左上腕骨 近位骨端はずれ～遠位端
6.左大腿骨 完存　7.左脛骨・腓骨 近位端～遠位骨端はずれ





チャラのクブ　図版117

上：巻貝　1.サラサラバティラ　2.チョウセンサザエ　3.オキナワヤマタニシ　4.イトカケヘナタリ
5.リュウキュウウミニナ　6.オニノツノガイ科不明　7.マガキガイ　8.ホラガイ　9.アクキガイ科不明
10.ミノムシガイ　11.コオニコブシ　12.イモガイ科不明A　13.イモガイ科不明B　14.ツヤギセル
15.シュリマイマイ　16.オキナワウスカワマイマイ

下：二枚貝　1.ミドリアオリガイ　2.ウラキツキガイ　3.カワラガイ　4.シラナミ　5.シャゴウ
6.リュウキュウシラトリ　7.リュウキュウマスホウガイ　8.ホソスジイナミガイ　9.オイノカガミガイ

第８部　上江洲・西銘における葬制と祖先祭祀

第１章　はじめに

久米島は、家譜・日記・規模帳などを含めた史料が多く発見されている。そのなかで具志川村役場では、道光11（1813）年の『久米具志川間切規模帳』がみつかり、琉球大学付属図書館に保管されている。その史料は、当時の久米島の社会状況を知るうえで、欠かせない史料となっている（註１）。

ヤッチのガマに納められた蔵骨器には「乾隆」、「同治」、「道光」などといった年号の銘書が確認できた。当時の習俗を知るうえで欠かせない資料は、やはり久米島に残されている史料である。しかしながら、それは一部の上層階級の人たちが受容したと考えられる。上江洲や西銘に暮らす役人以外の村びとたちは、どのような習俗を保持していたのであろうか。その点について現在の上江洲・西銘の習俗をもとに聴取や観察の調査で補った。

したがって、今回の目的は聴取や観察の調査で得た第一次資料と久米島の第二次資料（史料など）を照らし合わせながら、上江洲と西銘の葬制と祖先祭祀について言及する。さらにヤッチのガマという遺跡が村びとにとって、どのような記念物であったのかを村びとの口碑や体験談から浮き彫りにしたい。

調査は、2000年８月１日から６日、同年８月９日から15日、同年12月25日から28日、2001年２月７日から８日にかけて行った。日数は、計20日間である。

第２章　調査地の位置と環境

久米島は、沖縄本島の属島とされている。その面積は55平方キロで、県内でも石垣島と宮古島に次ぐ大きな島であり、位置は本島から西におよそ100ｋｍを隔てた場所にある。それは自然・文化の面でも独自性をもち、多くの科学領域によって久米島の自然と文化が明らかにされつつある（註２）。

人文科学だけでなく、自然科学の分野でも久米島はおもしろい。その理由は、地質にあらわれており、沖縄諸島の地質や安山岩などの地層が確認されている。久米島には、沖縄諸島などでみられる地質が縮図されているのである。その特徴は地質だけでなく、村びとの生活にも反映されている。

上江洲・西銘・久間地や山里・仲地・仲村渠・宇江城などの丘陵地形に暮らす村びとは、屋敷の石垣や礎石・墓・グスクに宇江城岳層の石材を用いている。

阿良岳層に立地している儀間・嘉手苅や山城・島尻などでは、阿良岳層の石材を墓や魚垣などへ利用している。とくに奥武島の海岸でみられる畳石は、久米島の観光名勝である。その風景は、もともとボコボコとした火山の岩石が海の浸食によってできた地形であり、中国福建省の眉州島でもみられる。久米島の地層が大陸と同じ地質をもつ証しとなろう。また、久米島産の安山岩は沖縄県庁や琉球大学の門の碑などに利用されている。

島尻マージに属する大原・北原の海岸では、ビーチ・ロックを切り取った痕跡がみられる。それは、鳥島や大原・北原で屋敷の石垣に利用されている。琉球石灰岩の丘や山に亀甲墓や破風墓を造営する技術も島尻マージ地域に多い。

沖積層に立地する仲里村の比嘉・謝名堂・真謝・宇根などは、鳥島・大原・北原と同じように琉球石灰岩を利用した石垣がみられる。とくにそれらの地域で目立つ景観がフクギの屋敷林である。日本の隅々まで歩いた宮本常一は真謝のフクギ林に注目した。その村がフクギに囲まれるようになった理由を宮本は、その木を染料に用いるためであり、真謝の村が久米島紬の産地であると考えた（註３）。

いかに久米島の村びとが島の自然や島へもたらされた資源を利用したかは、その村々を歩くだけで村の風景が教えてくれる。そのような村の風景のなかには、村びとの祖先の努力と知恵が隠されているのである。

第１節　カンジン地区の自然的特質

具志川村字西銘の原地に属するカンジン原の特徴を地図より位置づけた方は、仲松弥秀がはじめてである（註４）。

久米島の地形図を全体的にみれば、カンジン原と周辺の村々との違いがはっきりしてくる。それは、山の丘陵

に立地する村より上江洲・西銘の西側から大原・北原にかけての場所と比べると、等高線が少なく、全体が白っぽくなっている。それは、大原あたりの地形が平坦地であることを示す。

大原・北原を含めたカンジン原の全体図には、「○」の表記をしている等高線がいくつかみられる。それは、地理学や地学の研究者からカルスト地形と呼ばれている。久米島の西側では、泥灰岩層の上にサンゴ礁が堆積して形成された琉球石灰岩から成り立っている。とくに標高20～50mをもつ大原・北原の一帯には、長い歳月の間に降った雨水で琉球石灰岩が浸食し、地表面に凹凸地が形成されている（註５）。その理由から考えると、大原付近は、沖縄本島に多くみられる隆起珊瑚礁台地であることがわかる。また、久米島の地質図をみても久米島西側に琉球石灰岩が集中している。それらの地形は、沖縄本島の本部半島や北谷町・嘉手納町・沖縄市・勝連町などの琉球石灰岩でも確認できる。

上江洲・西銘の西側から大原・北原にかけての地質は、島尻マージの土壌である。その土壌の層は、浅く、排水性に優れている。そのために干ばつの影響を受けやすい。耕作や肥培管理の作業は行いやすく、サトウキビやパイン、芋やタバコの栽培に適している。大原は、久米島一の平坦な面積を保有している。しかしながら、大原の地質は、雨水の保水力が極めて弱いため、雨が降っても乾きやすい。だから、大原の近くに川はみられない。上江洲・西銘や大原・北原の村びとたちは、「雨が降らない年は、とくに農作物に被害がでるさ。」と体験談を語る。

それらの理由から具志川村は、農地改革のひとつとして、「地表湛水型地下ダム」の建設を行った。そのダムの大きさは、18ha（野球場の約18倍）である。151万ｔ（25mプールの約5000杯分）の水を貯めることができるという（註６）。

歴史をさかのぼっても久米島は、干ばつの被害が多いようだ。『仲里間切旧記』には、雨乞いを願う神唄が多くみられることからも、島の水不足の問題がうかがえられる（註７）。久米島は、沖縄県のなかでも年降水量が多い地域として知られている（註８）。しかしながら、山地の標高が高い久米島では、島尻マージなどの要因によって、水不足の問題は途切れない。また、グスク時代から近世にかけて、稲作の技術をもった民たちは、大原あたりに村を形成しなかったと思われる。その理由は、水源が得られにくい条件からきているのであろう。

1 カルスト地形の森（具志川村大原）

2 オファーブアブ

3 祖先を迎える風景（上江洲・旧暦７月13日）

4 家族で仏前へ拝む（上江洲・旧暦７月13日）

雨が降り、地面に浸透した水は、宇江城岳の山脈から宇江城の北側や大原の南側などの地下へ流れ込んだり、大原・北原一帯の平坦地から地下へしみこんだりした地下水が、それらの海岸や海底に湧き出ていると考えられる。その結果、比屋定の堂ガー（井戸）や海岸、大原のシンリバーマなどには、いくつもの湧水が確認できる。それは、島尻マージに浸透した雨水が泥灰岩層と琉球石灰岩の間から湧き出る真水である。また、大原のイノーや比屋定バンタなどでは、未発達のサンゴ礁がみられる。それは、急な斜面が多い久米島の地形をあらわしている。山地から浸透した真水は、地下を通り海岸周辺に流れ出る。そこで、丘陵地では地表面に雨水が溜まりにくく、比屋定バンタや具志川グスクなどの海岸のような風景を形成したと考えられる。

植物の景観においてもカンジン原では、興味深い資料がみられる。大原・北原一帯は、カルスト地形のために表面の凹凸が著しい。雨水の浸食によって残った琉球石灰岩は、森や山になり、窪地やガマ（洞穴）、ドリーネを形成している。

島尻マージで暮らしていない方々には、想像つきにくい風景であるかもしれない。泡盛の久米仙のＣＭに出てくる森の景観をご存知であろうか。よく夕方のニュース放送の後には、平坦地のサトウキビ畑にポツンそびえる森のCMが流れている。その森は、国頭マージに植生する植物と島尻マージに植生する植物とが混在しながら共生している点に特徴がある（Ｐ409－１）。

久米島空港の近くを車で走ると３ｋｍほども続く琉球松の並木がみえてくる。このマーチュー（琉球松）を大原の村びとは「蔡温松」と呼んでいる。その由来は、「具志頭親方という蔡温が久米島のフンシ（風水）を看た。そこで、彼の働きかけで、北原のあたりに松を植えさせた。」と伝えられている。

このようにカンジン原から大原・北原にかけてのカルスト地形は、自然的現象だけでなく、神唄や村びとの経験からでも特徴的な地形と地質をもっている。

第２節　ミシマの村と大原・北原の関係

カンジン原にあるヤッチのガマは、上江洲・西銘・久間地の祖先が葬られた場所であるとそれらの村びとから口碑の伝承が残されている。よく村びとたちは、上江洲・西銘・久間地をミシマ（３つの村の意）と呼んでいる。それらはもともとひとつの村落から拡大し、分かれた痕跡を残している。

『琉球国由来記』（1713）には具志川間切の西目村がみえる。その所在する御嶽名は、上江洲御嶽（コシヤテ森大ツカサ若ツカサガナシ）、富祖古御嶽（ソノキヤジノ大ツカサ若ツカサガナシ）、シラシ御嶽（ヨキノタケ大ツカサ若ツカサガナシ）、ウルル御嶽（セノク森オモヒ君ガナシ）である。これらの神名は、沖縄本島などと違い具体的な名前が列挙されている。上江洲御嶽の神名は、「コシヤテ森」とある。その神名は腰当の意であろう。仲松弥秀は、腰当について次のように述べている。

> 腰当とは、幼児が親の膝に坐っている状態と同じく、村落民が祖霊神に抱かれ、その膝に坐って腰を当て、何らの不安も感ぜずに安心してきってよりかかっている状態をさしていう。
>
> このように、村落民と何の隔りもなく、親しみより添う、いわば村落民と一体になっている神、これがクサテ森に祀られている神であって、常時村落民と共にあり、これを抱き、護っている、いわば村落民がこの上なく信頼している神である（註９）。

南島の村々を歩いた仲松は、祖霊神を「村落の鎮守の神であり、守護神である『おそいする神』」とし、その神が「村びとからすれば『腰当神』」と位置づけた。その腰当神が「鎮座している御嶽を『腰当森』」と述べている（註10）。豊富な事例から仲松は、腰当の配置をもつ景観が自然的村落を保持していると指摘した。さらに仲松は、『琉球国由来記』に西目ヲヒヤ・西平ヲヒヤ・新垣ヲヒヤの名称がみえる点に注目し、実地調査に基づいて「ヲヒヤ（大比屋）は根人と同質異名と考えられることから推測すれば、この西目村は三村（集団）の合併によって形成されていると見ることができる。」と考えた（註11）。

仲松の考えは、その他の資料からでも補足できる。西銘の村びとは、上江洲家付近にあった新垣村と西銘公民館付近にあった垣花村が合わさってできた村が西銘であると口碑を伝えている。この地名は、『おもろさうし』巻23の「くめの二間切おもろ御さうし」（1623）に「あらかきのみや」とか「あらかきのもり」と出ている。また、村の遺跡・記録・伝説・おもろから村の発生を推測した仲原善忠は、『久米島史話』（1940）のなかで「久米島の初まりは恐らく具志川の西銘だと思う。」と述べている（註12）。

これらの資料から考えると西銘の村落は古い歴史があるようだ。

『琉球国由来記』の記録では、上江洲・富祖古・シラシ（白瀬）・ウルルの御嶽がいずれも西目（現在の西銘）の管轄になっている。その記述から推測すると、上江洲の村落は西銘からの分かれた村であると考えられる。上江洲の村びとは、「西銘から上江洲は分家した」と口碑を伝えている。

久間地の村落は、昭和14（1939）年に西銘村から分離し行政区となった。『美濟姓家譜』の正徳３（1713）年に西銘と上江洲の両村から23戸のチネー（家内）が久間地原へ移り、村を仕立てたと記されている。その理由は、西銘と上江洲の村が一ヶ所にあり、狭い場所に人家がまとまっていたために大火事があった、と述べられている（註13）。上江洲や西銘の村びとによれば、五枝松の北側にはミージマ（新しい村）と呼ばれる村があったと口碑を伝えている。その村では、伝染病が流行し、多くの死者を出した。その死者を上江洲と西銘の村びとたちは、ヤッチのガマに葬ったと言い伝えている。

これらのミシマの特徴は、村の上空や地図からみると家屋が密集している。地理学者たちは、このような特徴がある村を「集村」と呼んでいる（註14）。

上江洲などの密集した村落と違って、具志川村の大原と北原は比較的新しい時代に開拓された村である。それは、飛行機から村の上を覗いたり、地図をみたりするとわかる。密集の屋敷地はみられなく、広範囲に散在している。村落の研究者は、その散在している村を「屋取集落」と位置づけている（註15）。しかし、大原と北原の屋取集落は、沖縄本島や久米島の銭田と真我里と違った村の形成をたどっている。

大原の開墾は、明治18年４月にはじまった。それは、政府の士族授産金による開墾企画からうまれた。明治14年に喜舎場朝賢と山内成熹と知念政憲が首里や那覇の士族20名の同士を募り、明治18に久米島へ渡った（註16）。そのことを大原の村びとたちは、「クニワタイ」と表現している。

大原は、明治43（1910）年に島尻郡教育部会から開墾などの業績を高く評価され、二宮尊徳の銅像が贈られた。その表彰を受けた大原の村びとは、報徳神社を建て、そのなかに移住当時から祀ってきた土地神と共に合祀した。ちなみに北原は、大正９（1920）年に大原から行政区として独立した。その行政区は、大原の村落の発展にともない南側の川畑から北側のナガサクにまで拡大し、長タケ並松以北を大原から分割した。

移住してきた当初の大原の人たちは、久米島に知り合いもいなかった。そこで、上江洲の人たちからハルヤー（畑小屋）を間借りし、畑も借りていた。自分たちの畑だけでなく、上江洲の地主の畑も耕していた。その時から、屋取の人たちは、少しずつ、お金を貯めていったという。

北谷村からやって来た人はハワイに移住しようかと思っていたが、久米島は裕福に暮らせると聞き、上江洲の知人をつてに船でやってきた。夜中に兼城へ着いたある翁は、孫を担ぎながら上江洲まで歩いた。それから上江洲の知人のハルヤーを借り、生活の基盤を整えていった。しかし、その場所には水がなく、間借りをした人たちは困った。そこで、洗濯は五枝の松付近の川で行い、飲み水はヤッチヌメーあたりのウフドー（大道原）から水を汲んできた。水の運搬は、男の子がふたつのブリキ箱を棒で担ぎ、急な坂道を上り下りしたという。

その他にも水源地はある。ある大原の老婆によると、「昔はね、若い頃によく大原のミジワキにいってさ、服や着物、茶碗や芋などを洗ったさ。とくにこの辺りの石から湧水がよくでよったわけよ。」と体験談を話してくれた。その湧水の由来について、村の古老は、「大原にやって来た私たちのおじいさんたちは、最初に行った作業が飲み水の場所を探すことだったてよ。生活に必要な飲み水を得るためにミジワキを探したという話さ。」と当時の開拓状況を教えてくれた。その時にみつけた湧水の上に大きな石があったといわれている。その石は、報徳神社の左側に記念して祀られている。

このように大原の村びとは、荒地を開墾した理由で他の字の村びとから「カイクン」と呼ばれている。当時の大原では、島尻マージの土壌で水田を拓くことは不可能であったため、換金作物のサトウキビを栽培していた。それが久米島における本格的な製糖業のはじまりとされている。

第３節　ヤッチのガマを訪れた人びと

ヤッチのガマは、早くから一部の人たちに知られていたようだ。フランク・ホーレーが残した文庫の資料『望郷沖縄』第４巻のなかに「やっちのがま」と記された写真がある。この写真集の元になった著書は、博物学者・坂口総一郎の『沖縄写真帖第二輯』（1925）である。『望郷沖縄』の文面には、次のように紹介している。

> 久米島の西北部は新期石灰岩から成って居る。ヤッチのガマは具志川村の北方に在る石灰岩中の鍾乳洞である。其辺にはガマが多い、けれども写真のヤッチのガマは最大である。大小の鍾乳石は恰もツララの如く、

薄暗い穴の天井からブラリ下り、穴の奥から冷たい風が吹いて来てたださへ気持ちのよくない所へ、あらうことか髑髏を入れた壷が何十と並んで居る奥の方の白いものはと、よく見ると、それは白骨の山、びっくりした所へ天井から氷のやうに冷たい水が落ちてのぞき込んで居る道筋へぽとり、全身忽ち粟を生じる、こんな薄気味の悪い所は恐らくなからう（註17）。

この解説は、ヤッチのガマを訪れた事がない人でも想像しやすい。その他にも東松照明や萩原秀三郎が写真を収めている（註18）。

写真以外の記録では、坂口総一郎よりも早く大正12年12月30日にヤッチのガマを訪れた研究者がいた。それは、宜野湾村新城出身（現在の宜野湾市新城）の佐喜真興英（法学者・民俗学者）を教えていた動植物学者の永井亀彦である。永井は、当時の状況を「西銘ノ西方ニアルやっちのかまハ、人骨ノ数、前者ノ比ニアラズ。鬼気人ヲ襲フ。洞ノ道ハ急ニ下方ニ曲リテ入ルベカラズ。」と日誌に記している。（註19）。

その後、昭和の時代に入り、数名の学者がヤッチのガマを散策している。それは植物学者であり、沖縄の考古学の父でもある多和田真淳であった。昭和７年にヤッチのガマを訪れた多和田は、「久米島植物採集記（13）」のなかで当時の状況を記録している。

ヤッチは付近にある洞穴。昔時の共同墓地である。又第一、第二（ヤジャー）の洞穴にも人骨があり之等は何れも□□製の茶瓶に納骨され、一部はナンバンガメに納められてゐる。昔は大部分ナンバンガメに納められて居たがすり変へられたとの事之。懲りた瓶の主は無□のナンバンを割って創物にして盗難を防いだ。而して此処から姿を消したナンバンガメはひょっくり辻に姿をあらはして居るとの事だ、ナンバン小の古酒よ汝を不老□□の名栄とは何処のいたづら者か言ふたのか（註20）。

美術の教師であった比嘉景常は、昭和12年に師範学校の入学試験の担当で久米島を訪れている。その紀行文は、『久米島紀行』（1937）としてこの世に残されている。その紀行文には、ヤッチのガマを訪れた出来事は記されていないが、ある役場の人が洞窟から伊万里焼ほか３点の瓶を取ってきたエピソードを紹介している。

先年役場の某氏等が洞窟に行って、岩石にはまっているのを苦心惨胆の上岩を割って取って来たものであると云う。ところが一人が帰りがけに足を負傷する。一人はその晩から歯痛でお多福の様な形相になる。瓶を貰った一人は頭痛発熱を起して三人が三人共不思議な珍現象が表はれた。さあ大変だ。神国久米島のことである。やれ神罰だやれ神の祟だ。それからそれへと噂が水紋の様に拡がり、役場は三個の瓶を見んものと大変な人だかりになった。猶、不思議なことには小鳥が役場の室内に飛び込み、追へども逃げず払えども窓に飛びついた、と云う嘘の様な真実の話がある。

自分が見た所では白色の瓶は今里焼で、且つて久米島出身の生徒で平良正蔵君が拙宅に持って来たものと同一のものである。那覇の嵩原骨董店にも同様なものが陳列棚に一円五〇銭の札が張られた完全なものが二個程もあった。〇〇から取って来たと云って、某青年が好意的に呉れたものを一個私も所蔵しているが惜しいかなキズモノである。

守礼門修築の主任森さんの話によると、相当古い今里焼きだとの事。

後の二つの瓶は琉球物らしいが自信をもっては云ひ切れない。その一つには牛脂様の固形油状のものがはいっているので猟奇心をますます深めた（註21）。

その伊万里焼の品々は、おそらくヤッチのガマか、あるいはヤジヤーガマや西銘や上江洲などに多くみられる岩陰から持ち込まれた可能性がある。

わが邦ではじめて葬・墓制を学術的に論じたのが伊波普猷であった。その伊波の「南島古代の葬制」では、菊地幽芳が渡名喜島の巨岩の下に数個の髑髏壷をみて驚いた、と紹介した後に「こういうのは久米島にもある。ヤッチの洞はその最も大なるものである。」と補足した（註22）。しかしながら、伊波普猷の初出である「南島古代の葬儀」には記載されていない（註23）。その理由は久米島仲里村出身の仲原善久や仲原善忠から直接に情報の提供があったのか、伊波自身が直接に久米島を訪れたのか、あるいは別の著書から情報を得たのか、仲原善久から話を聞いた島袋源七が伊波へ情報を提供したのか、と考えられる。その「南島古代の葬儀」を執筆した伊波は、「琉球の墳墓」を書いた。その論考には、出版社の編集部によってヤッチのガマの写真が掲載された（註24）。おそらく、その写真は坂口総一郎の著書から転載したのであろう。その写真をみた伊波は、ヤッチのガマについて『をなり神の島』のなかでつけ加えたと推測される。それらの記述から臆測すると、南島を広く歩いた伊波にとってヤッチのガマは、最大級の洞穴の墓であった。

上江洲均は、ヤッチのガマについての見解を次のように述べている。

ヤッチのガマは、西銘・上江洲のいわゆるムラバカ（村墓）であったらしく、そこにまつわる恐怖話もいくらでもあるような所である。厨子甕には記名のないものが多く、したがって古いものはいつの時代まで溯れるか判然としないが、乾隆（江戸中期）や同治（江戸末期）年号に加えて、新しいのでは明治29年のものまである。洞穴の入口の岩蔭を利用し、各家あるいは一門ごとに石で囲い、通路をつくり、石垣で仕切っている。無数の厨子甕（主に壷型厨子甕で、他に土器壷、本南蛮甕など）からしても、葬墓制が本島南部の門中墓とは明らかに異なることは誰の目にも疑う余地がないであろう（註25）。

また、名嘉真宜勝や呂青華もヤッチのガマを訪れていたようだ（註26）。ここ近年は、多角的な研究者からヤッチのガマが取り上げられた（註27）。

とにかく、ヤッチのガマは民俗学などにとって重要な価値を秘め、高く評価されていた。しかしながら、ヤッチのガマという洞穴墓がいつの時代に、どのような意味で造られたのかは、闇に閉ざされたままである。その遺跡は、大きな問題を孕んだ文化的遺産なのである。

第3章　上江洲・西銘の葬制と祖先祭祀

第1節　葬制について

上江洲と西銘の民俗事例は、昭和初期から現代まで含めた時代の設定で記述する。両村での聴取の対象者は、大正13年生まれの方から昭和20年生まれの方である。それらの伝承者から葬制と祖先祭祀の体験談を語ってもらった。

1　死の予兆

ガラサー（烏）は、人のマブイ（魂）や幽霊を探し当てると信じられている。村のなかに烏がやって来て鳴くと、村の人が亡くなると言われた。数十年前までの上江洲と西銘では、あまり烏がいなかった。最近になってから生ゴミなどが久米島のいたる所で増えはじめた。それと同時に烏も増えてしまった。忌み嫌われた烏は、頻繁に村のなかへ入り込んでくるようになり、死の予兆を知らせてくれる鳥の風習は薄れてきているようだ。

2　臨終

上江洲の村びとたちは、人が亡くなると「チュマーイ、ソーンドー。」と言った。戦後間もない頃までの久米島には病院がなく、医者もいなかった。

家族や親戚のなかで危篤状態の人がいるならば、身内の年長者が死の判断を行った。その判断の基準は、危篤者の目をみて死んだのか、まだ生きているのかを見比べた。もし、危篤者が息をひきとると、家族や兄弟たちは死者を抱き起こして、生前のワラビナー（子どもの頃の呼び名）を呼びつづけた。それから龕の支度などがあるために区長へ連絡した。

ちなみに病院で亡くなった場合には、生前に使っていた寝台から死者のマブイ（魂）をとる呪いをした。それをマブイヌギと呼ぶ。病院で亡くなりたくない家族たちは、医者の判断で実家へ危篤者を連れて行き、愛着のある部屋で息をひきとらせた。

臨終に立ち会う人たちは、親類や友人などであった。ただし、死者に立ち会ってはいけない人は、妊婦や妻が妊娠している夫である。とくに妊娠している妻をもつ夫は、龕を担いではならなかった。

3　沐浴と死装束

危篤者が亡くなる時は、ウラザー（家屋の裏座）とかイリヌウラザー（家屋の裏座の西側）と呼ばれる部屋で沐浴を行った。この部屋で家庭の年寄りたちは寝室としていた。死者が生前に愛着のあった部屋である。その場所は、家の年長者が寝室としていた。沐浴の体験者は、親しみ深い部屋であるからウラザーやイリヌウラザーで死者の身体をきれいにしたり、着替えをさせたりしたと話す。

死者の身体を沐浴する場合は、決まった場所から水を汲んでくる習わしとなっていた。西銘では、水道が通る前と後で水を汲む場所が変わった。村に水道が通る前は、家の近くにある井戸から水を汲み、台所近くのハンドゥーガーミ（水溜め用の甕）のなかに溜めておいた。とくに西銘の西側の地域では、西銘公民館の近くにあるトーマ

ガーとか上江洲村の西側にあるヒンジャガーから水を汲んできた。また、西銘の東側の地域では、モートゥダガーという湧水から水を汲んできた。この湧水は、上江洲家が所有する山の近くにある。逆に屋敷のなかにチンガー（井戸）がある場合には、その井戸から水を汲んだ。村に水道が通るようになると、風呂場から水を汲んでくるようになった。現在の西銘では、水道に整備されたために井戸水を利用する人は少なくなった。しかしながら、今でも村びとたちは昔から利用していた井戸に対して感謝の祈願を行っている。

汲んできた水は沐浴用の水をつくる。それはタライのなかに井戸水を入れ、さらにそのなかにお湯を注ぎ足した。それを逆さと呼んだ。この行為は、日常生活では行っていけないとされた。もしも、日常生活の時に間違いをおこそうとすれば、村や家族の先輩たちから縁起がよくないと注意した。つまり、逆さで水の温度を調節する行為は人が死んだ時にしか使わなかった。

２～３人の女性たちが遺体のまわりを囲み、死者の身体を水で濡らしたサージ（タオル）でふいた。さらに死者の爪を切ったり、髭を剃ったり、髪を整えたりもした。

死者の衣装は、生前に愛着のあった洋服やウバサー（芭蕉の着物）を着せてやった。その上からさらに白い着物を着せたり、遺体が硬直していたらかぶせたりした。

死者の身なりが整え終わると遺体を仏間へ移す。

4　死者の位置と供物

仏間へ移した死者は、西枕に安置しておく。仏前の前には仮的な祭壇を設けた。その上にはお碗にご飯をもり、箸をさし立てたものを供える。

上江洲と西銘では、グソーンチュ（後生で暮らす祖先）へ贈る土産を死者へ持たしたり、今から後生で暮らすための生活用品を死者へ贈ったりした。

死者を棺箱に入れると西銘では、後生で暮らす自分の兄弟や子どもたちへ土産を手渡した。例えば、この世の人たちは、お菓子や煙草、小さなハンカチを紙に包み、死者から誰々に手渡してもらうために、過去に亡くなった人の名前を記しておく。その手土産を巾着のような物に入れた。死者が生前に使用していた巾着があるのならば、そのまま使った。もしも、ない場合には白い布で巾着を臨時的につくった。そのなかには、死者へ自分のワタクサー（私産）として煙草や煙管などを入れてやった。このような入れ物を上江洲の村落ではワシトゥイジンと言った。

火葬が普及する前には、長く置いてもすぐに腐る物を棺箱のなかに入れたり、酒が好きな人の場合は酒も供えたりした。遺体を火葬する現在では、燃えやすいお菓子や煙草などを入れてやる。

死者の着物や洋服の襟は、必ず糸を通した針をさした。その本数は、３～５本である。針を供える意味は、死者があの世の生活で困らないために持たせた。

5　通夜

上江洲では、公民館で葬式用と祝い用の道具類を箱に納めていた。それを区長が代々管理していた。喪家の人たちは、公民館から葬式用の道具を借りてきた。とくにカチャー（蚊帳）を死者の上に吊るした。火葬が普及した後に葬式の道具類を使う家庭が少なくなったために、現在は蚊帳を吊るすのをやらなくなっている。葬式の道具類は、いつしかなくなってしまったと言われている。

6　喪家への援助

上江洲と西銘では、葬儀屋の専門店がない。そこで、喪家への援助は村の人たちで補った。村の男性たちは喪家の仮設広間をつくったり、龕の組み立てたり、喪家から墓まで龕を担いだり、墓を掃除し墓口を開けていたりした。村の女性たちは来客用の食事や供物などを準備した。これらは、人情のあらわれで村の全部が加勢した。

7　出棺と野辺送り

村で死人が出ると喪家の家族たちは、区長にその趣旨を連絡し、龕などを借りてきた。とくに村の青年たちは、龕を組み立てたり、喪家から墓まで龕を担いだりした。ちなみに龕はミシマ（上江洲・久間地・西銘の村）で使用していた。

龕などの葬具類は、字の各家庭の青年たちが一日がかりで準備しておいた。棺箱の材料は、沖縄本島から送ら

れてくる輸入品のスギ（杉）の木であった。その他にもリュウキュウマツで棺箱をつくる場合もあった。

それらの葬具類は、龕や公民館の道具箱のなかに納められていた。

龕（仏様の絵が書かれている朱色の箱で屋根にはシャチホコのような装飾のある葬具）には、木でつくられたティンゲー（頭部は龍のような形をし、下部は朱色の棒である葬具）や提灯などの装飾品が入っていた。とくにナガシバタ（文字が書かれた旗）は、「南無阿弥陀仏」などの文字を書いた。ティンゲーやナガシバタの下の部分には、羽織の紐のような装飾を結びつけた。これを結びつける技術は、馬のオモゲーを結びつける技術よりはとても難しかしく、上江洲の村落でも仲地という人物しかいなかった。その装飾品は紙でつくり、ヒジャイムスビと呼んでいた。

現在の上江洲と西銘では、ティンゲーなどの葬具類は使用しない。久米島に火葬が普及した後は、やらなくなったようだ。しかし、現在でも具志川村の嘉手苅と仲里村の儀間では、ナガシバタを使用すると言われている。

昭和初めの葬式の体験を語った上江洲の古老は、西銘保育所のあたりにガンヤー（龕を保管している小屋）があったと話す。上江洲では、男性４人が龕を担いだ。当時の龕はとても重く、龕を墓まで運ぶ距離もかなりあった。龕を担いでいる４人の他にも男性２人が随行した。それは、２人ずつ交代するためであった。上江洲では、墓が遠い場所でもヤッチのガマあたりまであった。それ以上は、遠くに墓はなかった。龕を運んでいる時は、ナカユクイ（運んでいる途中で休憩する意味）してはならなかった。その理由は、龕を運んでいる時に地面に降ろすと先輩たちから叱られた。死者のマブイ（魂）が降ろした場所に居座るからだと言われている。

龕を担ぐ人数は、西銘でも４人であった。しかし、４人の補助がいて、運んでいる途中で交互に交替しながら龕を墓まで運んだ。西銘では龕を運ぶだけでも、８名は必要だった。

西銘は、村の人数が多かったので龕や墓などの加勢は困らなかった。しかし、上江洲では村の人数が西銘よりも少なかったので、大変であったと経験者は語る。

19世紀ごろの具志川村では、龕などの葬具を何度もつくり変えていたようだ。『久米具志川間切規模帳』（1831）には、次のような文がある。

一、間切中之人死去之時龕天蓋新敷作調則々用得拾ニ仕候付竹木之費ハ不申手障之失墜物入有之旁以不宜儀□向後間切中模合ニ而龕天蓋相仕立□□致格護置相用得候様可仕事

但桐油塗抔ニ而如何ニも不過美様可相調候也

この記述から当時の村びとたちは、葬具の材料と時間を無駄使いしていた。その下知の後に村では、共同の龕などを使用し保管していた。役人からの指導は、葬具類の無駄遣いだけではなく、荼毘の法式でもあった。19世紀ごろの具志川間切では、荼毘を身分に相応して指導されていたようだ。『久米具志川間切規模帳』には荼毘について次のように記している。

一、葬礼之儀身分限ニ応し可相調旨兼々被仰渡置候處其守達無之荼毘過美候を第一孝行之筋相心得且又右之節者愁傷一篇之筈候處牛ふた抔を殺於墓所酒共盛候方も有之由面々家中痛者勿論人情之本意取失甚愚味之仕形言語道断之至候向後被仰定置候通身之分限ニ応し荼毘之物入無之様堅締方可申渡事

上江洲の野辺送りの葬列は、ティンゲーがサチバイ（先頭）になり墓の道案内をした。その後に龕を担いだ人たちやナガシバタを持った人たちがならんだ。

野辺送りの道は、行き道と帰り道を違うようにした。現在でも村びとたちは火葬場に行く時に帰る道を遠回りしてでも家に戻っている。

墓まで龕を担いだ体験者は、村のなかで50代の人たちまでいた。

上江洲の村びとたちは、西銘の旧家と違って「ハカ（墓）」を所有していなかった。墓がないといっても棺箱と洗骨後の甕を安置する納骨の場所はあった。それをフルミーと呼んだ。フルミーは、カンジン原の丘陵地の崖や岩陰を利用した納骨の場所である。村びとにとってハカ（墓）は、建造物として造られた亀甲型や破風型の墓をさした。

上江洲の村びとは、岩陰で棺箱が入るほどの大きさしかないフルミーへ遺体を置いてきた。そのような場所に村の青年たちは、龕を運んだのである。

棺箱を納めた後は、石を積んで田んぼの泥をかぶせて、さらに石を積んで泥をかぶせた。それを何度も繰り返し岩陰の穴を塞いだ。フルミーを塞ぐ石は、奇数であった。もしも、わずかの隙間があったならば、遺体の死臭がひどく、ギンバイ（ギンバエ）が侵入してきた。一時的な処置をしたフルミーは、葬式後にモチ（漆喰）を購入してきて、泥と石で塞いだ部分をさらにモチで補強した。

フルミーへ遺体を納めた後に喪家の人たちは、死者の草履（あるいは下駄）を必ず置く。死者の着物は棺箱に入れたり、風呂敷に着物を包み49日目の焼香が終わるまで仏壇の前に置いたりした。死者の衣服などは、49日目の焼香が過ぎると身内などに形見として分け与えた。

葬式に参加する人は、死者の生前の親類や友人を含め、村の各戸から約１人ずつ参加した。しかし、最近は親類や友人だけとなっている。

葬式に参加していけない人は、妊婦や妊婦をもつ夫、病気やケガをした人たちであった。とくに病気やケガをした人は、葬式を参加したり、墓参りしたり、墓に近づいたりしてはいけなかった。その人たちを含めて、墓の作業でケガした人や重機が故障した時にもヤナビルと呼んだ。その理由は、野辺送りの時に病人がいる家へ葬列が近くを通れば、葬列にヤナムン（魔物）もやってくると信じられており、そのヤナムンがあの世に病人も連れていくと言われていた。

同じ日に別の葬式もある場合には、他の葬式を参加してはならなかった。

かつての上江洲と西銘の葬式は僧侶が参加する習わしがなかった。お寺が建てられた後に久米島では僧侶が葬式に参加するようになった。大正15年に地理学の調査で久米島を訪れた小牧実繁は「久米島には僧侶はなく、墓参にも僧侶は頼まない。尤も本島では僧侶はあっても頼まないのである。」と当時の状況を報告している（註28）。

8　周忌・年忌などの焼香

野辺送りの時に死者を墓へ安置すると、喪家の家族や親族たちは、翌日に墓参りを行う。上江洲と西銘では、その焼香をナーチャミーと言った。火葬が普及する前は、朝早くからナーチャミーを行った。その理由は、死者が蘇生していないのかを確かめる習わしであった。喪家の人たちは、一週間の毎朝に墓を訪れ、その後は周忌ごとに49日まで焼香を行った。とくに５回目と７回目の焼香は盛大にする。

現在のナーチャミーは、死者の遺体を火葬するので、一週間分の焼香を一括し祈願する。

49日の焼香を終えると、喪家の人たちは50日目のマブイワカシを行った。死者に対してこの世の人たちは、「あなたは生きた人間の生活ができないからあの世の自分の生活に行って下さい。」と語りながら、死者と家族との別れをした。その後に死者は、祖先の位牌と一緒に名前が並べられる。

100日目も喪家の家族と親類たちは墓参りを行う。

年忌は、１・３・７・13・25・33年の命日に焼香を行う。１年忌は亡くなった年であり、３年忌は亡くなってから２年目の命日であった。とくに25年と33年の年忌は、霊前の供物に赤色のおかずやお菓子を供える。

死者の年忌を終えると墓の納骨堂に納められている遺骨は、一ヶ所にまとめる風習はなかった。現在の新しい墓は、納骨堂の奥に骨をまとめる場所がある。しかしながら、その設備はある墓とない墓があって、一般的な習俗ではなかったようだ。

9　連続して人が亡くなる場合

上江洲の伝承者は、ある人の死後49日目に墓を開けた時があった。その当時の状況を伝承者は、「もうその時は、死臭はしなかった。老父が亡くなると老婆がすぐに亡くなった。先に収められた老父の遺体は、白くカビしていた。この人の遺体は洗骨できなかった。それで、先に納められた棺箱のとなりに新しい棺箱を納めた。」と語った。このように人が連続して亡くなることをカサバイと呼んだ。

上江洲では親戚や家族のなかで連続して２人の死者を出すと、必ず３人目の死者が出ると信じられている。そこで、村びとは３人目の死者を出さない為に鶏を殺す。その鶏を白い布に包んで箱へ納めてやり、墓の近くに埋める習わしがある。祈願者は、グソーンチュ（墓で暮らす祖先）へ「３人目も亡くなりました。これ以上、死者が出ないようにお願いします。」と拝む。

10　洗骨

上江洲と西銘では、洗骨を他の人にみられないように朝早くから行った。西銘では、洗骨を行う年の干支より１年前の干支の人が墓口を開けた。墓口を開ける時は、ユタ（宗教的職能者）や親戚などの長老から選ばれた人がトントンと墓口を叩き、グソーンチュ（後生で暮らす祖先たち）へ合図した。その後に力のある男たちは、墓口を開ける作業を加勢した。

洗骨は、早くても３～４年後であった。普通は６～７年後であった。これは西銘でも同様である。タナバタの

行事はヒーナシとも呼ばれ、墓を開けたり、洗骨したりしても良い日であった。しかしながら、かつての具志川村嘉手苅では、何度も洗骨を行っていたようだ。『久米具志川間切規模帳』（1831）には、洗骨について次のように記している。

一、洗骨之儀何方も一度ニ相限候處嘉手苅村之儀或毎年或年年越親先祖洗骨仕候方も有之由甚以不宜仕形候間向後一度ニ限仕候様可申渡事

上江洲と西銘の村落では、火葬が普及する前は洗骨の習俗を行っていた。当時の洗骨は、何度も骨を洗う習俗は聞かれなかった。

洗骨がある家では、バケツに水を入れて遺体を納めているフルミー（遺体を葬った場所）へ持ってきた。ちなみに亀甲墓などの建造物の墓を所有する家は、墓庭で洗骨を行った。そして、洗面器に水を汲み入れ、タオルを濡らした。死者の骨を拭く時は、そのタオルを使った。また、ウシグサ（いね科のダンチク）の葉を束ねてタオル代わりにもした。なかには完全に白骨化していない遺体もあった。その時は、火葬を行った。それは、ごく稀の事例である。

骨を洗う順序は、頭蓋骨から序々に身体の下まで行った。先に洗った頭蓋骨は、死者に一番近い者がずっと洗骨が終わるまで手に抱いておいた。例えば、夫が先に亡くなった場合は、その妻が夫の頭蓋骨を大切に抱いて、洗骨が終わるのを持っていた。それ以外の骨は、その他の身内や親戚などにまかせておいた。洗骨を行っている時は、常に死者の骨に光が当らないように黒い傘でさしていた。

洗骨の体験のある伝承者は、「人の死臭は一週間もとれないほどに臭かったし、身体に染みつくようだった。」とよく語る。そこで、遺体が納められている棺箱を取りに出す男性たちは、シマザケ（泡盛）をサージ（手ぬぐい）にしみこませてから、その手ぬぐいで鼻と口をまいた。その対策をしながら、遺体の悪臭を消した。

骨蔵器に遺骨を入れる場合は、順序に足の骨から入れ、最後に頭蓋骨を置いた。もしも、夫婦とも亡くなっている場合は一緒に骨蔵器のなかへ合葬した。過去にその死者が幼い子どもを亡くしていたら、親に抱かすように子どもの遺骨も納めてやった。骨蔵器のなかに骨以外の副葬品や石を入れる風習はなかったが、骨蔵器の蓋を被せる時は白紙を敷きながらかぶせた。

一回でも骨蔵器の蓋を開けると、開けた子孫たちは必ず白紙を敷いた。よく親類や家族の長老から若者たちは、「カンナジ、シルカビー、ウチュンドー。」と言われた。それは祖先の化粧直しや衣服の意味であり、その祖先以外には骨蔵器のなかに入ってはいけないという意味も含められていた（註29）。

火葬が普及する前は、洗骨期間までに猶予があり、骨蔵器を注文する時間があった。西銘の人たちは、仲里村の高里商店から骨蔵器を買ってきた。現在は、火葬の遺体処理である。急いで喪家の人たちは、壺屋の専門店で骨蔵器を買ってくる。

遺体を納めていた棺箱は、墓の近くで燃やしたり、山のなかに捨てたり、処分していた。その使い終わった棺箱の木片を集める人がいた。その板を集めた人は、田んぼの深い場所に棺箱の板を埋めて水に浸しておいた。数日後に板を取り出し、タルガーのミズグェー（肥溜め用の桶）をつくった。

洗骨に関する禁忌は、妊婦がいる夫は洗骨に参加してはならなかった。基本的にユタ（宗教的職能者）の判断などで洗骨に参加する人を決めた。

久米島では、お寺がつくられるまで火葬の慣習はなかった。今から22年前に火葬が普及しはじめた。しかしながら、火葬を知らなかった当時の古老たちは、「私が亡くなった場合は火葬にしないで、風葬し洗骨して欲しい。」と子どもたちへ頼んだという。村びとにとって火葬は、抵抗のある遺体処置であったようだ（註30）。

11　祖先の移葬

カンジン原一帯でダム建設が始められ2000年までに上江洲・久間地・西銘の地域では、多くの墓やフルミーに納められていた祖先の骨蔵器を新しい村の納骨堂や墓へ移葬した。

古い墓から祖先の骨蔵器を取り出すと子孫たちは、骨蔵器の胴体と蓋の間に白い紙を敷く。それは、家の子孫たちが必ず白い紙を準備した。例えば、「チズカ」の骨蔵器はその子孫たちが準備したり、「オホタイ」の骨蔵器はその子孫たちが準備したりした。その意味は、洗骨の項目で紹介した通りである。

西銘の村びとは、古い墓から新しい墓へ祖先を移葬する時に祖先の骨蔵器の底へガンシナー（いね科のダンチクの草でつくった輪っかの道具）とゲーン（いね科のダンチクの草でつくった呪具）を備える。それは、祖先のマブイ（魂）が落ちないようにし、魔物から護るためだであった。龕を運ぶのと同じように祖先の骨蔵器を運ぶ

時には、ぜったいに休憩してはならなかった。

上江洲家では、沖縄本島の久米系士族の蔡家が所有する『四本堂家礼』（1713年、『蔡家家憲』ともいう）などがみつかっている。その史料の「遷葬之事」には、次のような出来事が記されている。

一、曽祖父照屋親雲上夫婦御両人南京墓ニ被葬置候處祖父高良親方其骨を焼墓内上檀之正面ニ穴掘被入置御事ニ候故干今其厨子無之候間子孫為存知書記し候事（註31）。

『四本堂家礼』のような移葬の時に骨を焼く習俗は、現在の上江洲と西銘の村びとの体験では知らなかった。その村びとたちは、「骨を焼くという行為は考えられない。」と話す。ヤッチのガマの骨は、どういう意味で焼かれたのであろうか。

第２節　祖先祭祀について

上江洲の村落では、2000年８月12日～14日までにかけて旧盆の観察と聴取の調査を行った。西銘の村落では、2000年８月６日のタナバタ及び2001年２月８日のジュウロクニチーに観察と聴取の調査を行った。それら以外の祖先祭祀に関する行事は、伝承者の体験談を語ってもらった。

１　位牌

上江洲と西銘では、位牌を「イーフェー」とか「グヮンス」と呼ぶ。それらの村では役人層系統の家では古い位牌を祀っているが、たいていの家は戦後の位牌であった。西銘において位牌のみを祀っている空き屋敷は、いくつかみられた。この現象は、過疎化が進む久米島の要因のひとつと考えられる。しかしながら、位牌だけを安置する空き屋敷は『久米具志川間切規模帳』（1831年）の記録のなかにもみえる。

一、跡方相絶位牌計立置候家屋敷村毎多有之見分不宜候間与親類又者所中ニ而見苦敷無之様可取計旨可申渡事

この記述は、いったい何の時代背景を物語っているのであろうか。

具志川村において位牌の祭祀は、19世紀に入っても位牌をつくっていなかったようだ（註32）。『久米島具志川間切規模帳』には次のように記している。

一、位牌安置無之者も有之甚不宜候間急度致仕立方候様可申渡事

久米島における位牌祭祀の受容は、史料から玉木順彦によって明らかにされた。『美済姓家譜』から玉木は、康熙９（1670）年の上江洲親雲上智源の下知により百姓たちのなかで位牌が仕立てられ、先祖参りの年回忌などが行われたと紹介した（註33）。

２　墓

建造物の亀甲型などの墓を所有していない上江洲の村びとは、フルミーで死者を葬り、洗骨後は骨蔵器を安置していた。

『久米具志川間切規模帳』（1831）には、次のように記されている。

一、墓所之儀場所柄不宜又者葬方見苦敷者も有之由候間墓所葬方等無大形様可申渡候

この記述からすれば、かつての具志川村の各地にあった墓地は場所がよくなく、葬り方が見苦しいかったようだ。おそらくは、首里・那覇などの文化を知った役人が亀甲墓などの建造物と見比べて記録を残したと考えられる。それは、『久米具志川間切規模帳』に墓の仕立ての条件が述べられている文章からもうかがえる。

一、墓所之儀可成程者先祖墓相用自然新敷相仕立申候而不叶節ハ竿迦之山野より六間かく所中相談を以在番見分ニ入可申受候尤墓構様亀甲迄を餅打其外之銹并前之囲袖石垣なく相調可相用事

その規模帳に墓は、なるべく先祖の墓を利用しほしいとある。さらに新しい墓を造営する際は、山野の竿迦れの土地から六間角で、かつ在番の見分けが必要であった。墓は、亀甲墓の甲羅の部分を餅打ちにし、その他の装飾はしてならいと決まりがあったようだ。しかしながら、道光11（1831）年以降に具志川村の西銘では、高嶺里之子親雲上（久米村の風水見）の指導によって、亀甲墓の大きさや装飾などが指導されている（註34）。

久米島のなかでも上江洲と西銘の村落では、古い亀甲墓が造営されている。その墓をみた那覇・首里系の士族の子孫である大原の村びとたちは、カーミナクー（亀甲墓）が多くみられる点に驚きを隠せない。なぜなら、大原の村びとは、士族の子孫であったにも関わらず亀甲墓を造営した時代が戦後だと語る。

そのヘイミン（平民）と呼ばれた村びとたちによれば、亀甲墓などの立派な建造物はサムレー（役人）の家系の墓であると話す。ヤッチのガマでも役人層が葬られている事例は、村びとの口碑や祖先祭祀、骨蔵器の銘書からも確認できる。

沖縄県各地の史料をもとに平敷令治は、「首里・那覇に亀甲墓が出現するとまもなく、地方役人層も久米村風水見を依頼し、これを造るようになった。王府進貢船がしばしば寄港した久米島でいちはやく受容されたらしい。」と指摘した（註35）。また、久米島の亀甲墓について渡邊欣雄も次のように報告している。

> 沖縄の『亀甲墓』。あれはほんとうに亀の甲の墓だった。いま思えば、たしかに沖縄にも亀の甲の形をした墓が久米島にあった。墓の頭の部分がのっぺらぼうではなく、亀の甲のようにそれこそ亀裂の入った墓である（註36）。

しかしながら、今のところ筆者はその亀甲墓を実見していない。渡邊が報告した亀甲墓は、いつの時代に、どのような経緯で造営されたのか、どんな祖先が葬られ、どの子孫が祀っているのかを調べる課題が残る。

上江洲や西銘の村落では、墓の納骨堂にサンゴの小石を敷いた習わしがある。その意味を村びとは、納骨堂の湿気をとるために入れていると話す。島尻の洗骨習俗を調べた長沢利明は、洗骨をする時にある男性が墓室内に浜からとってきた清浄なサンゴ砂を敷く場面をみている（註37）。しかし、そのサンゴ砂を敷く理由は述べられていない。

久米島の具志川村では、県内で興味深い徳永家の『墓之祭祀並骨移り之時法式』（道光年間）がある。その史料は、道光年間に高嶺里之子親雲上が墓を造営した際にどのような祭祀を行えば良いのかをメモ書きが残されている。

一、新墓口ヲ開キ、かねて門ニ入置候あだん取出し候事。
一、右引次潮米ヲ以テ、墓内清メ候也。
一、右引次門之正面ニ瓦立テ候事。
　但、此瓦の前え塩弐俵、炭弐俵、昆布弐丸キ、朱紙を打差上候。此備ひ物ハ引取申さず候事。
一、右引次、木札四ツ之内、八卦之弐ツハ奥のすみ左右、朱書ハ外ニ向テ立かけ、≡ハ前のすみ左右、朱書ハ内ニ向て立て候事（註38）。

その文書のなかでみえるアダンと木札は、今日の上江洲と西銘でも習俗として残されている。
上江洲の村びとは、「新しく墓を造り、まだ遺骨が納められていない場合は、魔物が入るなという合図でアダヌ（たこのき科のアダン）の葉を入れた。アダヌの葉は、魔除けであった。」と語る。これは、仲里村の比屋定でも似た習俗があったようだ。琉球大学民俗研究クラブ編の「比屋定部落調査報告」（1967年）では、野鳥が家のなかに飛び込んできた場合に門へアダンの木を置いた、とある（註39）。

西銘の村びとは、新しい墓の納骨堂の四隅に札を入れて置く習慣があったと話す。また、具志川村の仲地では、旧家の墓の納骨堂内から大正年間に壺屋で焼かれた墓中符がみつかっている（註40）。史料にある木札と現在使用されている札と墓中符は、同じ習俗のひとつであろうか。

3　毎月の1日と15日

西銘では、毎月の１日と15日に仏前に酒とウブク（ご飯）を供える。しかしながら、この祭祀はそれらの日に祀る家と祀らない家があった。ある家では、毎朝に祖先のお茶を替える人もいた。

4　春と秋の彼岸

西銘では、彼岸の日が入ると家で火の神と祖先の位牌を祀る。その日は、朝・昼・夜の時間に仏前へご飯を供える。その後はウチカビも焼く。

5　ジュウロクニチー

上江洲と西銘において墓参りの習俗は、旧暦の１月16日だけである。それ以外の行事は墓参りをしない。ただし、ミーサのある家庭では朝早くから墓参りをした。これらの日は、ウチカビ（紙銭）を燃やす。
墓の掃除は、ジュウロクニチーの前日までに男たちが時間をみつけて作業した。また、花生け用の竹筒をマタク（唐竹）をカンジン原のあたりから探してつくった。

村びとたちは、ヤッチのガマから最初に拝む。車がなかった時代は、ご馳走をモッコに入れて担ぎ、点々と墓

を歩いた。一家族では、最低でも６～７ヶ所の墓をお参りした。その理由は、すべての親戚の墓を訪れる習わしになっており、父方と母方の筋の墓を訪れる。

現在の供物は多くの材料を使っているが、一昔前までは各家庭から豆腐、カマボコ、昆布、豚肉、ごぼう、にんじん、大根などでつくった料理を携えてきた。あまりにも多くの供物をつくったために残り物は、ジュウロクニチー後から焼き飯にして食べた。しかし、村びとの女性からの話では昔ほどに多くのおかずをつくらなくなったという。その代わりに各家庭は、香典とお酒と線香を供えるようになった。

ジュウロクニチーの日は、久米島空港でおもしろい風景がみられる。それは、墓参りで供えた重箱類のおかずを箱詰めにした荷物が多くみられる。久米島出身の本島在住者が久米島の親や兄弟から贈られた品物であった。上江洲で暮らす老夫婦は、「現在は２人しか暮らしていないので、たくさん料理をつくっても食べきれない。昔ほどは料理をつくらなくなったが、那覇からやってきた息子や娘たちにもたしてやりたい。」と語る。

仲里村山城、比嘉、真謝などのジュウロクニチーは、午後から始められた。その理由は、ジュウロクニチーの行事がトラの日にあたった為であった。1998年の行事は、寅年のトラの日であった為にジュウロクニチーを取りやめにした家庭は多かったようだ。今回は、午後３時から始める家庭が多かった。

上江洲の村落では、トラの日にジュウロクニチーが重なると虎があらわれて祖先の為につくったご馳走を食べられてしまうから、墓参りの時間をずらしたり、墓参りをとりやめにしたり、墓に行かず家の仏壇を祭祀するという。

今回の盛吉家の墓参りは、以下の通りである。墓参りの時間は、午前10時から午後５時までの日程であった。

①具志川村納骨堂（納骨堂ができる前はヤッチのガマ）
②トゥムイの墓
③５代目の墓（破風墓）
④トゥムイと吉濱家の元祖を祀る墓（家型の墓）
⑤８代目の墓（亀甲墓）
⑥イチンチバカ（亀甲墓）
⑦トゥンチ（上江洲家）の墓（亀甲墓）
⑧盛吉家の墓（亀甲墓）

１番目の具志川村納骨堂は、もともとヤッチのガマに葬られていた祖先を1999年の７月30日に移した。盛吉家は、ふたつの家族が参加した。Ａの家族は、「オホタイの元祖」と「西銘チズカの元祖」を拝んだ。Ｂの家族は、「西銘チズカの元祖」から「當間家（クラヌスバ）の元祖」へ、そこから「オホタイの元祖」へ拝んだ。それらの順番は、納骨堂へ早く着いた家族から拝むので、バラバラになっていた。その理由は、両家族が供物を置く場所がないからであった。

墓参りする前に盛吉家は、入口にとどまり、各祖先たちへあいさつをした。その時は、ウチカビ（紙銭）、シルカビ（白紙）、平線香を供えた。それから各家庭の先祖の場所へおもむき、供物をならべる。男性たちがマタクでつくった花生け用の竹筒に花をそえ、墓口の前に置く。供物は、シルカビ、お茶、お酒、重箱、みかん、バナナ、りんご、赤飯、赤饅頭、赤いカマボコ、おかずなどであった。ちなみにミーサの場合は、白物13年忌まで供える。普段の供物は、グソー（後生）の人たちの正月である為に赤い物を使う。

子孫たちは、準備が出来次第に先祖に対して報告する。その後にシルカビとウチカビを燃やす。

盛吉家のＢ家族の老婆は、西銘チズカの屋号の由来について次のように語った。

> 浦添の按司が先祖を祀る為に沖縄本島北部の２ヶ所をいけなかった。そのとき、大宜味村の喜如嘉にて、泊まる宿がないので、その村のノロ屋にて泊まった。一夜でノロはその按司の子どもを二人みごもった。そして、ノロは浦添に行くとひどい目にあうので、久米島に渡ってきた。子どもたちは、母親のふるさとを忘れないためにチズカ（喜如嘉）という屋号をつけたそうである。

２番目のトゥムイの墓では、盛吉家の両家族が参加する。盛吉家は、墓にむかって左側の場所から最初に拝む習わしがある。それはヒジャイの信仰ではなかった。拝む場所は、墓の外側にある３ｍ×３ｍほどの広場であった。拝む理由は、その場所から墓を造営する際に大きな石を４つに切ったと言われている。感謝の気持ちで盛吉家の父親は、「その場所から拝んでから墓で暮らす祖先を祀りなさい。」と子どもたちへ強く教えたという。

盛吉家のＢ家族の老婆は、墓口の左右にシルカビ、ウチカビ、平線香を置き、土地の神を祀った。その後に参加した家族は先祖を祀り、重箱のご馳走を頂いた。

３番目に訪れた墓は、盛吉家の５代目ごろの祖先たちが祀られている。この時の参加者は、盛吉家のＡとＢの家族である。供物の準備、土地の神や祖先に対する祈願は、前回と同じである。

４番目に訪れた墓は、トゥムイの墓の元祖と吉濱家の元祖が祀られている。参加者は、盛吉家のＡとＢの家族である。墓参りに吉濱家の子孫が訪れていたのであろうか。生花が供えられていた。供物の準備、土地の神や祖先に対する祈願は、前回と同じである。この墓は、イシナーグラヤーという墓をたちのきした際にニービル（屋号）とチズカ（盛吉家）と吉濱家の３家族が合同に造ったという。吉濱家の遺骨は、2000年12月18日に那覇へ移葬したらしい。

５番目の墓は、森吉家のＡ家族の５代目から８代目（18世紀ごろ）までの祖先が祀られている。納骨されている祖先は、15個ほどあると言われている。墓の納骨堂へ入った経験のある老父によれば、この亀甲墓は石積みのアーチ型になっていると語る。墓の前面が石灰岩になっており、横の袖石は安山岩の平らな石をつめてある。墓参りの参加者は、盛吉家のＡとＢの家族と盛吉家のＢ家族の次男が加わった人数である。また、この墓までが盛吉家のＡとＢの家族が祀る墓であった。供物の準備、土地の神や祖先に対する祈願は、前回と同じである。

６番目の墓はイチンチバカと呼ばれ、オホタイの元祖が祀られている。イチンチバカの由来は、かつて、西銘の村中の人たちが加勢し、一日でできあがったから、そのような名称で呼ばれている。この墓で祀られている祖先は、ヤッチのガマに葬られている祖先たちも古い人たちだと言い伝えられている。墓参りの参加者は、盛吉家のＡ家族とＢ家族の家主だけであった。この墓は、安山岩を一枚一枚ずつ重ねて造営されている。亀の甲の部分は、土でもられている。供物の準備、土地の神や祖先に対する祈願は、前回と同じである。

７番目の墓は、トゥンチ（上江洲家）が所有する美里川（ミンザトゥガー）の墓である。墓参りは、森吉家のＡ家族とその妻方の姉妹が参加していた。この墓では妻方の墓参りであった。供物の準備、土地の神や祖先に対する祈願は、前回と同じである。

８番目の墓は、盛吉家のＡ家族の養父母が祀られている。参加人数は、盛吉家のＡ家族の夫婦だけであった。この墓は、もともとカンジン原にあったが、ダム建設のために移された。石碑には、「盛吉家之墓、二〇〇〇年平成十二年十月吉日建立」とある。供物の準備、土地の神や祖先に対する祈願は、前回と同じである。

以上のように盛吉家の墓参りは、夫方や妻方の墓、養父母の墓などの先祖を拝んでいた。村びとたちは、血縁のある墓をすべて墓参りしないといけないと話す。

6　清明祭

上江洲と西銘では清明祭の日に墓参りする習わしがなく、家での祭祀となっている。ただし、１年以内に死者を出した喪家では清明祭の時でも墓に訪れる。また、西銘の上江洲家では按司の墓を清明祭の日に拝む。上江洲家出身の伝承者は、「上江洲家では具志川グスクの下に按司の墓がある。その墓は、清明祭の時だけしか拝まない。子どもの頃は、みんなで馬車に乗って具志川グスクまで行った。当時は、子ども心で清明祭を遠足がてらに楽しみにしていた。上江洲家の親族は、その墓で重箱のご馳走を食べた。」と語る。現在もこの清明祭は、土曜日とか日曜日を利用して行っている。

上江洲家の清明祭について上江洲均は次のように紹介している。

> なお上江洲一門は、久米島においては珍しく「清明祭」の墓参を昔からの例としてやって来ている。それは、四つの墓へではなく、さらにそれ以前の墓といわれる具志川城跡下の洞穴墓である。いわゆる按司墓であり、本島でいうなら、普通の清明祭ではなく、「神御清明」に相当する。按司の墓といわれる所は崖崩れで判然としないが、隣の側室の墓と称するものは、掘込墓に相当するものである。残り四箇所の墓参は、久米島の習慣によって清明にではなく、正月十六日に行う（註41）。

ちなみに具志川村大原では、清明祭の日に墓参りを行っている。この村落は、首里・那覇から移住してきた士族系住民である。よく、上江洲と西銘の村びとたちは、「大原の清明祭と違って、私たちの清明祭は墓参りをしないさ。」と話す。

具志川村の上江洲家文書と吉浜家文書をみると、その家では『四本堂家礼』（1713）や『服制』などをもとに祖先祭祀の法式を学んだようである（註42）。具志川村の役人層たちは、首里・那覇系と久米系の士族が所有する亀甲墓を早い時期から受容してきた。しかし、その役人層たちは、何故に清明祭よりも十六日祭を厚く祀ったのであろうか。

7　タナバタ

上江洲の村びとは、タナバタの日を「グソーヌ、ナナジョーアチ。」と言った。その理由は、グソー（後生）の七つの門が開き、祖先たちが自分の村や家へ帰ってくると言われている。また、タナバタの日はヒーナシと呼ばれ、墓の開け閉めや洗骨ができる日とされていた。

基本的に上江洲と西銘の村びとたちは、タナバタの行事で墓参りをしない。ただし、ミーサにあたる家は墓参りをする。旧盆の準備で男性たちは、七夕以後に墓の掃除をする。そして、墓の掃除を終えた男性はお茶とお酒と線香を墓口の前に供え、「これからお盆がはじまりますから、どうぞ家へ来て下さい。」と祖先へ報告した。

8　旧盆

上江洲と西銘の村落では、旧暦の７月13日をオンケーとかウンケー、14日をナカビ、15日をウークイと呼んだ。

家の仏壇に女性たちは、りんごやシークヮーサー（ヒラミレモン）などの果物、サトウキビ、お菓子、食事を日の朝・昼・夕の時間に供えた。これらの供物を村びとは、ショウロウクヮンデー（精霊の食事）と呼ぶ。上江洲で暮らす78歳の古老は、供物の準備で盆の２～３日前から山や森へ行きバンシルー（グヮバ）、グーガー（種類不明）、シイの実を探したと話す。家の女性たちはそれらの山の幸を調理し、祖先へ供えた。その他には海岸にも出向き、アダンの実を求めた。逆に上江洲と違って鳥島の村落では、海の幸をつかった料理を仏前へ供えていた。

13日の午後７時ごろになると家の夫婦は、屋敷の門へ出向き、その門前の両側に小さい迎え火（ロウソク）を準備する（Ｐ409－３）。ロウソクがない時代は、トゥブシ（リュウキュウマツの油）を竹につけ、松明にしていた。その火は、先祖に対して迎えの合図である。祖先の迎えの準備ができると夫婦は、仏壇へ供物を供え、家族で祈願する（Ｐ409－４）。

もしも、旧盆中にハベル（蝶または蛾）が家のなかへ入ってくると、村びとは祖先が子どもたちに会いにきたと考えた。

14日と15日の期間は、仏壇に朝・昼・夕と３回の食事を供えた。

15日の夜から16日の早朝はウチカビ（紙銭）を焼き、祖先に「また来年もきて下さい。」と言いながら玄関から見送った。この期間は、家族で参加した。

西銘の村落は、盆に踊るエイサーもある。しかし、その踊りは昭和40年代からはじまった。現在は、若い青年たちが少ないために上江洲出身の青年が会長を務める場合もある。『久米具志川間切規模帳』（1831）には、７月中に男女でウスデークを踊ったとある。

一、七月文中百姓等男女打込おすたいく躍仕家内毎忌係り之方も無構押而罷出所中之故障ニ相成剰終夜男女致混雑節儀之妨不宜候間向後右体之挙動無之様堅締方可申渡事

玉木順彦は、「おすたいく」をシヌグとウンジャミと同じか、似念仏を指すものなのかを今後の課題としてあげている（註43）。

第４章　ヤッチのガマと村びとの生活

第１節　ヤッチのガマに関する口碑

ジュウロクニチー（十六日祭）の墓参り以外に上江洲と西銘の村びとは、ヤッチのガマに近づく人はいなかった。その洞穴は薄気味悪く、とても恐ろしい場所であった。村びとは、洞穴に近づくとマブイ（魂）をとられると信じられていた。それは、不思議な出来事がまつわる場所だからであろう。村に次のような話がある。

村の青年たちは、度胸ためしによくヤッチのガマから頭蓋骨をとってきた。頭蓋骨をとってきた青年は村の友人たちに頭蓋骨をみせ驚かせた。みた人は驚いて逃げたり、興味をもってながめたりした。その後、逃げた人は急死したり、自分の家畜が死んだり、頭蓋骨をもってきた人は精神的におかしくなった。また、ある青年はヤッチのガマで野糞をしたり、骨蔵器のなかから足骨を取り出して自分の足を見比べたりした。その青年は、足が不自由になったと言われている。

ヤッチのガマにはマタク（唐竹）があった。上江洲のある男性は、そのマタクを剪定し、馬の腹に装備する道具をつくった。そうすると、たちまち馬の腹が調子悪くなったり、別の病気にかかったり、自分の身の回りで悪

い出来事ばかりが多くなった。この体験談はたちまち村中に広がり、村びとたちはヤッチのガマから物をとる行為をやめるようになった。

よく村びとたちは、ヤッチのガマに葬られている祖先は、久間地で暮らしていた人たちの遺骨だと語る。昔、久間地原にある五枝松の北側にはミージマ（新しい村）があった。そこで暮らしていた人たちは、赤痢やコレラなどのイチリー（伝染病）が蔓延し、多くの死者を出した。上江洲と西銘の村びとたちは、伝染病で亡くなった人たちをヤッチのガマへ葬ったと言い伝えられている。

しかし、ヤッチのガマに葬られている祖先を祀る子孫はいくつか確認できる。それは、上江洲、山城、當間、西銘などの各家である。

ヤッチのガマには骨蔵器の転用器がよく南蛮甕を利用している。それに関する口碑もある。ある村では、ヤッチのガマにあった南蛮甕をとってきて酒甕として利用しているという。村びとたちは、10年前ほどに多くの南蛮甕をみたが、最近からその甕が少なくなっていると話す。その理由は、骨董品や酒甕の価値がある南蛮甕を盗掘する人たちが多いからだとされている。

ヤッチのガマの西北側には、チャラのクブと呼ばれるガマがある。その場所は、ヤッチのガマと同じような墓があった。それは、村びとから吉里家が管理していたと言われている。上江洲の古老によれば、ミシマ（上江洲・久間地・西銘の村）のカミンチュ（神を司る神女）がチャラのクブで「ヤッチコイナー、〇〇コイナー、〇〇コイナー、・・・」とウムイ（唄）をうたったという。その祀りは、どのような行事だったのかは知らない。

このようにヤッチのガマを口碑からみてみると、上江洲と西銘の村びとたちは自分たちの祖先が葬られている場所であり、とても恐ろしい存在であったようである。

第２節　生業の領域

ヤッチのガマの近くに暮らしていた大原の家族たちは、カンジン原の自然から食材を得ていた。

例えば、大原の子どもたちは、学校に通う途中に甘くてすっぱい味のするクービ（種類不明）の実を採ったり、紫色に熟したアクチャ（やぶこうじ科のモクタチバナ）の甘い実をとり、口いっぱいに頬張りながら食べたり、野原にあるフーチバー（きく科のヨモギ）やサシグサ（きく科のタチアワユキセンダングサ）を採り、油で揚げ食べたりした。とくに大原の村びとは、屋敷や野原にいる小さな蛙が鳴くと雨が降ると知っていた。雨が降ると村の子どもや女性たちは、野原へむかった。水はけの良い砂地や畑でフックヮサー（藍藻類のネンジュモ属）をバーキ（竹製の籠）いっぱいにとってきた。その藍藻類や樹木に着生するミミグイ（キクラゲ）は、食料になった。

自然のなかに植物は、生活の道具にもなった。ヤッチヌメーにはヤマダキがあり、バーキの材料にしたり、ムルギー（種類不明）の木を４等分にして箸をつくったり、マーチュー（リュウキュウマツ）の油でトゥブシ（松明）に利用したり、シンダギ（せんだん科のセンダン）をタンスなどの木材にしたり、キシバ（種類不明）の木をとってきてタンムン（薪）に利用した。村びとは、「その乾燥させた木を燃やすとパチパチといい音がなり、香りがとても良かった。」と話す。

さらに村びとにとって小動物も食料になった。雨が降った時は、チンナン（蝸牛）をとってきて湯がきして食べた。ハブ（猛毒の蛇）は、腹の部分の油を炒め薬として利用したり、肉を焼いて食べたりした。

西銘の青年たちは、具志川村からの委託でヤッチヌメーのダキヤマ（竹の群落）を管理していた。その場所は、ヤッチのガマから久間地にむかって下りたあたりであった。また、ある人はヤッチのガマの入口付近に畑を所有していた。その畑には、チャーギ（まき科のイヌマキ）などの木を植えていた。

第３節　沖縄大戦とヤッチのガマ

昭和の第２次世界大戦中に上江洲と西銘の村びとたちは、ヤッチのガマを防空壕として利用していた。大原の人たちもヤジャーガマやヤッチのガマなどにこもった。ヤッチのガマの石垣囲いや入口付近にあった骨蔵器は、避難場所を確保するために移動させられた。その場所で村びとたちは、生活の空間をつくり寝泊りした。

戦時中の時に外を歩くことは、とても危険であったために生活のほとんどがガマの中で過していた。久米島の上空にアメリカ軍の飛行機がみえると空襲警報が鳴り響いた。その時に村びとたちは慌ててガマのなかへ潜んだ。

その当時の体験を村びとは、「アメリカ軍が久米島へ上陸してきた時は、アメリカ軍人がガマに隠れた村びとへ近づき、日本語で『でてきなさい！』と何度も呼びかけていた。」と語る。

村びとは、ガマのなかや周辺で煮炊きをした。ガマの天井や顔には真っ黒になり、その残り灰がガマのなかに残っていた。

ある大原の家族は、ヤッチのガマのなかで出産した。ガマの近くに竹が生えていた風景をみた父親は、その竹にあやかって子どもへタケ子という名前をつけた。

このように上江洲と西銘、大原の村びとにとってヤッチのガマは、村の歴史を記憶し、祖先や体験してきた出来事を思い出させる場所であった。村びとは言う。「ヤッチのガマには昔の先人たちの思い出があり、今の人たちにとってかけがえのない場所である」と。

第5章　おわりに

ヤッチのガマとミシマの関係は、村びとの口碑、墓参りの習俗、戦争などの生活の体験からしか探れなかった。今のところ、ヤッチのガマに関する史料はみつけられなかった。

ミシマの村落は、もともと西銘から拡大し、行政区として3字にわかれた。ミシマの村落は、集村の形態を保持している。さらに大原に首里・那覇の士族たちが移住し、散村を形成していった。これらの村びとたちは、ヤッチのガマをとても恐れ、ジュウロクニチー以外の行事では近づかなかった。大原の村びとたちは、ヤッチのガマの付近で植物を採集したり、小動物を獲ったり、生活の飲料を求めたりした。西銘の村びとは、ヤマダキの管理をするぐらいでほとんどヤッチのガマを訪れなかった。

このような印象のなかでヤッチのガマは、美術学、生物学、植物学、写真家、民俗学などの分野で早くから注目されていた。民俗学の第一次資料としては、第一級の価値があったのである。

ヤッチのガマがいつの時代に造営されたのかは、聴取の調査でみつけられなかった。しかしながら、ヤッチのガマに葬られた人たちはミージマの村びとや西銘の旧家の祖先が葬られていると考えられる。これらは、口碑や体験の伝承からの見解であった。

ヤッチのガマは、遺物などの資料から18世紀ごろに利用されていたであろうと考えられる。当時の葬制に関する資料は、『久米具志川間切規模帳』（1831）である。

龕や葬具を毎回仕立ていた当時と違って、火葬が普及する前のミシマでは、共同で龕や葬具類を利用していた。荼毘は、身分によって相応な祀り方があったと思われる。それはサムレー（西銘の旧家）とヘイミン（平民）の区別であったようだ。亀甲型などの建造物の墓を所有する家は、やはり上江洲家などの旧家であった。それ以外の村びとたちは、建造物の墓をつくれず、フルミーと言われる丘陵の崖や岩陰を利用した葬所であった。洗骨に関しては、何度も繰り返して骨を洗うような習俗も確認できなかった。『四本堂家礼』（1713）の移葬は祖先の骨を焼いた後に新しい墓へ移したが、上江洲と西銘の村びとの体験にはみられなかった。その他にも史料と民間伝承との間には、多少の相違点が確認できた。

上江洲と西銘の地域で慣習されている祖先祭祀では、とくにジュウロクニチーの時にしかヤッチのガマなどの墓参りの習俗がなかった。西銘の上江洲家は、沖縄県の地方役人層として早くから亀甲墓を受容していた。さらに上江洲家と吉浜家では、久米系士族の『四本堂家礼』や王府の『服制』などの史料が多くみつかっている。那覇の港から出航した進貢船は、航海の途中で久米島を寄った。その船のなかには風水見がいた。その専門家の助言をうけた西銘などの役人層たちは、亀甲墓を造営したり、墓の新築に関する祭祀を学んだりしていた。しかしながら、首里・那覇などの士族社会で顕著に行われている清明祭をミシマの村びとたちは、そのままの祭祀の法式を受容していなかったと考えられる。

具志川村字西銘では、役人層を多く輩出した上江洲家がある。その家では、沖縄本島の久米系士族の蔡家が所有する『四本堂家礼』などがみつかった。その史料は、早くから民俗学の重要な資料であると言われている（註44）。

今回は、葬制に関する具体的な記述はできなかった。それは、今後の調査で補っていきたい。今後の研究課題は、史料と実地調査をもとに久米島の社会の階層をみつめつつ、祖先祭祀に関連する習俗の変容について考えたい。

【註】

註１．『久米具志川間切規模帳』に関する報告は、梅木哲人の「久米島の規模帳・公事帳について」（沖縄久米島調査委員会編、『沖縄久米島―沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究―報告書』、弘文堂、1982年）と玉木順彦の『近世先島の生活習俗』（ひるぎ社、1996年）などが詳しい。

註２．総合的な調査研究は、いくつかみられる。まず、沖縄久米島調査委員会編による『沖縄久米島―「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」―』（弘文堂、1982年）と『沖縄久米島―資料編―』（弘文堂、1983年）である。その次に法政大学百周年記念久米島調査委員会編の『沖縄久米島の総合的研究』（弘文堂、1984年）がある。また、沖縄県立博物館編の『久米島総合調査報告書―自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築―』（沖縄県立博物館、1995年）と『特別展「大久米島展」―しぜん・ひと・もの―』（沖縄県立博物館、1996年）もある。とくに自然に関する調査研究は、他の離島と比べてみると多い。沖縄自然研究会編の『久米島県立自然公園候補地学術調査報告沖縄自然研究会調査報告第１号』（沖縄自然研究会、1974年）からはじまり、池原貞雄編による『琉球列島の自然とその保護に関する基礎的研究（１）文部省科学研究費特定研究「人間生存」1973年度研究報告』（琉球大学理工学部生物学科、1974年）と『琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革「環境科学」研究報告集Ｂ63－Ｒ12－20』（文部省「環境科学」特別研究陸域部門、1980年）と『琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革Ⅱ「環境科学」研究報告集Ｂ113－Ｒ12－20』（文部省「環境科学」特別研究陸域部門、1981年）がみられる。近年の風水や史料の学術調査では、横山俊夫研究代表者による『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』（課題番号08309006、平成８年度～平成10年度科学研究費補助金基盤研究（Ａ）（１）研究成果報告書、京都大学人文科学研究所、1999年）もみられる。

註３．宮本常一、『私の日本地図８・沖縄』、同友館、1971年、95－96頁。

註４．仲松弥秀、『沖縄の地理』、琉球郷土誌研究会、1960年、85－86頁。

註５．石灰岩は、炭酸ガスによって溶ける性質をもつ。長い歳月をかけて、琉球石灰岩は、雨水に含まれている炭酸ガスの科学的作用によって、地表面の浸食が進む。その痕跡は、凹凸の地形を残す。そのなかで小凹地を「ドリーネ」と呼ぶ。そのドリーネが拡大・接続した凹地を「ウバーレ」といい、さらに浸食が数10ｋ㎡になると「ポリエ」という溶食盆地となる。沖縄本島では、本部半島や北谷、沖縄市、勝連半島、糸満市周辺などでみられる。中国広西壮族自治区桂林は、その地形で世界的に有名である。大原の北側に面するカンジン原の浸食痕跡は、ウバーレとポリエの中間に位置する地形だと思われる。その貴重な自然物の地形は、ダム建設によって失われつつある。

註６．具志川村役場企画課編、『平成９年村勢要覧久米島具志川村』、具志川村役場、1997年、18頁。

註７．小川徹は、「久米島民俗社会の基盤―水田造営形態と集落移動の関係について―」のなかで、「人々の最大の関心事が雨であったことは、『仲里旧記』に雨乞いのオタカベが数多く書き記されていることで判るが、これは干魃が島の気候条件からくる不可避的な災厄だった」と言及している（沖縄久米島調査委員会編、『沖縄久米島―沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究―報告書』、弘文堂、1982年、243頁）。

註８．沖縄気象台編、『沖縄の気象解説』、沖縄気象台、1996年、30頁。

註９．仲松弥秀、『神と村』、梟社、1990年、18頁。

註10．仲松弥秀、前掲書、18頁。

註11．仲松弥秀、前掲書、210－211頁。

註12．仲原善忠、『仲原善忠全集』第３巻、沖縄タイムス社、1973年、２頁。

註13．沖縄久米島調査委員会編、『沖縄久米島資料篇―「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合研究」報告書』、弘文堂、1983年、329頁。

註14．仲松弥秀、「村と生活」『沖縄県史』第22巻各論編10民俗１、琉球政府、1972年、104－105頁。

註15．明治の廃藩置県によって職を失った士族たちは、農村へ移住し、集落を形成しはじめる。当時の廃藩置県は、沖縄社会にとって大きな変革であった。その点に注目した田里友哲は、「都市生活者であった士族は、都市の生活困難、就職難等の社会問題が惹起するにつれて、零洛士族達は農村の属地内に、相互交渉によって、荒地、荒蕪地の開墾・開拓を主目的とする小作関係が成立し、集落化が進展したものを屋取集落」であると規定した（『論集沖縄の集落研究』、離宇宙社、1983年、51－52頁）。

註16．喜舎場朝賢は、『東汀随筆続編』のなかで大原開墾について詳しく記している（『琉球見聞録』、至言社、

1977年）。

註17. 州立ハワイ大学宝玲叢刊編纂委員会監修、『宝玲叢刊写真集望郷沖縄』第４巻、本邦書籍、1981年、16頁。

註18. 東松照明の『日本の美　光る風―沖縄東松照明』（日本アート・センター編、現代日本写真全集第８巻、集英社、1979年）。その他には萩原の写真を藤井正雄の「葬制からみた霊魂観・死後観」（宮家準編、『民俗と儀礼―村落共同体の生活と信仰―』大系仏教と日本人９、春秋社、1986年、127頁）と上江洲均の『沖縄の暮らしと民具』（慶友社、1982年、219頁）などに利用されている。また、長沢利明の「沖縄の墓」（『地理』第35巻第８号、古今書院、1990年、２頁）にもヤッチのガマと思われる写真がある。

註19. 永井亀彦、「大正二年沖縄日記（三）」『南島研究』第２６号、南島研究会、1986年、28頁。この文をはじめて紹介したのが洒井卯作である（『琉球列島における死霊祭祀の構造』、第一書房、1987年、32－33頁）。

註20. 多和田真淳、「久米島植物採集記（13）」『沖縄朝日新聞』、沖縄朝日新聞社、1932年９月30日づけ。

註21. 比嘉景常、『久米島紀行』、1937年。

註22. 伊波普猷、『をなり神の島』、楽浪書院、1938年、33頁。

註23. 伊波普猷、「南島古代の葬儀」『民族』第２巻第５号、民族発行所、1927年、14頁。

註24. 伊波普猷、「琉球の墳墓」、山本三生編、『日本地理大系―九州篇―』第９巻、改造社、1930年、260頁。

註25. 上江洲均、『沖縄の暮らしと民具』、慶友社、1982年、219－220頁。

註26. 名嘉真宜勝の「沖縄の風葬と厨子甕」（市場直次郎編、『九州・沖縄地方の民具』、明玄書房、1983年、228頁）と呂青華の「亀甲墓の中琉比較研究」（『第７回中琉歴史関係国際学術会議中琉歴史関係論文集』、中琉文化経済協会、1999年、21頁）にヤッチのガマの文字がみえる。

註27. 福島駿介の「久米島の大風葬地―ヤッチのガマを考える―（１）」（『沖縄タイムス』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年11月17日づけ）、土肥直美の「久米島の大風葬地―ヤッチのガマを考える―（２）」（『同上』）、上江洲均の「久米島の大風葬地―ヤッチのガマを考える―（３）」（『同上』）。城間肇・西銘章・藤崎京の「久米島ヤッチノガマ調査上―墓制知るうえで貴重―」（『沖縄タイムス社』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年７月29日づけ）、土肥直美の「久米島ヤッチノガマ調査下―例を見ない被葬者数―」（『沖縄タイムス社』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年７月30日づけ）たちがヤッチのガマについての意見が綴られている。

註28. 小牧実繁、「久米島民俗断片」『民俗学』第３巻第４号、民俗学会、1931年、30頁。

註29. 琉球大学民俗研究クラブ編の「比屋定部落調査報告」では、「洗骨を済むと甕に頭を上にして入れ、白い紙を覆い蓋をした。この白い紙は衣装の意味らしく、７年毎のハルウガミの日に交換するもので、衣装ゲーイといわれる。」と報告されている（『沖縄民俗』第14号、琉球大学民俗研究クラブ、1967年、39頁）。1981～1982年に仲里村島尻の民俗を調査した長沢利明は、「ユタはこれら９本の骨ガメに魔よけをほどこす。蓋の下に半紙を敷き、ススキの葉をしばったサニとよばれる束をはさむ。こうすると移動の途中、悪霊が骨ガメにとりつかれないのだという。」と報告している（「久米島の洗骨習俗から」『日本民俗学』第149号、日本民俗学会、1983年、９頁）。

註30. 久米島の洗骨習俗に関しては、長沢利明の「久米島の洗骨習俗から」（前掲書、1983年、１－16頁）と「南島の洗骨をめぐる諸問題」（『民族学研究』第53号第４号、日本民族学会、1989年、410－420頁）が詳しい。1981～1982年にかけて仲里村の島尻を調査した長沢は、火葬場が設置された後の島尻の葬制について次のように報告している。

久米島においては1979年に具志川村嘉手苅の上原に火葬場が設置され、全島の利用施設となり順次火葬化が進んでいる。しかし火葬処理が義務づけられているわけではないので利用しない家々もまだ多い。島尻部落の場合、火葬場完成後から今日に至るまで（1981年８月までの２年間に）、これを利用した家はわずか２戸にすぎないが、火葬場利用の気運の高まりからみて今後の利用者の増加が予想される（前掲書、1983年、16頁）。

註31. 蔡文溥の『蔡家家憲』の「遷葬之事」（崎浜秀明編、『沖縄旧法制史料集成』第５巻、自家出版、1936年、339頁）。また、上江洲均は、他の墓から骨を移す時に焼骨する事例を浦添市内の墓で実見したと次のように報告している。

すなわち、墓室正面奥の壁面に一段上げて穴をうがち、小型の厨子甕を置いていたが、中には明らかに

焼いたと思われる炭化した骨が入っており、残念なことに銘書きがなかった。恐らくはどこかにあった先祖墓から新墓へ骨を移した際に焼いたであろうと想像する（『沖縄の暮らしと民具』、慶友社、1982年、250頁）。

註32. 平敷令治、『沖縄の祖先祭祀』、第一書房、1995年、226頁。

註33. 玉木順彦、「沖縄の位牌に関する史料」、赤田光男編、『祖霊信仰』民衆宗教史叢書第26巻、雄山閣、1991年、164－165頁。

註34. 上江洲均、前掲書、1982年、240－243頁。

註35. 平敷令治、前掲書、1995年、397頁。

註36. 渡邊欣雄、「沖縄から尋ねる中華文明―覚書」、末成道男編、『中原と周辺―人類学的フィールドからの視点―』、風響社、1999年、245頁。

註37. 長沢利明、前掲書、1983年、４頁。

註38. 上江洲均、前掲書、1982年、240－241頁。

註39. 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書、1967年、35頁。

註40. 平敷令治、前掲書、1995年、459頁。

註41. 上江洲均、前掲書、1982年、221－222頁。

註42. 沖縄県立博物館編、『久米島総合調査報告書論文編・資料編』、沖縄県立博物館、1995年、７－28頁。

註43. 玉木順彦、前掲書、ひるぎ社、1996年、188頁。

註44. 『四本堂家礼』に関する報告は、窪徳忠の「『四本堂家禮』に見える沖縄の中國的習俗」（『東方学』第51号、東方学会、1975年）や「中国の習俗と『四本堂家礼』」（『南島史学』第７号、南島史学会、1975年）、小川徹の「『蔡家家憲』あるいは『四本堂家礼』のこと」（『沖縄文化』第30・31号、沖縄文化協会、1970年）や「『四本堂家礼』その後」（『沖縄文化』第39号、沖縄文化協会、1972年）、上江洲敏夫の「『四本堂家礼』と沖縄民俗―葬礼・喪礼について―」（『民俗学研究所紀要』第８集、成城大学民俗学研究所、1980年）などが詳しい。

【参考文献】

伊波普猷、「南島古代の葬儀」『民族』第２巻第５号、民族発行所、1927年。

伊波普猷、「墳墓」『日本地理大系－九州篇－』第９巻、改造社、1930年。

伊波普猷、『をなり神の島』、楽浪書院、1938年。

上江洲均、『沖縄の暮らしと民具』、慶友社、1982年。

上江洲均、「久米島の大風葬地―ヤッチのガマを考える―（３）」『沖縄タイムス』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年11月19日づけ。

沖縄気象台編、『沖縄の気候解説』、沖縄気象台、1996年。

沖縄久米島調査委員会編、『沖縄久米島資料篇―「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合研究」報告書』、弘文堂、1983年。

沖縄県立図書館史料編集室編、「久米具志川間切規模帳」『沖縄県史料前近代６首里王府仕置２』、沖縄県教育委員会、1989年。

小川徹、「久米島民俗社会の基盤―水田造営形態と集落移動の関係について―」、沖縄久米島調査委員会編、『沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究報告書』、弘文堂、1982年。

小川護、「地形図をとおしてみた沖縄―沖縄の自然と文化―」、沖縄国際大学公開講座委員会編、『環境問題と地域社会―沖縄学探訪―』沖縄国際大学公開講座２、ボーダーインク、1997年。

小牧実繁、「久米島民俗断片」『民俗学』第３巻４号、民俗学会、1931年。

加藤祐三、「久米島」、木崎甲子郎編、『琉球弧の地質誌』、沖縄タイムス社、1985年。

喜舎場朝賢、『琉球見聞録』、至言社、1977年。

具志川村史編集委員会編、『久米島具志川村史』、具志川村役場、1976年。

具志川村役場企画課編、『平成９年村勢要覧久米島具志川村』、具志川村役場、1997年。

蔡文溥、「蔡家家憲」、崎浜秀明編、『沖縄旧法制史料集成』第５巻、自家出版、1936年。

酒井卯作、『琉球列島における死霊祭祀の構造』、第一書房、1987年。

城間肇・西銘章・藤崎京、「久米島ヤッチノガマ調査上—墓制知るうえで貴重—」『沖縄タイムス』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年７月29日づけ。
州立ハワイ大学宝玲叢刊編纂委員会監修、『宝玲叢刊写真集望郷沖縄』第４巻、本邦書籍、1981年。
田里友哲、『論集沖縄の集落研究』、離宇宙社、1983年。
玉木順彦、「沖縄の位牌に関する史料」、赤田光男編、『祖霊信仰』民衆宗教史叢書第26巻、雄山閣、1991年。
玉木順彦、『近世先島の生活習俗』、ひるぎ社、1996年。
多和田真淳、「久米島植物採集記（13）」『沖縄朝日新聞』、沖縄朝日新聞社、1932年９月30日づけ。
土肥直美、「久米島ヤッチノガマ調査下—例を見ない被葬者数—」『沖縄タイムス』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年７月30日づけ。
土肥直美、「久米島の大風葬地—ヤッチのガマを考える—（２）」『沖縄タイムス』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年11月18日づけ。
東松照明、「作品解説」、日本アート・センター編、『日本の美　光る風—沖縄東松照明』現代日本写真全集第８巻、集英社、1979年。
長沢利明、「久米島の洗骨習俗から」『日本民俗学』第149号、日本民俗学会、1983年。
長沢利明、「南島の洗骨をめぐる諸問題」『民族学研究』第53号第４号、日本民族学会、1989年。
長沢利明、「沖縄の墓」『地理』第35巻第８号、古今書院、1990年。
仲原善忠、「久米島史話」『仲原善忠全集』第３巻、沖縄タイムス社、1978年。
名嘉真宜勝、「沖縄の風葬と厨子甕」、市場直次郎編、『九州・沖縄地方の民具』、明玄書房、1983年。
仲松弥秀、『沖縄の地理』、琉球郷土誌研究会、１960年。
仲松弥秀、「村と生活」『沖縄県史』第22巻各論編10民俗１、琉球政府、1972年。
仲松弥秀、『神と村』、梟社、1990年。
仲松弥秀、『琉球弧の村落探求11沖縄県離島群（渡名喜、粟国、伊是名、久米島）』、自費出版、1998年。
永井亀彦、「大正二年沖縄日記（３）」『南島研究』第26号、南島研究会、1986年。
比嘉景常、『久米島紀行』、1937年。
福島駿介、「久米島の大風葬地—ヤッチのガマを考える—（１）」『沖縄タイムス』日刊１版、沖縄タイムス社、1999年11月17日づけ。
平敷令治、『沖縄の祖先祭祀』、第一書房、1995年。
外間守善、『おもろさうし』、角川書店、1993年。
外間守善・波照間永吉編、『定本琉球国由来記』、角川書店、1997年。
前田一舟、「久米島・具志川村大原の村びとと藍藻類ネンジュモ属」『あやみや』第９号、沖縄市立郷土博物館、2001年。
宮本常一、『私の日本地図８・沖縄』、同友館、1971年。
琉球大学民俗研究クラブ編、「比屋定部落調査報告」『沖縄民俗』第14号、琉球大学民俗研究クラブ、1967年。
呂青華、「亀甲墓の中琉比較研究」『第７回中琉歴史関係国際学術会議中琉歴史関係論文集』、中琉文化経済協会、1999年。
渡邊欣雄、「沖縄から尋ねる中華文明—覚書—」、末成道男編、『中原と周辺—人類学的フィールドからの視点—』、風響社、1999年。

【伝承者】

仲地　弘（上江洲在住、大正13年生まれ）
仲地　節子（上江洲在住）
川村　正雄（上江洲在住、昭和20年生まれ）
盛吉　秀雄（西銘在住、昭和９年生まれ）
盛吉　邦尚（西銘在住）
盛吉　春枝（西銘在住）
盛吉　洋子（西銘在住）
新垣　勝（大原在住、昭和３年生まれ）

新垣　喜久子（大原在住、昭和13年生まれ）
大田　トヨ（大原在住、昭和13年生まれ）
比嘉　光博（大原在住、昭和元年生まれ）
比嘉　文（大原在住、昭和元年生まれ）
比嘉　富（大原在住、昭和11年生まれ）
又吉　鶴（大原在住、昭和９年生まれ）

【追記】
上江洲と西銘の民俗学的な調査にあたり、平敷令治（故人・沖縄国際大学名誉教授）、上江洲均（名桜大学教授兼久米島自然文化センター館長）、佐久田勇（仲里村教育委員会文化振興係）、中島徹也（具志川村教育委員会文化財係）、西銘章（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課）ほか、多くの方々からご教示を頂いた。末筆ながら記して深く感謝を申し上げる。

第９部　総括

以上が県営かんがい排水事業（カンジン地区）発掘調査の成果である。今回の調査は、考古学だけでなく、形質人類学、民俗学と連携をとって調査をすすめた。その詳細な成果は各項目のとおりである。

今回、調査の中心となったヤッチのガマでは、検出された遺構は、石積みをはじめとした規模の大きなものであった。最も多く得られた遺物は厨子である。特にボージャー厨子が多い点は特筆すべきことである。ヤッチのガマ、カンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺）はボージャー厨子の形状が似ることから、ほぼ同時期のものと思われ編年を行うにあたって鍵になる。また、その他の陶磁器にも完品または完形に近い資料があり、肥前系磁器を中心に出土している。

１　遺構

地区内には150基余りの墓があり、Ⅰ・Ⅱ地区は岩陰利用墓、Ⅲ・Ⅳ地区は破風墓・亀甲墓が多くみられる。ただし、Ⅲ地区は掘込墓が主体で、岩陰利用墓も散在することから若干古い時期と考えられる。墓域の移動は各項で述べたが、厨子の構成、墓の形態から次のように考えられる。まず、Ⅰ地区の中でもヤッチのガマ一帯に墓域が形成され、それが次第にⅠ・Ⅱ地区内へ広がる。Ⅲ地区で掘込墓などが混在するようになり、最終的にはⅣ地区に至った、となろう。これらの点から、初期は集落から離れた場所に墓域を設けていたものが、次第に集落近くに墓域を設けるようになったと考えられる。同様な傾向は、萩尾俊章氏が指摘した、上江洲家所有の墓が古い時期のものほど本家から遠く、しだいに集落へ近づいてきたという点と合致する（萩尾1994）。また、農水部が行った事前の保証物件調査で所有者（村内在住者）が明らかになった墓の大半は上江洲・西銘（またはその周辺）であったことから、この地域の人々が占有的に利用したと分かる。

民俗調査では、上江洲集落で破風墓や亀甲墓をもてない人々は岩陰などを利用した「フルミー」とよばれる墓を利用していたとのことであった。Ⅰ・Ⅱ地区で確認された岩陰利用墓がこれにあたるものであろうか。

岩陰利用墓でもヤッチのガマとチャラのクブは洞穴前庭部に石積みの区画を巡らせて墓域とする特異なものである。前者は多数の区画、後者は単一の区画からなる。ヤッチのガマは構築当初もしくはしばらく後から複数の区画があり、複数の集団（血縁的なつながりは不明）が利用していたと考えられる。また、チャラのクブも厨子を配置した段上を石列で分けていることから、複数の集団で用いていたと考えることもできる。

特にヤッチのガマの遺構は地区内でも石積み１・２が最も規模が大きく、かつ最も古いと考えられる遺構である。用いている石材は大きなものは俵大で、小さいものでも人頭大である。一帯は琉球層群の石灰岩で石質が脆いのに対して、遺構に使用している石材は硬質であることから、離れた場所から運んできたと考えられる。石積み１は高さが最大で2.5m、低い部分で１m、石積み２は２mであった。第13図をみて分かるように、地表より１段高くするようにつくられており、外界と墓域を遮断するためと思われる。島内の古墓では、ナカベーヤ崖葬墓地帯や新原古墓群が崖の中腹につくられ、墓域と外界を分ける意識があったと考えることができる。また、石

積み３は新しい時期に属するものと考えられるが、カンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺）の１号墓構築の際につくられた可能性が考えられる。

区画の形成順序は３～10号区画の石積みは礫敷き遺構上に構築されていることから、これらの区画が石積み１と礫敷き遺構が形成されたと同時期か近い時期に形成されたと考えられる。ただし、石積み１に伴うと思われる石列Ｂの方向と10号区画が異なることから石積み１よりも後の時期と考えるのが適当と思われる。また、石列Ｂが11号区画の下にもぐっていることから、11号区画も10号区画と同様に石積み１よりも後の時期と考えてよいだろう。これに対して、１号区画は石積み１と礫敷き遺構を覆った堆積層上に構築されていることから、ヤッチのガマ内ではかなり新しい時期に形成されたと考えられる。また、12号区画は最下層のジャリ層に構築されていることから石積み１と同時期に比定できよう。

２号区画内では建物礎石を確認した。約半間の間隔で火成岩の平石を並べており、約４ｍ四方の建物であったと思われる。墓と建物の関係では、伊波普猷が国頭地域に家屋状の墓があったことを確認している（伊波1938）。浦添市所在の浦添ようどれでは古い時期に瓦葺きの木槨があり、木槨内部には鍍金金具で飾った朱漆塗りの木棺を収めていたと想定されている（安里2000）。また、浦添ようどれでは、14世紀末～15世紀初めに木槨を焼いたとされ、その土坑が確認されている。ヤッチのガマでは焼土が確認されており、石積み１の表面を脆くするほどであることから大規模に火を焚いたと思われる。

10号区画においては、上段の奥に多量の人骨を集骨した人骨集中部が確認されており、その堆積状況は、大型人骨～人骨細片・風化（大型人骨含）の５層であった。前述のとおり、これらには焼骨や火葬骨が含まれており、その性格については、疫病等の感染により死亡した者の亡骸を焼却することにより、感染拡大化を防いだとの意見等もあるが、推測の域を出ないことから現段階においてはその性格は不明である。民俗調査でも、ヤッチのガマに疫病で亡くなった人を葬ったという口碑を得ている。

上段～中段の造成状況からは、地下と地表の遺構の時期差を示す結果が得られている。当初、区画内の造成状況確認に先行して、上段奥の人骨集中部の堆積状況を確認する作業を行っていたところ、最下部に位置するＶ層が上段造成部へ潜り込んでいるのが確認できたことから、人骨集中部Ｖ層上面で一端作業を中断し上段造成状況を確認する作業に移行した。上段造成状況は、６層ａ、ｂ、ｃ、ｄの造成層の西端部上に５層（人骨集中部堆積状況Ｖ層に対応）が堆積しており、また５層上には３層及び４層が堆積している状況が確認できた。さらに上層には新しい時期の造成（１ａ、ｂ層及び２層）がなされており、地下と地表の遺構の明確な時期差が存在することが明らかとなったといえる。３層の焼石や火葬骨・焼骨についても古い時期から意図的に亡骸や人骨を焼却するという意識が働いていたことが窺い知ることができる。11号区画において上段として扱った小洞穴内にも人骨集中部が確認されているが、火葬骨や焼骨等は一切確認できていないことから、亡骸や人骨を焼却するという観点で考察した場合、10号区画と11号区画には時間的あるいは性格的な前後関係が存在するといえる。

2　遺物

厨子は上江洲均氏が指摘するように久米島の古墓においてはボージャー厨子の数が卓越する（上江洲1996）。同様な点はヤッチのガマを含めたカンジン原古墓群（特にⅠ・Ⅱ地区）にも当てはまる。上江洲氏による編年（上江洲1980）や金武氏による分類（那覇市教委1998）をあてると、ヤッチのガマおよびその周辺ではつくりがしっかりとしたやや古手のものがみられるのに対して、その他のカンジン原古墓群では、眉のつくりが粗雑になった新しいタイプが多くみられる。これは墓域の移動を考える上でも参考になる。

銘書を記した例は少なく、墨書で最も古いものではカンジン原古墓群６号墓№19（転用品）で「乾隆拾六辛未十一月之入／前首里大屋子／同人妻／同人男子真□（赤ヵ）」（1751年）であった。ヤッチのガマでは９号区画№４「乾隆五拾六年子（亥ヵ）ノ七月十一日西銘大掟仲□□（村渠）仁屋」（1791年）が最も古く、２・４・９号区画に銘書が集中する。カンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺）では２・８号墓に銘書を記した厨子が集中する。カンジン原古墓群（その他の墓）では「鉢嶺林方／道光九年己丑八月七日／洗骨・・・」（1829年）が最も古く、上焼御殿形の蓋に「久米島行」と記されたものが複数例あり、沖縄本島からの出荷の際に記入されたものであろうか。

線彫りではカンジン原古墓群２号墓（ボージャー厨子の身）で「雍正四年丙午□□月十二日／［　　］／死去［　　］／安［　　］／親雲上／南無阿弥陀仏」（1726年）が確認できる。その他にヤッチのガマ２号区画で「山城掟山里にや」、カンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺）１号墓で「□□□□（大知分ヵ人）／久米島

具志川間切西目村□□（久之ヵ）ニ而／父親□（女）親入」があり、いずれも人物を特定した特注品であろう。

ボージャー厨子はⅠ～Ⅲ類に分類でき、Ⅰ類が主体である。サイズでは50㎝前後の中型が多い。文様は沈線を主とするが、量的には無文が多い。文様は蓮華文が主体で、貼付による法師像がみられる。その他に幾何学文、草花文などがある。

紙幅の都合により詳細は別項にて述べるが、1・10・11号区画のボージャー厨子を用いて3区画の形成順序を検討した。遺構の検討では10・11号区画は石積み遺構より新しい時期と考えられるが、両区画の形成順序は判然としなかった。両区画のボージャー厨子は検討の結果、1号区画は10・11号区画に比して文様が無文化すること、眉の形態が退化することなどの型式的に新しい要素を持っている。さらに10号区画は11号区画より若干文様が新しいことなどの新しい要素を持っているといえる。そのため、この3区画では11号区画で古い要素を持ったボージャー厨子が多いと考える。

マンガン掛け厨子は大型のものが主体で、文様は沈線が中心である。安里氏の編年（浦添市教委1997）では屋門の特徴からⅢ～Ⅳ期の範囲に収まるものが多いと思われる。中村氏による口縁肥厚部の分類（中村1989）では三角形をなすものが多い。

ボージャー厨子からマンガン掛け厨子に移行するのは18世紀に入ってからとされるが、その過渡期については不明である。ここで鍵となると思われるタイプの厨子が得られている。ヤッチのガマで得られた第51図3、カンジン原古墓群（その他の墓）で得られた第138図4・5のボージャー厨子と、カンジン原古墓群（ヤッチのガマ周辺）の1号墓から得られた第122図3・4のマンガン掛け厨子である。

第51図3などの類例として、銘苅原古墓群の報告では頸部の有無で分類していることから、これを有頸無釉の甕形として扱っている（那覇市教委1998）。今回は、眉の形態がボージャー厨子の要素を持っていること、頸部の形成がマンガン掛け厨子と比べて弱いことなどからボージャー厨子として扱った。

安里氏はマンガン掛け厨子の中でも最も古いⅠ期の厨子は、定型化がすすまず、文様も簡略的とし、Ⅱ期になって屋門・文様などの定型化がはじまるとした（前出）。第122図3・4は文様は単純な蓮華文の貼り付けが連続し、各々を区画で仕切っている。ただ、屋門は小さく、定型化したマンガン掛け厨子と異なる。この点から考えるとⅠ～Ⅱ期に位置づけられるタイプと考えられよう。

ヤッチのガマにおける出土陶磁器類からは非常に偏った特徴的な傾向が得られている。中国や国内などの生産地別に概観したい。

これら陶磁器の製作年代であるが、中国産の青磁については、12世紀後半に位置づけられる碗Ⅰaの劃花文碗やその他の器種についても概ねその上限が15世紀代に納まるもので、主体となる青花や本土産陶磁器類等の他の出土陶磁器と比して古い年代観が与えられることから、おそらく伝世品であるものと思われる。しかしながら、馬上杯や香炉、小壷や茶壷、水滴等の検出例は古墓からの出土としてはバリエーションに富むといえる。

白磁については全体の約60％が小杯となっている。17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる福建・広東系の諸窯や徳化窯、漳州窯の中国南部を生産地とする資料が主体をなしており、特徴的であるといえる。

青花は全体の約50％が小杯となっている。多くは18世紀代に位置付けられる福建・広東系の諸窯や徳化窯、漳州窯の中国南部を生産地とする資料が主体をなしているが、碗や小杯は景徳鎮系の頻度が高い。

中国産褐釉陶器やタイ産褐釉陶器は中国南部やタイのシーサッチャナライ窯にて生産されたものと思われ、15世紀～16世紀前半頃に想定される。大部分が厨子への二次的な転用品として持ち込まれたものと思われる。

本土産染付はヤッチのガマにおいての出土総点数が208点で、厨子以外では最も多く検出されている。中でも瓶は全体の60％を占めている状況であった。器種別にみても概ね18世紀前半に位置付けられる肥前磁器であった。また、本土産陶器についても17世紀から18世紀を軸とする肥前・薩摩等の九州産や京・信楽等の関西系の資料が主体となっている。

沖縄産無釉陶器は、知花・喜納焼の特徴とされる口唇部にサンゴ積み痕ある壷、擂鉢などの資料が多く検出した。壺の出土状況はその器形と地域により相違が確認された。周辺古墓群では沖縄で「ジンガーミ」や「スーチガーミ」とよばれる器形の検出の割合が多かった。

厨子内検出の沖縄産施釉陶器は、タイ産褐釉陶器を利用した厨子（12区画－15）と沖縄産無釉陶器壺胴部を転用した厨子から検出した瓶子（第93図7）と、ボージャー厨子（11区画－4）から検出した酒注（第94図11）である。いずれも小破片を厨子内に収める傾向がみられた。

小型の沖縄産陶器（瓶など）は、口縁部の1部を割り取るものが大半を占めるが、打割しない資料も僅かなが

ら（約１割）得られた。

これまでに述べたように、白磁や色絵、瑠璃釉、鉄釉染付、青花等の中国産陶磁器や本土産染付や陶器については、ヤッチのガマにおいて主体となる出土遺物で、概ね17世紀代から18世紀代に納まるといえる。また、厨子等とも大きな時間差はないことから遺構の造成時期についてもこの範疇に納まる可能性が高い。特に、土中に埋没する過程から新しい時期（地表の遺構）への移行期にこれらの遺物が集中して検出されている状況からもそのことを十分に補えるものと考える。

出土遺物の組成状況からすると、白磁や青花については全体の約60％前後が小杯となっており、本土産染付においては瓶が全体の約60％を占めているという状況であったことからもわかるように、非常に偏った特徴的な傾向を示しているといえるが、碗については、種別にみても平均的な出土傾向をみせているというのも興味深い。

これらのことから、本遺跡の性格上、葬送儀礼の過程において必要とされる道具・器具あるいは仏具として前述の白磁や青花の小杯や本土産染付の瓶、沖縄産陶器の瓶子等が多量に持ち込まれたものと思われる。また碗や小碗、杯等についても前者を補うものとして持ち込まれた可能性が考慮される。本報告書の文頭でも述べたように、前庭部に堆積する土は、洞穴上位の平場や崖上から流れ込んできた土が、非常に短い期間で堆積した自然堆積層である。結果としてこの堆積土により道具・器具あるいは仏具として持ち込まれた小杯や瓶等が土中に埋没することにより、新たな品あるいは代用品が持ち込まれるというサイクルが土の堆積とともに繰り返されたのであれば、今回のような偏った出土状況及び傾向を裏付けるものと考える。

ヤコウガイ製匙はヤッチのガマ周辺から13点、カンジン原古墓群２号墓（ヤッチのガマ周辺）から２点得られた。うち、宮古式土器内から１点（２号墓）、ヤッチのガマ11号区画の上段（人骨集中部）から５点であった。ヤコウガイ製匙は沖縄編年後期に精製品があり、グスク時代まで後続するとされる。大きさは後期のものが大型に対して、グスク時代になると小型化する。上原静氏による集成では、グスク時代に属するものが５ヶ所から確認されている（上原1986）。墓に伴うヤコウガイ製匙は下地原洞穴遺跡（具志川村）、樽舞地区の崖葬墓（与那国町）[1]で得られており、葬送に伴う性格を持っていたことが考えられる。貝が墓に伴う例としてはシャコガイがあげられるが、ヤッチのガマ12号区画、カンジン原古墓群内（工事施行区域外の墓）で未加工のヤコウガイが伴っており、何らかの意味づけがなされているものと考える。木下尚子氏が、ヤコウガイ製のヒシャク状容器が儀礼に用いられ、18世紀頃まで存続していたと想定している（木下1981）ことと併せて、今回出土した製品も何らかの儀礼に関わる性格であったと考えてよいだろう。

ヤッチのガマ、カンジン原古墓群（ガマ周辺）から得られた木製品も特筆すべき遺物である。特に11号区画上段から得られた朱彩の板状製品は興味ぶかい。２号墓35内からはヤコウガイ製匙に伴っていた漆塗りの椀は大きさから小型の椀と思われ、沈金を施すものである。木製品の中では木棺の部材が最も多く、10・11号区画から多く得られている。昭和初期の写真では１～３号区画上段にも木棺の部材と思われるものが写っているが、調査時にはみられなかった。民俗調査では木棺は洗骨後に焼却するか廃棄するかしたとされるが、ヤッチのガマではそのままの状態で残っており、ある時期から焼却・廃棄するようになったのか、ヤッチのガマのみは焼却・廃棄を行っていなかったのか、不明である。

厨子の中でも古いタイプと考えられている木製厨子は百按司墓の事例が確認されている。同墓例は田辺泰『琉球建築』（1937年）では切妻と入母屋の２タイプの屋根が確認できる。今回得られたものは前者のタイプで、丸い材を用いた脚が共通する。後者は黒漆塗りで、四角い脚、側板の組手は四枚組接ぎで鉄釘を用いている。

今回得られた木製厨子は木釘などを用いずにホゾ組などにより組み立てている。また、木製品の中にはダボ組のものがあり、これは厨子とは別の製品で箱形の容器であったと考えられる。朱彩の木製品も木釘がみられることから、同一個体、もしくは同様な箱形容器と考えられる。

金属製品では鉄釘が目立ち、これまでの事例から木棺に用いられたものと考えられる。また、建具に伴う金具が２号墓などから得られている。

3　人骨・民俗調査

人骨調査はヤッチのガマとカンジン原古墓群（ガマ周辺）で行い、1,000体を越す人骨を確認することができた。形質的な特徴は、頭蓋はやや短頭で相対的に長径より幅径が大きく、四肢骨も同様にサイズが小さく、長径が短い。また、身長は男女ともにかなりの低身であることが分かった。

人骨取り上げは現地で行い、納骨状況が良好な状態で依存していたものは納骨状況を実測した（第151･152図）。

基本的な納骨法は大腿骨などの大型骨を周辺に並べ、その上に肋骨などの小型の骨を、最上部に頭蓋を乗せていた。図版８－８のように椎骨が関節した状態のものがあった。

納骨は『四本堂家礼』等にみられるように夫婦（男女一人ずつ）を収めるものとされ、那覇市所在のナーチュー毛古墓群（那覇市教委2000）でも確認されている。今回の調査では、１つの厨子に対して人骨が２体分収められていたものはヤッチのガマで337例中103例でうち男女１組が51例、カンジン原古墓群（ガマ周辺）で167例中52例でうち男女１組が32例が確認された。民俗調査でもこれを裏付ける納骨方法を確認している。

沖縄では厨子へ副葬品を収める例は少ないとされ、副葬品を収めた例は極めて少なかった。ただ、厨子内の陶磁器片と土中出土の破片が接合可能な資料がいくつかみられ、区画の形成を考える上で鍵となろう。洗骨の際に、毛髪が遺存していた場合は焼くとされるが、毛髪が遺存している例が確認できた。女結いのカラジの状態であった（巻頭図版８）。

沖縄では水死などで遺体がない場合は、その代わりとして枝サンゴを入れる民俗事例が知られる。今回はそのような資料はみられず、民俗調査でも行わないとされた。しかし、拳大からそれより一回り大きな石灰岩を複数入れた厨子が複数確認できた。石は単独では入れず、人骨を伴って厨子の底部に入れていた。このような事例はこれまでに確認されておらず、どのような意味合いがあったか不明である。これはカンジン原古墓群内で広く確認されており、ある時期まで大型の石灰岩を入れるという習俗があったと思われる。

久米島の墓には、沖縄本島の墓にみられる「イケ」は存在しないとされる[2)]。ヤッチのガマ７号区画では焼骨が集中する部分、10・11号区画では層を違えて大型骨と焼骨が集中する部分、２号墓では大型骨が集中する部分があった。特に10・11号区画は厨子への納骨を行う以前の可能性がある。

4　おわりに

今回の調査は琉球列島最大の洞穴利用墓であるヤッチのガマと広大な墓域を形成するカンジン原古墓群の報告を行った。調査で得られた情報は膨大であり、詳細な本報告を行うためには１年弱では難しかった。厨子・人骨・民俗に関しては、今回の報告では事実報告のみにとどまり、詳細を割愛した部分が多い。また、行政報告とは別件で報告を行った、あるいは報告を予定している。

今回の調査では、特に多量のボージャー厨子と、完品もしくは完形に近い本土産陶磁器（特に肥前系）、沖縄産陶器が得られたことは編年を考える上でも好資料が提供できたと考える。

＜注事項＞

１）木下氏から実測図を頂き確認した。

２）調査時は「イケ」と称していたが、上江洲氏より指摘を受け「人骨集中部」と改めた。

文献一覧

青山大学成屋遺跡調査団　1987「西表成屋遺跡」『青山史学』9　青山学院大学文学部史学研究室

安里　　進　1975「グスク開始期の若干の問題について－久米島ヤジャーガマ遺跡の調査から－」『沖縄県立博物館紀要』創刊号　沖縄県立博物館

——　2000「浦添ようどれ発掘調査の成果」『シンポジウム　浦添ようどれ考～浦添城跡の整備と活用を考える～』　浦添市

——・上原政昌・家田淳一　1987「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじまぁ』3　名護博物館

伊波　普猷　1937「南島古代の葬制」『をなり神の島』

上原　　静　1986「グスク時代遺跡出土の匙」『文化課紀要』3　沖縄県教育庁文化課

——　1989「首里城出土の貝殻」『考古学ジャーナル』311　ニュー・サイエンス社

——　1990「勝連城跡」『勝連町の文化財　第11集』p17

上江洲　均　1980「沖縄の厨子甕」『日本民族とその周辺』　新日本図書

——　1996「厨子甕雑感」『やちむん』12　やちむん会編集委員会

浦添市教委　1997『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』
——　2000『甦る琉球国中山王陵浦添ようどれ』
沖縄県教委　1995『湧田古窯跡』Ⅱ
——　1999『湧田古窯跡』Ⅳ
沖縄県立埋文センター　2001『首里城跡－管理用道路地区－』
加藤　祐三　1985「久米島」『琉球弧の地質』　沖縄タイムス社
岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充　2000「沖縄後期土器文化の様相」『東アジア・琉球の人と文化』　高宮廣衛先生古稀記念論集刊行委員会
木下　尚子　1981「貝製容器小考」『南島考古』7　沖縄考古学会
金武正紀・砂川玄正　1983『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告書』　平良市教委
久手堅　稔　1982「久米島具志川村北西海岸の先史遺跡」『沖縄久米島』　法政大学沖縄文化研究所
城間　肇　2000「厨子甕にみられる文様についての一考察－東風平八重瀬・久米島ヤッチのガマ・浦添ようどれ内の石棺から－」『文化課紀要』16　沖縄県教育庁文化課
城間肇・西銘章・譜久嶺忠彦　2001「カンジン地区発掘調査の概要」『南島考古だより』66　沖縄考古学会
高梨　修　1998『とぅんばらー通信』
土肥　直美　1994「久米島の風葬墓人骨」『久米島総合調査報告書』　沖縄県立博物館
豊見城村教委　1988『豊見城の遺跡』
永井昌文・佐野一　1963「49　琉球与那国島の人骨について（予報）」『日本人類学会・日本民族学協会連合大会第19回記事』
名嘉真宜勝　1978『沖縄の厨子甕展』　読谷村立歴史民俗資料館
中村　愿　1989「墓の形態と厨子甕のタイプについて」『南島の墓－沖縄の葬制・墓制』　沖縄出版
中村　昌尚　1996『久米島の地名と民俗』
那覇市教委　1992『壺屋古窯群』Ⅰ
——　1998『銘苅原古墓群』Ⅰ
——　2000『ナーチュー毛古墓群』
西銘　章　2001「沖縄への仏教浸透の度合い－厨子研究にあたってのいくつかの試み－」『地域文化論叢』4　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
萩尾　俊章　1994「久米島の家譜・位牌にみる系譜観－上江洲家資料を中心にして－」『久米島総合調査報告書』　沖縄県立博物館
外間守善・西郷信綱　1972「おもろさうし」『日本思想大系』18　岩波書店

補記　樹種同定

奈良大学大学院
青山　奈緒

樹種同定に用いた木材はいずれも乾燥した木材であり、保存状態は良好であった。遺物の一部をカッターナイフで切り出し、切片とした。

樹種同定用のプレパラート作成の行程を以下に記す。資料にはYGで任意に番号を付した。また、写真図版は紙幅の都合によりYG-4、YG-5を示した。

1．木材より、木口面、柾目面、板目面の切片を剃刀で切り出す。
2．切片の染色を行う（サフラニン<和光純薬工業株式会社>：エタノール：水＝1：50：50）
3．脱水を行う。（エタノール50％水溶液→エタノール100％→エタノール：キレシン50：50→キレシン100％の順で徐々に脱水、置換する。）
4．オイキット（製造元O.kindler.Germany）で封入する。

作成したプレパラートは生物顕微鏡（OLYNPUS社製オリンパスシステム生物顕微鏡BH-2）で観察を行った。その観察結果は次のとおりである。

YG-1・3（広葉樹材）：木製容器？

家畜の飼料桶に使われたトーニのような木製容器であろうか。

散孔材。道管は単独、あるいは2～3個複合して年輪に均一に散在している。柔組織はターミナル状。階段穿孔を有する。放射状組織は1～3列である。

YG-2・4（針葉樹材）：木製厨子・木棺材

YG-2は木製厨子の側板、YG-4は木棺の側板と思われる。

早材から晩材への移行は急。樹脂細胞は晩材部および早材部の外側部分に散在。放射組織は単列。分野壁孔は通常、1分野に1～3個でスギ型。

以上の特徴からYG-2・4はスギ（Cryptomeria japonica D.Don　スギ科TAXODIACEAE）と思われる。

YG-5（広葉樹材）：角材？

厚さ6.5㎝、幅14㎝ほどの大きさで、角材であろうか。溝などの加工はみられない。

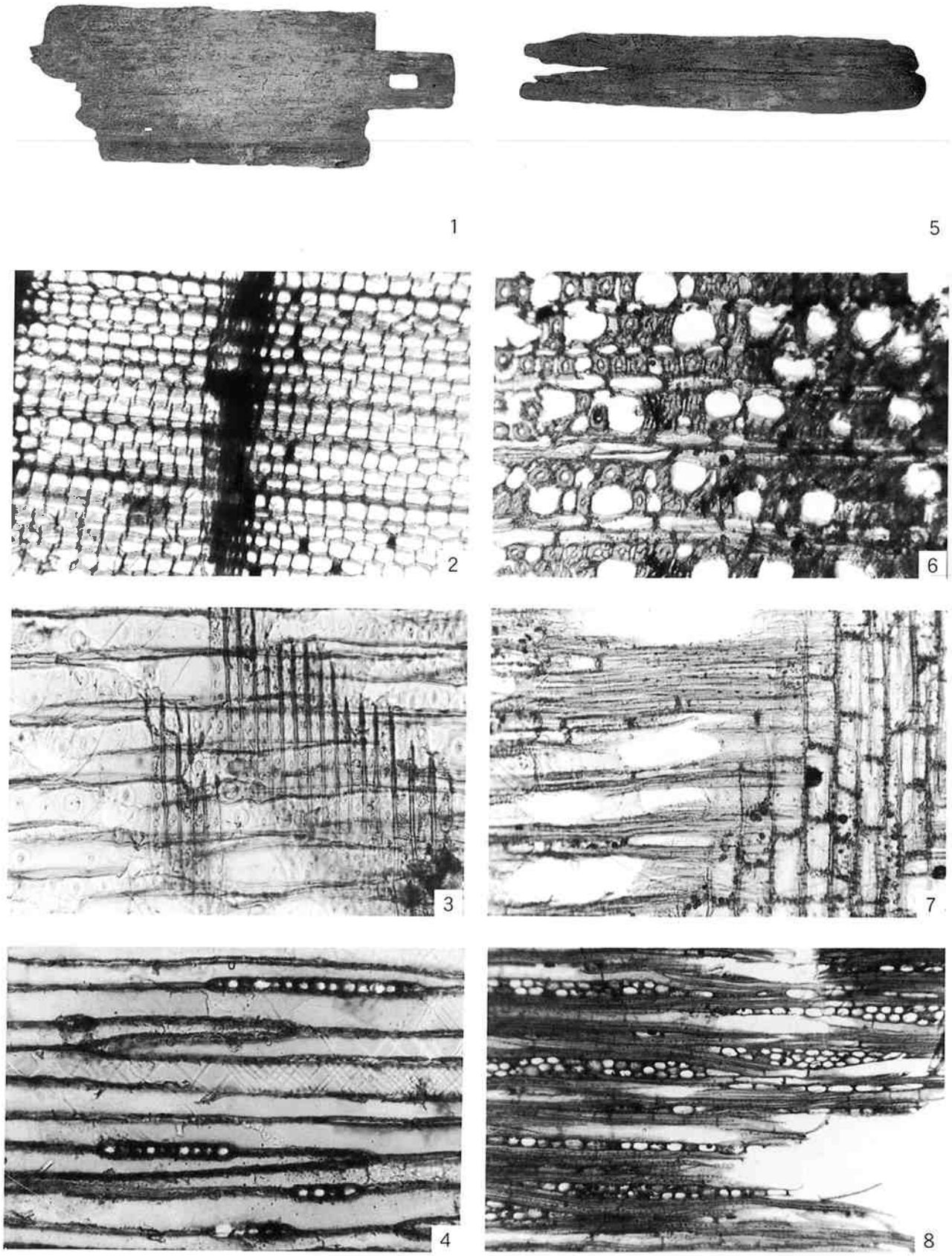
散孔材。道管は単独で年輪内に散在している。柔組織はいびつな接線状か、散在状。階段穿孔がみられる。放射組織は異性で1～3列。

以上の特徴から、確定はできないが最有力候補はモッコク（Ternstroemia gymnanthera Wright et Arn.Beddome　ツバキ科　THEACEAE）である。いずれにしろ、固い材を使用している。

モッコクについては、蔡温作成の『杣山法式仕次』（1747年）に、「今後、各官庁をはじめ一般の建築用材もイヌマキを第一とし、次のモッコク、イジュ、シイを用いること。」とあることや、シロアリに強い木材である（屋我1970）ことから古来より多用されている傾向がある。スギについても同様で、久米島の国指定重要文化財上江洲家住宅においてはイヌマキ・シイなどとともにスギ材が利用されいてることや、近世以降は日本本土から移入して積極的に植林していることなどから（中須賀1997）近世～近代の沖縄では主要木材として認識されていたと考えられている。

<引用・参考文献>

島地謙・伊東隆夫編　1982『図説　木材組織』　地球社
島地謙・伊東隆夫編　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』　雄山閣
中須賀常雄　1997『意訳　林政八書』　東洋企画
日本木材学会　2000『木質科学実験マニュアル』　文永堂出版
屋我嗣良　1970「建築用材の抗蟻性について」『琉球大学農学部学術報告』17　琉球大学農学部



図版118　樹種同定資料　1.ＹＧ－４　2.木口面　3.柾目面　4.板目面
5.ＹＧ－５　6.木口面　7.柾目面　8.板目面

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第６集

ヤッチのガマ

カンジン原古墓群

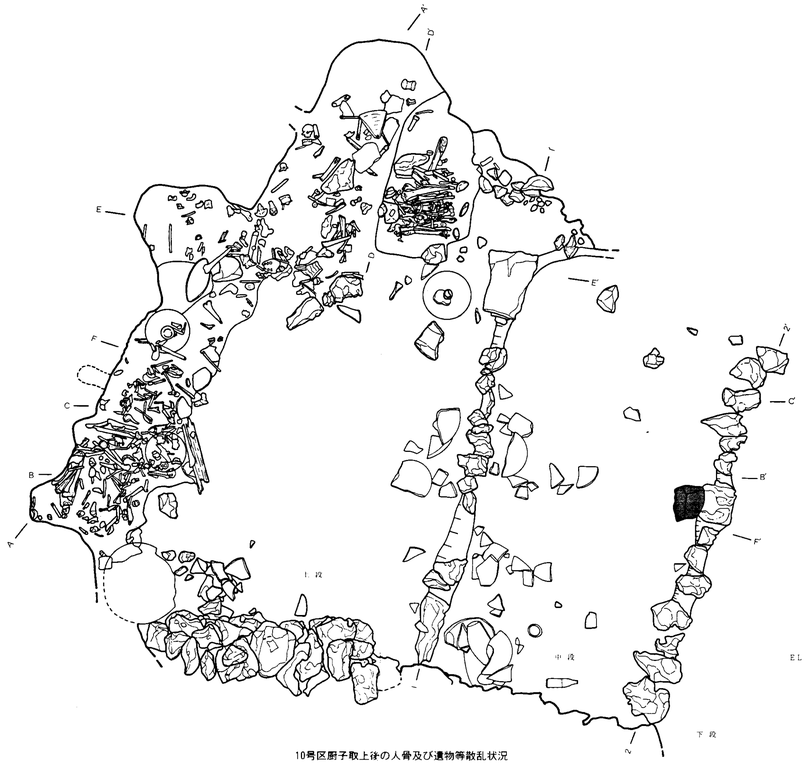
－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財調査報告書－

発　行　年　　平成13（2001）年12月28日
発行・編集　　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の３
TEL 098-835-8751
印　　刷　　株式会社東洋企画印刷
〒900-0024　沖縄県那覇市古波蔵四丁目１番１号
TEL 098-831-7404

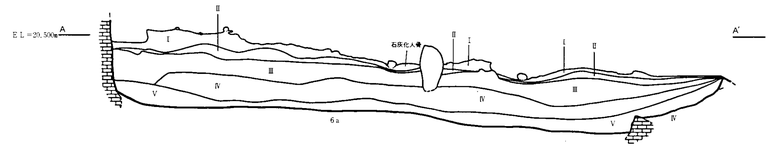
沖縄県立埋蔵文化財センター
平 15.11.11 成
210.0254
Ok57

©沖縄県立埋蔵文化財センター　2001 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

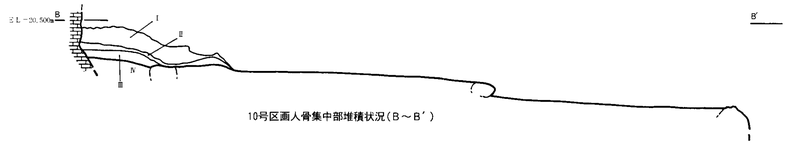
付図１　遺構全体図



10号区厨子取上徐の人骨及び遺物等散乱状況

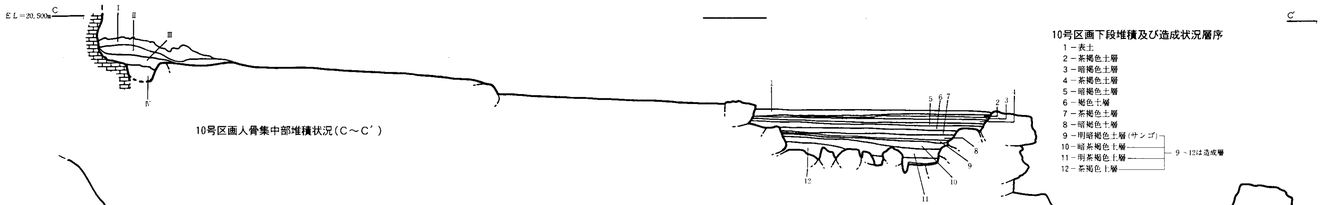


10号区画人骨集中部堆積状況（Ａ～Ａ′）



10号区画人骨集中部堆積状況（Ｂ～Ｂ′）

10号区画人骨集中部堆積状況層序（Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ）
Ⅰ層－大型人骨片
Ⅱ層－人骨小片
Ⅲ層－人骨細片
Ⅳ層－人骨細骨片（人骨風化含む）
Ⅴ層－人骨細片・風化（大型人骨含む）



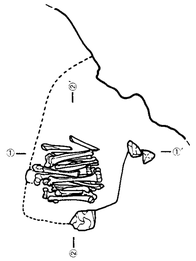
10号区画人骨集中部堆積状況（Ｃ～Ｃ′）

10号区画下段堆積及び造成状況層序
1－表土
2－茶褐色土層
3－暗褐色土層
4－茶褐色土層
5－暗褐色土層
6－褐色土層
7－茶褐色土層
8－暗褐色土層
9－明暗褐色土層（サンゴ）
10－暗茶褐色土層
11－明茶褐色土層
12－茶褐色土層
9～12は造成層

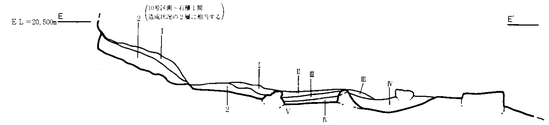
10号区画下段堆積状況（Ｃ～Ｃ′）

10号区画大型人骨集中部
東西断面①～①′

10号区画大型人骨集中部
東西断面②～②′

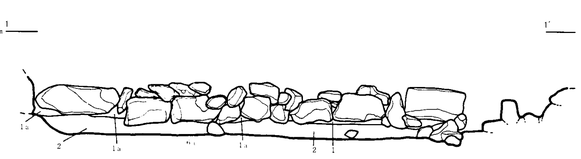


10号区画大型人骨集中部

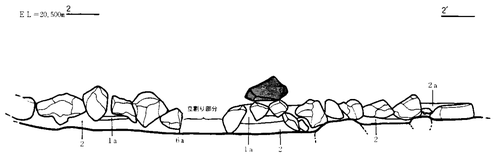


10号区画人骨集中部東西断面（Ⅰ層除去後）（Ｅ～Ｅ′）

10号区画人骨集中部堆積状況（Ⅰ層除去後）（Ｄ～Ｄ′）

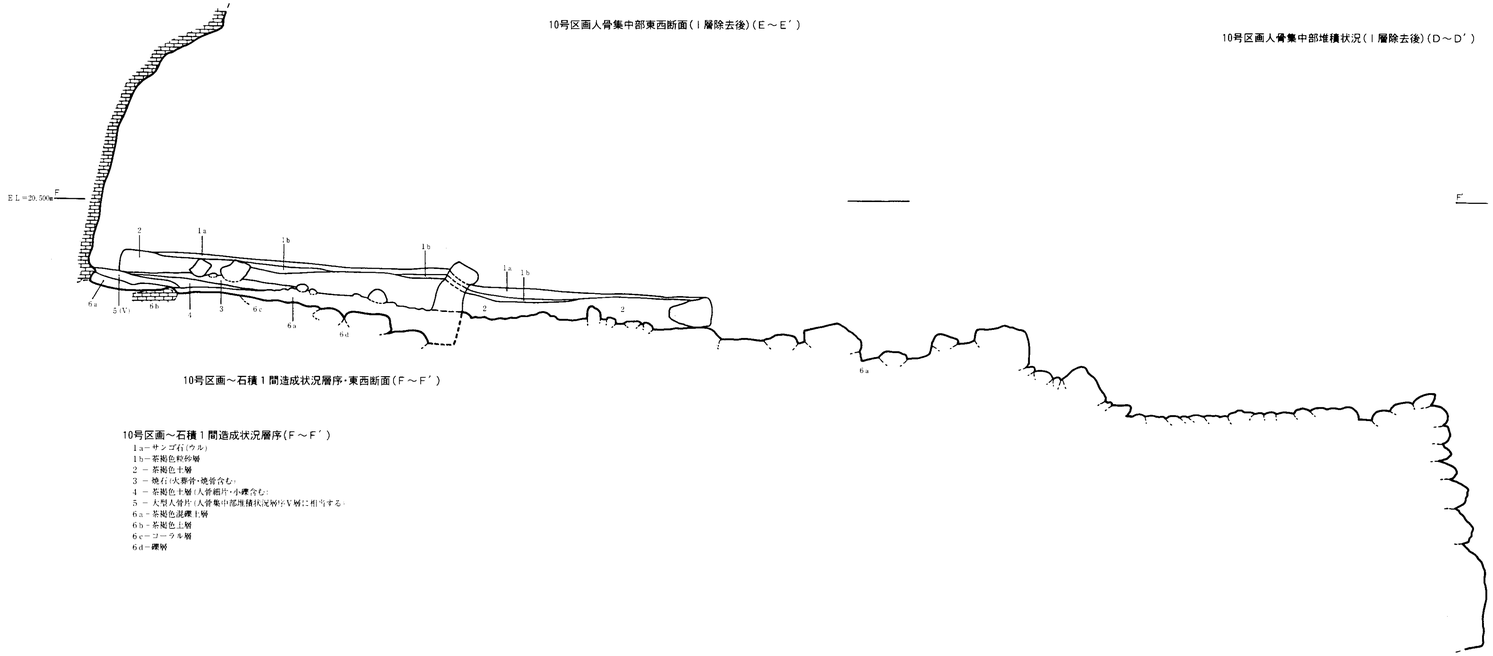


10号区上段石列見通断面（１～１′）



10号区中段石列見通断面（２～２′）

凡例
岩盤
火成岩

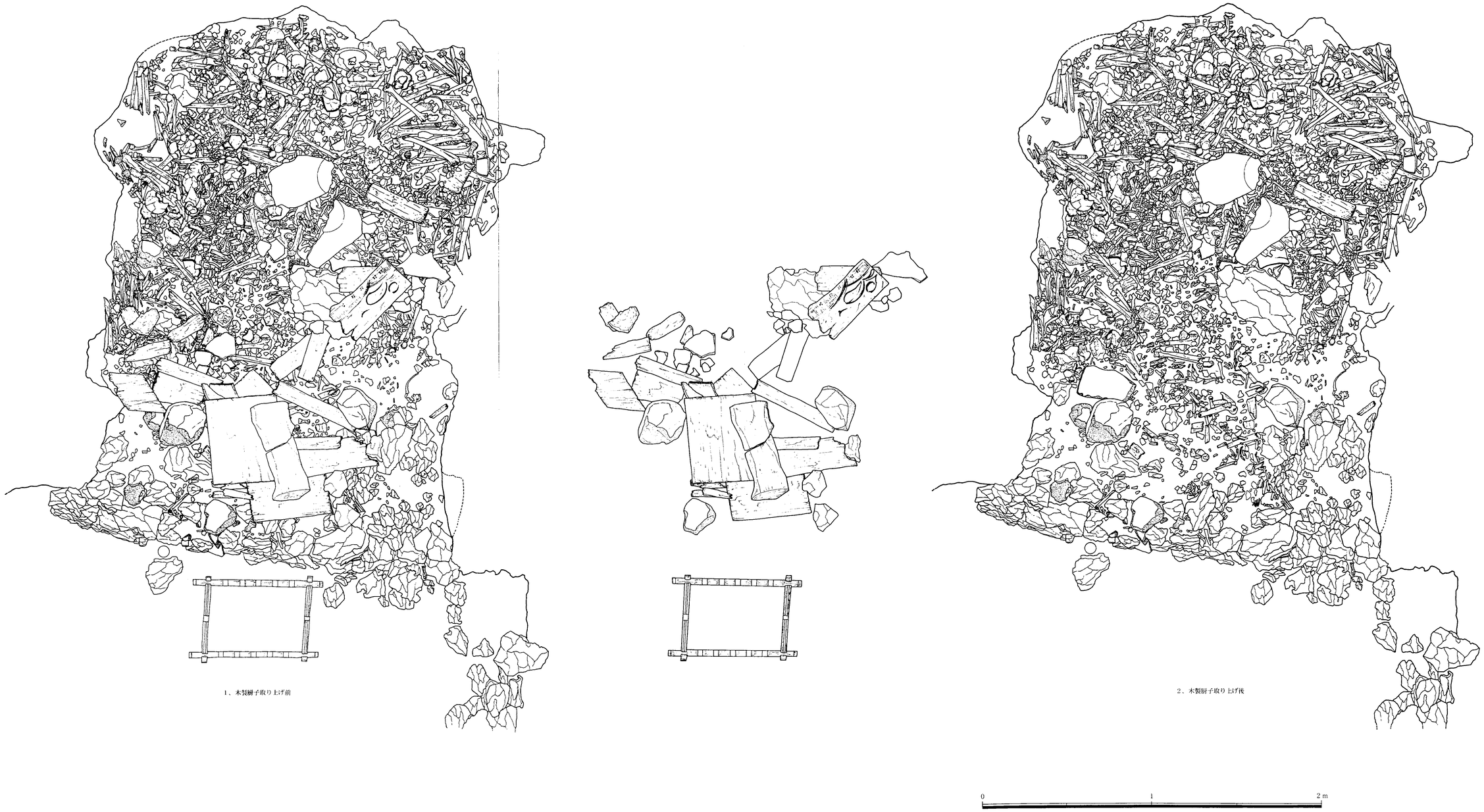


10号区画～石積１間造成状況層序・東西断面（Ｆ～Ｆ′）

10号区画～石積１間造成状況層序（Ｆ～Ｆ′）
1a－サンゴ石（ウル）
1b－茶褐色粒砂層
2 －茶褐色土層
3 －焼石（火葬骨・焼骨含む）
4 －茶褐色土層（人骨細片・小礫含む）
5 －大型人骨片（人骨集中部堆積状況層序Ⅴ層に相当する）
6a－茶褐色混礫土層
6b－茶褐色土層
6c－コーラル層
6d－礫層

0　2　4 m

付図２　10号区画検出状況



付図３　11号区画上段木製厨子等取上前、後平面